

恒川遺跡群

—— 一般国道153号座光寺バイパス
用地内埋蔵文化財発掘調査報告 ——

遺物編

1986

飯田市教育委員会

恒川遺跡群

—— 一般国道153号座光寺バイパス
用地内埋蔵文化財発掘調査報告 ——

遺物編

1986

飯田市教育委員会

例 言

- 1 本書は一般国道153号座光寺バイパス建設に伴う恒川遺跡群の発掘調査報告書であり、遺構編・遺物編1・2・図版編の4分冊と付図からなり、その第2分冊である。
- 2 遺物編の2分冊は、時期によって区切りその区分は以下のようである。
遺物編1——縄文時代・弥生時代・古墳時代前期
遺物編2——古墳時代後期・奈良時代・平安時代・中世・近世
- 3 本書に関連した図版の作成は、佐々木嘉和・山下誠一・佐合英治・桜井弘人・小林正春があたり、池田幸子・小平不二子・木下恒子・斉藤徳子・塚平さち子・高島亜矢子が補佐した。
- 4 本書は佐々木・山下・桜井・小林が分担執筆し、それぞれ分担は文末に明記した。
- 5 本書の編集は、佐々木・山下・佐合・桜井・小林により、小林が総括した。

本文目次

I	遺跡毎の出土遺物概要	1
1	NAR、KAK	1
2	TAN・KUR	2
3	GOA	2
4	GOB、AMD	3
5	ARY	3
6	ARB (ARBK11~14)	4
7	TARB	4
II	記述の方針	5
1	基本方針	5
2	時期区分の設定	6
1)	縄文時代の細分	6
2)	弥生時代から古墳時代前期の細分	6
3	土器の記述	7
1)	縄文時代	7
(1)	資料提示の方法	7
①	早期	
②	中期	
③	後・晩期	
(2)	図化の方法	8
2)	弥生時代からの古墳時代前期	8
(1)	資料提示の方法	8
①	弥生時代中期	
②	弥生時代後期から古墳時代前期	
③	GOAA湿地帯	
(2)	図化の方法	9
(3)	観察表の記載方法	9
4	石器の記述	11
(1)	資料提示の方法	11
(2)	図化の方法	12
(3)	観察表の記載方法	12
5	その他の遺物の記述	14
1)	土製品	14
2)	手づくね	15
3)	石製品	15

4) 玉類	15
5) 金属器	15
III 縄文時代の遺物	16
1 土器	16
1) 早期	16
2) 前期	17
3) 中期	18
(1) TAN・KUR、GOA、GOB、AMD、ARY	18
(2) ARB	18
4) 後期	19
5) 晩期	19
2 石器	20
1) 早期	20
① 打製石鏃 ② 尖頭状石器 ③ スクレイパー ④ 石匙	
⑤ ピエス・エスキーユ ⑥ 不定形石器 ⑦ 石核 ⑧ 使用痕のある剥片	
⑨ 磨製石斧 ⑩ 横刃型石器 ⑪ 礫器 ⑫ 特殊磨石 ⑬ 磨石	
⑭ 石皿 ⑮ 砥石	
2) 中期後半から終末	24
① 打製石斧 ② 横刃型石器 ③ 大型粗製石匙 ④ 磨製石斧	
⑤ 敲打器 ⑥ 砥石 ⑦ 磨石・凹石 ⑧ 石皿 ⑨ 礫器	
⑩ 敲打製石器 ⑪ 石錘 ⑫ 打製石鏃 ⑬ 石匙 ⑭ 石錐	
⑮ 使用痕のある剥片 ⑯ その他	
3 土製品	32
1) 土偶	32
2) 土製円板	32
IV 弥生時代から古墳時代前期の遺物	33
1 土器	33
1) 土器の製作	33
(1) 成形	33
(2) 調整	33
(3) 文様	34
① 沈文 ② 縄文 ③ 浮文 ④ その他の文様	
2) 弥生時代前期	37
3) 土器の分類	37

(1) 基本姿勢	37
(2) 弥生時代中期	38
(3) 弥生時代後期から古墳時代前期	42
4) 弥生時代中期土器の文様	55
2 石器	63
① 打製石斧 ② 有孔磨製石庖丁 ③ 抉入磨製石庖丁	
④ 抉入打製石庖丁 ⑤ 横刃型石庖丁 ⑥ 有肩扇状形石器	
⑦ 有抉石器 ⑧ 有柄石器 ⑨ 横刃型石器 ⑩ 礫器 ⑪ 磨製石斧	
⑫ 磨製石錐・打製石錐 ⑬ 砥石 ⑭ 敲打器 ⑮ 端部曲面磨石	
⑯ 石臼 ⑰ 台石 ⑱ 磨製石鏃 ⑲ 打製石鏃 ⑳ 磨製石剣	
㉑ 石錘 ㉒ 編物石 ㉓ 環状石器 ㉔ 凹石 ㉕ 磨滅痕のある礫	
㉖ 磨滅痕のある剝片 ㉗ 加工された礫	
3 その他の遺物	93
1) 土製品	93
① 土製円板・土製角板 ② 土錘 ③ 焼成粘土塊	
2) 石製品	93
① 石製紡錘車	
3) 玉類	94
① 管玉 ② 白玉 ③ メノウ製未成品 ④ ガラス玉 ⑤ 土玉	
4) 金属器	97
① 銅鏃 ② 銅釘 ③ 刀子 ④ 鉄鏃 ⑤ つり針 ⑥ 飾り金具	
V 土器の編年	101
1 弥生時代中期から古墳時代前期土器の細分について	101
2 弥生時代中期	101
1) 恒川Ⅰ～Ⅲ期の設定	101
(1) 恒川Ⅰ期	103
① 壺 ② 甕 ③ 鉢 ④ 底部調整	
(2) 恒川Ⅱ期	104
① 壺 ② 甕 ③ 鉢 ④ 注口土器 ⑤ 底部調整	
(3) 恒川Ⅲ期	106
① 壺 ② 甕 ③ 鉢 ④ 手づくね ⑤ 底部調整	
2) 恒川Ⅰ～Ⅲ期の特徴	108
① 壺 ② 甕 ③ 鉢	
3) 編年の位置	110

(1) 既存型式の検討	110
① 北原式土器 ② 恒川式土器	
(2) 恒川Ⅰ～Ⅲ期の位置づけ	112
(3) 他遺跡出土資料の位置づけ	113
(4) 併行関係	114
① 県内 ② 東海西部	
3 弥生時代後期から古墳時代前期	117
1) 恒川Ⅳ～Ⅹ期の設定	117
(1) 恒川Ⅳ期	117
(2) 恒川Ⅴ期	120
① 壺 ② 甕 ③ 高坏 ④ 鉢	
(3) 恒川Ⅵ期	121
① 壺 ② 甕 ③ 高坏 ④ 器台	
(4) 恒川Ⅶ期	122
① 壺 ② 甕 ③ 高坏 ④ 器台 ⑤ 鉢 ⑥ 小型土器	
(5) 恒川Ⅷ期	124
① 壺 ② 甕 ③ 甑・蓋 ④ 高坏	
⑤ 器台 ⑥ 鉢 ⑦ 小型土器	
(6) 恒川Ⅸ期	127
① 壺 ② 甕 ③ 高坏 ④ 小型土器	
(7) 恒川Ⅹ期	128
① 壺 ② 甕 ③ 高坏 ④ 鉢	
⑤ 小型土器 ⑥ 甗 ⑦ 手づくね	
2) 溝址及びGOAA区包含層出土土器の検討	130
(1) TAN・KUR 溝址12	130
(2) GOA 溝址1 一下層出土土器	130
(3) GOA 溝址2 一下層出土土器	131
(4) GOB 溝址15	131
① 4層出土土器 ② 5層出土土器	
(5) GOA A区包含層	133
3) 土器の系譜	134
(1) 壺	134
① 壺A ② 壺B ③ 壺C ④ 壺D	
⑤ 壺E ⑥ 壺F ⑦ 壺G ⑧ 壺H	

(2) 甕	135
① 甕A ② 甕B ③ 甕C ④ 甕D	
⑤ 甕E ⑥ 甕F ⑦ 甕G ⑧ 甕H	
(3) 高坏	137
① 高坏A ② 高坏B ③ 高坏C ④ 高坏D	
⑤ 高坏E ⑥ 高坏F ⑦ 高坏G	
(4) 器台	138
① 器台A ② 器台B	
(5) 鉢	138
① 鉢A・B・C ② 鉢D ③ 鉢E	
(6) 小型土器	139
① 小型丸底 ② 小型壺 ③ 小型台付甕	
(7) 甗	140
(8) まとめ	140
4) 恒川Ⅴ～Ⅹ期の特徴	141
(1) 恒川Ⅴ期	142
① 既出資料との併行関係 ② 特徴	
(2) 恒川Ⅵ期	142
① 既出資料との併行関係 ② 特徴	
(3) 恒川Ⅶ期	142
① 既出資料との併行関係 ② 特徴	
(4) 恒川Ⅷ期	143
① 既出資料との併行関係 ② 特徴	
(5) 恒川Ⅸ期	144
① 既出資料との併行関係 ② 特徴	
(6) 恒川Ⅹ期	144
① 既出資料との併行関係 ② 特徴	
5) 編年的位置	145
(1) 既存型式の検討	145
① 中島式土器 ② 月夜平式土器	
③ 恒川Ⅱ式土器・飯田地方土師器Ⅰ期 ④ 飯田地方土師器Ⅱ期	
(2) 恒川Ⅴ～Ⅹ期の位置づけ	147
(3) 他地域との併行関係	148
4 土器に関する二・三の問題	152

1) 器種構成	152
(1) 資料の検討	152
(2) 器種構成の変遷と画期	152
2) 文様	154
(1) 資料の検討	154
① 恒川Ⅰ期 ② 恒川Ⅱ期 ③ 恒川Ⅲ期 ④ 恒川Ⅴ期	
⑤ 恒川Ⅵ期 ⑥ 恒川Ⅶ期 ⑦ 恒川Ⅷ期 ⑧ 恒川Ⅸ～Ⅹ期	
(2) 文様の消長	156
① 篋描文 ② 櫛描文 ③ 縄文 ④ 浮文 ⑤ 丹彩 ⑥ 暗文	
(3) 文様の位置づけ	159
VI 弥生時代中期後半から古墳時代前期の石器について	161
1 石器の用途について	161
2 石器の消長について	161
3 石製農具について	163
1) 農耕具	163
(1) 打製石斧	163
2) 収穫具	164
(1) 石庖丁類	164
(2) 有肩扇状形石器・有挾石器・有柄石器	167
(3) 横刃型石器	170
3) 打製農具の製作技法について	170
4 石製木工具について	173
VII まとめ	179

表 目 次

第1表	ARB縄文時代中期後半から終末の住居址出土石器一覧表	24
第2表	打製石斧の長さ と 幅	25
第3表	打製石斧の長さ と 幅	63
第4表	弥生時代中期後半から古墳時代前期の住居址出土石器一覧表	64
第5表	石庖丁類の重量分布表	68
第6表	有肩扇状形石器・有挾石器・有柄石器の重量分布表	73
第7表	編物石の長さ と 幅、重量分布表	89
第8表	古墳時代前期の住居址出土玉類一覧表	94
第9表	白玉の長さ と 径	95
第10表	弥生時代中期後半(恒川Ⅰ～Ⅲ期)の遺構出土土器一覧表	102
第11表	弥生時代後期後半から古墳時代前期(恒川Ⅴ～Ⅹ期)遺構出土土器一覧表	118
第12表	下伊那地方における弥生時代後期後半から古墳時代前期の主要器形消長表	146
第13表	恒川Ⅴ～Ⅹ期と各地域土器の併行関係表	149
第14表	恒川遺跡群を中心とした器種構成変遷表	153
第15表	下伊那地方における主要文様消長模式表	157
第16表	恒川遺跡群に基づく下伊那地方における主要石器の消長表(予察)	162
第17表	収穫具の重量分布表	169
第18表	石器の石材比率表	170
第19表	恒川遺跡群・北原遺跡における磨製石斧一覧表	174
第20表	TAN・KUR弥生時代中期土器観察表	189
第21表	TAN・KUR弥生時代後期から古墳時代前期土器観察表	191
第22表	GOA弥生時代中期土器観察表	199
第23表	弥生時代後期から古墳時代前期土器観察表	200
第24表	GOB弥生時代中期土器観察表	209
第25表	GOB弥生時代後期から古墳時代前期土器観察表	212
第26表	AMD弥生時代中期土器観察表	226
第27表	ARY弥生時代中期土器観察表	227

第28表	TAN・KUR恒川Ⅳ期遺構出土土器觀察表	229
第29表	AMD恒川Ⅳ期遺構出土土器觀察表	229
第30表	ARY恒川Ⅳ期遺構出土土器觀察表	229
第31表	NAR・KAK石器觀察表	230
第32表	TAN・KUR石器觀察表	230
第33表	石器觀察表	242
第34表	GOB石器觀察表	248
第35表	AMD石器觀察表	257
第36表	ARY石器觀察表	259
第37表	ARB石器觀察表	274
第38表	石製紡錘車觀察表	287
第39表	古墳時代前期玉類觀察表	288
第40表	金属器觀察表	291

図 版 目 次

- 第1図 TAN・KUR 1号住居址出土土器
- 第2図 TAN・KUR 1号住居址出土土器
- 第3図 TAN・KUR 1号・9号住居址出土土器
- 第4図 TAN・KUR 13号住居址出土土器
- 第5図 TAN・KUR 19号住居址出土土器
- 第6図 TAN・KUR 19号・20号住居址出土土器
- 第7図 TAN・KUR 33号・59号・77号住居址出土土器
- 第8図 TAN・KUR 96号・5号住居址出土土器
- 第9図 TAN・KUR 7号住居址出土土器
- 第10図 TAN・KUR 8号住居址出土土器
- 第11図 TAN・KUR 8号住居址出土土器
- 第12図 TAN・KUR 12号住居址出土土器
- 第13図 TAN・KUR 17号・16号住居址出土土器
- 第14図 TAN・KUR 16号住居址出土土器
- 第15図 TAN・KUR 23号住居址出土土器
- 第16図 TAN・KUR 23号住居址出土土器
- 第17図 TAN・KUR 23号住居址出土土器
- 第18図 TAN・KUR 75号住居址出土土器
- 第19図 TAN・KUR 90号・101号住居址、溝址15出土土器
- 第20図 TAN・KUR 溝状遺構1、溝址12出土土器
- 第21図 TAN・KUR 溝址12・14出土土器
- 第22図 TAN・KUR 溝址14・18、方形周溝墓3出土土器
- 第23図 TAN・KUR 土坑8・19、遺構外出土土器
- 第24図 TAN・KUR 遺構外出土土器
- 第25図 TAN・KUR 遺構外出土土器
- 第26図 TAN・KUR 1号・9号・20号住居址出土石器
- 第27図 TAN・KUR 19号住居址出土石器
- 第28図 TAN・KUR 19号・13号・33号・88号住居址出土石器
- 第29図 TAN・KUR 59号・77号・5号住居址出土石器

- 第30图 TAN · KUR 5号·7号住居址出土石器
- 第31图 TAN · KUR 7号住居址出土石器
- 第32图 TAN · KUR 8号住居址出土石器
- 第33图 TAN · KUR 8号·12号·17号住居址出土石器
- 第34图 TAN · KUR 16号·23号住居址出土石器
- 第35图 TAN · KUR 23号·75号住居址出土石器
- 第36图 TAN · KUR 75号住居址出土石器
- 第37图 TAN · KUR 75号·90号住居址、溝址15出土石器
- 第38图 TAN · KUR 溝址15·14·18出土石器
- 第39图 TAN · KUR 溝址12出土石器
- 第40图 TAN · KUR 方形周溝墓3、遺構外出土石器
- 第41图 TAN · KUR 遺構外出土石器
- 第42图 TAN · KUR 遺構外出土石器
- 第43图 TAN · KUR 遺構外出土石器
- 第44图 TAN · KUR 遺構外出土石器
- 第45图 TAN · KUR 遺構外出土石器
- 第46图 TAN · KUR 遺構外出土石器
- 第47图 GOA 1号·2号·3号住居址出土土器
- 第48图 GOA 3号·4号住居址出土土器
- 第49图 GOA 4号住居址出土土器
- 第50图 GOA 4号·5号住居址出土土器
- 第51图 GOA 5号·6号住居址出土土器
- 第52图 GOA 7号·8号住居址出土土器
- 第53图 GOA 8号·9号·10号住居址出土土器
- 第54图 GOA 溝址1出土土器
- 第55图 GOA 溝址1出土土器
- 第56图 GOA 溝址1出土土器
- 第57图 GOA 溝址1出土土器
- 第58图 GOA 溝址1出土土器
- 第59图 GOA 溝址2出土土器
- 第60图 GOA 溝址2出土土器
- 第61图 GOA A区包含層出土土器
- 第62图 GOA A区包含層出土土器
- 第63图 GOA 湿地帯出土土器

- 第64図 GOA 湿地帯出土石器
第65図 GOA 湿地帯出土石器
第66図 GOA 遺構外出土石器
第67図 GOA 1号・3号住居址出土石器
第68図 GOA 4号・5号・8号住居址、溝址1出土石器
第69図 GOA 溝址1・2出土石器
第70図 GOA 溝址2 遺構外出土石器
第71図 GOA 遺構外出土石器
第72図 GOA 遺構外出土石器
第73図 GOA 遺構外出土石器
第74図 GOA 遺構外出土石器
第75図 GOA 遺構外出土石器
第76図 GOA 遺構外出土石器
第77図 GOA 遺構外出土石器
第78図 GOB 8号住居址出土石器
第79図 GOB 9号・17号住居址出土石器
第80図 GOB 25号・28号・34号住居址出土石器
第81図 GOB 35号住居址出土石器
第82図 GOB 35号・45号住居址出土石器
第83図 GOB 45号・46号住居址出土石器
第84図 GOB 47号住居址出土石器
第85図 GOB 50号住居址、溝址7出土石器
第86図 GOB 溝址7出土石器
第87図 GOB 溝址7、方形周溝墓1、2号住居址出土石器
第88図 GOB 4号住居址出土石器
第89図 GOB 5号・7号・21号住居址出土石器
第90図 GOB 10号住居址出土石器
第91図 GOB 10号住居址出土石器
第92図 GOB 10号住居址出土石器
第93図 GOB 10号住居址出土石器
第94図 GOB 10号・12号・14号住居址出土石器
第95図 GOB 15号住居址出土石器
第96図 GOB 16号住居址出土石器
第97図 GOB 16号・18号住居址出土石器

- 第98図 GOB 19号住居址出土土器
- 第99図 GOB 20号・24号・27号住居址出土土器
- 第100図 GOB 27号・29号住居址、溝址12出土土器
- 第101図 GOB 溝址15 5層出土土器
- 第102図 GOB 溝址15 5層出土土器
- 第103図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第104図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第105図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第106図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第107図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第108図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第109図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第110図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第111図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第112図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第113図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第114図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第115図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第116図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第117図 GOB 溝址15 4層出土土器
- 第118図 GOB 溝址15 4層・3層出土土器
- 第119図 GOB 溝址15 3層出土土器
- 第120図 GOB 溝址15 2層・1層出土土器
- 第121図 GOB 溝址15出土土器
- 第122図 GOB 溝址15、遺構外出土土器
- 第123図 GOB 遺構外出土土器
- 第124図 GOB 遺構外出土土器
- 第125図 GOB 遺構外出土土器
- 第126図 GOB 遺構外出土土器
- 第127図 GOB 8号・25号・35号住居址出土石器
- 第128図 GOB 45号・47号・34号・50号住居址出土石器
- 第129図 GOB 17号・2号・4号・5号・7号・14号・15号住居址出土石器
- 第130図 GOB 16号住居址出土石器
- 第131図 GOB 16号住居址出土石器

- 第132図 GOB 16号・57号住居址出土石器
- 第133図 GOB 10号・19号住居址出土石器
- 第134図 GOB 18号・24号住居址、溝址7出土石器
- 第135図 GOB 溝址7・15出土石器
- 第136図 GOB 溝址15出土石器
- 第137図 GOB 溝址15、方形周溝墓1、遺構外出土石器
- 第138図 GOB 遺構外出土石器
- 第139図 GOB 遺構外出土石器
- 第140図 GOB 遺構外出土石器
- 第141図 GOB 遺構外出土石器
- 第142図 GOB 遺構外出土石器
- 第143図 AMD 17号・18号住居址出土石器
- 第144図 AMD 18号・4号住居址出土石器
- 第145図 AMD 遺構外出土石器
- 第146図 AMD 18号住居址出土石器
- 第147図 AMD 4号住居址、遺構外出土石器
- 第148図 AMD 遺構外出土石器
- 第149図 AMD 遺構外出土石器
- 第150図 ARY 小竪穴1・2・3・4出土石器
- 第151図 ARY 小竪穴5・6・7、ユニット4出土石器
- 第152図 ARY ユニット1・2・3出土石器
- 第153図 ARY ユニット5・6、大ユニット、遺構外出土石器
- 第154図 ARY 大ユニット、遺構外出土石器
- 第155図 ARY 5号・9号住居址出土石器
- 第156図 ARY 9号住居址出土石器
- 第157図 ARY 10号・11号・15号住居址出土石器
- 第158図 ARY 15号・22号・23号住居址出土石器
- 第159図 ARY 23号・24号・29号・51号住居址出土石器
- 第160図 ARY 51号・54号・55号住居址出土石器
- 第161図 ARY 55号・56号住居址、方形周溝墓1、土坑10、AL61P1、集石1出土石器
- 第162図 ARY 遺構外出土石器
- 第163図 ARY 遺構外出土石器
- 第164図 ARY 遺構外出土石器
- 第165図 ARY 小竪穴1・3・4・5・6・7出土石器

- 第166図 A R Y 小竪穴5、ユニット1・2・3、11号住居址出土石器
- 第167図 A R Y ユニット4・5出土石器
- 第168図 A R Y ユニット6、大ユニット出土石器
- 第169図 A R Y 大ユニット出土石器
- 第170図 A R Y 大ユニット出土石器
- 第171図 A R Y ユニット2・3・4・5出土石器
- 第172図 A R Y 大ユニット出土石器
- 第173図 A R Y 大ユニット出土石器
- 第174図 A R Y 9号住居址出土石器
- 第175図 A R Y 9号・5号住居址出土石器
- 第176図 A R Y 10号・11号・15号住居址出土石器
- 第177図 A R Y 23号・22号住居址出土石器
- 第178図 A R Y 22号・24号住居址出土石器
- 第179図 A R Y 51号・55号住居址出土石器
- 第180図 A R Y 53号・56号住居址、方形周溝墓1出土石器
- 第181図 A R Y 遺構外出土石器
- 第182図 A R Y 遺構外出土石器
- 第183図 A R Y 遺構外出土石器
- 第184図 A R Y 遺構外出土石器
- 第185図 A R Y 遺構外出土石器
- 第186図 A R Y 遺構外出土石器
- 第187図 A R Y 遺構外出土石器
- 第188図 A R Y 遺構外出土石器
- 第189図 A R Y 遺構外出土石器
- 第190図 A R Y 遺構外出土石器
- 第191図 A R B 2号・3号住居址出土土器
- 第192図 A R B 3号住居址出土土器
- 第193図 A R B 3号住居址出土土器
- 第194図 A R B 3号・4号住居址出土土器
- 第195図 A R B 5号住居址出土土器
- 第196図 A R B 5号住居址出土土器
- 第197図 A R B 6号住居址出土土器
- 第198図 A R B 8号住居址出土土器
- 第199図 A R B 8号住居址出土土器

- 第200图 A R B 9号·11号住居址出土土器
- 第201图 A R B 11号住居址出土土器
- 第202图 A R B 12号住居址出土土器
- 第203图 A R B 12号住居址出土土器
- 第204图 A R B 12号住居址出土土器
- 第205图 A R B 12号住居址出土土器
- 第206图 A R B 13号住居址出土土器
- 第207图 A R B 13号·10号住居址出土土器
- 第208图 A R B 土坑5·8·9·19·17·11、遺構外出土土器
- 第209图 A R B 遺構外出土土器
- 第210图 A R B、T A R B 遺構外出土土器
- 第211图 A R B 2号住居址出土石器
- 第212图 A R B 3号住居址出土石器
- 第213图 A R B 3号住居址出土石器
- 第214图 A R B 5号住居址出土石器
- 第215图 A R B 6号住居址出土石器
- 第216图 A R B 6号·9号住居址出土石器
- 第217图 A R B 8号住居址出土石器
- 第218图 A R B 8号住居址出土石器
- 第219图 A R B 11号住居址出土石器
- 第220图 A R B 12号住居址出土石器
- 第221图 A R B 12号住居址出土石器
- 第222图 A R B 12号住居址出土石器
- 第223图 A R B 13号住居址出土石器
- 第224图 A R B 13号住居址出土石器
- 第225图 A R B 2号·3号·5号·6号·8号·11号·12号·13号住居址出土石器
- 第226图 A R B 遺構外出土石器
- 第227图 A R B 遺構外出土石器
- 第228图 A R B 遺構外出土石器
- 第229图 A R B 遺構外出土石器
- 第230图 A R B 遺構外出土石器
- 第231图 A R B 遺構外出土石器
- 第232图 A R B 遺構外出土石器
- 第233图 A R B 遺構外出土石器

第234図 土製品

第235図 土製品・石製品

第236図 玉類

第237図 玉類

第238図 金属器

I 遺跡毎の出土遺物概要

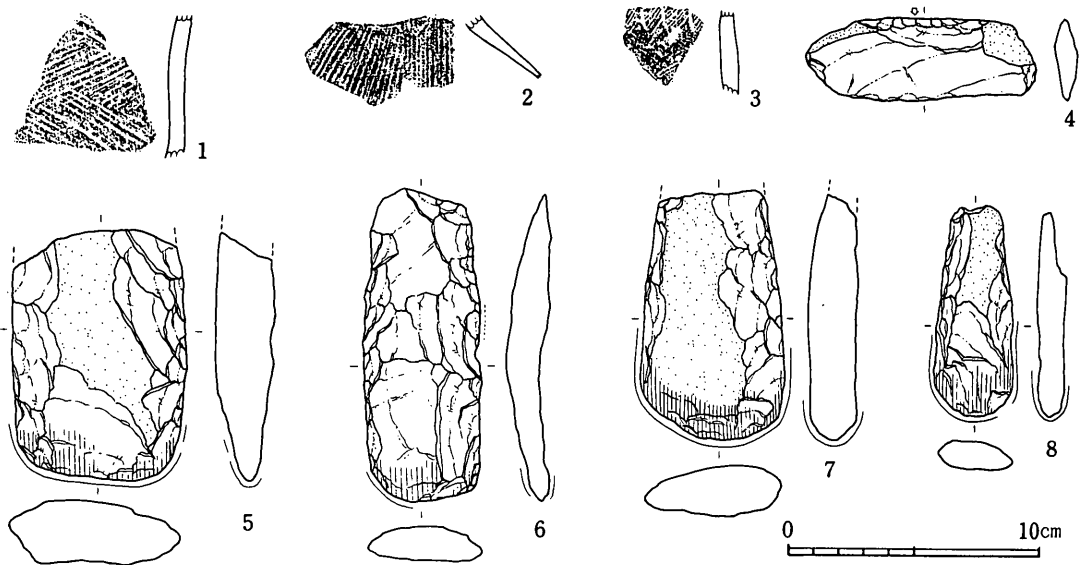
1 NAR、KAK

調査対象となる路線は長く、対象面積も広範囲であるが、検出遺構は別冊遺構編に示したとおり、古墳時代後期以降に位置づけられる溝址があるのみで、本編で対象とした時代の遺構はなく、したがって出土遺物もごくわずかであった。

出土した土器はいずれも小破片であり、弥生時代中期後半の甕胴部片(挿図1-1)、弥生時代後期終末から古墳時代前期前半の甕胴上部片(挿図1-3)、同じくS字状口縁台付甕肩部片(挿図1-2)が時期判別のできるもので、他はいずれも詳細時期判断の困難なものであった。

出土石器も量的にはあまり多いとはいえず全体形を知るものは少ない。横刃型石器(挿図1-4)、打製石斧(挿図1-5~8)があり、いずれも縄文時代から弥生時代にかけてのものであるが、弥生時代に属する可能性が強い。

出土遺物から推測される遺跡の状況は、該期遺構が検出されず、遺物量も少なく具体的に示すことはできないが、集落の中心となる地域から若干離れる外縁部、遺跡群全体からみれば居住空間以外の場所、さらにいえばなんらかの形で生産空間的な位置づけが考えられる。なお、その状況は次期以降についても同様であり、地形的な条件の中で弥生時代以降同様の土地利用の姿を



挿図I NAR遺構外(1・2、5~8)、KAK遺構外(3・4)出土遺物(1/3)

考える材料を提供してくれる遺跡といえる。

2 TAN・KUR

前編の遺構分布状況に準じた姿で、それぞれの時代・時期に属する相当量の遺物が出土している。遺物の出土状況は、該期遺構に伴うものがほとんどであり、遺構外のものについても、それら遺構所在地周辺部に多く認められる。

時期的な様相をみると、縄文時代中期遺物が、KUR東端部に若干その分布密度の高い出土状況を示し、調査範囲内では該期遺構そのものは検出できなかったが、台地上北側の一帯に該期集落等の存在も予測される。

弥生時代中期遺物は、該期遺構分布状況と同様に、台地上全体に分布し、その質・量ともに充実したものである。

弥生時代後期の遺物も、遺構分布状況と共通し、前半期のものがごくわずかであるが、台地東端の該期方形周溝墓周辺に出土した。後半のものは住居址が分布するTANに集中し、台地東側のKURにはほとんど出土していない。住居址内出土遺物を主体に良好な資料が得られた。

古墳時代前期の遺物も該期遺構分布同様のあり方を示し、台地全域に分布する。遺構出土のものが主体となり、多くは古墳時代前期後半に位置づけられるが、断片的には前半期のものがKURで得られている。

以上、総体としてはそれぞれの時期の遺構分布と同様の遺物出土状況を示すわけであるが、TAN西端にある溝址等には、小破片も含めれば本編で扱う全時代の資料があり、北方台地上には、各期を通じての集落が存在することも予想される。

3 GOA

対象区域の半分が湿地帯という遺跡そのものの特殊性はあるが、湿地部分を除く遺物出土状況は他の遺跡同様に当該期遺構に伴い、かつ遺構外遺物もその周辺からの出土がほとんどである。

遺構を明確に把握することはできなかったが、各期遺構検出面を成す層中から、わずかではあるが縄文時代晩期の土器片が出土しており、生活区域の一画であったことを示す。

また、本地籍内においては遺構そのものは検出されなかったが、溝址内からは縄文時代中期、弥生時代中期の土器・石器が出土している。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけては、各住居址・溝址に伴ってかなりの出土遺物があり、良好な資料である。

湿地帯内は、原則的にはほぼ時代を追って土層推積しているが、古墳時代前期以前の遺物はかなり混在した状況で出土し、確実に年代毎の層位把握はできず、縄文時代中期以降の遺物がある。

縄文時代・弥生時代中期の遺物の多くは、湿地帯全体でみると西側のKUR段丘崖下に多く、台地上集落との関連が強いと判断される。

4 GOB、AMD

本編に関連する出土遺物には、縄文時代早期・中期・晩期、弥生時代中期・後期、古墳時代前期のものがある。

縄文時代早期の土器はその最終末のものがわずかに出土したのみで、北接するARYに中心があり、その外縁に出土した遺物である。

縄文時代中期は、中葉及び後半に位置づけられる土器片が少量出土しており、該期遺構の検出もなく、調査地点両側のいずれかに中心があると考えられる。

縄文時代晩期は対象範囲内ほぼ全域に分布するが、その出土量はあまり多くない。GOBに土坑が検出され、その付近に比較的多く出土したが、具体的な遺跡の性格と判断するには至らなかった。

弥生時代中期は、遺構の分布にほぼ一致して、全域からそれら遺構の関連遺物が出土した。

弥生時代後期から古墳時代前期については、弥生時代後期前半の遺物が、AMDに検出された1軒の住居址に伴って出土したのみで、全体を通じてごくわずかの出土量である。弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺物は、GOBA区及びB区の一部に限定された範囲内の遺構に伴って出土した。GOAの出土遺物と合わせ、極めて良好な資料群である。GOBB区東側の一帯には1片の土器片も出土していない。

5 ARY

本編に関連して縄文時代早期・中期・晩期、弥生時代中期・後期の遺物が出土している。

縄文時代早期遺物は、C区を中心になんかの量が出土し、分布範囲はE区の段丘端部からAMDの一部にまで広がっている。いずれも早期末に位置づけられるもので、C区には該期小竪穴もあり、遺物の出土状態にはある程度のまとまりがみられ、集落の中心といえないまでも、かなり重要な生活空間として位置づけられ、出土遺物もいくつかの群があり、他地域との交流等を考える上にも良好な資料といえる。

縄文時代中期・晩期は小破片が若干出土したのみであるが、両期とも周辺のいずれかに中心地があり、その周辺部的性格の考えられる遺物出土状況である。

弥生時代は、住居址の分布と同様の遺物分布をみせ、特にA区9号住居址から出土した土器・石器は、他に類のない弥生時代中期の貴重な資料といえる。また、後期は集落端部に位置する住居址1軒と集石1を確認し、後期後半の遺物がごくわずか出土したのみである。

6 ARB (ARBK11~14)

縄文時代中期集落の一面を成し、同期後半及び終末期の2小期の遺構が重複し、それらに伴う土器・石器等が多量に出土した。住居址出土遺物が主体となるが、集落内に古墳等が築造され、その墳丘及び周溝内からも多量の遺物が出土している。

弥生時代後期終末もしくは古墳時代前期と考えられる方形周溝墓1基があり、この溝中より図化不能の土器が出土し、この他にも若干の弥生時代後期遺物もみられる。

7 TARB

性格等不明の溝中より、古墳時代前期と考えられる土師器甕が出土した他は、全体が南大島川の氾濫による堆積砂礫土で、原位置からの出土遺物はない。全体の出土遺物のごくわずかで、縄文時代中期の土器の小破片、打製石斧・横刃型石器などが出土し、南大島川に面した集落の外縁地帯的な性格が考えられる。

(小林正春)

II 記述の方針

1 基本方針

恒川遺跡群は、遺構編で明らかになったように、古くは縄文時代から新しくは現代に至るまで、集落址及び官衙址などとして、断続的に活用されてきた遺跡である。検出された遺物も、縄文時代から現代に至るまでの幅広い時期のものがあり、その種類も、この長期にわたる濃厚な人間生活の豊かな物質文化を反映して、土器・石器・土製品・石製品・石製模造品及び玉類・金属品・木製品・動植物遺体など実に多種多様で、しかも膨大な数量が得られている。それらの多くが、住居址・溝址などの遺構単位で把握できたことは、様々な活用が可能で、資料的価値が高いという特徴を持っている。

考古学の本旨は、これらの物質文化を駆使して、歴史的事実の解明・人間生活の復元であることはいうまでもない。しかし、これはあくまで最終的な目標であり、本書では基礎資料公開を第一目的と考えた。本来、出土遺物のすべての資料を同時に提示すべきであるが、資料数が多く、時間・費用等の制約により、2分冊に分けて報告する。

本編では、縄文時代・弥生時代・古墳時代前期の遺構及び遺構外出土遺物を対象とし、遺構数は、住居址86軒・溝址9・方形周溝墓7基・小竪穴7・土坑2・集石1である。古墳時代後期以降も良好な資料が得られており、これについては次編で扱う。

該期の遺物には、土器・石器・土製品・石製品・玉類・金属器がある。その中で、日常生活用具として可塑性に豊む粘土で作られ、なおかつ壊れやすいという特性のため、時代を適確に反映し時間軸の設定に最も有効な土器と、当地方においては古墳時代前期まで生産用具として存続し各時代の生産活動を知るに最も有効な石器に関しては、資料提示するとともに若干の考察を行なった。その他の遺物については、資料提示に力を置いた。

資料提示にあたり、該期遺構内出土遺物は、すべての種類を可能な限り図化・掲載することを基本方針とした。また、遺構に直接付随しない遺物と該期外の遺構内出土遺物の中で確実に該期に所属すると判断できたものに関しては、遺構外出土遺物として扱い、多少の選択を加えて図化・掲載した。遺物の種類によって掲載の基準が異なっているので、個々については、本章3～5で述べる。なお、本編に掲載した資料は、土器実測図点数1187・土器拓影図点数1187・石器実測図点数1755・土製品実測図点数21・石製品実測図点数9・金属器実測図点数17・玉類実測図点数203である。

2 時期区分の設定

先に述べたとおり、本編で扱う遺物の年代は、縄文時代から古墳時代の前期にわたるものである。これらは資料数や検出状況等に差があり、すべてを同一に扱うことは不可能に近く、縄文時代と弥生時代から古墳時代前期の2時期に分け、それぞれを細分し、それに沿って記述を進めることとする。

1) 縄文時代の細分

本遺跡群から出土した縄文時代に属する遺物は断片的なもので、独自に土器編年しての資料操作するには不十分な量であり、従来の草創期・早期・前期・中期・後期・晩期という6期区分法に従った。遺構は、早期の小竪穴7・遺構に準ずる扱いとした「ユニット」7単位、中期の住居址10軒・土坑等、晩期の土坑が検出された。遺物は、早期・中期・後期・晩期のものがある。

2) 弥生時代から古墳時代前期の細分

従来の時期区分によれば、弥生時代と古墳時代前期の2時期に分け、古墳時代は後期まで一括して扱われるのが通例である。この区分によらない理由は、当遺跡群の集落・住居址構造・遺物等に弥生時代中期後半から古墳時代前期まで継続性を示す状況があり、古墳時代前期と後期の間に大きな変化・差が認められるからである。具体例を挙げると以下のようである。

集落は、古墳時代前期までは後述する小時期毎に一定範囲内を選地・立地するのに対し、古墳時代後期は遺跡のほぼ全域に広がり、遺構の数も爆発的に増加する（付図3参照）。

住居址構造は、古墳時代前期まで炉址が残るなど弥生時代の基本的形態が継続し、古墳時代後期からカマドが出現して住居址形態に大きな変化がみられ、生活形態そのものも変化があったと思われる。

土器は、弥生時代の影響が古墳時代前期まで残り、後期の段階で須恵器が入り始め、その影響とカマド設置に対応して、煮沸形態・供膳形態の土師器に形態の変化が認められ、器種構成も変化する。

石器は、古墳時代の前期まで一部の種類が残存し、弥生時代から継続して把握することにより、その消長を無理なく理解できる。

こうした視点に立脚した上で、断片的な資料が得られたのみの弥生時代前期から中期中葉までを除き、本遺跡群が集落として継続的に利用され始め資料的に恵まれる弥生時代中期後半以降古墳時代前期までを本遺跡群独自に10期に細分し、恒川Ⅰ期から恒川Ⅹ期として土器編年を行なった。細分する上での基本方針・その編年の位置づけ等は後章で詳述するが、従来の編年で弥生時代中期と後期に分離されている恒川Ⅲ期と恒川Ⅳ期の間に画期を認め、弥生時代中期の恒川Ⅰ～Ⅲ期

と、弥生時代後期から古墳時代前期までの恒川IV～X期に大きく2つに分けた。以下の住居址の記述や土器の分類・考察及び土器・石器の版組等は、これに準じている。なお、弥生時代後期前半に当たる恒川IV期は、遺構の検出が住居址2軒・方形周溝墓1基・集石1だけであり、断片的な資料を得たのみなので、該期の形態分類に含めず、簡単に触れるだけで済ませた。

弥生時代中期は、住居址36軒・溝址2・土坑1が、弥生時代後期から古墳時代前期は、住居址39軒・溝址7・溝状遺構1・方形周溝墓7基・土坑3・集石1が検出された。 (山下誠一)

3 土器の記述

1) 縄文時代

(1) 資料提示の方法

今次調査により出土した遺物は、前期・中期の一部・後期など欠落する間があり、時期により出土量の多少はみられるが、早期末から晩期の縄文時代ほぼ全時期にわたっている。

各期出土資料については、遺構出土品を主体に、なるべく多くの資料掲載に努めたが、小破片等時期判断のできないものは一部割愛した。

① 早期

基本的には該期に属すると判断されるものはすべて実測図及び拓影図により掲載した。

該期遺構としては、A R Yに小竪穴及びユニットがあり、これら出土品につき全資料の提示に努めたが、胴部小破片等他の掲載資料に代表されるものの一部を省略した。

遺構外出土資料についても、これに準じ無文小破片以外はほとんどを拓影図により示した。

② 中期

住居址等の遺構を検出したA R Bと遺構のなかったT A N～A R Yと若干その方法が異なる。

A R Bは、住居址を主体に遺構単位により掲載した。各遺構の傾向把握ができるよう一部選択して掲載した。口縁部及び底部の図化できるものを主体とし、胴部破片等については、同一文様品につきその代表を載せ、無文の破片とともに省略したものもある。

A R Bはほとんどの住居址が古墳等の遺構に切られており、新しい時期の遺構内からの該期資料の出土が多く、該期遺構に伴わないものはすべて遺構外出土遺物とした。ほとんどが住居址出土遺物と共通するが、遺跡全体の様相を判断する材料ともなると考え、住居址出土遺物の補足的意味をふまえ、口縁部・把手・底部を主体に選択し、実測図及び拓影図により示した。

T A N～A R Yについては、全体の出土量も少なく、小破片で時期判断不可能なもの以外は、実測図及び拓影図により掲載した。

③ 後期・晩期

晩期条痕文の小破片について一部省略したが、ほとんどの遺物を実測図及び拓影図で掲載した。

(2) 図化の方法

全時期を通じて完形品が少ないため拓影図による記載が主体となった。実測図は、完形品の他、口縁部 $\frac{1}{3}$ 以上残るものにつき復元実測し、底部の全体の残るものと把手の凹凸の著しく拓影図表現の困難なものについて用いた。

実測図は、器形・文様を主体に表現し、調整痕については一部の特徴的なものを表わした他は省略した。

実測図・拓影図ともすべてに断面を併記し、欠失部境は波形で表現し、推定部は破線及び細線で表現した。

(小林正春)

2) 弥生時代から古墳時代前期

(1) 資料提示の方法

該期の土器が出土した遺構には、住居址・溝址・溝状遺構・方形周溝墓・土坑・集石があり、中でも住居址と溝址からの出土が大半を占める。遺構外出土土器はわずかで、完形に復元できるものは1個体もない。出土遺物のほとんどが遺構に伴い、こうした出土状況は、編年作業を行なう上で最適といえ、以下の基準で遺構毎に資料呈示を行なった。

① 弥生時代中期

住居址 実測可能個体のすべてを提示した。その目安は、口縁部 $\frac{1}{2}$ ・底部 $\frac{1}{4}$ 個体以上残存するものとした。一部特徴的な資料は、これ以下の個体でも図化に努めた。当地方において該期は従来から資料不足気味であり、 $\frac{1}{2}$ 程度の胴部片も本遺跡群や既出の完形資料を参考にして図化した。また、文様の拓影図もできる限り掲載したが、無文や小破片については省略した。

溝址 確実に該期と判断できたものは2遺構に限られ、良好な資料が得られたのはGOB溝址7だけで、住居址に準じて図化した。

その他の遺構 出土量が限られ、住居址に準じて図化した。

遺構外 特徴的な資料を選択して図化し、拓影図も同様な扱いとした。最も多い壺・甕の底部資料は省略した。

② 弥生時代後期から古墳時代前期

住居址 口縁部 $\frac{1}{2}$ ・底部 $\frac{1}{4}$ 個体以上残存するものを図化した。胴部片の図化はほとんど行なわなかった。拓影図は、特徴的な文様とタタキで調整されるものだけに限り、ハケやヘラミガキ等の調整痕のみの破片については省略した。

溝址 住居址に準じて行なったが、良好な資料を得たGOA溝址1とGOB溝址15に関しては口縁部 $\frac{1}{2}$ ・底部 $\frac{1}{2}$ 個体以上残存する個体を図化した。特徴的なものはそれ以下の個体でも図化し、

文様やタタキの調整拓影図も掲載した。

該期の溝址のうち、的確に層位把握できたG O B溝址15は層位毎に、ほぼ層位把握ができたG O B溝址1・2は上層と下層に分けて版組を行なった。いずれの溝址も上層からは古墳時代後期以降の遺物が出土し、その時期まで遺構が存在していたと考えられる。時期からすれば本編の対象外であるが、溝址の性格を把握するために合わせて掲載した。また、これらの溝址から弥生時代中期の遺物も出土し、流れ込みによる遺物であるが遺構外扱いにせず、それぞれの溝址でまとめて掲載した。

その他の遺構 量が限られ、住居址に準じて図化した。

G O A A区包含層 遺構の項で述べたようにかなりのまとまりがみられたので、住居址に準じて図化等を行なった。

遺構外 特徴的な資料について実測図と拓影図を掲載した。

③ G O A A区湿地帯

可能な限り分層発掘を試みた結果、下層へ順次古い時期のものが多くなる傾向はみられたが的確な層位把握はできなかつたので、遺物主体に掲載した。弥生時代前期から中期までは、口縁部 $\frac{1}{2}$ ・底部 $\frac{1}{2}$ 以上残存する個体と特徴的資料を、弥生時代後期から古墳時代前期は、口縁部 $\frac{1}{4}$ ・底部 $\frac{1}{2}$ 以上と特徴的資料を実測図及び拓影により掲載した。以上、それぞれの基本方針により資料呈示を行なった。遺構関連資料のほとんどとそれを補足して遺構外資料を掲載することにより、それぞれの時期の様相が明確に示されるものとする。

(2) 図化の方法

2)―(1)で記したそれぞれの基準により図化した。 $\frac{1}{2}$ 以下の個体に関しては、復元実測法を用いた。調整は、ハケ・タタキ・ヘラケズリ・シボリを図化し、原体の幅・切り合い・方向等を表現することに努めた。一部の細かいハケで図化できなかったものもある。ナデ・ヘラミガキ・ヨコナデは図化しなかつた。底部は、圧痕等が認められるものにつき拓影で表現した。

文様はすべてを図化した。施文具原体の幅・本数・燃り、施文の方法・方向・切り合い等を把握することに努めた。

断面の表現は輪積み痕の観察できたものは細い実線で示し、輪積みないし接合部で破損しているものは同様に細い実線で表現した。途中で破損したものは、欠失部境を波形で表わし、推定部は細線で示した。

(3) 観察表の記載方法

個々の土器については紙数の制限もあり、観察表に記載した。拓影図に関してはそれも省略した。

項目は、遺構・図版No・器形・法量・手法上の特徴・胎土・焼成・色調・備考である。

器形以下の7項目について説明を行なう。なお、本書で用いる該期の土器に関する用語等はIVで示すものである。

器形 弥生時代中期と弥生時代後期から古墳時代前期に分けて形態分類を行ない、それに沿って記した。

法量 口縁部径・胴部最大径・底部径・器高をcmで表記した。復元実測法を用いた土器に関しても、同様に記してある。

手法上の特徴 土器の表面で観察できる調整を外面と内面に分け、それに文様を記した。

調整はカタカナで表現し、方向が分かるものは漢字で示した。スペースの関係ですべてを書ききれないものもあり、その場合は口縁部に施されることが多いヨコナデを省略し、胴部の調整を中心に記した。

文様は弥生時代中期に関して分類を行ない、それに基づいて記した。底部調整も文様の分類の中に含め、丹彩に関しては分類の中に含めず、文字で表現してある。

弥生時代後期から古墳時代前期では分類は行なわなかった。櫛描文が主体で、一部に篋描文・竹管文・貝殻文・浮文・丹彩などがあり、文字で表現した。量的に少ない篋描文はすべて漢字で「篋」を付し、量的に多い櫛描文に関しては、篋描文と共通する刺突文と羽状刺突文にのみ「櫛」を付け、その他の文様に関しては「櫛」を省略した。また篋・櫛ともに「描」は省略した。例えば、篋描刺突文は篋刺突文と、櫛描波状文は波状文と表わした。浮文には円形浮文と棒状浮文があり、そのまま記した。貝殻文は59-22の連弧文があるだけである。他に、櫛描文で施文具原体にイネ科植物を用いたと考えられるものがみられた。高松原遺跡で注意されてから（宮沢他1977）類例が増加傾向にある。備考欄にイネ科と記したものは施文具原体がイネ科茎束によることを示す。

胎土 肉眼で見分け得る胎土の中に含まれる混和材（佐原1974）に着目して区別した。それには、石英・長石と考えられる白味を帯びた石粒、金雲母・黒雲母などの雲母類、赤色～赤褐色及び一部茶色を呈する土粒などがみられる。まず石粒の多寡によって、ほとんど含まないかわずかに含むものを「精良」、少量含むものを「小石粒少」、普通な入り方のものを「小石粒」、多量に含むものを「小石粒多」の4段階に区分した。他に、雲母類が入るものを「雲母」、赤色の土粒が入るものを「赤粒」と記した。これら以外については特に記してない。

小石粒には1mm以下の微石粒から1cmくらいの大粒なものまでにバラエティーに豊むが、その区別はできなかった。また、混和材と考えたものの中には、粘土素地の含有物である可能性のものもあるが、それを区別することはできなかった。

焼成 焼成は土器の埋没条件の差により器面の変化が考えられるが、本遺跡群では比較的保存状態が良く、焼成当時の状況がある程度知ることができた。

「良好」・「普通」・「不良」の3段階で表現した。「良好」はきわめて焼成の良いものを、「普通」は一般的にみられる程度のものからやや焼成の良いものを、「不良」はやや焼成の悪いものから手づぶれるくらいの焼成の悪いものまで含んでいる。

色調 器壁の外表面・内面・断面に分けて表わした。一様な色調を呈するものではないので、その主体となる色調を記した。

色調の表現は個人差があり、同一個人でも時期によって差異がある。複数の人による長期間にわたっての実測であり、表現にバラツキがあったので、それを調整するために、観察表作成時に山下が見直しをして統一を図った。

備考 実測個体の残存状態、特徴的な出土状態、遺構外やGOA湿地帯と出土位置が問題になると思われるGOB溝址15の3層から5層についてグリットを記した。

残存状態は基本的に部位を省略してある。たとえば $\frac{1}{2}$ 残存は、その実測してある部位についてのみ $\frac{1}{2}$ 残っているということを表わしている。

出土状態は、すべての個体について記したいと考えたが、土器埋設炉であったものしか記せなかった。

他に、楡描文の中でイネ科植物の茎束で施されているものや、遺構の所属時期以外の個体と考えられるものの時期などを記してある。(山下誠一)

4 石器の記述

(1) 資料提示の方法

本遺跡群における石器出土量は、膨大である。その大半は、縄文時代から弥生時代に所属するが、それ以降のものも決して少なくはなく、石を素材とした道具と人間生活との連綿とした深い関係を如実に物語っている。

本編の対象は、縄文時代早期から古墳時代前期の遺物である。石器は、それ自体から所属時期を判定するのは困難な場合が多く、その点、土器とは根本的な相異がある。これは材質的に大きな制約を受けることと、機能が最優先され、他の付加要素を余りもたないためである。したがって、所属時期の判定は土器との共伴関係や出土層位に大きな比重が置かれる。本遺跡群のように各時代の遺構が著しく重複する場合は、原位置から大きく動いた遺物が多く、住居址内の出土遺物でも他時期の混入を疑うものがある。大形の打製石器類が縄文時代や弥生時代中期のみならず、弥生時代の終末、さらには古墳時代前期まで確実に残存する当地方にあっては、なおさら遺構内の遺物の選別を困難にしている。

住居址 住居址遺物の提示にあたっては、こうした混入の可能性を認めた上で石器と認定しうるものの全点図化を原則とした。一部、台石のような礫石器で調整加工や使用痕の観察されないものや器形不明の小破片は省略せざるを得なかったが、これらも「石器観察表」には記載した。

溝址・方形周溝墓・土坑 溝址と方形周溝墓の出土遺物の提示は、時間的制約から層位的な検討を加えることができず、ごく一部の主要遺物の図化と表化にとどまった。また、土坑は遺構単位の提示ができなかった。

遺構外 遺構外の包含層出土遺物と、古墳時代後期以降ならびに時期不明の遺構内出土遺物のうち該期に所属すると思われる遺物を一括した。古墳時代前期と後期を画する理由は時期区分の設定の項で先述したとおりである。古墳時代後期遺構出土石器類について一括して遺構外扱いとしたことは、弥生時代と同形態の打製石器類が古墳時代前期末の住居址に共伴する報告（酒井1979・1983）があり、この消長が大きな研究課題である現段階においては問題もあるが、本遺跡群では厳密な追求は困難であって、重複の少ない遺跡でこそ可能と思われる。

次に遺構外出土石器の図化割合について触れておく。出土石器のすべてについて統計的な整理を果たしていない現状では、出土総数と図化割合の提示は残念ながらできない。器種によって出土量の差は大きく、図化割合にも大きな差がある。たとえば、各地籍通じて最も多い打製石斧の図化割合はかなり低い。これに対して、定形化された以外の打製石器や磨製石器完成品は、完形品ないしはほぼ完形品のほぼ100%の図化を果たした。また、挿入打製石庖丁や横刃型石庖丁の完形・ほぼ完形品は、AMDとARBではほぼ100%、出土量の多いTAN・KUR、GOA、GOB、ARYでも比較的高率の図化を果たした。したがって、図表化したものをもって全体像の提示とは到底いえないながらも、ある程度、一器種における地籍間の量的な傾向を示すと思われる。なお、遺構外出土石器のうち該期以後に所属する量が多い砥石は、次編でまとめて扱うことにした。

(2) 図化の方法

石器の図化は、石器に内在する属性を余すところなく示すために多方向から実測することが必要である。しかし、実際の報告においてはそうもいかないのが現状であり、最低限度の図示にとどめざるを得なかった。

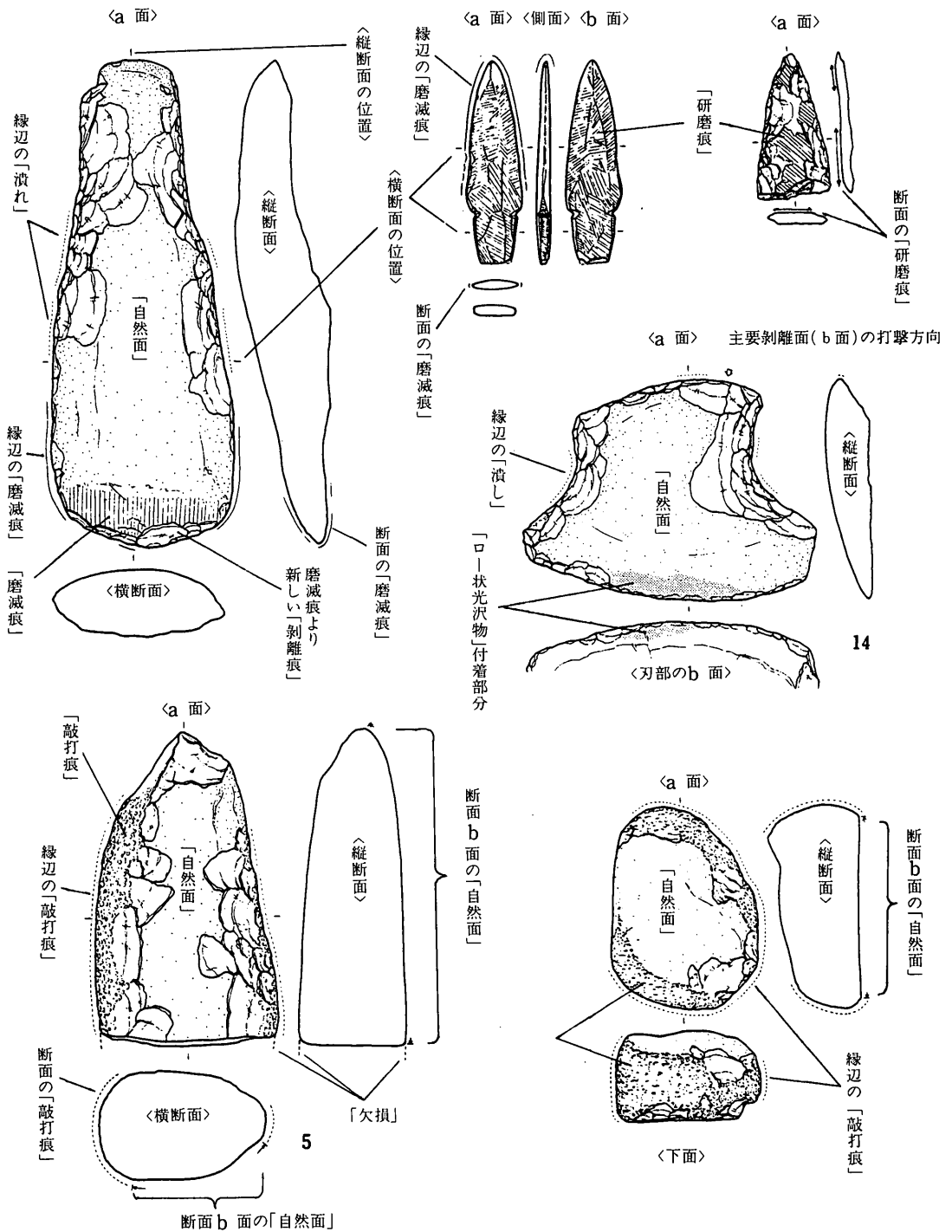
図の展開方法 図は、正面（a面）図と、縦横の断面図ないしは側面図・下面図を基本とし、形態や調整や使用痕の在り方に応じて使い分けた。裏面（b面）の必要なものは縦断面ないしは側面図の右に置き、またb面刃部のみに省略する場合にはa面刃部下に相對させた。

図の表現 石器の観察は、肉眼の他に、ルーペや触覚によった。観察された調整や使用痕を限られた図で表現するには限度がある。そこで図の補足として記号化して表現した。記号の意味と使用例は、挿図2のとおりである。a面平面図・側面図・下面図では縁辺部の、断面図では断面部での状態を示したものであって、その周囲まで投影したものではない。また、簡略化を心掛けたために、理解可能なものについては省略をした。しかし、一部、観察不足などの不注意から記載もれがあり、統一を欠いてしまった。

(3) 観察表の記載方法

個々の遺物について観察表にまとめた。項目は、遺構・図版No・器種・法量・石質・備考である。

器種 石器の器種については、大半が従来の呼称に従った。「打製石斧」や「石匙」や「石庖丁」が石器の機能や用途に矛盾することは周知のところであり、機能や用途に即した名称が与えられ

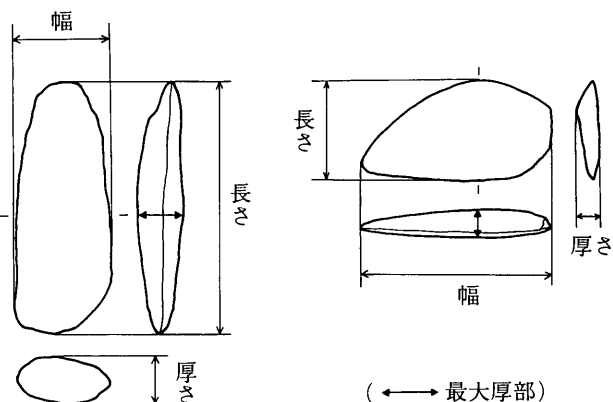


— 「磨滅痕」・「砥面」の範囲	←→ 「研磨痕」・「研磨面」の範囲	↘ 主要剝離面の打撃方向
----- 「敲打痕」・「潰れ」の範囲	↔ b 面の「自然面」の範囲	↓↓ 「穿孔痕」・金属による「打撃痕」

挿図 2 石器実測図凡例

るべきであるが、分析が不十分でそこまで至っていない。今後の課題である。従来の名称と異なるものについては、次章の各器種の項目において記した。また、細分したものについては分類を加えた。

法量 長さ・幅・厚さ・重量について計測した。前三者の計測方法は挿図3のとおりである。器種を問わず図版での姿勢を基準とし、長さは最遠位端間の垂直距離、幅は同様の水平距離、厚さはa面の長軸方向の投影における最大厚を求めた。明らかに欠損して原数値を求められない場合は、計測値にカッコを付けた。



挿図3 石器の計測方法

石質 松島信幸氏ならびに伊里道彦氏の指導のもとに、桜井が肉眼によって鑑定した。

備考 石器の遺存状態や調整加工・使用痕・出土地点などをごく簡単に記載した。中でも使用痕の観察に重点を置いた。限られたスペースのため十分には記述できなかったが実測図理解の補助とした。出土地点については、遺構外出土遺物についてのみ示した。住居址内出土遺物の出土位置や層位などの基礎的データは、時間的制約のために提示できなかったが、「遺物出土状態」の図を掲載したものについては、それを参照していただきたい。(桜井弘人)

5 その他の遺物の記述

土製品・石製品・玉類・金属器がある。

1) 土製品

土製品には、土偶・土製円板・土製角板・土錘・焼成粘土塊がある。他に、土玉・手づくねがあるが、土玉は玉類に含め、手づくねについては後で触れる。この中で、単独でもほぼ所属時期を確定できる土偶・土製円板・土製角板については、遺構出土ならびに遺構外(当該時期以外の遺構に含まれるものを含む)出土遺物のすべてを、他は当該時期遺構出土遺物を掲載した。出土量が少ないため100%の図化を果たした。(桜井弘人)

2) 手づくね

一般的に手づくねは、土製品の項で触れられたり（宮坂他1981）、土器とともに分析される（加藤・高橋他1981）など統一されない。その性格は祭祀と関連するとの考え方が強いようである（藤森1941）。本遺跡群では、遺構より遺構外から出土する例が多く、一概にその所属時期を判断することはできなかった。形態も種々みられる。

本編では、該期遺構に属するものと、遺構外では確実に弥生時代中期に限定できる口唇部に篋描刻目文を持つものを土器と一括して掲載し、分類にも含めた。次編において、本編分も含めたすべての個体について形態分類を行なって、編年的位置やその性格について明らかにしたい。

（山下誠一）

3) 石製品

石製品には、石製紡錘車や硯などがある。本編の対象は石製紡錘車に限られ、住居址と溝址出土品を掲載した。石製紡錘車は円盤状を呈するものから截頭円錐形を呈するものへ形態的に変化すると考えられるが、遺構外出土品については住居址に準じて前者のみを選択している。したがって、ここでは該期住居址と遺構外出土品の円盤状のもの100%を図化し、一覧表に掲載した。この形態変化については次編で検討を加えることにしたい。

（桜井弘人）

4) 玉類

玉類には、勾玉・管玉・白玉・ガラス玉・土玉などと、その未成品がある。古墳時代後期の住居址やGOA湿地帯などから多量に出土しているが、本編の対象とする範囲では、古墳時代前期の住居址の出土品に限られる。これについて100%図化をし、一覧表に法量と観察を記載した。白玉と土玉については分類を行なったが、詳細な分析は次編に譲りたい。

（桜井弘人）

5) 金属器

金属器には鉄器と銅器がある。前者には刀子・鏃・飾り金具・つり針が、後者には鏃・釘がある。鏃などの一部を除けば、単独でその所属時期を確定することは困難なため、該期遺構出土遺物に限り本編に掲載した。

金属器は古墳時代後期以降の遺構から出土することが多かったため、本編対象分はわずかである。そこで、全資料の提示が済んだ次編でそれぞれの位置づけ等の分析を行なうこととし、ここでは一覧表を作成し簡単に触れるにとどめた。該期遺構に所属するものに関しては、わずかの小破片を除いて100%の図化を果たした。

（佐々木嘉和）

III 縄文時代の遺物

1 土 器

1) 早 期

該期資料の大半がARYからの出土で、隣接するAMDからわずかに出土した。竪穴住居址などの確実な生活単位は検出できなかったが、遺物の集中する小範囲と遺物分布による限定された生活範囲の把握ができた。出土遺物は、後半から終末に位置づけられ、既設定の他地域型式等により、いくつかの群に細分できる。

細久保式土器 152-1は横位の山形文を施した口縁部破片で、153-31は格子目文の底部付近の破片で、いずれも胎土は精良で、文様・胎土等から細久保式に比定される。

高山寺式土器 150-9・152-12は底部付近、153-3は口縁部破片で、いずれも胎土・焼成はあまり良くないが、粗大な楕円文が確認できる。

相木式土器 AMD遺構外(145-1~5)、ARY小竪穴6(151-24~27)・ユニット1(152-1・2)・ユニット2(152-13~16)・ユニット3(152-26~30)・ユニット5(153-1・2)・大ユニット(153-37~39・41・42)・遺構外(153-40・43)から出土した。

基本的な特徴として、大形の山形文が縦・横に施される。器壁は全体に厚く、口縁部が薄くなる他は1cmを越える。胎土・焼成は良好で、微石粒を含むものもあり、繊維は含まない。

文様は、部位によって異なり、口縁部に特徴を示す。本遺跡群出土の口縁部破片は例外なく内外に施文し、内面は横位の山形文を施す。外面の文様は個体により若干の差異がある。横位山形文施文後、原体端部による押し引きを多段に施すもの(152-26・27、151-24、153-37)、縦位山形文施文後原体端部による沈線を多段に施すもの(151-25)、原体端部による沈線を多段施文しその空間部に同端部を回転押圧するもの(145-1~3)、偏平端部を持つ工具による押し引きを山形もしくは渦状に施文したもの(153-1)がある。胴部は縦位の山形文を帯状施文し、一部に横位山形文を交差して帯状施文するもの(152-14)もある。

燃糸文・縄文・絡条体圧痕文土器 152-3・4は、浅い燃糸が部分的に認められ、帯状に磨り消された可能性もあるが、文様が不鮮明で断定はできない。胎土・焼成は良好である。

151-45は、全体に縄文を施し、胎土・焼成は良好であるが、小破片のため詳細は不明である。

151-20は、絡条体を圧痕と回転により施文し、半截竹管とみられる浅い沈線を縦に施している。胎土・焼成は良好で、繊維は含まない。

沈線文・条痕文・列点文土器 いずれも小破片で、全体を判断できるものはないが、小竪穴6

出土の同一個体と考えられる151-9~19に各文様が部位を替えて施文され、一括して扱えた。

151-9~19・35、152-24・25は同一個体で、口縁部・底部を欠くが、文様構成は把握できた。残存部上端に2段の沈線を引き、その内部を竹管端部で連続刺突する。その下段は左右交互に傾斜する細線を施す。さらにその下段は2列2段の列点文を、上段は横位に、下段は縦位に長い列点を施す。列点文より下部は浅い条痕がある。

154-1・2、152-21・22は内湾ぎみの口縁部片で、いずれも口唇部内・外端に刻目を施し、外面に直線及び連続する山形状に列点を施す。152-5~8も同類である。なお、152-23も同様の列点文を持つが全面に条痕を施し、前者とは分類できる。

152-17~20は内外に条痕を施す。17は口縁部破片で片口となり、外面は細い条痕の上を更に太い沈線を呈する条痕をし、口唇部に刻みを持つものである。

その他細線を施すもの(151-29)、浅い条痕もしくは削痕状の器面調整をみせるもの(151-8・21・28・30~34、153-4、154-4~7)がある。

なお、総体に胎土中に繊維を含むが、列点文を施したものは、全く含まないか、含んでもごくわずかである。

以上、大半が粕畑式に比定でき、それ以外のものについても同期に併行すると考えられる

塩屋式土器 出土量はかなり多く、小竪穴1出土品中に図上復元できたものがあり、全体形の判断が可能である。総体に器壁は薄く、胎土・焼成は堅緻であり、器面の調整も丁寧になされ、削り状、ナデ状の痕跡を内外に残し、内面の口縁部付近は指頭による押え痕を残すものもある。

文様は各個体により様々であるが、基本的には口縁下数cmの範囲に隆帯をはり付け、その上を櫛状具ないし貝殻端部による条痕を施す。条痕は隆帯部から胴部に至るが、胴上半に限られる。

隆帯は、口縁部及び下方数cmにほぼ平行してはり付け、その中を2~4本を連続する山形状にはり付けるものを主体とするが、中間部隆帯が格子状(150-7)・縦に連続垂下(152-22)のものや、下段水平隆帯下に連続する山形状にはり付けるもの(151-13・24・35)などもある。

口唇部の断面形は様々であるが、平坦なものが多く、隆帯による突起をなすもの(150-3、153-12)などもある。

隆帯は明瞭に判別できるものがほとんどであるが、扁平に押しつぶされたもの(150-4、154-19)もあり、大半の条痕が右下りであるのに対し、これらは左下がりとなる。

隆帯上は条痕が主体であるが、櫛状具等の端部を刺突したもの(151-38、154-11・32・43)もあり、いずれもその方向は左下りである。

出土状態などから各遺物の時間差の把握はできず、本遺跡群出土品の全体がほぼ同一時期と判断されるが、隆帯形・条痕方向等に若干の差異があり、時間差を示す可能性も否定できない。

2) 前期

早期末の資料が比較的多出したのに対し、該期資料はほとんどない。154-48が北白川下層式と

判断され、外面に条痕を施し、表面に赤色顔料を塗彩し、胎土・焼成とも精良である。

3) 中期

(1) TAN・KUR、GOA、GOB、AMD、ARY

各遺跡・地籍ともに該期遺構の検出はないが、いずれからも中期全般にわたる資料が出土している。いずれも破片であるが、中葉から後半を主体にかなりの時間幅を示す資料である。

TAN・KUR 初頭に位置づけられるもの(25-30・31)、中葉に位置づけられるもの(25-13・14・17~20・24~29)、後葉に位置づけられるもの(25-11・12・21~23)があり、かなりの時間幅のある資料が出土している。

GOA 湿地帯及び古墳時代前期の溝内から土器片が出土している。いずれも同様の傾向で、中葉に位置づけられるもの(63-1・2・4~8・10~14、66-12~14・17)が主体をなし、後葉に位置づけられるもの(63-3・9・15・16、66-11・15・24~26)がわずかではあるが認められる。

GOB 中葉に位置づけられるもの(122-16~21・23・24)、後葉に位置づけられるもの(122-22・25~27、125-12)があり該期に位置づけられると思われるが詳細時期不明のもの(122-28~33)がある。

AMD 中葉に位置づけられるもの(145-10・11)、後葉に位置づけられるもの(145-8・9)があるが、資料数は少ない。

ARY 中葉に位置づけられるもの(162-1~13・16)を主に、後葉に位置づけられるもの(162-14・15・17)がわずか認められる。

(2) ARB

今次調査において、TAN~ARYの恒川遺跡群からは、該期に属する遺構そのものの発見はなかったが、出土遺物は断片的とはいえ前半から後半にかけての時間幅を示すものであった。それに対し、ARBでは、住居址等の遺構に伴っての出土が主体で、時期も後半から終末に限定される。住居址自体の残存状態と強く関連して、遺構毎の出土量にはかなりの差がある。

調査範囲内の住居跡は、その主体となる出土土器から2段階に大別できる。

第1段階 2号住居址(191図)・3号住居址(191~194図)・8号住居址(198・199図)・9号住居址(200図)・11号住居址(201図)・12号住居址(202~205図)・13号住居址(206~207図)が個々により若干の内容差は認められるが、同時期と考えられる。

従来、伊那谷の縄文時代後期後半の土器と概括されてきたものである。伊那谷における概期の土器編年が不十分な状況下であり、個々について検討を加えるには至らないが、総体として中期後葉後半以降に位置づけるのが妥当といえる。

全体としてそれぞれの文様に簡略化の傾向があり、口縁部から胴部にかけてほとんどが沈線文である。伊那谷の中期後半の一特徴ともいえる唐草文はわずかにみられる程度で、その基本ともいえる隆帯は、痕跡程度に隆起するもので退化する過程を示すといえる。

はり付けの隆帯文など一部に古い様相を残すものもあり、この段階をさらに細分すべきともいえるが、総体として、伊那谷の縄文時代中期終末の様相を示すと考えられる。

第2段階 5号住居址（195・196図）・6号住居址がある。第1段階の主体的な文様が沈線主体であったのを受け、よりその傾向が強く、無文の粗製土器も認められる。

いずれの住居址も前段階と考えられる破片はあるが、主体となる土器の文様は明らかに変化している。編年上の位置づけとして第1段階の扱いが問題となるが、中期最終末もしくは後期初頭と考えられる。

なお、土坑出土遺物（208図）・遺構外出土遺物（209・210図）を図示したが、若干古い様相を示すものもあるが、住居址出土土器と共通した内容といえる。

4) 後期

後期に属する土器はGOB（122—12・123—1～12・125—9）・AMD（145—12）と破片数でも10数片が出土したのみである。そのほとんどが加曾利B段階とみられるが、出土資料が少なく、本遺跡群における縄文時代後期の様相は不明といわざるを得ない。

5) 晩期

本遺跡群のうち、GOA・GOB・AMD・ARYの地形的に連続する地域から出土している。そのうち、出土状態・出土量から主体はGOAにあったと考えられる。GOBは一部に包含層及び該期に属すと考えられる土坑が検出されたが、弥生時代住居址等との重複により、的確な把握ができず、すべてについて遺構外として扱った。

出土土器の内容は各地籍ともに同様で、条痕文土器・浮線文土器・無文土器があり、条痕文土器が主体を占める。ただ、AMDのみは、条痕文土器は2・3点確認したのみで浮線文土器が主体となり若干様相を異にした。

土器の総数では条痕文が大半であり、その内容も一律ではない。明らかに貝殻を工具としたもの、それを擬したもの、刷毛状のもの、間隔を置いた沈線状のものなどがあり、口縁端部も数種類認められる。

浮線文土器は総数が少なく、具体的様相は不明であるが、全体的に新しい傾向がみうけられる。

該期資料は、伊那谷において、断片的な資料は比較的多く認められるが、未だ整理不十分な状況であり、本資料についてもほとんど検討を加えておらず、単なる資料提示となってしまったが、条痕文土器・浮線文土器ともに一様ではなく、他地域との交流・時間差など検討する中で、伊那谷の弥生時代へ移行する過程の材料の一つとなると思われる。

（小林正春）

2 石 器

1) 早 期

ARYでは、縄文時代早期の小竪穴6基が検出された。ここから出土した石器には、打製石鏃、スクレイパー、ピエス・エスキュー、使用痕のある剥片、磨製石斧、横刃型石器、特殊磨石がある。また、この周囲のユニットや遺構外にも該期に所属すると思われる石器が多く、上記の他には尖頭状石器、不定形石器、磨石、砥石がある。その他、黒曜石・チャート・玻璃質安山岩などの石核や剥片・碎片類も多い。

① 打製石鏃

小竪穴8点、ユニット49点、その他36点の計93点が出土している。他地籍に比べてはるかに多く、ほとんどが該期の所産と考えられる。

形態をみると、無茎凹基鏃59点(63.4%)と最も多く、次いで無茎平基鏃16点(17.2%)・円基鏃7点(8.5%)・尖基鏃1点(1.1%)・有茎鏃4点(4.3%)である。このうち、有茎鏃については縄文時代後・晩期に属する可能性も考えられる。

無茎凹基鏃は、形態面でバラエティーに富んでいる。特徴的なものを指摘すると、先端部が大きく開いてすぐに肩をもち、内湾する側縁をもつ五角形鏃(165-1、168-7~9、181-1)がある。逆刺が大きく抉りの深いものがほとんどであるが、逆刺をもたない181-32もこの部類に近い。6点中、黒曜石1点を除き、すべてチャート製で、平坦な剥離痕によって丁寧に調整される。小竪穴1から1点が出土し、塩屋式に伴う特徴的な石鏃と考えられる⁽¹⁾。181-12も五角形鏃の部類であろう。181-4と167-1は抉りも深く、それぞれ長脚鏃・鋏形鏃といえよう。こうした特殊なものを除いては、全体に基部の抉りは浅く若干丸く抉れる程度で無茎平基鏃と区別し難いもの(166-2・8・12、167-16など)が多く、これも該期の特徴と思われる。その他、先端部の非常に鋭いもの(166-2、168-10・16)や先端部が片方に曲がるもの(165-5・6)もある。調整は全体に丁寧であるが、片面ないしは両面に大剥離面を残すもの(165-5・13、167-2、181-5・14・16・19・20)もみられる。

無茎平基鏃は、前者に比べて厚味をもつものが多い。片面に剥離できなかつたコブ状の突起をもつもの(167-15)・片方が大きく膨らむもの(167-7、169-3・7)があり、このうち167-7は、片面に大きく大剥離面を残している。

円基鏃(166-3・5、167-5、169-6など)も分厚いものが多い。

尖基鏃(168-4)は木葉形をなしている。

石材は、黒曜石が67点(72.0%)で最も多く、チャートは22点(23.7%)、玻璃質安山岩は4点である。遺存状態は完形品が49点(52.7%)で、破損品が半数近くある。

② 尖頭状石器

明らかに尖頭部を作出するが、打製石鏃として着柄して使用することが困難な石器である。ユニットの6点、その他の1点がある。分厚いもの(168-5、169-7・8・10、181-31)と基部調整のないもの(169-9)があり、169-7・8は先端部が片側に寄っている。

石材は、黒曜石3点・チャート4点である。

石錐やスクレイパーあるいは石鏃との関連が考えられるが、用途の断定できにくい石器である。

③ スクレイパー

器体の一辺あるいは周縁に刃部を作出した石器である。小竪穴1点、ユニット1点、その他8点の計10点がある。

169-17・20・21、182-6・7は、円形の器体のほぼ全周に刃部をもち、一般的に円形搔器(ラウンド・スクレイパー)と呼ばれるものである。片面調整と両面調整のものがある。169-16・18は、器体の端部に円弧状の刃部を作出する搔器(エンド・スクレイパー)である。ともに片面調整である。165-9、182-10は、剥片の一長辺に刃部を作出する削器(サイド・スクレイパー)で、前者は片面調整、後者は両面調整である。

石材は、黒曜石8点・チャート2点である。

④ 石匙

ユニットの1点(169-23)がある。刃部と反対側の中央につまみ部を作出する横型石匙で、つまみ部の作出は不十分で幅広い。刃部左側の調整は粗く、右側は丁寧である。縄文時代早期末の、石匙出現期の姿を示す石器といえる。⁽²⁾

⑤ ピエス・エスキーユ

器体の両端部に打撃による破碎痕や階段状剝離痕をもつ石器である。小竪穴1点、ユニット3点がある。

形態は、両端部に打面を残して柱状のもの(165-12)、片面にのみ打面を残して一端が鋭いもの(166-14、170-11)、両端が鋭くて縦断面が凸レンズ状となるもの(170-14)がある。

石材は、170-14の珪質凝灰岩を除き、すべて黒曜石である。

⑥ 不定形石器

明らかに第二次調整をもつがスクレイパー的な刃部をもたずに不定形なものや、先述した器種に分類できないものを一括した。分析を深めれば器種として抽出できるものもあろう。ユニットの5点、その他の15点がある。

特徴的なものを掲げると、一側辺にブランディング状の調整をもつもの(167-13、170-2)、両面調整された分厚いもの(169-11・12)、片面に細長い剝離痕が発達して断面は台形のもの(169-22)、一端にノッチ状の調整をもつもの(182-17)、一端に細長い小さな剝離痕が集中するもの(182-18)などがある。

石材は、黒曜石10点・チャート9点・玻璃質安山岩1点・珪質凝灰岩1点である。

⑦ 石核

剥片や碎片に比べて石核と呼べるものは極めて少ない。図示した3点はチャート(170-15、182-19)と珪質頁岩(167-14)で、板状の器体の側面を打面とする剥離痕が残る。

⑧ 使用痕のある剥片

側縁に刃こぼれ状の小剥離痕の認められる剥片である。抽出しえた点数は15点と少ない。さらに詳細に観察すれば若干増えるとも思われるが、石器総数に較べてあまり多くないといえる。

使用部の形状には、外湾するもの(165-11、182-9・11など)、直線的なもの(165-4、170-4など)、内湾するもの(170-6)があり、異なった使用部を複数もつものもある。

石材は、黒曜石が13点と多く、チャートは2点である。

⑨ 磨製石斧

ユニットの2点(171-1、173-5)がある。小形の方形を呈し、両側縁と基縁がほとんど面取りされずに調整剥離の痕跡をとどめる点が特徴的である。171-1は両刃、173-5は片刃をなし、刃面は平坦に研磨されている。後者の刃部は鋭く、刃縁は緩やかな円弧状を呈している。使用痕は、両者の刃部b面に1~2mm幅の刃縁に直交する磨滅痕が認められる。また後者の基部a面は磨滅し、装着痕と思われる。両者ともa面に斧台に固定した横斧と推測される。

⑩ 横刃型石器

横長剥片の長辺を刃部とする石器である。スクレイパーとした小型石器が貝殻状剥離を特徴とする黒曜石・チャートなどを利用するのに対して、硬砂岩・緑色片岩・輝緑凝灰岩・ホルンフェルスを利用している。そのため刃部の鋭利さではやや劣り、両者の対象物が異なったことを示唆している。

小竪穴から4点が出土し、さらにユニットと遺構外出土のうちの7点が出土層位や形態的特徴および風化程度からみて該期の所産と考えられる。

形態はバラエティーに富む。外湾刃を呈するものが多く、直線刃(165-19、171-2、173-3)は少ない。刃部の調整は、剥片の縁辺をほぼそのまま利用するもの(165-18・20)と、両面調整するもの(165-15、171-2・9)、片面調整するもの(165-19、171-3・11、173-3、176-2、188-5)があり、後者のタイプは縄文時代中期や弥生時代にはほとんどなく、該期の横刃型石器の特徴と思われる。165-19は、サイド・スクレイパー的な刃部調整であるが、171-3や176-2や188-5の調整は非常に粗雑であり、171-2・11は、刃縁の振幅が非常に大きい。

石材は、先に述べた中で硬砂岩が多いが、ホルンフェルスの使用は該期の特徴である。

使用痕は、165-20にのみ観察された。刃部の両面が横方向に滑らかに磨滅している。

⑪ 礫器

自然礫に粗雑な調整を加えて分厚い刃部を作出した石器である。一般に礫核石器を指すが、厚手の剥片を素材として礫器的な調整を施すもの(171-6・8、172-5)もこの範疇に含めた。

ユニットの11点とその他の3点の計14点が出土している。いずれも形態や風化程度から該期の

所産と考えられる。

礫器は、いわゆる両面礫器と片面礫器がある。前者は、刃縁の振幅が大きくて粗雑な両刃となるものが多く、全周縁に刃部を作出するもの(172-4~6)と刃部とならない背縁をもつもの(171-7・8、172-2・3、173-4、188-7)がある。172-2は、背部に平坦面を作出している。171-3は、自然礫の一辺に刃部を作出したもので、背部には広く自然面を残している。後者の片面礫器は、すべて片刃で、全周縁に刃部をもつものはない。背部に自然面を広くもつもの(171-1・4、188-6)と節理面をもつもの(171-6)がある。また、礫器とした188-8は、凹をもって凹石としての用途も考えられる。

石材は、硬砂岩が11点で、他に輝緑凝灰岩・珪質片岩・安山岩が各1点ある。

⑫ 特殊磨石

細長の自然礫の側縁に、細長い「機能磨面」(八木1976)をもつ石器である。小竪穴から1点、ユニットから2点が出土している。

165-17は、やや尖った側縁に長さ11.0cm、幅2.3cmのザラザラした「機能磨面」をもち、さらに相対する側縁には敲打痕、左端部には剝離痕が認められ、一部を破損している。171-10は、長さ11.5cm、幅2.3cmの「機能磨面」をもち、その状態は前者と違って滑らかである。173-8は、やや不明瞭な「機能磨面」を二面もつ。端部には敲打痕が認められ、敲打器として使われた可能性がある。

石材は、165-17と173-18が硬砂岩、171-10が輝緑凝灰岩である。

⑬ 磨石

扁平で円形を呈する自然礫の表面に磨面をもつ石器である。ユニットから3点が出土している。173-6は、片面に磨面をもち、その中央部には凹があり、173-7は、両面に磨面をもち、側縁部には敲打痕が顕著で凹石や敲打器的な用途を共有したものと思われる。171-5は、多孔質の安山岩のために磨滅痕は認められないが、a面が機能面と思われる。

石材は、前二者はそれぞれ花崗岩と超塩基性岩である。

⑭ 石皿

小竪穴5から出土した1点(166-1)がある。大形の花崗岩の平坦面に滑らかな磨滅痕が認められた。

⑮ 砥石

ユニットから抽出した1点(173-9)がある。小形で三角柱状を呈する輝緑凝灰岩で、稜部と上端部が磨滅しており、該期の砥石と考えられる。

2) 中期後半から終末

ARBにおける縄文時代中期後半から終末にかけての住居址9軒から出土した石器は、第1表のとおりである。住居址の遺存状態は良好でなく各住居址本来の保有量（埋設過程の廃棄も含めて）を示さないが、当地方における該期の一般的な石器様相をうかがうことができる。また、ARBの遺構外出土石器も大半は該期の所産と考えられる。住居址出土の石器を中心に該期の石器を概観する。

① 打製石斧

打製石斧は、該期における最も基本的な石器の1つである。住居址から計97点が出土している。

形態は、短冊型・撥型・分銅型という伝統的な分類に従うと、完形品・ほぼ完形品のうち撥型は2点のみで、残りのほとんどは短冊型か、あるいは刃部幅が若干広がり撥形に近いが短冊型の範疇に含めうるものである。

完形品の法量は、長さ7.6~14.5cm、幅2.8~5.5cm、厚さ0.65~2.75cm、重量38~232gである。欠損品の中にはこれより大形になると思われるもの（217-13・14、223-19）もあるが、量的には少ない。長さとの比率は、第2表のように比較的小さなまとまりを示し、2:1から3.5:1と細長い全体形をなす。縦断面は薄くて直線的なものが多い点も特徴である。211-3のように側縁に抉りをもつものは着柄の工夫とも考えられる。211-1と遺構外出土の228-2は、側縁を研磨整形しており、216-11は、側縁を丁寧な潰して面取りをし、片面を研磨している。このように該期の打製石斧の中には部分的に研磨整形を加えた例もみられるが、刃部以外のものについては

器種 住居址	打製石斧	横刃型石器	大型粗製石匙		磨製石斧	敲打器	砥石	凹石・磨石	石皿	石錘	打製石鏃	スクレイパー	石匙	石錐	使用痕のある剥片	その他	計
			完	未													
2住	6	4		1	2	1		2	1	1			1	1			20
3住	13	14		1		6					2					敲打製石器1, 器種不明1, 礫器1	38
5住	5	2	1	1	2	1			1	1	1					磨減痕のある剥片1	16
6住	8	16・1?	1		2	1		1		1	1					ダメージのある礫1	33
8住	19	11				4		1		7	1			1	1		46
9住	1	2								1							4
11住	6	6		1		2					1						16
12住	16・1?	10	1	2	3	17	1			1・1?	1			1		加工された剥片1, 加工された礫1	57
13住	23	9	1	1	2	3		1	1	1				1	3	加工された剥片1	47
計	97・1?	74・1?	4	7	11	35	1	4	3	13・1?	7	0	1	3	5	9	277

第1表 ARB縄文時代中期後半から終末の住居址出土石器一覧表

打製石斧とし、刃部を研磨して鋭く作出するものについては磨製石斧の部類として扱った。

石材は、緑色片岩が59点（60.8%）と最も多く、次いで硬砂岩32点（33.0%）、他に珪質片岩3点・輝緑凝灰岩2点・粘板岩1点がある。

遺存状態は、半数以上が欠損品である。挿図4のように遺存部位別にみると、

- a（46点）、b（20点）、b'（5点）、c（15点）、
- c'（4点）、d（5点）、e（2点）

となり、基部と刃部の比率はほぼ同じである。

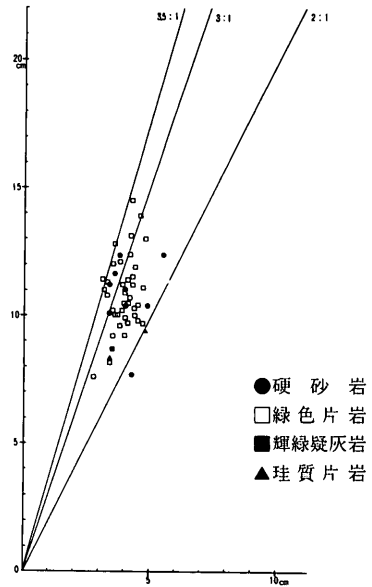
使用痕のうち、打製石斧の用途を最もよく示すのは、刃部にみられる土擦れ状の磨滅痕である。住居址出土品中55点に認められ、刃部をもつのに磨滅しないものは12点に過ぎない。器体の半分近くまで顕著に残るものから刃縁や刃部の稜部が丸くなるものまで程度は様々である。磨滅部分に残る線状痕の方向は器体のほぼ長軸方向に一致し、この石器が対象物である土に真直ぐに突き刺さる運動を行なったことを示している。さらに両面を比較すると、片面がより顕著に磨滅する傾向があり、土に著しく接触する面とやや少ない面があったことを示している。また、器体の両端にあるものが完形品46点中9点（19.6%）あり注意しなければならない。従来からいわれるように鉞や鋤あるいは掘棒としての着柄方法を想定するならば、使用途中で磨耗した刃部と基部とを逆転させて着柄し再び使用したと考えられる。刃部には磨滅痕のみでなく、それを切る新しい剝離痕の認められるもの（220—8～13など）があり、磨耗と同時に剝離による損耗も大きいことを示している。これは実験によっても確かめられ、当然ながら対象となる土地に礫が混じる程その度合いは高い。

転用品には、215—2と230—23がある。ともに磨製石斧からの転用で、前者には敲打面、後者は研磨面を残している。

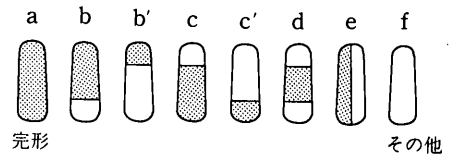
② 横刃型石器

横長剥片の鋭い長辺を刃部とした石器である。打製石斧と並んで該期の基本的な石器で、住居址からは計74点が出土している。

形態は、自然礫から割取した礫表皮剥片の鋭く外湾ぎみの縁辺を刃部とし、調整をあまり加えずに剥片の形状を活かしたものが主体を占める点に大きな特徴が認められる。したがって、この石器の形態は素材剥片の形状に大きく左右されているといえよう。そこで、ここでは素材剥片の性



第2表 打製石斧の長さ と 幅



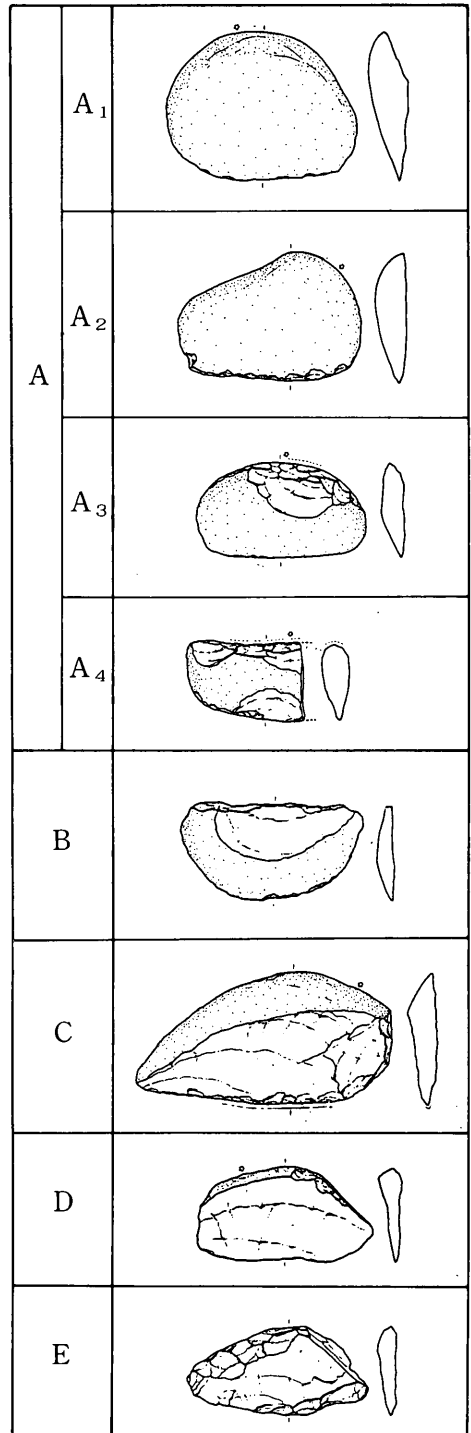
挿図4 打製石斧の遺存部位模式図

質と形態に注目して分類を行なった。

なお、以下分類を述べるにあたって、硬砂岩の扁平円礫をモデルに素材剥片を模式化すると、挿図 5 のように示すことができる。これについてはⅦにおいて述べるが、この模式化された素材剥片 a ~ f を以下の分類に適用していきたい。

A類 片面に自然面を大きく残す礫表皮の剥片を用いたもの。扁平の円形ないしは楕円形の自然礫を原材とし、その側縁部に打撃を加えて割取したもので、打撃点側がやや肥厚するのに対し、その反対側は自然面と主要剥離面からなる鋭くかつ外湾した縁辺をもち、これを刃部としている。素材剥片aに該当し、一部、素材剥片bのうち古い剥離面が小さく剥片の形状にあまり影響をもたないもの(211-8・10・、219-7)を含めた。A類は、調整のあり方によって、第二次調整をもたないもの・刃部調整のみもつもの・背部調整のみもつもの・刃部調整と背部調整の両方をもつものがある。これをそれぞれA₁類からA₄類とする。

A₁類(211-7・9など)は、単なる剥片と識別し難いものも多いが、刃部に刃こぼれ状の小剥離痕や磨滅痕が観察されたり、大きさ・形態も手頃で刃縁の整うものを認定した。A₂類(212-21、215-9・12など)は、刃縁を軽く整える程度の調整で、刃部を大きく改良しようとする意図は希薄とみてよい。221-1は、「く」の字形に中央で屈折する刃部を作出するもので例外である。A₃類は、持ち易さ、使い易さを意図したのであろう。調整には剥離調整や潰しをもつもの(212-21、215-9・12、218-7など)や割断したもの(215-17、221-2)がある。A₄類は、よく調整されて細長なもの(217-22・23)と粗雑な調整で不整形なもの(218-4、219-11)がある。



挿図 5 横刃型石器の分類図

B類 片面の刃部側に自然面を残し、背部側には古い剥離面を広くもつもの。A類と同様の原材から連続的に割取されたもので、刃部となる縁辺は自然面と主要剥離面からなり、緩く外湾する。素材剥片bに該当する。214-7は背部を切断し、221-3は刃部調整をもち、ともに細長である。

C類 片面の背部側に自然面を残し、刃部側には古い剥離面をもつもの。B類と同様に連続的に割取された剥片で、刃部は古い剥離面と主要剥離面からなり、刃縁は213-3を除いて直線のかやや内湾ぎみである。素材剥片Cに該当する。調整をもたないもの(213-2・3、221-4)、刃部調整をもつもの(215-19)、背部調整をもつもの(213-1)がある。

D類 打撃点側の背縁にだけ自然面をもつもの。半割になった原石の側縁に残る自然面に打撃を加えて割取したもので、両面は古い剥離面と主要剥離面からなり、刃部となる縁辺は直線のかやや内湾ぎみである。素材剥片d・eに該当する。調整をもたないもの(213-4・5)と背部調整をもつもの(215-20・21)がある。

E類 自然面を全く残さないもの。連続的な割取を繰り返す中で得られたもので、素材剥片fに該当する。背部調整をもつもの(213-6、215-22)、刃部調整と背部調整の両方をもつもの(221-5)がある。

以上、5つの分類を住居址出土石器についてみると、A類58点(A₁類29点・A₂類8点・A₃類15点・A₄類4点・不明2点)・B類2点・C類6点・D類5点・E類3点で、A類が圧倒的に多く77.3%を占め、中でもA₁類とA₃類が卓越している。

石材は、硬砂岩が多く44点58.7%を占め、他に緑色片岩11点(14.7%)、珪質片岩1点がある。

使用痕としては、磨滅痕と刃こぼれ状の小剥離痕が観察される。磨滅痕は刃縁に集中するものが多く、特に215-11・19は顕著である。遺構外出土の229-8は、両側縁にあたる短辺が磨滅しており刃部が長辺に限られなかったことを示しているが、ここにみられる線状痕は刃縁に直交し、他とは異なった使用方法が推測される。215-12は、背縁に磨滅痕があり手擦れと考えられる。また211-9は、主要剥離面側がほぼ全面にわたって著しく磨滅している。この他、刃部に小さな剥離痕が連続的に認められるもの(211-7、212-16、218-5、219-8)があり、使用時の刃こぼれと思われる。

横刃型石器の機能は、鋭い刃部による切断であり、用途は植物質食料の採集・収穫と思われる。

③ 大型粗製石匙

刃部の一端につまみ部を作出した石器である。住居址からは計4点が出土している。

いずれも薄手の素材剥片のもつ鋭い縁辺を刃部とし、一端に刃部と平行したつまみ部を持つ。刃部には、ごく緩い外湾刃(216-2)・直線刃(214-8、224-7)・内湾刃(221-6)がある。使用痕としては、すべてに刃こぼれ状の小剥離痕が認められ、特に224-7は、刃こぼれで内湾ぎみに消耗している。また、つまみ部の縁辺には磨滅による凹が2箇所認められ、つまみ部を柄に挟んで緊縛したために生じた紐擦れと考えられる。

石材は、硬砂岩 1 点・緑色片岩 2 点・輝緑岩 1 点である。

これらの石器は、「鎌形石器」(小林1977)に相当し、植物質食料の採集ないしは収穫に使用されたと考えられる。

この他に、遺構外出土の229-18は、三角形の刃部の底辺中央に小さなつまみ部を作出し、スcoop状をなす。また、TAN・KURの45-1は、刃部と直角につまみ部を作出する点が先の4点と異なり、刃部は素材剥片の鋭い縁辺を利用した大型粗製石匙である。石材は、ともに硬砂岩である。

④ 磨製石斧

住居址からは、完成品 3 点、未成品 8 点、完成・未成不明品 1 点、再調整の途中品 1 点が出土している。

まず完成品についてみると、打製石斧の刃部と両側縁のみ研磨した、いわゆる局部磨製石斧(211-11)・乳棒状磨製石斧(213-7)・定角式磨製石斧(214-10)がある。なお、遺構外で確実に該期と思われるものについても触れると、ノミ形磨製石斧(230-5・6)・定角式磨製石斧(230-7~9・12)・乳棒状磨製石斧(230-15・21)・局部磨製石斧(230-13・14)、それに蛤刃をもつ大型石斧で両面に自然面を広く残すもの——大型局部磨製石斧(230-17・18・20)がある。

完成品は住居址と遺構外の出土品を通じてほとんどが破損している。このうち、再調整して再生を図るもの(211-12、230-22)や打製石斧への転用品(215-2、230-23)もみられる。

石材は、輝緑凝灰岩が多く用いられている。

次に未成品についてみると、214-9は、ノミ形磨製石斧の研磨途中の未成品である。この他はすべて乳棒状磨製石斧ないしは大型局部磨製石斧の未成品で、遺構外にも多く、大型の磨製石斧の製作が集落内で行なわれたことを物語っている。

その製作工程は、まず手頃な自然礫を剥離調整し(231-8)、次に敲打調整に入り、敲打が側縁部に限られる段階(214-11、216-7、221-9、231-4)から、敲打が面的に広がって剥離面や自然面に及ぶ段階(216-8、221-7・8、231-5・6)、そして、剥離面がなくなり(231-3)、自然面が一部に残るものの横断面も楕円形になって乳棒状石斧の形状が整いつつある段階(224-9、231-1・2)がある。以上の段階は、粗割→剥離調整→敲打→研磨の4段階の製作工程(鈴木1985)のうちの粗割と敲打の段階に相当する。

粗割から敲打の製作工程が集落内で行なわれたことは、後に述べる多量の敲打器の存在からも首肯される。これに対して、研磨途上のものがないのは、砥石の少ないことと合わせて注意されよう。なお、未成品の大半は破損し、特に敲打段階において製作失敗が多かったことを示している。

⑤ 敲打器

作業痕と思われる敲打痕や剥離痕をもつ石器である。住居址からは計35点が出土している。12号住居址は17点と特に多く、打製石斧をも上回るのには注意されよう。

敲打器は、使用された自然礫の形状と作業部位から大きく4つに分類した。

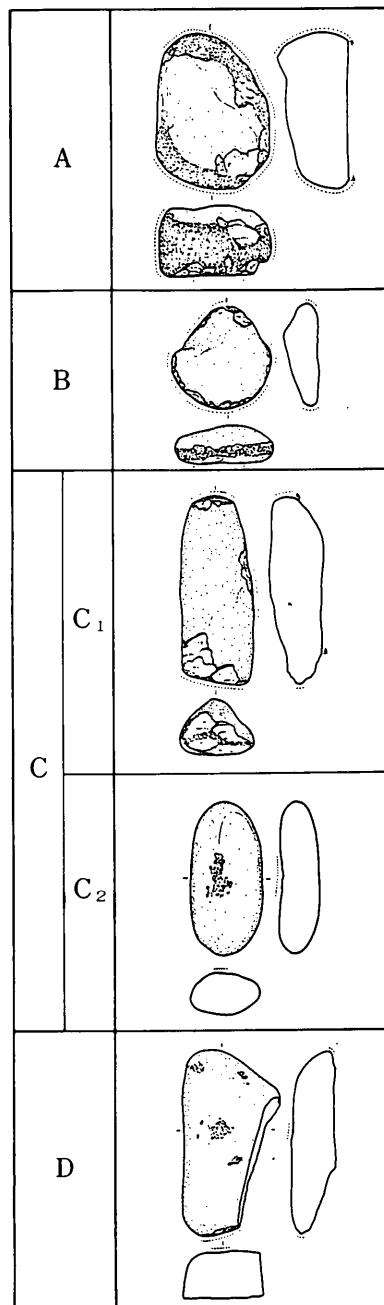
A類 厚手で重量のある自然礫の周縁部を中心に敲打痕をもつもの。手で握るには手頃な大きさである。若干扁平ぎみのもの(213-9、219-14、221-10~12、232-4・6)と塊状のもの(222-1・2、232-1~3・5)があつて、前者は敲打痕が周縁に集中し、後者は他の稜部にも広がる傾向がみられ、使用部位の面積は作業量に比例すると思われる。敲打部は、232-1・4のように小さな平坦面が組み合わさったように連続するものも多く、順次、握りかえては同一角度で敲打作業を繰り返したのであろう。重量は、400~600gと300g前後に集中しており、大小2つに分けられる可能性がある。石材は、非常に硬質の輝緑凝灰岩を用いている。

B類 小形で扁平な自然礫の周縁に敲打痕や剝離痕をもつもの(213-10~14、214-13、232-7~14)など。使用部位は、全周縁に及ぶものと部分的なものがあり、後者では鋭角な縁部に集中する傾向がみられる。重量は、29~230gである。石材は、輝緑凝灰岩と硬砂岩、さらに少数であるが珪質片岩があり、後二者には剝離痕が複数認められるものが多い。

C類 棒状の自然礫を用いたもの。端部に敲打痕や剝離痕が集中するもの(218-11、219-5)と、側面に軽い敲打痕をもつもの(211-14、224-11)があり、それぞれC₁類、C₂類としておく。C₁類に比べてC₂類は軽量であり、両者には当然、把握方法や運動方向、そして対象物の違いが推測される。石材は、ともに硬砂岩と輝緑凝灰岩である。

D類 A~C類以外の不定形なものを一括した(222-8、224-10)。

敲打器は多用途に使用されたであろうが、A類については、硬質で重量をもつ石材の使用とその激しい作業痕から敲打対象物もまた硬質な石材であったと思われる。先に述べた大型の磨製石斧未成品との関連から、この石器はその製作工具であったと考えられる。B類も石器製作工具の可能性が高く、手先につまんで細かな調整に使用したものと思われる。C・D類は石器製作工具には適さず、他の用途を考えたい。



挿図6 敲打器の分類図

⑥ 砥石

住居址出土は12号住居址の1点(222-15)のみである。粗粒の片麻岩の表裏に若干凸の砥面をもつ据置型である。

先に述べたように、磨製石斧の未成品や敲打器の存在から、集落内で磨製石斧の製作が行なわれたと推測されるが、最終工程に必要な大形の砥石がなく、222-15では大型磨製石斧の研磨には小さくて不向きといえる。したがって、この研磨工程の場は集落外に求められよう。⁽³⁾

⑦ 磨石・凹石

円礫の表面に磨面や凹をもつ石器である。住居址から5点が出土している。石材は、花崗岩が多く、硬砂岩も用いられているが、前者はその石質から風化が進んで石器の認定が困難な場合が多く、211-16・17は形状から判断したものである。211-16は、浅い凹をもっている。244-14は、磨面の中央に小さな凹をもち、218-12は、自然面の中央に凹をもっている。216-10は、重量があり片手での把握は無理であるが、一頂部に凹状のダメージをもっている。

⑧ 石皿

石皿は、住居址から3点が出土している。凹の深いもの(211-18)と浅いもの(224-16)、さらにほとんど凹をもたないもの(214-15)がある。石材は、扁平な花崗岩が用いられている。

⑨ 礫器

3号住居址出土の両面礫器1点(213-15)がある。扁平な自然礫の一辺に両面調整を施して分厚い両刃を作出し、両側縁は表裏の自然面に垂直方向の打撃を加えて直角に打割するのが特徴的である。刃部の一部は潰れており、使用痕とも考えられる。石材は、輝緑凝灰岩である。

⑩ 敲打製石器

3号住居址の213-8は、上端面を除いて全面が敲打調整されている。横断面は方形を呈し、縦断面の下端はやや細くなっている。磨製石斧の未成品とは明らかに異なり、その性格は不明である。石材は、輝緑凝灰岩である。

⑪ 石錘

自然礫の両端を打ち欠いて紐掛部を作出した、いわゆる礫石錘である。住居址からは13点、遺構外では50点近くが出土している。

形態は、長軸方向の両端を打ち欠くのを基本形とし、さらに短軸方向を加工するもの(211-15、222-11、224-13)がある。また214-14は、片側の礫面を完全に剥ぎ取って薄く仕上げ、短軸方向にも抉りを入れた特殊な形態をなす。重量は、6～123gと変化が大きく、重量差による用途の使い分けが想定される。石材は、硬砂岩が最も多く、緑色片岩・粘板岩などがある。

なお、他地籍の出土量は極めて少なく、切目石錘や有溝石錘は皆無である。

⑫ 打製石鏃

住居址6軒から7点が出土しており、石器組成中に占める割合は小さい。

形態は、無茎凹基鏃4点(225-4・5・10・11)、無茎平基鏃1点(225-3)、円基鏃2点(225-6・9)があり、形態的にも多様である。石材は、すべて黒曜石である。

⑬ 石匙

2号住居址から出土した1点(225-1)がある。左右対照の横型石匙で、刃部は片側から調整され、刃角60°の片刃をなす。石材はチャートである。

⑭ 石錐

住居址3軒から1点ずつ出土している。剥片の一端に錐部を作出し無調整のつまみ部をもつもの(225-2)、わずかに抉りを入れて錐部とつまみ部を区別するもの(225-8)、つまみ部をもたないもの(225-13)がある。225-8は、錐部先端が磨滅しており、225-13は、欠損している。石材は黒曜石である。

⑮ 使用痕のある剥片

一辺に細かな剥離痕や磨滅痕をもつ剥片である。住居址から5点が出土している。剥離痕には鋭い縁辺に残る微細なもの(225-12・15)と片面に発達してギザギザの縁辺を形成するもの(225-14・16)とがあり、225-17は、縁辺が潰れて白くなっている。石材は黒曜石とチャートである。

⑯ その他

上記以外に、完成された石器であるが器種不明のものや、使用痕や加工をもつ剥片・礫がある。看過されることも多いが、注意すべきものといえる。主なものについて述べる。214-12は、緑色片岩の薄手の剥片を素材としたもので、細長で両端はやや尖っている。側縁と上端は磨滅痕が顕著で、かなりの使用量を示す。216-5は、硬砂岩の薄手剥片に両面調整を施している。側縁の下端が若干磨滅しているが、使用痕が明らかでない。218-13は、輝緑凝灰岩で、三角形を呈し、上端に敲打痕をもつ。224-15は、安山岩の剥片に調整を加えている。打製石斧などの未成品の可能性もある。

(桜井弘人)

註

- (1) 同形態の五角形鏃は、塩屋式を伴う宮の原遺跡(林他1977)やカゴ田遺跡(友野他1978)でも類例がみられる。
- (2) 宮下健司氏の御教示による。この時期に器体の一部につまみ部を作出する石器の出現がみられるという。
- (3) 磨製石斧製作址として著名な神奈川県尾崎遺跡では、多量の磨製石斧未成品に比べて砥石が少なく、本格的な研磨作業は集落内で行わずに水の豊富な河原などで行なうと推定されている(鈴木他1977)。本遺跡もその東側を流れる南大島川の河原に主たる研磨作業の場を求めたと考えられる。

3 土製品

A R Bから土偶6点、土製円板10点が出土しており、いずれも出土遺構の時期・文様などから中期後半から終末に位置づけられるものである。

1) 土 偶

3号住居址(234—1)、8号住居址(234—3)、10号住居址(234—4)、遺構外(234—2・5・6)の6点が出土したが、いずれも胴部分である。

1・3は小形品で、文様を施さない素朴なものである。1は臀部のはり出す直上部の破片で、全体形はかなり小さいと推測される。

3は四肢と頭部を欠く。胴部は偏平の柱状で臀部のはり出す。胸部の表現は認められず、その直下以下が残存したと考えられる。

2～6は、いずれも沈線もしくは押し引きによる文様を前面・背面ともに施す。

2は、胴上半部分で胸部から上を欠く。前面は中央に垂下する隆帯を付け、その左右は対称にコの字を連続した沈線を施す。背面は、上端中央に渦状沈線の端部があり、その両側は上方に開く2本の押し引き文を施すが、右側はうち1本が終結し1本のみとなる。

4は、臀部の左側破片である。前面は渦状の押印を施し、側面にもその延長が至る。背部は側縁部に1本の押し引きが残る。

5は胴上半部分である。前面は上端に胸部があり、その下側中央部に隆帯が垂下する。隆帯の両側は左右非対称の押印を渦状に施し、背面まで至る。また、残存部上端に4本の押し引きがある。背面は中央部に押し引きを垂下させ、端部を渦状に終結させる。その両側は3本の押印を施している。

6は、臀部以下を欠く胴部分である。胸部下の胴中央にわずかな隆帯を垂下させる。残存部下端に弧状の沈線を施す。背面は頭部下に渦文の退化と考えられる沈線を、腰部付近に2本の沈線を施す。

なお、2・4・6は欠損部断面に、製作時の他部位と接続補強する棒の痕跡である穴を認める。

2) 土製円板

3号住居址(234—7)、6号住居址(234—8)、8号住居址(234—9)、12号住居址(234—10・11)遺構外(234—12～16)の10点が出土している。

いずれも土器片を打ち欠き、その端部を磨いて仕上げている。径は1.6～6cmと様々である。

7は隆帯、12・15は沈線、9・11・13は縄文と隆帯、10は縄文、8・14・16は無文と表面の文様は様々で原器形は一定でない。若干湾曲するものもあるが、偏平であることを基本とすると考えられる。

(小林正春)

Ⅳ 弥生時代から古墳時代前期の遺物

1 土 器

1) 土器の製作

Ⅱで詳しく触れることができなかつた手法上の問題について考え、記述を進める中で本編で用いる用語を明らかにしたい。

(1) 成形

素地の粘土からおおよその形にする段階をいう。佐原真氏は、成形をロクロ法・非ロクロ法に分け、後者を手づくね・粘土帯積上法・型起こし法に分類している（佐原1979）。本遺跡群ではほとんどが粘土帯積上法で作られていて、わずかに手づくねがみられるだけである。

(2) 調整

成形によっておおよその形が整えられた土器に工具等を使用して仕上げる段階をいう。器面で観察できるのはこの段階からである。⁽¹⁾調整の用語は、『紫雲出』（小林・佐原1964）で用いられたものを基本としたが、多少表現方法等が異なっている。以下で本編に用いた用語について説明を加える。

ナデ 指・布・筥などを使用してなでることによって器面を平滑にする行為で、わずかに細かい条線が付いたりしていることから判別できる。ほぼ全器種の全面にわたり施されるが、外面については調整の最初の段階で用いられ、その後他の調整が施されることが多い。内面ではナデのままですれ以上の調整を行わないものや、外面でもハケの後最終的な仕上げの段階で用いられるものがある。原体を特定することは困難であるが、指紋や布痕が残っていて、それらが使われたと判断できる場合がわずかにみられる。

⁽²⁾**ハケ** 木の板を使用してなでることによって器面を平滑にする行為で、平行線が付くことで判別できる。横山浩一氏の実験によって、木の板を使って施されたことが証明され（横山1978）、様々のタイプがある。基点だけでほとんど平行線の付かないもの、細かな平行線が付くもの、はっきりした平行線が付くものなどで、原体の材質の違いによるものである。これらを区別する方法（植田他1982）もみられるが、本編では採用しなかつた。ナデの後、器面内・外面に施されることが多い。外面の方向は縦方向が主体となるが横方向等もみられるのに対し、内面はほとんどが横方向である。特に古墳時代前期に盛行する調整法である。

タタキ 木の板を羽子板状にしそこに線刻を施したものを使用して器面を叩く行為で、外面に深い平行した溝が付くことで判別できる。本遺跡群では、わずかな個体にみられるのみで、主体的な調整法ではない。

ヘラケズリ 先端の幅広い篋状工具を使用して器面を削り取る行為で、多孔性が増す効果が得られる。胎土中に含まれる小石粒が移動することで判別できる。篋の原体は小石粒が移動することからある程度鋭いものが想定でき、金属等が考えられる。壺・甕の胴部外面や甕の胴部内面と高坏・器台の脚部内面に認められるが、タタキと同様、本遺跡群では主体的な調整法ではない。

ヘラミガキ 先端の幅が5 mm以下程度で表面が滑らかな篋状工具等を使用して器面をなでつける行為で、多孔性を減らす効果が得られる。小石粒が沈んで表面に光沢を持ち、わずかに細い線が観察されることで判別できる。篋の原体は丸石・骨・竹などが想定されている（佐原1976）。ナデ・ハケの後、調整の最終段階で行なわれる。壺の口縁部内・外面や胴部外面、甕・鉢の内・外面、高坏や器台の脚部内面以外の部分などに普遍的にみられ、本遺跡群の主体的な調整法であり、弥生時代中期から通してある。

ヨコナデ 仕上げの最後の段階で湿らせた布などを使用して横方向に一気になでつける行為で、そのために終点が観察できるものがある。横方向に細かい条線が付くことから判別できる。ほとんどの器種の口縁部や高坏・器台の脚部端部にみられる。底部付近にみられるとの報告（小林・佐原1964）もあるが、本遺跡群では、底部付近で確実にヨコナデが行なわれていると観察できたものはない。

シボリ 外面から手などでおさえつけることによって生ずる。内面に細かいシワが生ずることによって判別できる。高坏の脚部や壺の頸部などにみられる。

底部 底部の調整には、木葉・網代・布・ワラ・板などの圧痕が付くもの、ナデやヘラミガキ等が行なわれるもの、調整等の痕跡がみられないものがある。圧痕が付くものは、それぞれに木葉痕・網代痕・布痕・ワラ痕・板痕等の用語を用いた。他に、底部は形態によって、平底・丸底・⁽³⁾あげ底の用語も併用した。

弥生時代中期の場合、底部調整を後述する文様の分類の中に含めた。そちらも参照していただきたい。

(3) 文様

本遺跡群の文様は施文方法によって大きく4つに分類できる。

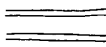
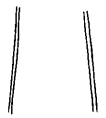










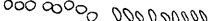





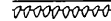
- 1 沈文 施文原体を器面に当てて、突き刺したり移動させたりする（描く）ことによって、文様が得られるもの。
- 2 縄文 縄を器面にころがすことによって、文様が得られるもの。
- 3 浮文⁽⁴⁾ 形を作った粘土を器面にはりつけることによって、文様が得られるもの。
- 4 その他の文様 1～3の範疇に含まれないものすべてを含める。

① 沈文

沈文は、施文原体に
 篋状工具・櫛状工具を
 用い、まれに竹や貝殻
 などが使われる。それ
 ぞれに施文具から篋描
 文・櫛描文・竹管文・
 貝殻文の名称を用い、
 他に凹線文がある。
 個々について説明を加
 えたい。

篋描文 施文原体
 は、先端を尖らせたも
 のと、先端がやや幅広
 い板状のものが想定さ
 れる。前者は先が1本
 のものと、2本に分か
 れるものがある。後者
 は櫛状工具と区分がや
 や困難であるが、文様
 の太さより離れて沈線
 が付くものを篋状工
 具、密接して平行線が
 付くものを櫛状工具と
 理解した。原体は骨・
 棒・板・竹・金属など
 を想定できる。先端が
 1本のを篋I、2
 本に分かれるものを篋
 II、板状のものを篋III
 と区分する。

施文方法は、描く・
 突き刺す・刻むの3種
 類がある。これらの動

文 様	原 体	方 法	名 称
	篋 I	描く	横 線 文
	篋 I	描く	縦 線 文
	篋 I	描く	斜 線 文
	篋 I	描く	波 状 文
	篋 II	描く	波 状 文
	篋 II	描く	押し引き文
	篋 I	描く	鋸 歯 文
	篋 I	描く	連 弧 文
	篋 I	描く	連続山形文
	篋 I	描く	コ の 字 重 ね 文
	篋 I	描く	短 線 文
	篋 I	描く	羽 状 文
	篋 I	突き刺す	列 点 文
	篋 II	突き刺す	列 点 文
	篋 I	刻む	刻 目 文
	篋 III	突き刺す	刺 突 文
	篋 III	突き刺す	鋸歯刺突文
	篋 III	突き刺す	羽状刺突文
	篋 III	刻む	刻 目 文

挿図 7 篋描文文様要素図









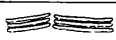





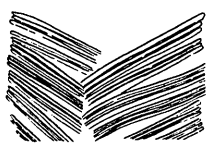


作と原体の違いが組み合わせることによって篋描文の文様要素となり、本遺跡群では主に挿図7で示した16種類がある。

櫛描文 施文原体は、先が2本以上に分かれた板もしくは棒状のものを束ねたものが想定できる。篋との区分は、2本でも密接して平行線が付くものを櫛と理解した。篋描文の原体のように施文原体の区分をすることはできなかった。施文方法には描く・突き刺すの2種類があり、それぞれの違いによって、文様要素は挿図8で示した16種類が考えられる。

竹管文 施文原体は竹の切り口を使い、それを器面に突き刺すことによって文様が得られる。原体は直径13mmくらいの太いものと、直径3mm以下の細いものの2種類がある。いずれも本遺跡群ではわずかにみられるだけである。

貝殻文 貝の腹縁を施文原体として、それを器面に押しつけることによって文様が得られる。確実にそれと断言できるものは59-22の連弧文だけである。

凹線文 佐原真氏によると、ヨコナデに使う布を折り曲げて、これを回転している土器面に当てることによって施したもの（小林・佐原1964）とされている。弥生時代後期から古墳時代前期土器分類壺B,bの口縁部外面のみにみられる。

文 様	方 法	名 称	文 様	方 法	名 称
	描く	横 線 文		描く	連続山形文
	描く	縦 線 文		描く	鋸 歯 文
	描く	斜 線 文		描く	短 線 文
	描く	波 状 文		描く	斜走短線文
				描く	横走短線文
				描く	¼円弧文
	描く	簾 状 文		描く	羽 状 文
	描く	斜走条線文		突き刺す	列 点 文
	描く	羽状条線文		突き刺す	刺 突 文
				突き刺す	羽状刺突文

挿図8 櫛描文文様要素図

② 縄文

縄の撚りによって、LR・RL・Lr・Rlの4種類がある。弥生時代中期の口唇部に単独で、それ以外の部位には篋描文の地文として施されることが多い。

③ 浮文

はりつける粘土の形で円形のものと同棒状にしたものがあり、円形浮文と同棒状浮文と呼ぶ。

円形浮文 円形の粘土をはりつけただけのもの、中央部に篋状工具で刺突するもの、細い棒(篋)状工具で何箇所も刺突するもの、竹管文を付すものの4種類がある。

棒状浮文 棒状にした粘土をはりつけたのみのもの、それに篋描刻目文を施すものの2種類があり、2本で一对になることが多く、口縁部に3・4箇所貼付される。

④ その他の文様

丹彩と同暗文がある。

丹彩 化学分析を行なって確定したわけではないが、酸化第二鉄いわゆる丹が使われていると考えられるので、丹彩とした。弥生時代中期に多く、器面全体に施すもの、部分的な文様としたものの二者があり、器形によって決定する。前者には、内・外面全体に施される鉢と同外面と同口縁部内面に施される壺があり、底部のみでも内面の丹彩の有無で器種判断の材料となった。

暗文 ヘラミガキの線で文様を描くもの(小林・佐原1964)。古墳時代前期からみられるようになるが、量的には少ない。

それぞれの文様については、土器の編年を行なった後に再度考えてみたい。(山下誠一)

2) 弥生時代前期

当地方該期の実体は、断片的資料があるのみで、縄文時代晩期終末との関連が不明確で、編年の位置づけも不明確という実状である。今次調査により、ごく少量該期資料が出土した。GOA湿原地帯内出土の広口壺(63-28)は、頸部に2~3段の突帯を持つ。器面は赤色を呈し、研磨され、断面は黒色で、胎土中に小石粒を含む。胎土等から東海以西との関連が考えられる。また、TAN・KUR方形周溝墓3周辺にも、突帯に刻みのある該期と考えられる粗雑な破片(22-6)がある。

該期と抽出できる資料は少ないが、各地籍出土の縄文時代晩期とした条痕文土器片の中に、該期に位置づくものが含まれる可能性もある。(小林正春)

3) 土器の分類

(1) 基本姿勢

弥生時代中期と同弥生時代後期から古墳時代前期の2時期に分けて行なった。

本遺跡群から出土した該期土器は多種・多様・多量であると概括されるが、それぞれの時代相をより具体的に示すために、それらを細分して把えることとする。

本来、分類とはそれを行なうことにより何を導き出すのかという目的がなければ無意味となる。かつ、その作業にあたり、一定の基準がなければその目的を果たすことは不可能である。

本編の土器分類の目的としては、時間的様相及び地域的様相を抽出し、本遺跡群の各時代様相全体把握の一材料とすることであり、さらに地域における時間的尺度である土器編年の確立を導き、かつ、各時代における他地域との交流理解の材料とするものである。

そこで、われわれが分類を行なう上での基本姿勢を明らかにしておく。土器は製作者が用途に沿った意図を持って作るものであり、用途が形態を決定する最大の要素といえる。

用途には、貯蔵する・煮沸する・供献ないしは祭祀に供する・食器となるなどが考えられ（中村1984）、それぞれに、壺（貯蔵形態）、甕・甑（煮沸形態）、高坏・小型土器（供献形態）、鉢・坏（供膳形態）などがある。こうした用途別に一まとめにくくり、この段階を器種とする。それぞれの器種は形態の差異により細分し、この段階を器形とする。中には、壺の形態でもススが付着して明らかに煮沸用具として利用されたと考えられるものがあるが、こうしたものは形態から分類した。⁽⁶⁾

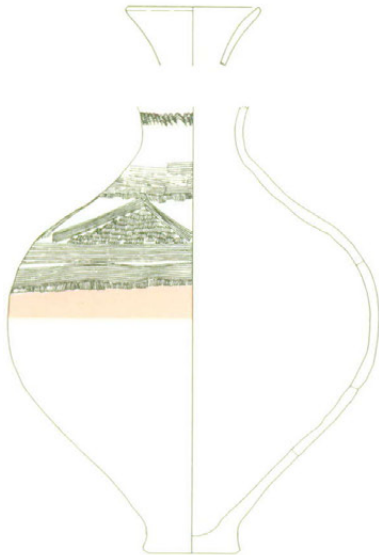
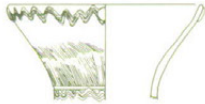
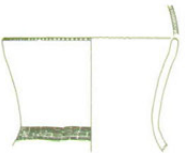
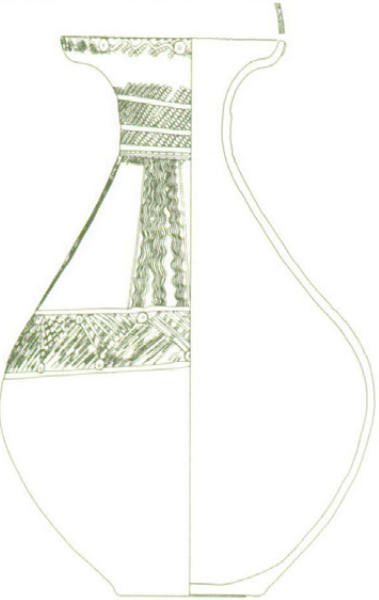

文字や数字を組み合わせることで器形が明らかになるように考えた。アルファベットの大文字は器種の内の大分類として大きな形態差を示し、口縁部形態を主体に全体形の差異も勘案した。算用数字は同一器形内における細部の差異により細分する場合に用いた。アルファベットの小文字は同一器形内の文様あるいは調整の違いを表わし、それぞれの器形によって着目点が違ってくる。しかし、一部に形態の差異を表わしているものもある。⁽⁷⁾ アラビア数字は大きさを表わし、器形によって細分できる場合に用いた。順序は、器種・器形・法量・器形の小さな差異・手法の順である。たとえば、甕AI₁aは、煮沸形態の甕で、Aという形をもった、Iの法量を持ち、1の細分による形をし、aという手法を持った土器を表わしている。当然、器種や器形によって細分できないものもあり、各項を満たさないものもある。一部、以上の分類に当てはまらないものもみられ、逆に特筆されるべきものともいえる。

結局、以上分類可能なもの・不可能なものを総合して、各時代の様相を示すものといえる。

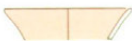


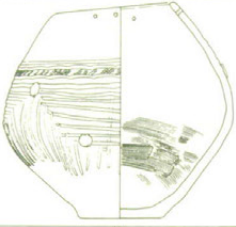

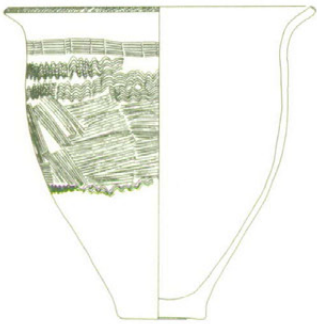
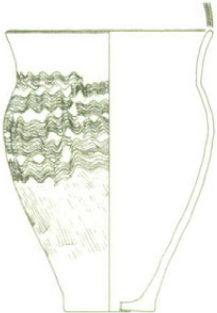
(2) 弥生時代中期

器種は、壺・甕・鉢・高坏⁽⁸⁾・注口土器・手づくねがあり、壺A～E・甕A～D・鉢A～Dに細分した（挿図9～12参照）。

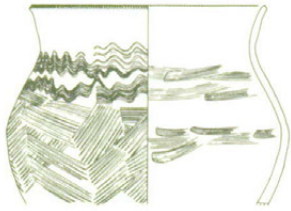

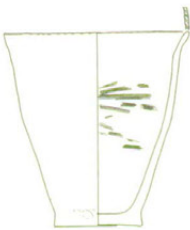
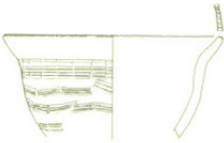

壺の場合、口縁部資料が少なく頸部以下の個体が大半を占めるため、既出や本遺跡群の完形資料を参考にして、口縁部形態を推定して分類を行なった。そのため、多分に問題を残し批判を受けるかもしれないが、従来から資料不足の時期でもあり、こうした作業も必要と考え、あえて行なった。今後、資料蓄積が進む中で修正していくべきものと考ええる。

壺	A ₁		<p>口縁部が単純に外反するもの。文様は頸部から胴上部にかけて施され、一部には無文のものもみられる。 器高40cm前後の大型品と20cm前後の中型品があり、前者が圧倒的に多い。</p>		<p>細い頸部から短くラッパ状に開く口縁部を持つもの。胴部はほぼ中央部に最大径を持ち、丸味を帯びたソロバン玉状を呈するものと、横に広がり丸味を帯びるものがある。 口縁部形態で細分した。</p>
	A ₂		a . 口縁部に文様を持つもの。	<p>口縁部が端部でわずかに内湾し、受け口気味になるもの。</p>	
			b . 口縁部が無文のもの。		
B		<p>a . 口縁部に文様を持つもの。</p>		<p>頸部が筒状を呈し、そこから外反し端部で内湾する受け口状口縁となるもの。胴部は中央部やや下位に最大径を持ち、無花果状を呈する。</p>	
	<p>b . 口縁部が無文のもの。</p>				





挿図9 弥生時代中期土器形態分類図(1)

	C ₁		口縁部が単純に外反するもの。	口縁部形態はA ₁ と同様でラッパ状に開き、丹彩されるもの。器高20cmくらいまでの中・小型品。
	C ₂		口縁部が端部でわずかに内湾して、受け口気味になるもの。	
	D		器高10cmくらいを呈すると思われる小型壺。全体形不明。胴下部に最大径を持ち、無花果状を呈する。	
壺	E		a. 文様を持つもの。その文様は甕Dと同様の構成である。	無頸壺。
			b. 丹彩されるもの。	
甕	A ₁		口縁部に最大径を持ち、胴上部はあまり張らずに底部に至るもの。	口縁部がゆるく外反し、頸部でくびれて底部に至り、口縁部ないし胴上部に最大径を持つもの。頸部から胴部に文様を持つ。口縁部と胴部の関係で細分した。
	A ₂		胴上部に張りを持ち、胴部最大径が口縁部と同じか、やや上回るもの。	

挿図10 弥生時代中期土器形態分類図(2)

甕	B		口縁部は直立気味になり、胴部が横に広がり最大径を持つもの。頸部から胴部に文様が施される。	
	C		口縁部が内湾して受け口状を呈し、胴上部が張らずに底部に至るもの。口縁部から胴部に文様を持つ。	
	D	a.	頸部から胴部の文様が篋描文で施されるもの。	口縁部が内湾して受け口状を呈し、胴上部に張りを持つもの。台付甕になると思われる。口縁部から胴部に文様を持つ。
		b.	頸部から胴部の文様が櫛描文で施されるもの。	
鉢	A ₁		深鉢形を呈する。	口縁部に最大径を持ち、ほとんど頸部を持たずに底部に至るもの。
	A ₂		A ₁ よりも浅い形態となり、わずかに頸部でくびれ底部に至るもの。頸部から胴部に文様を持つ。	
	B		口縁部に最大径を持ち、頸部でくびれ、胴上部に張りを持ち底部に至るもの。器高10cmくらいの小型品。	
	C	a.	丹彩されるもの。	内湾して立ち上がる碗状を呈するもの。底部は平底になると思われる。
		b.	無文のもの。	

挿図11 弥生時代中期土器形態分類図(3)

鉢	D		口縁部が水平にのび鑿口状を呈し、丹彩されるもの。あるいは高坏になるものを含むかもしれない。
注口土器			胴下部に最大径を持ち、無花果状となる。口縁部形態不明。頸部から胴上部に文様を持ち、外面と口縁部内面が丹彩される。
高坏			全体形不明。接合部のみ残存する。
手づくね			多様性に富む。丹彩される例もある。

挿図12 弥生時代中期土器形態分類図(4)

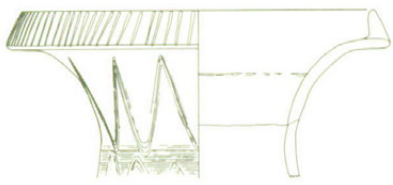
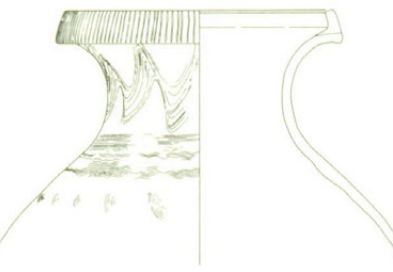
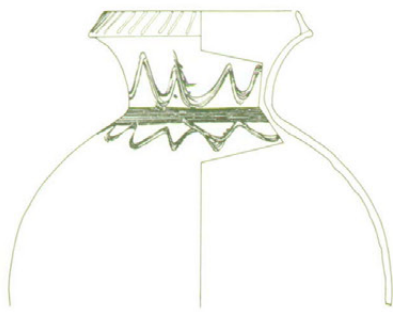

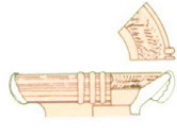

(3) 弥生時代後期から古墳時代前期

器種は、壺・甕・甗・蓋・手あぶり・高坏・器台・鉢・小型土器・手づくねがある。壺A～I、甕A～H、甗A・B、高坏A～G、器台A・B、小型土器は小型丸底(A～C)・小型壺(A～D)・小型台付甕に細分した(挿図13～25参照)。


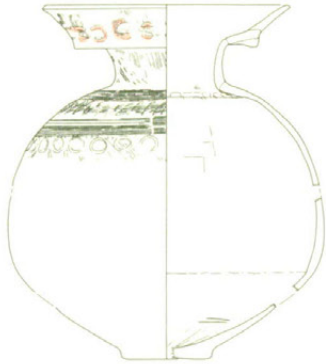
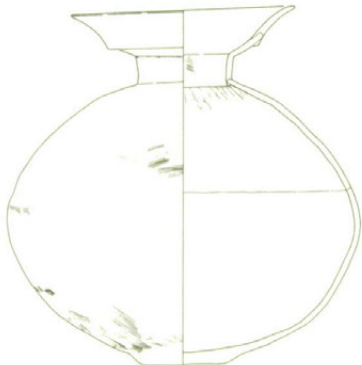
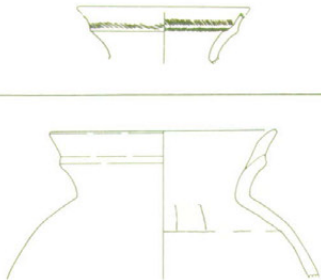
口縁部が残存する場合、ほとんどが器形を判断できるが、そのうち、甕B₂と甕D₁を区別することは困難であった。しかし、完形資料等を参考にすると、甕B₂の頸部内面に稜を持たないのに対し、甕D₁は稜を持つという傾向が看取され、前者の調整がハケで施される点とともに、器形を判断するうえでの材料とした。しかし、例外もみられ、器形を確定することは問題が多いと考えられるので、Vで述べる土器編年の標式資料には、口縁部のみで甕B₂・D₁を判断したものは、除外してある。

底部・脚台部・脚部が残存するだけのものでも大まかな器形を類推できる場合が多く、大部分の個体を分類に該当させることができた。しかし、壺の底部からは器形を推定することはできなかった。

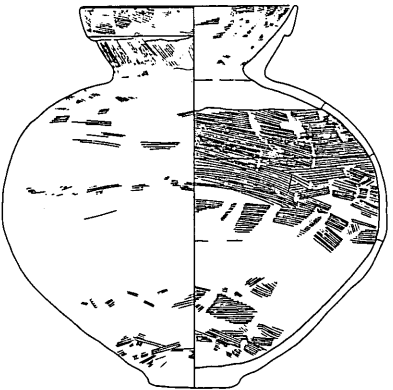
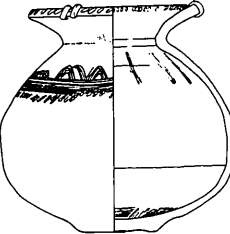
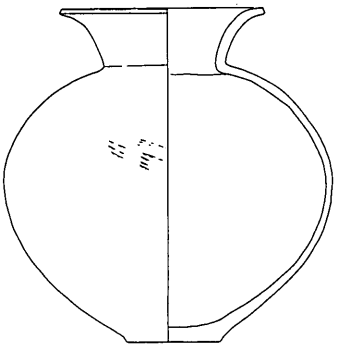

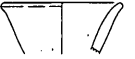
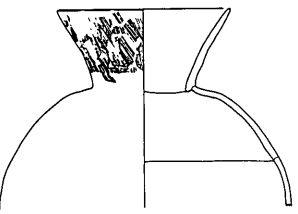
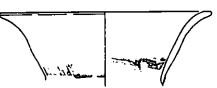
弥生時代中期・古墳時代後期から古墳時代前期とも個々の土器についての記述は省略したので、形態分類図や土器観察表等を参照していただきたい。

壺	A ₁		a. 端部が丸く または尖り 気味に仕上 げられるも の。	折立部が直 立気味にな るもの。	太い頸部から外湾 しながら外反し、 口縁端部が折立す るもの。胴部は丸 味を帯びる。 文様は、口縁折立 部に篋描刺突文、 口縁部に櫛描横線 文、胴上部に櫛描 波状文や $\frac{1}{4}$ 円弧文 等を持つ。
			b. 端部に平端 面があるも の。		
	A ₂		折立部が内傾するもの。 1と2の区分は、内傾度 が折立部の $\frac{1}{2}$ より少ない ものを1、 $\frac{1}{2}$ 以上のもの を2とする。	I…口縁部径18cm 以上の大型品。 II…口縁部径18cm 以下の中型品。	
	B ₁		a. 櫛描の波状 文・横線文や竹 管文・円型浮文 を持つもの。	断面三角形 の折り返し 部を持ち、 文様が付さ れるもの。 胴部は球形 ないしやや 下ぶくれ気 味の球形を 呈する。	折り返し口縁を持 つもの。 口縁部形態で細分 した。
			b. 外面は凹線 文と棒状浮文、 内面は篋描羽状 刺突文を持つも の。		
			c. 外面に櫛描 の羽状刺突 文・横線文・ 波状文や篋 描列点文を 持つもの。		

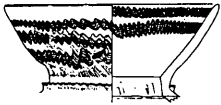


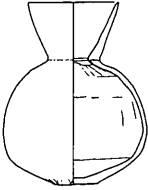

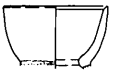
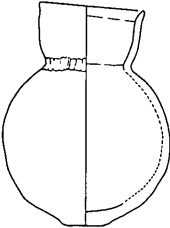
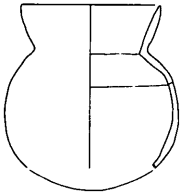
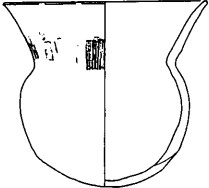
挿図13 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(1)

	B ₂		<p>口縁部が直線的ないし外湾気味に外反し、2 cm前後のうすい折り返し部を持つもの。胴部は球形を呈する。外面整形はヘラミガキ・ハケ・ナデの3種類がある。</p>	<p>折り返し口縁を持つもの。 口縁部形態で細分した。</p>	
壺	C ₁		<p>a . 文様を持つもの。外面に竹管文・楡描の横線文や波状文・篋描列点文などが施される。</p>	<p>頸部が直立し、そこから二段に外反する口縁部のもの。</p>	
			<p>b . 無文のもの。</p>	<p>胴部は球形ないしやや下ぶくれ気味の球形を呈する。</p>	<p>有段口縁を持つもの。複合口縁になるものも含めた。</p>
	C ₂		<p>a . 文様を持つもの。内・外面とも楡羽状刺突文。</p> <p>b . 無文のもの。</p>	<p>頸部から二段に外反する口縁部のもの。</p>	

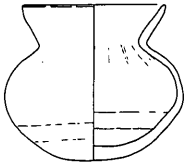
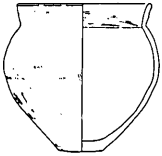
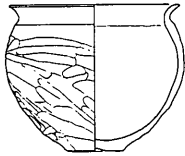
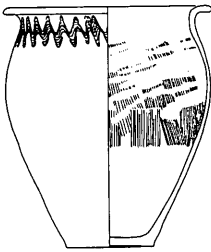
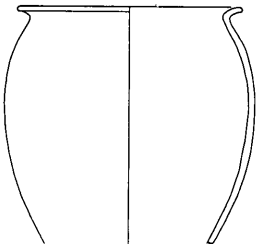
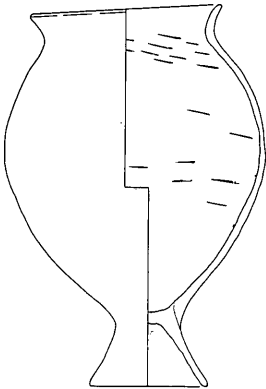
挿図14 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(2)

壺	C ₃		<p>複合口縁を持つもの。 口縁部は内湾気味に外反して複合部が付けられるものと、頸部から外湾して外反し、直線的に外反する複合部が付けられるものがある。</p>	有段口縁を持つもの。複合口縁になるものを含めた。		
	D ₁		a.	<p>文様を持つもの。外面に篋描文や柳描文、内面に篋描文が施される。</p>	外湾して外反し、端部は面取りされる口縁部のもの。胴部は球形ないし下ぶくれ気味の球形となる。	外反するやや短い口縁部を持つもの。口縁部形態により細分した。
			b.	<p>無文のもの。</p>		
	D ₂		外湾して外反し、端部が丸く仕上げられる口縁部のもの。			
	D ₃		直線的に外反し、端部が面取りされる口縁部のもの。			
	E ₁		直線的に外反する口縁部を持つもの。	外反するやや長い口縁部を持つもの。口縁部形態により細分した。		
	E ₂		外湾気味に外反するもの。外湾部分が口縁端部・頸部近く・口縁部全体の3種類がある。			

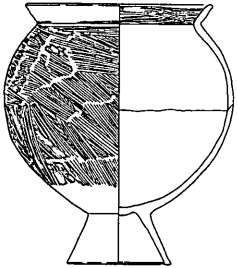
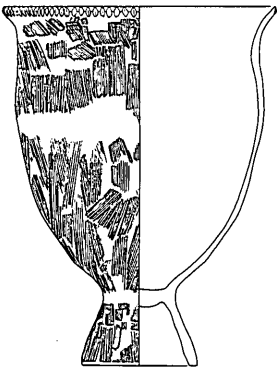

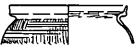
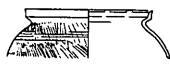
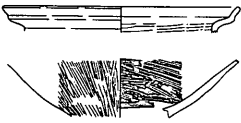
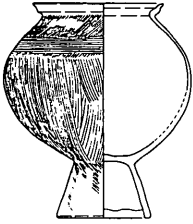

挿図15 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(3)

壺	E ₃		頸部に凸帯を持ち、口縁部は内湾気味に外反し、内・外面に櫛描波状文が施されるもの。	外反するやや長い口縁部を持つもの。口縁部形態により細分した。	
	E ₄		大きく開き、内面に稜が付く口縁部を持つもの。		
	F ₁		長く内湾して外反する口縁部を持つもの。	いわゆる罎。球形ないし下ぶくれの胴部を持つ中型壺。口縁部形態などで細分した。	
	F ₂		直線的に外反する口縁部を持つもの。胴部は下ぶくれ気味で平底となる。		
	F ₃		a. 文様を持つもの。櫛描横線文と篋描連弧文などが施される。		直立気味の短く内湾する口縁部を持つもの。端部はケズリによる内傾する平端面を持つものを持たないものがある。
			b. 無文のもの。		
	F ₄		口縁部が直立気味に短く内湾し、端部で外方に曲がるもの。胴部は球形を呈し平底となる。		
	F ₅		直線的に外反する口縁部を持ち、胴部は球形を呈し丸底となるもの。		
G ₁		口縁部に最大径を持つもの。	外反する口縁部を持ち、胴部は球形を呈し丸底となる中型壺。		

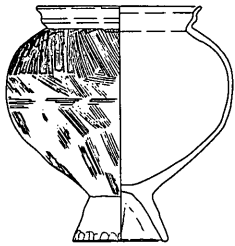
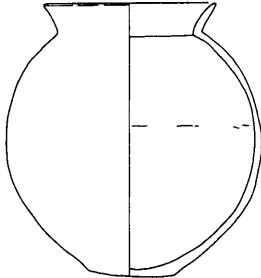
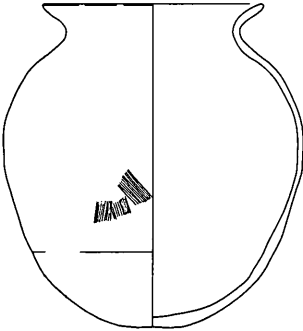
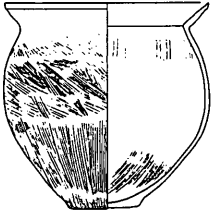
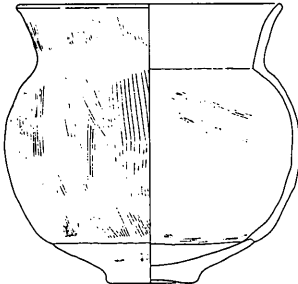
挿図16 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(4)

壺	G ₂		胴部に最大径を持つもの。	外反する口縁部を持ち、胴部は球形を呈し丸底となる中型壺。	
	H		直立気味に外反する短い口縁部で、胴部に最大径を持ち、平底となる中型壺。		
	I		a. 丹彩されるもの。 b. 無文のもの。	短く外湾して外反する広口の口縁部を持つ中型壺。	
甕	A ₁		口縁部に最大径をもつもの。口縁部が強く外反し水平の鏝口状を呈する。	a. 文様を持つもの。櫛描の波状文と斜走短線文。 b. 文様を持つもの。櫛描波状文。 c. 無文のもの。	短く強外反する口縁部で、胴部は砲弾形を呈し、平底となるもの。内・外面ともヘラミガキで調整される。 I…器高18cm以上の大型品。 II…器高12～18cmの中型品。 III…器高12cm以下の小型品。
	A ₂		胴部に最大径を持つもの。口縁部の外反がゆるくなり胴部が丸味を帯びる。		
	B ₁		口径より胴部長が長いもの。 a. 外面調整がハケで行なわれるもの。 b. 外面調整がナデで行なわれるもの。	外湾気味ないし途中がふくらんで外反する単純口縁を持つ台付甕。 I…器高22cm以上の大型品。 II…器高15～22cmの中型品。 III…器高15cm以下の小型品。	

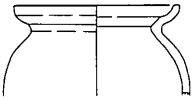
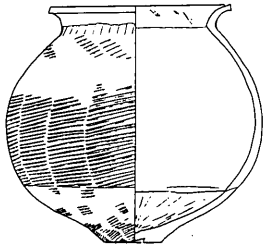
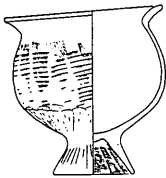
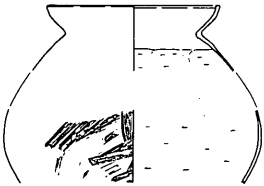
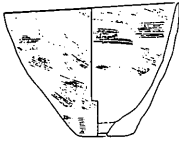

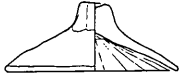
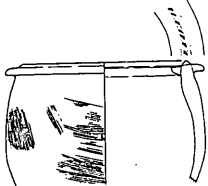
挿図17 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(5)

甕	B ₂		口径と胴部長がほぼ等しいもの。胴部が丸味を帯びる。外面調整はハケによるものに限られる。	外湾気味ないし途中がふくらんで外反する単純口縁を持つ台付甕。
	B ₃		口縁端部外面に篋描刻目文を持つもの。	I…器高22cm以上の大型品。 II…器高15～22cmの中型品。 III…器高15cm以下の小型品。
	C ₁		a. 口縁部外面にハケの刺突が残るか消えても頸部内面にハケが残るもの。	口縁部が直立して尖るか、外方へひらいて内面にケズリによる平端面を持ち、胴上部外面に横方向のハケが付くもの。
			b. 頸部内面のハケが残り、外面のハケが上から順次右下がりのもの。	
			c. 頸部内面のハケが消失し、外面のハケが上から順次右下がりのもの。	
	C ₂		a. 頸部内面にハケが残り、外面のハケが上から左下がり右下がりの順のもの。	口縁部がS字状に屈曲するいわゆるS字状口縁台付甕。
			b. 頸部内面のハケ消失し、外面のハケが上から左下がり右下がりの順のもの。	
			c. 頸部内面のハケ消失し、外面のハケが上から順次右下がりのもの。	

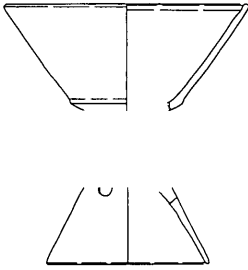
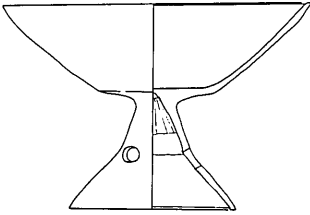
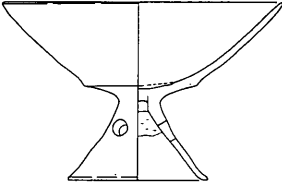

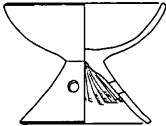
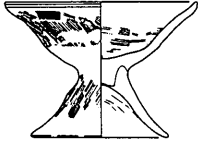
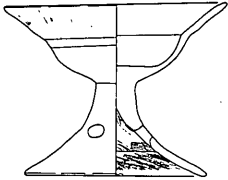
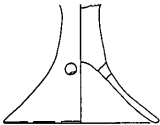
挿図18 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(6)

甕	C ₃		口縁部が外方に開き、端部が丸く仕上げられ、胴上部外面の横方向のハケ消失するもの。 a. 外面のハケが上から左下がり右下がりの順のもの。 b. 外面のハケが上から順次右下がりのもの。	口縁部がS字状に屈曲するいわゆるS字状口縁台付甕。
	D ₁		球形の胴部で、胴中央部に最大径を持つもの。	くの字に外反する単純口縁を持つ平底の甕。 I…器高18cm以上の大型品。 II…器高12cm～18cmの中型品。 III…器高12cm以下の小型品。
	D ₂		胴部がやや長胴化し、胴部に最大径を持つもの。	
	D ₃		口縁部に最大径を持つか、胴部と等しいもの。	
	E		やや長めの外反する口縁部を持ち、口縁部径と器高が同じくらいの広口甕。胴部に最大径を持つ。	

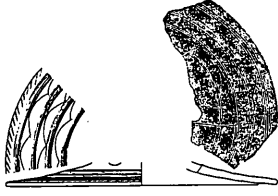
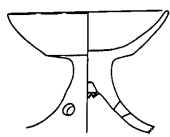
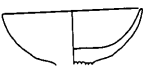
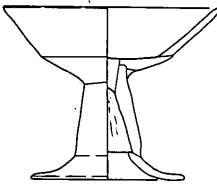
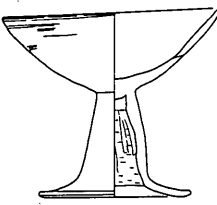
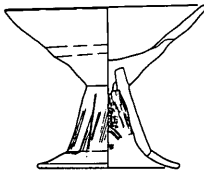
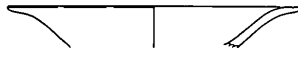
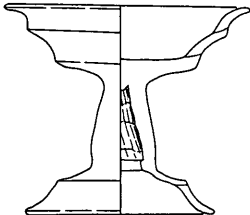
挿図19 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(7)

甕	F		口縁部が内側に屈曲するいわゆる受け口状口縁を呈するもの。	
	G ₁		あげ底ないし平底となるもの。前者が圧倒的に多い。胴部は球形を呈する。	胴部が荒いタタキで調整されるもの。口縁部は外湾しながら短く外反し、端部は面取りされるものが多い。
	G ₂		台付甕となるもの。	
	H		口縁部が内湾して外反し、端部で肥厚するもの。胴部内面はヘラケズリで調整される。	
甌	A		底部から内湾して立ち上がるもの。	
	B		口縁部が直立気味になるもの。	
蓋			頂部が凹み、先端へへの字に開くもの。	
手あぶり			1例だけの検出。	

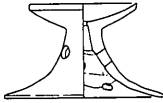
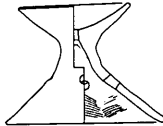
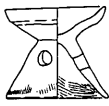
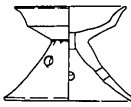
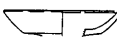
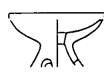
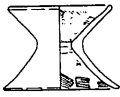

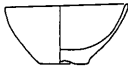
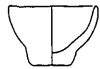
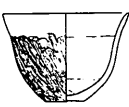

挿図20 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(8)

高 坏	A		脚部が直線的または内湾気味にハの字に開き、坏部は下部で稜を持って開き、深い形態となるもの。	
	B ₁		坏部が下部で稜を持ち、浅く大きく開き、端部にケズリによる内傾する平端面を持つもの。	
	B ₂		B ₁ と同様の坏部形態で、端部が丸く仕上げられるもの。	脚部は内湾気味・直線的・外湾気味など多様性に富んでハの字に開き、Aに比べて坏部の形態が浅くなるもの。坏部形態で細分した。
	B ₃		坏部が稜を持たず、直線的に開くもの。	
	B ₄		坏部が半月状のもの。	
	B ₅		脚部の孔が消滅し、坏部は稜を持たず外湾気味に開くもの。全体にボテッとした作りである。	
	C		脚部の形態はBと同様であり、坏部は途中で屈折して大きく外方に開き、内外面に稜を持つもの。丸底の鉢を坏部とした形になる。	
	D		柱状の脚部を持ち、先端はハの字に開くもの。坏部の形態不明。	

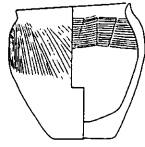
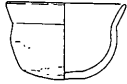
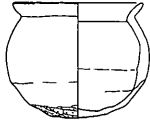
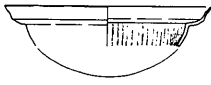
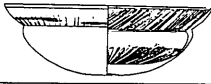

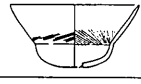
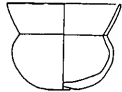
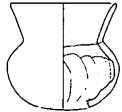



挿図21 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(9)

高 坏	E ₁		a. 文様を持つもの。坏部外面と脚先端部外面に篋描横線文や篋描連弧文・鋸齒刺突文が施される。	坏下部に稜を持つもの。	脚部は大きく開き坏部径をしのぐいわゆる小型高坏。坏部形態で細分した。
			b. 無文のもの。		
	E ₂		坏部が半月状のもの。		
	F ₁		坏部が下部で稜を持ち、外方へ開くもの。		
	F ₂		坏部が半月状のもの。		中空の柱状脚部を持ち、裾部で屈折して開くもの。坏部形態で細分した。
	F ₃		坏部がラッパ状のもの。		
	F ₄		坏部がやや大形で、口縁端部で外反するもの。全体形不明。		
G		柱状の脚部を持ち、裾部で屈折し、稜を持って開き、坏部は二段の稜を持ち、外方へ開くもの。			

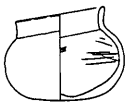
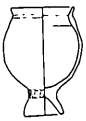


挿図22 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(10)

器 台	A ₁		直線的に開く器受部で端部が面取りされるもの。	a. 器受部と脚部 の間に貫通孔を有するもの。 b. 貫通孔を持たないもの。	直線的または外湾気味に八の字に開く脚部を持つ小型器台。器受部の形態で細分した。
	A ₂		直線的に開く器受部で端部が丸く仕上げられるもの。		
	A ₃		端部が屈曲して直立気味になる器受部のもの。		
	A ₄		稜を持ち、外湾して開く器受部のもの。		
	A ₅		稜を持ち、内湾する器受部のもの。		
	A ₆		半月状ないし皿状の器受部のもの。		
	A ₇		全体がX字状を呈するもの。		
B		やや大型の皿状の器受部を持つもの。			
鉢	A ₁		器高が口縁部径の $\frac{1}{2}$ かそれ以下の浅い形態のもの。	平底かあげ底で、内湾気味または直線的に立ち上がる小型の鉢。	
	A ₂		器高が口縁部径の $\frac{1}{2}$ 以上のやや深い形態のもの。		
	A ₃		器高が口縁部径の $\frac{1}{2}$ 以上のやや深い形態で内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反して内面に稜が付くもの。		
	B		あげ底の底部から内湾して立ち上がり、口縁部がわずかに外反し、頸部を持ち胴上部がわずかに張るもの。		

挿図23 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(II)

鉢	C		わずかにみられる口縁部が直立し、胴上部に最大径を持つ平底の鉢。片口になるかもしれない。	
	D ₁		口縁部に最大径を持つもの。	外反する口縁部を持ち、丸底または丸底気味の小型の鉢。
	D ₂		胴部に最大径を持つもの。	
	E ₁		口縁部が屈折して開くいわゆる鉄かぶと形の鉢。内面には暗文を持つ。	口縁部が外方に開き、内面に稜を持つ浅い形態の丸底ないしあげ底の小型の鉢。
	E ₂		直線的に外方に開く口縁部で、内面には暗文を持つもの。	
	E ₃		口縁部の外反がわずかになり、やや深い形態となるもの。	
小型丸底	A		外方へ大きく開く口縁部で、小さな体部を持つもの。	いわゆる小型丸底坩と呼ばれるもの。
	B		外反する口縁部と半球形の体部で、口縁部に最大径を持つもの。	
	C		外反する口縁部と球形の体部で、胴部に最大径を持つか口縁部と等しいもの。	
小型壺	A		壺Aを小さくしたもの。口縁折立部に篋描刺突文、頸部に楡描横線文、胴部ほぼ中央に小孔。	器高10cm前後のもの。
	B		胴部が底部近くで急にくびれる器形のもの。	
	C		外湾または直線的に外反する口縁部で平底のもの。	

挿図24 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(12)

小型壺	D		直立した口縁部で球形の胴部で丸底となるもの。	器高10cm前後のもの。
小型台付甕			甕 B ₁ の形態で器高10cm前後のもの。	
礎			有段口縁となる。須恵器の礎をマネたもの。	
手づくね			多様性に富む。	

挿図25 弥生時代後期から古墳時代前期土器形態分類図(13)

4) 弥生時代中期土器の文様

該期の土器の文様は、以下のように分類を行なった⁽⁹⁾。観察表の文様欄も、以下の記述に従っている。

篋描文・櫛描文・竹管文・縄文・浮文・丹彩があり、丹彩を除けば、これらが単独で施されることはほとんどなく、それぞれが組み合わさることによって構成され、器種・器形・部位によって施される文様が決定してくる。これらの違いに着目して分類を行なった。アラビア数字は全器種に共通して文様が施される部位を、ローマ字が文様ないしその組み合わせを、算用数字がそれぞれの文様の要素ないしその組み合わせを表わしている。丹彩される土器は、記号化せずに文字で表現した(挿図26~28参照)。

施文部位は、以下のように分類した。

- I - 口唇部。
- II - 口縁部。
- III - 頸部。
- IV - 胴部。
- V - 底部。

底部は、前述したように調整に含むべきものであるが、文様に密接関係を持つ土器の回転運動

との関連を考え、ここでは文様と一括して扱った。II～IVにおいて無文のものは分類から除外し、一覧表文様欄も省略した。I～Vの施文状態を示すと以下のようである。

I－篋描文・縄文が単独で施される。そこで無文のものを含めてA～Cに分類した。

A 篋描⁽¹¹⁾刻目文が施される。

B 縄文が施され、撚りによって1～4に細分した。

1 LR。

2 RL。

3 Lr。

4 Rl。

C 無文のものをあて、面取りの有無で2分した。

1 丸く仕上げられる。

2 面取りされる。

A～Cとも全器種に共通するが、壺AにIA・Bは少なく、壺CはIC以外のものが1例あるのみで、器種判断の一応の材料とし得る。

II－篋描文・櫛描文・縄文があり、それぞれの組み合わせでAとBに分類した。

A 篋描文・縄文が組み合わされないしそれぞれ単独で施されるもの。1～6に細分した。

1 縄文を地文として篋描波状文が施される。円形浮文が付される場合もある。

2 篋描波状文が単独で施される。

3 縄文を地文として篋描鋸歯文が施される。

4 篋描鋸歯文が単独で施される。

5 篋描刺突文が単独で施される。

6 縄文が単独で施される。

縄の撚りは4種類で、篋原体は篋I・IIの2種類があるが、それによる細分は行なわなかった。基本的に壺Bと甕C・Eの文様であり、例外的に壺Aにもある。

B 櫛描文が施される。一部に縄文を地文とするものがある。1～5に細分した。

1 櫛描横線文。

2 櫛描波状文。一部に縄文を地文とするものがある。

3 櫛描列点文。

4 櫛描斜走短線文。

5 その他の櫛描文が施される。

基本的に壺A₂・Bの文様であるが、甕A・Dにもわずかにみられる。甕Aには4～8のように櫛描羽状条線文が口縁部まで及ぶ例がみられるが、この文様は胴部に施されるのが通例であり、口縁部文様として意図されたものではないので、IIの文様の中には含めていない。

III－篋描文・櫛描文・竹管文・縄文があり、それぞれの組み合わせでA～Cに分類した。

A 篔描横線文に縄文ないし篔・櫛描波状文が組み合わされる。1～5に細分した。

- 1 地文の縄文のみ。
- 2 篔描横線文が単独で施される。
- 3 縄文を地文として篔描波状文が施される。
- 4 篔描波状文が施される。
- 5 櫛描波状文が施される。

基本的に壺A₂・Bの文様である。縄の撚りや篔原体に差異があるが、分類に含めなかった。

B 櫛描横線文に篔描文や櫛描文が組み合わされる。1～5に細分した。

- 1 篔描の短線文・列点文・刺突文が施される。
- 2 櫛描の短線文・列点文・刺突文が施される。
- 3 篔描の羽状文・羽状刺突文が施される。
- 4 櫛描羽状文が施される。
- 5 竹管文が施される。

基本的に壺A₁の文様である。

C 櫛描文が施されるもの。1～3に細分した。

- 1 櫛描横線文。
- 2 櫛描波状文。
- 3 櫛描簾状文。

壺A₁・A₂や甕A～Dと鉢Aの文様である。器種によって施文方法が異なる。たとえば、壺の波状文の幅は小さく甕は大きい。また、施文方法にも違いがみられるが、これらの詳しい分析はVで行ないたい。

IV 篔描文・櫛描文・縄文・竹管文・丹彩があり、それぞれの組み合わせでA～Fに分類した。

A 篔描横線文に縄文・篔描文が組み合わされる。III Aに対応する文様である。1～5に細分した。

- 1 地文の縄文のみ。
- 2 篔描横線文が単独で施される。
- 3 縄文を地文として篔描波状文が施される。
- 4 篔描波状文が施される。
- 5 その他。

縄の撚りや篔原体に差異がみられるが、それによる細分は行なわなかった。基本的に壺Aの文様である。

B 櫛描横線文に篔描文・櫛描文・丹彩が組み合わされる。III Bに対応する。2段の単位文様として把握できるが、上と下で同一の組み合わせを持つことは少ない。また、2段にならず連続文様となる例もある。1～5に細分した。

- 1 篔描の短線文・列点文・刺突文が施される。
- 2 櫛描の短線文・列点文・刺突文が施される。
- 3 篔描の羽状文や羽状刺突文が施される。
- 4 櫛描の波状文と羽状文が施される。
- 5 竹管文が施される。

基本的に壺A₁の文様である。丹彩は最下位の単位文様の下に2 cmくらい帯状に施されるのが普通で、最下位の文様上に施されるものもある。組み合わせの一細分とすべきとも考えたが、すべての個体に施されるものでもなく、省略した。

C 櫛描横線文が2段に施され、その間に篔ないし櫛の連続山形文を描き、区画内を文様で埋めるのを基本パターンとする。櫛描横線文に篔や櫛の列点文・短線文・刺突文や櫛描波状文が組み合わされたり、連続山形文の基部には円形浮文が付されることもある。丹彩は、連続山形文の空白部や単位文様の下に帯状に施される例が多い。連続山形文と中を埋める文様要素の組み合わせで1～9に細分した。

- 1 篔描連続山形文で、中に篔描の縦線文ないし斜線文を埋める。
- 2 篔描連続山形文で、中に櫛描短線文を埋める。
- 3 櫛描連続山形文で、中に櫛描縦線文を埋める。
- 4 櫛描連続山形文で、中に櫛描列点文を埋める。
- 5 櫛描連続山形文で、中に櫛描短線文を埋める。
- 6 櫛描連続山形文で、中に櫛描波状文を埋める。
- 7 櫛描連続山形文で、中に櫛描の短線文・波状文等の多様性に富んだ文様要素を埋める。
- 8 櫛描連続山形文で、中を櫛描短線文を埋めるが、櫛描横線文の代りに櫛描羽状文・波状文と篔描横線文が付されるなど、ややパターンから逸脱した文様となる。
- 9 その他。

基本的に壺A₁の文様である。

D 櫛描文が施される。文様要素で1～3に細分できる。2～4段同じ文様要素が繰り返されて単位文様を構成する。文様基部に円形浮文を付す櫛描鋸歯文が描かれることもある。

- 1 櫛描横線文。
- 2 櫛描波状文。
- 3 櫛描簾状文。

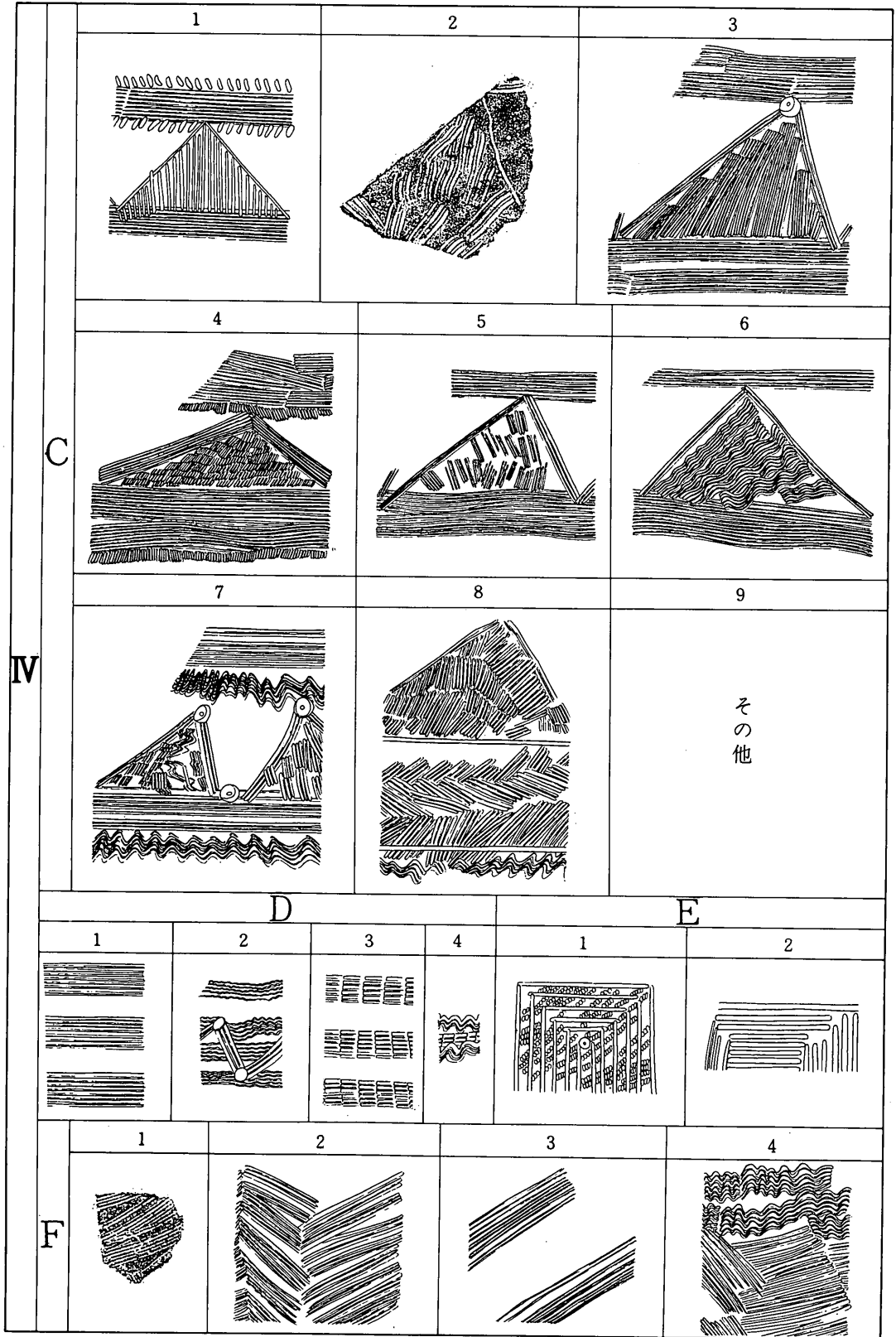
基本的に壺A₁・A₂の文様である。

F 櫛描文が施される。文様要素とその組み合わせで1～9に細分した。


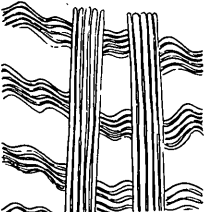





- 1 櫛描斜走条線文。
- 2 櫛描羽状条線文。
- 3 櫛描斜線文。

I	A		B				C	
			1	2	3	4		
							1	
						2		
II	A	1	2	3	4	5	6	
III	B	1	2	3	4	5	その他	
IV	A	1	2	3	4	5	その他	
IV	B	1	2	3	4	5	その他	

挿図26 弥生時代中期土器文様分類図(1)



挿図27 弥生時代中期土器文様分類図(2)

IV	F	5	6	7	8	9
						その他
V		1	2	3	4	
					1～3以外のもの	

挿図28 弥生時代中期土器文様分類図(3)

- 4 楡描波状文に羽状ないし斜走の条線文が組み合わされる。
- 5 楡描波状文が密接して2段以上に施される。
- 6 楡描波状文が間隔を空けて多段に施され、それを楡描縦線文で切る。
- 7 楡描波状文の下に楡描鋸歯文が組み合わされる。
- 8 楡描の斜走短線文ないし横走短線文。
- 9 その他。

基本的に甕A・B・Cと鉢Aに共通する文様である。

V 底部の圧痕によって1～4に細分した。

- 1 木葉痕。
- 2 網代痕。
- 3 布目痕。
- 4 ワラ痕・板痕・その他の圧痕や無文やナデ等で消すものなど、1～3以外のものすべてを含める。

圧痕が付くものは、壺・甕に多く、鉢などの小型品には少なく、成形段階の手法の違いを暗示している。壺・甕で違いはなく、1～4が使われる比率は、ほぼ同程度である。(山下誠一)

註

- (1) 整形と呼称されることも多いが、本編では調整で統一した。
- (2) ハケメ（刷毛目）と呼称されることが多いが、本編ではハケで統一した。
- (3) 底部があげ底になるものは、タタキ甕のように輪台技法（都出1974）によるものや、ヘラケズリによるもの、粘土帯を貼付することによるものなどがあり、これらを総称してあげ底との名称を用いる。
- (4) 突起文（宮沢1967）・貼付文（遮那1972・千曲川水系古代文化研究所1981）などと呼称されることもあるが、本編では浮文で統一した。
- (5) 月の輪遺跡群II（加納1981）・中島郁夫氏（中島1985）等が同様の規定を行なっているが、それぞれに多少の違いがある。
- (6) 他にも、中型の壺や鉢などにそれぞれの用途で割り切れないものも多く、積極的に供献形態をうかがえるものもあり、一部には煮沸に供したとも考えられるものもあるが、個々の器形用途については今後の課題とし、概括的に認められる範囲でまとめてみた。
- (7) 弥生時代後期から古墳時代前期分類の壺Aがそうである。
- (8) 高坏は該期遺構内からの検出はなかったが、型式学的に検討して、該期に位置づくと考えられるものを摘出した。
- (9) 弥生時代中期の分類では、法量による区分は行なえなかった。
- (10) 実測資料を中心に分析したため、該期のすべての文様を分類できたわけではなく、後述する時期毎に資料の濃淡があり、資料不足の恒川I期については、既出資料で補足する必要もあろう。
- (11) 施される細部の位置・篋状工具の原体・施文方法等で細分可能であるが、分類ではすべてを一まとめにした。

2 石 器

恒川遺跡群の該期の住居址75軒から出土した石器は、第4表のとおりである。器種は非常にバラエティーに富み、該期の豊かな石器文化を示している。ここでは、住居址出土遺物を中心に、その他の溝址・方形周溝墓や遺構外遺物の中で該期に所属が確実と思われる石器を取り上げて、器種毎に概観し、若干の分析を加える。

① 打製石斧

縄文時代のそれとほぼ同形態の石器である。当地方では、弥生時代のもを大小に分けて、大を「石鋏」ないしは「鋏形石器」、小を「打製石斧」などと呼びわける場合が多いが、ここでは一括して「打製石斧」として扱う。

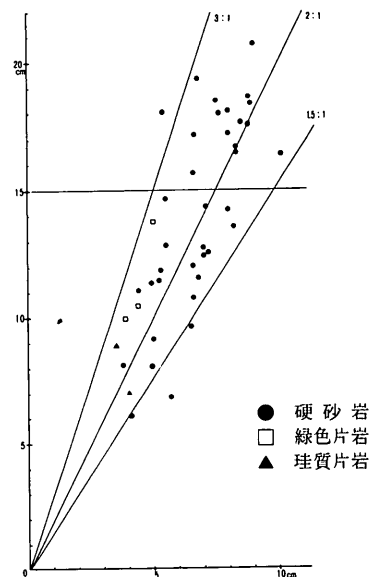
住居址からは計77点が出土している。時期別にみると、恒川Ⅰ期19点、Ⅱ期30点、Ⅲ期3点、Ⅱ～Ⅲ期4点、Ⅳ期3点、Ⅴ期6点、Ⅶ期2点、Ⅷ期5点、Ⅹ期5点である。

形態は、短冊形と撥形が主体を占め、そうした形態分類も可能であるが、ここでは、従来の分類に従って法量を重視して扱う。長さは6.2cm～20.8cm、幅は3.5～11.2cm、厚さは1.0～5.2cmで、長さとの幅の相関関係を示すと第3表のとおりである。かなり広範囲にバラツキをもって分布し、この石器の用途分化が法量の面に大きく反映されたことを示している。グラフでは15cm前後を境に大小に分かれる傾向がみられ、これを基準として大小の分類を行なった。

A類 長さが15cm以上の大形のもの。完形品・ほぼ完形品が22点ある。長さとの幅の比率はほぼ2：1～3：1の範囲に多く、長さは16.5～19.0cm、幅は6.5～9.0cmに集中する。形態は、短冊形(174-1・7、176-8、177-2・3、178-4・5など)や撥型(27-1・2、29-1・5、177-1など)があり、縦断面はやや湾曲するものとしなないものがほぼ同数で、前者のほとんどが自然面を大きく残している。基部側が部厚く、刃部はやや薄手となる傾向がみられる。

B類 長さが15cm未満の小形のもの。完形品・ほぼ完形品が27点ある。長さとの幅の比率は1.5：1～2：1の幅広のものとの2：1～3：1の細長いものがほぼ同数ある。短冊形(27-5・6・9、28-5・6など)と撥形(26-1・7、34-1・5、179-14など)があり、27-7は、左側縁中央が抉られて分銅形にやや近い形態をなす。縦断面は自然面の有無にあまり関係なく直線的なものが多い。

石材は、硬砂岩が圧倒的に多く77点中67点(87.0%)を占め、次いで緑色片岩9点(11.7%)、他に珪質片岩1点がある。硬



第3表 打製石斧の長さとの幅

第4表 弥生時代中期後半から古墳時代前期の住居址出土石器一覽表

器種 住居址	打製石片		有磨製石斧	快刀打製石斧	磨製石斧			有快石器	有磨石器	有骨器	有骨器	骨製石器			有快石器		石錐	砥石	鼓釘器	磨製曲磨石	台石	磨製石	石製繩	環状石器	その他	備考	時期
	A	B	有磨製石斧	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C												
ARY	10住						1										1						完未			I	
	11住	(1)			3												1									I	
	15住	2(1)	1(1)		2	1																				I	
	22住	(1)	1														1									I	
	23住	3(2)	1																							I	
	24住	3(1)	1														1									I	
	29住																									I?	
	53住																										I?
	5住																										II
	9住	1(2)	1					2																			II
AMD	51住	2					1																				II
	54住																										II
	55住	2																									II
	17住																										II
	18住	1(4)	1																								II
GOB	9住		(2)																								II
	35住																										II
	46住																										II
28住																										II~III?	
34住																										II~III?	
TAN-KUR	1住																										II
	9住	2																									II
	11住	1	1(1P)																								II
	13住																										II
	19住	3	6																								II
	77住	1																									II
	20住	(1)																									II~III?
	59住	1(1)																									II~III?
GOB	88住		1																								II~III?
	33住		1																								II~III?
	96住																										III
	8住		(1)																								III
	17住																										III
	25住																										III
	45住																										III
	47住		1																								III

ARY	50住		1										1																									III
ARY	56住	(12)																																				IV
AMD	4住		1																																		IV	
TAN-KUR	5住	(1)				2	1	4		1	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1																V		
	7住		1	2	1	1	1	4		1	1	3	1	1	2	1	1	1																		V		
	8住	(4)	1?	6	1	4				2	2	1	1	3	1	1	1																			V		
	12住																																			V		
	17住	(1)				2		3			1																									V		
GOA	1住										1																									VI		
	2住																																			VI		
	6住																																			VI		
	7住																																			VI		
	9住																																				VI	
	16住			1							1																										VI	
	18住			3																																	VI	
	20住																																				VI	
	24住																																				VI?	
	2住					1																															VII	
	7住					1					1																										VII	
	12住																																				VII	
	14住																																				VII	
	15住			2				1																													VII	
	19住	1								1																											VII	
	29住																																				VII	
GOA	21住					4																															VII	
	5住	(1)				2																															VII	
	8住																																					VII
	29住																																					VII
	3住	(1)	1(1)		3				1																												VII	
	4住			4			1																															VII
	10住							1?																														VII
GOB	4住				5																																	VII
	5住			1																																		VII
	10住	1		4					1																													VII
	27住		1		1																																	VII
TAN-KUR	16住		1											1																							X	
	23住	1?	1																																		X	
	75住	1(1)																																			X	
	90住		1																																		X	
	101住																																				X	

打製石斧のカッコ内は欠損品から判断したものの数 ※は細文時代の器入品の可能性が高いもの

砂岩以外はA類になくB類に限られる。A類は基部に丸味のある自然面を広く残すものが多く、硬砂岩の大形の素材剥片aを利用して、打撃点に近い肥厚した部分に基部、遠位の薄い側に刃部を作出したものが多く傾向がある。177-2や遺構外の184-7は、自然礫の稜部を縦割りにした剥片を用いており、剥片割取の技法に特異性が示される。緑色片岩の27-8は、両面に自然面をもった礫核石器で、磨製石斧の未成品とも考えられる。

遺存状態を挿図3に従って分類すると、

a(36点)、b(10点)、b'(4点)、c(10点)、c'(8点)、d(7点)、e(1点)、f(1点)

となり、欠損品が約半数を占める。

使用痕をみると、刃部の磨滅は顕著で、縄文時代の打製石斧と同様“土擦れ”状をなし、長軸方向の線状痕が認められる。住居址出土品中、観察される点数は33点、刃部をもつのに観察されないものは30点とほぼ同数であるが、後者には刃部の潰れるもの(34-5、176-9)や剥離痕の残るもの(26-6、29-1など)もあり、これらも使用痕と考えられる。磨滅する部位は刃部に限られ、両端にあるものはほとんどない。

② 有孔磨製石庖丁

背部寄りの中央に紐孔をもつ横刃型磨製石器である。一般に「磨製石庖丁」と呼ばれるが、次の「抉入磨製石庖丁」と区別する必要から、この名前を用いた。

総数9点があり、住居址出土は恒川Ⅳ期の1点のみである

完形品4点はいずれも紐孔1つをもち、刃部は両刃をなし、磨滅による変形を考慮すればすべて直線刃で、小形・方形・単孔を大きな特徴としている。

さらに、背部の形態によって2つに分類した。

A類 背部が直線的で長方形をなすもの。計7点。背部が刃部に完全に平行するもの(39-5、44-3、187-2)と肩部がとれたもの(44-1・2、74-13、187-1)がある。

B類 背部が丸くカーブするもの。直線刃半月形態に近いが、両側端は丸味を帯びる。計2点(139-11、147-2)ある。

法量は、刃部側の長さが8.1~10.1cm、幅2.9~4.5cm、厚さが0.5~0.8cm、重量は23~39gである。

石材は、珪質片岩5点、緑色片岩・粘板岩・硬砂岩・ホルンフェルスが各1点で、劈開性にすぐれた岩石を多用している。薄い剥片を素材として研磨工程の省力化を意図したようで、完成時にも剥離面を広く残すものも多く、中でも44-3は、調整剥離による鋭い縁辺をほとんど研磨せずに刃部としている。

使用痕としては、刃部などに磨滅痕がある。147-2は、刃部中央の刃縁が丸くなり、この石器の作業部がここに集中していたことを示す。139-11は、さらに広く認められ、著しい磨滅と再研磨が繰り返されたためだろう、刃部は内湾刃に変形し、器幅も細い。ほぼ全面に方向性をもたない手擦れ状の磨滅痕が顕著で、紐孔の内縁上部には紐擦れも認められ、著しい使用を示している。

187-1の背縁には薄い金属で敲いたような意味不明のダメージがあり、刃縁の端部寄りには面取り状に研磨され、消耗によって内湾した刃部を直線的に再生しようとした意図がうかがえる。

③ 抉入磨製石庖丁

両側に抉りをもつ横刃型の磨製石器・半磨製石器である。

総数5点があり、このうち1点(31-1)は恒川V期の住居址から出土している。

この石器は、調整のあり方から大きく2つに分類した。

A類 器体のほぼ全面近くを研磨するもの。

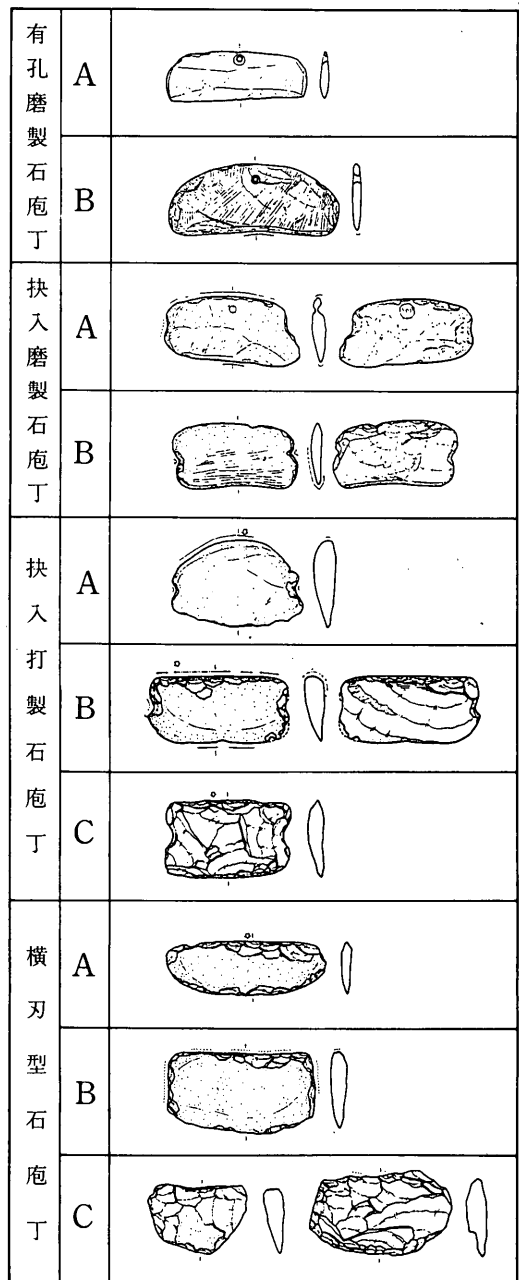
139-12と31-2の2点があり、剝離痕や自然面を若干残すものの比較的よく研磨されている。前者は、剝離によって作出した抉入部に研磨を施し、後者は、敲打によって潰している。さらに、後者は、両面の背部寄りの中央に穿孔途中の凹をもち、有孔磨製石庖丁の模倣もしくは製作中品の転用が考えられる。

B類 研磨がほぼ刃部に限られるもの。両面に剝離面ないしは自然面を残し、抉入打製石庖丁に類似している。44-4は、研磨によって内湾刃を作出し、抉入部には糸掛けと思われる切り込み状の研磨を施している。139-13は、刃部のa面のみ研磨し、b面は磨滅している。139-14は、刃部の両面を研磨している。

法量は、刃方向の長さが7.3~8.2cm、幅が3.7~4.7cm、厚さが0.75~1.15cm、重量は第5表にみるように有孔磨製石庖丁よりやや重く、33~55gである。

石材は、珪質片岩2点、粘板岩2点・硬砂岩1点で、形態的には抉入打製石庖丁の基本的要素を強く引きながらも磨製石庖丁と同石材を用いる点はこの石器の性格を暗示している。

使用痕は、31-2と139-14の刃縁と背縁と、139-13の刃縁とb面に磨滅痕が認められる。



挿図29 石庖丁類の分類図

④ 挟入打製石庖丁

小形で両側縁に挟りをもつ横刃型打製石器である。当地方では、従来「打製石庖丁」と呼ばれるが、後に述べる「横刃型石庖丁」と区別する意味で、この名称を用いた。

この石器は、遺構の内外から多量に出土し、住居址では44点にのぼる。時期別にみると、恒川I期からIV期にはなく、V期10点、VII期6点、VIII期10点、X期18点である。遺構外ではV期以降の住居址のないAMD、ARY、ARBの出土量が数点なのに対して、TAN・KUR、GOA、GOBは多く、この石器の所属時期を示唆している。

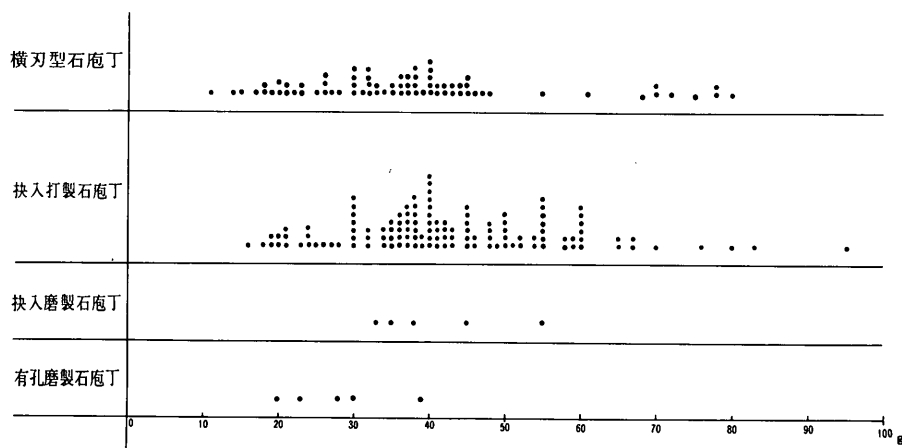
形態は、素材剥片の性質と調整のあり方から大きく3つに分類した。

A類 礫表皮剥片の両側辺に挟入部のみ作出したもの。挟入部の作出も簡単で素材(素材剥片a)の形状をよくとどめ、楕円形を呈するものが多い。背部は全く調整しないもの(32-14、39-9・11、44-14、67-8、134-3など)と縁辺のみを若干研磨したもの(68-12、75-9)があり、さらに挟入部を研磨したもの(70-5、140-19)もある。こうした刃部以外の若干の研磨については挟入打製石庖丁の範疇を越えないものとした。刃部は素材の鋭い端部をほぼそのまま利用している。

B類 礫表皮剥片に背部調整を施したもの。背部は直線的で長方形に近いものが多い。背部調整には、調整剥離を施すもの(32-11~13・15、39-6~8など)や折断したもの(32-10、39-10、129-10)、さらに研磨を施したもの(44-11、68-2・14、75-10、136-6など)がある。また挟入部を研磨したもの(136-10)もみられる。刃部はA類と同様である。

C類 自然面をほとんど残さず周囲に調整をもち、長方形を呈するもの(129-11・15、140-20)。背縁に研磨を施したもの(140-20)もある。

以上の形態の素材剥片は、圧倒的に素材剥片aが多く、C類を中心に素材剥片c・fがわずかにみられる。素材剥片aの打撃点側を背部とし、その反対側の自然面と主要剥離面とで形成された横長の鋭い縁辺をほぼそのままに刃部として利用する点が、この石器の最大の特徴といえる。



第5表 石庖丁類の重量分布表

この素材剥片の性質から刃部は外湾刃と直線刃があり、内湾刃は皆無である。

法量は、刃部方向の長さが4.5～8.4cm、対する幅が3.4～5.3cm、厚さが0.5～1.6cmで、重量は第5表にみるように15～95gに分布しており、30～60gの間に集中がみられる。

石材は、硬砂岩が圧倒的に多く、図化したもの132点中128点、97.0%を占め、他に粘板岩と輝緑岩が2点ずつある。

使用痕としては、刃部の磨滅痕と刃こぼれ状の小剥離痕がある。磨滅痕は約30点に認められ、その部位を詳細に観察すると、刃部の両面にわたるもの(44-8、67-4、68-1・4、75-1・2、140-1・2・7)、刃縁から片面に片寄るもの(44-17、68-2、74-14、75-3・13、129-7・21、134-1)、ほぼ刃縁に限られるもの(31-4、39-8、44-5、68-14、74-15、133-3、136-10、140-3・11、149-3)がある。そして片面に片寄るものは44-17を除いて自然面とは逆の主要剥離面側がほとんどであり、また、刃縁の消耗は中央の一箇所に集中して窪むものが多いが、複数の凹が連続して波状を呈するもの(39-8、67-10、74-15、129-21、133-2・3)もみられる。磨滅の方向は、刃縁に対して直角ないしはそれに近い角度である。

さらに注意されるのは、有肩扇状形石器に認められた「ロー状光沢」が抉入打製石庖丁にも観察されることである。計6点あり、刃部の両面にわたって認められるもの(31-4、74-15、140-1・2)と刃縁から片面にかけて認められるもの(133-3、140-3)があり、その範囲は刃縁から1～3mmの範囲に限定されている。この石器の用途から、光沢物が稲ないしは雑穀類の珪酸分である可能性が強く、有肩扇状形石器の光沢物を考える上で重要な指標ともいえる。

磨滅痕は、先に掲げた刃部ばかりでなく、背縁(33-14、44-10・14、68-23・26、75-3・5、133-3、134-1、140-7)や側縁(75-2、140-8)、抉入部(31-4、32-11・13・15、39-10、140-7・18)、片面の中央部分(140-1)にも認められる。これらの中には研磨痕と区別の付かないものも含むが、多くは手擦れや紐擦れによる使用痕と考えられる。なお、75-5は両面に研磨痕を持ち、b面は横方向に延びる凹となっている。紐を両側の抉入部にかけて巻くための調整とも考えられる。

遺存状態は、破損品が少なく完成品が多いことから、この石器が大きな衝撃を受けるような使用がなされなかったといえる。

⑤ 横刃型石庖丁

小形の横刃型打製石器である。従来の「小形の横刃型石器」・「鎌形打石器」と呼ばれたものに該当し、既に酒井幸則氏が石庖丁の1タイプとして分類した(酒井1977)ように収穫具の用途が考えられることから、ここでは、この名称を用いる。

住居址からは14点が出土し、時期別にみると、恒川I期7点、II期2点、III期1点、V期3点、VIII期1点である。遺構外では、縄文時代の横刃型石器と区別できないものを除いてAMDやARB以外の地籍から多く出土している。

形態は、ごく大雑把に3つに分類した。

A類 舟形ないしは紡錘形、あるいは長楕円形を呈する横長のもの。北原遺跡(神村他1972)に多くみられ、調整も比較的丁寧な定形化したタイプである。素材剥片aを用いて刃部側に自然面を大きく残すもの(44-21・22・24~30など)と他の素材剥片を用いて自然面を残さないか、残してもわずかなもの(44-30~33など)がある。背部調整は丁寧で、中には研磨を施したもの(38-3、136-17)もある。刃部調整を施すもの(38-3・10、44-23・26・33など)と素材剥片の鋭い縁辺をほぼそのまま利用するもの(44-21・22・24・25・27~29・31など)がほぼ同数あり、直線刃か緩い外湾刃をなしている。側辺調整はしないものが多いが、調整したもの(38-3、44-20・28・30など)もみられる。

B類 側辺の調整が丁寧で、角の明瞭な方形を呈するもの(31-5、75-18、136-14、140-22)。挟入部作出の不十分な挟入打製石庖丁の可能性の高いものもあるが、多くは直線的な側辺を意図的に形成した別タイプとして抽出できる。

C類 A・B類以外のもの。刃長が短くてズングリしたもの(32-16、44-34・35)、自然面を全く残さず全面調整されたもの(30-6、68-5)がある。他に素材剥片に粗雑な調整を施したものの(27-10、136-15、176-1、179-3・16)も一括しておいたが、不整形なので石庖丁からは分離すべきかもしれない。

以上の3つを時期別にみると、A類は恒川I期、B類はV期、C類はI~III期とV・VIII期にあり、A・B類は、時間的な変遷を追える可能性も考えられる。

分量は、各形態によって異なる。A類は、刃方向の長さ6.1~12.2cm、幅2.7~4.7cm、厚さ0.55~1.5cm、重さ11~75g、B類は、長さ6.0~8.7cm、3.4~5.1cm、厚さ0.8~1.2cm、重さ23~70gである。この石器の全体の重さは第5表にみるように11~80gで、20~50gに集中しており、挟入打製石庖丁よりやや軽い傾向がみられる。

石材は、図化した90点中、硬砂岩が86点(96%)を占め、他に粘板岩2点、珪質片岩・緑色片岩が各1点ある。

使用痕には、刃部に磨滅痕・ロー状光沢物の付着・刃こぼれ状の小剥離痕が認められる。磨滅痕が両面に認められるものは1点(38-11)しかなく、刃縁に限られるもの(44-27・35、70-9、136-15・16、149-5、187-6・14・20)が多い。磨滅痕の方向は刃縁に対して急角度をなし、刃縁の一箇所が窪むもの(44-27、136-16、187-8)もある。

ロー状光沢の認められる3点(44-22・23、136-16)はいずれもA類であるが、刃部の中央より一方に寄った箇所にあり、同じことは磨滅痕にもいえ、主たる作業部位が片寄っていたことを示している。

しかし、横刃型石庖丁の使用痕は基本的には挟入打製石庖丁と一致しており、また素材剥片の利用方法や重量においても共通点が多く、小形の横刃型石器も穂摘具ないしは穂刈具の一器種と考えられる。

⑥ 有肩扇状形石器

中形剥片の鋭く幅広い縁部を刃部とし、両側縁に抉りを加えて柄状の基部を作出した打製石器である。従来の「有肩扇状形石器」・「靴形石器」・「瘤付石器」や「有抉石器」の一部に該当するものを総称した。

住居址からは20点出土し、時期別にみると、恒川Ⅰ期1点、Ⅱ期3点、Ⅳ期2点、Ⅴ期12点、Ⅶ期1点、Ⅷ期1点である。他遺構と遺構外出土で図化した40点は、完形品・ほぼ完形品のすべてである。

形態は、従来の呼名に表われるようにバラエティーに富むが、ここでは主に基部の形態つまり両側の抉りの在り方に注目して5つに分類した。

A類 抉りが大きく、刃部幅と比較して基部は細長く、肩部が大きく張るもの。典型的な「有肩扇状形石器」で、計13点ある。基部が方形に整ったもの(43-1、186-1・2)を基本形とし、基端の開くもの(39-3、186-4)、基端のすぼまるもの(180-5)がある。

B類 A類に比べて抉りが浅く基部は幅広で、全体に素材剥片の形状をとどめるもの。計4点ある。基部が方形のもの(30-15、32-7)、基端が開くもの(33-9、139-5)がある。

C類 両側縁の抉りの深さに差があり、基部が刃部の中央から大きく片側にずれるもの。「靴形石器」に該当し、計5点(69-16、74-3・4・5、178-8)ある。

D類 両側縁は直線ないしは緩く内湾する程度に浅く抉られて、肩部の張りは小さく、縦長で撥形をなすもの。計5点(43-6・7・8、74-1、186-3)ある。

E類 両側縁を深く抉り、基端の側縁が大きく突き出るもの。両側に突き出るもの(74-6、147-1、186-6)と片側に突き出るもの(74-7、129-23、135-3)があり、その前者をE₁類、後者をE₂類としておく。E₁類は、従来の「瘤付石器」に該当し、A・B類の基端の開くものや有抉石器のA類に近似する。

F類 大きな抉りをもち、大きく広がる基端の頂部に抉りを施して角状の突起となるもの。破損品1点(175-1)のみで、類例も少ない⁽⁴⁾。

以上、基部に表われた差は主に着柄方法の相違を反映すると考えられる。しかし、中間形態が多く、おのおのの変化は連続的であって、形態差の意味を見い出すことは難しい。今後一層の分析が必要である。

この石器群の最大の特徴は、素材剥片の形態に基づいた刃部の形状に認められる。すなわち、素材剥片は硬砂岩にほぼ限られ、自然面と主要剥離面とで形成される礫表皮剥片(素材剥片a)か、稀に表皮側に古い剥離面をもつ剥片(素材剥片d……178-8、186-1、素材剥片b……135-3)を用いている。刃部は打撃点と反対側に形成された緩い円弧状を描く鋭い縁辺を利用し、刃部側からみた刃縁は直線的である。また縦断面はやや湾曲するものもあるが、楔形に似た薄い両刃をなすものが多い。

有肩扇状形石器の調整は抉りのみに集中する傾向が強く、石器の大きさは素材剥片に規定され

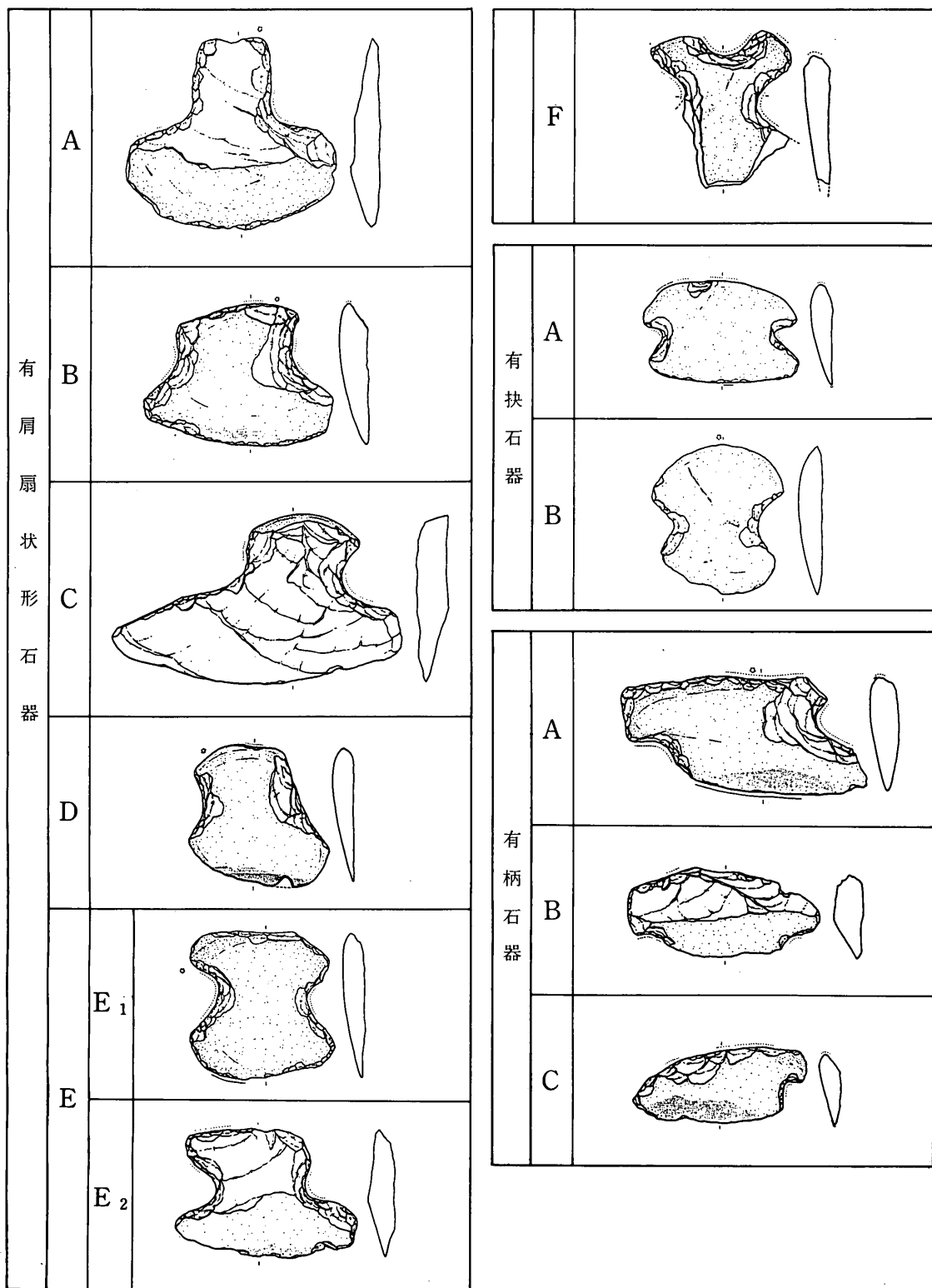


插图30 有肩扇状形石器・有挟石器・有柄石器的分類図

るといえる。重量は、第6表でみられるように150~250gに集中する傾向にあるが、全体では78~685gと非常に格差が大きい。形態別ではB類に重いものが多く、基部の大小が重量にかなり影響を与えていることが指摘できる。

石材は、先に述べたように硬砂岩にほぼ限定され、緑色片岩は1点のみ(32-8)である。

使用痕としては、刃縁の磨滅痕がある(30-14、74-4、129-33、186-9)。刃縁のみが丸くなる程度の限定された磨滅痕で、磨滅した刃縁は、正面からみると滑らかなカーブを描き、部分的な消耗による凹はない。

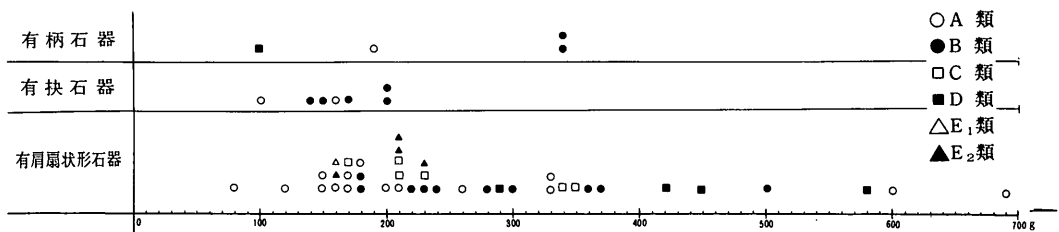
さらに注意されるのは、刃部に観察されるローを薄く塗り付けたような光沢である(28-3、30-14、32-9、33-9、43-1・2・7など)。光沢の範囲は、図中にはスクリーン・トーンで示している。刃部をもつ48点中15点(31%)に観察でき、先の分類のうち、刃部を欠失するF類を除くすべてのタイプにある。光沢は刃部の中央に集中し、刃縁に沿って刃部全体に及ぶものもあり、刃縁から基部方向に1~1.5cmの範囲に限られ、刃部の両面に片寄りなく同程度みられるものが多い。光沢の顕著なものをさらに詳細に観察すると、光沢の表面はツルツルと滑らかであるが、その割に石の表面は磨滅しておらず、この光沢は単なる磨滅面の発する光沢でも岩石中のガラス物質の光沢でもなく、付着物による光沢と考えられる。石器が作用した対象物の成分である可能性が最も高く、科学的な分析が必要である。

刃部には先の他に剥離痕が認められる。調整剥離様に連続した剥離痕(32-6・7、39-14、74-4、186-1・6など)や不規則で断続的な剥離痕(43-5・9、74-2、186-5など)や刃こぼれ状の小剥離痕(38-14、43-1、178-8、186-9など)である。こうした剥離痕はロー状光沢部分を切って形成されるもの(39-4、43-1、186-5など)が多く、光沢付着後の使用痕ないしは破損と考えられる。また、この石器の用途について過去に土掻きないしは草掻きとする説が有力であったが、土擦れ状の磨滅痕は皆無であった。

なお、74-1は刃部を研磨する唯一の例であるが、刃縁は面取りされ、鋭い刃縁を形成するに至っていない。再調整途中品であろう。

⑦ 有挟石器

中形剥片の鋭く幅広い縁辺を刃部とし、両側縁に抉りをもつ打製石器である。従来の「有挟石器」にほぼ該当する。有肩扇状石器と近似するが、抉入部の調整に重点が置かれて柄状の基部を



第6表 有肩扇状形石器・有挟石器・有柄石器の重量分布表

作出する意図はうかがわれない。

住居址内の出土はなく、それ以外から8点がある。

有抉石器は、形態から2つに細分した。

A類 横長の剥片の両側縁に幅の狭い抉りを入れたもの。従来の「有抉石器」の典型であり、抉入打製石庖丁を大型化したような形態をなす(74-11・12、139-7・9)。有肩扇状形石器のB類・E類に近似している。

B類 やや縦長の剥片の両側縁に抉りを入れたもの。分銅形をなし、刃部はきつい円弧状となる(186-7・8)。2点とも遺構外で該期のものでない可能性もある。

石材は、すべて硬砂岩で、素材剥片は有肩扇状形石器と同様に自然面と主要剥離面とで形成される礫表皮剥片(素材剥片a)を用いている。

使用痕は、A類に刃縁の磨滅痕(139-7)とロー状光沢物の付着(74-12)や連続した剥離痕(38-9)・不規則で断続的な剥離痕(139-6)・刃こぼれ状の小剥離痕(74-12、139-7)が認められ、有肩扇状形石器との関連が考えられる。B類には使用痕は観察されない。

⑧ 有柄石器

中形剥片の幅広く鋭い縁辺を刃部とし、剥片の側縁の下端を抉って上端に柄部を作出した打製石器である。従来の「有肩鉞形石器」・「押し切り形石器」と呼ばれた石器群を含めて一括した。計5点がある。

有柄石器は、形態によって3つに分類した。

A類 両側縁上端部に方形の柄部と突起部をもち、刃部は大きく開くもの。従来「有肩鉞形石器」と呼ばれた石器に該当する。計3点(133-6・12、186-10)あり、うち2点は恒川Ⅶ期とⅧ期の住居址から出土している。

B類 両上端部に柄部をもち、刃部の張り出しが小さくて左右対照のもの。従来の「押し切り形石器」に該当する。恒川Ⅷ期の住居址出土の1点(67-10)がある。柄部の作出は粗雑で、主要剥離面の打撃方向は定かでないが、刃部は鋭い縁辺を利用している。

C類 片側の上端部に柄部をもち、ちょうど出刃庖丁に似た形をした小形石器である。137-5の1点のみで当地方でも初見である。

重量は、A類が338gと340gでほぼ一致し、B類は190g、C類は103gである。

石材は、硬砂岩のみで、186-10以外は自然面と主要剥離面とで形成された礫表皮剥片(素材剥片a)を用いている。

使用痕は、A類133-6に刃縁の磨滅とロー状光沢物の付着、C類137-5にロー状光沢物の付着が顕著に認められる。またB類67-10の刃部片面には粗雑な剥離痕をもち、刃こぼれと思われる。有柄石器も有肩扇状形石器との関連が注意されよう。

⑨ 横刃型石器

中形の剥片を利用した横刃の打製石器である。先に述べた「横刃型石庖丁」より一回り大きく、

従来から「横刃形石器(大)」や「大型の庖丁形打石器」などと呼ばれてきたものに該当する。

住居址からは9点がある。時期は、恒川Ⅰ期3点、Ⅱ期3点、Ⅲ期2点、Ⅹ期1点である。

34-6と129-1と177-8は、横長の礫表皮剥片(素材剥片a)にあまり調整も加えずに利用している。176-16は、素材剥片bに刃部調整を施し、さらに刃部の両端を浅く抉っている。127-2は、不整円形を呈し、一長辺に限らず周縁を刃部とすることから横刃型石器とするには問題があるが、ここでは一括した。

石材は、すべて硬砂岩であり、重さは、112gから228gである。

使用痕は、112-2は周縁に、そして溝址出土の136-18は刃部の主要剥離面側に磨滅痕が観察される。

⑩ 礫器

礫の周縁を打ち欠いて刃部を作出した打製石器である。

住居址から4点があり、時期別にみると、恒川Ⅳ期2点、Ⅴ期2点である。

28-8と33-7は、薄手で円形に近い形を呈し、周縁に調整剥離をもつ。31-11は、半分を欠損するようで全形は不明であるが、両面に自然面をもち、右側縁と下縁を直線的に調整している。29-4は、やや角張った自然礫の片面に階段状剥離を施している。

この他、溝址出土の38-2は、丁寧に調整された両面調整礫器で、遺構外の46-1とともに該期の可能性も高い。

石材は、輝緑凝灰岩・珪質片岩・硬砂岩が用いられている。

使用痕は全く認められなかった。

⑪ 磨製石斧

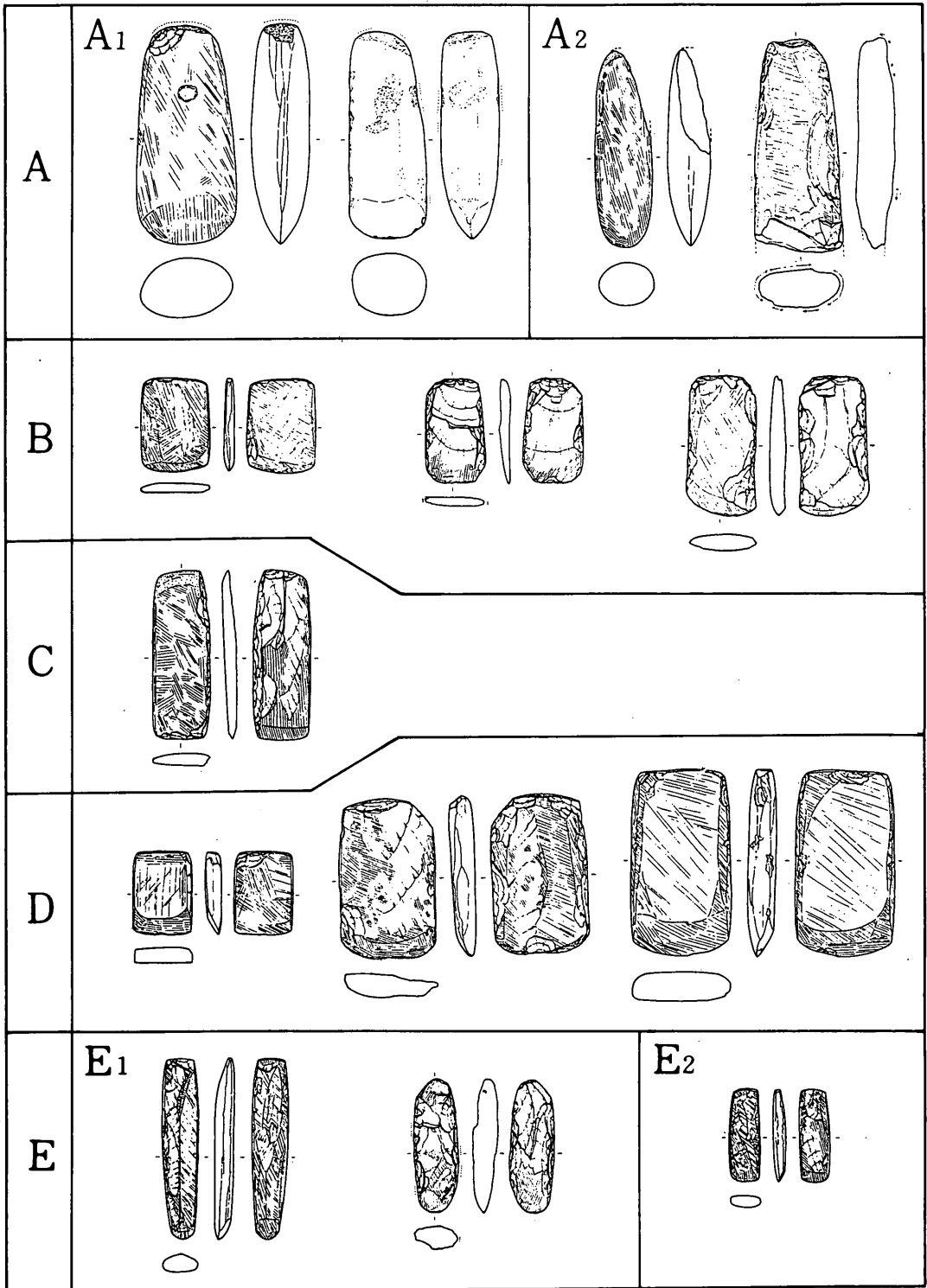
磨製石斧は、住居址から完成品24点、未成品2点が出土している。時期別にみると、完成品は恒川Ⅰ期4点、Ⅱ期16点、Ⅱ～Ⅲ?期1点、そしてⅧ期1点、Ⅹ期2点、未成品はすべてⅡ期である。このうち、Ⅷ・Ⅹ期の3点は混入品と考えられ、磨製石斧は恒川Ⅰ期・Ⅱ期に限定されるといえる。

形態は、該期の汎日本的な在り方と異なってバラエティーに富んでいる。形態および調整加工などから大雑把に5つに分類した。

A₁類 大型の両刃石斧。いわゆる大型蛤刃石斧(A₁類)と、この範疇に入らないもの(A₂類)に大別できる。

A₁類は、全面にわたって研磨され、横断面が楕円形で蛤刃をもつ石器である(28-14、146-11、174-10)。棒状のものや扁平なものがあり、多少のバラエティーをもつ。遺構外の141-10もこの部類であろう。石材は、重量のある火山岩(超塩基性岩)に限定されている。

A₂類は、非常にバラエティーに富んで細分も可能であるが一括しておく。調整に注目すると、ほぼ全面にわたって研磨されたものと、研磨が部分的で自然面や剥離を残すものがある。前者では、146-10は、蛤刃をもちA₁類に類似するが、基部上半部が着柄を意図して細身に調整されてい



挿図31 磨製石斧の分類図

る。174-9は、乳棒状を呈しカーブのきつい幅狭の蛤刃をもち、基端には自然面を残す。遺構外の149-15もこのタイプで、基端には自然面を残している。後者では、146-9は、両面に自然面を残し、扁平で直刃ぎみの円刃を作出している。177-7は、a面に自然面と剝離面、b面に剝離面を広く残している。遺構外・その他の40-3、45-5、133-7、141-8・11、149-14もこのタイプに含まれよう。石材は、ほとんどが輝緑凝灰岩で、火成岩類はない。

B類 扁平な両刃石斧。26-13は、b面破損後に再調整を施している。146-18は、扁平で幅広の方形を呈し、再研磨された刃部を除いては被熱によって赤色化している。189-4は、非常に薄く、刃部と両側縁のみ研磨している。石材は、輝緑凝灰岩・緑色片岩・粘板岩である。

C類 扁平で短冊形を呈する片刃石斧。174-8は、自然面や剝離面を残すものの丁寧に研磨されて、刃部片面をわずかに削り落として片刃を作出している。175-9は、打製石斧状を呈し刃部と側縁のみ研磨している。刃部を破損するが片刃であろう。石材は、緑色片岩と輝緑凝灰岩である。

D類 扁平で方形を呈する片刃石斧。いわゆる扁平片刃石斧である。遺構外も含めてみると、大きさから大(174-7、183-1)、中(45-3・4、178-9、189-2)、小(141-6、146-7、189-3)に大別できる。また調整加工に注目すると、調整が丁寧に側縁や基縁がきちんと面取りされたもの(146-7、174-7、189-2・3)、自然面や剝離面を広く残し面取りも不十分なものがある。石材は、火山岩(超塩基性岩)の174-7と189-2を除いては、劈開性に富む緑色片岩や粘板岩が用いられている。

E類 小形で細長い片刃石斧。いわゆるノミ形石器である。丸ノミとなるもの(E₁類)、平ノミとなるもの(E₂類)に細分できる。

E₁類では、174-6は、非常に整った優品である。176-16は、縦長の特徴的な剝片を利用し片面には自然面を広く残している。26-3・8は、調整剝離を丁寧に施してから研磨したもので、先の2点に比べてズングリとしている。石材は、緑色片岩と珪質片岩である。

E₂類は、174-15の1点のみで、側縁や基縁が面取りされ、刃部も明瞭な鋸をもつ。石材は、緑色片岩である。

次に、使用痕ならびに着装痕についてみる。

〈ススの付着したARY9号住居址の磨製石斧3例〉(挿図31-1~3)

ARY9号住居址は火事によって廃絶した住居址である。磨製石斧は6点が出土して極めて良好なセットをなすものとして注意されるが、そのうち3点は斧台や巻紐との接触でススの付着をまぬがれた部分と、ススの付着した露出部分とが明瞭に識別でき、間接的に当時の使用状態をうかがい知る絶好の資料である。

1(174-16) E₁類。長さ12.3cm、幅1.3cm、厚さ2.5cm。基端側半分に巻紐と斧台の痕跡、つまり着装痕が明瞭に認められる。巻紐跡は、a面の基端から6.0cmの範囲に器軸と直交方向に認められる。1条の太さは直径1.5mm前後で、巻紐間の間隔は狭く、20~30条程度は緊縛されたと思われる。

る。b面の基端側半分は斧台への安定を意図して平坦面をなしているが、この部分はススの付着は薄く、斧台跡と考えられる。また、刃部のa面には器軸方向に線状痕も認められる。したがって、この石器は片刃両側縁のb面を斧台に固定して細紐で緊縛したといえる。b面を前主面、a面を後主面として膝柄の斧台に固定した横斧⁽⁵⁾も想定できるが、棒柄の一端に平行に固定して叩きノミや突きノミとして使用された可能性も強い。

2 (174-7) D類。長さ12.6cm、幅6.8cm、厚さ1.9cm。基端側半分に巻紐と斧台の痕跡が明瞭に認められる。巻紐痕は、a面と右側縁の基端から7.0cmの範囲にあり、1条の太さは直径2.0mm前後とみられ、相互に2.0mm程度の間隔をもって巻かれている。不明瞭な基端寄りを除いて13条が数えられ、20条程度緊縛されていたと考えられる。斧台跡は、b面の基端から9cmの範囲にほとんどススの付着がなく、斧台と密着していたことを示している。左側縁にもススの付着がないことから斧台は左側縁側にのみ壁をもって石器を固定したと思われる。こうした着装痕から、この石器は片刃面のb面を前主面として膝柄の斧台に固定し、b面を後主面として細紐で緊縛した横斧と考えられる。

3 (174-10) A₁類。長さ14.7cm、幅6.7cm、厚さ3.9cm。床面にほとんど密着して出土したもので、密着面のb面にはススの付着がみられない。したがって着装痕ではないが、別の意味で注意される資料である。火事があった時に石器は着装されていなかったことは明らかで、これが直ちに着装されずに使用されたことを示すとはいえず柄の取り換え時の可能性も考えられるが、石器の基端の観察される著しい打撃痕から判断すれば、着装せずに楔として使用したことも十分推測される。A₁類は、作業に応じて着装・非着装の二つの使用方法が考えられる。

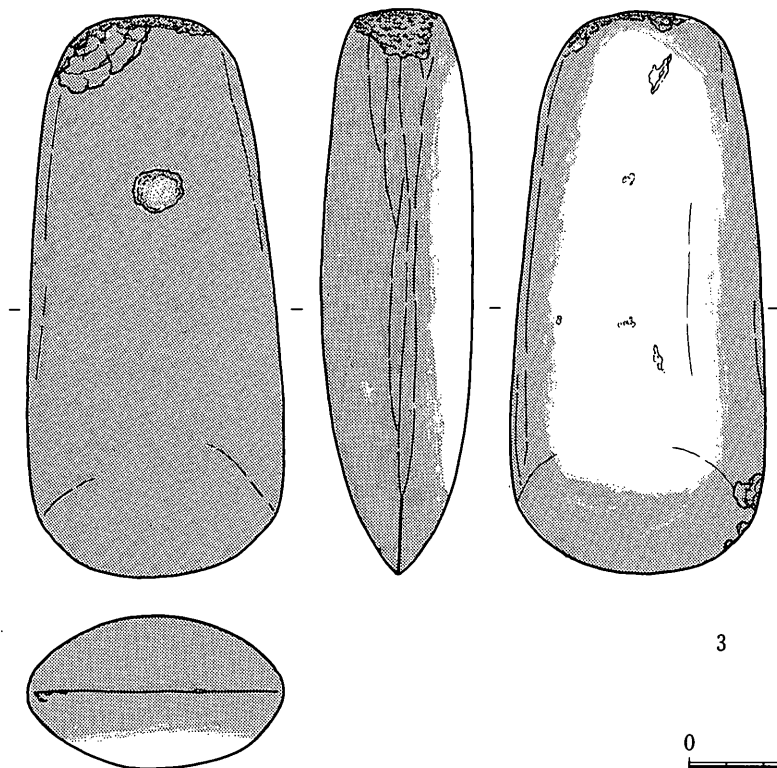
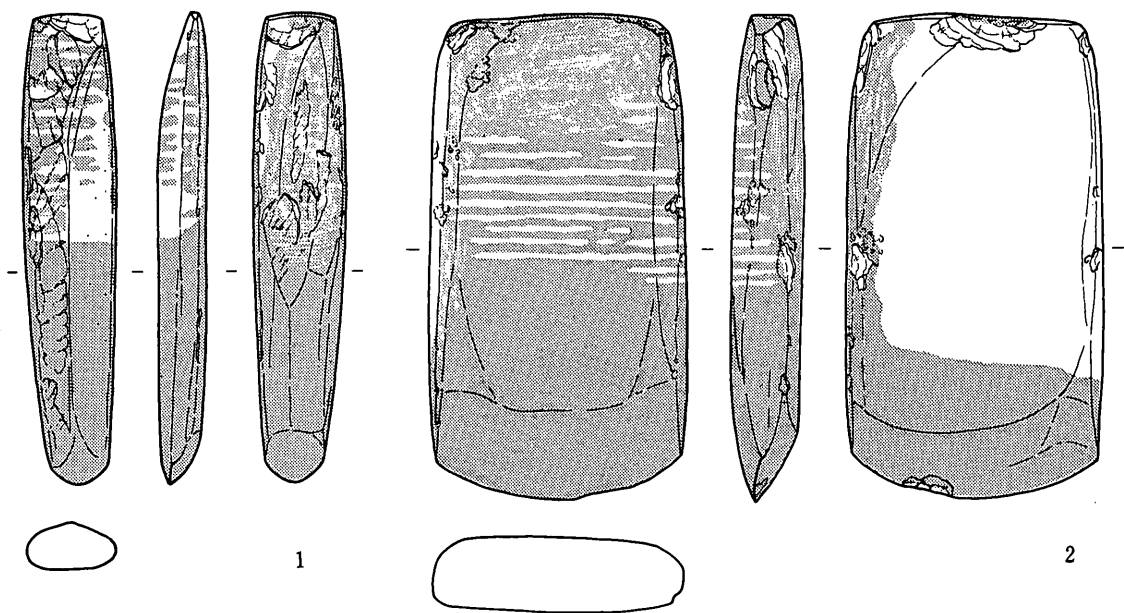
この他の石器にもかなりの使用痕が観察される。先の分類に従ってみていく。

A類 各部位に特徴的な使用痕あるいは二次的な調整痕をもつ。A₁類は、基端の著しい打撃痕が特徴的で、この石器の使用方法を暗示している。28-4は、基端寄りのa b面と両側縁に著しい敲打痕をもっている。A₂類は、A₁類のように基端に打撃痕をもつのは基端の面取りされた146-10のみで、他はその形状からみても打撃には不向きといえる。前者は基端から2.5~5.5cmのa b面と両側縁に、146-10は基端から3.5~6.4cmのa面と右側縁に直柄への着装痕と思われる磨滅痕が認められる。また146-10と149-15は、刃部の両面に器軸と斜交方向の磨滅痕が顕著で、前者のa面は右上がり方向となり右側縁を後側縁とした縦斧、後者はその逆で左側縁を後側縁とした縦斧と考えられる。149-9は、刃縁が完全に潰れて著しい使用を示している。146-10と149-15は、基端寄りのa b面に、141-11は、a面に横方向の軽いダメージがあり、146-9・10と177-7は、刃部寄りの両側縁にダメージをもつが、それらの意味は不明である。

B類 146-8は、基端面に磨滅による光沢が顕著である。

C類 146-18は、刃部に刃こぼれが認められる。

D類 178-8は、a面の刃部に刃縁と直交する線状痕をもつ。146-7は、両側面とb面との稜線が磨滅して光沢をもち、巻紐の緊縛によるものと思われる。



挿図32 ススの付着したARY 9号住居址の磨製石斧 3例

E類 E₁類の174-6は、片刃面の反対面(b面)に器軸方向の線状痕がある。176-17は、b面の基端から5cmの範囲と基端面が磨滅して光沢をもち、斧台との磨滅と思われる。26-3も基端面が磨滅している。

以上の使用痕の観察を踏まえて、おのおのの着柄方法と用途を推測しておく。

A類 A₁類は、先に述べたように縦斧ないしは楔として伐採・製材に用いたものと思われる。A₂類は、形態的な多様さから使用方法も様々であろうが、縦斧として伐採・製材に用いられたものがほとんどと思われる。

B類・C類・D類 横斧として切削加工に用いられたと考えられる。加工に応じた使い分けが想定できる。D類の大・中・小も同様であろう。

E類 E₁類は、先に述べたように横斧あるいは叩きノミ・突きノミとして木製品の穿孔や溝切りに用いられたと考えられる。E₂類も同様といえる。

⑫ 磨製石錐・打製石錐

石錐には、磨製と打製の両方がある。

住居址からは4点が出土し、時期別では、恒川I期3点(うち1点は打製)、V期1点である。黒曜石製の打製石錐169-14は、縄文時代の混入品の可能性もあるが、恒川I期まで残存したことも考えられる⁽⁶⁾。

磨製石錐は、緑色片岩や硬砂岩の薄手の剥片に調整剥離を施して尖頭部を作出し、その先端および側縁を若干研磨して錐部とするものである。180-1は、鋭い棒状をなし、31-5・176-16は、やや幅広の三角形を呈している。

その他、古墳時代後期住居址の3点(190-33~35)も弥生時代の磨製石錐の可能性もある。

磨製石錐に使用痕は認められなかった。

⑬ 砥石

明らかに対象物の研磨作業をした痕跡——砥面が認められる石器である。

恒川IV期・VII期を除く住居址から計17点が出土している。

砥石は、石材に砂岩(若干熱変成を受けてホルンフェルス化したものも含めた)や片麻岩が用いられ、風化が著しく進行して原形の不明なものが多い。大きさから、ごく小形軽量で片手で軽く握って用いた当擦型と、大形で地面に据えて用いた据置型の2つに分けられる。

当擦型は、2点(129-2、179-28)がある。ややきめの粗い砂岩製の荒砥で、細部の研磨整形に使用されたと思われる。恒川II・III期に属することから磨製石錐の製作用具と考えられる。

据置型は、中形と大形とがある。前者は特に風化が著しく破損品も多いが、厚味をもち側面に隅なく砥面をもつもの(37-6、179-10)などは著しい使用を示している。砥面が自然石の平坦面に限られるもの(30-12、33-5)もある。また67-14は、丸味を帯びた自然礫の側面に3面の中砥的な砥面をもち、一部に板状の金属で敲いたと思われるダメージが認められる。大形品は、自然礫の形状をとどめるものが多く、扁平楕円形の自然礫を用いた127-11・15、179-11は、片面

に広い砥面をもち、さらにその側縁にも砥面をもつ。中でも127-15は、側縁に面取り状の砥面が
あって石を立てての使用が想定され、その両側には溝状の研磨痕も認められる。33-6は、
塊状の自然礫を用いたもので、上下方向に細長い窪んだ砥面を多数もつ特徴的な砥石である。磨
製石斧用の砥石を思わせるが、恒川Ⅴ期であり、断定はできない。

該期の砥石は石製木工具から鉄製利器への変遷を探る間接的な物的証拠となりうるものである
が、今回、そこまで分析するには至らなかった。今後の課題である。

⑭ 敲打器

作業痕と思われる敲打痕や剝離痕をもつものを一括した。

住居址からは24点があり、恒川Ⅳ期・Ⅸ期を除く各時期から出土している。

形態は、バラエティーに富み、磨滅痕を共有するもの(31-7、33-2、128-12)もあって複雑
であるが、主に自然礫の形状と作業部位から大雑把に4つに分類した。縄文時代中期の分類と区
別するため、E~H類としておく。

E類 自然礫の端部にのみ敲打痕をもつもの。TAN・KUR5号住居址ではほぼ同形態の小
形品が7点揃い、注目される。このうち30-1・2・6を除く4点は、不整形を呈するやや縦
形の輝緑凝灰岩の尖った端部に敲打痕をもち、重量は65~125gで、指先で軽くつまんで使用した
と考えられる。30-1・2は、やや大形の硬砂岩・花崗岩を用いている。30-6は、輝緑凝灰岩
の両端に縦方向の剝離痕をもち、他とは若干異なっている。

132-6は、980gと大形で、硬砂岩の端部の敲打痕も顕著である。67-1は、炉縁石に転用され
たもので、長さ24.7cmの長大な輝緑凝灰岩の両端に平坦な敲打痕をもち、縦杵のような使用が考
えられる。

F類 棒状の自然礫の側縁や側面に著しい敲打痕をもったり、端部に剝離面をもつもの。31-
7は敲打痕と剝離面の両者をもち、さらに側面には砥面状の磨滅面をもつ。溝址出土の39-14も
これに類似し、側面には凹状をなす著しい敲打痕をもち、両端は剝離して八状に尖っている。こ
の剝離痕は敲打痕を切っており、それに遅れて形成されたもので、調整痕ではなく強い衝撃によ
る作業痕⁽⁷⁾と思われる。遺構外の46-6も同タイプである。28-11は、断面方形の角にあたる側縁
に糸掛け状の敲打痕をもち、擦痕もみられる。敲打痕の在り方は先のタイプとは大きく異なり、
あるいは糸掛けの調整痕とも考えられる。溝址の135-5も同タイプである。133-10は、端部寄
りの一面に敲打痕をもつ。石材は、硬砂岩・輝緑凝灰岩・ホルンフェルスが用いられている。

G類 扁平で楕円形の自然礫の縁部に敲打痕をもつもの。長軸方向の2箇所にもつものと同長
軸方向の4箇所にもつものがあり、さらに平坦面に敲打痕や磨滅痕をもつ。TAN・KUR7号
住居址にはこのタイプが2点あり、31-8は、長軸方向の両端と一面に、31-9は、長短軸方向
とa面中央に敲打痕をもつ(図化後の観察による)。128-12は、長短軸方向に敲打痕をもち、a面
には若干の磨滅痕も認められる。石材は、硬砂岩・安山岩が用いられている。

H類 比較的大形で重量のある自然礫の一端に敲打痕をもつもの。128-1の1点のみで、磨滅

ぎみの軽い敲打痕をもっている。重量は2430g、石材は輝緑凝灰岩である。

以上、本遺跡群の敲打器は、縄文時代中期のA類のように自然礫の周縁部に著しい敲打痕をもつものはなく、石器製作用具とは別の用途が考えられる。一層の分析が望まれる。

⑮ 端部曲面磨石

重量のある比較的大形の自然礫の一端に削き落としたような特異な磨面をもつ石器である。

恒川II・III期の住居址と溝址から計3点が出土し、今回初めて注意されたもので、類例は他に3点あり⁽⁸⁾、いわゆる磨石の中でも極めて特徴的な弥生時代中期の石器として抽出できる。

この磨面の特徴は、短軸方向に直線的で、長軸方向にスムーズなカーブを描く曲面となり、非常に滑らかで光沢を発する点にある。磨面を下にして水平面に置くと石器は直立し、長軸方向に力を加えればスムーズな半回転運動を繰り返す。この石器はこうした半回転運動によって機能したと思われる。

ARY 9号住居址出土の175-6は、高さ12.5cm、幅12.3cm、厚さ8.0cm、重量1880gを測る。磨面は、長軸が11.6cm、短軸が8.5cmの楕円形を呈し、非常に滑らかで光沢をもち、石器の静止時と最大傾斜時の主軸のなす角度——「最大振斜角」を測定すると、約28°をなす。磨面以外はほとんど自然面で自然礫の形状をとどめるが、上端部には著しい敲打痕があり、またa面にも横方向に延びるダメージが認められる。

GOB溝址7から出土した135-6は、高さ14.0cm、幅14.2cm、厚さ8.2cm、重量2850gで、磨面は、長軸が13.2cm、短軸が8.5cmの楕円形を呈する。風化が進んでいるが、部分的に良好な磨面を残し、最大振斜角は約38°を測る。自然礫の上端部は若干敲打されているとみられる。

GOB 8号住居址の127-9は、節理面で半分を破損しているが、やはり一端に滑らかで光沢のある磨面をもつ。先の2点と違ってやや角張った自然礫を用いているために、磨面も四角張ったと推測され、長軸8.5cm、最大振斜角は約22°である。自然礫の側縁の角には敲打によって抉りが施されている。破損面は磨面中央に打撃点が認められ、周縁の剝離痕は再調整と思われる。

以上の3つの石材は、超塩基性岩・変輝緑岩・輝緑凝灰岩で、いずれも硬質で重量をもつ。天竜川氾濫原の自然礫と考えられる。

磨面は、その形状や石材の硬さからみて使用による消耗によって形成されたものでなく、意図的に作出されたことは明らかである。磨面の形状は先に述べたように半回転運動による「磨り潰す」機能が最も効果的であり、対象物を粉碎・精粉した用途が考えられる⁽⁹⁾。側面のダメージや側角の抉りは、石器を前後(長軸方向)に振り動かす際の指掛けと推定される。「潰す」機能には「敲き潰す」もあるが、この石器の場合、磨面の形状と状態、それに重さから上下に操作したとは考え難く、127-9の破損については本来の使用によるものではなく偶発の衝撃によると思われる。

ARY 9号住居址では、端部曲面磨石の近くから石臼(175-8)が出土し、セット関係をなす可能性もある。さらに、175-6の磨面にはタール状の付着物が観察され、注意される。この石器の作業対象が有機物であった可能性が高く、科学的分析が望まれる。対象物の特定がこの石器の用

途の解明をするといえよう。

なお、遺構外出土の46-7は、卵形の自然石の一端に凸部でザラザラの機能面をもつ。主機能は「敲き潰す」と思われ、ここでいう端部曲面磨石とは区別される。石材にきめの荒い安山岩を用いる点も相異点である。

⑩ 石臼

大形で板状を呈し、一面に滑らかな磨面をもつ石器である。恒川II期のARY9号住居址から1点(175-8)があるが、床面からやや浮いており、混入品の可能性もある。風化による破損が著しく原形は不明であるが、現存長31.8cm、厚さ6.0cmで、かなり大形で板状をなしたものと推測される。磨面は平坦で非常に磨滅して光沢をもつ。端部曲面磨石との関連も考えられる。

石材は、閃緑岩である。

⑪ 台石

住居址の床面ないしはその直上に固定されたような状態で発見された扁平の大きな自然礫である。加工や著しい使用痕をもつ例はほとんどなく石器の認定は困難なものが多いが、出土状態と形状、使用痕の観察によって抽出を行なった。ただし、こうした自然礫は注意不足で取り上げなかったものもあり、TAN・KUR8号住居址とGOB6号住居址・17号住居址の3点は発掘時の所見と住居址平面図のみから認定したものである。

形状は、円形ないしは楕円形に近い扁平なものが多く、長短軸は12.8~40.0cm、厚さは5.3~11.4cm、重量は2000~21700gである。

石材は、花崗岩が7点、輝緑凝灰岩3点、硬砂岩2点、安山岩・閃緑岩が各1点である。自然礫の形状や使用面の状態はこうした石材によって異なり、使用痕の有無にも影響すると思われる。

使用痕は、観察できないものも多く、使用痕によって使用が確実なものは3点到過ぎない。31-17は、平坦面に若干の磨滅痕と敲打痕、側縁には剝離痕があり、132-9は、凸部にやはり若干の磨滅痕と敲打痕をもっている。34-8は、平坦面に様々な方向の擦痕が観察される。この3点はいずれも輝緑凝灰岩である。

こうした使用痕は観察できないが、丹の付着するものに30-13と28-1がある。ともに硬砂岩で、付着面は節理層が多くて凹凸している。前者は、床上7cmに丹の付着面を下にして出土した。後者は、住居址との付属関係が今一つ明らかでなく、厳密に言えば本住居址遺物から省いて考えた方がよいかもしれない。

住居址内における出土位置について簡単に触れると、入口部や壁際、柱穴際の外側に多い傾向がみられ、床面密着から床上10cmにあった。GOB16号住居址の132-9は、入口部近くの貯蔵穴の土手縁部に密着していたものである。さらに注意されるのはGOB14号住居址の台石で床面状に上面を出す程度に埋め込まれていた。これらの出土状態からみても、廃棄時の投げ込みやその後の混入とするより住居存続時に使用されていたと考えられる。

これらの台石の用途は、ベニガラ粉砕(30-13、28-1)、藁叩き台、粘土の練り台、踏み台、

おもしなどが考えられるが、古墳時代後期以降の住居址からも多く出土しており、それらも含めての検討は次編に譲る。

⑩ 磨製石鏃

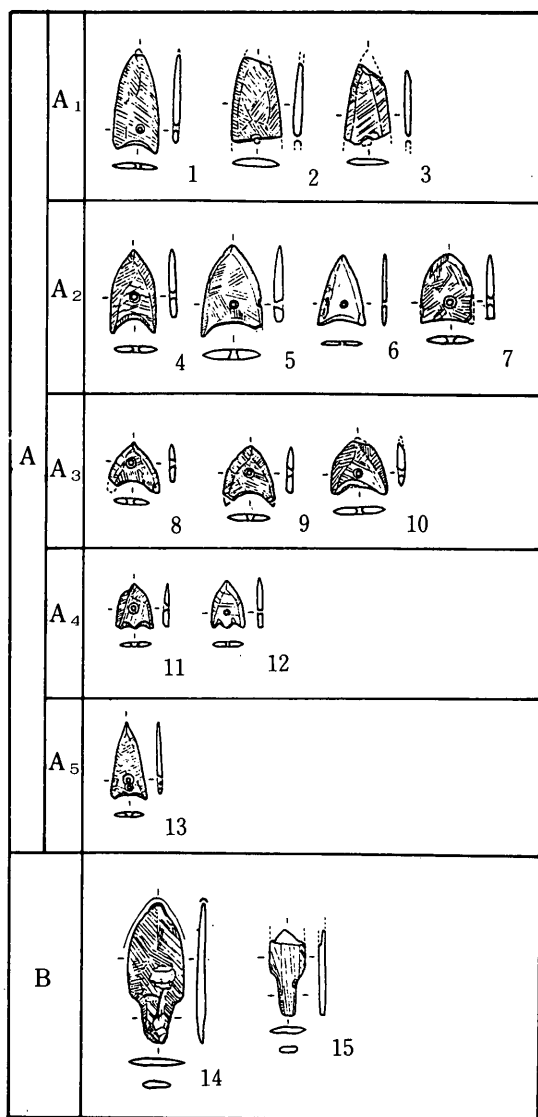
磨製石鏃は、完成品と未成品とがあって遺構の内外から多量に出土している。該期住居址からは完成品16点、未成品93点が出土し、時期別にみると、恒川 I～X 期まではほぼ通じて出土しているが、当地方の一般的傾向からみてVI期以降は混入品の可能性が高いといえる。溝址など他遺構や遺構外の出土品は、完成品30点、未成品127点を図示したが、TAN・KUR、GOB、ARY は特に多く、弥生時代中期後半の住居址との関連で押さえられよう。

完成品

形態は大きく2つに分類した。

A類 有孔の凹基鏃。細長くて大形のもの(A₁類)、ズングリとした小形のもの(A₃類)、その中間的なもの(A₂類)、最も小形で基部に舌状の突起をもつもの(A₄類)、さらに先の4つが基部近くの中央に単孔をもつものに対して器軸方向に2孔をもつもの(A₅類)である。このうちA₂類が最も多く、さらに細部をみれば側辺の外湾するものと直線的なもの、基部の抉りの深いものと浅いものがある。A₃類の挿図33の8は、孔が先端部寄りに位置し孔と基辺の間はやや薄く研磨して装着を容易にしており、先端部は針状に突起して非常に鋭い。A₄類の舌部は小形の石器をより強固に装着するための工夫とみられ、その作出には、11のように基部中央を抉り残したものと12のようにさらにその両側に切り込みを入れたものの二通りがある。A₅類の13は、非常に精巧な作りで先端部は針状に鋭く、2つの孔は異なった面から穿孔されている。長さは、A₁類が約3.7cm、A₂類が2.0～3.5cm、A₃類が2.2～2.5cm、A₄類が1.8・1.9cm、A₅類が3.0cmである。厚さは0.2～0.3cmと薄く、完形品の重量は0.7～1.9gを測る。

B類 無孔の有基鏃。2点がある。14は、



挿図33 磨製石鏃の分類図

長さ5.5cm、厚さ0.3cm、重量5.2gで、A類に比べて大形である。基部の長さは14・15とも1.5cm前後を測る。

磨製石鏃の石質は、劈開性の発達した珪質片岩と粘板岩が多く、緑色片岩も用いられている。

完形品は破損するものが多く、住居址出土品では完形品が2点、ほぼ完形品が3点のみで、さらに溝址及び遺構外出土品でも完成品が3点、ほぼ完形品が10点にすぎない。こうした高い消耗度は、石器自体の構造的な脆弱さを示すとともに、この石器が完形品として住居内に残される性格のものでないことを示唆していよう。住居址内の破損品は遺存状態がすべて基部に限られる点からみても、この石器の使用場所は集落外にあって、破損後に基部残片の装着された矢を集落内に持ち帰っては新しく製作した鏃と交替したと考えられる。

14は、縁辺が磨滅しており、あるいは鏃以外の用途も考えられる。46-14は、穿孔時かあるいは完成後に基部の破損したものを再加工したものであろう。

未成品

未成品の出土量は完成品をはるかに凌ぎ、たとえば恒川Ⅰ期～Ⅲ期の住居址をみると、完形品13点に対して未成品は55点もあり、総数の80.9%を占める。

製作工程は、既に神村氏の研究(神村1953)で明らかにされたように、4つの工程がある。ここでは、挿図34・35のように分類・整理した。

I. 粗割

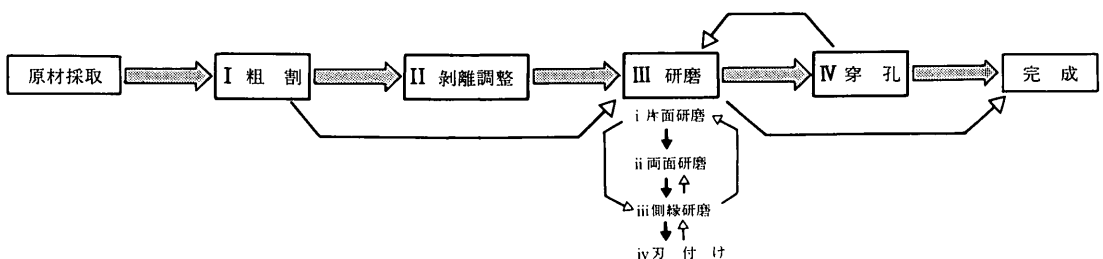
原材から薄くて手頃な素材剥片を割取する工程。素材剥片には自然面を大きくもつ礫表皮剥片とそうでないものがあり、前者から推定される原材は小形で円形をなす扁平な自然礫であり、天竜川の氾濫原にはこうした形状の珪質片岩や粘板岩が多い。

II. 剥離調整

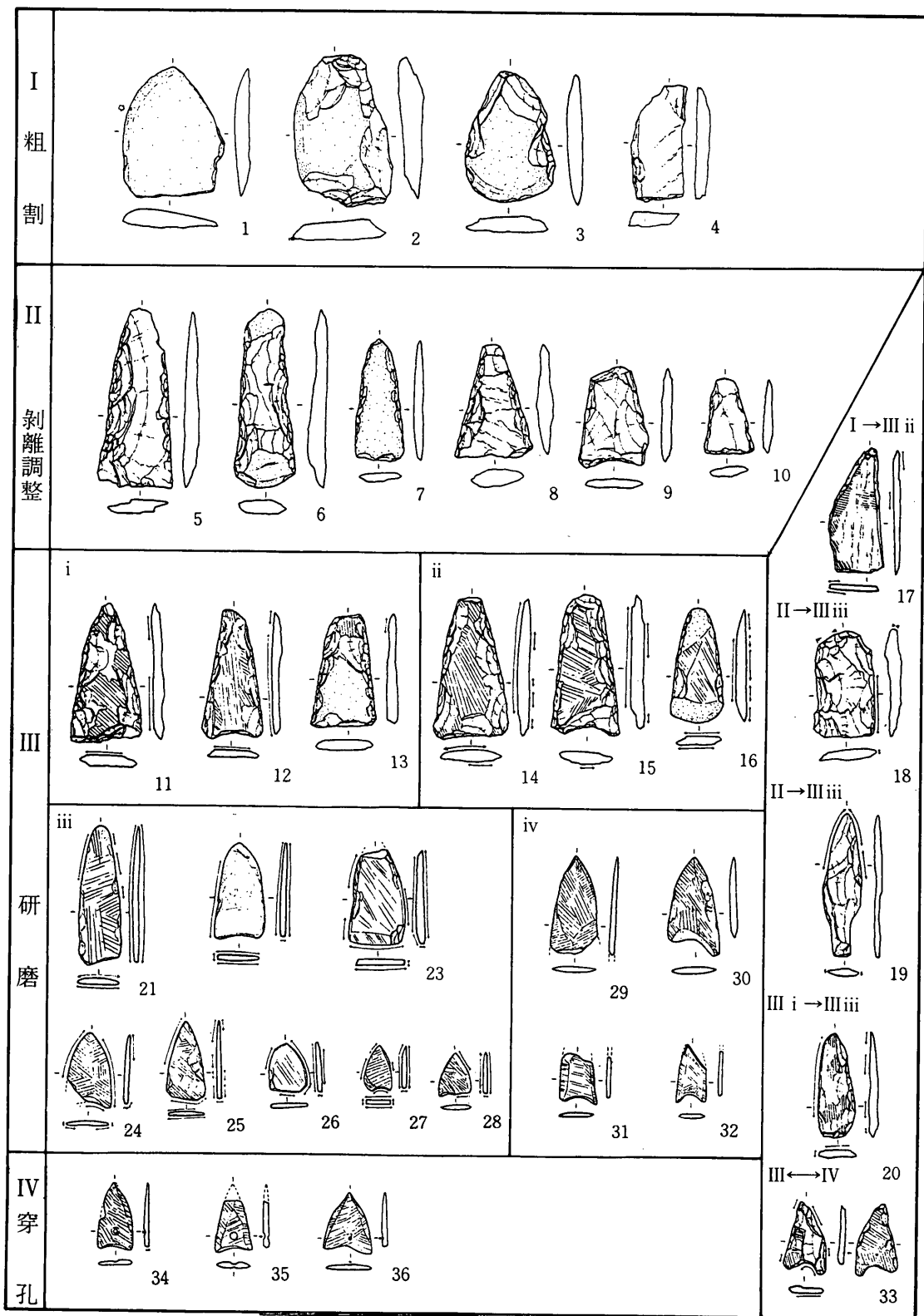
素材剥片を調整剥離して原形を整える工程。⁽¹⁰⁾調整は比較的丁寧で二等辺三角形状に整形する。基辺に抉りを入れるもの(挿図35-14)もある。大形品から小形品まであり、この段階で完成品の大きさがほぼ決定づけられている。例外的にこの工程を抜いて次のⅢ工程に移るもの(挿図35-17)もある。

III. 研磨

研磨によって形を整える工程。研磨の施された部位によって基本的には4つの段階がある。



挿図34 磨製石鏃の製作工程模式図



挿図35 磨製石鏃未成品の製作段階分類図

- i. 片面研磨 最初にどちらか片面から研磨が開始される。この段階の未成品は比較的多く、片面のみをある程度まで平坦にした後にもう片面の研磨に移ることが多いといえる。
- ii. 両面研磨 両面の研磨によって、厚さを薄く一定にする段階。
- iii. 側面研磨 側縁を研磨して平面形を整える段階。側縁は面取り状を呈する。基辺に抉りが施される。
- iv. 刃付け 側縁に刃を付け、抉りを仕上げる段階。形状はほぼ完成される。

おおよそ i から iv の順に加工されるが、iii から始めるもの(18・19)や i の後に iii をするもの(20)もあり、また ii と iii と iv の繰り返しも想定される。

IV. 穿孔

着柄のための紐孔をあける工程。したがってB類にはない。片面穿孔をするものと、片面穿孔した後に対面の孔口を整えるものがあり、何度か穿孔を試みた痕跡を残すものもみられる。例外的にIII工程が完了する前にIV工程をするもの(33)もある。

弥生時代中期の恒川 I ～ III 期の住居址について各製作段階別に数量を集計してみると、I (2点)、II (31点)、III i (7点)、III ii (2点)、III iii (2点)、III iv (4点)、IV (3点)、その他(4点)、完成品完形・ほぼ完形(4点)、完成品破損品(9点)

となる。先に述べたように、未成品は完成品の約4倍にも達している。次に未成品の中の各製作段階別の割合をみると、

I (3.6%)、II (56.4%)、III i (12.7%)、III ii (3.6%)、III iii (4.0%)、III iv (7.3%)、IV (5.5%)、その他(5.5%)

となり、IIの段階が卓越している。TAN・KUR19号住居址では破片が多量に出土し、住居址内でも剝離調整が行なわれたことは明らかである。一度にIIの段階まで複数仕上げた後、順次、研磨と穿孔を経て完成されたものと思われる。

⑱ 打製石鏃

住居址からは4点が出土している。時期別にみると、恒川 I 期2点、II 期1点、V 期1点で、V 期は確実に混入品と考えられる。他の3点(166-11、169-5、181-30)は、玻璃質安山岩・黒曜石製の無茎平基鏃・無茎凹基鏃で、いずれもARYであることを考慮すれば縄文時代早期の混入品の可能性が極めて高いが、断定はできない。⁽¹⁾

遺構外の40-6や182-4などの有茎鏃、特に前者の玻璃質安山岩製の有茎突肩鏃は弥生時代中期の所産の可能性が高く、恒川 I 期までは一部残存したと思われる。⁽²⁾

⑳ 磨製石剣

磨製石剣は、可能性のある破損品や未成品を含めて総計9点が出土している。このうち8点はARY、1点はTAN・KURで出土しており、弥生時代中期の所産と考えられる。

まず、完成品についてみると、190-1は、長さ11.0cm、幅3.1cm、厚さ0.6cm、190-2は、長さ9.1cm、幅2.6cm、厚さ0.5cmを測り、いたって小形で精巧な作りの有柄式石剣である。前者は、

石剣特有のカーブを描く鋭い身部をもち、茎部の側縁は面取りされている。身部の両面には明瞭な鑄をもたず、この点は後に述べる3点と共通する。部分的に茶褐色の付着物が認められ、全面に丹が塗られた可能性が高い。後者は、茎部の区寄りに深い切り込みを入れている。身部の先端と側縁はよく磨滅し、実際に刺突具ないしは切断具として使用されたことを示している。

190-3は、破損した身部に調整剥離が施され、磨製石鋸への転用が意図されたのかもしれない。両側縁には区が残っている。190-4は、身部の破損品である。46-10は、身部先端の破損品で両面の左右を研ぎ窪めて明瞭な鑄を作出する点、先の4点とは異なっている。190-5は、研磨も粗雑で茎部に一孔を穿っている。携帯用の砥石かもしれず断定しかねるが、過去にTAN・KURで茎部に孔を穿った変形鉄剣形の磨製石剣が出土しており、同形態の磨製石剣の可能性を指摘しておきたい。

この他、未成品と思われるものが2点ある。179-4は、両面に研磨痕の認められる長さ11.0cmの未成品である。磨製石鋸としては大きすぎるために磨製石剣の未成品として扱ってきたが、厚さが0.3cmと薄い点で磨製石剣に仕上がるには無理があり疑問が残る。142-5は、刃が研ぎ出されていない未成品で、無茎の磨製石剣の可能性もある。長さ7.7cmと小形である。

石材は、珪質片岩が多く、他に輝緑岩・緑色片岩・粘板岩がある。

⑳ 石錘

恒川Ⅰ期の住居址から1点(178-9)が出土している。扁平な楕円形を呈する硬砂岩を素材とし、長軸方向の両端と右側縁を打ち欠いた礫石錘で、縄文時代のものと同形態の相違は全くなく、混入品の可能性もある。

㉑ 編物石

渡辺誠氏の精力的な研究(渡辺1976・1978・1981)によって注意を喚起された、もじり編物用の錘具と考えられる自然礫ないしは若干の加工をもつ自然礫である。加工はほとんど稀で、覆土中の他の自然礫との区別は個々の大きさや形状とともに出土状況や数量を大きな決め手とした。

該期で注意される住居址には、GOB16号住居址とTAN・KUR75号住居址の2軒がある。

GOB16号住居址(130-1~132-5) 恒川Ⅴ期。床面直上に分散して20数点の棒状自然礫が出土し、うち21点取り上げた。石材は、片麻岩・花崗岩各1点を除いてすべて硬砂岩である。長さは12.9~20.0cm、幅6.2~7.0cm、厚さ3.6~6.6cmで、重量は680~1535g、平均1008gを測り、編物用錘具としてはかなり重いが、糸掛け状の挟りを作成するもの(130-1~4)が4点含まれることから編物用錘具と認定した。

TAN・KUR75号住居址(35-10~37-3) 恒川Ⅹ期。1/2弱を検出しただけの住居址であるが、ほぼ3箇所の床面及び貼床直上に非常に多くの自然礫の集中がみられた(遺構編第25図参照)。反省すべきことに一部しか取り上げなかったため全様を再検討することはできないが、取り上げた棒状を呈する27点についてみると、硬砂岩23点、片麻岩3点、ホルンフェルス・チャート各1点で、長さ10.4~16.0cm、幅4.4~8.2cm、厚さ2.5~5.7cm、重量223~740g、平均513gであ

る。3箇所の集中(A～C群)について出土状況を記しておく。

(A群) 住居址南隅の床面及びはり床面上に分布する。住居址実測図には計24点の自然礫が記録されているが、取り上げたのは14点である。特に集中する11点は自然礫の長軸を揃えて出土した。

(B群) 住居址西隅から中央にかけて床面上に分布する。記録された約45個中、取り上げたのは1点のみである。

(C群) 東壁際のテラス状に一段高い部分から計10個が出土した。2個一対で直線的に並ぶ傾向にあり、編物台に吊した状況を想定しうる。両端の間隔は1.40mである。

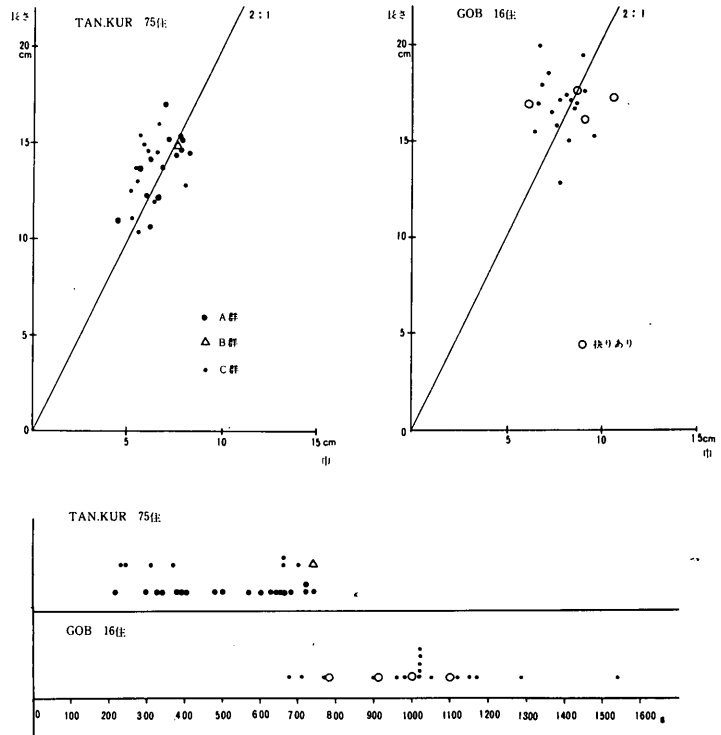
これらの編物用錘具と考えられる棒状自然礫は渡辺氏の分類(渡辺1981)のA6類にあたり、天竜川の氾濫原において容易に採集が可能である。糸掛けを施したもの(渡辺氏Ba類)は少なく使用痕も観察できないので、数量のそろわない住居址については石器の認定が困難である。ARY55号住居址(恒川II期)出土の棒状自然礫4点中の1点(179-29)は、中央の両側縁近くに方向性のない磨滅痕をもち、紐擦れの可能性が指摘できる。今回認定するに至らなかった棒状自然礫は他の該期住居址の多くからも出土しており、こうした礫の個々についていかなる基準をもって認定していくかが今後の課題の1つである。

⑬ 環状石器

円盤状の自然礫の中央に孔を穿った石器である。孔の貫通したものを完成品、未貫通のものを未成品とすれば、完成品は4点、未成品は5点ある。

住居址から6点が出土しており、時期別にみると、恒川V期5点(うち2点は接合)、IV期1点である。

完成品は、中央の孔以外にも敲打調整をもつもの(132-8)と、自然礫の周縁をほぼそのままとどめるもの(32-18、189-11)がある。このうち、32-18は、貫通時に中央に残ったギザギザの内サライをしておらず、完成一步手前とすべきかもしれない。すべて破損しているが、32-18は、T



第7表 編物石の長さ、幅、重量分布表

AN・KUR 8号住居址と12号住居址の出土品が接合したもので、注意される。

未成品は、両面に同程度の深さの摺鉢状の凹をもち、敲打による穿孔作業が両面から併行して進められたことを示している。周縁は調整剥離を施したもの(30-10、31-10)と無調整のもの(32-17、39-15、45-13、189-11)があり、前者、特に硬砂岩の31-10は、この後に周縁に敲打調整を施すことは考え難く、このまま孔を貫通させて完成品した可能性も高い。未成品はすべて中央から半分に破損し、穿孔工程時の失敗品といえる。

環状石器の法量は、径が5.9~9.8cm、132-8は一回り大形で推定15cmで、厚さは1.5~2.7cmである。

石材は、132-8と30-10が輝緑岩、他は硬砂岩5点、珪質片岩2点である。

調整や大きさや石質からみて、132-8と32-18のタイプとでは用途が異なったことも考えられるが、この石器の用途については不明といわざるを得ない⁽⁴⁾。

②④ 凹石

恒川Ⅳ期の住居址から1点(147-3)が出土している。扁平楕円形の硬砂岩自然礫の表裏面に主軸上に並ぶ3~4の凹をもっている。縄文時代の混入品の可能性もある。

②⑤ 磨滅痕のある礫

磨滅痕をもつ棒状ないしは扁平細長の自然礫である。側縁近くの一部に磨滅痕の限られる179-29を除けば計7点があり、時期別にみると、恒川Ⅱ期1点、Ⅲ?期1点、Ⅳ期1点、Ⅴ期3点、Ⅶ期1点である。

磨滅痕を再度観察した結果、図を是正すべき点も多くあるので個々について観察していく。

石質が緻密で軟質の輝緑凝灰岩や珪質片岩や粘板岩の小形の自然礫を使用したものと、石質が硬い硬砂岩や輝緑凝灰岩の一回り大きな自然礫を用いたものがある。

前者では、30-7は、a面が横方向にかすかに波打った感じに磨滅し、b面もわずかに磨滅している。31-1は、a面が内湾する程磨滅が著しく、縦方向の擦痕が明瞭に認められ、b面も磨滅が著しく、左側縁には板状の金属で敲いたようなダメージがあり剥離している。133-6は、a面に縦・横・斜め方向の擦痕をもつ磨滅痕が認められる。

後者では、33-2は、両面が滑らかに磨滅し、a面中央には“ひっかき傷”的なダメージをもつ。端部の左寄りには敲打面をもち、敲打器としても使用されている。175-5は、a面の磨滅痕と鋭い金属をこすりつけたと思われる線状痕が認められる。端部は剥離し、敲打器としても使用されたと考えられる。180-6は、両面が磨滅している。128-18は、a面の磨滅が著しく、b面には磨滅面と敲打痕、両側縁には敲打痕をもっている。右下の節理による破損面とその縁部には金属刃物によると思われる削痕も認められる。

この石器に観察される磨滅面は、対象物に働きかけた作業痕と思われ、33-1や128-18の金属を媒介したと思われる痕跡は、対象物が金属器であった可能性を示している。しかし、砥石とするには細長の自然礫を用いる点や硬質の岩石も用いる点、いかなる金属器の研磨に使用されたの

か解明すべき点も多い。ここでは「磨滅痕のある礫」と呼ぶにとどめたが、今後注意すべき石器の一つである。

②⑥ 磨滅痕のある剝片

恒川Ⅴ期の住居址出土の1点(32-19)がある。輝緑凝灰岩の剝片の側辺はa b面と直交方向の短い擦痕をもつ磨滅痕が顕著で、丸くなっている。b面の凸部も若干磨滅している。

②⑦ 加工された礫

加工痕が認められるが石器としての認定が困難なものを一括した。

住居址からは3点が出土している。

34-2は、やや扁平な棒状自然礫の一侧縁に剝離調整が施されるが、その意味は不明である。あるいは敲打器のように硬い対象物を打撃した際の作業痕かもしれない。石材は、ホルンフェルスである。68-16・17は、棒状の自然礫に剝離調整が施され、前者の左側縁には抉りも入れられている。礫核石器の打製石斧とも思われるが不明である。石材はそれぞれ粘板岩と緑色片岩である。128-11は、自然礫の端部を片面に打撃を加えて剝離している。石材は硬砂岩である。

(桜井弘人)

註

- (1) この他の名称として、「鋏形打石斧(器)」・「大形短冊打石器」、「打石斧」・「短冊形打石器」・「斧形石器」などがあり、統一的な名称が確立されておらず、こうした傾向は弥生時代の石器全般にいえ、混乱を招いている。本章で用いた名称もすべて適切とはいえず、石器の機能と用途に即した名称の統一が望まれる。
- (2) 従来分類の中で、神村透氏(松島1964)と酒井幸則氏(1977)は大小に分ける基準を15cmに求めており、今回の分類も結果的にそれを踏襲するものとなった。
- (3) 珪酸分(SiO_2)は、植物体内に沈積した特殊な細胞物質で、特に多量に含有するために珪酸植物の別名をもつイネ科植物(イネ・コムギ・オオムギ・トウモロコシ・ヒエ・シコクビエ・ススキ・ヨシ・タケなど)の葉身の表皮細胞に多く含有される(藤原1982)。石器に珪酸分が付着して光沢を発することは、カーウインの実験(小林・佐原1964)によっても確認できる。
- (4) 神堂垣外遺跡の溝址出土の1点がある。
- (5) 着装方法を想定した磨製石斧の分類や各部位の名称については、佐原真氏の名称(佐原1977・1982)に従った。
- (6) 恒川Ⅰ期に併行する北原遺跡では、磨製石錐4点に混じって黒曜石製の打製石錐1点が出土している(神村他1972)。
- (7) 実験では、棒状の硬砂岩を台石状の大きな石に垂直に強く振り下すと、端部は両面剝離して八状に尖った。力が弱い場合には端部に敲打痕が残り平坦面に形成される。
- (8) A R Y・北原遺跡表採品、中谷遺跡1号住居址出土品がある。

- (9) 木村剛郎氏は、大形の「敲石」について、周辺部の「ローラー面」を使った半回転運動による粉化実験を行なっている(木村1972)。対象物に大豆と麦と米を選んで木板の上で作業した結果、想像以上の威力を発揮し微粉化できたという。またシイやドングリなどの木の実でも有効であること、大豆を対象とする場合は台を少し掘り窪めた方がより能率的であると推測している。この実験結果は、端部曲面磨石の用途を考える上でも極めて示唆に富んでいる。
- (10) 中信には、剝離された薄い剝片を擦切技法によって調整する例もあるが、当地方にはみられない。
- (11) 磨製石鏃の製作址といわれる北原遺跡(神村他1972)でも、黒曜石製の打製石鏃が住居址から1点出土しており、例外的残存も考えられる。
- (12) 岐阜県の牧野小山遺跡では、弥生時代中期に伴う有茎突肩鏃が特徴的である(紅村・増子他1973)。
- (13) 市村威人・牧内雅博両氏によって『伊那』1953・7月号に報告されている。内緑岩製で、長さ17.2cm、幅4.5cm、厚さ1.6cmと大形である、なお、ARYでは190-1と同タイプの磨製石剣が武藤武男氏によって採集されており、9号住居址付近から出土したという。
- (14) 38-18タイプの環状石器について、七原恵史氏は、中央の孔に棒を通して回転させ周縁部で圧碎したものと考えている(七原1982)が、本遺跡群の少数例ではそうした作業の使用痕は認められなかった。

3 その他の遺物

1) 土製品

① 土製円板・土製角板

234-1～3は、いずれも恒川Ⅷ期のGOA4号住居址から出土した。

1は、表面が荒れて詳細は不明であるが、土器片の周囲を打ち欠き若干研磨したものと思われ、茶色を呈し、小石粒を含む。2・3は、壺の破片を利用して四辺を研磨したもので、土器内面にはハケ調整が残り、胎土は小石粒を若干含んで黄灰色を呈する。

② 土錘

234-4は、恒川Ⅶ期のGOA5号住居址から出土したもので、半分を欠損するが直径4.1cm、長さ4.5cmの管状を呈する。表面はナデ調整され、中央よりやや片寄った位置に直径1.0cmの穴があり、上下面の調整後に棒の突き刺しによって穿孔しており、両面に粘土カスのはみ出しがみられる。暗褐色を呈し、小石粒を含んでいる。

この土製品の用途は不明であるが、孔に棒か紐を通して一種の錘りに使用したと考えられる。

③ 焼成粘土塊

234-5は、恒川Ⅱ期のARY9号住居址炉址の北側約1m、台石の北東40cmの床面から出土した。長さ13.4cm、幅11.8cm、厚さ9.0cm、重量1063gを測る。表面は凹凸が激しくゴツゴツして数箇所をもち、a面中央に貫通する穴は内面が不整形で意識的な穴か疑問である。b面は側面図にみられるようにやや平坦面をなし、台に押し付けられた面と思われる。この側方には5つの指頭痕が残っている。胎土は小石粒を含んで茶色を呈し焼成も良好であるが、気泡や割れ目が多く粘土の練りは極めて不十分といえる。

この粘土塊の性格は、製品であったのかどうかも疑わしく、本住居址が火事にあい粘土塊出土地点近くの床面が焼土化していることから土器製作用の粘土が被熱で焼きしまった可能性も考えられる。とすれば、隣接する台石との関連も注意されよう。(桜井弘人)

2) 石製品

① 石製紡錘車

紡錘車には、土製品と石製品があり、後者には円盤状を呈するもの(A類)と截頭円錘形のもの(B類)があって、A類からB類への変化が考えられる。

弥生時代後期の住居址出土品は3点あり、いずれもA類で、恒川Ⅴ期に所属する。A類はこの他に溝址で1点、遺構外で5点があり、ここではこれらA類についてのみ触れておく。

形態は、両面が平坦で厚さが均一のもの(235-7・9・10・11)と中央に比べて周縁部の厚さが薄

くなるもの(235-6・8・12・13・14)がある。11は、軸孔近くに穿孔の凹を配し装飾文様としている。

大きさは、直径5.0~6.2cm、厚さ0.9~1.2cm、中央の軸孔の内径は0.4~0.8cmを測る。

石材は、第三紀層の砂岩が用いられ、他の石器に利用される硬砂岩と比べると固結状態は緩く表面はザラつき、色は白色ないしは灰色を呈する。研磨整形の容易な石材といえる。

(桜井弘人)

3) 玉 類

該期の遺構に伴出した玉類には、管玉及びその未成品・白玉・ガラス玉・土玉・メノウ製未成品がある。いずれも古墳時代前期の住居址に伴うもので、その概要は、第8表のとおりである。

玉類は、概して極小であるために調査時の水洗いが不可欠である。これら住居址のうち、水洗いを実施したのはTAN・KUR23号住居址の北東側調査部分であって、この部分からそのすべてを得ていることを明記しておく。

① 管玉

完成品3点と未成品5点がある。

完成品(236-1・2、237-1)は、長さ19.2~19.8mm、径3.8~5.0mmと細長く、上下両面から穿孔されている。色調は濃い黄緑色ないしはにぶい青緑色を呈している。

未成品(237-50~54)は、長さ16.7~20.0mm、径7.9~9.0mmを測り、側面に粗い研磨面を9~13面もって多角柱となり、各面には斜方向の擦痕が明瞭に認められる。このうち、54は未穿孔であるが、GOB4号住居址の4点(50~53)は、いずれも上下面に未貫通の穿孔痕をもつ。

50・53は、孔の縁部を破損し、52は、穿孔方向が斜めに傾き側面を破っており、製作技術の稚拙さを示している。なお、50~52は、住居址南東隅の2段の掘り込みをもつP₁からメノウ製未成品1点と出土したもので、注意される。未成品は、にぶい青緑色を呈している。

② 白玉

白玉は、恒川X期の住居址5軒のうち、4軒から出土をみた。このことは、白玉を基本的な祭

遺 構	管 玉		白玉	ガラス玉	土玉	そ の 他	時期
	完成品	未成品					
GOB 14住		1				メノウ製未成品 1	VI
" 15住				1			VI
" 4住		4					VII
TAN・KUR16住			11				X
" 23住	2		144	1	1		X
" 75住	1		24	1	7		X
" 90住			3		2		X

第8表 古墳時代前期の住居址出土玉類一覧表

祀具とする祭祀形態の開始時期が本遺跡群では本時期にあり、かなり普遍的に住居内へもち込まれたこと⁽²⁾を示すものと注目される。

白玉の形態は、側面の形態から次の2つに分類できる。

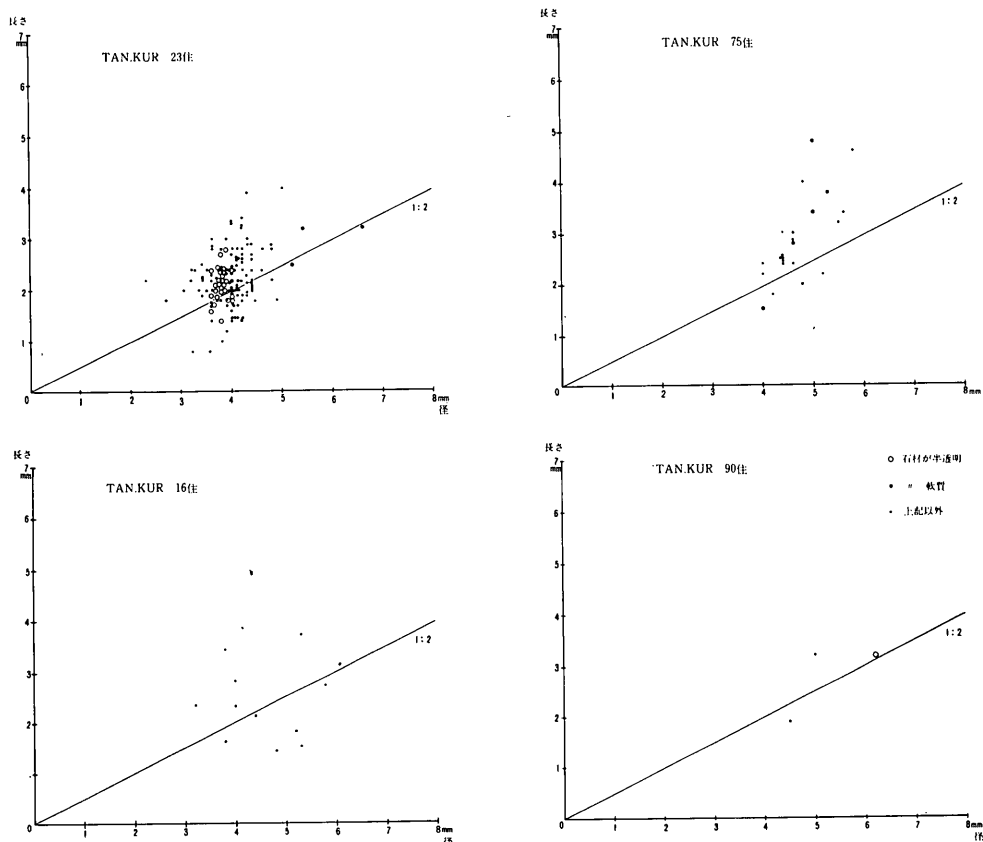
A類 側面部に明瞭な稜線や膨みを持ち、ソロバン玉形ないしは樽形を呈するもの。

B類 側面部に稜線や膨みをもたず円筒形ないしは截頭円錐形を呈するもの。径に比べて厚みのあるものと薄くて板状となるものを一括した。

また、上下面に注目すると、上下面のほぼ平行するもの(1)と極端に厚さが異なるもの(2)があり、その上下面には、両方とも磨かれているものとそうでないものがあるが、こうした違いは白玉の精粗や製作方法を知る上で重要な手掛りになるとと思われる。非研磨面をもつものについては、1'・2'のようにダッシュを付けて表記しておく。

TAN・KUR23号住居址(236-4~147) 計144点がある。未調査区ならびに水洗いをしなかった南西側調査区にも当然埋蔵が予想され、相当な量を保有したと思われる。火事にあっていること、高坏が異常に多い事実と合わせて、かなり祭祀色の濃い住居址として注意される。

白玉の形態は、A類が40点(27.8%)、B類が104点(72.2%)で、上下面の平行するものは102点



第9表 白玉の長さと径

(70.8%)、両面とも研磨されたものは134点(93.1%)である。大きさは、径が2.3~6.6mm、厚さが0.8~4.0mmで、第9表にみるように、径は3.4~4.4mm、厚さは1.4~3.0mmの狭い範囲に強いまとまりを示す。

石質は、不詳であるが滑石片岩類が主体を占め、緑色系統と濃い黒色系統の色調を示すものが多く、黒灰色系統の多い他住居址中においては目立った一群である。中でも、やや半透明でにぶい黄緑色を呈するもの28点は特徴的で、大きさは径が3.6~4.0mmとかなり強い斉一性を示す。さらに、この形態はA₁類1点、B₁類10点、B₂類7点でほとんどB類であることから、管玉状のものを輪切りにした製作方法による可能性が高い。これらも含めて緑色系統のものは側面に研磨の線状痕を残さない精製品が多い。また、爪(硬度2.5)で傷のつく滑石岩(硬度1)と滑石片岩の製品4点中3点は径が5mmを越えて他に比べて大形粗製である。

この住居址の白玉は本遺跡群のうちで最も小形精製で古い特徴をもつといえる。緑色系統の石材利用もその特徴の表われと考えられる。

TAN・KUR75号住居址(237-3~25) 計23点がある。形態は、Aが13点(57.5%)、B類が10点(43.5%)である。大きさは、径4.0~5.8mm、厚さ1.5~4.8mmで、厚さに大きなバラツキがみられる。石材は、黒灰色系統が多く、滑石岩の純度が高く白色を呈して軟弱のものは5点ある。23号住居址で注意されたやや半透明なにぶい黄緑色をなすものも1点がある。

TAN・KUR90号住居址(237-33~35) 計3点がある。形態は、A類が1点、B類が2点で、大きさは、径4.5~6.2mm、厚さ1.9~3.2mmである。石材は、2点が緑色系統、1点が黒色系統で、前者のうち1点は軟質である。

TAN・KUR16号住居址(237-38~48) 計11点がある。形態は、A類が6点、(54.5%)、B類が4点(45.5%)、その他が1点である。A類のうち38~40は、特に明瞭な稜線をもち、48は、磨滅のためか扁平で角の取れたリング状を呈する。石材は、黒色系統が6点、黒灰色系統が5点で、うち1点は軟質である。

③ メノウ製未成品

GOB4号住居址の1点(238-49)がある。上面に結晶の発達した節理面、下面に自然面をもち、三角柱状に割り取られている。色調はあめ色を呈する。玉類の未成品であろう。

④ ガラス玉

ガラス玉は、計3点がある。237-55と236-3は、やや大形で上下面は平坦面をなし、側面は前者が丸味を帯びた多面体、後者が同様の三面体となる。色調はともにコバルトブルーである。137-2は、非常に小さく扁平で丸味を帯びた円形をなす。色調はスカイブルーである。

⑤ 土玉

土玉は、計8点である。恒川Ⅶ期以前にはなく、Ⅸ~Ⅹ期に白玉とセットになって出現したものと考えられる。

形態は、大きく2つに分類できる。

A類 径と厚さがほぼ等しく丸いもの。

B類 径に比べて厚さがなく扁平なもの。

236-148は、ほぼ丸いA類で表面にはツヤをもつ。TAN・KUR75号住居址の7点(237-27~33)はA類が4点、B類が2点で、A類の最大は27の径8.2mm・厚さ7.6mm、最小は30の5.0mm・4.4mmで、土玉としては小さな部類である。B類は扁平で表面に凹凸が多く不整形である。236-37・38は、B類で黒色を呈し、表面にはツヤをもっている。(桜井弘人)

4) 金属器

今次調査により出土した金属器のうち、弥生時代~古墳時代前期の遺構から出土した金属器は17点である。該期遺構の範囲内から出土した総数であり、切り合い関係などから混入品もあると推測されるが、所属時期については記述中で述べる。

出土した金属器は銅製品と鉄製品で、前者には鍬・釘、後者には刀子・鍬・つり針・飾り金具がある。

① 銅鍬

一点のみ(238-13)あり、GOB溝址15から出土している。先端部と茎端部をわずかに欠くがほぼ完形であり、腐蝕が部分的に見られるが、保存状態は良好である。刃部先端は尖り、先端から1.5cmの所で挟られたように狭くなり五角形を呈する。刃部の中央両面に逆Y字形の鑄を有し、形態分類上定角式である。刃部と茎部には段が付いて、明瞭に分かれる。茎は中程でわずか段が付き先端にかけて尖り、断面形はほぼ円形を呈する。出土した3層は恒川IX期の堆積と推測される。

② 銅釘

恒川X期のTAN・KUR23号住居址から一点(238-3)出土している。床面上の覆土を水洗いで石製模造品とともに出土したが、該期の遺物とは断定しがたく、穴などとの切り合い関係が著しく、混入品の可能性がある。

③ 刀子

該期遺構出土の完形4点、刀子の破片と推定されるもの5点がある。

238-1は、TAN・KUR23号住居址から出土した。P₄上部からで、床面とほぼ同レベルであり、本住居址に伴う。鋒をわずか欠き錆化が進んでいる。やや内反りの刀身で、長さ9cm、身幅2cmを測る。片区であり茎は比較的厚く短い。

238-6は、茎片と推測され、恒川X期のTAN・KUR土坑8から出土している。

238-7は、ほぼ完形で、恒川X期の75号住居址床面から出土し、住居址に伴う。茎先端を欠き錆化が進んでいる。刀身はやや内反りで、身幅は最大1.8cmを測るが、錆のために区が確認できず茎との境が不明である。

238-8・9は、刀身片と推定できるもので、恒川VIII期のGOB27号住居址想定範囲内から出土している。当住居址は奈良時代と思われる建物址1に切られており、想定床面より10cm上の出土

という事もあって、該期の刀子片とは断定できない。

238-10は、GOB溝址15のBD47から出土しているが、身幅のわりに薄く刀子でない可能性もある。1層と2層の境目からの出土であり、時期は古墳時代後期以降の遺物と思われる。

238-12は、完形で、GOB溝址15のAY52の3層から出土している。小形で、刀身はやや内反りで長さ60cmを測り、刃は研ぎ減りをしている。片区で茎は身の厚さとほぼ同じ厚さを持つ。出土した土層から恒川Ⅷ期の遺物であろう。

238-16・17は、恒川Ⅱ期以降と思われるARY方形周溝墓1の周溝覆土から出土している。16は底部より14cm上から出土しているが、出土位置には時間の新しい穴のあった可能性があり、混入遺物であろう。鋒を欠くが両区で反りを持つと推測でき、時期の新しい形態である。17の刀子片は覆土上部からの出土であり、これも該期遺物とは断定できない。

④ 鉄鏃

該期遺構出土の鉄鏃・鉄鏃片と推測される遺物は4点である。

238-4は、恒川Ⅴ～Ⅷ期のTAN・KUR溝址12の底部近くからの出土である。現存部はわずかであるが、木質部が錆化して付着しており茎片と思われる。

238-5は、238-6と同じTAN・KUR土坑8の覆土上部から出土しており、茎片で刃部に向かって片側が薄くなっている。茎の形態からみると該期よりやや下がると思われる（大村1983）。

238-14・15は、GOB溝址15から出土している。14はAY52の5層から出土し、茎をわずか欠くがほぼ完形である。錆化がやや進んでいて、刃部は凸レンズ状にふくらんでおり、鏃の確認はできない。実測図の側面図は想定であり、刃は平面図で一番広い部分までは確認できるが、そこより下部は錆化のため不明である。茎の現存部はほぼ方形を呈している。形態から古手の鉄鏃（大村1983）である。15はAY51の4層から出土しており茎片であろう。14・15ともに層位から恒川Ⅶ期の遺物と思われる。

⑤ つり針

238-11は、確証はないが形態からつり針とした。GOB溝址15BB47の4層から出土した。層位から恒川Ⅶ期の遺物である。

⑥ 飾り金具

238-2は、恒川Ⅹ期のTAN・KUR23号住居址床面から出土したが、該期の遺物とは断定しがたく、前記銅釘と同じく混入品の可能性がある。（佐々木嘉和）

註

- (1) 第三紀層の砂岩は、本遺跡群近くの天竜川氾濫原やその周辺には転石も露頭もなく、最も手近に得るとすれば、さらに天竜川下流の下伊那郡阿南町周辺が採取場所と考えられる。飯田盆地一帯の弥生時代の石製紡錘車がこの石材に限られることは、この石器に石材選択の規制が働いたことを示している。
- (2) 住居址内への石製模造品類の持ち込みは、直ちに屋内祭祀の存在を意味しないが、金子裕之氏は竈神との関連を指摘している(金子1971)。本遺跡群の場合、その立地が神坂峠とその東麓の祭祀遺跡群から徒歩にして1～2日の距離にあって、東山道の要所であったことも注意しなければならない。
- (3) 神坂峠出土の白玉は、上下面の切断面と側面の疵などから、タガネ状工具による輪切りの製作方法が考えられている(椋山1969)。23号住居址では、切断面を未研磨のまま残すもの(ダッシを付けたもの)が9点あり、うち7点が半透明なものである。また、側面の疵(観察表の「裂痕」)をもつものは全体で4点、半透明に1点がある。上下面の一縁部の欠けるものは20点あり、半透明では4点である。これらの痕跡が先の製作方法によるものかははっきりしないが、その可能性も指摘しうるであろう。なお、椋山氏は入山峠の白玉を分析する中で、側面の裂痕について個別製作の際の折りや削りによる側面痕が修正しきれなかったものの可能性を示している(椋山1983)。

V 土器の編年

1 弥生時代中期から古墳時代前期土器の細分について

弥生時代中期の土器は3期に、弥生時代後期から古墳時代前期の土器は7期に細分でき、前者を恒川Ⅰ～Ⅲ期、後者を恒川Ⅳ期～Ⅹ期として、本遺跡群独自に土器編年を行ない、小時期を設定した。

当地方には、昭和40年代の前半までに確立した弥生土器編年（神村他1968）と、試案が発表された土師器編年（宮沢1968）がある。その後、弥生時期後期土器の細分（宮沢1975・1977）・同終末期型式の設定（宮沢1970）・遺跡単位での土師器の細分案（今村他1974）が発表されている。しかし、弥生土器には型式の混乱がみられ、土師器は南関東編年に準拠したもので、当地方独自のものではないなど、整備されたものとはいえない⁽¹⁾状況である。その中で、当地方の中央部に位置し、弥生時代中期末及び古墳時代前期の標式遺跡に位置づけられてきた本遺跡群での細分案は、今なお混乱状態にある土器編年に関して一石を投ずるといえる。それが時間尺度の整備を促し、当地方の古代史究明の手がかりと成り得ると考える。

細分する方法として、まず遺構単位で特に住居址出土遺物の一括性を重要視し、そこに残されているものは、ある一定の時間帯を共有するものであることを前提とし、出土状況・位置・層位を注意深く観察し、一括性が高いことを確認した上で、それに型式学的な検討を加え一定の整理を行なう。その後、遺構の切り合い関係や層位で把握できた溝址の遺物を新旧関係決定の参考とし、住居址構造・石器その他の伴出遺物など諸様相を加味し、総合的に検討を計り、最終的な細分案とした。

2 弥生時代中期

1) 恒川Ⅰ～Ⅲ期の設定

住居址36軒・溝址2・土坑1を対象とし、3期に区分した。住居址の掘り込みが浅く、それ以降の遺構に切られるものが多いため、すべての遺構で良好な資料が検出できたわけではない。該期を通じて器種構成にあまり変化がみられないので、器形の変化や文様の組み合わせなどを基準とし、完形遺物が少ないために、特に文様の変化を細分の指標とした。

口縁部・胴部 $\frac{1}{4}$ 以上、底部 $\frac{1}{2}$ 以上残存する個体数を、住居址とGOB溝址7について第10表で示した。それ以下の個体しか出土しない住居址は省略した。○は前述の基準以下の小破片が出土

器形 遺構		壺									甕					鉢					注口土器	手づくね	時期						
		A1	A2	B	C1	C2	C	D	E	底	A1	A2	B	C	D	底	A1	B	C	D				底					
T A N · K U R	1 住	2	1		1				2					1	1													II	
	9 住								1																			II	
	13 住	1								2							○											II	
	19 住	5			1				3	1				○		4												II~III	
	20 住															1												III	
	33 住	1																								1		II~III	
	59 住																											III	
	77 住	1														1	1											II	
96 住	1		1																									III	
G O B	8 住		1		○		1		1					1		1											2	III	
	9 住		1																									II	
	17 住		1									1																III	
	25 住	1									1	1																III	
	35 住	3	2				1			2	2					2												II	
	45 住								2	1	1	1					1	○	○									III	
	46 住											1	1															II	
	47 住	1				1	1									2												III	
	50 住								1																				III
	ミ 7		1						5	3	1					1	1	○		1						1		III	
A M D	17 住							1	1																			II	
	18 住	1			○				1	1						1					○							II	
A R Y	5 住			1																								II	
	9 住	1		1							3	1				2									1			II	
	10 住		1																									I	
	11 住	1															○											I	
	15 住	3	1																									I	
	23 住	2							1							1			1						1			I	
	24 住										○																	I	
	29 住								1																			I	
	51 住	1									2						1											II	
	54 住	1																										II	
55 住			1					1	1																		II		

第10表 弥生時代中期後半（恒川 I ~ III 期）の遺構出土土器一覽表

し、存在する可能性の高いものを示している。

(1) 恒川 I 期

ARY10号・11号・15号・22号・23号・24号住居址出土土器を標式とする。他に、ARY土坑10もこの時期に位置づけられる。一括資料に恵まれず、すべての住居址出土土器を合計しても17点の実測資料があるのみで、この時期の十分な内容を摘出することはできない。

器種は壺・甕・鉢がある。

① 壺

器形は壺Aのみに限られる。

壺A A₁は全体形を明らかにできないが、口縁部形態は、短くラッパ状に開くもの(157-4)と、直立気味に短く外反するもの(157-14、158-12)の2種類がある。いずれも、頸部が細く締まるのが特徴である。文様は頸~胴部にかけて3段施され、IVB₁(158-4・5)やIVC₁(157-6、158-3・11)がある。一部に無文のもの(158-1)もみられる。

A₂は口縁部が無文のA₂bのみである。A₁と同様口縁部形態は2種類あり、ラッパ状に開くもの(157-1)と、直立気味のもの(157-13)があり、頸部が細く締まるのもA₁と同様の傾向となる。文様ははっきりしないが、頸部に2本櫛の稚拙なIIIC₃が付けられるもの(157-1)がある。

② 甕

器形はAがあると思われるがはっきりしない。

甕A IVF₂に篋描列点文が付される胴部(157-12)があり、A₁と思われるが、断定はできない。他に、口縁部が直立気味のもの(159-12)があるが、小破片の復元実測であり、器形を特定するには至らない。

③ 鉢

器形はA・Cがある。

鉢A A₁は口縁部がわずかに外反し、端部に面取りを施し、その稜線上にIAが施されるもの(157-9・10、158-15・16)があり、土坑10の資料で、おそらく恒川I期と考えられる端部が丸く仕上げられるもの(161-23)もある。

鉢C 平底の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部で内側に湾曲する形態を呈し、器高10cm以下の小型のもの(159-4)がある。

④ 底部調整

最後に、壺と甕・鉢Aの底部の調整について触れてみたい。総数が7点で若干資料不足ではあるが、V₁のものが5点とほとんどを占め、V₃とV₄が1点ずつであり、圧痕が付くものが多いといえる。

本遺跡群のみの資料では不十分な内容といわざるを得ない。

(2) 恒川Ⅱ期

TAN・KUR 1号・13号・19号・77号住居址、GOB 9号・35号・46号住居址、ARY 9号・51号・55号住居址出土土器を標式とする。比較的良好な一括資料に恵まれ、その内容を明らかにすることができる。

器種は壺・甕・鉢があり、注口土器もみられる。

① 壺

器形はA₁・A₂・B・C・Dがある。Bの出現は恒川Ⅱ期に限定できると考えられるが、C・Dの出現は恒川Ⅰ期にさかのぼる可能性がある。

壺A A₁は頸部以下を明らかにできる。胴部が丸味を帯びたソロバン玉状を呈するもの(1-1)と、胴部が横に広がり丸味を帯びるもの(2-1)の2種類がある。頸部が恒川Ⅰ期に比べて太く、そのために口径も大きくなる(5-1)。底径もやや大きくなり、多少安定感を増す。施文部位は恒川Ⅰ期からの変化はなく、頸~胴部に3段施文を基本とする。胴部はⅢB・Cが主体で、後者の方が多い。恒川Ⅰ期では、櫛描横線文に篋描文の組み合わせであったが、櫛描横線文に櫛描文の組み合わせに変わり、ⅢB₂ⅣB₂(5-3)・ⅢC₁ⅣC₃(5-4)・ⅢC₂ⅣC₄(2-1)・ⅣC₆(81-2)などバラエティーに富む。櫛描の横線文に波状文が組み合わせられるもの(5-5)もある。恒川Ⅰ期と同様のⅢB₁ⅣB₁が施されるもの(5-2)もあるが、頸部が太い形態などこの時期の特徴を備えている。他に、頸~胴部にかけて櫛描の波状文を間隔をあけて多段に施し、それに基部に円形浮文を持つ櫛描鋸歯文つまりⅢC₂ⅣD₂(81-4)も恒川Ⅱ期から新たにみられるが、一点だけで主体とはなり得ない。

A₂は口縁部に文様のあるA₂aと無文のA₂bとがあり、A₁に比べると量は少ない。

A₂aは恒川Ⅱ期から新たに出現するものである。形態は口縁部以外はA₁とほぼ同様である(79-1)。文様は、櫛描文と篋描文に縄文が組み合わせられるのを基本とし、ⅡB₂(79-1、81-3)・ⅢA₁ⅣA₃(79-1)・ⅢA₅(81-3)などが施される。

A₂bは恒川Ⅰ期からの型式変化が追え、A₁と同様に頸部が太くなる形態が特徴となる(1-3)。文様は頸部に定型化したⅢC₃が施される。他に、頸部が筒状を呈し無文のもの(81-5)は、他にはみられない特異な形態である。

壺B 口縁部に文様のあるB aと無文のB bとがある。

B aは頸部が筒状を呈し、胴部中央部に最大径を持ち、底部は壺Aなどに比べ大きいため安定した感じを受ける(155-2)。文様も胴部に懸垂文を持つなど、特異なものである。受け口部がやや長く、文様にⅡB₃が施されるもの(155-1)は、単品出土でその位置づけは慎重に検討すべきであるが、ほぼ同時期のものといえる。

B bは一点だけあり(160-7)、その形態や文様構成等ははっきりしない。

壺C 口縁部の小破片のため断定はできないが、ラッパ状に開く口縁部となるC₁(5-6、

143-9)は恒川Ⅰ期にさかのぼる可能性もあるが、恒川Ⅱ期には出現したといえる。外面だけが丹彩されるもの(1-6)がこの底部になると思われる。

壺D はっきりとしたものは1例だけ(81-7)であるので、その形態や消長を本遺跡群だけで論ずることはできない。

壺E 恒川Ⅱ期のものは文様を持つE a(143-1)がある。恒川Ⅰ～Ⅲ期を通して2例だけの検出であり、客体的な存在といえる。形態は胴部中央部に最大径を持ち、口縁部と底部へ集束する丸味を帯びたソロバン玉状を呈する。甕D aに共通する文様として北信濃にまでみられるIV E₂が施される。

② 甕

器形はA₁・A₂・B・C・Dがある。

甕A A₁・A₂があるが、圧倒的にA₁が多い。恒川Ⅰ期が資料不足だったのに比べ、該期は豊富である。

A₁は、口縁部が直線的に外反し胴上部でわずかに張りを持ち底部に至り、ややずんぐりとした形を呈するもの(6-3、82-1、156-4・5)と、頸部から外湾気味に外反し胴部にほとんど張りを持たずに底部に至るやや器高が高くスマートな形のもの(4-8、156-2、159-21、160-14)の2種類がある。文様は口唇・頸・胴部にみられる。口唇部はA～Cがあるが、IAが最も多い。頸部はIII C₁が消滅し、III C₂・C₃が主体となる(82-1、156-3、159-21、160-14)。胴部で最も多いものは定型化したIV F₂で、それに楯描波状文が組み合わせたIV F₄(160-14)もあり、わずかに無文のもの(156-5)もみられる。半面、IV F₁は図化できるものは一点もなく、恒川Ⅰ期で消滅すると理解される。例外的に、口縁～胴部に波状文が多段に施されるもの(82-2)がある。

A₂は恒川Ⅱ期で確実な例は2点だけ(83-11、156-3)であり、量的には少ないといえる。形態は頸部がくびれるもの(156-3)と、あまりくびれないもの(83-11)がある。文様は2例ともIV F₂が施され、A₁との違いはみられない。

甕B 図化したものは1点だけで(83-12)あり、恒川Ⅲ期の典型的なものへ型式変化するとしてよいか疑問があり、同一範疇とできない可能性もある。形態は内湾気味に直立する口縁部で胴上部に最大径を持つややスマートな形を呈し、文様はIV F₄である。

甕C 図化したものは1点だけ(6-1)と数は少ない。口縁部が内湾し受け口状を呈する点は台付甕のDと共通するが、おそらく平底になると思われる。文様はIII C₁・IV F₃が施される。甕AのIII C₁は1例もなく、どちらかという恒川Ⅰ期の文様といえる。

甕D 口縁部形態は受け口状を呈する。胴上部に張りを持つ形態と文様構成によってCと区別できる。D a(7-11)とD b(2-3)がそれぞれ1点ずつの検出である。他に、3-1は、文様にIV F₅が施され甕Dに共通するが、大型であり、台付甕と断定できず、Dの分類の中には含まれてない。

③ 鉢

器形はA・Dがあり、B・Cの存在も予想される。

鉢A 小破片であるが、口唇部が面取りされ、刻む位置がやや端部方向へ移動してIAが施されるA₁（3-13）があり、該期の存在を確認できる。

鉢D 口縁部の小破片（143-14）が検出されていて、恒川II期には確実に出現すると考える。時期がややはっきりしないがTAN・KUR59号住居址出土例（7-4）は、内・外面とも丹彩されたもので、この器形の底部になると考えられる。

④ 注口土器

1点のみの検出である（155-10）。胴下半部に最大径を持つ無花果状の形態を呈し、胴中央部よりやや上に注口が付けられ、口縁部形態は不明である。文様は、頸～胴部に楡描の簾状文と波状文が交互に2段施され、外面と口縁部内面が丹彩される。

⑤ 底部調整

恒川I期と同様に、壺・甕・鉢Aについてみると、計41点のうちV₁13点・V₂1点・V₃5点と圧痕を持つものが減少し、V₄の無文ないしわずかに圧痕の付くものが18点と増加する。

鉢はやや資料不足であるが、その他はほぼ全容を明らかにできたといえる。

(3) 恒川III期

TAN・KUR33号・96号住居址、GOB8号・17号・25号・45号・47号・50号住居址と溝址7出土土器を標式とする。恒川II期に比べるとやや資料不足であり、特に、壺にその傾向がみられる。

器種は壺・甕・鉢・手づくねがある。

① 壺

器形はA₁・A₂・B・C・Eがあり、新たに出現するものはない。

壺A A₁は、太い頸部から外反する口縁部で、細かいIII C₂が施されるもの（7-1）がある。他に、口縁部が図化できたものはない。胴部の3点（8-1、80-1、84-1）はA₁と考えた。形態は、基本的に恒川II期との差異はみられないが、文様にその変化が読みとれる。恒川II期では頸～胴部にかけて3段施文を基本とし、ほとんど例外がなかったが、恒川III期ではこのパターンがくずれ、文様が胴上部から頸部に集中するもの（7-2、8-1）、連続山形文が懸垂文に近い縦長のもの（80-1）、連続山形文が恒川II期までは3段施文の下の2段の間を埋めたものが上の2段の間を埋め、その下には楡描波状文が施されるもの（84-1）などがある。

A₂は恒川II期と同様に口縁部に文様を持つA₂aと無文のA₂bがある。

A₂aは恒川II期のA₂bから型式変化すると考えられ、太い頸部から外反する口縁部で、II B₁ III C₃が施されるもの（78-1）がある。他に、住居址では検出できなかったが、TAN・KURの遺

構外出土で、ややしっかりした受け口状口縁部となりII B₂を2段に施すもの(23-8)も恒川III期である可能性が高い。

A₂bは口縁端部でわずかに内湾するもの(85-6)がある。文様は頸部以下が残存せず不明である。

壺B 口縁部内外面に稜線を持つ受け口状口縁を呈し、頸部に刻目文が付けられる凸帯を持ち篋描文が施されるBa(8-2)が、一点だけ検出された。

壺C C₁・C₂がある。C₂は恒川III期で検出されたが、恒川II期から出現する可能性が高い。

C₁は口縁部の小破片(78-6)があり、わずかながら恒川III期にも残存したと思われる。

C₂は口縁部に棒状浮文が付けられる(84-5)。胴部のみであるので、C₁・C₂の区別ができないが、胴中央部に最大径を持つ丸味を帯びたソロバン玉状を呈するもの(84-6)もある。

壺E 内・外面とも丹彩され把手が付くEb(78-5)が1点検出された。形態は恒川II期のものに比べ胴部が丸味を帯び、口縁や底部にあまり集束せず、口径・底径ともやや大きくなる。

② 甕

器形はA₁・A₂・B・C・Dがある。新たに出現するものはないが、定型化したBは恒川III期に限られる。壺に比べると実測資料が多く、ほぼ該期の内容を明らかにできる。

甕A A₁・A₂があるが、前者が1点に対し、後者は6点と量的に多い。

A₁は直立気味の長い口縁部で、胴上部がほとんど張らずに底部に至るため、頸部がはっきりしない(82-10)。文様はIII C₂IV F₇の施文で、頸部付近に集約される。

A₂は形態に2種類あり、頸部がはっきりせずやや長い直立気味の口縁部を持つもの(79-3、80-4、86-2)と、頸部がはっきりしやや外反気味の口縁部を持つもの(83-1、86-1・3)がある。文様はIV F₂が基本的に消滅し、頸部付近に集約される傾向をみせ、III C₂IV F₅(79-3、80-4)・III C₃IV F₈(83-1)の他、無文のもの(86-2・3)もある。

甕B 図化したものは2点だけである。形態は口縁部が直立気味に外反し胴部に最大径を持ち、器高が低く上から押しつぶされたような印象を受けるもの(80-3、86-4)である。台付甕であろうとの推定(佐藤1983)もあるが、現在までのところ完形で出土した例はなく、本遺跡群の分類では底部形態は保留しておくが、その可能性も十分に考えられる。文様は恒川II期の甕Aに類似し、III C₂IV F₂が施される。

甕C 78-11・12があり、形態は恒川II期との変化はあまりみられない。文様は口縁～胴部にかけて施され、II A₁ないしA₆・III C₃・IV F₂である。

甕D 口縁部の図化できたものがないがGOB50号住居址出土の脚台部(85-5)は、調整等から該期のものと考えられる。

③ 鉢

器形はA₁・A₂・B・C・Dがある。

鉢A A₁は1点だけの検出である(82-9)。形態はやや小形化する他は典型的な深鉢であり、

文様は口縁端部に I A が施される以外は無文である。A₂ は G O B 溝址 15 から出土したもの (121-15) が恒川 III 期の可能性が高いが、該期の遺構からの検出ではないので確定できない。

鉢 B 小破片 (83-9、87-1) であるが、恒川 III 期に属すと考える。

鉢 C 小破片 (83-10、87-3) であるが、直立気味の口縁部となる形態を呈し、恒川 I 期のものが口縁部で内側に曲がったのに対し型式変化も認められ、恒川 III 期のものと考えられる。

鉢 D 口縁部が水平の鋤口状を呈し、胴部は下の方に直線的に伸びる。全体形は不明であるが、途中で稜を持って底部に至るもの (78-9) と思われる。鉢と考えたが、高坏の可能性もある。

④ 手づくね

住居址からの出土は G O B 8 号住居址の 2 点だけである。78-8 は内・外面とも丹彩され、口縁部を欠くが広口壺を小型にした形態を呈する。78-10 は、底部からそのまま立ち上がる鉢形を呈すると思われる。他に、G O B 溝址 7 から底部 (87-2) が出土した。

⑤ 底部調整

恒川 I・II 期と同様に、壺・甕・鉢 A についてみると、20 点中 V₁ が 4 点、V₂ が 1 点の他は圧痕が付かないものが 15 点と、恒川 II 期にみられた底部調整の簡略化がより進行する。これは、底部に付いた圧痕を調整で消すようになるというより、何も敷かなくても済むような技術変革があったことを示唆していると思われる。

以上が恒川 III 期の内容である。再三触れているように壺に問題を残すが、甕に関してはほぼ該期の内容を明らかにできたといえる。

2) 恒川 I～III 期の特徴

該期の主要器種である壺と甕を中心に、器形・形態・文様などの変化を概観して、特徴をまとめてみたい。

① 壺

器形 恒川 I～III 期を通じ A が主体で、中でも A₁ が多い。B は恒川 II 期から出現し恒川 III 期に続くと思われる。C・D は該期を通してあると思われるが量的に少なく、その消長を論ぜられる程の材料は得られなかった。E は恒川 II 期からみられたが、恒川 I 期から出現する可能性もある。

形態 形態変化を追えるものは A・E である。A は恒川 I 期では細い頸部から短く外反する口縁部を持ち、口径も小さい傾向がある。恒川 II 期から頸部が太くなり、口径も大きくなる。胴部の形態には恒川 I～III 期まで基本的な変化はなく、丸味を帯びたソロバン玉を呈するものと、やや横に広がって丸味を帯びるものの 2 種類があると考えられ、時期差を示すとはいえない。E は恒川 II 期の丸味を帯びたソロバン玉状を呈するものから、恒川 III 期の口縁部へあまり収束しない丸味を帯びた形を呈するものへの形態変化が認められる。

文様 主要な器形である壺 A についてみると、A₁ と A₂ で違いがあり、A₁ は頸部に 1 段、胴中央

部よりやや上までに2段の計3段施すのを基本とする。文様構成に3種類あり、ⅢBとⅣB、ⅢBないしⅢCとⅣC、ⅢCとⅢDの組み合わせがある。後者は3段以上施されることが多くなる。量的に多いのは前二者であり、その変化をたどり得る。恒川Ⅰ期では櫛描横線文に篋描文が組み合わせられ、恒川Ⅱ期では櫛描横線文にその他の櫛描文が組み合わせられ、恒川Ⅲ期では櫛描文の組み合わせには変化はないが施文パターンがくずれ、文様の集中化や簡素化がみられる。壺A₂はA₂aとA₂bで違いがあり、A₂aはⅡB₂ⅢAが、A₂bは頸部以下に櫛描簾状文が施される。A₂aの変化は本遺跡群資料では不明であるが、縄文を地文とするものが古い傾向にあるとも考えられる。A₂bは恒川Ⅰ期が2本櫛の稚拙な簾状文なのに対し恒川Ⅱ期から定型化する簾状文となり、恒川Ⅲ期へと続く。施文方法は恒川Ⅰ～Ⅲ期を通して左回りである。

② 甕

器形 恒川Ⅰ～Ⅲ期を通じてAが主体となる。しかし、恒川Ⅰ期は器形のわかる甕が検出されず実態が不明であるが、煮沸状態としては鉢Aの存在が主体となっていた可能性もある。恒川Ⅱ期からは鉢Aはわずかになり、Aが主体的な地位を占める。中でもA₁が主でA₂は従である。他に、B・C・Dもあるが主体的なものではない。C・Dは恒川Ⅰ期から出現するものである。恒川Ⅲ期も器形構成に基本的な変化はない。Aが主体を占め、B・C・Dがわずかにある。AはA₂が多く、恒川Ⅱ期とは反対の傾向を示し、B～Dの中では定型化したBがやや多い。

形態 Aに関しては、恒川Ⅰ～Ⅲ期を通じてあまり形態の変化はみられないが、恒川Ⅲ期のものは口縁部が直立気味になる傾向がある。Bは恒川Ⅱ期で縦長だったものが恒川Ⅲ期で上から押しつぶされたかのような横に広いものが典型的な形となる。しかし、再三述べているように、形態変化を連続して把えることはできなかった。Dは恒川Ⅰ期でしっかりとした受け口状口縁であったものが、恒川Ⅱ期にはやや内湾気味となる変化が考えられ、恒川Ⅲ期の形態は不明といえる。

文様 器形によって施文位置が決定し、AとBは頸～胴部、CとDは口縁～胴部にかけて施文されることが多い。やはり資料不足の恒川Ⅰ期については不明の部分が多く、恒川Ⅱ期からははっきりとした変遷をたどることができる。Aは頸部にⅢC₂かC₃を施し、無文のものもある。胴部は定型化したⅣF₂がほとんどで、ⅣF₁は破片ですらわずかである。施文方法は佐原真氏のいう櫛描文A（佐原1959）が断絶を持つ右回りで、櫛描文B（この場合羽状条線文が当たる）は右回りであり、確認できたすべてがこの施文方法であった。Cの文様はAに置き替えれば恒川Ⅰ期の施文形であり、古い様相といえるⅣF₃である。恒川Ⅲ期では、Aの文様が頸部付近に集中する傾向がみられ、胴部文様にⅣF₂が基本的に消滅するのが、最大の特色となる。それに代り、ⅣF₅やF₇が施されるようになる。つまり、文様を頸部付近だけに限定し、櫛描羽状条線文の下の部分を省略して最上部だけにすれば、櫛描鋸歯文になると考えられ、ⅣF₂からⅣF₇への変化が説明できる。他に、ⅣF₆が恒川Ⅲ期からの文様と考えられる。BやCにはⅣF₂が残存し、一部Aにもみられる。施文方法は1点の例外もなく櫛描文Aが断絶のある右回りで、櫛描文Bは左回りである。

総括すれば、甕の主体であるAの文様は恒川Ⅲ期で頸部付近に集中する傾向があり、客体的存

在であるB・Cには恒川II期に多い櫛描羽状条線文を残し、その方向はこれまでとは逆になる。

③ 鉢

器形 AとB・C・Dでは形態差があり、Aはススが付着することで煮沸状態、B・C・Dは丹彩されるものもあり供献形態と、用途差が考えられる。いずれも出土量は少ないが、Aは恒川I～III期を通じてあり、恒川I期に多いことが予想され、該期の煮沸形態の一翼を担っていたと考えられる。恒川II期からは量的に少なくなり、恒川III期にはわずかに残存する。

形態 それぞれの形態変化を概観するには資料不足であり、Aが恒川III期に小型のものがあるが、一般的傾向かどうか不明である。他に、Caは恒川I期の口縁部が内側に湾曲するものから、恒川III期の直立気味の口縁部となるものへの変化が考えられる。

文様 Aは口縁端部を刻む以外に無文のものが多く、恒川I期で端部を面取りしその稜線上に篋描刻目文を施し、恒川II期には稜線より上面を刻む傾向が指摘できる。C・Dは丹彩を施す例が多い。Dは弥生時代中期後半の県内各地の遺跡に鉢または高杯として散見され、本遺跡群出土品も高杯の可能性がある。

3) 編年的位置

(1) 既存型式の検討

従来、下伊那地方の弥生時代中期後半には、北原式土器(神村1967)と恒川式土器(宮沢1967A)が設定されている。両時期とも櫛描文が盛行することを特徴とし、畿内や東海西部との結び付きが考えられる(神村他1972)にしても、極めて地域色の強い土器群といえる。両型式の内容を明らかにし、それと恒川I～III期の土器を比較する中で、編年的位置を明らかにしたい。

① 北原式土器

最初に松島透氏によって型式設定され(松島1953～54)、本格的に紹介された(神村1967)後、北原遺跡の発掘調査によってその内容が明らかになった(神村他1972)。最初に正式な発掘資料の北原式土器を概観した後、神村氏報告分に触れてみたい。

北原遺跡の報告書によると、北原式土器は壺・鉢・浅鉢・杯・手こね土器があり、壺A～D・甕A～Cに分類されている。本遺跡群の分類に該当させると、北原遺跡の壺AはA、壺BはA、壺CはD、甕Aは鉢A、甕B₁はA、甕B₂はC、甕CはD、浅鉢は鉢B、手こね土器は手づくねに相当する。北原遺跡の杯に相当する器種は本遺跡群ではない。以下は煩雑にならないため、本遺跡群の分類に当てはめて記述を進める。

北原遺跡で豊富な内容を示した遺構は1号・8号住居址があり、それを中心に検討する。

1号住居址 壺A₁・A₂bと甕A・D bがある。壺A₁の凶化されているものは5点あり、形態は頸部が細く締まり口縁部が短くラップ状に外反する。胴部はほぼ中央部で大きく張り、小さな底部となる。文様は頸～胴部に3段施され、III B₁・B₂・B₅・C₁、IV B₁・B₂・C₁などである。

甕Aは拓影図のみで形態はややはっきりしないが、文様はIII C₂ IV F₂が多く、本遺跡群にはほとんどないため文様分類に含めなかった横方向の櫛描羽状条線文が施されるものもある。甕Cはしっかりした受け口状口縁を呈し、文様はII B₂ IV F₆が施される。

8号住居址 壺A₁・A₂aと甕A₁・Dbと鉢A₁・A₂・Bに小型杯がある。壺A₁の形態は1号住居址とほぼ同様の傾向を示し、文様はIII C₁やIV B₁・C₁が施される。壺A₂にはA₂a・A₂bがあり、前者の文様はII A₆が施される。III C₃ IV D₃が施される壺(報告書第12図14)は、報告書ではA₁に分類されているが、本遺跡群ではこの文様が施される壺のすべてがA₂bになるので、同様の形態を示すと考えられる。甕A₁は直線的に外反する口縁部で、胴中央部がわずかに張りを持つ。文様は胴部に施され、やや乱れたIV F₂とIV F₁で、前者には下部に篔描列点文が付される。甕Dはしっかりした受け口状口縁で、文様はII A₆ IV E₂が施される。

その他の遺構も上記2住居址と同様な傾向を示し、鉢AはA₁とA₂がともにみられる。

以上の内容をまとめてみれば、壺の器形はAが主体で頸部が細い形態を呈し、文様は櫛描横線文と篔描文の組み合わせである。甕の器形はA₁が主体で若干Dがみられ、A₁の文様は、頸部が無文ないしIII C₁・C₂で胴部はIV F₁かF₂が多く、乱れたものが見受けられる。甕にIII C₃が施される例は少なく、全遺構中の拓影図の中に12点を数えるだけである。

こうした内容は恒川I期に共通し、それを豊かにしたものと考え。特に、本遺跡群では不明の部分の多かった甕と鉢Aについての傾向を把握することができる。

神村トレンチ資料 北原遺跡は、他に神村透氏の報告による資料がある(神村1967)。大半が同氏の表採によるものであるが、図化されている壺2点と甕1点は、同氏がトレンチ調査を行なった際に得られたもので、同一住居址の一括資料として考えられるもの⁽²⁾である。それは壺A₁と甕A₂である。壺A₁は2点とも同一形態を示し、頸部がやや太くなり口縁部はラッパ状に開き、文様はIV A₄が施されるものとIII C₁ IV D₂が施されるものがある。前者の文様構成は本遺跡群ではやや類例に乏しいが、後者の文様構成はG O B 35号住居址例(81-4)と共通する。甕A₂は形態や文様構成がA R Y 9号住居址例(156-3)に酷似する。

3点だけではあるが、以上の内容は恒川II期に共通するものと考え。

② 恒川式土器

松島透氏によって型式設定された(松島1953~54)後、宮沢恒之氏によってその内容が明らかにされた(宮沢1967A)。宮沢報文では恒川遺跡の表採資料と正泉寺遺跡の土取り工事中に得られた採集資料によって設定されていて、発掘資料によるものではない。

図化してあるのは壺A₁・A₂・B aと甕A₁・A₂・Bおよび高杯である。壺A₁は、やや太めの頸部から直立気味にやや長く外反する口縁部を呈する。壺A₂は筒状の頸部が特徴となる。壺B aは、太い頸部から直立気味に外反する口縁部を持ち胴部が丸味を帯びるものと、やや長く外反する口縁部で端部が折立気味になるものの2種類がある。文様は櫛描横線文のないIV C₁やC₃が施される。甕A₁は鉢A₁に近い形態を示し、文様はII B₄ III C₃ IV F₅が施される。A₂は口縁部がやや外反気

味で、文様はⅢC₃ⅣF₇が施される。甕Cは宮沢報文の25・27で、同氏は別形態との判断であるが、実物を確認したところ、いずれもCと考えてさしつかえないと思われる。口縁部がやや内湾気味に外反または直立し、胴部は横に広がる形態を呈す。文様はⅡB₂ⅢC₃ⅣF₅のものⅢC₃ⅣF₅のものがある。他に、同氏が恒川式の特徴として拓影図を掲載してあるのは、壺のⅣC₃・C₄や甕のⅣF₂である。

壺A₁の特徴は、恒川Ⅰ～Ⅲ期へ順次頸部が大きくなるという点に従えば、恒川Ⅱ～Ⅲ期に位置づくといえる。壺B aの形態もARY 9号住居址例(155-2)が外来要素を強く示すのに対し、文様や口縁部以下の形態などは壺Aのパターンを示していて、壺B aの在地化した姿を示すといえ、恒川Ⅱ～Ⅲ期に位置づくといえる。櫛描横線文のないⅣC₁が施されるものは、器形・文様がTAN・KUR 96号住居址例(8-2)に共通し、恒川Ⅲ期に位置づくといえる。宮沢氏が典型的とした壺のⅣF₃・F₄の文様は恒川Ⅱ期に盛行するものといえる。甕A₁・A₂の形態は恒川Ⅱ期に近いものであるが、その文様にはⅣF₂が消滅し恒川Ⅲ期と考えられる。甕CもⅣF₂が消滅し、本遺跡群からの出土例にそれが残存するのと比べやや新しい傾向を示し、恒川Ⅲ期でも新しい段階に位置づけられる。甕の文様の典型としたⅣF₂は恒川Ⅱ期の最大の特徴である。高杯は実見したところ弥生時代後期から古墳時代前期分類のBに類似し、該期の高杯とはいいがたいものである。

こうしてみると、従来の恒川式土器は恒川Ⅱ期とⅢ期の特徴を備えたものが混在していて、図化されたものは恒川Ⅲ期のものが多いという傾向を指摘できる。そのうち正泉寺遺跡の採集品はほとんどが恒川Ⅲ期といえる。

(2) 恒川Ⅰ～Ⅲ期の位置づけ

前項までに記した恒川Ⅰ～Ⅲ期について、従来の編年観に従えば、恒川Ⅰ期は北原式の典型的な様相、恒川Ⅱ期は北原式と恒川式の間隔的な様相、恒川Ⅲ期は恒川式の様相を示すといえる。北原式は発掘資料による裏づけがあるのに対し、恒川式は表採及び工事中の採集資料による型式設定のため、住居址等による一括性を検証できず、すべてを単独時期の型式として把握するには若干の疑問があった。実際、本遺跡群の調査結果との比較により、恒川式は弥生時代中期終末に位置づき、従来の恒川式基準資料が2時期に細分整理できる。

器形・文様構成・施文方向などに断絶があるのは恒川Ⅱ期とⅢ期である。恒川Ⅰ期とⅡ期の間は器種構成などに基本的変化はなく、文様の組み合わせ等細部による区分である。しかも、北原式の基準資料とされてきた神村トレンチ資料は、恒川Ⅱ期に位置づくことが明らかで、こうした点をふまえ、型式名としての呼称によれば、北原式を2期に分け、右記の位置づけが可能といえる。

北原 { I 式——北原遺跡発掘資料・恒川 I 期
II 式——北原遺跡神村トレンチ資料・正泉寺遺跡採集資料・恒川 II 期
恒川式——正泉寺遺跡採集資料・恒川 III 期

従来の当地方弥生土器の編年は、林里式—寺所式—阿島式—北原式—恒川式—座光寺原式—中島式とされ、阿島式と北原式の間及び恒川式と座光寺原式の間、断絶があることが指摘されていた(笹沢1977)。今次調査の本遺跡群資料により、北原・恒川式の連続した状況を整理できたものと考え、前後の時期について若干触れてみたい。

阿島式と北原 I 式の間には、壺の形態・文様等に飛躍がみられることは事実である。しかし、北原 I 式のなかに、阿島式と極端な変化の認められない深鉢が存在する点を重視すれば、時間的な断絶はなく、連続する型式とすることが可能といえる。一方、壺の形態・文様等にみられる断絶については、今次調査により解決する糸口は得られなかったが、時代的な空白とするより外的要因が考えられ、その解明は、今後に残された課題といえる。

今次調査の結果に基づけば、恒川式と座光寺原式の間はスムーズに型式変化するといえる。座光寺原式⁽³⁾の古段階に比定できるものとして猿小場遺跡14号住居址(佐々木他1980)がある。頸部以下に櫛描波状文を3段階施す甕や口縁が短く外反する壺などに恒川式との共通点を指摘でき、口縁端部をやや上の方に拡張しそこに櫛描波状文を施す壺などに恒川式との違いを見いだすことができる。

こうした点をふまえ、再度恒川 I～III期の位置づけを考えてみたい。恒川 I・II期は弥生時代中期後半に恒川 III期は同終末に位置づけられる。神村氏が指摘するように(神村1982)、座光寺原期にみられる遺跡分布の拡大を画期と考え得るからである。しかし恒川 III期から石製木工具類が消失する可能性が高く、土器にみられる後期的様相や恒川 II～III期における諸様相の変化を考えれば、恒川 III期が後期初頭に位置づく可能性もあることを指摘できる。他地域との関係からすれば、後期初頭に位置づけることが妥当とも考えられ、これらを解決するのは将来の課題としたい。

(3) 他遺跡出土資料の位置づけ

先述内容をふまえ当地方既出の資料の位置づけを行ない、恒川 I～III期の様相を明確にしたい。該期の土器が出土した遺跡は、的場遺跡(佐藤1973・酒井1978)・伊久間原遺跡(佐藤1978)・堂垣外遺跡(佐藤1983)がある。この中で恒川 I 期と併行関係を持つのは、伊久間原遺跡D160号・162号住居址などで、後者から出土した壺A₁は該期典型例の完形品といえる。恒川 II 期には、的場遺跡17号住居址(佐藤1973)、恒川 III 期には、的場遺跡21号住居址(佐藤1973)・D 2 号住居址(酒井1978)がある。後者は甕A₂・Cや鉢Cがセットとなり、恒川 III 期より後期的な様相が強く、恒川式の新しい部分を示すものとする。一つ問題となるのは、堂垣外遺跡1号住居址であろう。壺は恒川 I 期の様相を示し、甕はAやCが主体で恒川 III 期に位置づけられる。佐藤氏はこの資料

を持って北原式と恒川式の型式分離に疑問を呈されている（佐藤1983）が、その他の発掘資料でこれらが混在する例は見当らず、出土状況等の再検討が必要であるといわざるを得ない。

(4) 併行関係

① 県内

県内全般を扱った弥生土器の論考には、神村透氏（神村1966・1969）・笹沢浩氏（笹沢1977）によるものがある。その中で、笹沢氏によるものは図示資料も多く、標式遺構が明示されていて、多くの研究者が引用する文献となっている。そこで、笹沢氏の研究成果を参考にしながら、県内の諏訪地方、中信、東・北信の3地域との併行関係を考えてみたい。比較の観点は、個々の土器の類似点のみによる認定を避け、手法の共通性などに立脚するよう務めたが、一部に検討不足の点もある。

諏訪地方 天王垣外式土器（藤森1932）と海戸式土器（桐原1967）がある。海戸遺跡の発掘資料（桐原他1967・1968）を基準とし、前者に海戸遺跡21号・22号住居址、後者には海戸遺跡16号・27号住居址を該当させている。中でも、良好な資料を提出した海戸遺跡27号住居址を中心に比較してみる。

壺は懸垂文を多用するなど千曲川流域からの影響が考えられ（藤曲・藤田他1983）、本遺跡群のものとは様相を異にしているが、壺C₂はG O B 47号住居址例（84-5）に類似する。甕はA₁・A₂・D a・D bがあり、かなりの類似性が指摘できる。A₁は形態からA R Y 55号住居址出土例（160-14）に類似し、頸部以下にIII C₃ IV F₂が盛行する文様構成は恒川II期の特徴と一致する。Dは口縁受け口部がほぼ直線的になり、T A N・K U R 1号住居址例（2-3）に類似する。一部恒川III期に共通するものもみられるが、ほとんどすべてが恒川II期を規定する要素と共通し、海戸式土器は恒川II期に併行し、先行する天王垣外式を恒川I期、すなわち北原I式との併行を考えたい。

中信平 最も良好な資料と考えられるのが百瀬遺跡の竪穴住居址出土土器（藤沢1951）で、これによって百瀬式土器が設定（桐原他1956）されている。桐原氏は後に同遺跡の資料を持って百瀬I・II式に分離したが（桐原他1968）、笹沢氏等は否定的な見解を示されているし、当該資料の実見によっても細分するより同一時期の一括資料とすることが妥当と考えられる。

比較材料は壺A₂・B b・Eや甕Aである。壺A₂ aは文様構成がG O B 35号住居址例（81-3）に類似し、B bは形態がA R Y 55号住居址例（160-7）に類似する。甕はA₁・A₂がみられ、いずれも文様はIII C₂・C₃ IV F₂が施される。いずれも恒川II期を規定する特徴と同様であり、百瀬式土器は恒川II期に併行すると考える。なお、本遺跡群の壺A₂ aは百瀬式土器との強い関連が考えられる。

東・北信 栗林式土器（神田1956）と百瀬式土器（笹沢1977）がある。前者は、桐原氏（桐原1963）と笹沢氏に（笹沢他1976）によって栗林I・II式に分離されたが、基本的に異なる点が多いので、最初に示した前提に立って、笹沢氏の見解に沿うことにする。上記2地域のように、遺構一括資料で比較するには材料が乏しいので、本遺跡群にみられる東・北信的な要素を持つ土器を

紹介して、それから類推してみたい。

栗林式と比較する材料には、A R Y 9号住居址例(155-2)がある。形態は栗林I式の壺Bに共通し、文様も懸垂文を持つ点などは、本遺跡群にはみられない要素であり、明らかに栗林式との関連が考えられる。器形は前述のように栗林I式に類似するが、文様がやや簡素化される点などは、同II式にも通ずる要素と考えられる。他に、同じ住居址から出土した注口土器(155-10)があり、形態は注口部がやや上部にある他は、極めて栗林II式のものに類似する。また、AMD 18号住居址の壺E(143-1)も比較材料となる。文様などの類似性はみられないが、丸味を帯びたソロバン玉状の形態を呈する点などは、栗林II式と共通する要素である。以上の3点共恒川II期に比定される住居址からの出土であり、甕にみられる羽状条線文の盛行と合わせ、栗林II式は恒川II期と併行すると考える。今一つ、恒川III期にみられる壺E(78-5)が、栗林II式のものよりかなり丸味を帯びる形態をとることも一つの材料といえる。

県内各地との併行関係を概観にすれ、期せずして、本遺跡群で最も良好な資料が得られた恒川II期との併行関係を明らかにすることができ、

恒川II期=海戸式=百瀬式=栗林II式

恒川I期=天王垣外式=栗林I式

の併行関係が指摘できる。

問題となるのは、恒川III期と東・北信での百瀬式の関係である。笹沢氏の編年によれば、恒川式=海戸式=百瀬式が併行関係を持ち、北原式=天王垣外式=栗林II式という関係が示されるが、北原式を二型式に分離した本遺跡群の調査結果と整合しなくなる。明らかに恒川II期と松本平の百瀬式は併行関係を持つものであり、千曲川流域で栗林II式と百瀬式が前後の関係を持ち、千曲川流域における百瀬式が型式として成立するものかの疑義も生じてくる。

恒川III期に相当する型式は現段階で不明といえ、恒川III期抽出要素は後期的な様相が強く、吉田式(笹沢1972)に近似する内容を含むともいえる。恒川III期に位置づくT A N・K U R 96号住居址の壺B a(8-2)などは、吉田式に共通する要素がみられ、笹沢氏は吉田式に恒川式の影響を認めている(笹沢1977)が、併行関係を想定した方が解決つく問題ともいえる。他に、恒川III期に類似するものに、諏訪地方の志平遺跡2号住居址出土の胴部にIV F、を施した甕があり、弥生時代後期中葉に位置づけている(笹沢1978)。これにより恒川III期を後期中葉に位置づけ得るものではないが、後期的様相が強いことも事実である。本遺跡群の恒川III期は資料的にやや貧弱であり、(2)でも述べたように、編年的位置や併行関係の解決は、今後の課題といえる。

② 東海西部

最後に、東海西部との関係に簡単に触れてみたい。同地方の編年は朝日遺跡(加藤・高橋他1982)や紅村弘氏(紅村1981)によった。

阿島式が貝田町古式・瓜郷式に併行関係を持つことは動かしがたい事実で、その後に編年できる恒川I期は貝田町新式・下長山式に、恒川II期は高蔵式・長床式に、恒川III期は見晴台式に併

行関係を持つと考える。恒川Ⅱ期だけの住居址がみられるTANから弥生時代中期のタタキ甕が検出された(23-12~16)ことも、Ⅱ期と高蔵式の併行関係を示す一つの材料と考えられる。しかし、東海と直接につながりを示すものが少なく、唯一の東海系土器と思われる壺(64-3)もGOA湿地帯からの検出であり、伴出関係を把握するには至らないもので、今後の資料蓄積を待って修正すべき点も多いものとする。(山下誠一)

註

- (1) 土師器に地方差がみられることは、岩崎卓也氏によって(岩崎1964)昭和40年以前に指摘されていたことである。
- (2) 神村透氏の御教示による。
- (3) 座光寺原式土器はⅡ期区分(宮沢他1977)・Ⅲ期区分(神村1982)などが試みられている。詳細は別稿に譲りたいが、Ⅲ期区分するのが妥当と考え、本編で座光寺原式土器を細分する場合は、古段階・中段階・新段階の用語を用いる。

3 弥生時代後期から古墳時代前期

1) 恒川Ⅳ～Ⅹ期の設定

住居址38軒・溝址6・溝状遺構1・土坑2・包含層1箇所などを対象とし、7期に区分した。

そのうち、弥生時代中期終末の恒川Ⅲ期に後続し弥生時代後期前半に位置づくと考えられる恒川Ⅳ期は、住居址2軒・方形周溝墓1基・集石1の検出にとどまり、該期の十分な組成を示すことはできず、該期の形態分類からも除外してある。しかし、該期の集落が本遺跡群中にあることは確実であり、昭和58年度恒川遺跡群範囲確認調査で恒川Ⅳ期の良好な一括資料が得られており（小林1983）、形態分類・編年の位置づけ等は将来において十分可能であるので、本編では、今次調査により出土した資料について簡単に触れるにとどめる。

恒川Ⅴ期以降は良好な一括資料に恵まれた。なおかつ、住居址相互の切り合いや溝址で層位が把握できたものもあり、型式学的な検討の後、層位学的方法でその結果を確認し、恒川Ⅴ～Ⅹ期に細分した。器種構成に変化がみられ、その消長を細分の指標とした。他に、形態の変化もあり、特に壺A・F、甕A・C、高坏に相違点が見い出されて指標とした。

最初に恒川Ⅳ期対象資料を検討した後、恒川Ⅴ期以降の住居址を主体として標式遺構出土土器を概観し、その後、溝址出土土器等に検討を加え、恒川Ⅴ～Ⅹ期設定の根拠とした。なお、すでに一部の資料は公表済であるが（山下1984A・B）、形態分類や個々の資料についての位置づけ等に変更や不十分な点があり、本報告を最終のものとする。

口縁部・胴部 $\frac{1}{4}$ 以上、底部 $\frac{1}{2}$ 以上残存する個体数を、恒川Ⅴ～Ⅹ期の遺構と包含層について第11表で示した。それ以下の個体しか出土しない遺構は省略した。○は前述の基準以下の小破片が出土し、存在する可能性が高いものを示している。

(1) 恒川Ⅳ期

AMD4号住居址、ARY56号住居址・集石1、TAN・KUR方形周溝墓3出土土器を標式とする。

壺は拓影図の3点（22-19・20、161-6）が該期のものであり、櫛描の波状文・横線文・斜走短線文・ $\frac{1}{4}$ 円弧文が施される。

甕は唯一完形に復元できるもので、胴中央部に最大径を持ち、口縁部はゆるく外反する形態を呈す。頸部から胴上部にかけて、振幅が細かい櫛描波状文が2帯、振幅が大きい櫛描波状文が1帯、櫛描斜走短線文が1帯の計4帯の文様が施され、器高は43.9cmと大型品（144-8）である。

高坏は2点（22-26、161-26）あり、後者は三河または西遠江からの搬入品の可能性がある。

以上が恒川Ⅳ期の内容であるが、これらの特徴は従来の座光寺原式土器（今村1967）の中に包

括されるものと理解できる。そのうち甕は、形態からみれば座光寺原式の新段階に位置づくと考えられる酒屋前遺跡7号住居址例（岡田1972）に類似するが、文様構成等に簡素化の傾向がみられず、それより一段階前の座光寺原式の中段階に位置づけられ、その他の資料も同様な位置づけが可能と考える。

(2) 恒川V期

TAN・KUR5号・7号・8号・12号・17号住居址出土土器を標式とする。他に、TAN・KUR溝址14・18や溝状遺構1もこの時期に位置づけられる。

器種は壺・甕・高坏・鉢がある。

① 壺

器形は A_1 ・ A_2 ・ F_1 がある。

壺A A_1 は口縁端部が尖り気味または丸く仕上げられる A_1a （9-2、10-1）と、口縁端部に平端面がみられる A_1b （9-1・4、10-3）の2種類がある。いずれも口縁折立部がやや厚ぼったく、太い頸部から胴部へなだらかに移行する形態を呈する。文様は口縁折立部に篋描刺突⁽¹⁾文、口縁部から胴上部にかけて櫛描の波状文・横線文・ $\frac{1}{4}$ 円弧文が施される。櫛状工具の原体がイネ科植物の茎束の例（9-1、10-1）もある。

A_2 は口縁折立部が内傾するのを特徴とし、端部が丸くまたは尖り気味に仕上げられるもの（8-5、9-3・5）に限られる。いずれも胴部以下を欠き、全体形は不明である。8-5は頸部から上を器台に転用し、8-6を上に乗せたと考えられる。文様は A_1 と変わらない。

壺F F_1 は口縁部を欠くが、後述する F_2 と区別して、やや長い内湾気味の口縁部を持つと推定した（8-6、10-14）。胎土に2種類あり、当地方の該期土器に多い茶系統の色調を呈するもの（8-6）と、精選され灰白色の色調を呈するもの（10-14）がある。

② 甕

器形は A_1 があり、他にBが存在する可能性がある。

甕A A_1 の形態は頸部で90°近く折れ曲がり直線的または外湾して外反するため、口縁部が水平の罎口状を呈するものが大多数を占めるが、短くゆるやかに外反する口縁部を呈するもの（8-10、11-3）もわずかにあり、前者と区分すべきであった。文様構成でa～cに細分でき、櫛描の波状文のみの A_1b （11-2・7・8、12-13・15・16）が多く、櫛描の波状文と斜走短線文の組み合わせの A_1a （8-9、13-6）はいずれも土器埋設炉であり、古い様相と理解される。ゆるやかに外反する口縁部のものも同文様が施され、古い様相を示すと考えられる。無文の A_1c （8-8、9-6・7、12-12・17、13-7）は、やや小型のものが多い。

甕B B（11-24）は小破片を図化したものでややはっきりしないが、この時期には出現する可能性が高い。

③ 高坏

高坏A 器形はAに限られ、坏・脚部ともに深い形態（8—17、10—15、12—21）を呈し、脚部は直線的にハの字に開くものが多い。坏部外面に櫛描横線文が施されるもの（9—16）もある。壺F₁と同様に胎土が2種類あり、茶色（8—17）と灰白色（10—15、12—21）を呈するものがある。KUR遺構外出土の24—7も灰白色の色調を呈し、形態などから該期といえ、脚部が内湾して開き、内面はハケ調整される。

④ 鉢

器形はA₂に限られ、平底の底部付近でわずかに曲折して内湾気味に立ち上がり、深い形態（8—14）を呈する。

他に、手づくね（8—16）があるが、住居址検出面からの出土であり、遺構に直接付属するか判断できず、その所属時期は明らかでない。

以上が恒川V期の様相であり、壺A・甕Aがほとんどを占め、その中に1・2点の壺F・高坏A・鉢A₂が混じるという内容を把握される。

(3) 恒川VI期

GOA1号・2号・6号・9号住居址、GOB16号・18号・20号住居址を標式とする。GOB24号住居址もこの時期の可能性が高い。

器種は壺・甕・高坏があり、鉢が存在する可能性が高く、器台が出現する。

① 壺

器形は恒川V期からのA₁・A₂の他、B₁・C₁・F₂が出現する。

壺A A₁は口縁端部に平端面のあるA₁bは消滅し、A₁a（47—4、51—14）だけとなり、出土量も少なくなる。

A₂は住居址出土資料ではやや恵まれなかったが、A₁に比べて多いと思われる（47—3、99—7）。胴部から底部にかけてのもの（96—1）もA₂の可能性が高い。A₂は胎土に変化がみられ、弥生時代中期から続いた大量に小石粒を混入させていたものが、甕と変わらない小石粒をあまり含まない精選されたものとなる。文様は、A₁・A₂ともに口縁折立部に篋描刺突文、口縁部から胴上部にかけて櫛描の波状文・横線文が施される。櫛描 $\frac{1}{4}$ 円弧文が付される例はなく、この文様は恒川V期で消滅したと考える。

壺B 口縁折り返し部に櫛描波状文と竹管円形浮文が施されたB₁a（96—2）がある。形態は頸部が直立すると考える。

壺C 文様を持つC₁a（47—5）がある。口縁端部を面取りし、そこに篋描羽状文、稜線部直上に竹管文が施され、外面は丹彩される。

壺F F₁は住居址からの検出はないが、その存在は予測できる。

F₂（96—6）は細い頸部から直線的に外反し、下ぶくれ気味の胴部でヘラケズリによる小さな

平底となる。

② 甕

器形は $A_2 \cdot B \cdot C_1 \cdot E_1 \cdot G_1$ がある。恒川V期から継続するものはほとんどなく、新たに出現するものが多い。

甕A A_1 は消滅し、口縁部の外反がややゆるくなり胴部が丸味を帯びる A_2 が出現し、明らかに A_1 から A_2 への型式変化をたどり得る。頸部に櫛描波状文が施される $A_2 b$ (47-1・7、51-17、53-8)と、無文の $A_2 c$ (53-9、96-7・8)がある。両者が共存する例もあるが、 $A_2 b \rightarrow A_2 c$ の前後関係が想定でき、恒川VI期を新旧に分離する指標となり得る。

甕B GOB16号住居址に脚台部 (96-9) があるが、全体形を復元できるものはない。

甕C 口縁端部が外方へ開いて、内面にケズリによる平端面があり、外面にハケ原体の刺突文を持ち、ハケの方向が上から左下がり右下がりの順となる $C_1 a$ (97-14) がある。

甕E 広口の口縁部が直線的に外反し内・外面ともハケ調整されるもの (99-12) と、その底部と考えられるあげ底となるもの (99-13) がある。

甕G 短く外湾して外反する口縁部の端部が面取りされ、やや下ぶくれ気味の球形の胴部であげ底を持つ G_1 (96-11・12) だけである。

③ 高坏

器形は $B_1 \cdot B_2$ がある。 A は消滅し、新たに出現するものばかりである。

高坏B A に比べ坏部の形態が浅くなり、坏口縁端部内面にケズリによる内傾する平端面がある B_1 (97-1・2) と、口縁端部が丸く仕上げられる B_2 (97-3・4) がある。脚部の形態は内湾気味に開くもの (51-22、97-1) と、直線的または外湾気味に開くもの (97-2・3) がある。いずれも調整が丁寧で、坏部が大型のものが多い傾向にある。

④ 器台

小型器台の A に限られる。確実に形態がわかるものはないが、97-7は器受端部が面取りされる A_1 が丸く仕上げられる A_2 であろう。他に、97-15・99-14も器台の接合部が残ったものと考えられ、前者は焼成前に細い棒状工具で器受部と脚部の間の貫通孔があげられる。

以上が恒川VI期の様相である。恒川V期から残存もしくは型式変化する壺A・甕Aの他は、ほとんど新たに出現する器形であり、量的にも後者が多くなる遺構もあり、恒川VI期の新しい段階のGOB16号住居址などでは、出土土器の7割⁽²⁾を占める。

(4) 恒川VII期

GOA5号・7号・8号住居址、GOB2号・7号・12号・14号・15号・19号・29号住居址出土土器を標式とする。

器種は壺・甕・高坏・器台・鉢・小型土器があり、他に蓋・手あぶり・手づくねがこの時期に

存在する可能性が高い。

① 壺

器形は $A_2 \cdot B_1 \cdot C_1 \cdot C_3 \cdot D_1 \cdot E_1 \cdot F_4$ などがある。基本的には恒川VI期から継続するものが多いが、 $E_1 \cdot F_4$ などは新たに出現する。

壺A A_1 は消滅し、 A_2 に限られるが、住居址からの検出は少なく、底部片がわずかに残る。

壺B 口縁部外面に凹線文・棒状浮文、内面に篋描羽状刺突文が施され、内・外面とも丹彩される B_{1b} (95—1)があり、胎土・調整等から当地で製作されたとは考えられない。

壺C C_1 は文様を持つ C_{1a} (95—2)があり、胴上部に櫛描の横線文・波状文が施される。

複合口縁の C_3 (52—12)は、頸部が強く外反しそこから直線的に外方へ開く形態を呈する。

壺D やや長めの口縁部で外面がハケ調整される D_{1b} (50—12)がある。

壺E 直立気味の口縁部で外面がハケ調整される E_1 (52—15、87—9)がある。

壺F 短く直立気味の口縁部が端部で外方へ曲がる F_4 があり、やや大型のもの(52—1)・小型のもの(95—3)があり、口縁部が欠けた後頸部をすって再利用している球形の胴部のもの(50—13)も、この形態を呈すると考えられる。

② 甕

器形は $A_2 \cdot B_1 \cdot B_2 \cdot C_2 \cdot D \cdot F \cdot G_1 \cdot G_2$ がある。 $D \cdot F \cdot G_2$ が新たに出現する。

甕A 口縁部片は少なくなるが、底部片はかなりの量がある。無文の A_2c (52—5、89—10、98—5)に限られ、形態は恒川VI期のものより口縁部の外反がゆるく直線的でやや長くなる傾向がみられる。

甕B 長胴の B_1 が盛行し、外面ハケ調整 B_{1a} (98—9)やナデ調整の B_{1b} (53—1、94—6)の両者ともにある。胴部が丸味を帯びる B_2 (95—7)もある。脚台部は10軒中9軒とほとんどの住居址から出土している。脚台部の中に焼成前の有孔が認められるもの(100—17)があり、朝日遺跡(加藤・高橋他1982)・伊保遺跡(大橋他1974)・矢作川河床遺跡(斉藤1983)などに類例がある。

甕C Bに比べると量的に少ないが、多様性に豊む。口縁部が直立気味で端部が尖り、外面のハケ方向が上から順次右下がり調整され、広く定型化したものとは様相を異にする C_{1c} (98—14)や、口縁端部が丸く仕上げられ同様のハケで調整される C_{2c} (87—16)、口縁端部が丸く仕上げられて頸部内面にハケが残る C_{2a} (50—15)、定型化した C_{2b} (50—14)などがある。切り合い関係等からも同一時期の新旧関係があり、 $C_{1c} \cdot C_{2a} \cdot C_{2b}$ が古い様相を示している。

甕D 完形品の検出はなく底部(50—19、94—11、100—18)が出土し、その存在は予測できるが、形態を特定するには至らない。

甕F 量的には少ないが確実に出現する(50—20・21)。胎土・調整等から、当地で製作されたものであろう。

甕G G_1 は口縁部の外反が直線的で端部が丸味を帯び、胴部の張りがゆるく口径とほぼ同じく

らの形態(52-7・8)を呈する。台付甕のG₂はG₁と比べるとやや小型化し、口縁部に最大径を持つ(89-12)。調整は胴下部ヘラケズリ・内面ヘラミガキなど特徴的である。

③ 高坏

器形はB₁・B₂・B₄・C・E₁・E₂がある。B₄・Cが新たに出現する。

高坏B 恒川VI期から基本的な器形の変化はみられないが、小型化し調整が雑になる傾向があり、特に脚部内面にハケが残るものが多くなる。B₁(52-17、94-15、95-12)・B₂(51-1・2、87-18、95-13)の他、B₄(87-17)が確実に出現する。恒川VI期と同様に、脚部が内湾・直線的または外湾して開くものがあり、前者は8点中1点(52-17)と少ない。

高坏C 坏部が丸底の鉢の形態で、脚部は外湾して開き、内面ハケ調整される(51-6)。

高坏E 脚部が多く器形を確定できないが、多くはE₁の脚部と考えられ(95-15・16・17)、E₂も一点だけ(98-19)ある。

④ 器台

器形はA・Bがある。対象とする10軒のうち8軒にあり、最も盛行する時期といえる。

器受部と脚部の間に貫通孔を有するものが7点中6点と多数を占める。器形を確定できるものは、A_{3a}(87-19)・A_{2b}(98-24)・B(98-20)の3点で、他にA₁(53-7、98-23)・A₆(89-13)など多様である。

⑤ 鉢

器形はA₁・A₂・A₃・D₂があり、恒川VI期までは一般的でなかったが、多くなり始める。

鉢A 平底の底部から内湾気味に立ち上がる形態が共通し、浅い形態のA₁(87-20・21)や、深い形態のA₂(51-11)と、深い形態で口縁端部がわずかに外反するA₃(89-14)がある。

鉢D 外反する短い口縁部で球形胴・丸底になると思われるD₃(52-3、98-17)がある。

⑥ 小型土器

器形は小型壺・小型台付甕がある。後者は3点(51-8・9、87-22)とやや多いが、前者は単純口縁のCが1点(53-6)で普遍的な存在とはいえない。小型丸底は該期の住居址からは検出されてない。

他に、手づくねがあり、鉢A₁を小さくした形態(53-5)となる。

以上が恒川VII期の様相である。恒川VI期で出現した器種が多様になり、新たな器種も出現し、質・量ともに豊かになり始める時期である。

(5) 恒川VIII期

GOA 3号・4号住居址、GOB 4号・5号・10号・27号住居址出土土器を標式とする。

器種は壺・甕・甑・蓋・高坏・器台・鉢・小型土器があり、ほとんど全器種がそろっている。

① 壺

器形はB₁・B₂・C₁・C₂・D₁・D₃・E₁・E₂・E₃・F₂・F₄・G₁・Hがある。基本的に新しい器形の出現はないが、豊富で多様な内容を示す。Aは消滅し、わずかに底部片などが検出されるのみである。

壺B 外湾しながら外反する口縁部で外面に竹管文・内面に櫛描の波状文と横線文が施されるB₁a (99—15)と、直線的に外反する口縁部で幅広い折り返し部を持ち外面がハケ調整されるB₂ (90—2)がある。後者はススが付着し、煮沸形態としての利用が考えられる。

壺C 口縁端部が丸く仕上げられ無文のC₁b (90—3・5)がある。C₂の良好な検出例はないが、この時期にも存在する可能性が高い。

壺D 外湾して外反し端部が面取りされる口縁部で文様を持つD₁aがあり、口縁部に篋による刻目文・羽状刺突文と棒状浮文などが施され、胴部に櫛描の波状文・横線文・刺突文が施される(48—9、88—2、90—6)。他に、直線的に外反する口縁部のD₃ (48—10)がある。

壺E 直線的に外反する口縁部のE₁ (90—7、91—1・2)と、やや外湾気味に外反する口縁部のE₂、内湾気味に外反する口縁部の内・外面に櫛描波状文と頸部に凸帯を持つE₃ (47—8)がある。E₂は湾曲部分に違いがあり、頸部付近のもの(88—1、90—4)や、口縁端部に近いもの(91—3)がある。いずれも恒川Ⅶ期に比べて多く、盛行する時期といえる。

壺F わずかに内湾気味に外反する口縁部で下ぶくれ気味の胴部を持つF₂ (91—4)と、直立気味に内湾する口縁部が端部でわずかに外反し球形の胴部を持つF₄ (48—12、89—1)がある。いずれも恒川Ⅶ期に比べると大型化する。

壺G 内湾して外反する口縁部に最大径を持ち、球形胴で丸底となるG (88—4)がある。

② 甕

器形はB₁・B₂・C₃・D₁などがある。A₂・Gは消滅し、器形が一つの形態に統一されつつある傾向が伺える。

甕B 胴部が丸味を帯びるかやや胴上部に張りを持つB₂ (48—1、49—8、92—3・4)が多く、外面はハケ調整されるものに限られる。長胴のB₁の存在も予測できるが、口縁部のみの検出であり(48—2)、はっきり断定できない。

甕C S字状に屈曲する口縁部の上部が発達して端部が丸く仕上げられ、胴上部外面の横方向のハケが消失して上から順次右下がりのハケで調整され、脚台部内面の折り返しがほとんどみられないC₃b (49—7)がある。本遺跡群において、Cは主体的な地位を占めないが、恒川Ⅶ期に比してさらに少なく、該期では7軒中確実なもの1点のみであり、消滅する傾向にある。

甕D 煮沸形態の主体的地位を占めるようになる。住居址出土例では、球形を呈する胴部に最大径を持つD₁に限られ、外面がハケ調整されるD₁a (93—1・2)、ヘラケズリ調整されるD₁c (88—7、92—12)がある。ナデ調整されるD₁bの確実な検出例はないが、存在が予測できる。

③ 甌・蓋

甌 底部から内湾して立ち上がり、器高10cm前後とやや小型の鉢形を呈するA (89—4・5、100

— 4) がある。現在までに把握された例として当地方では最も古い時期のものであり、当地方における甑は恒川Ⅷ期が初現と考えられるが、普遍的な存在ではない。

蓋 GOA 4号住居址に同一形態を呈する2点(49—19・20)があり、甕B₂・C₃bとセットを成すものであろう。

④ 高坏

器形はB₂・B₄・C・Eがあり、Dが出現する。

高坏B 坏口縁端部がケズリによる平端面を持つB₁は消滅し、口縁端部が丸く仕上げられるB₂(48—6、88—11、93—8)と、半月状の坏部を呈するB₄(50—5)が多い。全体に小型化し、恒川Ⅶ期では脚内面のみに雑な調整が看取されたが、恒川Ⅷ期では全面に及び、仕上げのヘラミガキが不十分で前段階のハケがかなり残るもの(88—11、93—8)もある。

高坏C 全体形は不明であるが、坏口縁部がやや短くなり、丸底部分が発達する(89—6)。

高坏D GOB10号住居址から脚部片(93—16)が1点出土したのみで不安もあるが、恒川Ⅷ期に位置つけた。坏部形態は不明である。

高坏E 脚部片でその全体形は不明であるが(93—15、100—2)、前段階からの存在が考えられる。文様を持つE₁a(93—14)は小破片であり、先行する時期のまぎれこみと考える。

⑤ 器台

小型器台のAのみである。恒川Ⅶ期から引き続き盛行するが、7軒中3軒からの検出であり、やや減少傾向にある。

全体形がわかるものはA₄b(93—17)で、脚部は直線的にハの字に開き、器受部は稜を持って大きく外反する形態を呈す。その他、A₁a(47—13、50—6)・A₄(47—14)がある。

⑥ 鉢

器形はA₁・A₃・B・C・D₁・D₂・E₂がある。A₂は消滅するが、B・E₂が出現し、これらを含めて鉢が該期に極めて盛行する。

鉢A A₁は、内湾度がやや強くなり外面がハケ調整されるもの(50—10)や、恒川Ⅶ期とほぼ同様のもの(50—11、100—3)と、形態がやや浅く直線的に立ち上がるもの(88—14)がある。A₃(50—9、94—3)は恒川Ⅶ期に比べてやや小型化する。

鉢B 頸部でくびれて胴部が張る形態(94—2)を呈する。

鉢C 外面調整がハケによるもの(88—9)と、タタキ・ヘラケズリによるもの(88—10)があり、胴下部以下が残存するもの(93—3)も同様の形態を示すと考える。

鉢D D₁・D₂が時期差を示すものでなく、口縁部に最大径を持つD₁(88—15)と胴部に最大径を持つD₂(93—6・7)が共存している。

鉢E 口縁部が直線的に開くE₂(94—4・5)のみで、胎土・調整・焼成ともきわめて良好で、底部はヘラケズリによる小さなあげ底となる。

⑦ 小型土器

器形は小型丸底B・小型壺(A～C)・小型台付甕があり、前段階に比べ量は多くなる。恒川Ⅶ期では小型壺C・小型台付甕に限られており、他は新たに出現するものである。

小型丸底 半球形の体部で口縁部に最大径を持つBがあり、底部はあげ底となる。外面調整がヘラミガキのもの(47-12、93-18)と、ハケ調整のもの(93-19)がある。球形の体部で胴部に最大径も持つC(94-1)もあるが、これは小型丸底の範疇に含めるのにやや疑問もある。

小型壺 壺Aを小さくした形態を呈し、胴中央部に焼成後に小さな孔がけられるA(50-1)や、箱清水式土器の壺に似た形態を呈するB(50-2)、単純口縁のC(47-15)など多様である。いずれも胎土・調整・焼成とも良好である。

小型台付甕 接合部片(89-7)が1点だけと減少傾向にあり、恒川Ⅶ期で消滅している可能性もある。

以上が恒川Ⅶ期の様相である。壺A・甕Aが消滅し、壺・甕で恒川Ⅵ～Ⅶ期に出現した器形は、一部のものを除いて引き続き盛行し、新しい器形が小型土器にみられ、鉢などを加え、これらが最も盛行する時期といえよう。

(6) 恒川Ⅷ期

住居址での検出例はなく、GOB溝址15-3層出土土器を標式とする。溝址出土という性格から、やや長期間にわたるものを含むことも考えられ、この時期の全容を明らかにできない。

器種は壺・甕・高坏・小型丸底があり、器台は確実に消滅する。

① 壺

器形は D_2 ・ D_3 ・ E_1 ・ F_2 があるが、Dの存在ははっきりしない。

壺D 短く外湾しながら外反する口縁部で端部が丸く仕上げられる D_2 (118-7)や、直線的に外反する口縁部の D_3 (118-8)があるが、小破片のためまぎれこみとも考えられ、確実に該期のものとは断定できない。

壺E 前期に比べやや小型化する E_1 (118-10)がある。

壺F 前期に比べ大型化し、直接的に長く外反する口縁部と下ぶくれ気味の胴部を持つ F_2 (118-9)があり、胎土・調整・焼成とも良好である。

② 甕

器形はDがある。他に、E・ G_1 などが検出されたが、その位置づけははっきりしない。

甕D 胴部がやや長くなり外面がナデ調整される D_2b (119-2)は、確実に該期のものと考えられる。他に、119-1は B_1a と考えたが、 D_2a になる可能性もあり、Bの脚台部が検出されていないこともあり、Bは恒川Ⅷ期で消滅傾向にあるといえる。

甕E 広口でやや長く直線的に外反する口縁部のE(119-3)は、該期の確認例がなく、該期へ位置づけるに若干の疑問もある。

他に、 G_1 (119—4) があるが、 G は前期で消滅しているのでまぎれこみ遺物であろう。

③ 高坏

器種は F_1 ・ F_2 がある。 B は1点もなく、大部分は消滅すると考えられるが、後述する恒川X期との関連で、一部は残存する可能性が高い。

高坏F 坏部の形態が深く稜を持つ F_1 (119—6・7) と半月状の F_2 (119—8) がある。脚部は1点のみの検出で、直線的な柱状を成し裾部で屈折して大きく開く (119—6)。

④ 小型土器

器種は小型丸底だけである。小型壺の大部分は消滅したと考えられ、小型台付甕は消滅する。

小型丸底 胴部が発達して口縁部径とほぼ同じか上回るC (119—10・11・13~15) がほとんどとなり、調整は雑で、内面に指頭痕、外面にナデ・ヘラケズリ・ハケなどの痕を残す。ヘラミガキで調整されるのは1点だけ (119—12) であり、前期からの残存形態とも考えられる。

以上が恒川IX期の様相である。最初に述べたようにかなり資料不足であるが、小型精製土器群のセット関係が崩壊し、器種構成に大きな変化がみられる時期といえる。

(7) 恒川X期

TAN・KUR16号・23号・75号・90号・101号住居址、土坑8出土土器を標式とする。

器種は壺・甕・甑・高坏・鉢・小型土器・手づくねがあり、新たに甗が出現する。

① 壺

器形は B_2 ・ C_2 ・ D_1 ・ F_5 ・ G_2 ・Hがある。

壺B 短く直線的に外反して極めて薄い口縁折り返し部を持つ B_2 (15—1、19—9) がある。

壺C 二段に外反する口縁部の C_2 (18—1、19—7) で、口縁部はあまり発達しない。

壺D 外湾気味に外反して端部が面取りされる口縁部で無文の D_1b (13—14) だけである。

壺F 平底の F_2 ・ F_4 は消滅し、直線的に外反する口縁部で、球形の胴部と丸底となる F_5 (15—2・5、18—2・3) がある。15—5は胎土等から当地で製作されたとは考えられない。

壺G 胴部に最大径を持つ G_2 で、 G_1 から G_2 への型式変化が認められる。直線的に外反する口縁部で横幅が広い胴部を呈するもの (15—3) があり、内湾気味に外反する口縁部のもの (13—15) もこの形態と考える。

壺H 口縁部がやや発達し横幅が広い胴部となる (13—17)。

② 甕

器形はDに限定され、その他のものはみられないが、Bの脚台部が2点検出されており、Bが残存する可能性も残されている。

甕D 胴部が球形を呈する D_1 は小型のもの (18—7・8) が多く、大型のもの (13—16) が1点のみある。大型のものは長胴気味になる D_2 が多く、外面ハケ調整の D_2a (19—6) ・ナデ調整の D_2

b (15-7・8)・ヘラミガキ調整のD₂d (19-1) と多様である。この中で、D₂aは量的に少ないと考えられる。

③ 高坏

器形はB₅・F₁・F₂・F₃・F₄・Gがあり、主体はFでその中にわずかB₅・Gが混じる。

高坏B 恒川VI期に出現したものが、型式変化を経てこの時期まで残存し、ハの字に開く脚部の孔は消失するB₅ (16-1~3) となる。全体に厚ぼったく、胎土・調整が悪い。

高坏F 主体となるため器形も多く、坏部が恒川IX期のものとは比べ浅く、脚部はやや中央部がふくらむ柱状を成し裾部で屈曲して開くF₁ (14-3~10、16-4~9、18-13) が最も多く、脚部形態はF₁と同様で坏部が半月状を呈するF₂ (16-14) や、脚部が直線的な柱状を成し裾部で屈曲して短く開き、ラップ状の坏部を呈するF₃ (17-1~5) もある。坏端部が外反し内面に稜を持つものをF₄ (14-16、17-9、18-18) と区分したが、F₁の範疇に含まれるかもしれない。いずれも胎土・調整・焼成とも良好なものが多く、B₅との違いを示している。

高坏G 二段に外反する坏部と脚部を持つ特徴的な形態 (14-11・12、17-10・11) を呈する。脚部は中央がふくらむ柱状を成す点はF₁と共通する。

④ 鉢

器形はA₃・D₁・D₂・E₃がある。

鉢A 内湾して立ち上がる体部が直立気味の深い形態を呈するA₃ (17-18・19) がある。

鉢D 口縁部に最大径を持つD₁ (17-15・16、23-6) と、胴部に最大径を持つD₂ (15-6、17-17) があるが、いずれも口縁端部がわずかに外反し、両者の区分が困難になる。

鉢E 口縁端部がわずかに外反し内面に稜を持つことでD₁との区分ができ、E₂からの型式変化が考えられるE₃ (18-21) がある。

⑤ 小型土器

器形は小型丸底C・小形壺Dがあるが、いずれも1点ずつの検出で、普遍的な存在ではない。

小型丸底 胴部に最大径を持つと考えられるCの胴部 (17-13) であり、その他の住居址からは破片すらなかったので、基本的には消滅したとも考えられる。

小型壺 口縁部が直立し球形胴で丸底を呈するD (17-12) がある。

⑥ 甗

該期から出現する。頸部から外反し段を持って直立気味になる有段口縁を呈し、須恵器の形態をまねたものと考えられる (18-22~24)。胎土は精選され、調整・焼成とも良好である。

⑦ 手づくね

底部片が3点 (17-14、19-8、23-5) あるが、全体形のわかるものはない。そのうち、23-5は、鉢A₁またはA₂を小さくした形態を示すと考えられる。

以上が恒川X期の様相である。器形は一定のものに統一される傾向がみられ、特殊な器形に須

恵器の影響が認められ、初期須恵器⁽³⁾が流入した時期といえる。

2) 溝址及びGOAA区包含層出土土器の検討

住居址出土資料を中心に、恒川IV～X期までの様相を明らかにしてきた。他に、該期の遺物がまとまって出土した遺構には、TAN・KUR溝址12、GOA溝址1・2、GOB溝址15があり、GOAA区包含層からも出土している。これらの遺物に検討を加え、その所属時期を明らかにして、欠けている内容を補いたい。

(1) TAN・KUR 溝址12

弥生時代後期に掘られ、古墳時代前期に埋没したと考えられる。埋まる途中で土器が一括廃棄されたらしく、溝底よりやや浮いた中層の下部、検出面より75～45cmの深さで、TANBG47を中心に7m程の範囲に出土した。調査延長が23mのうち、遺物は部分的に集中して出土し、完形またはそれに近い個体については、一括性が高いと考えられる。

器種は壺・甕・器台・鉢・手づくねで、器形は、壺F₂ (20-19)、甕A (20-22・23)・B₁a (21-1)・D₁b (20-27)・D₃a (21-2)、器台A₃b (21-7)、鉢A₂ (21-8)、手づくね (21-12)がある。他は小破片であったり出土位置が離れているなどで除外した。

鉢A₂は底部近くで屈曲する点などTAN・KUR5号住居址例と類似し、その他の資料に比べるとやや古い形態とも考えられるが、甕A・B₁a、器台A₃bなど恒川VII期を規定する要素と類似し、鉢A₂を除く器形はVII期に位置づく⁽⁴⁾と考える。

他に、一括遺物出土地点以外から出土した甕H (20-20)は、形態・調整等から畿内の布留式の甕に類似し、搬入品である可能性もあろう。木下正史氏が分類した甕Abに相当し(安達・木下1974)、布留式⁽⁴⁾の中段階に盛行する形態である。

(2) GOA 溝址1一下層出土土器

水が流れたために、砂質土が堆積した下層とそれ以降の上層に分離できた。上層は甕(58-10)・高坏(58-11)の特徴から古墳時代後期と考えられ、対象は下層出土土器である。

器種は壺・甕・高坏・器台・鉢があり、壺・甕が多く、完形品は少ない。器形は、壺A₂ (54-1・2)・B₂ (54-6)・C₁a (54-7)・D₁ (54-9)・E₁ (54-11)・F₁ (54-10)・I (54-12・13)、甕A₂c (55-7～9・13～15)・B₁a (55-16)・B₂ (55-17)・C₁a (56-9)・C₁c (56-10)・C₂b (56-11)・D₃a (56-19)・D₃b (56-17・18、57-1)・H (57-17～19)、高坏E₁b (58-8)、器台A₄b (57-27)、鉢A₂ (57-22)・D₁ (57-21)がある。

かなり長期間にわたって水が流れたために、遺物にも時期差がみられ、甕A₂c (55-7～9)・甕C₁a・甕C₂aのように恒川VI期と考えられるものから、口縁部が短く外反する壺B₂などは恒川VII期に位置づくものを含んでいる。しかし、大部分は恒川VII期と考えられる。壺A₂は、口縁部の文

様が施されないものと胴部の張りがみられないものがあり、恒川Ⅶ期の特徴を示している。55—13—15は、甕A₂cが小型・粗雑化したもので、恒川Ⅶ期末～Ⅷ期まで残存する可能性がある。甕Hは、形態・調整等から畿内からの搬入品の可能性もあり、木下氏分類のAaに相当し、布留式の古段階に盛行する形態であり、TAN・KUR溝址12例（20—28）よりやや古いものと考えられる。57—20は、端部をつまみ上げた状態で面取りし内面に指頭痕が残る特徴などから播磨系の甕と考えられ、県内では初例のものである。

以上のように、甕の中に住居址から検出できなかった外来系土器を含んでいて、各地との交流や併行関係を知る上での手がかりを与えてくれる。

(3) GOA 溝址2 下層出土土器

溝内の堆積状況により、上層と下層に分けられた。上層は相当な時間差のあるものを含むが、埋没したのは古墳時代後期⁽⁵⁾と考えられ、対象は下層出土土器である。切り合い関係から恒川Ⅷ期に位置づけられ、多くの住居址を切っていることから、先行する時期のものがまぎれこんでいる可能性が強い。出土土器も大部分が破片であり、出土状態も直接遺構と結び付くものは少ない。

その中で、鉢D₂（59—14）は溝底の礫下から出土し、本址に直接関係すると考えられる。口縁部が短く外反し球形の胴部で丸底となり、恒川Ⅷ期の鉢D₂の典型例と考える。その他は恒川Ⅷ期以前のもが多い。鉢E₁（59—23）は布留式古段階に盛行するものの搬入品⁽⁴⁾である。高坏E₁a（59—22）は元屋敷式⁽⁷⁾（大参1968）に位置づけられ、東海西部特に濃尾からの搬入品である可能性が強い。鉢E₁は恒川Ⅶ期、高坏E₁aを恒川Ⅵ期に位置づけておく。

(4) GOB 溝址15

1層から5層までの層位が確認できた。1・2層は、壺（120—12・13）・高坏（120—17）・鉢（120—6）の特徴から古墳時代後期以降と考えられ、3層はすでに検討を加えてある。

① 4層出土土器

遺構編でも触れられているように、大きく4箇所のみとまりが考えられる。溝址という遺構の性格から、同一層位でもやや長期間にわたる可能性があり、その位置づけは慎重な態度を必要とするが、集中箇所の完形またはそれに近い個体は、ある程度一括資料と考えられる。4箇所は、GOBAY52・53を中心とするもの、BA51を中心とするもの、BB48・49を中心とするもの、BD46以北を中心とするものである。

A Y52・53付近 器種は壺・甕・器台・鉢・小型土器・手あぶりで、器形は、壺B₂b（103—4）・C₂b（104—2）・E₂（107—2）・G₁（106—7）・H（104—8）、甕B₁b（110—7、113—1）・D₁a（115—4）・D₁b（115—6）・F（118—5）、器台A₂a（111—7）、鉢A₁（112—14）、小型丸底A（112—12）、手あぶり（118—6）がある。

甕B₁b・F、鉢A₁は、恒川Ⅶ期と共通する形態・調整を示す。壺B₂は頸部が外湾気味に長く外反

する点に、小型丸底は口縁部が発達するAである点に、恒川Ⅷ期にみられるものより古い要素を見出すことができる。手あぶりなどやや位置づけがはっきりしないものを含めて、恒川Ⅶ期の一括資料と考えてさしつかえないといえる。

B A 51付近 器種は壺・甕・器台・鉢・手づくねで、器形は、壺E₁ (111-2)、甕A₂c (109-7・8)・B₂b (114-1)・C₂b (114-7)・D₁a (115-2、116-2)・D₁b (117-1)・E (117-13)、器台A₁a (111-4)・A₂b (111-10)、鉢D₂ (112-16)、手づくね (107-6) がある。完形品がすえられた状態で集中して出土し、4層の中で最も一括性が高いものである。特に、甕が多いことが特徴といえよう。

甕A₂cは口縁部の外反がゆるく直線的になる恒川Ⅶ期の典型的な形態を示し、甕B₂b、器台A₁a・A₂bも該期のもと考えられる。鉢C₂は恒川Ⅶ期のGOA 7号住居址例 (52-3) と酷似する。以上の点から、上記の遺物は恒川Ⅶ期の一括資料と考える。特に、壺E₁、甕D・Eの完形資料が得られたことは、該期住居址からの検出はなかっただけに貴重であろう。

B B 48・49付近 器種は壺・甕・器台・鉢・小型土器・手づくねで、器形は、壺A₂a (103-1)・F₂ (104-7、108-4)・H (106-5)、甕A₂c (110-4)・C₂a (114-8)・C₂b (114-9)・G₁ (118-1・3)、器台A₃b (112-10)・A₃ (112-11)・A₇ (111-9)、鉢B (106-4)、小型壺C (108-5)、手づくね (107-5) がある。やや広範囲に遺物の広がりを持ち、完形品も少なく、一括性はやや低いと考えられる。

壺A₂a・甕G (118-1) は恒川Ⅵ～Ⅶ期、甕A₂c・C₂bは恒川Ⅶ期と考えられ、Ⅶ期のもものが主体を占めるが、甕D₁d・器台A₃b・A₃・A₇などは該期より新しい様相がみられ、Ⅶ～Ⅷ期のもものが混在し、一部にⅥ期らしいものを含んでいるといえる。なお、118-3は台付甕のG₂ (89-12) に形態が類似し、G₁としたがG₂の可能性もあることを指摘しておく。

B D 46以北 器種は壺・甕・器台で、器形は、壺B₂ (103-3・5)・C₂b (104-1、105-1)・C₃ (106-1)・D₁b (106-2、107-1)・E₁ (105-2、106-3、109-1・2、110-1、112-1)・H (106-6)、甕D₁a (117-2)・D₁b (116-5・7)・D₁c (116-3)・D₁d (116-4)、器台A₂a (111-5・6) がある。壺・甕の特定器形の完形品が多く、一括性は高いと考えられる。壺はE₁を主体に多様性に富み、甕はD₁のすべての器形を含むのを特徴とする。

壺B₂は恒川Ⅶ期の103-4に比べると口縁部が短く直線的になり(特に103-3にその傾向が強い)、恒川Ⅷ期のGOB10号住居址例 (90-2) に類似する。壺C₂には口縁部に簡素化の傾向が看取され、恒川Ⅷ期に位置づくと考ええる。壺で主体となるE₁は、恒川Ⅷ期で盛行する形態であり、GOB10号住居址例 (90-7・8、91-1・2) に類似する。甕D₁は、外面ハケ調整のD₁aとナデ調整のD₁bは恒川Ⅶ期のものであまり変化ないが、ヘラミガキ調整のD₁dは新しい傾向と考えられ、恒川Ⅷ期から出現するものと考えられる。器台などはやや古い様相とも考えられるが、主体となるものから、上記遺物は恒川Ⅷ期に位置づくと考ええる。

② 5層出土土器

4層に比べると極めて少なく集中箇所もみられず、流れこみによる遺物である。しかし、4層とは明らかに層位が分かれ、古い様相を示すと考えられる。

器種は壺・甕・高坏・鉢・小型土器で、器形は、壺A₂ (101-1)・C₁a (101-2)・F₁ (101-3)、甕A (101-7)・C₂b (101-11)・G₁ (102-1~5)、高坏B₂ (102-6・8・9)・B₃ (102-7)・E₁b (102-11)、鉢A₂ (102-12)、小型壺C (102-13)、小型台付甕 (102-14)がある。器台は一点も含まず破片すらなく、反面破片とはいえ高坏が多い点など、4層とは様相を異にしている。

壺A₂・C₁a・F₁、高坏Bなどは恒川VI期と共通する様相を示し、甕G₁もGOB16号住居址例 (96-11)と類似し、いずれもVI期に位置づけられる。特に、壺A₂は該期の良好な検出例がなかっただけに貴重であろう。しかし、高坏E₁bの坏部が浅い形態はやや新しい傾向と考えられるし、甕C₂bも恒川VI期までさかのぼる可能性は十分に考えられるが、恒川VII期を中心とするものである。小型壺C・小型台付甕は恒川VI期のもものと比べてやや大型である点に相違がみられる。甕C₂b・高坏E₁b・小型壺C₂b・小型台付甕の位置づけは保留しておきたい。

以上のように、5層出土土器は恒川VI期を主体とするものが多いが、一部にそれ以降と考えられるものを含むので、型式学的にみて確実なもの以外の位置づけは、今後資料が蓄積された上で改めて検討することとしたい。

(5) GOA A区包含層

GOA溝址1の西側、AR47付近を中心にほぼ6×6mの範囲の同一層中に土器が集中して出土した。出土状態などから単なる包含層とは性格を異にしていると考えられ、湿地帯縁辺部における祭祀遺構とも捉え得る。

器種は壺・甕・蓋・高坏・器台・鉢で、器形は、壺A₂ (61-1・2)・B₂b (61-3)・B₂c (61-4)・C₁a (62-1)・C₂ (62-2)・D₂ (61-5)・F₃b (61-6)、甕B (62-4)・D₂d (62-6)・D₃a (62-5)、蓋 (62-9)、高坏B₃ (62-10)、器台A₂a (62-13)、鉢A₃ (62-14)などがある。壺の個体が多いことが特徴である。

壺A₂は頸部がやや細くなり胴部が小さめになる形態や口縁折立部の篋描刺突文が弱々しく施される点などに恒川VII期の特徴を示し、甕D₂dはタタキ調整がヘラミガキの前に施されるが、甕G₁と基本的に異なる形態を呈する点などに、VII期以降に位置づく特徴と考えられる。壺B₁b・B₁c・C₁aなどは恒川VII期よりやや古い様相がうかがえるが、これらも含めて、上記遺物はVII期の一括遺物としてさしつかえないと考える。

溝址及び包含層出土土器を概観し、その位置づけを考えてきた。住居址出土土器のみでは明確にできなかった器形の所属時期を補足できたと考える。

6) 土器の系譜

弥生時代終末から古墳時代に至る時期は全国的規模で土器が動くといわれ(岩崎1984)、本遺跡群でもその例外ではなく、在地の土器と、それとは異質のものが混在している。後者は他地域からの搬入品と他地域の影響を受けて当地で製作された模倣品及び手法のみを取り入れたもの等がある。搬入品と模倣品の区別は、胎土分析等の科学的方法を用いて決定すべきであるが、今回そうした分析はできなかったため、搬入品ならびその影響を受けて当地で製作されたものを含めて「外来系土器」(岩崎1984)と呼称する。それに対して在地の伝統的要素を持つものを「在地土器」⁽⁹⁾と把握して、形態分類に沿ってそれぞれの土器の系譜を明らかにしたい。

(1) 壺

① 壺A

A₁・A₂とも当地方弥生時代後期に通有な器形で、在地土器である。

壺A₁ A₁aは、中島平17号住居址(佐藤1977)、権現堂前遺跡4号住居址(神村他1971)、天伯B遺跡14号住居址(今村他1975)、A₁bは、中島平遺跡11号・17号住居址、地神遺跡6号住居址(佐藤1981)などで出土している。

壺A₂ 高松原遺跡10号住居址(桜井・長尾1976)、同II-10号住居址(佐藤1984)、猿小場遺跡11号住居址(佐々木他1980)、ヨシガタ遺跡1号住居址(宮沢他1979)などで出土している。

② 壺B

B₁とB₂は別系統と考えられ、B₁でも文様によって系譜の違いがある。

壺B₁ B₁aは纏向遺跡分類壺A₁(石野・関川1976)であり、畿内とその分布の中心で庄内式段階⁰⁰と考えられるが、四郷遺跡(紅村1963)など濃尾にも類例があり、中間地域としてこの地方が介在する可能性もある。B₁bは濃尾の欠山式から元屋敷式段階で盛行するいわゆるパレス壺であり、元屋敷遺跡(大参1968)・朝日遺跡一次(大参他1975)などに類例が求められ、濃尾からの搬入品の可能性もあろう。B₁cの系譜は必ずしも明らかでない。外面に櫛描羽状刺突文などの文様を持つ点は、いわゆる柳ヶ坪型壺(杉崎1953)に類似するが、口縁部形態に違いがある。しかし、大畑遺跡SK I(下村他1972)・朝日遺跡(加藤・高橋他1982)にもわずかに折り返し口縁を持ち櫛描羽状刺突文が施された壺があり、柳ヶ坪型を組成に持つ地域⁰⁰からの影響を考えたい。胎土・焼成等から当地で製作されたものとは考えられない。

壺B₂ 口縁部を幅広く折り返す手法は東海東部に盛行するもの(鈴木他1982B)であり、小深田西遺跡(山口他1984)・土橋遺跡(永井他1985)などに類例があり、東海東部からの影響が考えられる。

③ 壺C

壺C₁ 形態は類例を求めるまでもなく畿内にその出自が求められ、文様を持つC₁aは庄内式

段階、無文のC₁ bは桜井茶白山古墳の壺（中村・上田1971）で代表される布留式古段階に位置づけられる。

壺C₂ C₂ aは典型的な柳ヶ坪型であり、元屋敷式段階ないし石塚式段階に位置づけられる。C₂ bは纏向遺跡・元屋敷遺跡に類例があり、畿内ないし濃尾からの影響を受けたものと考えたい。

壺C₃。複合口縁は東海東部に分布の中心を持ち、そこからの影響が考えられる。

④ 壺D

壺D₁ D₁ aは東海西部に分布し、朝日遺跡分類壺A₅・伊場遺跡分類広口壺B₄（向坂・辰己1982）・欠山第2貝塚溝状遺構など、寄道～欠山式段階に類例が求められる。東海西部で地域を特定することは困難であるが、三河のものに最も近く、そこからの影響を考えたい。当地方では清水遺跡に類例があり（佐藤1976）、伴出関係から本遺跡群例より古い時期が想定できる。D₁ bは、纏向遺跡分類壺B・木下正史氏分類壺C（安達・木下1974）・朝日遺跡分類壺A₅・欠山第2貝塚溝状遺跡・高橋遺跡32号竪穴（久永・斉藤他1969）など、畿内・濃尾・三河に類例がある。本遺跡群出土例でタタキ調整が施されるもの（106—2）があり、これについては畿内⁰³に出自を求められるが、想定される併行関係からすると古い型式といえる。その他は系譜を明確にできない。

⑤ 壺E

壺E₁ 纏向遺跡分類壺C・木下氏分類壺B・佐堂遺跡分類壺C（阪田他1984）に類似し、畿内⁰³が分布の中心で、庄内式段階から布留式の中段階までの時間幅を持って扱えられる。

壺E₂。やや内湾気味の口縁部形態は、欠山第2貝塚溝状遺構・伊場遺跡分類広口壺E₁・三和町遺跡（鈴木1985）などに類例があり、三河から西遠江の影響が考えられる。

⑥ 壺F

F₁は口縁部を推定して分類したため問題を残すが、F₃とともに東海西部欠山式のひさご壺にその出自を求められる。F₂も同様に考えられるが、直線的に外反する口縁部形態は、纏向遺跡分類壺Eなど畿内の庄内式新段階から布留式古段階に多く、その底部形態が丸底であることを考え合わせると、畿内と東海西部の両地域から影響を受けているともいえる。F₄は朝日遺跡一次・朝日遺跡などの元屋敷式段階で類例があり、東海西部からの影響が考えられる。

⑦ 壺G

下蟹河原遺跡（藤森1939）・大畑遺跡S K Iに類例があるが、その系譜は不明である。

⑧ 壺H

欠山式の短頸壺（杉浦1982）に類する可能性が強いが、断定はできない。

(2) 甕

① 甕A

A₁・A₂とも当地方弥生時代後期以降に通有な形態で、在地土器である。

甕A₁ A₁ aは、上の金谷遺跡3号・12号住居址（松永他1972）、山岸遺跡18号住居址（神村他

1971)、A₁bは、猿小場遺跡11号住居址、安宅遺跡CY 1号住居址(佐藤他1969)、A₁cは、埴原遺跡十万山地区B 2号住居址(佐藤1979)、天伯B遺跡14号住居址、安宅遺跡CY 1号住居址などで出土している。

甕A₂ A₂bは、ヨシガタ遺跡1号住居址、高松原遺跡10号住居址、同II-6号住居址、A₂Cは、的場遺跡11号住居址(佐藤1973)、埴原遺跡十万山地区B 5号住居址、田村原遺跡14号住居址(酒井他1975)、月夜平遺跡9号住居址(宮沢他1975)などで出土している。

本遺跡群と同様にA₁とA₂が混在せず、明らかにA₁からA₂へと型式変化する。

② 甕B

単純口縁の台付甕は、東海から関東の東海道沿いに分布し(湯川・加納1976)、そのうち口縁部に篋描刻目文のないB₁は、濃尾から三河の欠山式段階以降に盛行する。濃尾は地域によって分布に濃淡があり、名古屋台地に多い。形態で地域を特定でき、朝日遺跡が示すように名古屋台地のは脚台部が低いのに対し、三河のものは脚台部が高くなる形態を示す。本遺跡群例は後者に類似し、明らかに三河からの影響が考えられる。

③ 甕C

尾張平野低位部にその分布の中心を持ち(大参1967)、そこからの影響が考えられる。畿内から関東までの広い地域に散見され、その受容の仕方も一様でなく、甕の大部分がS字甕になる地域があるのに対し、客体的にしか存在しない地域やほとんど存在しない地域もある。本遺跡群では客体的に存在し、台付甕はBの方が圧倒的に多い。欠山式段階から型式変化を追うことができるが、本遺跡群例では古い形態を示すC₁aでも定型化したものであり、元屋敷式段階以降と考えられる。ハケの方向が定型化したものと違うC₁b・C₁c・C₂c・C₃bは、在地化した中での展開と考え、C₁bからC₃bへ順次新しくなるといえる。

④ 甕D

必ずしも出自は明らかでなく、その初現や分布の検討が必要である。畿内の庄内式新段階から布留式古段階のくの字口縁丸底甕の影響を受けて平底甕分布地域で創出されたとも考えられるが、最初に述べたように今後の検討が必要となろう。

⑤ 甕E

やや様相を異にするが、大畑遺跡分類壺A類や椿野遺跡分類壺K(鈴木他1982A)に類似する。壺で分類されているが、前者にはススの付着が認められていて、本遺跡群例と同様に甕としての用途が考えられる。他に、口縁部に若干の差はあるが、坂戸遺跡B区5号溝(斉藤他1975)にも類例がある。広口で口縁部が発達する点は、纏向遺跡分類鉢C₁の影響とも考えられる。以上のように、地域・時期ともに限定できず、その出自は保留しておきたい。

⑥ 甕F

受け口状口縁の甕は近江に分布の中心があり、弥生時代中期から古墳時代前期までの型式変化を追うことができる(中西1985)。本遺跡群例は、近江のいずれの時期のものとも相当様相を異に

しており、近江とのつながりを考えるには中間地帯の様相を明確にする必要がある。欠山第2貝塚・竹ヶ花遺跡（大参1968）で本遺跡群例に類似するFが検出され中間地域に三河を想定することができ、その年代から本遺跡群のFも欠山式段階以降と考えられる。

⑦ 甕G

調整は畿内第5様式のものであり、当初庄内式段階には残存しないと考えられていたが（田中1965）、庄内式と布留式の接点に位置づく一括遺物の中に、第5様式類似の甕が見いだされ、周辺地域からの搬入が確認されている（奥田・米田1983）など、第5様式に限定する必要はないと考える。近年、関東でもタタキ甕の検出が多く（小川1983）、畿内中心部より和歌山地方などの周辺地域にその出自が求められている（岩崎1984）。本遺跡群例も同様な視点を持つべきであり、位置等を考えれば和歌山地方に出自を求めるには無理があり、畿内と当地方を結ぶいずれかの中間地域の存在が予測される。伊保遺跡（大橋他1974）・中狭間遺跡など三河に多い傾向があり、その可能性がある。台付甕のG₂は、伊保遺跡・三沢西原遺跡（鈴木他1985）などに類例はあるが、内面をヘラミガキする調整⁰⁹や胎土等を考えれば、在地化した中での展開と考える。

⑧ 甕H

形態・調整から畿内の布留式古段階から中段階に出自が求められ、搬入品である可能性も高い。県内では堂垣外遺跡（桐原・御子柴1969）に模倣品が出土しているが、搬入品とすれば県内初例のものといえる。

(3) 高坏

① 高坏A

欠山式の影響が認められ、欠山第2貝塚・朝日遺跡・高橋遺跡などの例では、口縁端部にケズリによる内傾面と内湾する脚部を持つ。本遺跡群では、口縁端部が丸く仕上げられ、直線的に開く脚部を持つものが多い。類例は伊場遺跡分類高坏C₃・椿野遺跡分類D₃などにあり、西遠江からの影響と考えられ、胎土等に注目すれば当地で在地化したものも存在する。

② 高坏B

元屋敷式段階から出現し（都築1983）、AからBへの型式変化が認められている。口縁端部にケズリによる内傾面を持つB₁は、欠山式の影響が残るものであろう。当然東海西部に系譜を求められるが、地域を限定できるだけの材料は今のところ得られていない。

③ 高坏C

竹川遺跡（山田・谷本1972）・四郷遺跡・藤井原遺跡（瀬川他1978）・五領遺跡（金井塚1971）など、わずかながら各地に散見される。北陸の原目山遺跡例（大塚1971）あるいは朝日遺跡SD178の高坏A₃などに類似点を見い出せるが、両者に直接結び付く根拠はなく、系譜は不明であるといわざるを得ない。

④ 高坏D

脚部形態は池ノ辺遺跡例（越川他1980）と類似するが、その系譜は明らかでない。県内では後沖遺跡（福島1983）に類例がある。

⑤ 高坏E

瀬戸内地方から畿内に伝播しそこで坏部に稜が付かない形態として定型化し、東海西部で坏底部に稜が付く形態が創出され、東海から関東では両者が混在するといわれる（比田井1980）。本遺跡群では稜が付くE₁が多数を占め、東海西部（特に濃尾）に通有な文様を持つものもあり、明らかにそこからの影響が強いといえる。

⑥ 高坏F

高坏F₁ 岩崎卓也氏が全国的な斉一性がみられると指摘した器形であり（岩崎1963）、小型器台が消滅した段階に出現し、畿内の布留式中段階からの出自が考えられる（比田井1983）。本遺跡群でもこれを肯定できる状況であった。

高坏F₂・F₃ 類例は多くないが、脚部形態から考えて、F₁の影響を受けて成立したものであろう。

⑦ 高坏G

類例は多くないが、F₂・F₃と同様に、柱状を成す脚部形態から出現等はF₁と似た状況が考えられるが、系譜・初現等を特定できる材料は得られなかった。

(4) 器台

① 器台A

畿内の纏向Ⅰ式段階で小型化し（石野・関川1976）、それが全国に波及していくと考えられる。A₂は小型化が欠山式の中空器台に及んで成立したものとされている（都築1983）。A₃は畿内の布留式古段階（纏向Ⅳ式）で定型化するもの（石野・関川1976）に類似し、A₄は大畑遺跡SKⅠに類例が求められ、前者が畿内系、後者は東海系と考えられる。A₇は畿内に出自が求められ、小若江北遺跡（坪井1956）・佐堂遺跡など布留式中段階に盛行する。関東では、他の器台の消滅した後の短期間に存在するといわれるが（比田井1983）、本遺跡群では、明らかに他の器台と混在する状況で検出されており、その出現時期等は再検討を要すると思われる。なお、丹彩されたA₂aがGOAA区包含層から1点検出されていて、手法から北信（星・青木他1983）との関連が指摘できる。

小型器台は形態が多様性に豊み、器形で時期を限定するのは困難と思われる。出現と消滅は限定できるので、その中で地域的な型式変化を把握する必要がある。

② 器台B

器台の範疇に含めたが、類例が小池遺跡6号住居址（佐藤1974）にあるのみで、器形そのものから検討すべきと思われる。

(5) 鉢

当地方弥生時代後期全般を通して鉢が組成の中に含まれる遺構は、本遺跡群を除くと6例と極めて少なく、基本的な組成の中に含まない可能性が高く、恒川Ⅶ・Ⅷ期で盛行するのは、外からの影響が考えられる。

① 鉢A・B・C

欠山第2貝塚にA₁、朝日遺跡SD178や椿野遺跡にA₂、高橋遺跡4次32号竪穴にA₃に類似するものがみられ、東海西部からの影響が考えられる。特に、A₁・A₂は弥生時代後期から出現する可能性が高い。しかし、前述の通り本遺跡群で盛行するのは古墳時代前期（恒川Ⅶ期）以降であり、欠山式でもAが普遍的に組成の中に含まれるとは考えられず、元屋敷式段階でAとともに短い口縁部がわずかに外反する鉢・壺が多くあり、B・Cを含めて、これらの時期の影響が強いことが想定できる。他に、B・Cは王江遺跡（杉浦・久永・齊藤1969）に類例がある。

② 鉢D

恒川Ⅶ期に位置づけられて古い型式と考えられるGOA溝址1出土例（57-21）は、小型丸底Aの影響で成立したと考えられ、それ以降順次口縁部が短くなるという型式変化が追える。

③ 鉢E

鉢E₁ 本遺跡群では3点検出されているが、畿内の布留式古段階のものの搬入品である可能性が高い。東海から関東で17遺跡からの出土が報告されている（谷川1985）が、形態としてくずれているものが多く、模倣品が大半を占めると思われる。その中で搬入品の検出は、土器の波及を考える上で注目すべき事実といえる。

鉢E₂ E₁を当地で模倣して作られた器形であろう。大畑遺跡SKI・朝日遺跡一次旧河道E・下蟹河原遺跡（藤森1939）・後沖遺跡などに類例がある。類例の多い東海西部との関連も想定できるが、E₁が当遺跡で検出されていることもあり、上述のように理解した。

鉢E₃ E₂が在地的な展開を経てE₃に型式変化すると捉えられる。

(6) 小型土器

① 小型丸底

布留式を代表する器形であり、系譜も畿内に求めることができる。Aは形態から布留式古段階に、Bは形態・調整から同式中段階に、Cは形態・調整から新段階に類似する。そのうち本遺跡群のAはハケ調整され、畿内で同様に調整される例はない点から、やや後出的要素ともいえる。

② 小型壺

Aは当地方弥生時代後期に通有な壺Aを小型化したものであり、在地土器である。Bの形態は東・北信の弥生時代後期清水式土器に類例が求められ、その影響が認められる。C・Dはやや類例に乏しい。

小型壺は有段口縁の形態をとり、胴下部に孔を有する例が多いとされる（湯川・加納1981）。本遺跡群例では胴中央部かやや上部に孔を有し、様相を異にしている。

③ 小型台付甕

朝日遺跡一次・朝日遺跡などの元屋敷式段階で検出され、濃尾にその出自を求められる。

(7) 甕

須恵器を模倣した形態であり、県内では一時坂古墳（宮坂・高見・小林1983）に類例がある。本遺跡群例の方がしっかりした有段部が作られ、やや古い様相を示すともいえる。

(8) まとめ

土器の形態分類に沿って系譜を明らかにしてきた。出自を明確にできるものは少ないが、在地土器と外来系土器が混在し、後者は畿内から東海東部、一部は東・北信までの広い範囲の影響が認められる。時期も弥生時代後期から古墳時代前期までの幅広い時間差がみられることが明らかとなった。壺A・甕Aなどの一部を除けば、すべて外来系土器ないし外来系の手法・影響を取り入れたものといってさしつかえなく、時期によって外来系土器の出自地・入り方・器種や器形に違いがあり、古墳出現前後の社会背景を反映していると思われる。

整理してみると、外来系土器の出自地は、**畿内・東海東部・東海西部・その他の地域**に分けることが可能である。いずれも大きな範囲での把握であり、それぞれに小地域に細分でき、特に東海西部は、濃尾・三河・西遠江の3地区に分けられ、弥生時代後期の小様式（向坂・辰巳1982、鈴木1985）に対応する。一方、畿内からは直接的な影響もあるが、中間地域を介在しての影響も強いといえる。東海西部からの影響が最も強く、畿内・東海東部の順で弱くなり、その他の地域からの影響は、例外的にごくわずかみられる程度である。

時期による外部からの影響を考えると、地域毎の編年とその併行関係、弥生時代と古墳時代の境界など、解決がつかない問題が残されているが、畿内では、庄内式新段階から布留式古段階・布留式中段階以降の2段階が指摘できる。東海西部では、欠山式段階及びそれ以前・元屋敷段階以降の2段階、東海東部でも、東海西部と併行関係を持つ同段階の2時期¹⁸が指摘できる。東海からは弥生時代後期から影響が認められるが、畿内からは弥生時代終末から古墳時代前期以降といえ、弥生時代の交流とは質的に違うといえよう。

出自地と時期を整理してみると以下の通りである。カッコを付けたものは予測である。

- 1 畿内の庄内式から布留式古段階——壺B₁a・C₁a・C₁b・E₁・(F₂)、甕G₁・H、器台A₃、鉢E₁、小型丸底A
- 2 畿内の布留式中段階以降——甕H、高坏F₁、器台A₇、小型丸底B・C
- 3 東海西部の欠山式段階及びそれ以前——壺B₁b・D₁a・E₃・F₁・(F₂)・F₃・(H)、甕B₁、高坏A

- 4 東海西部の元屋敷式段階——壺 $B_1b \cdot B_1c \cdot C_2a \cdot F_4$ 、甕 $B_1 \cdot C_1a \cdot C_2b$ 、高坏 $B_1 \cdot B_2 \cdot B_3 \cdot B_4 \cdot E_1$ 、器台 $A_2 \cdot A_4$ 、小型台付甕
- 5 東海東部——壺 $B_2 \cdot C_3$
- 6 東・北信——小型壺 B 、丹彩された器台 A_2a

4) 恒川V～X期の特徴

恒川V～X期の特徴を、外来系土器の進出と定着、それに伴う在地土器の解体という視点に立脚して述べ、合わせて器形の消長を明らかにしたい。外来系土器の進出は搬入→模倣→定着の段階を踏み、搬入されるだけのものや搬入品が認められずに模倣→定着が確認できる場合もある(比田井1985)。後者は模倣だけで終わる場合もあろう。こうした外来系土器の進出により、当地の弥生時代後期に通有な器形がどのように変化し、特定の外来系土器が在地化、定着し、あるいは外来の手法を受けて在地土器が創出される過程を明らかにすることにより、おのずから器形の消長が判明でき、時代の特徴が明らかになると考える。

まず最初に、当地方既出資料と恒川V～X期との併行関係を示し、本遺跡群で確認できなかった型式を補い、さらに本遺跡群と他遺跡の土器様相における差を勘案して恒川各期の特徴を記し、最後に主要器形の消長について触れてみたい。

(1) 恒川V期

① 既出資料との併行関係

上の金谷遺跡12号住居址、山岸遺跡18号住居址、権現堂前遺跡2号住居址、出早神社付近遺跡7号・19号住居址(遮那他1971)、帰牛原遺跡十万山地区B2号住居址、的場遺跡4号住居址、天伯B遺跡14号住居址、猿小場遺跡11号住居址、安宅遺跡CY1号住居址などがある。

ほとんどが本遺跡群と同様な組成を示すが、一部の遺跡に、ゆるく外反する口縁部に最大径を持ち頸部に櫛描の波状文・斜走短線文が施される甕と、口縁部が外反し坏部に稜を持つ箱清水土器に似る高坏があり、古い様相を示すと思われる。他に、安宅遺跡では外来系土器の壺 $D_1b \cdot F_3$ 、鉢 A_2 が検出され、本遺跡群で確認できなかったこれらの器形が恒川V期までさかのぼることを示している。なお、清水遺跡から壺 D_1a が出土し、在地土器との伴出関係が不明で位置づけが困難であるが、該期もしくは1段階古い時期に位置づくと思われ、壺 D_1a がかなり古い時期までさかのぼる可能性が高い。また、菊川式の小型壺が帰牛原遺跡十万山地区で検出され、東海東部との交流を物語っている。

② 特徴

在地土器の壺 $A_1a \cdot A_1b \cdot A_2$ や甕 A_1 の中に、三河から西遠江の欠山式土器の搬入品・模倣品の壺 $D_1 \cdot F_1 \cdot F_3$ や高坏 A が客体的に存在する。鉢 $A_1 \cdot A_2$ も外来系土器の可能性があろう。他に、東遠江からの搬入品の小型壺等も存在する。甕 B の確実な例はないが、猿小場遺跡11号住居址等

で小破片が検出されており、該期に出現する可能性が高い。

外来系土器の存在は在地土器の解体を具現化させず、定着までも至らない¹⁹⁾。在来の弥生時代の伝統が強く認められる時期である。しかし、甕A₁bなどで文様の簡素化傾向が始まり、変化のきざしがある。本遺跡群と他遺跡で極だった違いはみられない。

(2) 恒川Ⅵ期

① 既出資料との併行関係

高松原遺跡10号住居址、同Ⅱ-6号住居址、的場遺跡11号住居址、山岸遺跡8号・10号・24号住居址、月夜平遺跡9号住居址（宮沢他1970）、伊久間原遺跡16号住居址（佐藤1978）、埴牛原遺跡十万山地区B5号住居址などがある。

高松原遺跡で壺C₃、的場遺跡や山岸遺跡で高坏E₁b、山岸遺跡10号住居址で甕F²⁰⁾が検出され、これらの器形が該期までさかのぼることを示している。他に、山岸遺跡で器台A₂a・A₆aの完形品が検出され、該期の形態を示している。

② 特徴

在地土器は壺A₁a・A₂や甕A₂がある。壺A₁b・甕A₁が消滅し、後者は甕A₂に型式変化する。壺・甕とも文様の簡素化・無文化と胴部の球形化が進行する。

外来系土器は、畿内の庄内式に出自が考えられる壺B₁a・C₁aと甕G₁、東海西部の元屋敷式に出自が求められる甕B₁・C₁a、高坏B₁・B₂・E₁、器台A₂、東海東部に出自が考えられる壺C₃があり、畿内・東海西部の両地域の影響を受けているとも考えられる壺F₂もある。他に、近江に出自があり、中間地域に三河が想定できる甕Fもあり、壺D₁などが前期から続く。

在地土器が文様・形態の両面から変化をみせ、外来の影響を受けた結果といえる。恒川Ⅴ期からあまり変化が認められない壺A₁aなどは量的に少なくなる。畿内系土器には中間地域を想定することも可能であろう。外来系土器は東海系が多く、特に高坏が顕著に認められる。外来系土器で搬入品と断定できるものはないが、搬入→模倣段階まで至っていると考えられ、そのほとんどが該期から出現する器形である。在地土器が外来系土器の影響を受けて変化し、解体の始まる時期といえる。畿内系土器の存在は遺跡の性格を示すとも考えられ、当地方該期の普遍的な現象とはいえず、外来系土器自体の入り方も遺跡によって差がみられる。

(3) 恒川Ⅶ期

① 既出資料との併行関係

田村原遺跡14号住居址（酒井他1974）、月夜平遺跡1号・7号住居址、小池遺跡6号住居址、伊久間原遺跡18号住居址、清水遺跡15号住居址などがある。

本遺跡群でほぼ十分に該期の組成を確認できたが、伊久間原遺跡で特殊器台²¹⁾を、月夜平遺跡で諏訪地方に出自を持つと思われる直口縁の壺²²⁾が検出されている。他遺跡では在地土器が多く存在

し、本遺跡群とは様相が異なる。

② 特徴

在地土器は壺A₂・甕A₂cだけとなる。壺A₂は恒川VI期と同様の球形胴を呈するものの他、頸部が細く胴部上部の張りが弱くやや小型化するものもある。施文されるものが多いが、頸部の文様が省略されるものもある。甕A₂は無文のA₂cだけとなり、口縁部が直線的にやや長く外反するものと小型化するものがある。

外来系土器は、東海西部の元屋敷式に出自が考えられる壺B₁b・F₄、甕C₂a・C₂b、器台A₄、小型台付甕、畿内の布留式古段階に出自が考えられる壺E₁、甕H、器台A₃、鉢E₁、東海東部に出自を求められる壺B₂があり、出自は必ずしも明確でないが、甕D₁・E、高坏C、鉢Cなども出現する。恒川VI期に出現した器形のほとんどすべてが継続して盛行する。

甕A₂cにみられる口縁部形態は、外来系土器のくの字口縁の影響を受けたと考える。外来系土器は搬入段階の壺B₁b、甕H、鉢E以外は、模倣→在地化の段階まで至っていると思われ、形態が多様性に豊む。外面調整のハケ方向が定型化したものとは違う甕C₁c・甕C₂cやタタキの台付甕である甕G₂などが典型的である。

在地土器の解体が完了し、恒川VI・VII期に出現した外来系土器が在地化して定着する時期といえる。小型器台が盛行し、小型壺・鉢E₁が出現するが、小型丸底の出現を確定できず、いわゆる小型精製土器3種のセットが成立するのは次期からとなる。遺跡毎に外来系土器の進入・定着に相違があり、在地土器が主体を占める遺跡もある。当地方において本遺跡群が在地土器の解体が早いように思われ、該期で在地土器の占める割合は10%に満たない。遺跡の立地・性格等と関連して追求すべき課題と考える。

(4) 恒川VIII期

① 既出資料との併行関係

遺構の数は減少し、鐘鑄原A遺跡2号住居址（宮沢他1980）がある。報文ではひさご壺と高坏の組成で考えられているが、小型丸底・器台・高坏のセットであろう。他に、出早神社付近遺跡23号住居址（遮那他1971）もこの時期である可能性が高い。

② 特徴

在地土器はほとんどみられなくなり、小型壺Aにその影響が認められるだけとなる。

外来系土器は、畿内の布留式中段階に出自が考えられる甕H・小型丸底B、鉢E₁の在地化もしくは東海西部の影響も否定できない鉢E₂が出現し、系譜は不明であるが、甌も出現する。大多数は恒川VI・VII期に出現したものが継続し、ほとんどすべての器形に出現時からの型式変化が看取され、在地化が進んだことをうかがわせる。

在地土器が消滅し、外来系土器の在地化が完了し、いわゆる小型精製土器3種が成立する時期といえる。しかし、小型精製土器3種はすべての遺構にあるのではなく、持つ・持たないの差が

ある。遺構数は恒川Ⅶ期に比べると減少し、本遺跡群以外では2軒しか数えられなかった。

(5) 恒川Ⅸ期

① 既出資料との併行関係

中原遺跡H 2号住居址（宮沢他1969）、城遺跡11号・33号・35号住居址（酒井²⁰⁵1979）、清水遺跡方形周溝墓Ⅳ南周溝中層などがある。

城遺跡で甕D₃・高坏E₁が検出され、該期まで残存する可能性が高いが、後者についてはさらに検討を要する。他に、壺F₅があり、出現を該期に限定できる。また、清水遺跡では壺C₂の該期の完形品が検出されている。

② 特徴

畿内の布留式中段階以降に出自が考えられる高坏F₁の他、壺F₅・高坏F₂・小型丸底Cが出現する。消滅する器形が多く、壺B₁・C₁・F₄、甕C、高坏B₂・B₄・C、器台A、鉢A₁などがある。畿内系の高坏F₁以外の新出する器形は、前期までに在地化した器形からの型式変化が考えられる。小型丸底Cは在地化した展開の中で畿内の影響を受けている。

恒川Ⅵ・Ⅶ期に出現した多様な器形のうちある特定のもの、すなわち壺B₂・C₂・D₁・G、甕D、高坏B、鉢A₃・D・Eなどが継続し、その他の器形は消滅し、前期に成立した小型精製土器3種のセット関係が崩壊する時期といえる。正式報告がされてない住居址と常に混入を疑わなければならない溝址の資料を用いているため予察の部分が多いが、上記の傾向はほぼ間違いないと考える。

(6) 恒川Ⅹ期

① 既存資料との併行関係

城遺跡20号住居址、上の金谷遺跡10号住居址、清水遺跡方形周溝墓Ⅳ南周溝上層などがある。他に、中原遺跡にも一部該当する住居址があると思われるが、全資料の公開がないので明確でない。

ほとんどが本遺跡群と同様の組成を示すが、上の金谷遺跡で小型丸底Cの完形品が出土し、該期にも残存することを示している。また、清水遺跡・中原遺跡では須恵器の検出もあり、特定の初期須恵器が搬入されている可能性が高い。

② 特徴

須恵器の形態の影響を受けて成立した甗が出現し、一般的ではないが、特定の初期須恵器が搬入されている。組成は前期とあまり変化しないが、小型丸底Cは減少傾向を示し、該期後半に消滅すると考える。

恒川Ⅵ・Ⅶ期に出現した器形が型式変化を遂げて残存する最終段階で、須恵器の影響が認められ始める時期といえよう。次期からは須恵器の搬入が活発となり、その影響による坏が成立した

り、カマド設置に対応して形態が変化し壺と甕の区別が困難になるなど、恒川X期と次期の間大きな画期を見出すことができる。

恒川X期は須恵器の年代を援用して、5世紀中頃から後半を想定することができる。

器形の消長は、恒川V～X期のそれぞれに述べてきたが、主要器形を中心にまとめてみると第12表のようになると思う。破線部分は存在が予測できるが確定できないものである。今後の検討及び資料集積を重ねて確実にすべきものである。

5) 編年的位置

(1) 既存型式の検討

従来、当地方の弥生時代後期から古墳時代前期には、座光寺原式土器(今村1967)・中島式土器(宮沢1967)・月夜平式土器(宮沢1970)・恒川II式土器(神村1966)・飯田地方土師器I期・同II期(宮沢1968)が設定されている。座光寺原式は恒川IV期の頃に検討してあるので、それを除くすべての内容を明らかにして、それと恒川V～X期の土器を比較する中で従来の知見に修正を加え、編年的位置を明らかにしたい。

① 中島式土器

松島透氏による型式設定(松島1953・54)の後、宮沢恒之氏によってその内容が明らかにされた(宮沢1967)。報文では中島遺跡の表採資料に基づき型式設定されている。

図化資料は、壺A₁・A₂、甕C₃a・胴部に最大径を持ちゆるく外反する口縁部を呈する甕、高坏A・Fである。甕A₁aは拓影図のみ掲載されているが、典型的なものとされている。

上記の器形は、恒川V期のものを主体に恒川IV・VII・IX～X期に位置づく器形が混在している。ゆるく外反する口縁部を呈する甕を中島式としていることは重要で、この形態の甕は恒川V期まで残存するとはいえ座光寺原式新段階で盛行するものであり、この時期の代表的遺構である酒屋前遺跡7号住居址では、器形のわかる平底甕の5点中3点を占める。とすれば、同址は中島式に位置づけなければならないが、報告書やその後の宮沢氏(宮沢他1977)・神村氏(神村1982)の弥生時代後期土器の細分案でも、座光寺原式に位置づけている⁸⁰。つまり型式設定当時と変化しているわけで、その理由が明らかにされなければならないが、何の説明もされていない。神村氏は座光寺原・中島式について地域外研究者の把えに混乱がみられる(神村1982)としているが、混乱に落ち入らせる原因は、明らかに地域内研究者にあったといわざるを得ない。

② 月夜平式土器

月夜平遺跡の調査所見に基づき、宮沢恒之氏によって型式設定された。

中島式甕の無文化と欠山式土器の模倣を特徴とし、壺A₁・A₂・E₂、甕A₂c・B₁a・C₁、高坏

時期 器形	V	VI	VII	VIII	IX	X
壺	A ₁	-----				
	A ₂		-----	-----		
	B ₁		-----			
	B ₂		-----	-----		
	C ₁		-----	-----		
	C ₂		-----	-----		
	D		-----	-----		
	E ₁			-----	-----	
	F ₁		-----	-----		
	F ₂		-----	-----		
	F ₃			-----	-----	
	F ₄			-----	-----	
	F ₅				-----	-----
	G ₁			-----	-----	
G ₂				-----	-----	
甕	A ₁	-----				
	A ₂		-----	-----		
	B ₁	-----				
	B ₂		-----	-----		
	C ₁		-----	-----		
	C ₂		-----	-----		
	C ₃		-----	-----		
	D ₁			-----	-----	
	D ₂			-----	-----	
	E		-----	-----	-----	
	G ₁		-----	-----		
	G ₂			-----	-----	
甑蓋			-----	-----		
高坏	A	-----				
	B ₁	-----	-----			
	B ₂		-----	-----	-----	
	B ₄		-----	-----	-----	
	B ₅				-----	-----
	C			-----	-----	
	D			-----	-----	
	E ₁		-----	-----	-----	
	F ₁				-----	-----
	F ₂				-----	-----
	F ₃				-----	-----
G				-----	-----	
器台		-----	-----	-----		
鉢	A ₁			-----	-----	
	A ₂			-----	-----	
	A ₃			-----	-----	
	D			-----	-----	
	E ₁			-----	-----	
	E ₂			-----	-----	
	E ₃				-----	-----
小型丸底	A			-----	-----	
	B			-----	-----	
	C				-----	-----
小型壺		-----	-----	-----	-----	
小型台付甕		-----	-----	-----	-----	
甗				-----	-----	

第12表 下伊那地方における弥生時代後期後半から古墳時代前期の主要器形消長表

B₂、特殊器台などで構成される。

4) で示したように、恒川VI期とVII期に分離することが可能であり、欠山式の模倣というより元屋敷式の模倣とした方が適切と考えられる。

③ 恒川II式土器・飯田地方土師器I期

神村透・宮沢恒之両氏とも同一の恒川遺跡採集資料を用いて型式設定しているが、遺構や伴出関係が不明で一括性は検証されていない。

実測図の掲載がある宮沢氏論文に基づいてみていくことにする。壺B₂・C₂・E₁、甕A₂c・D₂、高坏B₄、小型丸底A・C、片口などで構成される。

採集資料による型式設定のため、恒川VII～VIII期を中心に一部恒川IX期のもが含まれて不十分ではあるが、古墳時代前期へ位置づけされたことはうなづける結果であった。

④ 飯田地方土師器II期

中原遺跡の発掘資料に基づき、宮沢恒之氏によって型式設定された。

図化資料個々の出土遺構の記述がなく伴出関係が不明であるが、甕D₂、高坏F₂、小型丸底C、鉢D₂にハの字に開く脚部を付けた高坏、須恵器甕で構成される。

恒川X期とほぼ同様の組成を示していると思われるが、該期で重要な位置を占める壺・高坏F₁等が欠落していて、十分な組成を示しえなかったものといえる。

(2) 恒川V～X期の位置づけ

(1)で示したように、従来の該期における型式設定は、発掘調査があまり多くなかった時期での僅少資料による成果であったこともあり、いずれも2時期やそれ以上にまたがるものの混在資料や不十分な内容であったりしている。しかし、発掘調査が進み良好な資料が集積された現段階において、従来の編年を清算する必要があるといえる。

そこで、弥生時代後期は型式名として呼称することが定着している座光寺原・中島式を用い、それ以降は下伊那地方土師器I期から順番を追うのが適切と考え、以下のようにしたい。

中島 $\left\{ \begin{array}{l} \text{I式} \text{—————} \text{恒川V期及び該期相当資料} \\ \text{II式} \text{—————} \text{恒川VI期及び該期相当資料} \end{array} \right.$

下伊那地方土師器I期——恒川VII期及び該期相当資料

下伊那地方土師器II期——恒川VII期及び該期相当資料

下伊那地方土師器III期——恒川IV期及び該期相当資料

下伊那地方土師器IV期——恒川X期及び該期相当資料

恒川V期は弥生時代後期後半、恒川VI期は弥生時代終末、恒川VII・VIII期は古墳時代前期前半、恒川IX・X期は古墳時代前期後半に位置づくとして整理される。

(3) 他地域との併行関係

詳しく触れる余裕がないため、畿内、東海西部、東海東部及び県内の上伊那地方、諏訪地方、中信、東・北信との併行関係を第13表でまとめてみた。共通の理解に立つため型式名は用いず、標式遺構によった。なお、東海西部は弥生時代後期の小様式に対応する濃尾・三河・西遠江の3地域に区分して考えた。

畿内・東海西部・東海東部との併行関係は、当遺跡群の外来系土器の型式や時期の特徴を比較検討し、県内各地との併行関係は、各地の外来系土器の型式や時期の特徴を比較検討することによった。県内各地の様相は地域毎に外来系土器の影響・出自地に多少の相違があるが、概括的には本遺跡群の変遷と変化ないと考えている。

報告書等による検討だけで済ませた部分や地域的な資料の片寄りや空白部分も多く、誤って解釈している所もあるかと思われる。近年、北信の善光寺平を中心にして地域編年を組み立てようとする動きがでてきている（千曲川水系古代文化研究所1982・青木1984）。やはり弥生時代後期の文化圏それも地域差を勘案した中での小地域毎の編年が確立され、個々の土器によるものでなく、時期の特徴などの大きな変化によって併行関係が示される必要がある。今後、研究の進展により具体的に地域間相互の様相が示されるものと考えられる。

（山下誠一）

畿内	東海西部			東海東部	上伊那地方	諏訪地方	中	東・北信
	尾	三河	西遠江					
V 藤原宮内裏外郭地域 溝S D 527、包含層 嚮向遺跡東田塚3 上田町遺跡土層	朝日遺跡S D 178	欠山第2貝塚溝状遺構 高橋遺跡4次32住 竹ヶ花遺跡整穴住居址	椿野遺跡II群 三和町遺跡	月の輪上遺跡 溝状遺跡20 三沢西原遺跡S K 27	高井田遺跡9住 町谷遺跡弥生2住 栗林神社東遺跡 C区1住	橋原遺跡24住	中高遺跡1住	生仁遺跡Y 8住 安源寺遺跡18号土層
VI 上田町遺跡II層 嚮向遺跡辻土層4下層	元屋敷遺跡整穴状遺構		中平遺跡 第11号方形周溝墓	行人塚遺跡4住 小栗田西遺跡15住 土橋遺跡S D 102	上の林遺跡3次Y 2住	橋原遺跡43・46住	弘法山古墳	御屋敷遺跡Y 4住 四ッ屋遺跡30住 西光坊遺跡8住
VII 嚮向遺跡辻土層4上層 平城宮朝集殿溝 S D 6030下層 坂田寺跡下層 壹振遺跡井戸S E 03・ 土坑S K 03	宮の脇遺跡2住	伊保遺跡櫛口地区溝状 遺跡	椿野遺跡III群 中平遺跡S X-12	小栗田西遺跡1号墳 三沢西原遺跡 S B 25 : S X 21 土橋遺跡S D 1		橋原遺跡62住	中山36号墳	御屋敷遺跡Y 1住 四ッ屋遺跡9・13住 下小平遺跡 HM 2号方形周溝墓
VIII 小若江北遺跡 上ノ井手遺跡溝 S D 031 藤原宮溝S D 912 佐堂遺跡S K 6013・ 6014	朝日遺跡群一次旧河道 E			月の輪平遺跡1・18住 土橋遺跡S K 76	堂垣外遺跡1住	下蟹河原遺跡 稲荷平遺跡4住 新井南遺跡2住	借馬遺跡25・26・ 30住	灰塚遺跡H 1住 五輪堂遺跡14住 後沖遺跡16住
IX 上ノ井手遺跡S E 030 下層～上層	牧野小山遺跡島崎地区 H 4住	高橋遺跡9次14住			樋口内城館址遺跡34住		借馬遺跡49住	城の内遺跡18住 駒が新町遺跡 第1号特殊遺構
X 船橋遺跡O-II	牧野小山遺跡島崎地区 H 7住	神明遺跡31住				御社宮司遺跡1住 海戸遺跡15住	白神場遺跡12住 平出遺跡43住	城の内遺跡17住

第13表 恒川V～X期と各地域土器の併行関係表

註

- (1) 従来、口縁折立部の文様は縦の沈線（神村1966）・刻目様の沈線文（宮沢1967）などと呼ばれてきた。しかし、施文方法の観察によれば、ヘラを縦に移動させて施されたものでなく、先端の広いヘラ（ヘラⅢ）で突き刺していることは明らかであり、沈線ではなく、篋描刺突文とするのが妥当といえる。
- (2) 口縁・底部が $\frac{1}{2}$ 個体以上残る10点中7点が外来系土器であり、それ以下の破片を含めるとさらに高い数値になる。
- (3) 研究者によってその概念規定は一様でないが（橋崎他1984）、本編では厳密に用いず、I期前半～中頃くらいまでのものを初期須恵器とする。
- (4) 畿内の古墳時代前期の土器に関する理解は一様でなく、型式設定のあいまいさが指摘されている（井上1983）。本編で布留式中段階としたのは小若江北遺跡（坪井1956）を標式とするもので、布留式はこれを基準として古いものを古段階・新しいものを新段階とした。
- (5) 1点だけ奈良時代と考えられる須恵器を含んでいるが、大多数が古墳時代後期のものであり、須恵器はまぎれ込みによるものと判断した。
- (6) 田中琢・工楽善通両氏の御教示による。
- (7) 東海西部の該期土器に関する理解も一様でないが、本遺跡群等の分析から、欠山式と元屋敷式は新旧関係で扱えられると考え、大参氏の見解に従った。しかし、石塚式の設定には疑問もある。
- (8) 天竜川以西の東海地方を東海西部とした。当該地方の弥生時代後期は大様式を設定し、その中で小様式としての地域差を考えようとする傾向がみられる（向坂・辰巳1982）・（鈴木1985）。鈴木氏等が指摘するように地域差が存在すると考えられるので、東海西部を濃尾・三河・西遠江の3地区に区分し、その影響等が限定できる場合には、これらも用いることにした。
- (9) 外来系土器にも、在地に定着し、一定段階を経たものは、在地土器として位置づけるべきものもあるが、基本的には、当地方弥生時代からの伝統的なものについて呼称する。
- (10) 該期を細分する場合は2分して考え、古段階・新段階とする。他に、纏向編年も一部用いた。
- (11) 伊勢湾沿岸地域が分布の中心に考えられている。
- (12) 天竜川以東の中遠江・東遠江・駿河を総称する。東海西部のように小地域の限定はしなかった。
- (13) この壺は層位等から恒川Ⅶ期に位置づけ、畿内の布留式古段階と併行関係を持つと考えているが、形態・調整等からみればそれ以前の時期に盛行するものであろう。
- (14) 県内では諏訪地方がそうであろうと思われる。
- (15) 都築みどり氏の御教示による。
- (16) 甕の内面をヘラミガキする手法は、甕Aにみられるように当地方弥生時代後期に通有なもので、外来的要素からは抽出し得ないものである。甕B・Fなどにも散見され、外来の形態・手法を取り入れる中で在地的な規制が働いたものとする。
- (17) 猿小場遺跡14号住居址・座光寺原遺跡5号住居址・酒屋前遺跡7号住居址・安宅遺跡CY1号住居址・高松原遺跡5号・同16号住居址である。

- (18) 本遺跡群では、当地独自の弥生時代後期の影響を示すものは出土していないが、当地方既出資料からは検出されている。
- (19) 在地的な胎土を持つ高坏・壺等が散見されるが、組成の中に占める割合を考えると、定着段階まで至っているとは考えられない。
- (20) 報文ではS字甕としてあるが、実際に確認したところ、口縁部形態・調整から受け口状口縁甕であると認定した。
- (21) 高坏は既出資料を含めた該期標式遺構から合計10点が出土しており、その他の外来系土器を合計しても13点くらいであり、半数近くを占めている。
- (22) 器台結合土器・高坏型器台・装飾器台などと呼ばれる、坏底部が鏝口状に突出し、そこから外反する坏部を持つもの。
- (23) 橋原遺跡分類壺B（高林1981）であり、新井南遺跡（小林他1975）・下蟹河原遺跡（藤森1939）などに類例がある。
- (24) 田村原14号住居址などはほとんどが在地土器である。
- (25) 正式な報告書が出版されていないので不明確な部分が多い。
- (26) 岡田氏は座光寺原式、宮沢氏は座光寺原II式、神村氏は座光寺原III式としている。
- (27) 当初の中島式の型式設定に従えば、座光寺原式新段階も中島式に含まれると考える。しかし、恒川IV期とV期の間で在地型台付甕の消滅・高坏Aの出現などで画期を見いだせ、なおかつ地元研究者がほぼ一致して座光寺原式新段階を座光寺原式、恒川V期を中島式としている現状を考えて、恒川V期を中島I式とした。
- (28) 恒川VI期にみられる外来系土器の進出とその後に着する器形がほぼ出さうこと、特に畿内系土器の侵入は弥生時代の交流の範囲を越えるものと考え、VI期以降を土師器と考えるべきかもしれないが、VI期に残存する弥生時代の影響を強く認め、弥生時代に位置づけておく。
- (29) 東・北信を中心にして、中信や上伊那・諏訪地方まで北陸の影響が認められ、東海西部や畿内とともに重要な要素と考えられる。

4 土器に関する二・三の問題

弥生時代中期後半・弥生時代後期から古墳時代前期の土器について、形態を中心に分類し、土器の編年を行ない、その編年的位置を明らかにしてきた。その中で詳しく触れることができなかった器種構成の変遷と文様の消長を、恒川Ⅰ～Ⅹ期を通して概観したい。

1) 器種構成

(1) 資料の検討

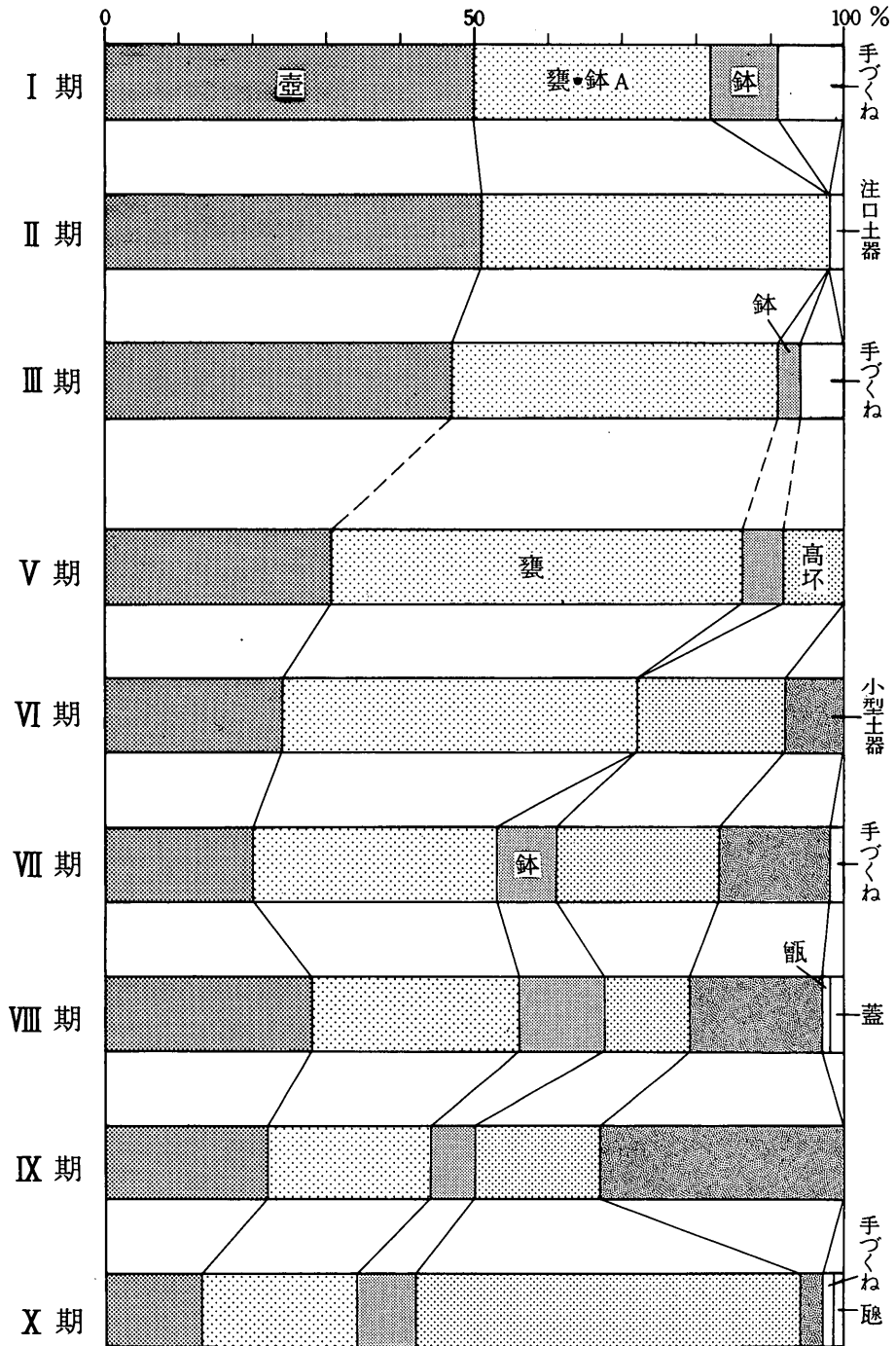
恒川Ⅰ～Ⅹ期の住居址出土資料などの口縁部から胴部 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 以上残存する個体の点数で、器種構成の変化を把握し、第14表で表わした。

対象とする遺構は、恒川Ⅰ期——本遺跡群資料に難点があるため北原遺跡報告書(神村他1972)の図化資料(同報告書のP48・49)で代用し、恒川Ⅱ期——TAN・KUR1号・9号・13号・19号・77号住居址、GOB35号・46号住居址、AMD17号・18号住居址、ARY9号・51号・54号・55号住居址、恒川Ⅲ期——TAN・KUR33号・96号住居址、GOB8号・17号・25号・45号・47号住居址と溝7、恒川Ⅳ期は本遺跡群では十分な組成を示し得ないので省略し、恒川Ⅴ期——TAN・KUR5号・7号・8号・12号住居址、恒川Ⅵ期——GOA1号・2号・6号・9号住居址、GOB16号・18号住居址、恒川Ⅶ期——GOA5号・7号・8号住居址、GOB2号・7号・15号・19号・29号住居址、恒川Ⅷ期——GOA3号・4号住居址、GOB4号・5号・10号住居址、恒川Ⅸ期——GOB溝址15—3層、恒川Ⅹ期——TAN・KUR16号・23号・75号・90号住居址出土土器を対象とした。点数は、Ⅰ期34・Ⅱ期66・Ⅲ期38・Ⅴ期36・Ⅵ期25・Ⅶ期78・Ⅷ期91・Ⅸ期18・Ⅹ期72点である。

用途から導き出された器種の変遷を見るため、恒川Ⅰ～Ⅲ期では甕と鉢⁽¹⁾Aを同一に扱い、恒川Ⅴ期以降の小型土器には、いわゆる小型精製土器3種を構成する器台・鉢Eを加えた⁽²⁾。資料に多少の濃淡があり、特に恒川Ⅸ期が溝址出土資料で混入品等を除外せずに数えたために、やや不十分な点が認められる以外は、各期の特徴が表われていると考える。

(2) 器種構成の変遷と画期

従来から指摘されているように(神村他1972)、弥生時代全搬を通して壺・甕が組成の主体を占め、後期後半の恒川Ⅴ期までは80%を越す。弥生時代終末の恒川Ⅵ期で小型土器の器台が出現し高坏が一般化するため、壺・甕の占める比率は72%となり、組成が変化するきざしをみせる。壺・甕の比率は弥生時代中期と後期では変化があり、中期(恒川Ⅰ～Ⅲ期)では壺50%前後・甕32～47%であるのに対し、後期では甕が恒川Ⅴ期56%・恒川Ⅵ期48%と増加する反面、壺はそれぞれ31%・24%と減少傾向を示す。恒川Ⅳ期の組成が明らかでないが、座光寺原式古段階に位置づく猿小場遺跡14号住居址では、10点中壺3点・甕5点・



第14表 恒川遺跡群を中心とした器種構成変遷表

⁽³⁾ 鉢2点であり、座光寺原式新段階に位置づく酒屋前7号住居址では、13点中壺1点・甕9点・鉢1点・器台2点と、甕が主体的地位を占める傾向に変わりがない。

恒川VI期でみせた組成の変化は恒川VII期になると顕著となり、壺・甕の割合が減少しその他の器種の占める割合が高くなり、多様化傾向を示す。これは恒川VII期以降多少の増減を示しながらも恒川X期まで継続し、X期では壺・甕の占める割合が34%までになる。その他の器種のうち、鉢が恒川VII期で一般化し恒川X期まで継続し、恒川VI期に出現した小型土器は徐々に増加し、恒川IX期で最大の33%を示す。恒川IX期の場合は小型丸底のみの数字であり、該期の城遺跡11号・33号・35号住居址の総計33点中11点が小型丸底であり、同様の傾向を示している。恒川X期では小型丸底が減少し、高坏が72点中37点と52%を占め激増する。該期の上の金谷遺跡10号住居址でも22点中14点と64%を占め、一般的傾向であることを示している。

器種構成で時代の画期を求めれば、壺・甕の割合が逆転する恒川III期と恒川IV期の間、新器種が定着し壺・甕の占める割合が減少する恒川VI期と恒川VII期の間、小型丸底が減少し高坏が増加する恒川IX期と恒川X期の3箇所に設定することができる。なお、新器種の出現と壺・甕が占める比率の減少で、恒川V期とVI期の間に画期を求めることも可能であろう。

こうした変化は時代背景を反映していると考えられる。詳しく分析して触れる余裕はないが、恒川IV期にみられる遺跡数の増加と拡大に無縁ではなからうし、恒川VI期ないし恒川VII期に求められる画期は、弥生時代終末から古墳時代初頭の社会情勢、極論すれば、畿内を中心とする勢力の支配を受けはじめていることを裏づけるともいえる。また、恒川VII期以降にみられる器種の多様さは、佐原真氏のいう銘々器(佐原1982)の出現を、それ以降のいずれの時期かに求められることを示唆⁽⁴⁾している。

2) 文 様

それぞれの文様について、時期毎にその変遷を概観し、その消長を明らかにしたい。弥生時代中期では、文様やその要素の組み合わせで分類も行ない、若干の考察も試みているので、ここでは各文様と最低の単位である文様要素について触れることにする。文様は壺・甕に施されることが多く、それ以外の器種ではまれにあるのみなので、壺・甕を中心に分析し、必要な場合その他の器種について触れる。

(1) 資料の検討

対象は器種構成と同じ遺構の図化資料を用い、各文様要素は重複しているため、使用頻度を調べることで傾向を把握したい。なお、恒川I期についてはARY10号・15号・23号住居址資料も加えて検討する。

① 恒川I期

篋描文 壺—横線文1・縦線文1・斜線文1・連続山形文3・短線文2・列点文1・刺突文1——計10点。

甕—コの字重ね文2・列点文1・刻目文1——計4点

櫛描文 壺—横線文9・廉状文2・短線文1——計12点。甕—横線文1・縦線文1・波状文4・

羽状条線文 3・斜走条線文 1——計11点。

縄文 壺—LR 1、甕—RL 2・LR 2・Lr 2——計 7 点

浮文 甕—円形浮文 2 点。

丹彩 全面の丹彩 2・部分的な丹彩 1——計 3 点。

壺・甕ともほとんど例外なく文様が施される。

② 恒川Ⅱ期

篋描文 壺—横線文 3・縦線文 1・斜線文 2・連続山形文 1・押し引き文 1・コの字重ね文 1・列点文 1・羽状刺突文 1・刻目文 1——計12点。甕—刻目文 9・鋸歯文 1・コの字重ね文 1——計11点。

櫛描文 壺—横線文12・縦線文 3・波状文 7・廉状文 1・連続山形文 9・鋸歯文 1・短線文 5・羽状文 1・列点文 2——計41点。甕—横線文 1・縦線文 1・斜線文 1・波状文10・廉状文 3・斜走条線文 1・羽状条線文12——計29点。

竹管文 壺に 1 点ある。

縄文 壺—RL 3・Rl 1、甕—RL 1・LR 2・Lr 1——計 8 点。

浮文 壺—円形浮文 7、甕—円形浮文 1——計 8 点。

丹彩 丹彩土器 4・部分的な丹彩 6——計10点。

恒川Ⅰ期と同様に壺・甕はほとんど例外なく施文される。

③ 恒川Ⅲ期

篋描文 壺—横線文 1・波状文 1・連続山形文 1・斜線文 1・列点文 1・刻目文 1——計 6 点。甕—刻目文 4・波状文 1——計 5 点。

櫛描文 壺—横線文 3・波状文 4・廉状文 1・連続山形文 2・羽状文 1・短線文 1——計12点。甕—波状文 6・廉状文 3・鋸歯文 1・斜走短線文 1・羽状条線文 6——計17点。

縄文 壺—RL 1、甕—RL 1・Rl 1——計 3 点

浮文 壺—円形浮文 1・棒状浮文 1、甕—円形浮文 1——計 3 点。

丹彩 全面の丹彩 8・部分的な丹彩 3——計11点。

④ 恒川Ⅴ期

篋描文 壺のみに限られ、壺Aの口縁折立部に例外なく刺突文が施され13点を数える。

櫛描文 壺—波状文 9・横線文 3・ $\frac{1}{4}$ 円弧文⁽⁵⁾ 2——計14点。甕—波状文17・斜走短線文 6——計 23 点。

⑤ 恒川Ⅵ期

篋描文 壺のみで、刺突文 3・羽状文 1——計 4 点。

櫛描文 壺—波状文 1 点だけであるが横線文があることは確実である。甕—波状文 4 点。

竹管文 壺— 2 点。

浮文 壺—円形浮文 1 点。

丹彩 部分的な丹彩1点。

⑥ 恒川Ⅶ期

籬描文 壺一羽状文1点だけあるが、住居址からは検出されなかった壺Aの口縁折立部に刺突文が残存している。

櫛描文 壺一波状文1・横線文2——計3点。

浮文・凹線文・丹彩 棒状浮文・凹線文・部分的な丹彩が壺に1点ずつある。

文様が施されるのは壺に多いが、壺を含めほとんどの器種は無文である。

⑦ 恒川Ⅷ期

籬描文 壺一羽状文1・刻目文2——計3点。

櫛描文 壺一横線文2・波状文1・刺突文1——計4点。

浮文 壺一棒状浮文2点。

暗文 鉢E₂の内面に放射状に施される。

壺Aが消滅するため、文様が施されるのは壺Dくらいになり、無文化はさらに進行する。新しい技法としてヘラミガキによる文様の暗文が登場する。

⑧ 恒川Ⅸ～Ⅹ期

恒川Ⅸ期で確実に文様が施されるものはなく、恒川Ⅹ期の高坏に暗文が6点施されている。

(2) 文様の消長

各時期毎に資料の濃淡があり一概に点数だけでは処理できないが、(1)の状況をふまえて下伊那地方の文様の消長を模式的に表わすと第15表のようになる。

① 籬描文

壺 恒川Ⅰ期で最も盛行し、量的に多い壺A₁では櫛描横線文と組み合わせて施文され、文様要素も多様性に豊むが、恒川Ⅱ期で櫛描文に変化するため減少する。壺A₁以外では恒川Ⅰ・Ⅱ期で主体的地位を占め、恒川Ⅲ期まで残存するが、器形自体客体的な存在なので、籬描文の占める割合は減少する。弥生時代後期の恒川Ⅳ期でも壺に多い傾向は変わりなく、在地土器の口縁折立部の刺突文や外来系土器の羽状文・刻目文として残存する。在地系壺が消滅する恒川Ⅷ期では、外来系土器が在地化したものにわずかみられるだけで、それも恒川Ⅸ期には消滅する。

甕 恒川Ⅰ～Ⅲ期を通して、甕C・Dの口縁部や胴部と全器形の口唇部の刻目文にあるが、壺に比べると少数である。恒川Ⅳ期でほぼ消滅し、古い様相を示すものの口唇部に刻目文として残存するだけである。

② 櫛描文

各文様の中で最も盛行し、壺・甕とも文様の中で主体的な地位を占めている。

壺 恒川Ⅰ期の壺A₁で籬描文が採用されるためにやや少なく、文様要素も一定のもののみであるが、恒川Ⅱ期で櫛描文に変化するため増加し、文様要素も多様性に豊む。恒川Ⅲ期以降引き続

文様 時期	籠描文		楯描文		繩文		浮文		丹 彩	暗 文
	壺	甕	壺	甕	壺	甕	壺	甕		
I										
II										
III										
IV										
V										
VI										
VII										
VIII										
IX										
X										

第15表 下伊那地方における主要文様消長模式表

き盛行するのであるが、施文部位・文様要素とも集約される傾向を示す。恒川Ⅴ期では口縁～胴上部にかけて3種類の文様要素で施文される。在地土器が残存する恒川Ⅶ期では頸部以下が無文のものも出現し、恒川Ⅷ期では外来系土器が在地化したものにわずかにみられるだけとなる。

甕 恒川Ⅰ～Ⅴ期までほぼ全器形に櫛描文が施されるが、施文部位・文様要素は恒川Ⅱ期で高まりを示し、恒川Ⅲ期以降集約される傾向を示す。恒川Ⅵ期で波状文が頸部に1帯施されるのみになり、その後半ではすべて無文化し、それ以降、甕に文様が施されることはなくなる。

③ 縄文

壺・甕とも地文としてその他の文様、特に篋描文と組み合わせられたり、口唇部に単独で施されることが多い。恒川Ⅰ期が最も多く、それ以降徐々に少なくなる傾向を示し、恒川Ⅲ期でほとんど消滅する。それ以降は猿小場遺跡・地神遺跡等でわずかにみられるが、搬入品ないし外来的要素が強いもので、手法として定着するものでもない。

④ 浮文

弥生時代中期の恒川Ⅰ～Ⅲ期では壺・甕ともにあり、壺がやや多く、種別は棒状浮文が壺に1点あるのみで、他はすべて円形浮文である。

壺では恒川Ⅰ期で確実な例を示せないが北原遺跡報告書の拓影図にあり、その存在は予測でき、恒川Ⅱ期では数字で示される通り盛行し、恒川Ⅲ期までやや減少しながら続く。甕は恒川Ⅰ～Ⅲ期で主体的地位を占める甕Aなどに付される例は少なく、甕Dなどに多い。恒川Ⅲ期で甕1点だけとなり減少傾向を示し、後半には消滅している可能性もある。

弥生時代後期の恒川Ⅳ・Ⅴ期で浮文が付される例は、管見するところ壺に円形浮文が1点ある⁽⁶⁾のみで、手法として完全に消滅するといえる。恒川Ⅵ期以降で外来系土器の壺B₁a・B₁bなどに円形浮文・棒状浮文がみられ、後者は恒川Ⅶ期の器台に採用されるなどやや手法として定着をみせ、恒川Ⅷ期の外来系土器が在地化した土器にわずかに残存し、恒川Ⅷ期後半以降に消滅したと考えられる。

⑤ 丹彩

全面的丹彩・部分的な丹彩とも弥生時代中期に多く、恒川Ⅳ・Ⅴ期で丹彩が検出された例はない。1)の数字をみる限り恒川Ⅱ・Ⅲ期に盛行するが、本遺跡群の場合丹彩土器は少破片でも図化に努めたため、北原遺跡の報告書より点数が多くなったとも考えられ、同書にも丹彩土器の破片はどの住居址にみられるとの指摘(遮那1972)もあり、部分的な丹彩の点数を掌握できなかったことを考えれば、恒川Ⅰ～Ⅲ期を通して盛行するものと把握し、基本的にはⅢ期終末に消滅すると考えられる。

恒川Ⅵ期以降で外来系土器の壺B₁b・C₁aなどに部分的な丹彩が施され、恒川Ⅶ期で器台に1点全面的丹彩される例があるが極めて少数であり、恒川Ⅷ期以降で丹彩される例はない。

⑥ 暗文

恒川Ⅷ期の鉢E₂にみられるが、畿内からの搬入品の鉢E₁からの影響と考えられ、恒川Ⅵ期以降

の手法といえる。当初は鉢のみに採用されていたが、恒川Ⅹ期では高坏にもみられ、文様も放射状だけだったものが多様性に富むなど、手法として定着したことを示している。恒川Ⅹ期以降、坏・高坏や一部甕など普遍的にみられ、多少の増減を示しながら平安時代まで継続する手法となる。

(3) 文様の位置づけ

恒川Ⅰ～Ⅹ期の文様についてその消長を概観してきたが、その位置づけを考えてみたい。

恒川Ⅰ期に先行する阿島式土器では、篋描文・縄文・円形浮文・部分的な丹彩が用いられ、櫛描文は鉢の条線文や斜走短線文に採用されているが、壺ではほとんどみられない（佐藤・宮沢1967）。恒川Ⅰ期の篋描文・縄文・円形浮文・丹彩は伝統的要素の残存と考えられ、円形浮文を除けばいずれも簡素化⁽⁷⁾されている。恒川Ⅰ期以降主体的地位を占める櫛描文は該期から登場する外来系の要素であり、形態等にみられる断絶も考えると、Ⅰ期に東海西部から強い影響を受けていると考える。恒川Ⅱ期以降櫛描文が盛行するに従いその他の文様が衰退し、恒川Ⅲ期で縄文・浮文・丹彩・甕の篋描文が消滅する。これらは在地的な発展をたどる過程を示すといえる。恒川Ⅳ期以降にみられる文様要素のほとんどが恒川Ⅲ期以前からの発展であり、引き続き在地的な展開をみせている。その中で、恒川Ⅴ期には確実に回転台使用による櫛描文があり、恒川Ⅲ期で確認できる例がないことから恒川Ⅳ期のいずれの時期かに伝播したと考えられ、出現時期・手法的背景等は今後の課題である。恒川Ⅵ期以降在地土器の無文化が進み、恒川Ⅷ期にわずかに残る文様は、外来系土器が在地化したものに施されるものである。無文化の波は畿内から波及したものであろうが、その中で残存する文様が東海西部系土器に施される点は興味深い。（山下誠一）

註

- (1) 明らかに煮沸形態としての利用が考えられ、その他の鉢との用途差がみられるため、甕と鉢Aを同一に扱った。
- (2) 器台・小型丸底・小型壺・小型台付甕・鉢Eを含んだ総数で、鉢は鉢Eを除いた総数である。
- (3) 報告書では高坏が3点としてあるが、そのうち2点は形態・調整等から台付甕、1点は台付鉢と判断した。
- (4) 高坏に食器としての用途もあると考え、高坏が増加する恒川Ⅹ期がその可能性が高いと考える。しかし、その後すぐに坏の個体数が激増するため、銘々器の主流は坏に移行したと思われ、高坏が銘々器としての役割を果たした時期は極めて短い間であったと思われる。
- (5) 口縁部資料が多いので、頸部以下に施される横線文・ $\frac{1}{4}$ 円弧文の数字は増加することが予測できる。
- (6) 座光寺原式新段階に位置づく地神遺跡6号住居址の菊川式土器の壺の頸部に付される。
- (7) 阿島式土器の丹彩は文様部以外の全面に施されることが多く、篋描文の文様要素も多様性に豊んでいる。

VI 弥生時代中期後半から古墳時代前期の石器について

恒川遺跡群では、該期における多種多様な石器の存在が明らかとなり、従来からいわれる当地方における弥生時代以降の石器様相の特異性——打製石器の発達と根強い残存を裏づけることになった。ここでは、本遺跡群の成果を中心として若干の考察と問題点の指摘を行ないたい。特に、農具と木工具について検討し、該期における生産形態を追及する端緒としたい。

1 石器の用途について

個々の石器について用途を限定するには多角的な検討を要することはいうまでもないが、主要石器の用途について、次のような大別が考えられる。

- <農具> 農耕具……打製石斧
収穫具……有孔磨製石庖丁・抉入磨製石庖丁・抉入打製石庖丁・横刃型石庖丁
有肩扇形状石器・有抉石器・有柄石器・横刃型石器
- <工具> 木工具……磨製石斧（A類……伐採・製材、B～F類……加工）
その他……磨製石錐・打製石錐・砥石・敲打器・石槌⁽¹⁾・端部曲面磨石・石臼・台石・磨滅痕のある礫・凹石
- <狩猟具・武器・儀器・漁具> 磨製石鏃・打製石鏃・磨製石剣・石錘
- <紡績・編物具> 石製紡錘車・編物石
- <その他> 環状石器

2 石器の消長について

今回、該期をほぼ網羅した土器編年、恒川Ⅰ～Ⅹ期が提示されたことにより、共伴する石器の消長の把握が可能になった。該期は汎日本的に一部を除く石器の消滅と鉄器の普及が相反関係を示す時代だけに、石器の消長は重要な課題である。特に、石器が遅くまで残存するとされる当地方において古墳時代前期を通じて把握することは該期生産形態の理解に大きな意味をもつ。

本遺跡群でも消長の概要をある程度知ることができるが、より適確に各時期の様相を把握するには周辺遺跡も含めた検討が必要であり、第16表は、そうした作業の過程で把握したもので未だに検討の余地は多いが、予察として提示しておきたい。その具体的根拠は、主たる生産用具である農具と木工具を例に以下の記述の中で触れたい。

第16表 恒川遺跡群に基づく下伊那地方における主要石器の消長表（予察）

用途 時期	農具				具				工				狩猟具・武器・ 儀器・漁具		紡績・ 編物具	その他								
	耕起具	收穫具	種具	農具	木工具	その他	工	具	その他	木工具	打製石錐	砥石	敲打器	石槌	端部曲面磨石	白石	台石	石器	武器・漁具	紡績・ 編物具	その他			
I	打製石斧 A B 8 (6) 4 (1)	有孔磨製石庖丁 A 5	横刃型石庖丁 A B C 2	有肩扇形状石器 1	有柄石器 3	横刃型石器 3	磨製石斧 A B-E 1	打製石錐 2	砥石 1	磨製石錐 3	1	砥石 1	敲打器 1	石槌 1	端部曲面磨石 1	白石 1	台石 1	磨製石鏃 2 (4)	打製石鏃 3	磨製石鏃 1	石鏃 1	石製紡錘車 1	環状石器 1	
II	打製石斧 A B 7 (8) 15	有孔磨製石庖丁 A 3	横刃型石庖丁 A B C 2	有肩扇形状石器 3	有柄石器 3	横刃型石器 3	磨製石斧 A B-E 6	打製石錐 10 (2)	砥石 5	磨製石錐 10 (2)	5	砥石 1	敲打器 1	石槌 1	端部曲面磨石 1	白石 1	台石 3	磨製石鏃 8 (30)	打製石鏃 1	磨製石鏃 1				
III	打製石斧 A B 2 (1)	有孔磨製石庖丁 A 1	横刃型石庖丁 A B C 1	有肩扇形状石器 2	有柄石器 2	横刃型石器 2	磨製石斧 A B-E 3	打製石錐 3	砥石 4	磨製石錐 3	4	砥石 5	敲打器 5	石槌 1	端部曲面磨石 1	白石 1	台石 3	磨製石鏃 3 (8)	打製石鏃 3	磨製石鏃 3 (8)				
IV	打製石斧 A B 1 (2)	有孔磨製石庖丁 A 1	横刃型石庖丁 A B C 1	有肩扇形状石器 2	有柄石器 2	横刃型石器 2	磨製石斧 A B-E 1	打製石錐 1	砥石 1	磨製石錐 1	1	砥石 1	敲打器 1	石槌 1	端部曲面磨石 1	白石 1	台石 1	磨製石鏃 1 (2)	打製石鏃 1	磨製石鏃 1 (2)				
V	打製石斧 A B 1 (6)	有孔磨製石庖丁 A 10	横刃型石庖丁 A B C 1	有肩扇形状石器 12	有柄石器 1	横刃型石器 1	磨製石斧 A B-E 1	打製石錐 1	砥石 4	磨製石錐 1	4	砥石 12	敲打器 12	石槌 2	端部曲面磨石 1	白石 1	台石 3	磨製石鏃 2 (6)	打製石鏃 1	磨製石鏃 2 (6)	石鏃 2	石製紡錘車 2 (3)	環状石器 1	
VI	打製石斧 A B 1 (1)	有孔磨製石庖丁 A 6	横刃型石庖丁 A B C 1	有肩扇形状石器 1	有柄石器 1	横刃型石器 1	磨製石斧 A B-E 1	打製石錐 1	砥石 2	磨製石錐 1	2	砥石 2	敲打器 2	石槌 2	端部曲面磨石 1	白石 1	台石 4	磨製石鏃 1 (2)	打製石鏃 1	磨製石鏃 1 (2)				
VII	打製石斧 A B 1 (1)	有孔磨製石庖丁 A 10	横刃型石庖丁 A B C 1	有肩扇形状石器 1	有柄石器 1	横刃型石器 1	磨製石斧 A B-E 1	打製石錐 1	砥石 1	磨製石錐 1	1	砥石 2	敲打器 2	石槌 2	端部曲面磨石 1	白石 1	台石 4	磨製石鏃 1 (10)	打製石鏃 1	磨製石鏃 1 (10)				
VIII	打製石斧 A B 2 (1)	有孔磨製石庖丁 A 18	横刃型石庖丁 A B C 1	有肩扇形状石器 1	有柄石器 1	横刃型石器 1	磨製石斧 A B-E 1	打製石錐 1	砥石 1	磨製石錐 1	1	砥石 1	敲打器 1	石槌 1	端部曲面磨石 1	白石 1	台石 1	磨製石鏃 1 (1)	打製石鏃 1	磨製石鏃 1 (1)				
IX	打製石斧 A B 4 (1)	有孔磨製石庖丁 A 1	横刃型石庖丁 A B C 1	有肩扇形状石器 1	有柄石器 1	横刃型石器 1	磨製石斧 A B-E 1	打製石錐 1	砥石 1	磨製石錐 1	1	砥石 1	敲打器 1	石槌 1	端部曲面磨石 1	白石 1	台石 1	磨製石鏃 1 (9)	打製石鏃 1	磨製石鏃 1 (9)				
X	打製石斧 A B 4 (1)	有孔磨製石庖丁 A 1	横刃型石庖丁 A B C 1	有肩扇形状石器 1	有柄石器 1	横刃型石器 1	磨製石斧 A B-E 1	打製石錐 1	砥石 1	磨製石錐 1	1	砥石 1	敲打器 1	石槌 1	端部曲面磨石 1	白石 1	台石 1	磨製石鏃 1 (9)	打製石鏃 1	磨製石鏃 1 (9)				環状石器 1

※数字は、恒川遺跡群住居址出土石器の時期毎の総数である。ただし、不明品は除外している。カッコ内は、打製石斧が破損品、磨製石斧と磨製石鏃が未成品の数量である。編物石の丸は、保有住居址の存在を示す。

3 石製農具について

一般に農具と言えば、農業生産に関わる一連の作業の中で使用される多種多様の道具を指すわけであるが、ここでは狭義に把え、直接生産用具であり、対象を農地とする農耕具と、農作物とする収穫具について検討する。

1) 農耕具

(1) 打製石斧

刃部には土擦れ状の磨滅痕が顕著で、土を対象とした耕起具と考えられ、該期の基本的生産用具としての性格からすれば農耕具（耕耘用具）といえる。

この石器が縄文時代の打製石斧の系統を引くことは明らかで、両時代を通じた比較検討は重要な課題である。そこで、ARBの縄文時代中期のものと比較すると、形態は短冊形ないしは撥形で共通するが、規模に歴然とした差異を見い出せる。つまり、縄文時代中期の打製石斧が長さ8～14cm、幅3～5.5cmの一定の範囲内に集中し、特に幅に強い規制がみられる（第2表参照）のに対して、該期の打製石斧は長さ6～21cm、幅3.5～10cmの間に広く分散する（第3表参照）。石器の規模は用途と使用方法に規定されると考えられ、両時代の差異は生産形態の差をも反映すると思われる。

縄文時代中期の打製石斧は、周辺遺跡では20cmを超えるものも知られているが総体として規模は斉一的であり、規模による用途差は見出し難い。したがって、同一形態・同一規模の石器の多用途利用が考えられ、耕起具として万能的な性格が強いといえる。

これに対して、弥生時代以降の打製石斧は、規模に斉一性をもたず多様である。該期が確立された農業社会であることから、農耕具も採集・開墾土木なども含めて用途及び細分された作業内容に応じた器種分化が進んでいたと推測され、打製石斧の規模や形態の差違もこうした用途分化を反映すると考えられる。

先に、該期の打製石斧を15cm以上の大形品（A類）と、それ未満の小形品（B類）とに大別した。両者の用途について考究した酒井幸則氏は、B類で堅い土を起こし、A類でそれを掻いたとし、A類を水田と畑の耕作に、B類を畑の耕作に適するとした（酒井1977）。従来、A類に該当する大形品のみを深耕用の農耕具とし、小形品を採集具ないしは利器としてきた中で、両者を農耕具と認定したことは評価されよう。

B類は、縄文時代中期の打製石斧との対比から多用途が想定され、詳細に分析すれば用途に応じた細分の可能性もある。縄文時代中期のものに比べて刃幅も広い傾向から土を掻くにより適しており、農耕具とすれば畑の耕起とともに除草にも力を発揮したと思われる。

A類は、その大きさと重量を利用した打ち鉋ないしは鋤として深耕に用いられたと考えられ、農耕具としては畑の深耕が想定できる。水田の耕起は湿田を想定した場合には対象となる粘質な土壤に石器が適さないことから木製農耕具に依存したとするのが妥当であり、石製農耕具を考える上で常に木製農耕具の存在も視点に置かなければならないと思われる。

次に、打製石斧の消長をみると、本遺跡では恒川Ⅰ～Ⅹ期のほぼ全時期を通じて出土している。中でもⅠ・Ⅱ期は量も多く、そうした傾向は北原遺跡（神村他1972）でも顕著で、活発な農業生産を反映した現象と考えられる。Ⅳ・Ⅴ期における多出状況は周辺遺跡でも同様で、続くⅥ期は山岸遺跡8号・10号・24号住居址（神村他1971）、Ⅶ期は田村原遺跡14号住居址（酒井他1974）・月夜平遺跡1号住居址（宮沢他1970）に出土例があり、さらにⅨ・Ⅹ期併行の城遺跡でもほぼ確実な伴出例が報告され（酒井1979・1983）、中でもⅩ期併行の20号住居址では、床面直上から打製石斧A・B類と有肩扇状形石器・抉入打製石庖丁、覆土から磨製石庖丁が出土している。打製石斧は、恒川Ⅵ期以降減少しながらも他の弥生時代後期の主要石器とともに古墳時代前期末の恒川Ⅹ期まで残存した可能性が高く、伝統的生業の1つとして弥生時代以来の生産形態を継承したことも考えられる。

こうした石器群の残存状況は当地方の地域的な特徴ではあるが、岐阜県の牧野小山遺跡でも同時期に打製石斧の残存することが報告されており（紅村・増子他1973）、当地方に限られる現象とはいえ、類例の検証が望まれる。その検討結果いかによれば、弥生時代後期以降の農業生産形態の理解に、一石を投じることも考えられよう。

2) 収穫具

(1) 石庖丁類

有孔磨製石庖丁・抉入磨製石庖丁・抉入打製石庖丁・横刃型石庖丁は、穀類の穂刈具あるいは穂摘具と考えられる。

有孔磨製石庖丁 小形・方形・単孔で、当地方に特徴的な石器の1つである。刃縁の中央付近に磨滅痕が集中する傾向があり、孔の内面上部に紐擦れが認められ、ここに紐輪を作って人差指を通して把握し、穂摘みあるいは穂首刈り・高刈りを行なったと思われる⁽²⁾。

本遺跡群で時期の明らかなものは、恒川Ⅳ期の1点のみで、遺構外を含めても8点に過ぎず、石庖丁類の中で主体的地位を占めることはなかったとみてよい。この石器の消長について、従来、弥生時代中期に「ないのではなく、あるはず」（酒井1977）とされてきたが、本遺跡群も含めて未だ出土例がなく、この石器の出現は恒川Ⅳ期まで降る可能性が高いといえる。周辺遺跡では、Ⅳ～Ⅴ期に出土例が比較的多く、それ以降はほとんどないが、Ⅹ期併行に城遺跡例がある。

抉入打製石庖丁 両側辺に抉りをもつ小形の当地方に特徴的な石器の1つで、同形態のものは瀬戸内沿岸や南九州など局所的な分布が知られている（小林1937）。

当地方のこの石器の使用方法は、「人差指と小指を抉り部にかけ、上側に中指と薬指をあてて、固定し、親指で穂を刃におしつけて引きちぎった」(松島1964)と考えられてきた。しかし、指をかけるには抉りの調整は粗雑なものが多く、抉入部を結ぶ方向に研磨された例(75-5)や抉入磨製石庖丁に切り込みを入れる例(44-4)があることから、むしろ、石器を把握するための紐をかける構造とみるのが妥当といえる。紐の巻き方はいろいろ想定されるが、抉入部をかけて1巻きした紐を片面の中央付近で結び、さらに小さな輪を作ったと考えたい。こうすると、小形・方形・単孔の有孔磨製石庖丁と基本的に全く同じ把握方法が可能となり、紐輪に人差指を通して石器の背縁を押さえ、さらに指で片面を押えるか、あるいは裏面を中指以下の3指で押えれば石器は掌中にしっかりと固定される。前者では中指以下の3指が握りから解放されて、小林公明氏のいう「水平押切法」(小林1977・1982)による穂首刈りないしは高刈りが可能となり、後者では拇指が開放されて、従来通り穂摘みも可能である。「水平押切法」は、石器の握りから開放された指で茎を引き寄せると同時に瞬発的に石器を押し出して切る方法で、実験ではかなりの効力を発揮し、茎の細いものなら複数本、小さな株なら1度に切断が可能となり、1度に1ないし数本に限定される穂摘みとは作業能率に格段の差がある。さらにモロコシ類のように茎の太い植物も容易に刈り取り可能で、その対象物は単一品種に限られない。

使用痕として観察された特徴的な磨滅痕は、「水平押切法」によっても説明でき、断定はできないが、そうした収穫方法の可能性も認めておきたい。いずれにしても、今回初めて観察されたロー状光沢物の付着によって、この石器の対象物が珪酸分を多量に含んだイネ科植物である収穫具と考えられる。

この石器の消長は、本遺跡群では恒川Ⅴ～Ⅷ期にかなり普遍的な存在をみることができ、これに対して恒川Ⅰ～Ⅳ期の出土はなかった。従来、中期前半の阿島期に「萌芽」がみられ、後半に「一応完成」、後期前半に「発展・増加」、後半に「更に増加」する(酒井1977)と考えられてきたが、本遺跡群ばかりでなく、周辺遺跡においても「発展・増加」の後期前半——恒川Ⅳ期に出土例が少ないことが注意される。中でも高松原遺跡の第1次調査で検出された31軒は、比較的多くの石器を伴うにもかかわらず抉入打製石庖丁は全くなく、これに替って有孔磨製石庖丁と横刃型石庖丁のあることが指摘されている(酒井1977)。そして、第2次調査の7軒(佐藤1984)でも同様であった。この38軒は報告例で見ると恒川Ⅳ期中頃に位置づけられる。他遺跡でもⅣ期中頃以前においては一部の例外を除いて抉入打製石庖丁の住居址伴出例はないといってよく、この石器の出現は恒川Ⅳ期でも新しい段階まで下る可能性が高い。そして、その盛行は本遺跡群が示すように恒川Ⅴ期からⅧ期までと扱えられる。かつて古墳時代前期にこの石器が伴出することは清水遺跡でも注意され(佐藤1976)、さらに恒川Ⅸ・Ⅹ期併行の城遺跡でも出土しており、打製石器の中でも最も根強い残存状況を示している。

横刃型石庖丁 他の石庖丁のように紐掛けの構造をもたず、直接掌中に握って作業したと思われる。A類の刃部の磨滅痕とロー状光沢物の認められた部位は一端に片寄る傾向があり、他と異

なった把握方法と使用方法を示唆している。

この石器の消長は、本遺跡群ではA類が恒川Ⅰ期、B類がⅤ期、C類がⅠ～Ⅲ・Ⅹ期にある。周辺遺跡も考慮すると、A類は、恒川Ⅰ期併行の北原遺跡（神村他1972）において極めて完成された形態をもって量的にも多く、該期の収穫具の主体的地位を占めるが、Ⅳ期以降は粗雑化してC類の範疇に含めうるものに変化する傾向があり、C類は、さらに存続する。B類は、A類と挟入打製石庖丁の中間的性格も考えられるが、その位置づけは不明である。

石庖丁類の消長は、以上みてきたように器種によってズレが認められる。酒井幸則氏は、高松原遺跡における石庖丁類の組成変化を捉えて、「座光寺原期」（恒川Ⅳ期中頃併行か）には有孔磨製石庖丁と横刃型石庖丁、「中島期」（恒川Ⅴ期併行か）には挟入打製石庖丁が使用されたという重要な指摘を行なったが、この現象を「やや周辺の遺跡例とは異なった様相」とした（酒井1977）。しかし、当地方の各遺跡の時期を再検討し本遺跡群を含む新資料を追加して再集成する過程では、従来考えられてきた石器組成の変遷や個々の消長は見直しが必要であり、石庖丁類に関していえば、高松原遺跡で指摘された現象は決して周辺遺跡と異なった様相ではなく当地方に普遍的な現象といえ、石庖丁類の消長はおおよそ次の4段階で把握できる。

I：横刃型石庖丁A類を主体とし、C類を伴う段階（恒川Ⅰ～Ⅲ・Ⅳ期古段階）

II：有孔磨製石庖丁が出現し、横刃型石庖丁と共伴する段階（恒川Ⅳ期古段階～中段階）

III：挟入打製石庖丁が出現し、横刃型石庖丁A類はほとんど消滅する段階（恒川Ⅳ期新段階・Ⅴ期）

IV：挟入打製石庖丁が主体を占める段階（恒川Ⅴ～Ⅹ期）

なお、挟入磨製石庖丁は、有孔磨製石庖丁と挟入打製石庖丁の影響を受けてIIないしはIIIの段階に出現したと推測される。

こうした基本的収穫具である石庖丁の組成変遷は、単に表面的な石器形態の変遷以上に重要な問題を背後にもつと思われる。収穫具は、農業生産用具の中で作物に最も直接的交渉をもつ道具である。したがって、「収穫具の機能と形態は、対象とする作物の生態によって規定」（小林1978）され、定形化の進んだその形態は、収穫対象物との交渉の中で最終的に到達しえた最も合理的な極地といえる。

そうした観点から当地方の石庖丁をみると、4器種の併存と個々の消長・相互の転換は何らかの意味をもつはずである。弥生文化定着時の中期前半における当地方の様相は、特に石器はほとんど不明であるが、中期後半における有孔磨製石庖丁の不在とそれに替わる横刃型石庖丁の存在は、大形・双孔の有孔磨製石庖丁を一般とする他地域とは生産形態が一律でないことを示唆する。横刃型石庖丁は、縄文時代の横刃型石器の発展形態といわれる（酒井1976）ように在地色の強い石器である。したがって、この石器の収穫対象物が新たに伝来したイネに限定されたとは考え難い。また、稲作と密接な関係をもつ大形・双孔の有孔磨製石庖丁が系譜も使用方法も異なるこの

打製石器に全く転換したと解釈するには疑問を抱かざるを得ない。

後期になると他の三器種の出現をみるが、新たな収穫具の出現は収穫技術の変革はもちろん新たな収穫対象物の出現をも示す可能性がある。若干の時間的ズレをもって出現した有孔磨製石庖丁と抉入打製石庖丁は、先述のとおり把握方法・使用方法が共通すると考えられ、両者に折衷的な抉入磨製石庖丁の存在からみても、両者は形態や調整加工の差を越えた近い類縁関係をもつ石器の可能性を示唆している。しかし、磨製の刃と打製の刃という基本的相違点のあることも事実で、両者は収穫対象物の生態によって使い分けられたことも想定される。

いずれにしても、こうした収穫具のパラエティーは、収穫対象物が単一ではなく多種多様であり、収穫方法に差があったことを考えるべきであろう。従来、石製農耕具の存在から、当地方の基本的生産基盤が稲作だけでなく陸耕による雑穀栽培であるといわれてきたが、収穫具の在り方もそれを強く示唆しているといえる。

(2) 有肩扇状形石器・有抉石器・有柄石器

当地方における弥生時代の石器の中で最も特徴的な石器でありながら未だに用途が不明確な石器であるが、ここでは収穫具として考えたい。

従来、有肩扇状形石器・有抉石器・有柄石器の用途は、おおよそ前者を除草用・浅耕用耕具（藤森1951、松島1964など）、後二者を裁断用工具（松島1964など）に分けて考えてきた。前者にロー状光沢物の付着が注意されて以来、後述する新説も断片的に提起されてはいるが、その後一向に進展しない石器研究の中で、従来の説を漠然と踏襲してきた傾向がみられる。実は、ここで分類した三器種もそうした伝統を多分に踏まえたもので、用途と対応した器種分類とするにはなお一層の検討が必要である。そこで、ここでは三器種の間にもみられる共通点に注目し、包括的に分析を試みたい。

この石器群の共通点は、次の7点が指摘できる。

- ① 石材は、ほとんど硬砂岩に限られる。
 - ② 扁平な円礫の側縁を打撃して割取した、片面に自然面、片面に主要剝離面をもつ素材剝片を利用している。
 - ③ 刃部は、打撃点の反対側に形成された鋭く、かつ緩やかに外湾する幅広の縁辺をほぼそのまま利用している。
 - ④ 刃部側からみた刃縁は直線的である。
 - ⑤ 縦断面は、刃部側が薄くて鋭い半月形ないしは紡錘形を呈する。
 - ⑥ 調整加工は、素材剝片の側縁の「抉り」を基本としている。
 - ⑦ 使用痕は、刃部刃縁にほぼ限定された磨滅痕と、その両面1～1.5cmの範囲に付着するロー状光沢物が特徴的で、他に若干の剝離痕がある。
- ①～⑥の諸特徴にみられるように、この石器群は形態的にも製作方法においても非常に共通し

ており、さらに⑦の使用痕から同一機能・類似した用途が推測される。①から⑤は挟入打製石庖丁や横刃型石器も含めた打製の収穫具のほとんどに共通する点でもある。

刃部の使用痕から機能と用途を検討すると、刃縁に限定された磨滅痕は、石器の作業部が刃縁に集中したことを示し、その鋭さを利用した「切る」機能を考えるのが最も妥当である。刃縁が緩やかにカーブして磨滅する状態は、「切る」作業が刃縁と平行運動によって行なわれたことを示す。そして、刃部両面のロー状光沢物は、刃縁によって切断された対象物の切り口と刃部先端両面とが接触を繰り返すうちに対象物の成分が付着したものと理解される。

この刃部に付着するロー状光沢物は、この石器群の用途解明の最大の鍵といえる。有肩扇状形石器のロー状光沢物に注目した神村氏は、「穂を引き切る道具」として収穫具の用途を示唆した(神村1977)。また、石器の形態や使用痕を観察した酒井氏は、竹製品製作工具説を提唱した(酒井1977)。そして、石器の形態から従来説を踏襲した小林公明氏は、ムギの株起しを行なった浅耕用唐鍬とすることで付着物を説明しようとした(小林1978)。いずれもロー状光沢物の正体を植物の珪酸分に求めた点は注目されよう。しかし、小林説は土擦れ状の磨滅痕が皆無であることから否定され、酒井説も刃縁に平行する着柄方法を想定した点は卓見であったが、実験の結果、竹割りに⁽⁷⁾は適さず、使用痕も一致しないことなどから妥当な用途説とはいえない。神村説は具体的な用途についての考究を欠いているが、今回、同様の光沢物が穀類の収穫具とほぼ断定できる挟入打製石庖丁や横刃型石庖丁にも認められたことで、収穫具の可能性が一段と高まったといえる。

ロー状光沢物について未だに科学的分析を果たしていない現状では断定し難いが、イネ科植物に多量に含まれる珪酸分と思われる。刃部の磨滅に比較して刃部両面のロー状光沢物の付着が顕著な状態からすると、対象物に非常に多量の珪酸分が含まれたことを示唆しており、雑草中に混入する不特定イネ科植物との接触程度では考えられず、珪酸分を多量に含んだ特定のイネ科植物を対象としたものと考えられる。したがって本石器群は収穫具の可能性が最も高いといえる。

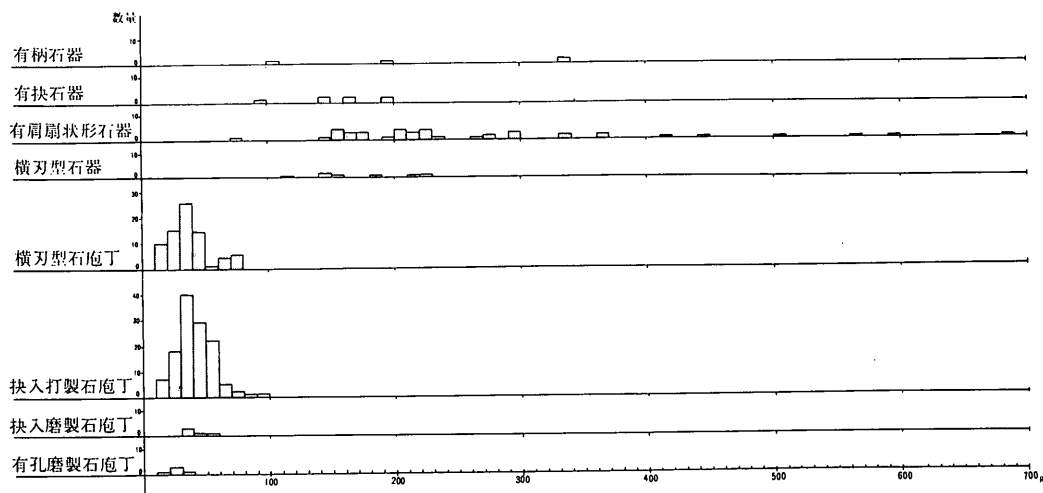
次に、石器の形態に注目して検討すると、③～⑤で指摘した刃部と縦断面の形状は「切る」機能を発揮するに合理的である。使用にあたっては、有挟石器A類と有肩扇状形石器B群の一部は挟入打製石器石庖丁をそのまま大きくした形態を呈して直接手で握った可能性もあるが、ほとんどは何らかの着柄が想定される。したがって、その形態は作業部である刃部と装着部に規定されると理解され、形態のパラエティーは装着部の差異、つまり着柄方法の差異を反映する可能性が強い。

着柄方法は、先に指摘した石器の作業運動からみて刃縁に対し平行に着柄するのが妥当といえる。これを無理なく想定できるのが有柄石器で、石器の左右に突出した柄部や突起部をもつA・B類は、二つ割りにした柄で石器を挟んで、左右で緊縛して固定するに最適であり、有肩扇状形石器E₁類・有挟石器A類も適している。有肩扇状形石器A～D・E₂類も可能であり、有柄石器C類は一端に柄部に着柄して庖丁のような使用も考えられる。なお、石器の安定した操作には短い柄が適当と思われる。

着柄した石器を使ってイネ科植物を切断する作業は、次の三つの作業運動が想定できる。一つは、直立する茎に対して刃を水平に当てて引き切る水平運動であり、一つは、横たわる茎に対して刃を垂直に当てて引き切る垂直運動（適切な表現ではないが、上下に力が働くことに注目して使っておく）であり、今一つは、直立する茎に対して石器を斜方向ないしは水平方向に振り、薙ぎ払う運動である。このうち前者は、後世の鉄鎌にみられるように刃幅の長い内湾刃が理想形態で、さらに軽量が要求される。しかし、この石器群、特に有肩扇状形石器は外湾刃でカーブのきついものもあり、刃幅に比べて縦に長く、着柄して水平運動を行なうには重心も不安定なものがある。また重量も第6・17表にみられるようにおよそ80~700gと幅広く、石庖丁類とは対照的である。この石器群の調整加工は石器自体の重さを減少させる意図を感じられず、むしろ400gを超えるものについてはその重さを利用したと思われる。したがって、重力に逆らった水平運動には不向きと思われ、この点、後二者の運動は重さが全く支障にならず、かえって重さが対象物に働いて切断の効果を高め、また、外湾刃であることも有効と思われる。

具体的な使用方法・用途の特定は未だ困難であるが、収穫具とした場合、その代表ともいえる石庖丁類との関連の中で把えなければならない。石庖丁類は、先に述べたように4器種が様々な変遷をもちながら恒川I期からX期まで存在している。一方、当石器群も、本遺跡群では恒川I期から存在し、IV期に多く、その後減少しながらもVIII期までみられる。その傾向は周辺遺跡でも同様で、IV・V期に多く、最も新しいところではX期併行の城遺跡20号住居址の出土例がある。したがって、当石器群と石庖丁類とは恒川I期からX期まで併存した可能性が強く、両者の間には明確な用途差があって独立していたとみてよい。

両者の差異は収穫対象物の差異によるのではなかろうか。石庖丁類は穂摘具ないしは穂刈具と考えられるが、その対象物は背が低く穂首も細いイネ科植物と思われる。とすれば、これと異なる生態を有するイネ科植物、異なった収穫方法を必要とするイネ科植物の中に当石器群の収穫対象



第17表 収穫具の重量分布表

物が求められると思われる。この具体的特定は、今後の重要な課題である。

(3) 横刃型石器

横刃型石器については、先の収穫具に特徴的なロー状光沢物の付着が観察できるものはなく、形態も不定形で、収穫具とするにはさらに検討が必要である。あるいは収穫具のように連続した作業を要求されなかった道具——採集具かもしれない。いずれにしても、石器の機能は鋭い刃部を利用した「切る」にあると思われる。

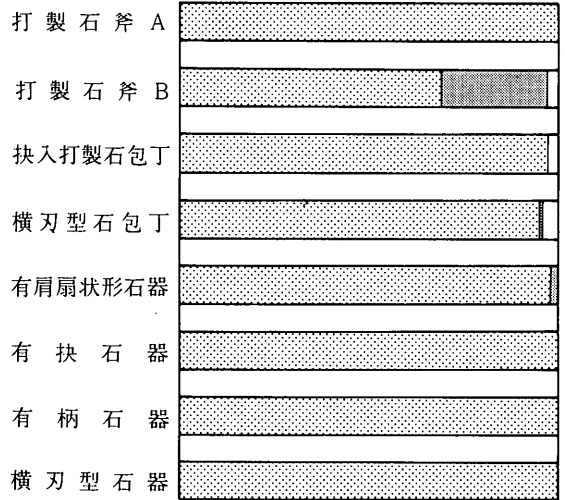
3) 打製農具の製作技法について

第18表は、該期の打製農具とARB縄文時代中期後半から終末の打製石斧・横刃型石器の石材について集計したものである。該期のうち、打製石斧B類に若干緑色片岩の比率が高いのを除いて、いずれも天竜川の氾濫原で容易に入手できる硬砂岩が主体を占め、これらの石器と硬砂岩とが密接不可分な関係にあることが理解される。

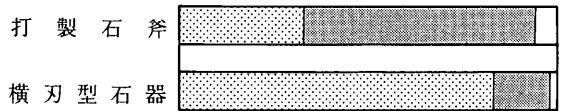
これらの石器群のうち硬砂岩製をみると、いずれも片面に自然面をもつものが多く、特に収穫具ではそうした傾向が顕著である。さらに、収穫具はカーブの緩やかな自然面の反対側に主要剥離面を広く残し、両者がなす鋭く、かつ緩やかにカーブする縁辺をほぼそのまま刃部に利用する点も大きな特徴である。したがって、石器の形態、とりわけ刃部の形態は素材剥片の形状に大きく規定されているといえる。今回、石器の実測にあたってはこれらの主要剥離面の打撃方向に注目してみたが、刃部はすべて打撃点に相対する側にあり、打撃点側は肥厚して自然面の湾曲も急にきつくなる。したがって、この素材剥片は扁平円礫の側縁を打撃して割取したものと理解される。

天竜川の氾濫原にある硬砂岩の転石は、赤

弥生時代中期～古墳時代前期

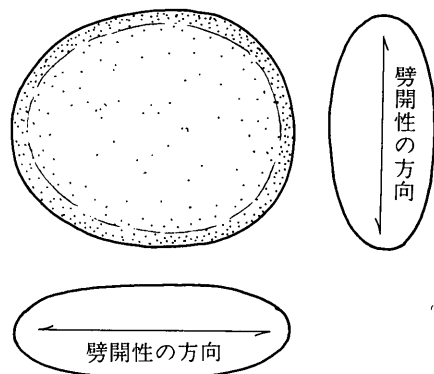


縄文時代中期



■ 硬砂岩 ■ 緑色片岩 □ その他

第18表 石器の石材比率表



挿図36 硬砂岩扁平円礫の劈開性

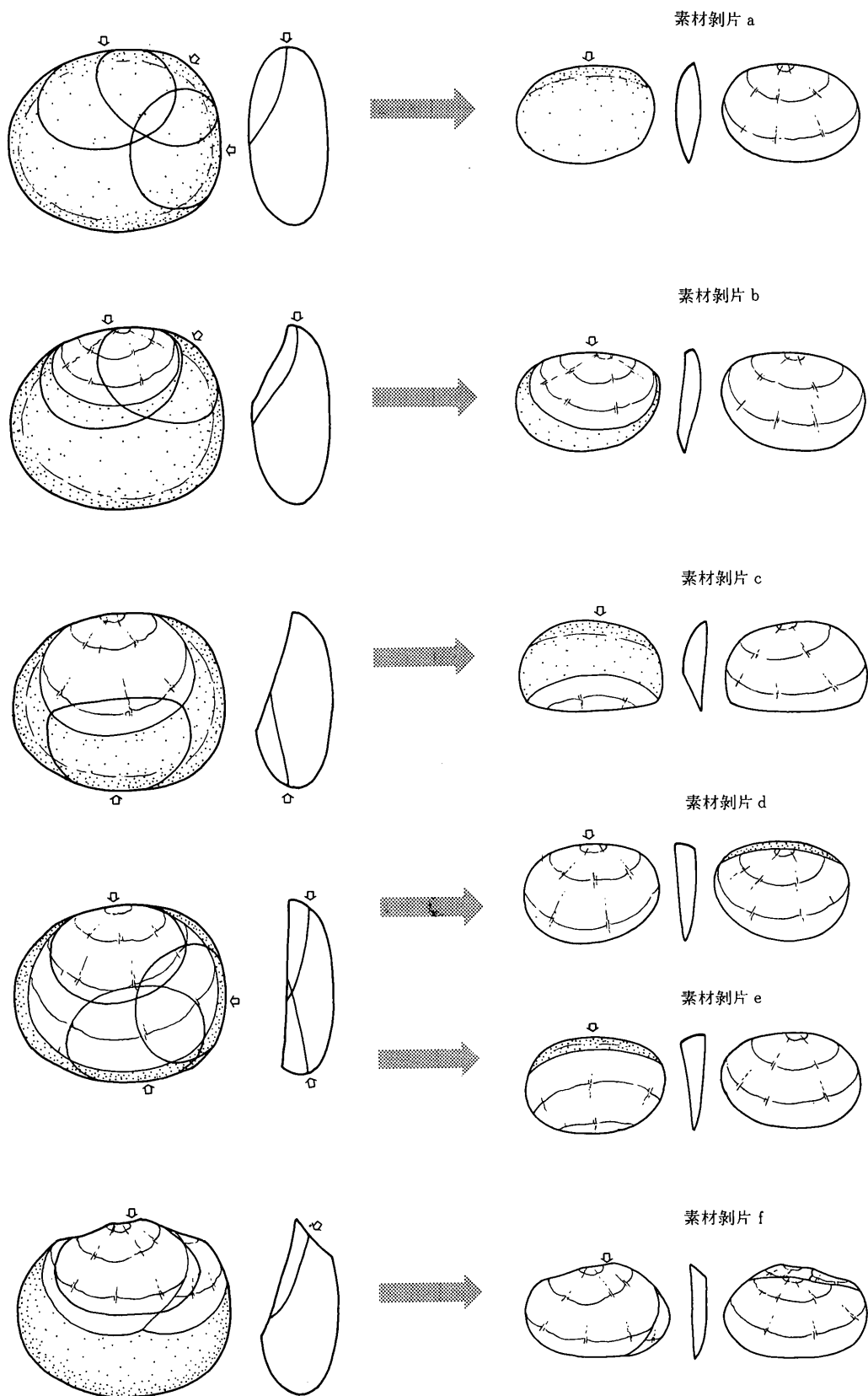


插图37 扁平円礫打割技法による硬砂岩素材剥片の形態

石山脈中の秩父帯・四万十帯を産出地とし、ここを源流とする小渋川と三峰川によって運搬されたものである。長い運搬の過程で完全に角が取れて扁平な円礫となるものが多く、その原因は、挿図36のような硬砂岩の性質——劈開性によるものであって、素材剥片の割取においても、この性質が利用されている。均質な硬砂岩扁平円礫の側縁に打撃を加えると、力は劈開面に沿って同心円状に広がり、縁辺が緩やかなカーブを描く特徴的な素材剥片が割取できるのである。

こうした硬砂岩扁平円礫の性質に基づいて、割取される素材剥片の形状を模式化したのが、挿図37である。素材剥片 a～f について簡単に説明しておく。

<素材剥片 a> 最初の打撃で割取される素材剥片である。a 面はほぼ自然面で、打撃点と相対する縁辺は自然面と主要剥離面とで構成される。平面形は楕円形を典型とし、縦断面は打撃点側の肥厚する紡錘形ないしは半月形を呈する。

<素材剥片 b> 最初の剥離とほぼ同じ側から割取したもので、打撃点側に古い剥離面をもつが、相対する縁辺は自然面と主要剥離面とで構成される。平面形は楕円形を典型とし、縦断面は打撃点側の薄いものが多い。

<素材剥片 c> 最初の剥離のほぼ反対側から割取したもので、打撃点側に自然面をもつが、相対する側は古い剥離面と主要剥離面とで構成され、直線的ないしは内湾した縁辺をもつ。したがって、平面形は半月形を典型とし、縦断面は楔形を呈する。

<素材剥片 d> 最初の剥離とほぼ同じ側から割取したもので、自然面は打撃点側の縁部に限られ、相対する縁辺は古い剥離面と主要剥離面とで構成される。平面形は楕円形を典型とし、縦断面は楔形を呈する。

<素材剥片 e> 最初の剥離とほぼ反対側から割取したもので、素材剥片 d に類似する。

<素材剥片 f> 連続的に割取したもので、打撃面は自然面でなく、自然面を表裏に全く残さないか残してもわずかで、相対する縁辺は古い剥離面と主要剥離面とで構成される。平面形および断面形は古い剥離面に左右されて不定形である。

これらの素材剥片のモデルによって硬砂岩製の石器を観察すると、以下のようである。

打製石斧は、第二次調整が著しく素材剥片の形状判断が困難なものが多いが、ごく一部の例外を除いては剥片を素材としており、素材剥片 a が多いとみられる。自然面を残すものについては、打撃点に比較的近い肥厚する側を基部とし、相対する端部を刃部とする例が多い。

挿入打製石器石庖丁は、C 類とした一部を除いてすべて素材剥片 a である。

有肩扇状形石器・有挾石器・有柄石器・横刃型石器も、ほとんど素材剥片 a である。

横刃型石庖丁は、a・c 類に素材剥片 c・d・f があるが、大半は素材剥片 a である。

A R B 縄文時代中期の打製石斧も素材剥片 a が主体と思われ、同期の横刃型石器も素材剥片 a である。

次に、硬砂岩扁平円礫の素材剥片の割取方法について検討する。原石の側縁をハンマーで打撃しても小形の剥片ならば割取も可能であるが、より効果的なのは小林公明氏のいう「扁平円礫打

割技法」(小林1978)である。片手で原石を持ち、「あまり力まず、原石の自重とその反動で割れるように」台石に振り下ろす技法である。しかし、片手で持ち上げ可能な原石の重さは限定され、割取できる剥片の大きさも限定されて、打製石斧A類や有肩扇状形石器の製作素材が確保できる大形の扁平円礫を割ることは困難である。大形の扁平円礫を割る方法は、扁平円礫の両面を挟み持つか、あるいは立てた扁平円礫の下辺に左手を、側辺に右手をそえて持ち、台石に垂直に振り落とす方法である。この場合も、小林氏のいう「扁平円礫打割技法」と原理的に一致し、その技法の拡大解釈によって理解される。

扁平円礫打割技法は、小林氏も石材を限定していないように硬砂岩以外の石材でも可能である。石材のもつ劈開性によって扁平な円礫に近いものならば適用可能である。しかし、当地方で最も容易に入手でき、比較的規則的な素材剥片を割取しやすいのが天竜川氾濫原の硬砂岩である。

この石材に恵まれた当地方では、ARY縄文時代早期の横刃型石器の一部やARB縄文時代中期の横刃型石器をはじめとする大形の剥片石器は硬砂岩の素材剥片aを主体としており、縄文時代を通じての石器製作技法であったことを示している。さらに弥生時代になると、その傾向が一段と強まったといえよう。

当地方の弥生時代における打製の石製農具の盛行は、天竜川氾濫原における硬砂岩扁平円礫の存在と扁平円礫割技法によって生み出されたといってもよい。中でも、素材剥片の外湾する縁辺をそのまま利用する収穫具は両者の結晶として発達したもので、この硬砂岩扁平円礫の存在なくしては石製農具の発達はなく、該期の石器の様相もかなり異なったに違いない。

4 石製木工具について

当地方では、従来、打製石器の豊富さに比較して磨製石斧が少ないといわれてきた。しかしながら、本遺跡群の弥生時代中期の恒川I・II期においては、25軒中、未成品も含めて10軒22点の出土があり、しかもARY9号住居址やAMD18号住居址のように複数を保有する住居址がある。こうした中期の高い保有状態は既に北原遺跡(神村他1977)でも知られており、恒川I期に併行する住居址7軒中6軒から実に26点が出土している。中期における高い磨製石斧保有はかなり普遍的現象といえる。

該期の磨製石斧は用途を大別すれば、伐採・製材用(A類)と切削加工用(B~D類)と穿孔・溝切り加工用(E類)がある。大別した各群の石器は、それぞれ形態や大きさにバラエティーをもち、さらに作業内容に応じて使い分けが想定される。第19表は、本遺跡群と北原遺跡の磨製石斧を集計したものである。複数出土の住居址に注目すると、ほとんどがA類とB~E類の組み合わせをもち、中でもARY9号住居址・AMD18号住居址、北原遺跡2号・8号・9号住居址では木工に関する一連の磨製石斧をセットで保有している。本遺跡群の場合、全く出土しないか1点のみ出土の住居址もあって住居址の遺存状態や遺棄・廃棄の問題も含めて検討を要するが、北原

遺跡の場合は1軒を除いてすべて複数の磨製石斧を保有し、住居址単位での自給自足的な木工が基本的であったと考えられる。中期における石製木工具の多さは活発な木製品・木器の製作はもちろん建築・土木用材の製作・加工もなされたといえる。木器の中には他地域低湿地遺跡にみられる非常に器種分化の進んだ農耕具も含まれて石製農耕具と併存したことが予想され、かつて藤森栄一氏が指摘した(藤森1951)、水田には木製農耕具、畑には石製農耕具というような土壌の質に応じた使い分けが想定される。

恒川Ⅰ・Ⅱ期の保有状況に対して、次の恒川Ⅲ期では8軒の住居址から1点も出土していない。これに併行する

の場遺跡21号住居址(佐藤1973)・D2号住居址(酒井1978)でも同様であり、恒川Ⅲ期段階には磨製石斧は急激な減少傾向をみせている。後期以降も本遺跡群では混入品を除いて皆無である。しかし、周辺遺跡では、恒川Ⅳ期併行の猿小場遺跡14号住居址(佐々木他1980)、瑠璃寺前遺跡中島地区1号・4号住居址(佐藤1971)、権現堂前遺跡3号住居址(神村1971)、出早神社附近遺跡1号住居址(遮那他1971)、高松原遺跡Ⅱ10号住居址他3軒(佐藤1974、宮沢他1977)、恒川Ⅴ期併行の埴牛原遺跡十万山地区B1号住居址(佐藤1979)、上の金谷遺跡9号住居址(松永1972)から磨製石斧が出土しており、完全に消滅したとはいえない。とはいっても、そのほとんどは1点のみ、しかもA類に限定される傾向が強く、恒川Ⅰ・Ⅱ期の在り方とは質・量ともに大きく異なる。恒川Ⅲ期以降の在り方は石製木工具の消滅化現象と捉えられ、その背景には鉄製木工具の急激な普及が考えられる。一部に残存する磨製石斧は鉄製木工具の不足を補完するに過ぎず、磨製石斧でも比較的威力を発揮しうる伐採・製材用に用いられたといえる。このことは、木工具の石器から鉄器への転換期が用途によって異なり、加工用具が伐採・製材用具に先行したことを示している。

さて、石製木工具から鉄製木工具への転換期は恒川Ⅲ期といえ、その点からみればⅢ期が後期に含まれる可能性も生ずるが、いずれにしても、この転換期は畿内や東海地方など先進地方にあまり遅れない時期と考えられ、長野県内では他地域より先行する可能性が強い。

用途・ 分類 遺構	伐採・製材		加工				
			切削			穿孔・溝切り	
	A1	A2	B	C	D	E1	E2
ARY 15住						1	
23住		1			1		
24住					1		
5住				1			
9住	1	1		1	1	1	1
55住					(1)		
AMD 18住	1	2	1		1		
TAN・KUR 1住						1	
9住					1?	1	
13住	1				(1)		
20住			1				
北原遺跡 1住			1	2(1)?			
2住	1	2			1	1	
4住	3			2			
7住	1	1		1	2		
8住		1			2		1
9住	1	1	1		1		

第19表 恒川遺跡群・北原遺跡における磨製石斧一覧表

こうした鉄器化の流れは、汎日本的にみれば木工具が農具の鉄器化に優先するといわれ（山越1984）、当地方も同様の傾向がうかがえるが、当地方においては両者の鉄器化に非常に大きな隔りがあり、この背景が問題となる。

弥生時代の磨製石斧といえば大陸系石器とされる太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧などが一般的である。これらは、大陸における長い発達歴史を背景に用途分化と形態的定形化の進んだ石器で、大陸から伝来した一連の技術大系の中に位置づき、弥生文化の拡大に併って全国的に分布している。その形態は地域や時代によって若干の変化をもちながらも基本的には同質の基調をもち、極めて強い斉一性をもった石器である。

これに対して、当地方の磨製石斧にはその範疇に納まりきらないものがある。伐採・製材用においては、超塩基性岩製のいわゆる太形蛤刃石斧（A₁類）がある反面、輝緑凝灰岩の、それとは形態差の認められるものや調整が簡単で自然面を残す半磨製石斧的なもの（A₂類）が対立的に存在する。加工用の扁平片刃石斧（D類）においても、全面が研磨された精製品と、側縁と刃部の研磨に限られた半磨製石斧的なものが共存し、石材も、前者は超塩基性岩など火成岩を主とし、後者は緑色片岩・粘板岩などの推積岩に限られている。他のB・C・E類も形態的に当地方独特の感が強く、石材も緑色片岩である。

輝緑凝灰岩・緑色片岩・粘板岩は、天竜川の氾濫原にも転石として多く、該期の他の石器や縄文時代の磨製石斧にも利用されているのに対して、大陸系ともいえる精製品の超塩基性岩は、縄文時代の磨製石斧にはみられず、該期を特徴づける搬入品の可能性が強い。

大陸系の伝統を引き汎日本的に分布する定形化された石器に対して、その簡略形ともいえる当地方に特徴的な石器群は、より簡便に、かつ多量な需給関係をもてる天竜川の存在と関係深い。そこにおける豊富な石材を背景とした縄文時代以来の伝統が感じられる。

いずれにしても、A₂類に代表される磨製石斧の存在が、かつて表採資料に基づいて概観した時に、当地方には弥生時代の磨製石斧が少ないとみなされた一要因と考えられる。

本遺跡群で出土した弥生時代中期後半から古墳時代前期の膨大な資料は、当地方における該期の生産形態・生活形態を知る格好の資料である。個々の石器の機能・用途はもちろん、石器組成とその時間的変遷の追及の可能性が高まったといってよいだろう。

先に、石製農具と石製木工具を個別に取り上げて若干の考察を行なったが、特に収穫具の場合、収穫対象物の特定が重要な課題であり、この解明が当地方の生産形態の実体解明につながると考えられる。石製木工具に関連して把握される鉄製工具や木器・木製品の存在を視野に入れた上で、石器組成とその変化、さらには遺跡立地・集落構成・墓制等の社会的背景も含めた総合的な検討が望まれる。

石器様相に強く表われる当地方の特殊性は、果たしていかなる社会的・環境的背景によって生み

出されたものであろうか。この一見して「特殊性」と表現される現象を少なくとも汎日本的な視野のもとに検討しなければならない。たとえば、当地方に特徴的な抉入打製石庖丁や有肩扇形状石器も他地域に散見することができ、相互の関連が注意され、一地域的な「特殊性」を超えた現象の可能性も指摘しうる。

これまで、看過されてきた傾向の強い石器の再検討を行なって、該期の追求を深めなければならない。(桜井弘人)

註

- (1) 石槌は、当地方では北原遺跡3号住居址出土の1点が知られている(神村他1972)。磨製石斧A₁類の転用品である。
- (2) 汎日本的に分布する大形・双孔の有孔磨製石庖丁の使用方法について、小林公明氏は、東南アジアの爪鎌との対比から、従来言われてきた穂摘具ではなく、背部に直交柄を装着して「水平押切法」による穂首刈りないしは高刈りを想定している(小林1982)。
- (3) ただし、住居址テラス面では1点が出土しているが、除外して考えた。なお、同報告書の一覧表の記載は酒井氏の論考と異なっている。
- (4) 恒川Ⅳ期、つまり従来の座光寺原期は、神村透氏によって3段階区分が提唱されている(1985)。3段階区分は妥当であるが、具体的な時期区分にはなお検討を要するため、ここでは、古段・中段階・新段階で把えておく。なお、本遺跡群の2軒は中段階に該当する。
- (5) 的場遺跡の恒川Ⅲ期併行の21号住居址や恒川Ⅳ期中段階併行の10・14・24号住居跡に出土例が報告されている(佐藤1973)。後三者は石器の初源を示すかもしれない。前者は後期の方形周溝墓と切り合い関係にあって混入の可能性が高い。なお、北原遺跡4号住居址の1点(神村他1972、第45図7)は、見直しの結果、この石器とは認定できない。
- (6) 昭和45年、権現堂前遺跡で注意された(神村1971)のが最初である。
- (7) 実験の結果、不都合な点を上げると、竹を割った場合、裂けた竹は強い力で反発するため、蛤刃とならない石器は基部側まで奥深く竹と強く接触し、磨減痕やロー状光沢物の付着の範囲も広ばかりか、基部を挟む柄に竹の切り口がつかえて、無理に力を加えると石器は柄から抜けてしまう。また、刃部も先端の折損が著しい。機能面からみると、竹編み用の薄いヒゴをとることは不可能であり、こうした加工は存在が予想される鉄製木工具に依存したと推測される。なお、竹でなく木を対象とした場合はさらに刃部の折損が著しく、こうした点から有抉石器・有柄石器の工具説も否定されよう。
- (8) 硬砂岩剥片の縁辺をそのまま刃部とするにはギザギサが激しく、縁辺を整えるための若干の調整加工が必要である。しかし、剝離痕として観察できる程の強い調整加工はなかったとみてよい。
- (9) 硬砂岩剥片の劈開性は、推積時の一次的な層離面と、圧力による二次的な劈開面があり、両者は一致する場合が多い。
- (10) 北原遺跡の磨製石斧のうち、1号・2号住居址の資料は見直しのできなかったものもあり、それらは

報告書の図から判断した。この他にも局部磨製石斧的な破損品もあり、若干の増加も考えられる。

- (11) 抉入打製石庖丁については先に触れたが、有肩扇状形石器などの打製石器は濃尾にも存在しており（伊藤1975）、ロー状光沢の付着する有肩扇状形石器類似品は朝日遺跡（七原1982）にもあり、綾羅木郷遺跡でも同形態の石器がみられる（国分他1976）。

ま と め

以上、「遺物編1」として縄文時代早期から古墳時代前期の資料についてその紹介と整理及び若干の考察を行なった。今次調査においては「遺構編」で示したように、本書に記述した時代に続く古墳時代後期・奈良時代・平安時代・中世・近世まで、連綿と続く各時代の資料が出土しており、それらについても同時に発表すべきであるが、諸々の事情により、果せなかったことは遺憾である。

本書に関連する時代（遺構も含め）について更に考究すれば、その時期及び資料個々においてそれぞれが意味を持ち、本文中で現わしきれなかった問題点も各時代において少なくはなく、内容的に重複する点もあるが、本書の基本目的である資料提示の中から指摘し得る問題のいくつかを再度整理し、今次調査によって資料整備のできなかつた点もふまえ、将来における各時代・事象の研究、そして、伊那谷における歴史研究の一指針が示せればと思う。

まず、縄文時代全体を通じての遺跡立地についてである。今次調査において、早期末段階の資料がA R Yを中心に検出され、関連各項でも触れたとおり、伊那谷における該期遺跡立地について、今まで暗黙のうちに理解されていた、縄文時代全般にわたりその主体は高位の段丘上にあるという認識を若干修正せざるを得なくなったといえる。そのことは、今次調査によって、具体的に示されたわけであるが、今すでに実施されたいくつかの低位段丘状の発掘調査及び表面採集等の資料にも、縄文時代各期の資料は散見され、伊那谷という特異な地形上の全体にわたり、縄文時代の初期から人々の生活があったといえる。

既出の低位段丘上の縄文時代初期資料としては、飯田市松尾上溝天神塚古墳の墳丘盛土中より有舌尖頭器、A R Bの尾根基部にあたる石行遺跡からも有舌尖頭器及び押型文土器、飯田市松尾明から押型文土器などが出土しており、いずれの出土箇所も、本遺跡群と同一もしくは、一段上という天竜川との比高差の少ない段丘面上である。これらから、伊那谷における低位段丘上の人々の生活は、草創期にはじまり、早期段階にはある程度の定住した姿が考えられる。

更に、前期としては豊丘村河野三島遺跡などがあり、中期以降に至っては、本遺跡群も含めかなりの数の遺跡が認められる。

各時期及び各遺跡がそれぞれ個々の条件下に存在することはいうまでもないが、伊那谷における縄文時代は、いずれの時期においても、低位段丘面から高位段丘面にかけて人々の生活の場であり、その時代毎の自然環境なども十分に検討の上、標高の高低という単純な区分で遺跡の立地を論ずることなく、個々の諸状況を把握、分析する中から生活の復元をすることが必要といえる。

次に、縄文時代中期についてである。縄文時代中期の資料としては、A R Bから調査範囲内で

11軒の住居址を検出し、中期後半から終末の集落の存在を確認した。後世の古墳等により壊され残存部の少ない住居址が多く、個々についての具体的内容の検討が十分にできかねる点もあるが集落の一面という、全体的な内容はほぼ把握されたと考えられる。

南大島川に面した舌状の尾根頂部に作られた集落で、あまり規模の大きなものとは考えられない。調査地は、舌状の尾根先端部にあたり、集落そのものは更に西方の段丘面上に広がる可能性はあるが、尾根頂部から斜面になる部分にも住居址があり、そうした地形を意図的に居住空間としていることも考えられる。そのことは、ARBと比べ、地形的により安定し、居住適地と考えられる恒川遺跡群（TAN・KUR～ARY）において、住居址が検出されなかった事実と合わせ、該期における居住空間の選定にかかわることも予測される。

なお、恒川遺跡群中の段丘端部の一画に、該期資料が比較的多く採集された箇所があり、別の集落が存在した可能性がある。また、今次調査により、断片的ではあるが、ARB出土遺物より先行する時期の資料が恒川遺跡群中より出土しており、ARBとは時期の異なる集落の存在も予測され、また、かなり広範囲にわたり住居址等の検出されなかったことは、居住以外の別用途の空間を考える必要も感じられる。

いずれにしても、恒川遺跡群からARBまで含め、同一段丘上において、限定された区域を居住の場所としており、小時期単位での居住空間の移動の可能性も含め、一定の区域内における空間利用が一律ではないという生活形態を反映した遺跡といえ、今後に残された課題は多大である。

次に、縄文時代後期についてであるが、今次調査においては、ごく少量の土器が出土したのみで、具体的な検討はできない。しかし、比較的広く、ほぼ水平な段丘面上であるという遺跡の立地条件の中で、土器等の遠距離の自然的な移動は考えにくく、少量ながら資料が検出されたことは、遺跡群中にその中心地域があることが予測され、狭小な山間部における土器の単独出土といった特殊な遺物出土とは異なった状況が考えられる。

次に、縄文時代晩期については、GOBを中心にかなりの資料が出土している。出土遺物は比較的多いが、住居址等の遺構の検出はできず、遺跡の性格等の判断は即座にできかねるが、遺物の出土状態などから居住空間の端部もしくは外縁部的な位置づけが可能といえ、今後の調査によって本遺跡群のいずれかに、その中心部が検出される可能性が高いといえる。

なお、伊那谷全体において該期資料は比較的広範囲に、かつ多く認められているが、その多くが南・西部の山間地域からの出土であり、具体的な集落内容、さらには生活形態を判断できる資料はほとんどなく、本遺跡群の性格を決定するには今後の資料集積、研究の進展を待たざるを得ない。

続いて弥生時代から古墳時代前期については、土器編年及び他地域との併行関係等について、

石器の用途及び製作技法の一部についてなど本文中で記述したとおりであるが、それらを含め、問題のいくつかを整理してみる。

居住空間の変遷については、遺構編でも触れたように時代によって、遺跡群内でかなりの移動及び状況の変化が認められる。居住空間の移動は、遺跡群の全域→特定区域→特定区域の移動という姿が、弥生時代中期から古墳時代前期の間に認められ、それは、時期を追って生活形態が変化し、そして確立したことを示すと考えられる。

また、土器をはじめとする他地域との交流形態及びそれに付随しての諸事象の変化、石器の組成変化、住居址の形態変化なども生活形態の変化を示す要素といえる。

そして、各要素が複合した結果として考古学的に検証し得る事象の変化が現われるわけで、その大きな要因として自然環境の変化、農業をはじめとする諸技術の進展などが考えられ、逆に要因が何であるかを解明するには、具体的な諸事象の整理・検討によって導き出されるといえる。

なお、今次調査においては、弥生時代後期前半の座光寺原式期の様相が不明であるが、既出資料等により、前後との連続関係は把握でき、恒川遺跡群において整理された時代を追っての諸事象の変化は、飯伊地方の弥生時代から古墳時代の諸事象の変化をそのまま示しているといえる。さらにいえば、恒川遺跡群において把握できた諸事象・諸問題が整理・解明されることによって伊那谷の弥生時代から古墳時代の多くの問題が解決されるともいえる。

次に、弥生時代から古墳時代への移行期について若干の整理をしてみる。弥生時代から古墳時代への移行期については、全国的視野で論ぜられ、いまだに結論のつけ難い問題である。

恒川遺跡群においては、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけ、連続した時期の住居址が検出され、いずれを時代の境とするかは置くとしても、確実に一連の流れの中で、弥生時代であったものが、古墳時代に移行しているといえる。

本文中で、土器編年を恒川Ⅴ～Ⅹ期と6期に細分したが、そのうち従来の当地方土器編年及び他地域との関連をみても弥生時代に位置づくのはⅤ期であり、古墳時代に位置づくのはⅧ期以降である。それに基づき、弥生時代と古墳時代の境を求めるとすれば、Ⅴ期とⅥ期の間、Ⅵ期とⅦ期の間、Ⅶ期とⅧ期の間のいずれかということになる。従来の当地方土器編年が十分に整備されたものとはいえない状況ではあるが、中島式土器は、前段階の座光寺原式(恒川Ⅳ期)の発展形として、伊那谷南部において完成された弥生時代後期の典型的な姿といえる。その段階を中島式＝恒川Ⅴ期とした時に、従来、中島式土器の範疇で考えていた後続する恒川Ⅵ・Ⅶ期の土器群の扱いが問題となる。いずれも、中島式土器が変化しながらも残存する時期であり、従来の観点に立てば、中島式土器、すなわち弥生時代の土器として扱えられるものである。

しかし、他地域からの移入土器及びそれとの併行関係を求めた時には、古墳時代への移行、換言すれば土師器としての位置づけが可能と判断される時期のはじまりが恒川Ⅵ期であるといえる。とはいえ、他地域との併行関係を求める上で更に検討を要する点も多く、他地域の時代把握

そのものにも検討すべき点もあると考えられ、VI期以降を、即、古墳時代とするには至らない。

再度、当地方の土器変化の中で時代区分を試みるとすれば、器形及び施文により強く中島式の様相を残す恒川VI期段階までを弥生時代と捉え、器形の変化及び甕の文様が消滅するVII期段階以降を古墳時代に位置づけるのが、現段階において整理される伊那谷南部の弥生式土器と土師器の境界といえる。

なお、当然のこととはいえ、土器編年のみによって時代区分すべきでないことはいうまでもなく、土器以外にも石器組成・住居址形態・集落構成など総合的な検討をふまえて整理された時に伊那谷の弥生時代から古墳時代の様相が明らかになると考えられる。

最後に、本書では、縄文時代早期から古墳時代前期という長期にわたる資料の紹介と、若干の考察及び問題提示をしたわけであるが、現段階においても、いまだ本次調査の結果を十分に整理でき得たものでなく、今後に課した問題点の多さに、調査者のいずれもが困惑している状態といえる。しかし、本書が各時代研究に一石を投じ、また、地域研究の踏台となることを期して本書のまとめとしたい。

(小林正春)

引用・参考文献

「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」は「中央道報告」と略記した。

- ア 安達厚三 1969 「古墳時代溝出土の遺物」『奈良国立文化財研究所年報1969』
安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60巻2号
青木和明他 1982 『浅川扇状地遺跡群一牟礼バイパスA・E地点一』 長野市教育委員会
青木一男 1984 「善光寺平南城における古墳出現期の集落出土の土器」『古墳出現期の地域性』千曲川水系
古代文化研究所他
- イ 岩崎卓也 1963 「古式土師器考」『考古学雑誌』48巻3号
岩崎卓也 1964 「東日本における土師器の研究」『史学研究・東京教育大学文学部紀要』46
岩崎卓也他 1971 『下条・灰塚』 更埴市教育委員会
岩崎卓也 1984 「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学』III
今村善興 1967 「飯田市座光寺原遺跡」『長野県考古学会誌』4号
今村善興他 1974 「天伯B遺跡」『中央道報告一下伊那郡鼎町その2・天伯A一』長野県教育委員会
伊藤禎樹 1975 「濃尾地方における弥生時代の石器の問題」『三重考古』創刊号
池畑耕一 1976 「石庖丁にみられる瀬戸内地方と宮崎県との関係」『宮崎考古』第2号
石野博信・関川尚功 1976 『纏向』 桜井市教育委員会
石神幸子他 1979 『池上遺跡』3分冊の1・2・3 大阪文化財センター
井上和人 1982 「「布留式」土器の再検討」『文化財論議』 奈良国立文化財研究所
飯塚政美他 1983 「烏井田遺跡」『烏井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡』 伊那市教育委員会
岩井克允・松本一男 1983『行人塚遺跡』 掛川市教育委員会
- ウ 植田真他 1982 『和田・百草遺跡群』 多摩市教育委員会
- オ 大参義一 1967 「S字状口縁土器考」『いちのみや考古』No.13
大参義一 1968 「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学研究論集(史学)』IXVII
大参義一他 1975 『朝日遺跡群第一次調査報告』 愛知県教育委員会
大塚初重 1971 「原目山遺跡出土の土器」『土師式土器集成』本編1
大塚初重他 1978 『弘法山古墳』 松本市教育委員会
大場磐雄・楢山林継他 1969 『神坂峠』 阿智村教育委員会
岡田正彦 1972 「酒屋前遺跡」『中央道報告一飯田市内その2一』 長野県教育委員会
置田雅昭 1974 「大和における古式土師器の実態」『古代文化』26巻2号
大橋勤他 1974 「伊保遺跡」 猿投遺跡調査会
大江命他 1976 『宮之脇遺跡発掘調査報告書』 可児町教育委員会
大村直他 1982 『神谷原III』 八王子市栲田遺跡調査会
大村直 1983 「弥生時代における鉄鍬の変遷とその価値」『考古学研究』30巻3号
小川貴司 1983 「解説」『三～四世紀の東国』 八王子市郷土資料館
奥田尚・米田敏幸 1983 「土器の胎土分析方法について」『古代学研究』99号
- カ 神田五六 1956 「北信濃栗林の弥生式土器」『考古学』7巻7号
神村透 1966 「弥生文化の発展と地域性一中部高地一」『日本の考古学III』 河出書房
神村透 1967 「高森町北原遺跡」『長野県考古学会誌』4号
神村透他 1968 「弥生式文化の東漸とその発展」『長野県考古学会誌』5号
神村透 1969 「弥生文化各説一中部山岳地帯一」『新版考古学講座4』 雄山閣
神村透 1970 「下伊那にある寄道式土器」『長野県考古学会誌』8号
神村透 1971 「権現堂前遺跡」『中央道報告一飯田地区一』 長野県教育委員会
神村透他 1971 「山岸遺跡」『中央道報告一飯田地区一』 長野県教育委員会

- 神村 透 1977 「南信州における弥生時代の陸耕」『えとのす』8号
- 神村 透 1982 「長野県下伊那地方の弥生後期土器」『論集日本原史』吉川弘文館
- 金井塚良一他 1971 「特集シンポジウム五領式土器について」『台地研究』No.19
- 金子裕之 1971 「古墳時代屋内祭祀の一考察——関東中部地方を中心として——」『国史学』84
- 加納俊介他 1981 「月の輪遺跡群II」富士宮市教育委員会
- 加納俊介・都築みどり 1984 「IX愛知県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
- 加藤安信・高橋信明他 1982 『朝日遺跡』愛知県教育委員会
- 川越哲志 1984 「研究ノート 弥生時代農具鉄器化の諸段階」『たたら研究』26号
- キ 桐原健他 1956 『信濃史料』1巻上・下
- 桐原 健 1957 「信濃における石庖丁について」『信濃』9巻8号
- 桐原 健 1960 「石器よりみたる信濃弥生式文化の一様相」『信濃』11巻12号
- 桐原 健 1963 「粟林式土器の再検討」『考古学雑誌』49巻3号
- 桐原健他 1967 『海戸・安源寺』長野県考古学会
- 桐原健他 1968 『海戸（第2次調査報告書）』長野県考古学会
- 桐原 健 1968 「稻荷平遺跡調査概報」『長野県考古学会誌』5号
- 桐原健・御子柴泰正 1969 長野県伊那市美筈笠原堂垣外遺跡調査概報『信濃』21巻4号
- 木下 忠 1966 「農具」『日本の考古学III』河出書房
- 木下正史編 1982 『日本の美術5 弥生時代』至文堂
- 木村剛郎 1972 「実験よりみた敲石とその用途」『考古学ジャーナル』74・75
- ク 工藤かよ子他 1981 『下小平遺跡』佐久市教育委員会
- コ 小林行雄 1934 「小型丸底土器小考」『考古学』6巻1号
- 小林行雄 1937 「石庖丁」『考古学』8巻7号
- 小林行雄・佐原真 1964 『紫雲出』詫間町文化財保護委員会
- 小出義治・玉口時雄・桜井清彦 1955 「土師式遺物」『平出』
- 紅村 弘 1963 『東海の先史遺跡 総括編』
- 紅村 弘 1975・76 「入門講座弥生土器—中部東海西部—」『考古学ジャーナル』112・116・122・125
- 紅村弘他 1981 『東海先史文化の諸段階 本文編補足改訂版』
- 紅村弘・増子康真他 1973 『牧野小山遺跡』岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会
- 小林知生・吉田章一郎 1967 「神明遺跡」『東名高速道路関係埋蔵文化財調査報告』愛知県教育委員会
- 小林幹男・川上元 1972 『西光坊遺跡・向田II遺跡・石原遺跡』上田市教育委員会
- 小林正春他 1975 「新井南遺跡」『中央道報告—岡谷市その3—』長野県教育委員会
- 小林正春 1983 『恒川遺跡群 昭和58年度範囲確認調査概報』飯田市教育委員会
- 国分直一他 1976 「綾羅木郷弥生社会と生産技術」『どるめん』10
- 小林公明 1977 「縄文中期八ヶ岳南麓における農具としての打製石器」『信濃』29巻4号
- 小林公明 1978 「石製農耕具」『曾利』富士見町教育委員会
- 小林公明 1978 「石庖丁の収穫技術」『信濃』30巻1号
- 小林公明 1982 「爪鎌の二つの側面」『山麓考古』15
- 越川敏夫他 1980 『池の辺』池の辺遺跡調査会
- 小林康男 1980 『中島遺跡』塩尻市教育委員会
- サ 佐原 真 1959 「弥生式土器製作技術に関する二・三の考察」『私たちの考古学』5巻4号
- 佐原 真 1970 「土器の話（1）・（2）」『考古学研究』17巻1・2号
- 佐原真編 1976 『日本の美術10 弥生土器』至文堂
- 佐原 真 1977 「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古論集—松崎寿和先生六十三歳論集—』
- 佐原 真 1977 「土器製作法」『世界考古学事典』平凡社

- 佐原 真 1982 「石斧再論」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
- 佐原 真 1982 「食器における共用器、銘々器、属人器」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所
- 佐藤甦信・宮沢恒之 1967 「喬木村阿島遺跡」『長野県考古学会誌』4号
- 佐藤甦信他 1969 『安宅・大島』 下伊那考古学会
- 佐藤甦信 1971 「瑠璃寺前遺跡中島地区」『中央道報告—高森町地区その1—』 長野県教育委員会
- 佐藤甦信 1973 『的場』松川町教育委員会
- 佐藤甦信 1974 「小池遺跡」『小池・宮城・神送塚』 飯田市教育委員会
- 佐藤甦信 1976 『清水遺跡』 飯田市教育委員会
- 佐藤甦信 1977 『伊賀良中島平』 飯田市教育委員会
- 佐藤甦信 1978 『伊久間原』 喬木村教育委員会
- 佐藤甦信 1979 『犂牛原十万山地区』 喬木村教育委員会
- 佐藤甦信 1981 『地神（じのかみ）遺跡』 喬木村教育委員会
- 佐藤甦信 1983 『堂垣外遺跡』 上郷町教育委員会
- 佐藤甦信 1984 『高松原II』 上郷町教育委員会
- 笹沢 浩 1972 「箱清水土器発生に関する一試論」『信濃』22巻11号
- 笹沢浩他 1976 「上水内地方の考古学的調査」『上水内郡誌 歴史篇』
- 笹沢 浩 1977 「入門講座弥生土器—中部中部高地—」『考古学ジャーナル』131・133・134
- 笹沢浩他 1977・78 「志平遺跡」『中央道報告—岡谷市その4—』 長野県教育委員会
- 笹沢 浩 1978 「中部高地型櫛描文の系譜」『中部高地の考古学』
- 酒井幸則他 1974 『田村原遺跡』 豊丘村教育委員会
- 酒井幸則他 1975 『田村原・林原遺跡』 豊丘村教育委員会
- 酒井幸則 1976 「飯田地方弥生時代石庖丁に関する一考察」『高松台』3号
- 酒井幸則 1977 「石器」『高松原』 長野県立飯田高等学校
- 酒井幸則 1978 『的場III』 松川町教育委員会
- 酒井幸則 1979 『城遺跡』 長野県考古学会学習会資料
- 酒井幸則 1983 「城遺跡」『長野県史考古資料編』全一卷（3）
- 桜井弘人・長尾喜秋 1976 「高松原遺跡第1次調査区発掘調査略報」『高松台』3号
- 佐々木嘉和他 1980 『猿小場遺跡』 飯田市教育委員会
- 佐藤信之他 1982 『栗佐遺跡群五輪堂遺跡』 更埴市教育委員会
- 佐藤由紀男 1983 「西遠地区の弥生後期の土器」『静岡県考古学会シンポジウム』5
- 斉藤嘉彦 1983 「矢作川河床遺跡と遺物」『岡崎市史研究』5号
- 阪田育功他 1984 『佐堂（その2—I）』 大阪文化財センター
- シ 遮那藤麻呂他 1971 「出早神社附近遺跡」『中央道報告—高森町地区その1—』 長野県教育委員会
- 遮那藤麻呂 1972 「土器」『北原遺跡』 高森町教育委員会
- 篠崎健一郎他 1980 『借馬遺跡』 大町市教育委員会
- ス 末永雅雄・中村春寿・小林行雄 1983 「大和に於ける土師器住居址の新例」『考古学』9巻10号
- 杉崎 章 1953 『愛知県知多郡横須賀町柳ヶ坪貝塚』
- 杉浦茂治・斉藤嘉彦・久永春男 「王江遺跡」『愛知県碧海郡高浜町の先史・古代遺跡』高浜町誌編纂委員会
- 鈴木次郎他 1977 『尾崎遺跡—酒匂川総合開発事業にともなう調査』 神奈川県教育委員会
- 杉浦仁美 1982 「名古屋台地欠山期についての一試論」『南山考古』創刊号
- 鈴木敏則他 1982A 『椿野遺跡』 浜松市遺跡調査会
- 鈴木敏則他 1982B 『西鴨江 中平遺跡』 浜松市教育委員会
- 鈴木敏則他 1985 『三沢西原遺跡』 菊川町教育委員会
- 鈴木敏則 1985 「欠山式の地域性」『転機』創刊号

- 梶山林繼他 1983 『入山峠』 軽井沢町教育委員会
- セ 関 俊彦 1969 「弥生式石器の編年」『新版考古学講座4』 雄山閣
 瀬川裕市郎他 1978 『藤井原遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 沼津市教育委員会
 関沢聡他 1985 「白神場遺跡の調査」『松本市赤木山遺跡群Ⅰ』 松本市教育委員会
- タ 田中 琢 1965 「布留式以前」 『考古学研究』12巻2号
 谷川章雄 1975 「東京都大田区立蒲田小学校出土の古式土師器」『古代』78・79合併号
 高林重水他 1981 『橋原遺跡』 岡谷市教育委員会
- チ 千曲川水系古代文化研究所 1982 『千曲川水系における弥生時代終末から古墳時代初頭の土器編年(試案)』
- ツ 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20巻4号
 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26巻3号
 都出比呂志 1983 「弥生土器における地域色の性格」『信濃』35巻4号
 都築みどり 1983 「元屋敷式土器の再検討」『南山考古』2号
- ト 友野良一他 1975 『町谷』 飯島町教育委員会
 友野良一他 1978 『カゴ田』 飯島町教育委員会
- ナ 中村春寿・上田宏範 1971 『桜井茶臼山古墳』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告
 七原恵史 1982 「石製品」『朝日遺跡』愛知県教育委員会
 橋崎彰一他 1984 『日本陶磁の源流』 柏書房
 中村倉司 1984 「器種組成の変遷と時期区分」『土曜考古』9号
 永井義博他 1985 『土橋遺跡』 袋井市教育委員会
 中西常雄 1985 「近江における甕形土器の動向」『考古学研究』32巻1号
 中島郁夫 1985 「弥生土器から土師器への画期」『古墳時代の土師器—静岡県考古学シンポジウム6—』
- ハ 原口正三・田辺昭三他 1962 『船橋Ⅱ』 平安学園考古学クラブ
 原口正三 1968 「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立島上高校研究紀要』3
 原嘉藤・小松虔 1972 「長野県松本市中山第36号古墳(仁能田山古墳)調査報告」『信濃』24巻4号
 林茂樹他 1977 『高遠宮の原遺跡』 高遠町教育委員会
 花岡 弘 1979 「信濃の古式土師器」『信濃』31巻4号
- ヒ 久永春男他 1963 「弥生式土器」『瓜郷遺跡』
 久永春男・斉藤嘉彦他 1969 『高橋遺跡』 豊田市教育委員会
 比田井克仁 1980 「古墳発生時における小型高坏」『金鈴』22号
 比田井克仁 1983 「古墳時代前期高坏考」『古代』74号
 比田井克仁 1985 「外来土器の展開」『古代』78・79合併号
- フ 藤森栄一 1931 「諏訪天王垣外発見の弥生式土器及び石器」『考古学』3巻6・7号
 藤森栄一 1939 「信濃下蟹河原に於ける土師器の一様式」『考古学』10巻11号
 藤森栄一 1941 「『天手抉』の発展経過に就て」『古代文化』12巻11号
 藤森栄一 1951 「信濃北原遺跡出土石器の考古学的位置について」『諏訪考古学』6号
 福沢幸一 1971 「神堂垣外遺跡」『中央道報告—高森町地内その1—』長野県教育委員会
 藤原 宏 1982 「プラント・オパールからみた縄文から弥生」『歴史公論』8巻1号
 福島邦男 1983 『後沖遺跡』 望月町教育委員会
 藤曲秀樹・藤田典夫 1983 「信濃の弥生式土器から土師式土器への変遷過程(一)」『信濃』35巻5号
- ホ 星龍象・青木和明他 1983 「信濃の弥生式土器から土師式土器への変遷過程(二)」『信濃』35巻7号
- マ 松島透他 1951 「信濃北原遺跡調査概報」『諏訪考古学』6号
 松島 透 1953・54 「下伊那に於ける弥生文化私考」『伊那』300~309号
 松島 透 1964 「飯田地方における弥生時代打製石器」『日本考古学の諸問題』
 松永満夫 1972 「上の金谷遺跡」『中央道報告—飯田市内その2—』 長野県教育委員会

- 丸山徹一郎他 1982 『上の林遺跡3次調査』 箕輪町教育委員会
- ミ 宮沢恒之 1967A 「飯田市恒川遺跡」『長野県考古学会誌』4号
- 宮沢恒之 1967B 「飯田市中島遺跡」『長野県考古学会誌』4号
- 宮沢恒之 1968 「飯田地方の土師器の様相」『信濃』20巻11号
- 宮沢恒之他 1969 「長野県下伊那郡阿智村中原遺跡調査報告」『長野県考古学会誌』6号
- 宮沢恒之他 1970 『月夜平第1次・第2次埋蔵文化財発掘調査報告書』 高森町教育委員会
- 宮沢恒之 1975 「弥生集落の展開」『伊那』23巻3号
- 宮沢恒之他 1977 『高松原』 長野県立飯田高等学校
- 宮沢恒之 1978 「伊那谷における弥生集落の展開」『中部高地の考古学』
- 宮沢恒之他 1979 『赤坂・鐘鑄原B・無縁堂・新井・松岡南城・ヨシガタ遺跡』 高森町教育委員会
- 宮沢恒之他 1980 『役人平入口・別曾・牛牧上平・赤坂・鐘鑄原A・正真名・広庭遺跡』高森町教育委員会
- 宮坂光昭 1981 「土製品」『橋原遺跡』 岡谷市教育委員会
- 宮沢光昭・高見俊樹・小林深志 「一時坂古墳」『長野県史考古資料編』全一卷(3)
- ム 向坂鋼二・辰巳均 1982 「伊場遺跡遺物編3」 浜松市教育委員会
- モ 諸墨知義他 1984 『鎌倉公園遺跡』 大宮市遺跡調査会
- ヤ 山田友好・谷本鋭次 1972 「津市波見町谷川遺跡緊急調査報告」『養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告』
三重県文化連盟
- 山田瑞穂他 1974 「樋口内城館址」『中央道報告—上伊那郡辰野町その2—』 長野県教育委員会
- 八木光則 1976 「いわゆる『特殊磨石』について」『信濃』28巻4号
- 矢口忠良他 1980 「四ツ屋遺跡」『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群』 長野市教育委員会
- 山本忠尚 1982 「日本考古学と時期区分」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所
- 谷内尾普司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』
- 山口和夫他 1984 『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報III』 焼津市教育委員会
- 山下誠一 1984A 「恒川遺跡の古式土師器」『信濃』36巻4号
- 山下誠一 1984B 「飯田・下伊那地域の古墳出現期の様相」『古墳出現期の地域性』 千曲川水系古代文化
研究所他
- ユ 湯川悦夫・加納俊介 1976 「古式土師器の研究(I)」『小田原考古学研究会誌』7号
- 湯川悦夫・加納俊介他 1981 『月の輪遺跡群』 富士宮市教育委員会
- 湯川悦夫・加納俊介他 1982 『月の輪遺跡群III』 富士宮市教育委員会
- ヨ 横山浩一 1978 「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『紀要』23号 九州文化史研究所
- 吉廻純・大村直他 1981 『神谷原I』 八王子市栢田遺跡調査会

第20表 T A N ・ K U R 弥生時代中期土器觀察表

遺構	図版No	器形	法 量(cm)			手 法 上 の 特 徴			胎 土	焼 成	色			調 断面	備 考
			口径	胴径	底径	器高	外 面	内 面			文	外 面	内 面		
1 住	1-1	壺A ₁	-	31.3	9.2	-	へラミガキ縦	剥落	III C ₁ 、IV C ₁ 、V ₁	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	口縁部欠 1/4残存	
	1-2	壺	-	-	8.6	-	ハケ横	"	V ₄	不良	淡茶褐色	暗茶褐色	"		
	1-3	壺A ₂ b	14.0	-	-	不明	ヨコナテ	小石粒多、雲母	IA、III C ₂	"	"	暗茶褐色	"		
	1-4	壺	-	-	6.8	-	"	不明	V ₁	普通	明褐色	茶褐色	"		
	1-5	壺	-	-	7.4	-	ナテ	ナテ	V ₃	"	茶褐色	茶褐色	"		
	1-6	壺C	-	-	5.8	-	へラミガキ	ハケ横	V ₄ 、丹彩	不良	暗褐色	暗褐色	茶褐色		
	2-1	壺A ₁	-	31.3	9.2	-	へラミガキ縦	剥落	III C ₂ 、IV C ₁ 、V ₁ 、丹彩	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	口縁部欠	
	2-2	壺	-	-	8.4	-	"	"	V ₁	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	底部残存	
	2-3	壺Db	-	15.6	15.2	-	不明	不明	IA、III C ₂ 、IV F ₅	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	脚台部欠	
	2-4	壺	-	-	6.4	-	ハケ縦	ハケ横	V ₁	"	暗茶褐色	茶褐色	茶褐色	底部残存	
	2-5	壺	-	-	7.4	-	ナテ	剥落	V ₃	普通	茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	底部残存	
	3-1	壺	-	-	45.2	-	ハケ横	ハケ横	III C ₃ 、IV F ₆	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	1/4残存	
	9 住	3-2	壺	-	26.5	-	-	ナテ縦	ナテ	小石粒多、雲母	"	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	胴部残存、埋設炉
3-3		壺	-	-	8.6	-	ナテ横	ナテ横	V ₁	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存	
3-4		壺	-	-	8.0	-	"	剥落	V ₄	"	淡褐色	明茶褐色	明茶褐色	1/6残存	
3-13		鉢A ₁	21.0	-	-	-	"	ナテ横	IA	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/10残存	
4-1		壺A ₁	-	33.8	-	-	不明	剥落	III C ₁ 、IV C ₂	普通	"	淡褐色	茶褐色	1/3残存	
13 住	4-8	壺A ₁	18.2	16.9	-	-	ナテ横	ナテ横	IB ₂ 、IV F ₂	良好	"	暗茶褐色	暗茶褐色	胴部残存、埋設炉	
	4-9	壺A ₁	-	19.3	-	-	へラミガキ縦・横	へラミガキ縦・横	III C ₂ 、IV F ₂	普通	黒褐色	茶褐色	茶褐色	"	
19 住	5-1	壺A ₁	15.6	-	-	-	ヨコナテ、ハケ横・斜め	剥落	IB ₄	"	淡褐色	茶褐色	茶褐色	口縁部残存	
	5-2	壺A ₁	-	-	-	-	不明	"	III B ₁ 、IV B ₁	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存	
	5-3	壺A ₁	-	27.0	-	-	ナテ	"	III B ₁ 、IV B ₁ 、丹彩	"	茶褐色	"	"	胴部残存	
	5-4	壺A ₁	-	34.8	-	-	ハケ縦	"	III C ₁ 、IV C ₂ 、丹彩	"	濃茶褐色	"	"	1/3残存	
	5-5	壺A ₁	-	-	-	-	ナテ縦	"	IV C ₁ 、丹彩	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存	
	5-6	壺C ₁	-	-	7.8	-	不明	ナテ	IC、丹彩	不良	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	茶褐色	"	
	5-7	壺	-	-	7.8	-	ヨコナテ	剥落	V ₄	普通	褐	灰黒色	灰黒色	1/3残存	
	5-8	壺	-	-	7.6	-	へラミガキ	へラミガキ	"	"	暗茶褐色	黒褐色	灰黒色	底部残存	
	5-9	壺	-	-	8.0	-	ナテ	剥落	"	不良	灰褐色	灰褐色	茶褐色	"	

遺構	図版No	器形	法			手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考		
			口径	胴径	底径	器高	外面	内面			文様	断面	内面		外面	
													外			内
19 住	5-10	壺	-	-	8.0	-	剥落	朝落	小石粒	不良	褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存		
	6-1	甕C	29.2	25.2	-	ハケ横	ナア、ハケ斜め	ナア横	小石粒、雲母	普通	黒色	暗茶褐色	暗茶褐色	1/10残存		
	6-2	甕A ₁	29.0	-	-	ヨコナア	ナア横	ナア横	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	1/12残存			
	6-3	甕A ₁	-	27.2	-	ハケ横	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	"	不良	黄灰色	黄灰色	胴部残存、埋設炉			
	6-5	甕	-	-	8.0	-	ナア横	ナア	"	普通	黒色	茶褐色	1/2残存			
	6-6	甕	-	-	8.4	-	ナア	不明	"	不良	灰褐色	"	底部残存			
	6-7	壺	-	-	7.8	-	ハケ横	ハケ横	"	"	淡褐色	暗茶褐色	1/4残存			
	6-8	甕	-	-	7.2	-	ハケ横	ハケ横	"	普通	暗茶褐色	暗茶褐色	底部残存			
	6-9	甕	-	-	6.4	-	ハケ横	"	"	"	淡茶褐色	暗茶褐色	"			
	6-10	甕	-	-	6.7	-	ナア	ナア	"	"	茶褐色	暗褐色	3/4残存			
20 住	6-11	壺	-	-	8.4	-	不明	朝落	小石粒、赤粒	不良	"	茶褐色	茶褐色	1/3残存		
	6-12	甕	-	-	7.2	-	ナア横、ヨコナア	ヨコナア	小石粒、雲母	普通	黒褐色	暗茶褐色	底部残存			
	6-13	壺	-	-	6.9	-	不明	剥落	小石粒	不良	黒色	黒色	1/3残存			
	6-14	壺	-	-	8.5	-	ヨコナア	ナア	"	普通	暗褐色	茶褐色	1/8残存			
33 住	7-1	壺A ₁	14.3	-	-	-	ハケ横、ヨコナア	ナア横	"	"	茶褐色	茶褐色	口頸部残存			
	7-4	鉢D	-	-	6.8	-	ヘラミガキ斜め、横	ヘラミガキ横	小石粒少	良好	暗赤色	暗赤色	底部残存			
77 住	7-8	壺A ₁	-	-	-	-	ナア	不明	小石粒多	普通	明茶褐色	茶褐色	1/5残存、埋設炉			
	7-11	甕Da	16.0	15.4	-	-	ナア横	ナア横	小石粒	"	茶褐色	"	1/6残存			
	7-12	甕	-	-	7.8	-	ハケ横	ハケ横	"	"	茶褐色	"	底部残存			
96 住	8-1	壺A ₁	-	-	-	-	ナア横	朝落	"	"	黒褐色	黒褐色	1/6残存、埋設炉			
	8-2	甕Ba	13.0	-	-	-	不明	ナア	"	"	赤褐色	茶褐色	口縁部・頸部残存			
15 遺	19-13	壺	-	-	7.2	-	ナア	剥落	小石粒、雲母	"	茶褐色	茶褐色	底部残存			
23-8 外	23-8	壺A _{2a}	15.0	-	-	-	ヨコナア	ヨコナア	小石粒	良好	"	淡茶褐色	"	1/4残存、31住		
	23-11	甕A ₁	-	24.6	-	-	ナア横後ヘラミガキ横	ナア横後ヘラミガキ横	小石粒多、雲母、赤粒	"	淡茶褐色	茶褐色	1/3残存、58住			
	24-1	鉢Ca	21.9	-	-	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	小石粒少、雲母	"	暗赤色	茶褐色	1/6残存、40住			
	24-2	鉢D	20.8	-	-	-	ヨコナア、ヘラミガキ横	"	小石粒少	普通	暗赤色	黄褐色	1/10残存、54住			
	24-3	鉢D	-	-	6.0	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒、赤粒	"	"	茶褐色	1/4残存、KURCF47			
	24-4	壺C	-	-	6.6	-	"	ナア	小石粒、雲母	"	濃茶褐色	茶褐色	1/6残存、KURAW52			
24-5	鉢D	-	-	5.2	-	"	ヘラミガキ	"	"	暗赤色	暗赤色	1/4残存、TANBC52				
24-6	高坏	-	-	-	-	ヘラミガキ横	ハケ横	丹彩	"	淡茶褐色	淡茶褐色	接合部残存、51住				

第21表 T A N ・ K U R 弥生時代後期から古墳時代前期土器観察表

遺 構	図版No	器 形	法 量(cm)				手 法 上 の 特 徴				胎 土	焼 成	色			備 考	
			口徑	胴徑	底徑	器高	外 面	内 面	文 様	線			外 面	内 面	断 面		
5 住	8-5	壺AII ₂	19.4	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ斜め	ヨコナデ	剷突文、波状文、縞線文	小石粒、雲母、赤粒	良好	茶 色	茶 色	茶 色	口縁部残存、器台に転用	
	8-6	壺F ₁	-	11.8	4.8	-	ナデ横	ヘラミガキ縦	ナデ横	剷突文、波状文、縞線文	小石粒少	"	明 茶 色	灰 黒 色	濃黄灰色	口縁部欠、再利用	
	8-7	壺A	-	-	8.8	-	不明	不明	剷落	"	小石粒	普通	濃黄灰色	濃黄灰色	濃黄灰色	$\frac{1}{6}$ 残存	
	8-8	壺AII ₁ c	12.8	-	-	-	ナデ横	ナデ、ヘラミガキ	ナデ横	波状文、斜走短線文	"	良好	黒 色	黒 色	暗茶褐色	$\frac{1}{8}$ 残存、	
	8-9	壺AII ₁ a	-	17.6	-	-	ハケ横、ヘラミガキ	ナデ	ヘラミガキ横	波状文、斜走短線文	小石粒少	普通	茶 褐色	茶 褐色	茶 褐色	口縁部、底部欠、埋設炉	
	8-10	壺AII ₁ a	17.6	-	-	-	不明	不明	ナデ後ヘラミガキ縦	"	小石粒少	"	明 茶 褐色	明 茶 褐色	明 茶 褐色	$\frac{1}{10}$ 残存	
	8-11	壺A	-	-	5.8	-	不明	不明	不明	"	小石粒、雲母	"	茶 褐色	黒 褐色	茶 褐色	$\frac{1}{3}$ 残存	
	8-12	壺A	-	-	6.4	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ナデ横	"	小石粒少	良好	暗 褐色	茶 褐色	茶 褐色	$\frac{1}{4}$ 残存	
	8-13	壺A	-	-	6.4	-	ヘラケズリ縦	ヘラケズリ縦	"	剷突文、波状文、縞線文	小石粒少、赤粒	普通	濃黄灰色	濃黄灰色	濃黄灰色	$\frac{1}{4}$ 残存	
	8-14	鉢A ₂	-	7.2	3.0	4.5	ナデ縦	ナデ縦	ナデ	剷突文	小石粒	"	茶 褐色	茶 褐色	茶 褐色	口縁部一部欠	
	8-15	鉢A ₂	-	-	4.8	-	ナデ縦横	ナデ縦横	"	剷突文、波状文、縞線文	小石粒少	"	褐 褐色	灰 褐色	灰 褐色	$\frac{1}{2}$ 残存	
	8-16	手づくね	-	2.3	2.6	1.4	ナデ	ナデ	"	"	小石粒	"	淡 灰 色	淡 灰 色	灰 白 色	口縁部一部欠	
	8-17	高坏A	-	19.4	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	剷突文、波状文、縞線文、十回弧文	小石粒	良好	茶 色	茶 色	茶 色	口縁部 $\frac{3}{4}$ 残存	
	7 住	9-1	壺AII ₁ b	21.4	-	-	-	ナデ	ナデ	不明	剷突文、波状文、縞線文、十回弧文	小石粒多	普通	淡 茶 色	淡 茶 色	淡 茶 色	$\frac{1}{2}$ 残存、 $\frac{1}{4}$ 赤料
		9-2	壺AII ₁ a	28.0	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	剷突文、波状文、縞線文	"	"	明 茶 色	黒 色	茶 褐色	$\frac{1}{7}$ 残存
		9-3	壺AII ₁	21.2	-	-	-	ナデ横	ナデ横	ナデ横	剷突文、波状文	小石粒、赤粒	"	黒 色	"	暗茶褐色	$\frac{1}{6}$ 残存
		9-4	壺AII ₁ b	17.0	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	剷突文	小石粒多、赤粒	"	茶 色	茶 色	茶 色	"
9-5		壺AII ₂	17.0	-	-	-	ナデ横	ナデ横	ナデ横	剷突文	小石粒、赤粒	"	淡 茶 褐色	淡 茶 褐色	淡 茶 褐色	$\frac{1}{6}$ 残存	
9-6		壺AII ₁ c	13.6	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	剷突文、波状文	"	"	"	"	茶 褐色	$\frac{1}{10}$ 残存	
9-7		壺AII ₁ C	12.2	-	-	-	ヨコナデ、ヘラミガキ縦	ヨコナデ、ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	"	"	"	"	暗茶褐色	茶 褐色	$\frac{1}{5}$ 残存	
9-8		壺A	-	-	8.6	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	剷突文、波状文、縞線文	"	"	茶 褐色	茶 褐色	茶 褐色	"	
9-9		壺	-	-	9.4	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	剷落	"	小石粒多、雲母	不良	茶 褐色	茶 褐色	茶 褐色	底部残存	
9-10		壺	-	-	9.0	-	不明	不明	"	"	小石粒、赤粒	普通	黄 灰 色	淡黄灰色	黄 灰 色	$\frac{1}{3}$ 残存	
9-11		壺A	-	-	9.4	-	ナデ横	ナデ横	"	"	小石粒、赤粒	普通	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	$\frac{1}{2}$ 残存	
9-12		壺	-	-	7.2	-	不明	不明	ナデ横	ナデ縦、横	小石粒多	不良	褐 褐色	褐 褐色	褐 褐色	$\frac{1}{6}$ 残存	
9-13		壺A	-	-	6.6	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ナデ縦、横	剷突文、波状文、縞線文	小石粒、赤粒	普通	茶 褐色	茶 褐色	茶 褐色	$\frac{1}{6}$ 残存	
9-14		壺A	-	-	5.2	-	不明	不明	ナデ横	"	"	"	"	"	"	$\frac{1}{2}$ 残存	
9-15		壺A	-	-	6.4	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ナデ	"	"	"	"	"	"	"	

遺構	図版No	器形	法		手法上の特徴			胎土	焼成	色			調断面	備考
			口径	胴径	底径	器高	外面			内面	文	模様		
7	9-16	高坏A	15.2	-	-	ヘラミガキ縦	不明	不明	良好	黄褐色	淡灰褐色	灰黑色	1/4残存	
住	9-17	高坏A	-	-	14.5	不明	"	小石粒少、赤粒	普通	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/10残存	
8	10-1	壺A I, a	19.0	-	-	"	剝落	小石粒多、雲母、赤粒	"	濃黄灰色	茶色	茶色	1/2残存	イネ科
	10-2	壺A I, a	24.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラミガキ横	小石粒	良好	淡褐色	茶褐色	淡褐色	1/10残存	
	10-3	壺A I, b	22.0	-	-	"	ヨコナデ	小石粒、雲母	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/8残存	
	10-4	壺A II, a	15.2	-	-	"	"	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/10残存	
	10-5	壺A II, a	14.6	-	-	ヨコナデ、ヘラミガキ横	ヨコナデ、ヘラミガキ横	小石粒、雲母	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存	
	10-9	壺A	-	-	8.6	不明	剝落	"	"	"	"	"	1/10残存	
	10-10	壺A	-	-	7.8	"	"	小石粒多、雲母	普通	灰褐色	灰褐色	灰褐色	1/3残存	
	10-11	壺A	-	-	7.0	ナデ横	ナデ横	小石粒	"	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	2/3残存	
	10-12	壺A	-	-	11.4	ヘラミガキ縦	剝落	小石粒、雲母	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存	
	10-13	壺	-	-	8.4	ハケ縦	"	"	"	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/3残存、弥生中期	
	10-14	壺F,	-	12.0	-	不明	ナデ縦、斜め	精良	"	灰白色	灰白色	灰白色	1/4残存	
	10-15	高坏A	-	-	11.8	"	不明	精良、赤粒	"	"	"	"	1/10残存	
	11-1	甕A I, b	20.7	21.0	7.6	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒、赤粒	"	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	1/4残存	ほぼ完形、埋設炉
	11-2	甕A I, b	17.2	16.2	-	ハケ斜め、ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横、斜め	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/8残存	
	11-3	甕A I,	15.0	-	-	ヨコナデ	ヘラミガキ横	小石粒多	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	1/6残存	
	11-4	甕A I,	17.0	-	-	"	"	小石粒、雲母、赤粒	"	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	1/10残存	
	11-5	甕A I,	15.4	-	-	"	"	小石粒、雲母	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/6残存	
	11-6	甕A I, a	16.8	-	-	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	"	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/6残存	
	11-7	甕A I, b	18.0	17.8	-	ハケ横、ヘラミガキ縦	ハケ横、ヘラミガキ縦	"	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	1/10残存	
	11-8	甕A I, b	17.0	15.8	-	ヨコナデ、ヘラミガキ縦	ヨコナデ、ヘラミガキ縦	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/6残存	
	11-14	甕A	-	-	7.0	ナデ	ナデ	小石粒、雲母、赤粒	普通	灰褐色	灰褐色	灰褐色	1/2残存	
	11-15	甕A	-	-	7.0	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	"	"	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	底部残存	
	11-16	甕A	-	-	6.4	"	"	小石粒、赤粒	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	1/3残存	
	11-17	甕A	-	-	8.2	"	"	小石粒、雲母、赤粒	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	"	
	11-18	甕A	-	-	6.0	ナデ	ナデ	小石粒、赤粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/5残存	
	11-19	甕A	-	-	7.0	ヘラミガキ	不明	小石粒、雲母、赤粒	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	1/3残存	
	11-20	甕A	-	-	7.0	ナデ	ヨコナデ	小石粒、赤粒	"	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	底部残存	
	11-21	甕A	-	-	7.2	ヘラミガキ縦	ナデ	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存	
	11-22	甕A	-	-	7.4	ヘラミガキ縦	"	小石粒、雲母	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存	

遺構	図版No	器形	法			手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考	
			口径	胴径	底径	器高	外	内			面	文	様		外面
8	11-23	甕A	-	-	6.6	-	ヘラミガキ	ヨコナテ	小石粒、赤粒	普通	暗褐色	暗褐色	茶褐色	1/2残存	
	11-24	甕BII,a	12.4	-	-	ハケ縦	ハケ斜め	小石粒少、雲母	"	黒褐色	黒褐色	明茶色	1/10残存		
	12-1	壺A I, b	20.6	-	-	ヨコナテ、ハケ	ヨコナテ、ヘラミガキ横	小石粒	寛刺突文、波状文	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存	
	12-7	壺	-	-	6.0	ヨコナテ	ヘラケズリ後ナテ	ハケ横	"	"	淡茶褐色	淡茶褐色	明茶色	1/4残存	
	12-8	壺	-	-	5.0	不明	ハケ横	ハケ横	"	"	黄褐色	淡茶褐色	明茶色	1/2残存	
	12-9	壺	-	-	7.8	ヘラケズリ後ナテ	不明	不明	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存	
	12-10	甕A I, a	-	-	17.8	ハケ、ヘラミガキ縦	ハケ後ヘラミガキ斜め	ヘラミガキ縦	小石粒、赤粒	良好	赤褐色	黒褐色	茶褐色	1/3残存	
	12-11	甕A II, a	14.0	-	-	ヨコナテ	ハケ横、ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	小石粒	普通	黒褐色	明茶色	茶褐色	1/6残存	
	12-12	甕A I, c	17.2	-	-	ハケ横、ヘラミガキ縦	ハケ後ヘラミガキ横	ヘラミガキ縦・横	"	"	明茶色	明茶色	茶褐色	口縁部 ⁴ / ₅ 大、埋設炉	
	12-13	甕A I, b	18.0	17.6	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	小石粒少	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	"	1/10残存	
	12-14	甕A I, b	16.0	-	-	"	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	"	"	"	"	"	1/7残存	
	12-15	甕A I, b	15.4	15.0	-	ハケ後ヘラミガキ縦	ハケ後ヘラミガキ	ハケ横	小石粒	良好	黒褐色	黒褐色	淡茶褐色	ほぼ完形	
	12-16	甕A I, b	16.6	15.2	7.0	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	ハケ後ヘラミガキ横	小石粒少	普通	暗茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	1/4残存	
	12-17	甕A II, c	14.0	14.0	-	ハケ、ヘラミガキ縦	ハケ、ヘラミガキ縦	ナテ横	小石粒	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	1/6残存	
	12-18	甕A	-	-	5.2	ヘラミガキ縦	ナテ横	ナテ横	"	"	黒褐色	黒褐色	茶褐色	底部残存	
	12-19	甕A	-	-	4.6	"	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	"	"	暗茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	1/5残存	
	12-20	甕A	-	-	7.0	"	"	ナテ横	精良、赤粒	普通	暗茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	"	
	12-21	高坏A	-	-	12.8	"	"	不明	精良、赤粒	"	灰白色	灰白色	灰白色	"	
	17	13-1	壺A II, 2	-	-	-	ヨコナテ	ヨコナテ	寛刺突文、波状文	小石粒	"	黒茶褐色	黒茶褐色	黒茶褐色	1/6残存
	住	13-3	壺	-	-	12.8	"	ナテ	ナテ	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/7残存
		13-4	壺	-	-	6.2	"	"	"	小石粒多	"	淡茶褐色	茶褐色	黒褐色	1/6残存
13-5		壺A	-	-	6.4	"	"	"	"	"	茶褐色	黒褐色	茶褐色	1/5残存	
13-6		甕A I, a	18.8	18.4	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	小石粒少	"	明茶色	明茶色	淡赤褐色	底部大、埋設炉	
13-7		甕A II, c	12.8	-	-	"	"	"	"	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	1/6残存	
13-11		甕A	-	-	7.0	"	"	ナテ	小石粒	"	赤褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存	
13-12		甕A	-	-	7.3	"	"	不明	"	"	"	暗茶褐色	暗茶褐色	1/2残存	
13-13		甕A	-	-	6.2	"	"	不明	小石粒少	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存	
13-14		壺D, b	12.3	-	-	ヨコナテ、ハケ縦	ハケ横	ハケ横	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/6残存	
13-15		壺G, 2	10.4	-	-	ヨコナテ	ヨコナテ、ヘラミガキ横	ヨコナテ、ヘラミガキ横	小石粒、雲母	"	黄灰色	黄灰色	黒褐色	2/3残存	
13-16		甕D I, d	-	29.0	8.0	ハケ後ヘラミガキ縦	ハケ横	ナテ横・斜め	小石粒	"	黒褐色	茶褐色	茶褐色	底部残存	
13-17		壺H	9.1	-	4.9	ナテ横	ナテ横	ナテ横・斜め	"	"	黄褐色	淡茶色	淡茶色	2/3残存	

遺 構	図版No	器 形	法 量(cm)			手 法 上 の 特 徴			胎 土	焼 成	色			備 考
			口径	胴径	底径	器高	外 面	内 面			文 様	外 面	内 面	
16 住	13-18	壺G	-	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒	普通	濃黄灰色	黄灰色	黄灰色	底部残存
	13-19	甕B	-	-	12.2	-	ナア縦	ヘラミガキ縦	小石粒多	不良	淡茶色	褐	褐色	1/6残存
	13-20	甕D	-	-	5.0	-	ハケ	ハケ	"	普通	黒褐色	"	黒褐色	底部残存
	13-21	甕D	-	-	5.6	-	不明	不明	"	"	淡灰褐色	"	淡灰褐色	"
	13-22	甕D	-	-	5.0	-	ナア縦・横	ナア	小石粒少	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存
	14-1	甕D	17.2	-	-	-	不明	不明	小石粒多	不良	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/5残存
	14-2	甕D	10.0	-	-	-	ヨコナア	ヨコナア	小石粒多	普通	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	ほぼ完形
	14-3	高坏F ₁	17.4	-	15.0	14.6	ハケ横	ヨコナア、ナア斜め、横	小石粒少	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存
	14-4	高坏F ₁	14.7	-	-	-	ヨコナア、ヘラミガキ横	ヨコナア、ナア斜め、横	小石粒少	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	ほぼ完形
	14-5	高坏F ₁	-	-	12.5	-	ナア横	ナア	小石粒多	"	明茶色	明茶色	明茶色	1/3残存
	14-6	高坏F ₁	16.5	-	12.6	14.8	ヨコナア、ハケ後ナア	ヨコナア	小石粒	"	淡茶色	淡茶色	淡灰褐色	"
	14-7	高坏F ₁	18.3	-	12.8	12.4	ハケ後ナア縦、ヘラミガキ縦	ナア	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	ほぼ完形
	14-8	高坏F ₁	17.1	-	-	-	ヨコナア、ハケ縦	"	小石粒、雲母	"	明茶色	明茶色	明茶色	1/2残存
	14-9	高坏F ₂	-	-	12.5	-	ナア横、ハケ後ナア	シボリ、ハケ斜め	小石粒多	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	ほぼ完形
	14-10	高坏F ₁	15.1	-	10.2	10.9	ヨコナア、ヘラケズリ、ハケナア、ヘラケズリ	シボリ、ヨコナア	小石粒多	普通	淡茶色	淡茶色	淡茶色	"
	14-11	高坏G	19.6	-	15.1	16.3	ヨコナア、ナア	シボリ、ヨコナア、ナア	小石粒	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/4残存
14-12	高坏G	-	-	15.8	-	不明	ヨコナア	"	不良	"	"	"	脚部残存	
14-13	高坏F	-	-	-	-	ハケ横	ハケ横	"	普通	"	"	"	1/6残存	
14-14	高坏F ₁	15.2	-	-	-	ハケ横	ハケ横	"	"	"	"	"	脚部残存	
14-15	高坏F ₂	15.2	-	11.9	11.9	ヨコナア、ハケ縦、ナア	ヨコナア	"	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	ほぼ完形	
14-16	高坏F ₁	19.0	-	-	-	ハケ横	ハケ横	"	不良	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/2残存	
23 住	15-1	壺B ₂	15.4	-	-	-	ナア	ヘラケズリ後ナア	"	普通	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/3残存
	15-2	壺F ₅	11.0	13.8	-	-	ヘラミガキ	ナア横	小石粒多	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	底部欠
	15-3	壺G ₂	11.4	14.1	-	12.2	ナア横・縦	ナア横	小石粒、赤粒	良好	黒褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	完形
	15-4	壺	-	-	7.4	-	ハケ後ナア	ヘラミガキ横	"	普通	淡茶色	淡茶色	淡茶色	1/4残存
	15-5	壺F ₅	-	10.4	-	-	ハケ縦・斜め	ナア横	小石粒、雲母、赤粒	良好	明茶色	灰白色	灰白色	1/5残存
	15-6	鉢D ₂	13.2	13.8	-	-	ナア横	ハケ斜め	小石粒	普通	灰白色	黒	黒	1/4残存
	15-7	甕D I ₂ d	17.6	23.8	6.8	25.5	ハケ後ヘラミガキ	不明	小石粒多	不良	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/2残存
	15-8	甕D I ₂ b	16.0	-	-	-	ナア横	ナア横	"	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存
	15-9	甕D III ₂ b	10.0	11.3	4.4	11.8	ナア	ナア横・斜め	小石粒、雲母	"	黒褐色	暗褐色	暗褐色	胴部一部欠
	15-10	甕D	-	-	4.2	-	ナア縦	ナア横	小石粒	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存

遺 構	図版No	器 形	法			量(cm)			手法上の特徴			胎 土	焼 成	色			調 断		備 考
			口径	胴径	器高	外	内	面	文	機	外			内	面	外	内	面	
23	15-11	甕D	-	-	-	ナテ	ハケ斜め	ハケ斜め	ハケ斜め	ハケ斜め	ハケ斜め	精良	普通	茶褐色	暗褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	$\frac{2}{3}$ 残存	
住	15-12	甕D	-	-	-	"	ハケ横	ハケ横	ハケ横	ハケ横	小石粒多、雲母	"	"	黒	淡灰褐色	"	"	底部残存	
	15-13	甕D	-	-	-	ナテ縦	ナテ斜め	ナテ斜め	ナテ斜め	ナテ斜め	小石粒	"	"	暗茶褐色	黒	暗茶褐色	"	$\frac{1}{3}$ 残存	
	15-14	甕D	-	-	-	ヘラミガキ横斜め	ヘラ斜ズリ	ヘラ斜ズリ	ヘラ斜ズリ	ヘラ斜ズリ	"	"	"	黒	淡茶色	淡灰褐色	"	$\frac{1}{2}$ 残存	
	15-15	甕D	-	-	-	ナテ縦・横	ナテ	ナテ	ナテ	ナテ	"	"	"	黒	茶色	"	"	底部残存	
	15-16	甕B	-	-	-	ハケ後ナテ横	ナテ斜め	ナテ斜め	ナテ斜め	ナテ斜め	小石粒、雲母	"	"	赤褐色	褐	赤褐色	"	接合部残存	
	16-1	高環B ₅	15.8	-	11.8	ナテ後ヘラミガキ	ナテ後ヘラミガキ	ナテ後ヘラミガキ	ナテ後ヘラミガキ	ナテ後ヘラミガキ	"	"	"	明茶色	明茶色	淡灰褐色	"	ほぼ完形	
	16-2	高環B ₅	15.4	-	11.0	ハケ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ	小石粒	"	"	褐	茶褐色	淡褐色	"	"	
	16-3	高環B ₅	15.8	-	-	ハケ斜め	ハケ斜め	ハケ斜め	ハケ斜め	ハケ斜め	"	"	"	茶褐色	淡褐色	"	"	$\frac{1}{2}$ 残存	
	16-4	高環F ₁	18.0	-	11.8	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナテ	"	"	"	淡褐色	茶褐色	黄褐色	"	口縁 $\frac{1}{2}$ ・脚端部 $\frac{2}{3}$ 欠	
	16-5	高環F ₁	14.2	-	12.2	不明	不明	不明	不明	不明	小石粒少、雲母	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	"	環部 $\frac{1}{2}$ 欠	
	16-6	高環F ₁	16.6	-	-	"	"	"	"	"	"	"	"	淡褐色	淡灰褐色	淡褐色	"	環口縁部 $\frac{5}{6}$ 欠	
	16-7	高環F ₁	17.0	-	-	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナテ	小石粒少	"	"	明茶色	明茶色	淡明茶色	"	口縁部 $\frac{1}{4}$ ・環部残存	
	16-8	高環F ₁	15.2	-	-	ナテ	ナテ	ナテ	ナテ	ナテ	小石粒、雲母	"	"	淡褐色	"	淡褐色	"	口縁部 $\frac{1}{4}$ ・環部残存	
	16-9	高環F ₁	-	-	12.0	不明	シボリ後ナテ	シボリ後ナテ	シボリ後ナテ	シボリ後ナテ	小石粒	"	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	"	脚端部 $\frac{7}{8}$ 欠	
	16-10	高環F ₁	-	-	-	ヘラ斜ズリ後ナテ	ヘラ斜ズリ後ナテ	ヘラ斜ズリ後ナテ	ヘラ斜ズリ後ナテ	ヘラ斜ズリ後ナテ	小石粒少	"	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	"	脚端部残存	
	16-11	高環F ₁	-	-	13.2	"	"	"	"	"	小石粒、雲母	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	"	$\frac{1}{4}$ 残存	
	16-12	高環F ₁	17.2	-	-	ハケ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ	小石粒	"	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	"	環部ほぼ完形	
	16-13	高環F ₁	16.4	-	-	ヨコナテ、ナテ横	ヨコナテ、ナテ横	ヨコナテ、ナテ横	ヨコナテ、ナテ横	ヨコナテ、ナテ横	"	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	"	環部完形	
	16-14	高環F ₂	17.5	-	12.2	ナテ後ナテ	ナテ後ナテ	ナテ後ナテ	ナテ後ナテ	ナテ後ナテ	"	"	"	明茶色	明茶色	明茶色	"	ほぼ完形	
	16-15	高環F ₂	-	-	-	ナテ後ヘラミガキ縦	ナテ後ヘラミガキ縦	ナテ後ヘラミガキ縦	ナテ後ヘラミガキ縦	ナテ後ヘラミガキ縦	小石粒、赤粒、雲母	"	"	明茶色	明茶色	明茶色	"	脚部残存	
	17-1	高環F ₃	16.0	-	10.4	ハケ後ヘラミガキ、ナテ	ハケ後ヘラミガキ、ナテ	ハケ後ヘラミガキ、ナテ	ハケ後ヘラミガキ、ナテ	ハケ後ヘラミガキ、ナテ	小石粒、雲母	"	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	"	ほぼ完形	
	17-2	高環F ₃	14.8	-	11.3	"	"	"	"	"	"	"	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	"	"	
	17-3	高環F ₃	16.4	-	-	ハケ後ナテ	ハケ後ナテ	ハケ後ナテ	ハケ後ナテ	ハケ後ナテ	"	"	"	"	"	"	"	"	$\frac{1}{2}$ 残存
	17-4	高環F ₃	16.4	-	11.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	"	"	"	黄褐色	黄褐色	淡灰褐色	"	ほぼ完形	
	17-5	高環F ₃	16.0	-	10.4	ハケ後ナテ後ヘラミガキ	ハケ後ナテ後ヘラミガキ	ハケ後ナテ後ヘラミガキ	ハケ後ナテ後ヘラミガキ	ハケ後ナテ後ヘラミガキ	"	"	"	暗褐色	暗褐色	淡灰褐色	"	完形	
	17-6	高環F ₃	10.2	-	10.2	ハケ後一部ヘラミガキ	ハケ後一部ヘラミガキ	ハケ後一部ヘラミガキ	ハケ後一部ヘラミガキ	ハケ後一部ヘラミガキ	"	"	"	暗赤褐色	暗赤褐色	淡灰褐色	"	脚端部 $\frac{1}{2}$ 欠	
	17-7	高環F ₃	-	-	-	ヘラミガキ縦・横	ヘラミガキ縦・横	ヘラミガキ縦・横	ヘラミガキ縦・横	ヘラミガキ縦・横	"	"	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	"	脚部残存	
	17-8	高環F ₃	-	-	-	ヘラ斜ズリ後ナテ	ヘラ斜ズリ後ナテ	ヘラ斜ズリ後ナテ	ヘラ斜ズリ後ナテ	ヘラ斜ズリ後ナテ	小石粒	"	"	茶褐色	茶褐色	暗褐色	"	"	
	17-9	高環F ₄	23.2	-	-	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	小石粒、赤粒	"	"	黄褐色	黄褐色	淡灰褐色	"	$\frac{1}{4}$ 残存	
	17-10	高環G	-	-	-	ナテ横	ナテ横	ナテ横	ナテ横	ナテ横	"	"	"	黒褐色	黒褐色	淡赤褐色	"	環底部 $\frac{1}{2}$ 残存	

遺構	図版No	器形	法量(cm)		手法上の特徴			胎土	焼成	色調			備考	
			口径	胴径	器高	外面	内面			断面	外面	内面		断面
23 住	17-11	高坏G	-	-	-	ヨコナア、ナア	ヨコナア、ナア	小石粒少、雲母	普通	明褐色	明褐色	淡褐色	1/4残存	
	17-12	小壺D	7.1	8.5	7.3	ナア後ヘラミガキ	ヘラミガキ横	小石粒、雲母	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	完形	
	17-13	小丸C	-	7.6	-	ナア横	不明	小石粒、赤粒	"	褐色	赤褐色	赤褐色	胴部1/4残存	
	17-14	手づくね	-	-	-	ヘラケズリ	ナア	小石粒、雲母	"	暗褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	1/3残存	
	17-15	鉢D1	14.0	-	-	ヨコナア、ナア斜め	ヨコナア、ナア横	小石粒多、雲母	"	暗褐色	暗茶褐色	淡灰褐色	1/4残存	
	17-16	鉢D1	14.4	-	-	ヨコナア、ナア	ナア横	小石粒	"	黒色	黒色	黒色	口縁部1/2残存	
	17-17	鉢D2	9.9	10.3	5.7	ハケ後ヘラミガキ横斜め	ヘラケズリ斜め	小石粒少、雲母	"	淡灰褐色	淡茶褐色	灰褐色	ほぼ完形	
	17-18	鉢A3	10.0	9.4	-	ナア	ナア	小石粒多、雲母	普通	暗褐色	暗褐色	茶褐色	1/6残存	
	17-19	鉢A3	-	-	-	不明	不明	精良、雲母	不良	赤褐色	黒褐色	淡褐色	1/2残存	
	75	18-1	壺C3b	-	-	-	ヨコナア	ヨコナア	小石粒、赤粒	普通	黄灰色	黄灰色	淡黄灰色	1/5残存
	住	18-2	壺F3	5.8	-	-	ナア	ナア	小石粒少	良好	"	"	黒色	1/3残存
		18-3	壺F3	-	11.2	-	"	"	"	普通	"	"	淡灰褐色	胴部1/2~1/3残存
		18-4	壺	-	-	-	8.4	不明	小石粒、雲母	"	茶褐色	灰褐色	暗褐色	1/1残存
		18-5	壺	-	-	-	6.0	ヘラミガキ	小石粒、赤粒	"	"	"	明茶褐色	1/2残存
		18-6	壺	-	-	-	2.4	ナア横	小石粒少	"	淡褐色	灰褐色	黒色	1/2残存
		18-7	甕DII, b	11.8	14.2	-	ナア横	ナア横・斜め	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	淡灰褐色	1/4残存
		18-8	甕DII, d	12.0	14.6	-	ヘラミガキ縦・斜め	ヘラミガキ、ナア横	小石粒、雲母	"	暗褐色	暗褐色	暗茶褐色	1/4残存
		18-9	甕D	-	-	-	ナア横	不明	"	"	茶褐色	黒褐色	黒褐色	"
		18-10	甕D	-	-	-	不明	"	小石粒	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/2残存
18-11		甕D	-	-	-	ナア斜め	"	"	"	黒色	黒色	淡灰褐色	1/3残存	
18-12		甕B	17.0	-	-	ヨコナア、ヘラケズリ	ヨコナア後ヘラミガキ	小石粒、雲母	"	淡褐色	灰褐色	"	1/5残存	
18-13		高坏F1	17.4	-	-	ヨコナア、ハケ	ヨコナア	小石粒少、赤粒	"	黄灰色	灰褐色	灰褐色	坏口縁部1/3、底部4/5欠	
18-14		高坏F3	-	-	-	ヘラミガキ、ヨコナア	シボリ、ヨコナア	小石粒少	良好	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	脚端部1/2欠	
18-15		高坏F2	18.0	-	-	ヨコナア	ヨコナア	小石粒、赤粒	普通	赤褐色	暗褐色	淡灰褐色	1/5残存	
18-16		高坏F1	20.2	-	-	不明	不明	"	不良	淡黄灰色	淡黄灰色	淡黄灰色	1/2残存	
18-17		高坏F2	15.8	-	-	ヨコナア	ヨコナア	小石粒少	普通	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	口縁部7/8欠	
18-18		高坏F4	18.6	-	-	ナア	不明	小石粒	"	明褐色	黄褐色	黄褐色	脚端部1/8残存	
18-19		高坏F1	15.4	-	-	ヨコナア	ヨコナア	小石粒少、雲母、赤粒	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/4残存	
18-20		高坏F3	13.6	-	-	ナア後ヘラミガキ	ナア後ヘラミガキ	小石粒少	良好	明褐色	明褐色	明褐色	1/6残存	
18-21		鉢E3	12.0	-	-	"	ヘラミガキ横	精良、赤粒	"	明褐色	明褐色	明褐色	"	
18-22		甕	7.8	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	精良	普通	明褐色	明褐色	明褐色	1/12残存	

造 種	図版No	器 形	法			量(cm)			手 法 上 の 特 征			胎 土	焼 成	色			備 考
			口径	胴径	器高	口径	底径	器高	外	内	面			文	様	外	
75	18-23	罍	10.4	-	-	ヘラミガキ斜め	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ斜め	ヘラミガキ斜め	ヨコナア後ヘラミガキ	暗文	精良	良好	橙褐色	橙褐色	橙褐色	1/10残存
住	18-24	罍	6.8	-	-	ヨコナア後ヘラミガキ	ヘラミガキ縦	ヨコナア後ヘラミガキ	ヨコナア後ヘラミガキ	ナア横		小石粒少	普通	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/3残存
90	19-1	甗D1,d	15.8	24.8	6.0	ヘラミガキ縦、ヘラケ	ヘラミガキ縦、ヘラケ	ヘラミガキ縦、ヘラケ	ヘラミガキ縦、ヘラケ	ナア横		小石粒、雲母、赤粒	"	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/2残存
住	19-2	高坏F ₂	16.6	-	-	ヨコナア、ナア	ヨコナア、ナア	ヨコナア、ナア	ヨコナア、ナア	ヨコナア		小石粒、雲母	"	濃茶色	濃茶色	濃茶色	1/4残存
19-3	高坏F ₂	15.8	-	-	不明	不明	不明	不明	不明		"	"	"	濃茶色	濃茶色	濃茶色	1/7残存
19-4	高坏F ₂	13.0	-	-	ヨコナア後ヘラミガキ	ヨコナア後ヘラミガキ	ヨコナア後ヘラミガキ	ヨコナア後ヘラミガキ	ヨコナア後ヘラミガキ	ヘラミガキ縦	小石粒、雲母、赤粒	"	"	濃茶色	濃茶色	濃茶色	1/4残存
19-5	高坏F ₂	-	-	13.0	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	"	"	"	濃茶色	濃茶色	濃茶色	1/1-1/7残存
19-6	甗D1,a	17.0	-	-	ハケ縦、ヨコナア	ハケ縦、ヨコナア	ハケ縦、ヨコナア	ハケ縦、ヨコナア	ハケ縦、ヨコナア	ハケ横、ヨコナア	小石粒、赤粒	"	"	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	1/8残存
19-7	壺C ₂ b	18.0	-	-	ヘラミガキ斜め	ヘラミガキ斜め	ヘラミガキ斜め	ヘラミガキ斜め	ヘラミガキ斜め	ナア横後一部ヘラミガキ	小石粒、雲母	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存
19-8	手づくね	-	-	4.8	ナア縦	ナア縦	ナア縦	ナア縦	ナア縦	不明	小石粒、赤粒	不良	不良	"	"	"	底部残存
19-9	壺B ₂	18.8	25.8	-	ヘラミガキ横、斜め	ヘラミガキ横、斜め	ヘラミガキ横、斜め	ヘラミガキ横、斜め	ヘラミガキ横、斜め	ヨコナア	小石粒多、赤粒	普通	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	口縁部残存
20-9	甗A1,1	17.6	-	-	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	波状文	小石粒少	"	"	"	"	"	1/8残存
溝	20-17	壺C ₂ a	-	-	-	ヨコナア、ハケ縦	ヨコナア、ハケ縦	ヨコナア、ハケ縦	ヨコナア、ハケ縦	ヨコナア	小石粒、赤粒	"	"	橙褐色	橙褐色	橙褐色	1/4残存
12	20-18	壺F ₃ a	9.0	-	-	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	ヘラミガキ横、斜め	小石粒、赤粒	"	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/5残存
20-19	壺F ₂	8.4	-	-	不明	不明	不明	不明	不明	不明	"	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/9残存
20-20	壺F ₂	-	13.0	-	"	"	"	"	"	"	小石粒少	不良	不良	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1/2残存
20-21	壺	15.6	-	-	"	"	"	"	"	"	小石粒、赤粒	普通	普通	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/4残存
20-22	甗AIII,c	9.0	7.6	-	ナア横	ナア横	ナア横	ナア横	ナア横	ナア横	小石粒、雲母	良好	良好	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/5残存
20-23	甗A	-	-	7.0	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	小石粒、赤粒	普通	普通	黒褐色	黒褐色	黒褐色	胴部2/3欠
20-24	甗B	-	-	-	"	"	"	"	"	シボリ後ナア	小石粒、雲母	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	脚台部残存
20-25	甗B	-	-	7.4	ヘラケズリ後ヨコナア	ヘラケズリ後ヨコナア	ヘラケズリ後ヨコナア	ヘラケズリ後ヨコナア	ヘラケズリ後ヨコナア	ハケ縦	小石粒、赤粒	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存
20-26	甗B	-	-	7.0	不明	不明	不明	不明	不明	不明	小石粒、赤粒	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/6残存
20-27	甗DIII,a	10.2	11.2	-	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	不明	小石粒少	"	"	灰白色	灰白色	灰白色	1/2残存
20-28	甗H	11.0	-	-	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア、ヘラケズリ	小石粒、赤粒	"	"	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/2残存
20-29	壺A	-	-	8.0	不明	不明	不明	不明	不明	ハケ横、斜め	小石粒少、雲母	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存
21-1	甗B1,a	21.6	26.5	10.8	ハケ縦	ハケ縦	ハケ縦	ハケ縦	ハケ縦	ハケ	小石粒	"	"	濃茶褐色	濃茶褐色	濃茶褐色	完形
21-2	甗DII,a	15.2	15.4	5.6	ハケ斜め、縦	ハケ斜め、縦	ハケ斜め、縦	ハケ斜め、縦	ハケ斜め、縦	ナア横	小石粒、雲母	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	"
21-3	高坏B	-	-	13.6	不明	不明	不明	不明	不明	ヨコナア	小石粒少	"	"	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/5残存
21-4	高坏B	-	-	-	"	"	"	"	"	ナア、ヘラケズリ	小石粒	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	先端部欠
21-5	高坏B	-	-	-	"	"	"	"	"	不明	小石粒、雲母	"	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	"
21-6	高坏B	-	-	-	"	"	"	"	"	"	小石粒	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	わずかに尻、焼成後穿孔

遺構	凶版No	器形	法			手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考
			口径	胴径	器高	外面	内面	文様			外面	内面	断面	
溝	21-7	器台A _{3b}	9.6	-	9.2	ヘラミガキ縦・縦	ヘラミガキ		小石粒、雲母	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	器受部 $\frac{3}{4}$ 、脚部 $\frac{1}{2}$ 欠
12	21-8	鉢A ₃	9.0	-	5.7	ヨコナデ、ナデ横	ヨコナデ、ハケ横		小石粒、雲母、赤粒	"	"	"	完形	
	21-9	台付甕	-	-	-	ナデ	ナデ		小石粒、雲母	"	茶褐色	茶褐色	"	
	21-10	台付甕	-	-	-	"	"		小石粒少	"	暗褐色	暗褐色	脚端部 $\frac{1}{2}$ 欠、"	
	21-11	手づくね	5.3	-	4.6	不明	不明		小石粒少	"	淡茶褐色	淡茶褐色	"	
	21-12	手づくね	-	-	-	ナデ	"		小石粒、赤粒	"	茶褐色	明茶褐色	$\frac{1}{7}$ 残存	
溝	21-13	壺A I, b	23.0	-	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	剝刺突文、波状文	小石粒、雲母	不良	暗茶褐色	"	$\frac{1}{4}$ 残存	
14	21-14	壺A	-	-	9.6	ヘラミガキ縦・横	ナデ横		小石粒	普通	暗褐色	淡褐色	$\frac{3}{5}$ 残存	
	21-15	甕	-	-	5.0	ヨコナデ	ヨコナデ		小石粒、赤粒	"	茶褐色	茶褐色	底部残存	
	21-19	甕A	-	-	6.8	不明	"		小石粒、雲母、赤粒	"	暗茶褐色	"	$\frac{1}{4}$ 残存	
溝	22-5	甕A I, a	18.0	15.7	6.4	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	波状文、斜走短線文	小石粒、雲母	"	茶褐色	"	ほぼ完形	
土	23-1	高坏F ₁	16.8	-	-	不明	不明		小石粒	"	橙褐色	橙褐色	$\frac{1}{3}$ 残存	
坑	23-2	高坏F ₁	17.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ		小石粒少	良好	黄灰色	黄灰色	$\frac{1}{4}$ 残存	
8	23-3	高坏F ₁	-	-	12.2	"	シボリ後ヘラケズリ		"	"	濃黄灰色	濃黄灰色	脚端部 $\frac{3}{5}$ 欠	
	23-4	高坏F ₁	-	-	13.3	ナデ	不明		小石粒	普通	明茶褐色	黄灰色	脚端部 $\frac{3}{5}$ 欠、f6-7と接合	
	23-5	手づくね	-	-	3.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ縦		小石粒少、雲母	"	淡灰褐色	"	$\frac{1}{2}$ 残存	
	23-6	鉢D ₁	12.2	11.8	-	不明	ヘラミガキ横・縦		小石粒	"	明茶褐色	明茶褐色	$\frac{2}{3}$ 残存	
土 ¹⁹ 瓦	23-7	甕A I, c	17.6	18.4	7.8	ハケ、ヘラミガキ縦	ナデ、ヘラミガキ横		"	"	茶褐色	茶褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 、底部 $\frac{4}{5}$ 欠	
遺	24-7	高坏A	-	-	13.0	ヘラミガキ縦	ハケ横		精良	"	淡茶褐色	灰白色	$\frac{1}{6}$ 残存、TANAX47	
構	24-8	甕A I, c	16.6	-	-	ヨコナデ、ハケ横	"		小石粒少、雲母	良好	茶褐色	灰白色	"、100住	
外	24-10	甕D	-	-	6.4	ヘラミガキ横・縦	ハケ横斜め		小石粒、雲母	普通	暗茶褐色	暗灰褐色	底部残存、"	
	24-11	甕	15.0	-	-	ハケ縦	ナデ		小石粒	"	淡灰褐色	黒	$\frac{1}{5}$ 残存、KURBN49P1	
	24-12	甕B I, a	21.7	-	28.0	ハケ	ヘラミガキ横・縦		小石粒、雲母	"	黒褐色	暗茶褐色	ほぼ完形、KURAG49	
	24-13	甕B	-	-	9.0	ハケ後ナデ	ナデ後ナデ		"	"	暗茶褐色	茶褐色	脚上部残存、KURAM47	
	24-14	甕B(卍孔)	-	-	9.0	ハケ縦	ナデ		"	"	黒褐色	明褐色	脚端部 $\frac{1}{2}$ 欠、KURAX46	
	24-15	甕B	-	-	7.6	ナデ横	ハケ後ナデ		小石粒、雲母、赤粒	"	黄灰色	黄灰色	脚端部 $\frac{5}{6}$ 欠、KURAY51	
	24-16	甕C	-	-	-	ハケ縦	ヘラミガキ		小石粒	"	淡灰褐色	黒	$\frac{1}{5}$ 残存、67住	
	24-17	器台A _{3a}	-	-	-	ヨコナデ後ヘラミガキ	ヨコナデ		小石粒少	"	褐	灰白色	接合部残、KURBJ47	
	25-1	高坏B	-	-	-	ヘラミガキ縦	ハケ横		小石粒少	"	灰白色	灰白色	$\frac{1}{3}$ 残存、67住	
	25-2	高坏B	-	-	-	不明	不明		小石粒	"	橙褐色	淡灰褐色	脚部残存、KURBN48	
	25-3	高坏B	-	-	-	"	"		"	不良	黄褐色	黄褐色	接合部残、KURBI50	

遺構	図版No	器形	法		手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考	
			口径	胴径	口径	底径	器高			外面	内面	断面		
遺構外	25-4	高坏B	-	-	ナテ横、ヘラミガキ縦	ナテ	ナテ	小石粒、赤粒	普通	黄灰色	濃黄灰色	灰黄色	接合部残存、6I住	
	25-5	皿	9.2	-	ヨコナテ後ヘラミガキ	ヨコナテ	ヨコナテ後ヘラミガキ	"	良好	橙褐色	灰褐色	灰黑色	$\frac{1}{6}$ 残存、57住	
	25-6	皿	10.4	-	"	"	"	小石粒	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	$\frac{1}{7}$ 残存、"	
	25-7	壺F	9.3	-	ナテ、ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	"	普通	濃茶色	濃茶色	濃茶色	$\frac{1}{4}$ 残存、26住	
	25-8	壺G ₂	9.0	10.4	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	"	"	黄灰色	淡黄灰色	淡黄灰色	$\frac{1}{2}$ 残存、"	
	25-9	高坏F ₁	19.4	-	ヨコナテ	ナテ	ナテ	"	不良	淡褐色	淡褐色	淡褐色	口縁部 $\frac{7}{8}$ 欠、KURCL46	
	25-10	鉢D ₂	11.9	-	ヨコナテ、ヘラケスリ	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	"	普通	赤褐色	赤褐色	赤褐色	$\frac{1}{5}$ 残存、26住	

第22表 GOA 弥生時代中期土器観察表

遺構	図版No	器形	法		手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考	
			口径	胴径	口径	底径	器高			外面	内面	断面		
遺構帯	63-29	高坏	-	-	ナテ	ナテ	ナテ	小石粒	良好	暗茶灰色	暗茶灰色	灰黑色	接合部残、AI46	
	63-30	鉢	30.0	-	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	小石粒少	"	暗赤色	灰褐色	灰褐色	$\frac{1}{11}$ 残存、AF49	
	63-31	鉢	17.4	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	"	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	$\frac{1}{10}$ 残存、AF51	
	63-32	壺D	6.4	-	ナテ横	ナテ横	ナテ横	小石粒	普通	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	$\frac{1}{6}$ 残存、AJ45	
	63-33	壺A ₁	-	-	ナテ縦	ナテ	ナテ	"	"	黒褐色	暗褐色	暗褐色	胴部残存、AI45	
	63-34	壺A ₁	12.4	-	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	小石粒、雲母	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{8}$ 残存、AI44	
	64-1	壺A _{2a}	-	-	ナテ	"	"	小石粒、赤粒	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	$\frac{1}{4}$ 残存、G2	
	64-2	壺A _{2b}	12.8	-	ナテ横	ナテ横	ナテ横	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{2}$ 残存、AJ46	
	64-3	壺	11.8	-	"	"	"	小石粒、雲母	"	灰黑色	灰黑色	暗灰色	$\frac{1}{3}$ 残存、"、東海系	
	64-4	壺	-	6.4	"	刺落	刺落	小石粒	"	黒色	暗茶褐色	暗茶褐色	底部残存、AG52	
	64-5	壺	-	7.8	"	ナテ横	ナテ横	"	"	"	黄灰色	灰褐色	"、AI45	
	64-6	壺	-	9.4	"	刺落	刺落	小石粒、赤粒	"	暗灰褐色	茶褐色	茶褐色	底部 $\frac{1}{2}$ 残存、AF49	
	64-7	壺	-	7.0	"	ナテ横・斜め	ナテ横・斜め	小石粒	"	黒色	"	茶褐色	底部残存、AI45	
	64-8	壺	-	7.4	ヨコナテ	刺落	刺落	小石粒	"	黒褐色	"	茶褐色	"、G2	
	65-6	壺A ₁	23.0	20.6	"	ヨコナテ	ヨコナテ	小石粒、雲母	"	暗茶褐色	"	"	$\frac{1}{3}$ 残存、G10	
	遺構	60-17	壺A ₂	16.0	15.9	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナテ	ヨコナテ、ナテ横	小石粒少	"	灰褐色	黒色	灰褐色	$\frac{1}{8}$ 残存
		2												

遺構	図版No	器形	法量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色調			備考
			口径	胴径	底径	器高	外面	内面			断面	外面	内面	
溝	60-18	甕A ₃	17.0	-	-	-	不明	へらミガキ横 ナデ	小石粒少、赤粒 小石粒少	普通	透黄灰色 暗赤色	暗褐色 橙褐色	黄灰色 橙褐色	1/6 残存 接合部残存
2	60-28	高坏	-	-	-	-	へらミガキ	不明	小石粒少	"	暗赤色	橙褐色	橙褐色	

第23表 GOA 弥生時代後期から古墳時代前期土器観察表

遺構	図版No	器形	法量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色調			備考
			口径	胴径	底径	器高	外面	内面			断面	外面	内面	
住	1 47-1	甕A _{1,b}	20.0	21.2	-	-	へらミガキ縦 ナデ	不明 ナデ	小石粒	普通	茶褐色 褐色	灰褐色 褐色	茶褐色 褐色	胴部残存、埋設炉 底部残存、埋設あり
住	2 47-3	甕A _{1,2}	19.8	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	"	"	透黄灰色	透黄灰色	透黄灰色	1/8 残存
	47-4	甕A _{1,a}	20.0	-	-	-	"	ヨコナデ後へらミガキ横	小石粒、雲母	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3 残存
	47-5	甕C _{1,a}	16.8	-	-	-	ハケ縦	へらミガキ横	小石粒	"	暗赤褐色	黒褐色	黒褐色	1/12 残存
	47-6	甕	-	-	9.0	-	へらミガキ縦	ヨコナデ	小石粒、赤粒	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/2 残存
	47-7	甕A _{1,b}	19.2	20.0	-	-	"	へらミガキ横	小石粒少	普通	明茶褐色	褐色	"	胴部残存、埋設炉
住	3 47-8	甕E ₃	17.0	-	-	-	ハケ斜め	ヨコナデ	"	"	茶褐色	明茶褐色	"	1/2 残存
	47-9	甕D _{1,b}	19.6	-	-	-	ハケ縦、横後ヨコナデ	"	小石粒	"	黄灰色	黄灰色	黄色	1/5 残存
	47-10	甕D ₃	14.6	-	-	-	ヨコナデ	"	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/9 残存
	47-11	甕	-	-	5.0	-	不明	ナデ	小石粒多	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	底部残存
	47-12	小丸B	8.8	7.0	-	-	ハケ縦	ハケ縦	小石粒少	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1/8 残存
	47-13	器台A _{1,a}	7.0	-	-	-	へらミガキ縦	へらミガキ縦	小石粒	"	明茶色	明茶色	明茶色	1/4 残存
	47-14	器台A ₁	8.0	-	-	-	ヨコナデ後へらミガキ斜め	へらミガキ横	"	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	1/8 残存
	47-15	小甕C	6.6	9.0	3.2	10.5	ハケ後へらミガキ斜め	ハケ	"	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	胴部1/2 欠
48-1	甕B _{1,2}	13.4	18.4	-	-	ハケ斜め	へらケズリ後へらミガキ	ナデ横	小石粒少	普通	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/6 残存
48-2	甕B _{1,a}	17.2	18.0	-	-	ハケ縦	ナデ横	不明	小石粒	"	黒褐色	褐色	褐色	1/3 残存
48-3	甕A	-	-	7.4	-	へらミガキ縦	不明	へらミガキ横	小石粒、雲母	"	灰黒色	黒褐色	茶褐色	底部残存
48-4	甕A	-	-	6.8	-	"	不明	ハケ縦	小石粒	"	灰黒色	黒褐色	茶褐色	1/2 残存
48-5	甕G ₁	-	-	4.3	-	タタキ後ハケ横	不明	ハケ縦	小石粒	良好	淡灰褐色	黒褐色	淡灰褐色	底部残存
48-6	高坏B ₃	20.0	-	-	-	へらミガキ縦	不明	へらミガキ縦	小石粒少	普通	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/2 残存
48-7	高坏B	-	-	13.0	-	"	不明	シボリ、ハケ横	"	普通	淡黄灰色	淡黄灰色	淡黄灰色	2/3 残存

遺構	図版No	器形	法			量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色			調断面	備考
			口径	胴径	器高	外径	内径	面	文	模様	外			内	面	外		
3	48-8	高坏B	-	-	-	12.0	-	-	ヘラミガキ縦	ハケ横、ヨコナア	小石粒少	普通	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/3 残存	
住	48-9	壺D ₁ a	21.6	-	-	-	-	-	ハケ横	ヨコナア	小石粒	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/3 残存	
	48-10	壺D ₃	12.4	-	-	-	-	-	ヨコナア	"	小石粒、赤粒	"	黄褐色	"	黄褐色	黄褐色	1/3 残存	
	48-11	壺	-	22.0	-	7.0	-	-	ハケ後ヘラミガキ	ハケ	小石粒	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/3 残存	
	48-12	壺F ₁	8.3	13.3	7.2	3.5	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒、雲母	"	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	完形	
	48-13	壺F ₃ b	6.6	-	-	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/4 残存	
	49-1	壺	-	-	-	10.6	-	-	ナデ	ハケ横	"	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1/2 残存	
	49-2	壺A	-	-	-	7.8	-	-	ハケ斜め	ハケ	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	底部残存	
	49-3	壺	-	-	-	4.4	-	-	ハケ	"	"	"	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	1/3 残存	
	49-4	壺	-	-	-	7.8	-	-	ナデ	ナア	"	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1/2 残存	
	49-5	壺	-	-	-	6.2	-	-	ハケ	ハケ横	小石粒少	"	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	1/3 残存	
	49-6	壺	-	-	-	6.6	-	-	不明	"	小石粒、雲母	"	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/2 残存	
	49-7	甕C ₃ b	13.0	18.0	18.3	7.6	18.3	-	ハケ	ハケ	小石粒	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1/2 残存	
	49-8	甕BII ₂	15.0	18.3	20.2	8.3	20.2	-	"	ハケ縦	小石粒	"	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/2 残存	
	49-9	甕DII ₁ b	12.6	13.8	-	-	-	-	ナデ筒、斜め	ハケ縦	小石粒、雲母	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	1/5 残存	
	49-10	甕BII ₂	13.2	17.8	-	-	-	-	ハケ筒	ハケ斜め	小石粒、赤粒、雲母	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/4 残存	
	49-11	甕DII ₁ b	13.8	-	-	-	-	-	ハケ後ナデ	ヘラケズリ	小石粒	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	1/2 残存	
	49-12	甕BII ₁ a	13.4	-	-	-	-	-	ハケ斜め・横	ハケ斜め	小石粒	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/2 残存	
	49-13	甕A	-	-	-	6.0	-	-	ヘラミガキ	ハケ横	小石粒少	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	1/5 残存	
	49-14	甕D	-	-	-	5.0	-	-	ハケ	ハケ	小石粒	"	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/4 残存	
	49-15	甕D	-	-	-	4.4	-	-	ハケ斜め	ハケ	"	"	灰黒色	灰黒色	灰黒色	灰黒色	1/2 残存	
	49-16	壺	-	-	-	5.4	-	-	ナデ	ナア	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	"	
	49-17	甕B	-	-	-	5.4	-	-	ヨコナア	ハケ斜め	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	底部残存	
	49-18	甕B	-	-	-	10.4	-	-	ハケ	ヨコナア	"	"	濃黄褐色	濃黄褐色	濃黄褐色	濃黄褐色	1/2 残存	
	49-19	甕	13.2	-	-	5.3	-	-	不明	ハケ後ナデ	小石粒、雲母	不良	"	"	"	"	完形	
	49-20	甕	13.4	-	-	4.9	-	-	ハケ	ハケ	小石粒少、雲母	"	"	"	"	"	"	
	50-1	小壺A	5.6	8.8	9.0	5.2	9.0	-	ナデ横	ヘラミガキ縦	小石粒少	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	ほぼ完形、焼成後穿孔	
	50-2	小壺B	-	10.3	3.6	-	-	-	ヘラミガキ斜め・縦	ヘラミガキ縦	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	口縁端部欠	
	50-3	壺H	9.8	-	-	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ斜め	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/4 残存	
	50-4	小壺	-	-	-	3.9	-	-	ナデ	ヘラミガキ横	"	"	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	1/2 残存	
	50-5	高坏B ₁	13.0	-	-	10.4	9.5	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ、ハケヨコ	"	不良	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	ほぼ完形	

遺構	図版No	器形	法			手法上の特徴			胎土	焼成	調断面			備考
			口径	胴径	底径	器高	外面	内面			断面	外面	内面	
4	50-6	器台A _{1a}	5.4	-	-	-	不明	小石粒少、雲母	良好	暗褐色	暗褐色	褐色	1/5 残存	
	50-7	器台A _{1a}	-	-	-	-	ヘラミガキ縦	精良	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/4 残存	
	50-8	高坏E	-	-	16.6	-	ヨコナデ	小石粒、雲母	普通	"	"	"	1/8 残存	
	50-9	鉢A ₃	10.0	-	3.2	6.9	ハケ斜め	小石粒少	"	"	茶褐色	茶褐色	完形	
	50-10	鉢A ₁	11.8	-	-	-	ナデ	小石粒少、雲母	"	"	茶褐色	茶褐色	1/5 残存	
	50-11	鉢A ₁	10.2	-	-	-	ヘラミガキ縦	小石粒少	"	"	灰褐色	淡黄灰色	1/5 残存	
	50-12	甕D _{1b}	17.0	-	-	-	ハケ斜め	"	"	"	茶色	茶色	1/4 残存	
	50-13	甕F ₁	-	11.2	4.3	-	ヘラミガキ縦	小石粒、雲母、赤粒	良好	"	黄灰色	明赤褐色	口縁部欠、再利用	
	50-14	甕C _{2b}	13.8	-	-	-	ハケ横、斜め	小石粒、赤粒	普通	"	灰白色	灰色	1/4 残存	
	50-15	甕C _{2a}	19.0	-	-	-	ハケ斜め	小石粒、雲母	"	"	淡灰褐色	黒色	口縁部1/8、胴部1/4 残存	
	50-16	甕B	-	-	8.4	-	"	不明	"	"	褐色	赤褐色	2/3 残存	
50-17	甕B	-	-	9.6	-	ナデ	小石粒、雲母、赤粒	"	"	黄灰色	黄灰色	胴上部残存		
50-18	甕	-	-	5.4	-	ナデ	小石粒	"	"	黒色	暗褐色	1/4 残存		
50-19	甕D	-	-	4.6	-	ヘラケズリ	"	"	"	"	"	"		
50-20	甕F	13.2	14.9	-	-	ナデ	ヘラミガキ横	"	"	暗褐色	黒褐色	"		
50-21	甕F	12.6	-	-	-	ハケ斜め	不明	"	"	暗褐色	褐色	1/2 残存		
50-22	甕A	-	-	5.6	-	ヘラミガキ	ハケ	小石粒、赤粒	"	黒色	茶褐色	1/5 残存		
50-23	甕A	-	-	4.8	-	"	不明	小石粒	"	黄灰色	黄灰色	1/3 残存		
51-1	高坏B ₂	20.0	-	11.6	13.9	"	不明	小石粒	"	明茶色	明茶色	1/4 残存		
51-2	高坏B ₂	21.8	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	"	"	淡黄灰色	黒色	胴部2/4、坏部1/6 残存		
51-3	高坏B	-	-	13.0	-	ハケ	ヨコナデ	"	"	淡黄灰色	黄灰色	1/4 残存		
51-4	高坏B	-	-	10.4	-	不明	ハケ横	小石粒、雲母	"	淡黄灰色	黄褐色	胴部残存		
51-5	高坏C	17.8	-	14.4	13.5	ヘラミガキ縦	ハケ横、シボリ	小石粒少、雲母	"	灰褐色	"	"		
51-6	器台Aa	-	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒	"	淡黄灰色	淡黄灰色	坏部2/3、脚部残存		
51-7	小台甕	5.0	6.3	3.2	8.4	ヘラミガキ縦	ナデ	小石粒	"	淡黄灰色	明褐色	接合部残存		
51-8	小台甕	-	-	3.6	-	ナデ	ナデ横	"	"	淡黄灰色	淡褐色	完形		
51-9	鉢A ₁	9.0	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒、雲母	"	淡黄灰色	淡褐色	脚部残存		
51-10	鉢A ₂	11.8	-	4.4	5.8	ハケ後、ナデ	ナデ斜め	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	1/7 残存		
51-11	甕	-	-	3.0	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒少	"	淡赤褐色	黄灰色	口縁部1/2 欠		
51-12	甕	-	-	4.0	-	ヨコナデ	ヘラミガキ縦	小石粒	"	黄灰色	"	底部残存		
51-13	甕A _{1a}	26.6	-	-	-	ヨコナデ	ヘラミガキ横	"	"	褐色	褐色	1/8 残存		

遺構	図版No	器形	法量(cm)		手法上の特徴			胎土	焼成	色調			備考
			口径	胴径	器高	外面	内面			断面	外面	内面	
6	51-15	甗A _{II,c}	12.2	-	-	ヘラミガキ縦	波状文	小石粒	不良	明褐色	明褐色	明褐色	1/2残存
	51-16	甗A _I	-	21.2	-	"	"	"	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	胴部残存、埋設炉
	51-17	甗A _{I,b}	17.4	-	-	ヘラミガキ	"	小石粒少	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/5残存
	51-18	甗A	-	-	6.2	不明	"	小石粒	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	1/4残存
	51-19	甗A	-	-	6.4	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ後ハケ	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	底部残存
	51-20	甗A	-	-	7.4	ヘラミガキ	"	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/2残存
	51-21	甗A	-	-	9.4	ナデ横	不明	"	不良	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/6残存
	51-22	高坏B	-	-	12.2	ヘラミガキ縦	ナデ横	"	普通	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/2残存
	52-1	甗F ₄	7.6	-	-	ヘラミガキ縦	ナデ縦	"	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1/4残存
	52-2	甗H	9.0	-	-	ナデ縦	ナデ横	"	"	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	1/4残存
	52-3	鉢C	9.8	-	-	ナデ横	"	小石粒、雲母	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存
	52-4	甗	-	4.2	-	不明	"	小石粒少	不良	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	1/2残存
52-5	甗A _{II,c}	15.2	15.6	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/6残存	
52-6	甗G ₁	-	19.6	-	タタキ後ハケ	ハケ斜め	小石粒	"	黒	黒	黒	1/6残存	
52-7	甗G ₁	13.2	15.2	-	"	"	"	"	"	"	"	1/4残存	
52-8	甗G ₁	14.4	14.4	-	"	"	小石粒少	"	"	"	"	"	
52-9	甗B	-	8.6	-	ハケ縦	"	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/2残存	
52-10	甗G ₁	-	4.4	-	タタキ	ハケ	小石粒	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	"	
52-11	器台Aa	-	-	10.0	ヘラミガキ縦	ヘラケズリ、ヘラミガキ縦	小石粒、雲母	普通	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	脚部残存	
52-12	高坏B	-	-	11.4	"	ハケ横、ヨコナデ	小石粒	不良	"	"	"	2/3残存	
52-13	高坏B	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	"	普通	暗褐色	暗褐色	暗褐色	接合部残存	
8	52-14	甗C ₁	20.3	-	-	ヨコナデ後ヘラミガキ縦	ヨコナデ後ヘラミガキ縦	小石粒、雲母	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	1/3残存
	52-15	甗E ₁	12.6	-	-	ハケ縦	ヨコナデ	小石粒多	不良	淡黄灰色	淡黄灰色	淡黄灰色	1/6残存
	52-16	高坏B	12.2	-	-	ヘラミガキ	"	小石粒	普通	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1/4残存
	52-17	高坏B ₁	20.0	10.6	13.5	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦、ハケ横	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	坏部1/4脚部残存
	53-1	甗B _{I,b}	18.8	22.8	-	ハケ横縦	ハケ横	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存
	53-2	甗B	13.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	"	"	黒	黒	黒	1/4残存
	53-3	甗B	-	-	-	ナデ横	ナデ横	小石粒少	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/4残存
	53-4	壺	-	4.6	-	ヘラミガキ縦	ナデ	小石粒	"	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	1/2残存
	53-5	手づくね	6.0	2.4	3.7	"	ナデ	小石粒少	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	1/3残存
	53-6	小甗C	6.8	7.2	9.2	ヘラミガキ	ヘラミガキ縦	小石粒、赤粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/5残存
				4.4									口縁~脚部1/3欠

遺構	図版No	器形	法量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色			調断面	備考
			口径	胴径	底径	器高	外	内			面	外	内		
8住	53-7	器台A ₁	8.2	-	-	-	ヘラミガキ斜め	機	小石粒、雲母	普通	明茶色	明茶色	赤褐色	1/2残存	
9住	53-8	壺A I b	18.2	19.0	-	-	ハケ横、ヘラミガキ縦	機	小石粒	"	茶褐色	淡褐色	茶褐色	1/6残存	
住	53-9	壺A I c	17.4	-	-	-	ヘラミガキ縦	機	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/4残存	
住	53-10	壺	-	-	7.4	-	不明	機	"	"	明茶褐色	淡褐色	"		
10住	53-11	壺A I c	15.4	-	-	-	ハケ横・縦	機	"	"	黒茶色	茶色	茶色	1/9残存	
住	53-12	壺B	-	-	10.6	-	ハケ横後ヘラミガキ縦	機	"	"	茶色	"	"	脚台部残存	
溝	54-1	壺A I ₂	19.2	-	-	-	ヘラミガキ縦	機	小石粒、雲母、赤粒	"	茶褐色	黄灰色	黄灰色	口縁部残存	
1下層	54-2	壺A I	-	23.2	-	-	ナア斜め	機	小石粒少	"	"	茶褐色	茶褐色	1/3残存	
	54-6	壺B ₂	16.6	-	-	-	不明	機	小石粒少	"	赤褐色	赤褐色	1/5残存		
	54-7	壺C _{1a}	-	14.1	3.6	-	ヘラミガキ縦	機	小石粒	"	黄灰色	灰白色	口縁部欠		
	54-9	壺D _{1b}	9.0	-	-	-	ヨコナテ、ナア斜め	機	小石粒少	"	灰	淡灰色	1/3残存		
	54-10	壺F ₂	11.8	-	-	-	ヘラミガキ縦	機	小石粒	不良	淡灰褐色	淡灰褐色	口縁部残存		
	54-11	壺E ₁	14.0	-	-	-	ハケ横、ナア	機	小石粒、雲母	普通	濃黄灰色	茶褐色	1/3残存		
	54-12	壺I _{1b}	13.6	14.2	4.6	11.6	ヘラケズリ後ヘラミガキ	機	小石粒、赤粒	"	茶褐色	茶褐色	1/3残存		
	54-13	壺I _{1a}	14.6	15.6	-	-	ヘラミガキ	機	小石粒	"	黒	"	1/4残存		
	54-14	壺I _{1b}	-	12.0	4.0	-	ナア横	機	小石粒少	"	"	"	1/2残存		
	55-1	壺	-	-	7.1	-	ナア	機	"	"	黄灰色	淡灰褐色	底部残存		
	55-2	壺	-	-	7.2	-	"	機	小石粒、雲母	"	褐色	茶色	"		
	55-3	壺	-	-	5.0	-	ナア後ヘラミガキ縦	機	小石粒	"	明茶色	淡茶色	"		
	55-4	壺	-	-	4.6	-	ナア	機	小石粒多	不良	淡褐色	黒色	"		
	55-5	壺	-	-	4.3	-	ナア、ヘラミガキ	機	小石粒、雲母	普通	"	茶色	灰白色	2/3残存	
	55-6	壺	-	-	3.8	-	ナア、ヘラミガキ縦	機	"	"	淡灰褐色	灰	1/8残存		
	55-7	壺A I ₂ c	15.0	16.6	-	-	ヨコナテ、ヘラミガキ縦	機	小石粒少、赤粒	"	灰茶褐色	灰茶褐色	1/7残存		
	55-8	壺A I ₂ c	16.0	-	-	-	ナア横	機	"	"	淡黄灰色	黄灰色	1/6残存		
	55-9	壺A I ₂ c	14.6	-	-	-	"	機	"	"	暗褐色	茶褐色	1/6残存		
	55-10	壺A	-	-	7.2	-	ヘラミガキ縦	機	"	"	茶褐色	茶褐色	1/2残存		
	55-11	壺A	-	-	7.4	-	"	機	小石粒、赤粒	良好	黒	淡茶色	胴部2/4欠		
	55-12	壺A I	-	-	-	5.4	ナア後ヘラミガキ縦	機	小石粒	普通	淡茶色	淡茶色	口縁部1/2欠		
	55-13	壺A III ₂ c	9.2	9.4	5.6	10.4	ナア、ヘラミガキ縦	機	小石粒少、赤粒	"	茶褐色	茶褐色	1/3残存		
	55-14	壺A III ₂ c	9.4	-	-	-	ナア	機	小石粒多	"	黒	暗茶褐色	口縁部欠		
	55-15	壺A III ₂ c	-	10.0	4.8	-	ヘラミガキ縦	機	小石粒、雲母	"	暗茶褐色	淡灰褐色	口縁部欠		

造 構	図版No	器 形	法 量(cm)		手 法 上 の 特 徴			胎 土	焼 成	色			調		備 考
			口径	胴径	底径	器高	外 面			内 面	文	内 面	断 面	外 面	
溝 1 下 層	55-16	甕BI _{1a}	15.2	17.2	-	-	ハケ縦	ナア	ナア	普通	暗 灰 色	暗 灰 色	灰 色	灰 色	口縁部 $\frac{3}{4}$ ・胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
	55-17	甕BI _{2a}	13.2	19.4	-	-	ハケ横	ハケ後ナア	"	"	黒 褐 色	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	$\frac{1}{3}$ 残存
	55-18	甕B	-	-	8.0	-	ナア	ハケ横	ハケ横	"	"	黒 褐 色	黒 褐 色	淡 茶 色	脚部 $\frac{1}{5}$ 残存
	55-19	甕B	-	-	8.4	-	"	ナア	ハケ横	"	"	褐 色	灰 褐 色	灰 白 色	$\frac{1}{2}$ 残存
	55-20	甕B	-	-	7.0	-	"	ハケ横	ハケ横	"	"	灰 褐 色	灰 褐 色	灰 白 色	脚部残存
	56-1	小台甕	-	10.0	-	-	不明	ハケ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ	不良	"	黄 褐 色	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	脚部残存
	56-2	甕B	-	-	8.6	-	ハケ後ヘラミガキ	ナア、ハケ横	ナア、ハケ横	"	"	淡 茶 色	淡 茶 色	"	脚部残存
	56-3	甕B	-	-	9.0	-	ナア	ハケ後ナア	ハケ後ナア	"	"	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	"	$\frac{1}{3}$ 残存
	56-4	甕B	-	-	7.4	-	ハケ斜め	ナア	ナア	普通	"	褐 色	褐 色	褐 色	脚部残存
	56-5	甕B	-	-	7.0	-	"	"	"	"	"	灰 褐 色	灰 褐 色	灰 褐 色	$\frac{1}{2}$ 残存
	56-6	甕B	-	-	8.0	-	ハケ、ヘラケズリ縦	ハケ斜め	ハケ斜め	"	"	暗 褐 色	暗 褐 色	"	"
	56-7	甕B	-	-	8.6	-	ナア	ナア	ナア	"	"	褐 色	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	脚部残存
	56-8	甕B	-	-	8.2	-	ハケ後ナア	ハケ後ナア	ハケ後ナア	"	"	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	$\frac{1}{4}$ 残存
	56-9	甕C _{1a}	-	-	12.0	-	ハケ横・斜め	ハケ横、ナア	ハケ横、ナア	"	"	黒 色	黒 色	黒 色	$\frac{1}{4}$ 残存
	56-10	甕C _{1b}	-	-	9.2	-	"	ハケ横	ハケ横	"	"	茶 褐 色	茶 褐 色	茶 褐 色	$\frac{1}{5}$ 残存
	56-11	甕C _{2b}	-	-	14.6	-	"	ナア	ナア	不良	"	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	$\frac{1}{3}$ 残存
	56-12	甕C	-	-	-	-	ハケ縦	"	"	"	"	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	接合部残存
	56-13	甕C	-	-	9.0	-	ナア斜め	ナア斜め	ナア斜め	"	"	灰 白 色	灰 白 色	灰 白 色	$\frac{1}{4}$ 残存
	56-14	甕D _{1a}	-	-	18.4	25.4	ハケ横	ナア横、ハケ横	ナア横、ハケ横	普通	"	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	$\frac{1}{4}$ 残存
	56-15	甕D _{1b}	-	-	16.4	-	ナア	ナア	ナア	"	"	黄 灰 色	黄 灰 色	黄 灰 色	口縁~胴部残存
	56-16	甕D ₁	-	-	17.2	-	"	ナア	ナア	"	"	茶 褐 色	茶 褐 色	茶 褐 色	$\frac{1}{3}$ 残存
	56-17	甕DII _{1b}	-	-	11.8	-	ナア縦	ナア横	ナア横	"	"	黒 色	茶 色	茶 色	$\frac{1}{4}$ 残存
	56-18	甕DII _{1b}	-	-	14.0	-	ナア	ナア	ナア	"	"	黄 灰 色	黄 灰 色	黄 灰 色	$\frac{1}{3}$ 残存
	56-19	甕D _{2a}	-	-	13.2	-	ハケ縦	ヘラミガキ	ヘラミガキ	"	"	黄 灰 色	淡 黄 褐 色	淡 黄 褐 色	$\frac{1}{4}$ 残存
	57-1	甕DII _{1b}	-	-	13.4	13.2	ナア	ハケ縦	ハケ縦	"	"	褐 色	黒 褐 色	淡 灰 褐 色	完形
	57-2	甕D _{2b}	-	-	5.8	-	"	ハケ斜め	ハケ斜め	"	"	灰 褐 色	灰 褐 色	灰 褐 色	底部残存
	57-3	甕D	-	-	5.2	-	"	ヘラミガキ	ヘラミガキ	"	"	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	"
57-4	甕D	-	-	5.4	-	"	ナア	ナア	"	"	黒 色	灰 褐 色	灰 褐 色	$\frac{1}{2}$ 残存	
57-5	甕D	-	-	3.6	-	"	"	"	"	"	灰 黒 色	灰 褐 色	灰 褐 色	底部残存	
57-6	甕D	-	-	6.4	-	"	"	"	不良	"	茶 色	淡 灰 褐 色	淡 灰 褐 色	$\frac{2}{3}$ 残存	
57-7	甕D	-	-	5.3	-	ハケ斜め	"	"	普通	"	淡 茶 色	淡 茶 色	淡 茶 色	底部残存	

遺構	図版No	器形	法 量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色			調		備考
			口径	胴径	底径	器高	外	内			面	文	機	外面	内面	
溝 1 下 層	57-8	甕D	-	-	3.8	-	ハケ縦	ナデ	小石粒、雲母	普通	灰褐色	濃黄灰色	淡灰褐色	淡灰褐色	底部残存	
	57-9	甕D	-	-	4.0	ナデ	"	"	小石粒	"	"	灰褐色	灰褐色	"		
	57-10	甕D	-	-	5.8	"	"	"	小石粒少	"	"	淡灰褐色	淡灰褐色	"		
	57-11	鉢A	-	-	4.6	"	"	"	小石粒、雲母	"	"	茶褐色	茶褐色	"		
	57-12	甕D	-	-	5.8	ハケ後ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒、雲母	"	"	褐色	茶褐色	淡灰褐色	"	
	57-13	甕D	-	-	5.6	"	"	"	小石粒	"	"	暗赤褐色	褐色	"		
	57-14	甕D	-	-	3.4	ナデ	"	ナデ	小石粒多	良好	茶褐色	黒褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存	
	57-15	甕D	-	-	7.4	ハケ縦・斜め	"	"	小石粒	普通	黒	淡茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	底部残存	
	57-16	甕D	-	-	5.2	ナデ	"	"	小石粒	"	"	淡茶褐色	淡茶褐色	茶褐色	1/2残存	
	57-17	甕H	14.0	-	-	ハケ縦後ナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラケズリ	小石粒、雲母	"	"	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	茶褐色	1/4残存
	57-18	甕H	10.4	-	-	ヨコナデ	"	"	小石粒	"	"	淡茶褐色	淡茶褐色	茶褐色	"	
	57-19	甕H	13.8	20.4	-	ハケ斜め	"	"	小石粒少、雲母	不良	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/8残存、補磨系	
	57-20	甕	15.0	-	-	"	"	指頭痕、ハケ横	"	普通	茶	茶	茶	茶	1/2残存	
	57-21	鉢D ₁	14.6	-	3.4	ハケ縦	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ斜め	小石粒	"	"	濃黄灰色	濃黄灰色	灰白色	3/2残存	
	57-22	鉢A ₂	10.4	-	3.5	ヘラミガキ斜め	ハケ斜め、ヘラケズリ	ハケ斜め、ヘラケズリ	小石粒少	"	"	淡茶褐色	淡茶褐色	灰白色	2/2残存	
	57-23	鉢A ₁	9.2	-	3.4	ナデ	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	小石粒少、雲母	"	"	淡灰褐色	濃黄灰色	灰白色	口縁部7/8欠	
	57-24	鉢A ₁	-	-	2.8	"	"	ナデ	小石粒	"	"	黄灰色	赤褐色	黄灰色	1/3残存	
	57-25	小壺	-	-	3.8	"	"	"	精良	"	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	底部残存	
	57-26	高坏B ₁	9.5	-	7.2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒少	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	ほぼ完形	
57-27	器台A ₁ b	9.2	-	-	"	"	"	小石粒	"	"	淡黄灰色	淡黄灰色	黄灰色	器上部残存		
57-28	器台A	-	-	-	ヘラミガキ縦	ハケ横	ハケ横	小石粒少	"	"	暗茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	接合部残存		
57-29	器台A	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒少	"	"	淡黄灰色	淡黄灰色	灰白色	"		
58-1	高坏B ₂	24.4	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	精良	不良	"	黄灰色	黄灰色	淡灰褐色	1/3残存		
58-2	高坏	15.0	-	-	"	"	ヘラミガキ	小石粒少	"	"	赤褐色	赤褐色	"	"		
58-3	高坏B	-	-	12.0	"	ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	精良、雲母	良好	"	暗茶褐色	暗茶褐色	灰褐色	脚端部1/5欠		
58-4	高坏E	-	-	16.2	"	ヘラミガキ、シボリ、ハケ	ヘラミガキ、シボリ、ハケ	"	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/8残存		
58-5	高坏B	-	-	-	"	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒少	普通	"	淡灰褐色	淡灰褐色	灰褐色	接合部残存		
58-6	高坏B	-	-	-	"	ナデ	ナデ	小石粒少、雲母	"	"	灰褐色	灰褐色	"	"		
58-7	高坏E	-	-	-	"	シボリ	シボリ	小石粒少	"	"	淡黄灰色	淡黄灰色	淡黄灰色	"		
58-8	高坏E ₁ b	10.4	-	-	"	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒少、赤粒	"	"	"	淡茶褐色	淡茶褐色	1/5残存		
58-9	高坏E	-	-	14.2	不明	ハケ横	ハケ横	精良	不良	"	淡赤褐色	淡赤褐色	"	坏部欠		

遺構	図版No.	器形	法			手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考
			口径	胴径	底径	器高	外面	内面			断面	外面	内面	
溝 上層	58-10	甕D ₁ a	14.4	13.5	5.4	21.6	ナデ後、ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	ほぼ完形、古墳後期
	58-11	高坏	16.0	-	-	-	ヘラミガキ縦	"	精良、赤粒	"	黄灰色	黄灰色	"	
	58-12	高坏	-	-	-	-	"	ヘラケズリ	小石粒	不良	淡黄灰色	淡黄灰色	"	
	59-4	甕D ₁ a	11.8	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	小石粒、雲母	普通	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/2残存
	59-5	甕F ₂	8.4	-	-	-	ヨコナデ、シポリ	"	小石粒	"	"	"	"	1/6残存
	59-6	甕E ₂	15.2	-	-	-	ハケ縦	ハケ横	小石粒、雲母	"	暗茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/6残存
	59-7	甕	-	-	6.2	-	不明	ハケ縦	"	"	茶褐色	"	"	底部残存
	59-8	甕	-	-	6.8	-	ナデ	ハケ後ナデ	小石粒	"	黄灰色	灰色	灰色	1/2残存
	59-9	甕AII ₂ c	12.8	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	精良	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	1/8残存
	59-10	甕AII ₂ c	13.4	-	-	-	不明	ヘラミガキ横	小石粒、赤粒	普通	淡赤褐色	黒褐色	黒褐色	"
	59-11	甕B	-	-	7.4	-	ハケ後ナデ横	ハケ横、ナデ横	小石粒	"	明茶褐色	黄茶褐色	茶褐色	1/4残存
	59-12	甕B	-	-	5.4	-	ナデ	ナデ	小石粒	"	黄茶褐色	黄茶褐色	茶褐色	2/3残存
59-13	甕D	15.2	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	小石粒少	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/2残存	
59-14	鉢D ₂	10.4	11.4	-	9.0	ナデ、ヘラケズリ	ヘラミガキ横	小石粒、雲母、赤粒	"	暗茶褐色	黒褐色	黒褐色	2/3残存	
59-15	器台A ₄	8.6	-	-	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	小石粒少、雲母	"	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/8残存	
59-16	器台A ₁	8.2	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヨコナデ	小石粒少	"	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/4残存	
59-17	器台Aa	10.0	-	-	-	"	不明	小石粒	"	黒褐色	黒褐色	暗茶褐色	接合部残存	
59-18	鉢A ₃	-	-	-	-	ナデ横	ナデ横	小石粒少	"	黄灰色	黄灰色	淡黄灰色	1/8残存	
59-19	鉢A ₃	-	-	3.6	-	不明	不明	小石粒	"	黄灰色	赤褐色	濃黄灰色	底部残存	
59-20	鉢	-	-	3.4	-	ナデ	ハケ後ナデ	小石粒少	"	濃黄灰色	褐色	淡褐色	"	
59-21	高坏B	-	-	-	-	ハケ後ヘラミガキ縦	ヨコナデ	小石粒、雲母	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	接合部残存	
59-22	高坏E ₁ a	-	-	21.4	-	ヘラミガキ縦	シポリ	小石粒少、雲母	良好	茶褐色	茶褐色	淡茶褐色	1/6残存	
59-23	鉢E ₁	16.6	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1/8残存	
溝	59-24	甕A ₁	17.0	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	小石粒、雲母、赤粒	普通	暗褐色	暗褐色	茶褐色	1/7残存
2	59-25	甕B ₂	16.6	-	-	-	ハケ縦	不明	小石粒	"	濃黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/6残存
上層	59-26	甕	-	-	4.2	-	ナデ	ヨコナデ	小石粒少、雲母	"	"	灰黒色	灰黒色	2/4残存
60-1	甕E ₁	19.6	-	-	-	不明	不明	小石粒	"	黄灰色	褐色	淡黄褐色	1/6残存	
60-2	甕D ₁ b	12.4	-	-	-	ヨコナデ後ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	小石粒少、赤粒	良好	明茶褐色	明茶褐色	黄褐色	1/5残存	
60-3	鉢D ₂	10.4	-	-	-	不明	不明	小石粒	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存	
60-4	鉢	10.8	-	-	-	"	"	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/4残存、内面黒色、古墳後期	
60-5	高坏	-	-	10.4	-	ヘラミガキ縦	ヘラケズリ後ナデ	小石粒、赤粒	"	赤褐色	黄褐色	黄褐色	脚部 ³ / ₄ 大	

遺構	図版No	器形	法			手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考
			口径	胴径	器高	外	内	面			文	様	断面	
溝2上層	60-6	高坏	-	-	-	不明	ヘラケズリ、ヨコナア		小石粒	普通	黄灰色	灰褐色	黒色	脚部残存
	60-7	高坏	-	-	12.2	不明	不明		"	"	黄褐色	灰褐色	黄色	1/2残存
	60-8	高坏	-	-	12.8	シボリ、ヘラケズリ	不明		小石粒少	"	淡黄灰色	明黄灰色	灰褐色	1/4残存
	60-9	坏	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横		小石粒、赤粒	"	暗茶褐色	黒色	明茶褐色	1/7残存、内面黒色
	60-10	坏	-	-	-	ヘラミガキ縦	不明		小石粒、雲母	良好	青灰色	青灰色	茶褐色	1/8残存
	60-11	須恵器坏	-	-	9.8	ロクロナア、ヘラケズリ	ロクロナア		小石粒少、黒粒	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存、奈良
A区包含層	61-1	壺AII ₂	16.0	-	-	ヨコナア、ナア斜め	ナア横	寛明突文、波状文、縞線文	小石粒少、赤粒	良好	暗灰褐色	"	茶褐色	1/4残存
	61-2	壺AII ₂	14.0	20.6	-	ハケ縦、ヘラミガキ	ナア横、ハケ縦	"	小石粒、雲母	"	暗灰褐色	暗赤色	灰褐色	"
	61-3	壺B ₁ b	12.0	-	-	ヨコナア	ヘラミガキ横	巴縞文、棒状浮文、脚羽状刺突文、丹彩	精良、赤粒	"	淡赤褐色	淡黄褐色	青灰色	胴部1/5、底部残存
	61-4	壺B ₁ c	15.2	27.2	30.0	ハケ後ヘラミガキ	ハケ横・斜め	脚羽状刺突文、縞線文、丹彩	精良	普通	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/6残存
	61-5	壺D ₂	12.6	-	-	ヨコナア	ヨコナア	波状文、藍灰点文、丹彩	小石粒、雲母	"	褐色	褐色	"	1/4残存
	61-6	壺F ₃ b	8.2	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横		小石粒、赤粒	"	黄灰色	黄灰色	灰褐色	底部残存
	61-7	甗D	-	-	6.4	ハケ斜め	ハケ後ナア		小石粒	"	暗灰褐色	灰褐色	灰褐色	"
	61-8	壺	-	-	5.6	ナア	ハケ横、斜め		"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	"
	61-9	壺	-	-	4.4	"	ナア		小石粒、雲母	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	"
	61-10	壺	-	-	4.6	ヘラミガキ縦	ハケ後ナア		小石粒	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	"
	61-11	壺	-	-	6.8	ハケ後ナア	ハケ縦・横		小石粒、赤粒	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	"
	61-12	壺	-	-	7.0	ナア	ナア		小石粒、雲母	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	"
61-13	壺	-	-	5.8	ハケ斜め後ナア	ハケ斜め後ナア	竹管文、縞線文、波状文、丹彩	小石粒、赤粒	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	胴部3/4	
62-1	壺C ₁ a	20.6	25.0	7.2	ハケ後ヘラミガキ	ハケ斜め		小石粒少	"	淡黄灰色	淡黄灰色	灰白色	胴~底部3/4	
62-2	壺C ₂ b	-	25.0	7.4	ヘラミガキ横・縦	ハケ横、ナア横		小石粒	"	黄褐色	黄褐色	灰白色	胴部2/3、大	
62-3	壺	-	-	7.8	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦・斜め		小石粒	"	黒褐色	黒褐色	暗灰褐色	頸部、底部残存	
62-4	甗B	-	-	9.2	ハケ縦	ハケ横		"	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	底部2/3残存	
62-5	甗DIII ₁ a	9.8	8.4	10.4	ハケ縦、斜め	"		小石粒、赤粒	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	口縁部1/6、胴部1/4残存	
62-6	甗DII ₂ b	11.2	13.0	14.0	タタキ後ヘラミガキ縦	ナア横・斜め		小石粒、赤粒	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	底部1/3、口縁~胴部1/5残存	
62-7	甗D	-	-	6.2	ナア横	ナア横		小石粒、雲母	"	黒褐色	黒褐色	濃茶褐色	底部残存	
62-8	甗D	-	-	6.4	ハケ縦後ナア横	ナア横		小石粒	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/2残存	
62-9	壺	-	-	11.0	ハケ後ヘラミガキ縦	ハケ後一部ナア		小石粒	"	灰褐色	灰褐色	茶褐色	口縁部1/4残存	
62-10	高坏B ₃	20.0	-	-	ヘラミガキ縦・斜め	ヘラミガキ縦		小石粒少	良好	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1/10残存	
62-11	高坏B	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラケズリ		小石粒	普通	灰茶褐色	灰茶褐色	淡灰褐色	脚部残存	
62-12	器台A	-	-	-	ヘラケ後ナア	ハケ後ナア		"	"	黄灰色	黄灰色	淡黄灰色	"	

遺構	図版No	器形	法		手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考
			口径	胴径	外径	内面	断面			外面	内面	断面	
A区全層	62-13	器台A ₂	9.6	-	ヨコナア、ヘラミガキ縦	ヘラケズリ	丹彩	小石粒	良好	暗赤色	暗赤色	淡灰褐色	器受部 $\frac{1}{5}$ 接合部残存
	62-14	鉢A ₃	7.0	-	不明	不明	丹彩	"	普通	黄褐色	黄褐色	$\frac{1}{2}$ 残存	
	65-26	壺A1a	18.0	-	ヨコナア	ナア横	壺割文、波線文、高線文	小石粒、赤粒	"	茶褐色	明茶色	明茶色	$\frac{1}{2}$ 残存、G2
	65-27	壺	-	22.9	ナア	ナア		小石粒	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	底部残存、AI45
	66-1	壺E ₁	17.0	-	ヨコナア	ヨコナア		小石粒少	良好	淡褐色	茶褐色	淡褐色	口縁部残存、AI50
	66-2	壺	-	5.6	ヘラミガキ縦	ナア		小石粒	"	暗褐色	茶赤褐色	茶褐色	$\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{5}$ 残存、AI48
	66-4	壺F ₁	6.8	-	"	ヘラミガキ横	丹彩	小石粒、赤粒	"	黄灰色	黄灰色	淡黄灰色	口縁部残存、AE52
	66-5	壺Ia	11.2	10.2	ヨコナア、ヘラミガキ	ヘラミガキ横、ヨコナア	丹彩	小石粒、雲母、赤粒	普通	暗赤色	暗赤色	淡灰褐色	$\frac{1}{8}$ 残存、G10
	66-6	小丸C	-	7.8	ナア横、斜め	ナア横、ハケ縦		小石粒	"	褐色	赤褐色	褐色	底~胴部残存、AJ45
	66-7	手づくね	-	2.8	ナア	ナア		精良	良好	黒色	灰黒色	淡灰褐色	$\frac{2}{3}$ 残存、AH53
66-8	壺	-	3.4	ヘラミガキ横、斜め	ナア横、斜め		小石粒	普通	"	暗茶灰色	灰黒色	$\frac{2}{4}$ 残存、AJ45	
66-9	高坏	-	-	ハケ縦	ナア横、ハケ横、斜め		小石粒少	"	淡茶灰色	淡茶灰色	淡灰褐色	胴部残存、AF49	
66-10	高坏	-	18.8	ヘラミガキ縦	ヨコナア、ハケ斜め		"	良好	濃茶色	濃茶色	濃茶色	$\frac{1}{10}$ 残存、AH46	

第24表 GOB 弥生時代中期土器観察表

遺構	図版No	器形	法		手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考
			口径	胴径	外径	内面	断面			外面	内面	断面	
住	8	壺A _{2a}	14.4	-	ヨコナア	ヨコナア	I C ₁ 、II B ₁ 、III C ₂	小石粒	普通	茶褐色	茶褐色	濃茶色	口縁~頸部残存
	78-5	壺Eb	10.8	15.0	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	IC ₁ 、丹彩	"	"	暗赤色	灰黒色	灰黒色	底部欠
	78-6	壺C ₁	12.4	-	ヘラミガキ縦	"	丹彩	小石粒、精良	"	暗赤色	暗赤色	茶褐色	$\frac{1}{10}$ 残存
	78-7	壺C	-	8.2	ヘラミガキ横	ナア横	V ₄ 、丹彩	小石粒	"	"	黒色	灰白色	底部残存
	78-8	手づくね	-	4.9	"	"	丹彩	小石粒少	良好	赤茶色	暗赤色	"	口縁部欠
	78-9	鉢Cb	14.4	-	"	ヘラミガキ横	IC ₁ 、丹彩	小石粒、赤粒	"	暗赤色	暗赤色	赤褐色	$\frac{1}{8}$ 残存
	78-10	手づくね	-	4.8	ナア	ナア	V ₄	小石粒	"	明茶色	明茶色	明茶色	$\frac{1}{6}$ 残存
	78-11	壺C	23.6	-	ヨコナア、ハケ縦	ヘラミガキ横	I B ₄ 、II A ₁ 、III C ₂ 、IV F ₂	小石粒、雲母	普通	淡褐色	淡褐色	淡灰褐色	$\frac{1}{7}$ 残存
	78-12	壺C	15.2	-	ヨコナア	"	I B ₁ 、II A ₆ 、III C ₃	"	良好	黒褐色	黒褐色	灰白色	$\frac{1}{6}$ 残存
	78-24	壺	-	5.2	ヘラミガキ	ナア横	V ₄	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	底部残存
9 住	79-1	壺A _{2a}	15.4	-	ハケ縦	ヨコナア、ナアヨコ	I C ₁ 、II B ₁ 、III A ₁ 、IV A ₂	小石粒、赤粒	普通	"	茶褐色	茶褐色	$\frac{3}{4}$ 残存

遺構	図版No	器形	法 量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考
			口径	胴径	器高	外面	内面	文様			外面	内面	断面	
17 住	79-2	壺A _{2a}	-	39.2	-	ハケ横	ハケ横	IV A ₄	小石粒、雲母	普通	淡褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存
	79-3	壺A ₂	17.7	17.6	-	ハケ後ヘラミガキ横 ナ子横・斜め	ハケ後ヘラミガキ横	IC ₁ 、III C ₂ 、IV F ₃ V ₄	小石粒	"	黒褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	底部欠
	79-6	壺	-	-	8.6	ナ子横・斜め	ナ子横・斜め	V ₄	小石粒多、雲母、赤粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存
25 住	80-1	壺A ₁	-	-	-	ナ子斜め	ナ子横	IV C ₄	小石粒	"	"	茶褐色	茶褐色	胴部残存、埋設炉
	80-3	壺B	18.8	22.4	-	ヨコナ子	ハケ横、ナ子横	IA、III C ₂ 、IV F ₄	"	"	赤褐色	茶褐色	茶褐色	3/4残存
	80-4	壺A ₂	16.6	16.8	22.3	ハケ	ヨコナ子	IA、III C ₂ 、IV F ₃ 、V ₄	小石粒多	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	1/3残存
34 住	80-11	壺	-	-	10.1	"	ナ子	V ₁	小石粒	"	淡褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存
	80-12	壺	-	-	7.2	ナ子	不明	V ₃	"	"	暗褐色	黒褐色	黒褐色	1/5残存
	80-16	壺	-	-	8.6	ナ子	ナ子	V ₄	"	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1/7残存
35 住	81-1	壺A ₁	-	33.3	-	ハケ横	剥落	IV C ₄	小石粒	"	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	1/2残存
	81-2	壺A ₁	-	37.0	-	ハケ斜め	"	IV C ₄ 、IV C ₂ 、IV F ₇ 、IV A ₅	"	"	明褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存、埋設炉
	81-3	壺A _{2a}	15.4	-	-	ヨコナ子、ハケ縦・斜め	ヨコナ子、ハケ縦・斜め	IC ₁ 、II B ₂ 、III A ₅	小石粒、赤粒	"	淡褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	"
81-4	壺A ₁	-	-	-	ナ子	ナ子	III C ₂ 、IV D ₂	小石粒	"	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	頸~胴部残存
	81-5	壺A _{2b}	23.8	-	-	不明	ナ子横・斜め	IC ₁	小石粒、雲母、赤粒	不良	黄灰色	明茶褐色	明茶褐色	口縁~頸部残存
	81-7	壺D	-	10.8	-	ナ子横	ヨコナ子	IV C ₅	"	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存
82-1	壺A ₁	25.0	23.0	-	ヨコナ子	ヨコナ子	IA、III C ₂ 、IV F ₂	小石粒	"	"	茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	口縁部 5/6、胴部 1/2欠
	82-2	壺A ₁	21.4	19.9	-	"	ヨコナ子、ナ子横・斜め	IC ₁ 、II B ₂ 、III C ₂ 、IV F ₅	小石粒、雲母	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	口縁部 1/2、胴部 2/2残存
	82-5	壺	-	-	7.6	ナ子縦	ナ子横	V ₄	"	"	褐褐色	褐褐色	褐褐色	2/4残存
82-6	壺	-	-	6.2	ナ子横	ナ子横	"	小石粒、雲母、赤粒	"	"	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	底部残存
	82-7	壺	-	-	7.0	"	"	"	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	1/3残存
	82-9	鉢A ₁	14.7	-	15.1	"	ナ子、ハケ横	IA、V ₄	小石粒	"	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	口縁部~胴部 1/3欠
83-1	壺A ₁	21.5	20.7	9.8	"	ナ子横	ナ子横	IA、III C ₂ 、IV F ₇ 、V ₄	"	"	暗茶褐色	茶褐色	茶褐色	口縁部 5/6、胴部 1/2残存
	83-1	壺A ₂	-	13.6	6.8	ヘラミガキ横・縦	不明	III C ₂ 、IV F ₈ 、V ₄	小石粒少	"	茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	口縁部欠、丹の容器
	83-7	壺	-	-	9.2	ナ子	ナ子	V ₄	小石粒	"	淡褐色	黒褐色	黒褐色	2/3残存
83-8	壺	-	-	4.7	"	"	"	"	"	良好	褐褐色	茶褐色	茶褐色	底部残存
	83-9	鉢B	13.2	11.7	-	ヨコナ子	ヨコナ子	IC ₂	"	不良	灰褐色	黄灰色	黄灰色	1/7残存
	83-10	鉢C	14.9	-	-	ナ子横	ナ子横	IC ₁	小石粒、雲母	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/11残存
46 住	83-11	壺A ₂	21.2	22.5	-	ナ子横・斜め	ナ子横・斜め	IC ₁ 、IV F ₂	小石粒	"	褐褐色	"	"	1/2残存、埋設炉?
	83-12	壺B	21.0	22.8	-	ナ子横	ナ子横	IA、IV F ₄	"	"	褐褐色	"	"	2/3残存
	84-1	壺A ₁	-	-	-	"	剥落	IV C ₂ 、IV F ₇	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	3/4残存、埋設炉
47 住	84-5	壺C ₂	14.2	-	-	ヘラミガキ横・縦	ナ子	IB ₂ 、IV F ₇	小石粒、雲母	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	"

遺構	図版No	器形	法		手法上の特徴			胎土	焼成	色			調断面	備考	
			口径	胴径	器高	外	内			面	文	外			内
47	84-6	壺C	-	19.8	-	ヘラミガキ横・縦	ナア	丹彩	普通	暗赤色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存	
	84-20	甕	-	6.6	-	ナア	"	V ₄	"	茶褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/4残存	
	84-21	甕	-	6.8	-	"	"	V ₁	"	灰黒色	暗茶色	暗茶色	暗茶色	1/2残存	
	84-22	甕	-	4.2	-	"	ハケ	V ₄	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	底部残存	
50	85-1	壺	-	8.1	-	ナア横、ヘラケズリ縦	ナア	V ₁	不良	淡黄灰色	淡黄灰色	淡黄灰色	淡黄灰色	1/3残存	
	85-2	壺	-	9.6	-	不明	剥落	V ₄	"	青灰褐色	青灰褐色	青灰褐色	青灰褐色	"	
	85-5	壺D	-	8.2	-	ヘラミガキ縦、ナア横	ナア横	普通	普通	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	"	
	85-6	壺A ₃ b	9.1	-	-	ヨコナア	ヨコナア	IC ₁	"	淡褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	"	
	85-14	壺	-	8.2	-	ナア横・縦	ナア横	V ₄	"	褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	底部残存	
7	85-15	壺	-	7.0	-	ナア	剥落	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	"	
	85-16	壺	-	8.8	-	"	"	"	不良	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	"	
	85-17	甕	-	6.8	-	ナア横	ナア横	"	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存	
	85-18	壺	-	10.4	-	ヘラミガキ縦	"	"	普通	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	1/4残存	
	85-19	壺	-	7.7	-	ナア横	"	"	"	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	1/4残存	
	85-20	壺	-	7.4	-	ナア	剥落	V ₁	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	底部残存	
	85-21	壺	-	11.0	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存	
	85-22	鉢D	-	6.0	-	ナア	ナア	V ₄ 、丹彩	"	暗赤色	暗赤色	暗赤色	暗赤色	1/4残存	
	86-1	甕A ₂	19.2	19.8	-	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア、ナア横	IA、III C ₃ 、IV F ₄	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	底部残存
	86-2	甕A ₂	16.5	16.1	-	ハケ横、ヘラミガキ縦	ハケ横、ヘラミガキ縦	IC ₁	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	1/4残存	
	86-3	甕A ₂	19.6	20.5	-	ハケ後ナア、ナア横	ハケ後ナア	IC ₂	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/4残存	
	86-4	甕B	20.4	22.6	-	ヨコナア	ヨコナア	IA、III C ₃ 、IV F ₄	"	黒	黒褐色	黒褐色	黒褐色	底部欠	
86-5	甕	14.6	-	-	ナア	ナア	IA	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	1/4残存		
86-15	甕	-	9.0	-	ナア斜め	ナア斜め	V ₄	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/6残存		
86-16	甕	-	6.6	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ	"	"	褐	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/4残存		
86-17	甕	-	6.5	-	ナア横	ナア	V ₁	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	2/2残存		
86-18	甕	-	7.7	-	ハケ縦	ハケ	"	普通	淡褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/3残存		
86-19	甕	-	-	-	ナア	ナア	V ₂	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	"	
87-1	鉢B	8.8	-	-	"	"	IC ₁	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/8残存	
87-2	手づくね	-	4.2	-	"	"	V ₄	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	底部残存	
87-3	鉢Cb	15.4	-	-	"	"	IC ₁	"	良好	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	1/10残存	
87-4	甕	-	6.3	-	"	剥落	V ₄	普通	普通	黒	黒	黒	黒	1/2残存	

遺構	図版No	器形	法		手法上の特徴			胎	土	焼成	色			備
			口径	胴径	器高	外	内				面	文	様	
27 住	100-6	壺	-	-	-	ナ子縦				普通	褐色	暗茶褐色	黒色	底部残存
	100-7	甕A	13.4	-	-	ヨコナテ				"	"	淡褐色	1/10残存	
	100-9	甕	-	-	-	ナテ横				"	"	"	1/4残存	
	100-10	甕	-	-	-	"				"	"	暗褐色	底部残存	
	100-11	甕	-	-	-	ヘラミガキ縦				"	"	黒色	1/2残存	
溝	121-1	壺A ₁	12.4	-	-	ヨコナテ					"	茶褐色	1/3残存	
	121-2	壺A ₁	15.0	-	-	"				"	"	赤褐色	1/8残存	
	121-3	壺A ₁	-	-	-	ナテ				"	"	赤褐色	1/3残存	
	121-4	壺B _{1a}	15.6	-	-	ハケ横				"	"	暗褐色	1/3残存	
	121-10	鉢	-	-	-	ナ子縦・横				"	"	暗褐色	1/3残存	
	121-11	壺	-	-	-	ナテ横・縦				"	"	黒色	底部残存	
	121-12	壺	-	-	-	ナテ横				"	"	茶褐色	1/2残存	
	121-13	壺	-	-	-	ナテ横・縦				"	"	暗茶褐色	1/2残存	
	121-14	壺	-	-	-	ナテ横・横				"	"	濃茶褐色	1/4残存	
	121-15	鉢A ₂	17.4	-	-	ナテ					"	淡灰褐色	1/7残存	
	121-16	甕C	23.8	-	-	ハケ横					"	暗褐色	1/3残存	
	122-7	壺	-	-	-	ナテ横・斜め					"	黒褐色	底部残存	
	122-8	甕	-	-	-	ハケ縦後ナテ横					"	黒褐色	1/1残存	
	122-9	甕	-	-	-	ヘラミガキ縦					"	淡褐色	1/2残存	
	122-10	甕	-	-	-	ナテ縦・横					"	茶褐色	1/2残存	
122-11	壺	-	-	-	ナテ横					"	暗赤褐色	1/3残存		
										良好	暗茶褐色	濃茶褐色	1/2残存	

第25表 GOB 弥生時代後期から古墳時代前期土器観察表

遺構	図版No	器形	法		手法上の特徴			胎	土	焼成	色			備
			口径	胴径	器高	外	内				面	文	様	
2 住	87-9	壺E ₁	13.0	-	-	ハケ斜め				不良	淡灰褐色	淡灰褐色	1/3残存	
	87-10	壺	-	-	-	ヘラミガキ				普通	橙褐色	橙褐色	1/2残存	
	87-11	壺	-	-	-	ヘラミガキ縦				"	褐色	淡褐色	1/3残存	

造 構	図版No	器 形	法			量(cm)			手法上の特徴			胎 土	焼 成	色			調 断面	備 考
			口径	胴径	器高	口径	底径	器高	外	内	面			文	様	外		
2	87-12	甕A	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	小石粒	普通	茶褐色	濃茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/5残存			
	87-13	甕A	-	-	-	ハケ横・斜め	ハケ横・斜め、ナア	ハケ横・斜め、ナア	小石粒少	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	"			
	87-14	甕BII,a	14.0	-	-	ハケ縦	ヨコナア	ヨコナア	小石粒少	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	1/7残存			
	87-15	甕B	-	-	-	ハケ縦・横	ナア	ナア	小石粒多	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/5残存			
	87-16	甕C,c	14.0	-	-	ヘラミガキ縦	不明	不明	小石粒少	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	1/5残存			
	87-17	高环B ₁	20.4	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	"	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	"			
	87-18	高环B ₂	19.6	-	-	ヨコナア・ヘラミガキ縦	ヨコナア	ヨコナア	小石粒、赤粒	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/3残存			
	87-19	器台A ₃ a	7.8	-	-	ヘラミガキ横・斜め	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒多	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存			
	87-20	鉢A ₁	10.8	-	5.0	ヘラミガキ横・斜め	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒多	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/5残存			
	87-21	鉢A ₁	9.0	-	3.6	ヘラミガキ横	ナア	ナア	小石粒少	"	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	"			
	87-22	小台甕	7.0	7.0	-	ハケ	ナア	ナア	小石粒少	"	"	褐色	褐色	褐色	1/5残存			
	87-23	手づくね	-	-	4.0	ナア	ナア	ナア	小石粒	"	"	褐色	褐色	褐色	底部残存			
	4	88-1	壺E ₂	16.0	-	-	ハケ縦	ハケ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ	小石粒、雲母	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/4残存		
88-2		甕D ₁ a	19.4	-	-	"	ヨコナア	ヨコナア	精良	"	"	濃黄褐色	濃黄褐色	濃黄褐色	"			
88-3		甕F ₂	10.4	-	-	ハケ後ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	小石粒	不良	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/3残存				
88-4		甕G ₁	13.0	12.0	-	ヘラミガキ縦・斜め	ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラケズリ後ヘラミガキ	小石粒	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/4残存			
88-5		甕A	-	-	6.4	ヘラケズリ縦	ナア横	ナア横	小石粒少	良好	淡褐色	淡褐色	淡褐色	"				
88-6		甕B	-	-	9.3	ハケ縦	ヘラケズリ	ヘラケズリ	小石粒、雲母	普通	暗褐色	暗褐色	暗褐色	脚台部 ⁴ / ₅ 欠				
88-7		甕DII,c	13.9	17.7	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	小石粒	不良	黄褐色	黄褐色	黄褐色	脚部 ¹ / ₂ 欠				
88-8		甕D ₁ b	13.8	-	-	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	"	"	褐色	褐色	褐色	脚部 ¹ / ₄ 欠				
88-9		鉢C	9.1	10.9	5.0	ハケ縦・ナア	ハケ横・ナア	ハケ横・ナア	小石粒少	良好	淡褐色	淡褐色	淡褐色	口縁~脚部 ¹ / ₂ 欠				
88-10		鉢C	7.9	11.0	4.4	ヘラケズリ、タタキ	ナア横	ナア横	小石粒	普通	褐色	褐色	褐色	口縁部大部分欠				
88-11		高环B ₂	15.6	-	11.1	ハケ縦・斜め	ハケ斜め、ヘラミガキ	ハケ斜め、ヘラミガキ	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	口縁部 ¹ / ₂ 脚端部 ¹ / ₂ 欠				
88-12		高环B	-	-	12.6	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヨコナア	ヘラケズリ、ヨコナア	"	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	脚端部 ¹ / ₂ 欠				
88-13		高环B	-	-	11.8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/4残存				
88-14	鉢A ₁	10.9	-	3.8	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横・斜め	ヘラミガキ横・斜め	小石粒、雲母	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	口縁部 ² / ₃ 欠				
88-15	鉢D ₁	9.6	8.5	-	ナア	ナア	ナア	小石粒少	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	口縁部 ³ / ₄ 欠				
5	89-1	壺F ₁	9.6	13.8	3.0	ナア	ナア	ナア	小石粒、雲母	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	完形			
	89-2	甕DII,a	13.0	17.0	-	ハケ斜め、ナア	ハケ後ナア横・斜め	ハケ後ナア横・斜め	小石粒少	"	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	1/3残存			
	89-3	甕BI,a	12.9	20.8	-	ハケ斜め	ハケ横・ナア	ハケ横・ナア	小石粒多	"	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	1/2残存			
	89-4	甕A	19.0	-	4.6	ナア	ハケ斜め、横	ハケ斜め、横	"	"	"	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	"			

遺構	図版No	器形	法			量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色			調		備考
			口径	胴径	底径	器高	外	内	面	文	様			外	内	面	断面	備	
5	89-5	甔A	-	-	3.8	-	ナテ斜め・横	ナテ縦	ナテ縦	ナテ多	普通	淡茶褐色	淡褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	1/3残存			
	89-6	高环C	19.0	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	4/5残存				
	89-7	小台甔	-	-	-	-	ナテ	ナテ	ナテ	"	"	"	"	"	1/2残存				
7	89-8	甔	-	-	6.6	-	"	不明	不明	小石粒、雲母	"	褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	1/2残存				
	89-9	甔	-	-	5.0	-	"	ナテ	ナテ	"	"	褐色	淡褐色	淡褐色	2/6残存				
	89-10	甔A1,c	16.2	-	-	-	ヨコナテ、ハケ横	ヨコナテ	ヨコナテ	小石粒少	良好	淡褐色	淡褐色	淡褐色	1/6残存				
	89-11	甔A	-	-	6.2	-	ヘラミガキ縦	ナテ横	ナテ横	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存				
	89-12	甔G ₂	12.6	12.1	6.6	12.8	タタキ後一部ハケ	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒	普通	淡褐色	淡褐色	淡灰褐色	口縁~胴部1/3欠				
	89-13	器台A ₉	8.0	-	-	-	ナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	小石粒、雲母	"	褐色	褐色	褐色	1/5残存				
	89-14	鉢A ₃	12.2	-	4.2	9.3	ハケ斜め・横	ハケ斜め	ハケ斜め	小石粒少、雲母	"	淡褐色	淡褐色	淡灰褐色	口縁~胴部3/4欠				
21	89-15	甔C ₁ b	20.0	-	-	-	ヨコナテ後ヘラミガキ横	ヨコナテ後ヘラミガキ横	ヨコナテ後ヘラミガキ横	小石粒、赤粒	"	褐色	淡褐色	淡褐色	1/4残存				
	89-16	甔A	-	-	8.4	-	不明	不明	不明	"	"	黄灰色	黄灰色	茶褐色	1/9残存				
	89-17	甔E	18.0	-	-	-	ハケ斜め	ハケ横	ハケ横	"	"	濃黄灰色	黒色	茶褐色	1/9残存				
10	90-1	甔A ₁ 2	15.0	-	-	-	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	小石粒少	"	黒褐色	黒褐色	暗褐色	1/7残存				
	90-2	甔B ₂	15.8	23.4	7.0	27.1	ハケ縦	ナテ横一部斜め	ナテ横一部斜め	小石粒、雲母	"	灰褐色	灰褐色	淡灰褐色	ほぼ完形				
	90-3	甔C ₁ b	15.8	28.0	6.0	27.8	ハケ後ヘラミガキ横	ハケ横後ヘラミガキ	ハケ横後ヘラミガキ	小石粒少	不良	淡灰褐色	淡褐色	淡褐色	"				
	90-4	甔E ₂	15.6	-	-	-	ハケ縦・横	ハケ縦、ヘラケズリ	ハケ縦、ヘラケズリ	小石粒	普通	褐色	褐色	褐色	口縁部残存				
	90-5	甔C ₁ b	-	-	-	-	ナテ後ヘラミガキ横	ナテ後ヘラミガキ横	ナテ後ヘラミガキ横	小石粒、雲母	"	"	淡褐色	淡褐色	ほぼ完形				
	90-6	甔D ₁ a	13.7	18.5	7.0	17.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒多	"	黄灰色	黄灰色	黄褐色	2/4残存				
	90-7	甔E ₁	13.2	-	-	-	ハケ斜め一部横	ハケ横	ハケ横	小石粒、雲母	"	淡褐色	淡褐色	黄褐色	1/5残存				
	90-8	甔E ₁	13.6	-	-	-	ハケ縦後ヘラミガキ	ハケ横後ヘラミガキ	ハケ横後ヘラミガキ	小石粒	不良	淡黄灰色	淡黄灰色	淡灰褐色	ほぼ完形				
	91-1	甔E ₁	14.8	25.8	7.3	32.3	ハケ斜め、ヘラケズリ	ハケ斜め	ハケ斜め	小石粒	不良	赤褐色	赤褐色	灰白色	胴部1/2欠				
	91-2	甔E ₁	13.8	23.2	-	-	不明	"	"	小石粒	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	1/4残存				
	91-3	甔E ₂	17.0	-	-	-	ハケ縦、ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	小石粒	普通	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	完形				
	91-4	甔F ₂	11.5	15.8	6.0	17.5	ナテ横後ヘラミガキ	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ、ナテ横	小石粒、雲母	"	淡褐色	暗褐色	灰白色	1/4残存				
	91-6	甔	-	-	7.0	-	ヘラミガキ縦	ナテ横	ナテ横	小石粒	"	淡褐色	暗褐色	灰白色	1/4残存				
	91-7	甔	-	-	5.4	-	不明	不明	不明	"	"	橙褐色	橙褐色	橙褐色	1/5残存				
91-8	甔	-	-	5.6	-	ヘラミガキ縦	ハケ	ハケ	"	"	淡褐色	暗褐色	暗褐色	1/4残存					
91-9	甔	-	-	4.6	-	ヘラミガキ	ハケ縦	ハケ縦	精良	"	暗褐色	暗褐色	淡灰褐色	"					
92-1	甔A	-	-	6.6	-	ヘラミガキ縦	不明	不明	小石粒少	"	淡褐色	淡褐色	淡灰褐色	"					
92-2	甔A	-	-	6.4	-	ヘラミガキ斜め	"	"	小石粒、雲母	"	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	"					

遺構	図版No	器形	法 量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色			調		備考	
			口径	胴径	底径	器高	外面	内面			断面	外面	内面	断面			
住	92-3	甕B ₁ ₂	17.2	23.8	-	-	ハケ斜め	ハケ横、ナア	小石粒、雲母	普通	淡褐色	淡褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	口縁部・胴部 $\frac{2}{3}$ 欠	
	92-4	甕B ₁ ₂	15.4	19.9	8.9	2.4	"	ハケ斜め、ナア	小石粒	"	淡灰褐色	淡灰褐色	"	"	"	$\frac{1}{2}$ 残存	
	92-5	甕B ₁ ₂	15.4	-	-	-	"	ハケ横	小石粒少	"	黒	淡褐色	淡褐色	淡褐色	"	"	$\frac{1}{2}$ 残存
	92-6	甕B _{III} _b	-	8.1	-	-	ナア	ハケ斜め	小石粒	良好	褐	"	"	"	"	胴~脚台部残存	
	92-7	甕B	-	-	6.0	-	ハケ斜め	ナア	"	"	"	"	"	"	"	"	$\frac{1}{3}$ 残存
	92-8	甕B	-	-	9.8	-	ハケ縦	ハケ斜め	小石粒、雲母	"	"	淡赤褐色	褐色	灰白色	褐色	"	$\frac{2}{4}$ 残存
	92-9	甕B	-	-	8.4	-	ナア	ナア	"	"	褐	淡褐色	灰褐色	灰褐色	褐色	"	$\frac{1}{4}$ 残存
	92-10	甕C ₂	-	-	-	-	ハケ斜め	"	"	"	淡赤褐色	褐色	灰褐色	灰褐色	褐色	"	$\frac{1}{2}$ 残存
	92-11	甕C	-	-	-	-	"	"	小石粒、赤粒、雲母	不良	赤褐色	褐色	灰褐色	灰褐色	褐色	"	"
	92-12	甕D _I _c	17.0	-	-	-	ハケ、ヘラケズリ	ハケ後ヨコナア、ナア	小石粒、雲母	普通	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	"	$\frac{1}{4}$ 残存
	92-13	甕D _{III}	9.0	-	-	-	ヨコナア	ヨコナア	精良	良好	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	"	$\frac{1}{6}$ 残存
	92-14	甕D _{II} _b	12.6	13.4	-	-	ナア縦	ナア	小石粒、雲母	普通	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	"	$\frac{1}{6}$ 残存
	92-15	甕D _{II} _b	11.0	-	-	-	ナア横	"	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	"	$\frac{1}{3}$ 残存
	93-1	甕D _{II} _a	12.4	16.8	5.6	14.7	ハケ斜め	ナア斜め一部縦	"	"	暗褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	"	$\frac{1}{3}$ 残存
	93-2	甕D _{III} _a	-	14.6	3.8	-	"	不明	小石粒	不良	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	底部残存	
	93-3	鉢C	-	-	4.8	-	ハケ縦	ハケ縦	小石粒	良好	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	"	"
	93-4	甕G ₁	12.8	-	-	-	ヨコナア	ヨコナア	小石粒	普通	黒	黒	黒	黒	黒	"	$\frac{1}{6}$ 残存
	93-5	甕G ₁	15.0	-	-	-	"	"	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	"	$\frac{1}{8}$ 残存
93-6	鉢D ₂	11.4	-	-	-	不明	ハケ横	"	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	底部残存		
93-7	鉢D ₂	-	12.7	-	-	ヘラケズリ	不明	"	不良	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	完形		
93-8	高坏B ₂	15.4	-	11.9	11.2	ヘラミガキ横・縦	ヘラミガキ縦	"	普通	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	完形		
93-9	高坏B ₂	19.6	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	精良	"	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	$\frac{1}{4}$ 残存		
93-10	高坏B ₂	-	-	-	-	"	"	小石粒少	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	脚部残存		
93-11	高坏B	-	-	-	-	"	ハケ横、ヘラケズリ	"	"	淡褐色	淡褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	"	"	
93-12	高坏B	-	-	-	-	"	不明	精良	"	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	"	"	
93-13	高坏B	-	-	-	-	"	ハケ横	小石粒	良好	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	"	"	
93-14	高坏E ₁ _a	-	-	-	-	"	シボリ	"	"	淡褐色	淡褐色	淡暗褐色	淡暗褐色	淡暗褐色	"	"	
93-15	高坏E	10.8	-	-	-	不明	不明	精良	"	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	$\frac{1}{2}$ 残存		
93-16	高坏D	-	-	-	-	ヘラミガキ縦	ナア横	"	"	淡赤灰色	淡赤灰色	淡赤灰色	淡赤灰色	淡赤灰色	脚部残存		
93-17	器台A _b	10.0	-	11.2	8.2	ハケ後ヘラミガキ	ハケ斜め、ヘラミガキ横・斜め	小石粒、雲母	普通	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	"	"	
93-18	小丸B	9.1	8.1	3.0	5.8	ヘラミガキ横	ナア横	小石粒少	良好	茶色	茶色	茶色	茶色	茶色	完形	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠	

遺構	図版No	器形	法			量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色			調		備考
			口径	胴径	底径	器高	外	内	面	文	様			外	内	面	断面		
住	93-19	小丸B	9.6	8.2	3.0	6.7	ハケ横	ハケ縦	ハケ縦	ハケ縦	ハケ縦	小石粒少	不良	灰白色	灰白色	灰白色	灰白色	口縁部 $\frac{1}{2}$ ・胴部 $\frac{1}{3}$ 欠	
	94-1	小丸C	9.4	9.6	-	-	ハケ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒、雲母	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{5}$ 残存		
	94-2	鉢B	9.0	9.0	5.6	7.9	ヨコナア、ナア横	ハケ後ナア	ハケ後ナア	ハケ後ナア	"	"	不良	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	口縁部 $\frac{2}{3}$ 欠		
	94-3	鉢A ₃	10.9	-	2.9	6.4	不明	不明	不明	不明	小石粒少	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	口縁部 $\frac{1}{3}$ 欠		
	94-4	鉢E ₂	15.4	-	2.0	5.5	ヘラミガキ横・斜め	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良	"	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	口縁部 $\frac{5}{6}$ 欠		
	94-5	鉢E ₂	-	-	1.8	-	"	"	"	"	精良、雲母	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	底部残存		
	94-6	甕BI, b	15.2	20.7	9.4	29.7	ナア	ハケ後ナア	ハケ後ナア	ハケ後ナア	小石粒	"	普通	黄褐色	黄褐色	黄褐色	$\frac{2}{3}$ 残存		
	94-7	甕C ₂ b	19.0	-	-	-	ヨコナア、ハケ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒、雲母	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{2}$ 残存		
	94-8	甕A	-	-	7.0	-	ヘラミガキ縦	ナア横	ナア横	ナア横	小石粒少、赤粒	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{4}$ 残存		
	94-9	甕B	-	-	-	-	ヘラミガキ横	ナア	ナア	ナア	"	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	接合部残存		
	94-10	甕C	-	-	-	-	ハケ斜め	"	"	"	小石粒少、赤粒、雲母	"	"	灰白色	灰白色	灰白色	"		
	94-11	甕D	-	-	6.0	-	ハケ縦	ハケ斜め、横	ハケ斜め、横	ハケ斜め、横	小石粒	"	"	茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	$\frac{1}{4}$ 残存		
	94-12	甕G ₁	12.6	-	-	-	ハケ後ヨコナア	ハケ後ヨコナア	ハケ後ヨコナア	ハケ後ヨコナア	小石粒少	"	"	暗褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	$\frac{1}{8}$ 残存		
	94-13	甕	17.0	-	-	-	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	"	"	良好	黒褐色	黒褐色	黒褐色	$\frac{1}{9}$ 残存		
94-14	甕	12.0	-	-	-	ハケ後ヘラミガキ横・縦	ハケ後ヘラミガキ横	ハケ後ヘラミガキ横	ハケ後ヘラミガキ横	小石粒少	"	普通	黄褐色	黄褐色	黄褐色	$\frac{1}{8}$ 残存			
94-15	高坏B ₁	19.0	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	"	"	普通	黄褐色	黄褐色	黄褐色	$\frac{1}{8}$ 残存			
94-16	器台Aa	-	-	10.0	-	ハケ後ヘラミガキ縦	ハケ斜め	ハケ斜め	ハケ斜め	小石粒	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	"			
住	95-1	甕B ₁ b	14.6	-	-	-	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	精良	良好	暗赤色	暗赤色	暗赤色	暗赤色	$\frac{1}{4}$ 残存		
	95-2	甕C ₁ a	16.8	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	"	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	黄灰色	$\frac{1}{3}$ 残存		
	95-3	甕F ₁	6.2	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	"	普通	灰白色	灰白色	灰白色	$\frac{1}{6}$ 残存			
	95-4	壺	-	-	3.2	-	不明	不明	不明	不明	精良、赤粒、雲母	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	$\frac{1}{3}$ 残存		
	95-5	壺	-	-	6.0	-	ハケ後ヘラミガキ縦	ハケ横	ハケ横	ハケ横	小石粒少	"	"	褐	黒褐色	黒褐色	$\frac{1}{5}$ 残存		
	95-6	壺	-	-	6.8	-	ナア斜め	ナア横・斜め	ナア横・斜め	ナア横・斜め	小石粒	"	"	"	暗赤褐色	暗赤褐色	$\frac{1}{5}$ 残存		
	95-7	甕BI ₂	-	-	18.0	-	"	"	"	"	"	"	良好	黒褐色	黒褐色	黒褐色	$\frac{1}{4}$ 残存		
	95-8	甕B	-	-	8.2	-	ハケ縦	ナア横	ナア横	ナア横	小石粒、雲母	普通	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	胴部 $\frac{3}{4}$ 欠		
	95-9	甕D	-	-	5.0	-	ナア	ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラケズリ後ヘラミガキ	ヘラケズリ後ヘラミガキ	"	"	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	$\frac{1}{4}$ 残存		
	95-10	甕G ₁	-	-	3.8	-	ハケ横・斜め	ハケ横	ハケ横	ハケ横	"	"	"	褐	黄褐色	黄褐色	"		
	95-11	甕	14.4	-	-	-	ナア	ナア横	ナア横	ナア横	"	"	"	"	黄褐色	黄褐色	$\frac{1}{5}$ 残存		
	95-12	高坏B ₁	20.8	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	"	良好	黄灰色	黄灰色	黄灰色	黄灰色	$\frac{1}{8}$ 残存		
	95-13	高坏B ₂	21.8	-	-	-	"	"	"	"	小石粒	不良	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	$\frac{1}{5}$ 残存		
	95-14	高坏B	-	-	12.6	-	"	シボリ、ヨコナア	シボリ、ヨコナア	シボリ、ヨコナア	小石粒少、雲母	普通	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	$\frac{1}{2}$ 残存		

遺構	図版No	器形	法量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考
			口径	胴径	底径	器高	外面	内面			断面	外面	内面	
15 住	95-15	高环E	-	-	18.0	-	ヘラミガキ縦	ハケ後ナア	精良、雲母、赤粒	良好	茶褐色	暗褐色	茶褐色	1/2 残存
	95-16	高环E	-	-	15.4	-	ハケ後ナア横	ハケ後ナア横	小石粒、雲母、赤粒	普通	黄灰色	黄灰色	淡褐色	1/4 残存
	95-17	高环E	-	-	-	-	ナア	ナア	精良、赤粒	良好	"	"	"	脚部残存
	95-18	器台Aa	-	-	11.0	-	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	精良、雲母	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	淡茶褐色	"
	95-19	器台Aa	-	-	13.0	-	ヘラミガキ	ハケ斜め、横	小石粒少、雲母、赤粒	良好	茶褐色	茶褐色	淡茶褐色	1/5 残存
16 住	96-1	壺A	-	23.6	8.0	-	ハケ縦	ハケ縦	精良	普通	"	"	茶褐色	1/4 残存
	96-2	壺B1a	-	19.2	-	ヨコナア	ハケ後ヘラミガキ	小石粒、赤粒	普通	淡茶褐色	"	"	"	1/10 残存
	96-6	壺F2	7.0	10.3	3.5	15.2	ヘラミガキ縦・横	ハケ後ナア	精良	良好	淡黄褐色	青灰色	灰白色	完形
	96-7	壺A I,c	17.8	20.0	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	胴部残存、埋設炉
	96-8	壺A I,c	16.4	19.4	-	-	ハケ後ヘラミガキ縦	"	"	普通	"	"	"	1/4 残存
	96-9	壺B	-	-	9.6	-	ハケ	ナア斜め	"	良好	褐色	明褐色	褐色	1/2 残存
	96-10	壺C	-	-	-	-	ハケ縦	ナア縦	小石粒、雲母、赤粒	良好	淡灰色	淡灰色	灰白色	接合部 1/3 残存
	96-11	壺C1	14.4	20.2	4.7	18.4	タタキ後一部ハケ	ハケ横	小石粒、雲母	普通	黒褐色	黒褐色	淡灰褐色	完形
	96-12	壺G1	-	-	4.4	-	ナア	ハケ縦	小石粒	"	"	"	"	1/4 残存
	96-13	壺G1	-	-	4.0	-	タタキ後ハケ	ハケ斜め	"	"	"	"	"	"
	97-1	高环B1	24.5	-	13.2	15.0	ヘラミガキ斜め	ヘラミガキ	小石粒少	"	赤褐色	赤褐色	淡赤褐色	完形
	97-2	高环B1	21.0	-	10.6	13.3	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒	"	淡褐色	淡褐色	灰白色	坏部 1/2 欠
	97-3	高环B2	22.3	-	11.0	14.2	"	ヘラミガキ縦、ヨコナア	精良	"	灰白色	灰白色	褐色	完形
97-4	高环B2	20.6	-	-	-	ハケ後ヘラミガキ縦	ハケ後ヘラミガキ縦	小石粒	良好	褐色	褐色	明褐色	1/4 残存	
97-5	高环B	-	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横	小石粒少	"	明褐色	明褐色	淡灰褐色	接合部残存	
97-6	高环B	-	-	-	-	"	ナア横、シボリ	"	"	"	"	"	"	
97-7	器台Aa	-	-	-	-	"	ヘラケズリ後ナア	精良	"	明褐色	明褐色	明褐色	"	
18 住	97-12	壺A	-	-	7.2	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/6 残存
	97-13	壺A	-	-	7.6	-	"	"	"	"	"	"	1/4 残存	
	97-14	壺C1a	11.8	-	-	-	ハケ横・斜め	ハケ横、ナア	"	不良	灰褐色	灰褐色	淡灰褐色	1/6 残存
	97-15	器台Aa	-	-	-	-	ヘラミガキ縦	ナア	"	普通	灰白色	灰白色	灰白色	接合部残存
19 住	98-2	壺	-	-	12.0	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒、雲母	"	黒褐色	黒褐色	茶褐色	1/5 残存
	98-3	壺	-	-	5.0	-	ナア	ナア	小石粒多	"	褐色	暗灰褐色	暗灰褐色	底部残存
	98-4	壺	-	-	5.6	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ縦	小石粒、雲母	"	黒褐色	黒褐色	明褐色	1/4 残存
	98-5	壺A I,c	17.6	-	-	-	ヨコナア、ヘラミガキ縦	"	小石粒少	良好	"	淡褐色	茶褐色	"
	98-6	壺A	-	-	6.6	-	ヘラミガキ縦	ナア	小石粒、雲母	不良	淡黄褐色	黒褐色	"	"

遺構	図版No	器形	法			手法上の特徴			胎	土	焼成	色			備	考	
			口径	胴径	器高	外	内	面				文	様	外			内
19	98-7	甕A	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒少	良好	褐色	褐色	褐色	1/6残存				
	98-8	甕A	-	6.2	-	不明	不明	小石粒		褐色	褐色	褐色	1/2残存				
	98-9	甕B ₁ I _a	17.4	6.2	-	ハケ横、ナア横	ハケ横、ナア横	小石粒		普通	黒	褐色	褐色		1/4残存		
	98-10	甕B	-	6.6	-	ナア	ナア	小石粒		普通	赤	褐色	褐色		1/2残存		
	98-11	甕B	-	6.8	-	ハケ縦	ハケ縦	小石粒		不良	淡	褐色	褐色		1/4残存		
	98-12	甕B	-	7.0	-	ハケ	ハケ	小石粒		普通	褐色	褐色	褐色		1/4残存		
	98-13	甕B	-	7.8	-	ナア	ナア	小石粒		普通	褐色	褐色	褐色		1/4残存		
	98-14	甕C ₁ C	10.2	-	-	ハケ横、斜め	ハケ横、斜め	小石粒		不良	褐色	褐色	褐色		1/4残存		
	98-17	鉢D ₂	12.8	-	-	ヨコナア、ヘラミガキ横	ヨコナア、ヘラミガキ横	小石粒		普通	黒	褐色	褐色		1/2残存		
	98-18	高坏B	-	8.8	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒		普通	赤	褐色	褐色		1/2残存		
	98-19	高坏E ₂	11.0	-	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	小石粒		不良	黄	褐色	褐色		1/6残存		
	98-20	器台B	8.6	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒		普通	黄	褐色	褐色		1/6残存		
	98-21	鉢A	-	3.2	-	不明	不明	小石粒		不良	黄	褐色	褐色		1/6残存		
	98-22	鉢A ₁	10.6	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒		普通	黄	褐色	褐色		1/8残存		
	98-23	器台A ₁	7.2	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒		良好	黒	褐色	褐色		1/4残存		
	98-24	器台A ₂ b	8.0	-	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	小石粒		普通	赤	褐色	褐色		1/4残存		
	98-25	壺	-	5.0	-	ナア	ナア	小石粒		普通	暗	褐色	褐色		1/4残存		
	98-26	壺	-	4.0	-	ハケ	ハケ	精良		普通	赤	褐色	褐色		1/4残存		
	20	99-1	甕A	-	7.2	-	ナア横	ナア横		小石粒少	普通	褐色	褐色		褐色	1/2残存	
		99-2	甕A	-	6.4	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横		小石粒多、赤粒		褐色	褐色		褐色	1/5残存	
99-3		甕	11.0	-	-	ヨコナア	ヨコナア	小石粒	褐色	褐色		褐色	1/6残存				
99-4		高坏B	-	-	-	ヘラミガキ斜め	ヘラミガキ斜め	小石粒	褐色	褐色		褐色	1/5残存				
99-5		器台Aa	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒	褐色	褐色		褐色	1/5残存				
99-6		手づくね	-	-	-	ナア	ナア	小石粒少	褐色	褐色		褐色	1/4残存				
99-7		壺AII ₂	16.8	-	-	ヨコナア	ヨコナア	精良	褐色	褐色		褐色	1/6残存				
99-8		甕A I ₂ c	15.2	-	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	小石粒、雲母	褐色	褐色		褐色	1/10残存				
99-9		甕D	-	6.0	-	ナア縦	ナア縦	小石粒	普通	褐色		褐色	褐色	底部残存			
99-10		甕G ₁	-	4.0	-	タタキ	ハケ横	小石粒	普通	暗		褐色	褐色	1/4残存			
99-11		甕G ₁	-	4.8	-	ヘラミガキ	不明	小石粒、雲母、赤粒	普通	暗		褐色	褐色	1/4残存			
99-12		甕E	19.0	-	-	ハケ縦、斜め	ハケ横	小石粒、雲母	良好	黒		褐色	褐色	1/5残存			
99-13	甕E	-	6.4	-	ヨコナア、ナア縦	ハケ斜め	小石粒	普通	褐色	褐色	褐色	底部残存					

遺構	図版No.	器形	法			手法上の特徴			胎土	焼成	色			隅		備考
			口径	胴径	器高	外	内	面			文	様	外	内	面	
24住	99-14	器台Ab	-	-	-	不明	ナナ		小石粒	不良	黄灰色	黄灰色	黄灰色	黄灰色	接合部残存	
27住	99-15	壺Ba	17.4	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	竹管文、波状文、横線文	小石粒、雲母	普通	赤褐色	赤褐色	淡青灰色	淡青褐色	$\frac{1}{4}$ 残存	
	99-16	壺	-	7.6	-	ハケ横後ナナ	不明		小石粒	"	明褐色	明褐色	暗褐色	暗褐色	胴部 $\frac{2}{3}$ 欠	
	99-17	壺A	-	7.4	-	ヘラミガキ縦	"		"	"	黒褐色	黒褐色	"	胴部 $\frac{2}{3}$ 欠		
	99-18	壺	-	7.8	-	"	ハケ横後ナナ		"	"	黒褐色	茶褐色	褐色	褐色	胴部 $\frac{1}{2}$ 欠	
	99-19	壺B(有孔)	-	8.4	-	ハケ縦後ナナ横	ヘラケズリ後ナナ		"	"	黒褐色	茶褐色	淡褐色	淡褐色	底部残存	
	99-20	壺D	-	5.8	-	ナナ横・縦	ナナ縦・横		"	"	黒褐色	茶褐色	"	褐色	$\frac{1}{4}$ 残存	
	99-21	壺D	-	5.0	-	ハケ後ナナ横	ナナ横		"	"	黒褐色	茶褐色	"	褐色	底部残存	
	99-22	鉢A ₁	-	4.0	-	ヘラケズリ	ナナ横・斜め		"	"	黄灰色	暗褐色	黄褐色	淡灰褐色	$\frac{1}{3}$ 残存	
	99-23	鉢G ₁	-	4.6	-	ハケ縦・ナナ	ハケ横		小石粒、赤粒	良好	赤褐色	"	黄褐色	淡褐色	脚部残存	
	100-1	高坏B	-	-	-	ヘラミガキ縦	ナナ、シボリ		小石粒	"	黒褐色	茶褐色	淡褐色	茶褐色	"	
	100-2	高坏E	-	-	-	"	シボリ、ナナ横		精良	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{9}$ 残存	
	100-3	鉢A ₁	-	10.0	-	"	ヘラミガキ縦		小石粒、雲母	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{9}$ 残存	
	100-4	甌A	-	14.0	-	"	ヨコナナ後ヘラミガキ横		"、"	普通	黒褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	$\frac{1}{7}$ 残存	
	29住	100-12	壺A1,c	16.0	-	-	ヨコナナ	ヘラミガキ横		小石粒少	良好	黒褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	$\frac{1}{7}$ 残存
100-13		壺B11,b	14.4	17.0	-	ナナ横・斜め	ナナ		小石粒多	普通	暗茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{5}$ 残存	
100-14		壺B	-	8.1	-	ヘラミガキ	"		"	"	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	脚部残存	
100-15		壺B	-	9.7	-	ハケ後ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横		"	"	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	"	
100-16		壺B	-	9.4	-	ヨコナナ	ヨコナナ		小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	"	
100-17		壺B(有孔)	-	-	-	ハケ縦	ナナ		"	"	淡褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	$\frac{1}{2}$ 残存	
100-18		壺D	-	6.0	-	ハケ後ナナ	"		小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	"	
100-19		壺	-	5.0	-	ナナ	"		小石粒多	"	淡茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	"	
100-20		高坏C	16.2	-	-	ヘラミガキ縦・横	ヘラミガキ縦・横		精良	不良	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	$\frac{1}{6}$ 残存	
100-21		鉢D ₁	15.0	15.1	-	ヨコナナ	ナナ横		小石粒少	普通	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	$\frac{1}{10}$ 残存	
100-22		高坏B	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ		小石粒多	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	接合部残存	
100-23		壺F	16.0	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ		小石粒、雲母	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	$\frac{1}{6}$ 残存	
12溝		100-24	壺B	-	9.6	-	ナナ	"	小石粒多、雲母	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	脚部残存	
溝		101-1	壺A11 ₂	15.2	30.4	-	ヘラミガキ縦	ナナ横	龜裂突文、横線文、波状文	小石粒	良好	赤黄灰色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	胴下部欠、AY53
	101-2	壺C _{1a}	-	-	-	ヘラミガキ縦	ナナ	龜裂突文、横線文、波状文	小石粒、雲母	不良	赤黄灰色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	$\frac{1}{4}$ 残存、AY52	
	101-3	壺F ₁	6.0	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ横		小石粒	普通	淡灰褐色	"	"	"	$\frac{1}{2}$ 残存、BB49	
	101-4	壺	-	5.4	-	不明	ナナ横		小石粒少	良好	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	$\frac{1}{3}$ 残存、AY53	

遺構	図版No	器形	法			手法上の特徴			胎土	焼成	色			調		備考
			口径	胴径	底径	器高	外面	内面			断面	外面	内面	断面		
溝 15 5 層	101-5	甕D	-	-	4.4	-	ナア横	ナア斜め	小石粒	普通	黒色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{2}{3}$ 残存	
	101-6	甕D	-	-	5.6	-	"	ナア横	小石粒少	良好	淡茶褐色	灰白色	灰白色	灰白色	底部残存、BC49	
	101-7	甕A1	-	-	8.0	-	ヘラミガキ縦	ナア斜め	小石粒少、赤粒	"	茶褐色	淡明茶色	淡明茶色	淡明茶色	$\frac{1}{4}$ 残存、BB50	
	101-8	甕BII ₂	13.2	17.0	-	-	ハケ縦一部横	ハケ縦一部ナア	小石粒少	普通	褐色	褐色	褐色	褐色	$\frac{2}{3}$ 残存、BA51	
	101-9	甕BII ₁ b	12.8	-	-	-	ナア横・斜め	ハケ横	小石粒、雲母	"	"	"	"	"	$\frac{1}{5}$ 残存、BA52	
	101-10	甕B	-	-	8.0	-	ハケ後、ナア横	ナア横、ハケ後ナア	"	"	"	"	"	"	脚上部残存、BA51	
	101-11	甕C ₂ b	10.4	-	-	-	ハケ横・縦	ナア	精良、雲母	良好	明茶色	明茶色	明茶色	明茶褐色	$\frac{1}{4}$ 残存、AY52	
	101-12	甕G ₁	12.0	-	-	-	ヨコナア	ナア横	小石粒少	普通	黒色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	$\frac{1}{4}$ 残存、BA50	
	101-13	甕	15.4	-	-	-	ナア横	"	小石粒	"	"	"	"	"	$\frac{1}{8}$ 残存、BA51	
	102-1	甕G ₁	13.8	19.6	-	-	タタキ後一部ハケ	ハケ横	小石粒少	"	黒褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	$\frac{1}{2}$ 残存、AX53	
	102-2	甕G ₁	-	-	4.0	-	ナア	ナア	小石粒	"	黒褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	底部残存、BA51	
	102-3	甕G ₁	-	-	5.5	-	タタキ	ナア斜め	小石粒、雲母	良好	黒褐色	褐色	褐色	褐色	$\frac{1}{2}$ 残存、AY52	
	102-4	甕G ₁	-	-	4.0	-	タタキ後ハケ	ハケ斜め	小石粒	普通	黒褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	$\frac{2}{3}$ 残存、"	
	102-5	甕G ₁	-	-	5.8	-	タタキ	ナア斜め	小石粒	良好	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	$\frac{2}{4}$ 残存、"	
102-6	高坏B ₁	19.4	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	"	普通	暗褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{2}$ 残存、BB53		
102-7	高坏B ₃	18.2	-	-	-	"	"	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	"、AY52		
102-8	高坏B ₂	25.2	-	-	-	"	"	"	"	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	$\frac{1}{4}$ 残存、BB48		
102-9	高坏B ₂	25.0	-	-	-	ハケ後ヘラミガキ縦	ハケ後一部ナア	小石粒、赤粒	"	淡赤褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	$\frac{1}{4}$ 残存、BA51		
102-10	高坏B	-	-	13.4	-	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒少	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	$\frac{3}{7}$ 残存、"		
102-11	高坏E ₁ b	12.8	-	-	-	ヘラズリ後ヘラミガキ横	ヘラミガキ縦・横	小石粒、赤粒	"	明黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠、BA49		
102-12	鉢A ₂	8.2	-	3.0	4.7	ヨコナア	ヨコナア	小石粒少	良好	黒色	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	$\frac{1}{2}$ 残存、AX53		
102-13	小壺C	-	11.0	-	-	ヘラミガキ横	ナア	精良、雲母	良好	褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	"、AY45、脚縁穿孔		
102-14	小占甕	7.0	9.0	-	-	ハケ後ナア横・斜め	ナア横	小石粒	普通	褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	$\frac{2}{3}$ 残存、BF45		
溝 15 4 層	103-1	壺AII ₂	15.2	-	-	-	ヨコナア	ヨコナア	小石粒少	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{4}$ 残存、BA49	
	103-3	甕B ₂	13.3	20.9	-	-	ハケ後ヘラミガキ	ヘラミガキ横	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	胴下部欠、BE45	
	103-4	壺B ₂	16.0	-	-	-	ヨコナア、ハケ縦	ヨコナア	小石粒	普通	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	$\frac{1}{2}$ 残存、AX53	
	103-5	壺B ₂	17.4	29.2	-	-	ハケ後ヘラミガキ	ハケ横	小石粒、雲母	"	黒褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	胴下部欠、BD46	
	103-6	壺	-	-	-	-	ヘラミガキ縦	ナア横、ハケ横	小石粒少、赤粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{2}$ 残存、BB50	
	104-1	壺C ₂ b	18.6	30.3	5.4	-	ハケ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ横	小石粒	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	胴部 $\frac{1}{3}$ 欠、BD46	
	104-2	壺G ₁ b	18.6	30.2	7.5	28.7	ハケ縦、ヘラミガキ	ハケ横後ナア横	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	$\frac{1}{2}$ 残存、AY53	
104-3	壺	-	-	5.7	-	ナア	不明	"	"	褐色	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	底部残存、AY52		

遺構	図版No	器形	法		量(cm)		手法上の特徴			土	焼成	色			調断面	備考
			口径	胴径	底径	器高	外	内	面			文	機	外面		
溝	104-4	壺	-	-	3.9	-	ヘラミガキ斜め	不明	不明	小石粒少	良好	黄褐色	黒色	黒色	底面残存、BB51	
15	104-5	壺	-	-	5.0	-	ナデ斜め	ナデ横・斜め	ナデ横・斜め	"	"	淡褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	2/4残存、BD46	
4	104-6	壺	-	-	8.4	-	"	ハケ横後ナデ	ハケ横後ナデ	小石粒、雲母	普通	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/3残存、AY52	
層	104-7	壺F ₂	9.6	12.4	3.4	14.4	ヘラミガキ縦・斜め	ヘラミガキ横	ナデ後ヘラミガキ横	小石粒、雲母	不良	赤褐色	赤褐色	赤褐色	口縁部1/2欠、BD47	
	104-8	壺H	10.8	12.4	3.4	11.6	ハケ後ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ横	ハケ後ヘラミガキ横	"	普通	淡褐色	暗褐色	暗褐色	"、AY52	
105-1	壺C ₂ b	壺E ₁	17.2	38.3	7.5	46.9	ハケ縦・斜め	ハケ横	ハケ横	小石粒、雲母	"	赤褐色	黒褐色	黒褐色	ほぼ完形、BD46	
105-2	壺E ₁	壺E ₁	16.0	-	-	-	ハケ縦	ハケ横	ハケ横	小石粒、雲母	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存、BD46	
105-3	壺E ₁	壺E ₁	17.2	30.4	7.2	29.8	ハケ横後ヘラミガキ	ハケ横	ハケ横	小石粒少、雲母	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	1/6残存、BA51	
106-1	壺C ₃	壺D ₁ b	16.2	26.0	7.4	26.1	タタキ後ヘラミガキ縦	ナデ横	ナデ横	小石粒、雲母	良好	褐色	褐色	褐色	口縁部2/3、脚部1/3欠、BD46	
106-2	壺D ₁ b	壺E ₁	16.4	-	-	-	ハケ後ヘラミガキ縦	ハケ横	ハケ横	小石粒少	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	ほぼ完形、BD46	
106-3	鉢B	壺H	12.0	11.6	5.5	9.7	ナデ一部ハケ縦	ナデ横	ナデ横	小石粒、雲母、赤粒	"	灰褐色	茶褐色	茶褐色	口縁部残存、BE46	
106-4	壺H	壺H	9.0	10.6	-	-	ハケ横後ヘラミガキ	ナデ横	ナデ横	"	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	口縁部残存、BB48	
106-5	壺H	壺H	-	11.0	2.6	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存、BB48	
106-6	壺G ₁	壺D ₁ b	16.2	13.4	-	14.4	ハケ縦、ヘラミガキ	ハケ横	ハケ横	"	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	口縁部欠、BD46	
106-7	壺D ₁ b	壺E ₂	19.0	21.1	-	-	ハケ横後ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	小石粒少	"	赤褐色	黒褐色	黒褐色	完形、AY52	
107-1	壺E ₂	壺E ₁	14.6	23.8	-	-	ハケ横	ハケ横	ハケ横	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/2~1/3欠、BC46	
107-2	壺E ₁	壺D ₁ III	19.8	-	-	-	ハケ	ハケ	ハケ	小石粒	不良	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/3残存、AY53	
107-3	手づくね	手づくね	8.6	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	小石粒、雲母	普通	黄灰色	黄灰色	黄灰色	口縁部残存、AY51	
107-4	手づくね	壺	3.8	-	-	3.3	ナデ	ナデ	ナデ	小石粒	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存、AY53	
107-5	壺	壺	-	-	2.0	-	"	"	"	小石粒	普通	"	"	"	完形、BB48	
107-6	壺	壺	-	-	6.0	-	ハケ横	ハケ横	ハケ横	"	"	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	口縁部欠、BA51	
107-7	壺	壺	-	-	21.0	6.0	ハケ後ナデ後ヘラミガキ	ハケ横	ハケ横	"	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	胴部2/3欠、BB49	
108-1	壺	壺	-	-	24.9	6.6	ハケ後ヘラミガキ斜め	ハケ後ヘラミガキ斜め	ハケ後ヘラミガキ斜め	小石粒、赤粒	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	胴部1/2残存、BA52、底面後穿孔	
108-2	壺	壺	-	-	28.6	-	ハケ後ヘラミガキ横	ハケ横	ハケ横	小石粒、雲母	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存、BC47	
108-3	壺H	壺H	-	-	11.6	2.4	"	ナデ横	ナデ横	小石粒	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	胴部2/3欠、BB47	
108-4	壺H	壺E ₁	9.6	-	7.6	4.6	ナデ	ハケ横	ハケ横	"	不良	黄灰色	黄灰色	黄灰色	口縁部欠、BB49	
108-5	壺E ₁	壺E ₁	15.2	23.8	6.0	28.5	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	小石粒少	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	口縁部残存、BA49	
109-1	壺E ₁	壺E ₁	-	-	27.2	6.6	ハケ後ヘラミガキ縦	ハケ横	ハケ横	小石粒	不良	淡褐色	淡褐色	淡褐色	口縁部3/4欠、BD46	
109-2	壺E ₁	壺E ₁	-	-	19.8	4.6	ヘラミガキ	ナデ	ナデ	小石粒、雲母	普通	黄褐色	黄褐色	黄褐色	胴部1/4欠、"	
109-3	壺	壺	-	-	-	-	ヘラミガキ	ナデ	ナデ	小石粒少	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	胴部残存、BE46	
109-4	高坏B	高坏B	-	-	13.3	-	ヘラミガキ縦	ナデ横	ナデ横	"	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	脚部残存、BB49	

遺構	図版No	器形	法			手法上の特徴			胎土	焼成	色			調断面		備考
			口径	胴径	器高	外面	内面	文様			外面	内面	断面	外面	内面	
溝 15 4 層	109-5	高坏B	-	-	-	へラミガキ縦	ナア	ナア	小石粒少	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	脚部残存、BB48	
	109-6	高坏C	17.0	-	-	不明	不明	不明	小石粒	不良	褐色	褐色	褐色	褐色	1/4残存、BC46	
	109-7	甗A1,c	16.0	17.0	18.5	へラミガキ縦	ナア後へラミガキ横	ヨコナア、へラミガキ横	小石粒少	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	完形、BA51	
	109-8	甗A1,c	17.0	-	-	ハケ後へラミガキ縦	ナア横	ナア横	小石粒少	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/6残存、"	
	110-1	甗E ₁	15.9	25.5	34.4	ナア	ナア斜め	ナア斜め	"	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	完形、BE46	
	110-2	甗A1	-	24.8	9.6	へラミガキ縦	へラミガキ横	へラミガキ横	小石粒少、雲母、赤粒	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/3残存、BB49	
	110-3	甗A	-	-	7.1	"	"	"	精良	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存、"	
	110-4	甗A1,c	15.1	16.9	-	"	"	"	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存、BC49	
	110-5	甗A1,c	16.0	-	-	ヨコナア	ヨコナア	ヨコナア	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/6残存、BB49	
	110-6	甗A1,c	16.6	-	-	へラミガキ横	へラミガキ横	ナア横・斜め	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/5残存、"	
	110-7	甗B11,b	11.7	13.8	8.6	ハケ後ナア	ハケ後ナア	ハケ後ナア	小石粒	普通	"	"	"	"	ほぼ完形、"	
	110-8	甗B1 ₂	14.8	21.8	-	ハケ横・斜め	"	"	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	1/2残存、AX53	
	111-1	甗E ₁	14.5	27.3	7.5	ハケ後へラミガキ	ハケ後へラミガキ	ハケ後へラミガキ	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	完形	
	111-2	甗E ₁	14.6	23.0	9.6	"	"	"	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	胴部1/4欠、BB50	
	111-3	甗	-	-	6.0	ハケ横後へラミガキ	ハケ横後へラミガキ	ハケ横後へラミガキ	小石粒、雲母	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	底部残存、AX53	
	111-4	器台A ₁ a	8.5	-	12.8	へラミガキ縦	へラミガキ縦	へラミガキ縦	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	完形、BA51	
	111-5	器台A ₂ a	8.7	-	12.8	"	"	"	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	"、BF46	
	111-6	器台A ₂ a	7.4	-	-	へラミガキ横	へラミガキ縦、ナア	へラミガキ横	小石粒多	普通	明茶色	明茶色	明茶色	明茶色	1/2残存、BD46	
111-7	器台A ₁ a	8.9	-	10.5	へラミガキ縦・斜め	へラミガキ横	ハケ後へラミガキ縦・横	小石粒	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	ほぼ完形、AX53		
111-8	器台A ₁ a	5.8	-	-	へラミガキ	不明	不明	小石粒少	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	器受部1/2脚端部欠、BC47		
111-9	器台A ₂ a	8.2	-	9.2	へラミガキ斜め・横	ハケ横	ハケ横	小石粒	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	2/3残存、BB48		
111-10	器台A ₂ b	8.0	-	10.0	へラミガキ	へラミガキ	へラミガキ	小石粒、雲母	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	"、BA51		
111-11	器台A ₂ a	8.4	-	-	ハケ後へラミガキ	ハケ後ナア斜め・横	ハケ斜め	小石粒、雲母	"	明茶色	明茶色	明茶色	明茶色	脚部欠、BB50		
112-1	甗E ₁	15.6	25.5	7.7	ハケ後ナア斜め・横	ハケ斜め	ハケ斜め	小石粒	"	褐色	褐色	褐色	褐色	ほぼ完形、BE46		
112-2	高坏B ₁	-	-	-	へラミガキ縦	へラミガキ縦	へラミガキ縦	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	接合部残存、BB48		
112-3	高坏B	-	-	12.4	へラミガキ縦・ヨコナア	ナア横・ヨコナア	ナア横・ヨコナア	小石粒少	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1/2残存、AX53		
112-4	高坏B	-	-	13.8	へラミガキ後ナア	ハケ後ナア	ハケ後ナア	小石粒	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/3残存、BD46		
112-5	高坏B	-	-	12.4	へラミガキ縦	ナア	ナア	小石粒少	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	脚部残存、BB48		
112-6	高坏B	-	-	11.0	"	"	"	小石粒、赤粒	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	1/6残存、BC48		
112-7	高坏B	-	-	-	"	ナア横	ナア横	小石粒、雲母	"	"	"	"	"	脚部残存、BB50		
112-8	高坏B	-	-	12.2	"	ナア	ナア	小石粒少	"	"	"	"	"	"、AX52		

遺構	図版No	器形	法 量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色			調断面	備考
			口径	胴径	底径	器高	外	内			面	外	内		
溝	112-9	高坏B	-	-	-	-	ヘラミガキ縦	ナア	小石粒少	普通	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/4残存,AX51	
15	112-10	器台A ₃ b	8.0	-	8.2	7.1	ナア、ハケ	ナア縦、ハケ斜め	小石粒、雲母	"	赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	完形,BC48	
4	112-11	器台A ₃	9.2	-	-	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ縦	小石粒、雲母、赤粒	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1/2残存,BB49	
層	112-12	小丸A	11.6	7.9	4.0	7.5	ハケ縦	ハケ斜め、ヨコナア	小石粒、雲母	不良	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	ほぼ完形,AX53	
	112-13	鉢D ₁	7.0	6.0	-	5.2	ナア横、ヘラミガキ	ナア	小石粒少	普通	褐色	"	褐色	3/4残存,BC47	
112-14	鉢A ₁	9.8	-	4.0	4.6	ヘラミガキ縦	ヘラミガキ縦	小石粒、雲母、赤粒	"	"	茶褐色	茶褐色	完形,AX53		
112-15	鉢A ₁	12.6	-	-	-	ハケ縦後ヨコナア	ナア横	小石粒少	"	"	黒褐色	黒褐色	1/8残存,BB50		
112-16	鉢D ₂	10.0	11.0	-	-	ナア斜め	ナア横	"	"	"	赤褐色	茶褐色	1/4残存,AY51		
112-17	壺	-	-	3.4	-	ナア	ナア横	小石粒、雲母	良好	良好	褐色	黄灰色	底部残存,BF45		
112-18	壺	-	-	4.6	-	"	ナア	"	"	"	黄褐色	黄褐色	"、AX53		
112-19	甕	-	-	4.0	-	ハケ縦一部ナア	ハケ	小石粒	普通	普通	黄褐色	暗赤褐色	"、BE46		
112-20	壺	-	-	4.6	-	ハケ縦、ナア	ナア	"	"	"	黄褐色	暗赤褐色	"、BB51		
113-1	甕B I,1b	24.6	33.1	11.0	-	ナア縦、斜め	不明	小石粒	"	"	淡茶褐色	淡黄褐色	胴部一部欠,BA52		
113-2	甕B I,1b	-	-	9.5	-	ナア	ナア縦	"	"	"	褐色	褐色	胴部残存,BE45		
113-3	甕B	-	-	6.0	-	ハケ縦、ナア横	ナア縦、横	"	"	"	"	"	胴部残存,AX53		
113-4	甕B	-	-	8.8	-	ハケ縦、ナア	ナア縦	小石粒少	"	"	"	"	1/4残存,AY53		
113-5	甕B	-	-	7.4	-	ハケ後ナア横	ハケ後、ヨコナア	小石粒少、雲母	"	"	"	"	脚台部残存,AX53		
113-6	甕B	-	-	6.3	-	ハケ後ナア横	ナア横	小石粒	"	"	暗赤褐色	黄褐色	2/3残存,BB51		
113-7	甕B	-	-	7.4	-	ヨコナア	"	小石粒、雲母、赤粒	"	"	赤褐色	黒褐色	脚台部残存,BA51		
113-8	甕B	-	-	7.0	-	ナア斜め	"	小石粒、雲母	"	"	褐色	黄灰色	脚台部残存,BB50		
113-9	甕B	-	-	7.6	-	ナア縦	"	小石粒	"	"	暗赤褐色	黄褐色	1/3残存,AX53		
113-10	甕B	-	-	6.9	-	ナア横	ハケ横、斜め	"	"	"	暗赤褐色	黒褐色	脚台部残存,AX53		
114-1	甕B I,1b	15.8	19.2	9.0	28.3	ハケ後ナア	ハケ横、斜め	小石粒多	"	"	褐色	淡灰褐色	1/3残存,BC48		
114-2	甕B I,1b	15.4	18.0	-	-	ハケ後ナア、ヘラミガキ	ナア横	小石粒少	良好	良好	黒褐色	暗褐色	ほぼ完形,BA51		
114-3	甕B II,3	15.5	-	-	-	ハケ斜め、ナア	ハケ後ナア横	小石粒	普通	普通	茶褐色	淡褐色	1/6残存,BB49		
114-4	甕B I,1b	15.6	-	-	-	ヨコナア、ナア斜め	ヨコナア、ハケ横	小石粒少	良好	良好	黄褐色	黄褐色	1/4残存,AY53		
114-5	甕D I	15.0	-	-	-	ヨコナア	ヨコナア	小石粒	普通	普通	茶褐色	茶褐色	1/7残存,BA49		
114-6	甕B II	11.6	-	-	-	ハケ後ヘラミガキ	ハケ後ヘラミガキ	小石粒少	良好	良好	黒褐色	茶褐色	1/8残存,AY52		
114-7	甕C-b	10.3	14.9	7.4	16.8	ハケ横、斜め	ハケ後ナア斜め	小石粒、雲母、赤粒	"	"	淡灰褐色	淡灰褐色	1/3残存,BC47		
114-8	甕C-a	10.0	-	-	-	ヨコナア、ハケ斜め	ハケ横	小石粒	不良	不良	灰褐色	灰白色	完形,BA51		
114-9	甕C-b	15.6	-	-	-	ハケ横、斜め	ヨコナア、ナア	小石粒、雲母、赤粒	普通	普通	黒褐色	灰褐色	1/4残存,BB47		

遺構	図版No	器形	法			手法上の特徴			胎土	焼成	色			陶面		備考	
			口径	脚径	底径	器高	外	内			面	文	襷	外	内		断
溝	114-10	甕C	-	-	-	-	ハケ縦	ナテ	小石粒、雲母	普通	暗褐色	暗褐色	暗褐色	黒色	黒色	接合部残存、BB47	
15	115-1	甕D I, b	19.6	23.5	6.1	24.1	ハケ	ナテ横一部縦	小石粒少、赤粒	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	脚部 $\frac{1}{3}$ 欠、BB49	
4	115-2	甕D I, a	16.6	20.5	6.4	20.3	ハケ縦・横・斜め	ナテ横	小石粒	普通	"	"	"	"	"	ほぼ完形、BA51	
層	115-3	甕D I, a	15.8	-	-	-	ハケ縦・横	"	"	"	淡褐色	淡灰褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	$\frac{1}{6}$ 残存、AX53	
	115-4	甕D I, a	15.2	19.4	5.0	19.1	ハケ後ナテ	ナテ後へラミガキ横	"	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	ほぼ完形、AY52	
	115-5	甕D I, a	15.8	18.4	-	-	ヨコナテ・ナテ斜め	ナテ横	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	完形	
	115-6	甕D I, b	15.8	18.4	-	-	ヨコナテ・ナテ斜め	ナテ縦一部横	"	"	黒色	黒色	黒色	黒色	黒色	$\frac{1}{2}$ 残存、AY52	
	116-1	甕D I, d	13.6	20.2	6.7	21.2	ハケ縦・横	ナテ縦一部横	小石粒、雲母	"	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	$\frac{1}{3}$ ~ $\frac{2}{3}$ 欠、BB49
	116-2	甕D I, a	15.0	19.5	4.8	19.1	ハケ縦・横	へラミガキ斜め	小石粒	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	完形、BA51
	116-3	甕D II, c	13.9	15.4	4.0	15.3	へラケズリ後ナテ	ハケ後へラミガキ横	小石粒、雲母	"	"	黒色	黒色	黒色	黒色	黒色	ほぼ完形、BD46
	116-4	甕D I, d	12.6	18.5	6.8	19.4	ヨコナテ、へラケズリ後ナテ	ナテ	小石粒	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	完形、BE45
	116-5	甕D II, b	12.2	16.2	5.0	16.8	ナテ横	ハケ横	"	"	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	"、BD46	
	116-6	甕D, b	15.0	-	-	-	ハケ後ヨコナテ、ナテ横	ナテ縦、横	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	$\frac{1}{8}$ 残存、AY52	
	116-7	甕D I, b	-	19.6	5.0	-	"	ナテ縦、横	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	脚部残存、BD46	
	117-1	甕D II, b	12.0	14.7	6.2	15.0	ハケ縦、ナテ	へラミガキ	小石粒、雲母	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	脚部 $\frac{1}{4}$ 欠、BA51
	117-2	甕D III, a	10.2	11.6	2.8	12.0	ハケ一部ナテ	ハケ後ナテ	小石粒、赤粒	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	完形、BD46
117-3	甕D III, a	10.4	11.4	-	-	ハケ斜め	ハケ横、ナテ	小石粒、雲母	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	底部欠、BB47	
117-4	甕D II, a	13.6	14.4	-	-	ハケ斜め、ナテ	ナテ横	小石粒、赤粒	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	$\frac{1}{4}$ 残存、AY52	
117-5	甕D II, d	10.9	-	-	-	へラミガキ横	へラミガキ横、ナテ	小石粒、雲母	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	"、AX51	
117-6	甕B II	9.9	-	-	-	ハケ斜め	ヨコナテ後へラミガキ横	小石粒	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	底部残存	
117-7	甕D	-	-	6.2	-	ハケ縦	ハケ縦	"	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	"、BB47	
117-8	甕D	-	-	5.8	-	ハケ縦後ナテ横	ナテ斜め	"	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	"、BC47	
117-9	甕D	-	-	4.4	-	ナテ縦・斜め	ナテ縦	"	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	"、"	
117-10	甕D	-	-	4.8	-	ナテ縦	"	"	"	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	"、AX53	
117-11	甕D	-	-	5.6	-	へラケズリ	ナテ	"	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	"、BB50	
117-12	甕D	-	-	6.5	-	ナテ	ハケ横	"	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	ほぼ完形、BA51	
117-13	甕E	21.1	23.5	7.3	21.9	ハケ縦後へラミガキ縦	ハケ後へラミガキ横	小石粒、赤粒	小石粒少、雲母	"	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	$\frac{1}{2}$ 残存、BB49	
118-1	甕G ₁	16.8	-	-	-	タタキ後ハケ	ナテ横	小石粒少	"	"	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	$\frac{1}{8}$ 残存、BB48	
118-2	甕G ₁	15.2	-	-	-	ヨコナテ	ヨコナテ	小石粒、赤粒	"	"	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	$\frac{1}{5}$ 残存、BA49	
118-3	甕G ₁	12.6	-	-	-	タタキ	ハケ横・斜め	小石粒少、雲母	"	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	$\frac{1}{5}$ 残存、BA49	
118-4	甕	18.0	-	-	-	ヨコナテ、ナテ横	ヨコナテ、ナテ斜め	小石粒少	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{8}$ 残存、"	

遺構	図版No	器形	法量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色			調断面		備考
			口径	胴径	底径	器高	外面	内面			面	文	模様	外面	内面	
溝 15 4 層	118-5	甕F	15.8	-	-	-	ハケ斜め	ナア横	小石粒	普通	淡褐色	淡褐色	淡褐色	褐色	1/3残存, AX52	
	118-6	手あぶり	13.0	14.8	-	-	ハケ縦・斜め	ナア斜め	小石粒少	不良	黄灰色	黄灰色	黄灰色	黄灰色	" AX53	
	118-7	壺D ₂	14.2	-	-	-	ヨコナア後へラミガキ縦	ヨコナア後へラミガキ	"	普通	暗褐色	暗褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	1/4残存, BF49	
	118-8	壺D ₃	9.6	-	-	-	"	ヨコナア	小石粒	"	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	1/4残存, BF45	
	118-9	壺E ₁	19.5	23.1	-	-	ハケ後へラミガキ	ハケ横後ナア横	小石粒・赤粒	良好	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	口縁部1/3・底面・BA53	
	118-10	壺F ₂	11.8	20.9	-	-	へラミガキ斜め	へラミガキ横	小石粒・雲母	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色	胴部1/2次, BB48	
	118-11	壺	-	-	7.0	-	不明	不明	小石粒	"	"	淡灰褐色	黒色	黒色	底部1/4次, AY52	
	119-1	甕B1,a	10.2	-	-	-	ハケ縦	ハケ横	小石粒少・雲母	"	"	黒褐色	暗褐色	暗褐色	口縁部1/5次, BD46	
	119-2	甕D,b	7.4	23.5	6.4	25.9	ハケ後ナア	ハケ横、ナア	小石粒	"	"	明褐色	明褐色	淡灰褐色	1/2~1/3次, BB48	
	119-3	甕E	24.0	-	-	-	ハケ縦後ナア縦	ナア横	小石粒	"	"	暗茶褐色	暗茶褐色	黄灰色	1/4残存, BE45	
	119-4	甕G ₁	16.6	-	-	-	タタキ	ナア斜め	"	"	"	淡灰褐色	黄灰色	淡灰褐色	"	
	119-5	甕D	-	-	6.0	-	ハケ縦一部ナア	ナア	小石粒少	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存, BD46	
	119-6	高坏F ₁	15.6	-	13.0	12.1	へラミガキ斜め・縦	へラミガキ、ナア	小石粒少・雲母	良好	褐褐色	明茶褐色	明茶褐色	褐褐色	口縁部1/3次, BB50	
	119-7	高坏F ₁	17.0	-	-	-	へラミガキ	へラミガキ	小石粒少	普通	黄灰色	黄灰色	黄灰色	茶褐色	口縁部1/3次, AY52	
	119-8	高坏F ₂	17.2	-	-	-	ナア後へラミガキ	ナア後へラミガキ斜め	"	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	黄灰色	1/3残存, AY52	
	119-9	高坏F ₁	-	-	-	-	へラミガキ	へラミガキ	小石粒	普通	濃黄灰色	濃黄灰色	黄灰色	黄灰色	接合部残存, AY52	
119-10	小丸C	8.4	9.0	-	-	ナア横、斜め	指頭痕	"	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	2/3残存, BD46		
119-11	小丸B	7.0	7.2	-	7.7	へラケズリ	"	"	"	"	明茶褐色	明茶褐色	"	口縁部1/2次, BB48		
119-12	小丸C	7.8	-	-	-	ナア縦	ナア	小石粒・赤粒	良好	褐褐色	明茶褐色	明茶褐色	黒色	1/2残存, BF45		
119-13	小丸C	6.6	-	-	-	ハケ縦後ナア斜め	ハケ横	小石粒少	"	"	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	1/3残存		
119-14	小丸C	-	7.6	2.4	-	ナア	ナア	小石粒	普通	明茶褐色	明茶褐色	淡褐色	淡褐色	口縁部2/4次, BD47		
119-15	小丸C	-	7.2	4.5	-	"	"	小石粒多	"	"	褐褐色	褐褐色	黒色	口縁部・胴部1/2次, AY53		
119-16	鉢A ₁	-	-	3.2	-	ナア縦	不明	小石粒	"	"	赤褐色	赤褐色	赤褐色	口縁部次, BE46		
溝 15 1 層	120-1	壺E ₁	14.1	-	-	-	ハケ縦	ナア横	"	"	明茶褐色	明茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/6残存	
	120-2	甕D	-	-	5.2	-	"	ナア縦	小石粒・赤粒	"	褐褐色	黄灰色	黄灰色	黄灰色	2/3残存	
	120-3	甕G ₁	-	-	5.2	-	タタキ後ハケ	へラミガキ	小石粒	"	"	褐褐色	褐褐色	淡褐色	1/3残存	
	120-4	高坏F ₁	16.4	-	-	-	へラミガキ	へラミガキ斜め	小石粒少・雲母	良好	黄灰色	茶褐色	茶褐色	"	1/5残存	
	120-5	器台A _{2a}	9.2	-	-	-	"	へラミガキ一部ヨコナア	小石粒少	普通	明茶褐色	明茶褐色	明茶褐色	灰白色	1/2残存	
	120-6	鉢	15.8	-	-	-	"	へラミガキ縦	"	良好	明茶褐色	明茶褐色	淡褐色	淡褐色	1/9残存、内面黒色、古墳後跡	
120-11	甕D,b	19.2	-	-	-	ハケ縦	ハケ横	小石粒	"	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/4残存		
120-12	甕	24.9	26.6	-	-	へラミガキ斜め	ハケ後ナア横	小石粒少	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	胴部2/4次、古墳後期		

遺構	図版No	器形	量(cm)			手法上の特徴				胎土	焼成	色			備考
			口径	胴径	底径	器高	外	内	面			文	様	外	
溝 1 層	120-13	壺	-	-	8.6	-	ヘラミガキ横	ナデ横		小石粒少	良好	暗茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	$\frac{2}{3}$ 残存、古墳後期 底部残存
	120-14	壺	-	-	5.8	-	ハケ横	不明		小石粒、赤粒	普通	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	"
	120-15	壺	-	-	6.4	-	ヘラミガキ横	ハケ後ヘラミガキ		小石粒	"	茶褐色	茶褐色	暗茶褐色	$\frac{2}{3}$ 残存
	120-16	甕	-	-	5.5	-	ナデ縦	ナデ縦		"	"	黒色	黒色	茶褐色	脚部残存、古墳後期
	120-17	高坏	-	-	-	-	ヘラミガキ縦	ヨコナデ		小石粒少	"	黄灰色	黄灰色	淡灰褐色	$\frac{1}{5}$ 残存、中世
	120-18	天目茶碗	-	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ		黒粒	"	黒色	黒色	白色	"
	126-17	壺C ₀	-	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	棒状浮文	小石粒、赤粒	"	濃黄灰色	濃黄灰色	灰褐色	一部残存、AK53
	126-18	甕C _{1a}	13.2	-	-	-	ハケ横、縦	ハケ後ナデ		小石粒	"	灰黑色	灰褐色	黒色	$\frac{1}{3}$ 残存、AD47
溝 外	126-19	鉢E ₁	14.2	-	-	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	暗文	精良	良好	茶褐色	茶褐色	黄褐色	$\frac{1}{15}$ 残存、AK54
	126-20	鉢E ₁	14.0	-	-	-	"	"	"	"	"	"	"	茶褐色	$\frac{1}{6}$ 残存、AG50
	126-21	鉢A ₁	-	-	3.4	-	ヘラケズリ後ヘラミガキ斜め	ナデ横、斜め		小石粒	普通	濃黄灰色	濃黄灰色	濃黄灰色	底部残存、AV50
	126-22	鉢C	-	-	4.6	-	ナデ横	"		小石粒、雲母	"	褐色	褐色	淡灰褐色	"、AK47
	126-23	小丸A	10.0	-	2.2	4.9	ハケ斜め後ナデ	ハケ斜め、ナデ横		小石粒	"	黄灰色	黄褐色	黄灰色	$\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{8}$ 残存、AG49
	126-24	器台Aa	-	-	8.4	-	不明	不明		"	"	"	"	黄灰色	脚部 $\frac{1}{6}$ 残存、AB48
	126-25	壺	-	-	4.0	-	ナデ	ナデ、ハケ横		"	"	暗褐色	暗褐色	茶褐色	底部残存、AK47
	126-26	高坏D	-	-	12.2	-	ヘラミガキ縦	ハケ後ナデ横、ヨコナデ		"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	脚部残存、"
	126-27	高坏B	-	-	11.2	-	ナデ横、ヘラミガキ縦	シボリ、ナデ横		"	"	濃黄灰色	濃黄灰色	黄灰色	"、AD47

第26表 AMD 弥生時代中期土器観察表

遺構	図版No	器形	量(cm)			手法上の特徴				胎土	焼成	色			備考
			口径	胴径	底径	器高	外	内	面			文	様	外	
住	143-1	壺Ea	9.2	18.3	6.8	16.5	ヘラミガキ	ナデ、ハケ横	IC ₁ 、III A ₁ 、WE ₂ 、V ₄	小石粒	普通	茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠
	143-2	甕A ₁	-	22.4	-	-	ナデ、ナデ縦	ナデ	WF ₂	"	"	"	茶褐色	"	脚部残存、埋設炉
住	143-8	壺A ₁	-	-	-	-	ナデ	"	III B ₃ 、WB ₅	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{2}$ 残存
	143-9	壺C ₁	12.6	-	-	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	IC ₁ 、丹彩	小石粒少	良好	暗赤色	暗赤色	黄褐色	$\frac{1}{3}$ 残存
	143-10	壺	-	-	7.6	-	ナデ	ナデ	V ₄	小石粒、赤粒	普通	暗茶褐色	暗茶褐色	赤褐色	$\frac{1}{2}$ 残存
	143-14	鉢D	21.0	-	-	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	IC ₁ 、丹彩	小石粒	"	暗赤色	暗赤色	濃黄灰色	$\frac{1}{12}$ 残存
144-1	甕B ₁	18.1	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	I A ₁ 、III C ₂	小石粒少	"	暗褐色	暗褐色	暗褐色	$\frac{1}{6}$ 残存	

遺構	図版No	器形	法 量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考	
			口径	胴径	器高	外面	内面	文様			外面	内面	断面		
															外面
18	144-6	甕	-	-	8.2	ヘラミガキ	ナア	ナア	V ₄	小石粒、赤粒	普通	黒褐色	淡褐色	褐色	$\frac{1}{4}$ 残存 底部残存
住	144-7	甕	-	-	7.0	ナア	"	"	V ₁	小石粒	"	黒褐色	黒褐色	褐色	

第27表 A R Y 弥生時代中期土器観察表

遺構	図版No	器形	法 量(cm)			手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考
			口径	胴径	器高	外面	内面	文様			外面	内面	断面	
5	155-1	壺Ba	15.2	-	-	ナア、ヨコナア	ヨコナア	IC ₁ 、II B ₃	小石粒、雲母、赤粒	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{2}{3}$ 残存
9	155-2	壺Ba	17.7	29.6	11.4	ハケ横・縦・斜め	ハケ横	IB ₁ 、II A ₁ 、III A ₁ 、V ₄	小石粒	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	ほぼ完形 底部残存
住	155-9	壺	-	-	9.0	ナア	ナア	V ₁	小石粒少	"	"	淡黄褐色	茶褐色	口縁部欠
	155-10	注口土器	-	9.6	5.0	ハケ	"	III C ₃ 、IV D ₁ 、V ₄ 、丹彩	小石粒	"	赤茶色	暗褐色	暗褐色	$\frac{1}{2}$ 残存
	156-1	壺A ₁	-	33.5	-	ハケ縦	ナア横	IV B ₁ 、丹彩	"	"	茶褐色	茶褐色	"	ほぼ完形
	156-2	甕A ₁	22.8	20.0	27.1	"	"	IA、IV E ₂ 、V ₃	"	"	明茶褐色	黄褐色	"	$\frac{1}{2}$ 残存
	156-3	甕A ₂	18.8	18.2	-	ナア、ヘラミガキ縦	ヨコナア	IB ₂ 、III C ₃ 、IV E ₂	"	"	茶褐色	茶褐色	淡茶褐色	底部欠
	156-4	甕A ₁	26.6	23.7	-	ハケ横・縦	ハケ横	IA	"	"	茶褐色	"	茶褐色	$\frac{1}{2}$ 残存
	156-5	甕A ₁	20.0	18.0	-	ナア縦	ハケ横、ナア	"	"	"	黄褐色	淡褐色	淡褐色	"
	156-6	甕	-	-	8.0	ヘラミガキ	ナア	V ₃	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	$\frac{2}{3}$ 残存
	156-7	甕	-	-	7.7	ヨコナア	"	V ₄	"	"	黄灰色	黄灰色	茶褐色	$\frac{2}{3}$ 残存
10	157-1	壺A ₂ b	12.2	-	-	ナア	"	IC ₃ 、III C ₃	"	"	"	"	"	$\frac{1}{2}$ 残存
住	157-4	壺A ₁	10.7	-	-	"	"	IC ₁	小石粒、雲母	"	褐色	褐色	褐色	$\frac{1}{5}$ 残存
住	157-9	鉢A ₁	25.2	-	-	"	"	IA	小石粒	"	黒色	茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{2}$ 残存
15	157-13	壺A ₂ b	10.4	-	-	ヨコナア	ヨコナア	IC ₁	小石粒、雲母、赤粒	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	$\frac{3}{4}$ 残存
住	157-14	壺A ₁	8.8	-	-	不明	ナア	IC ₁ 、II B ₅	"	"	暗茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	"
	157-15	壺A ₁	-	29.2	-	ナア	不明	IV D ₁ 、丹彩	小石粒、雲母	不良	暗褐色	暗褐色	茶褐色	$\frac{1}{3}$ 残存
	158-1	壺A ₁	-	-	-	ナア縦・横	ナア縦・横	V ₄	小石粒	普通	暗褐色	暗褐色	暗褐色	$\frac{1}{2}$ 残存
	158-8	甕	-	-	7.2	ナア	ヨコナア	V ₄	"	"	淡褐色	淡褐色	淡褐色	$\frac{1}{4}$ 残存
23	158-11	壺A ₁	-	-	-	ナア縦	"	IV C ₁ 、丹彩	"	"	黒色	茶褐色	茶褐色	$\frac{2}{3}$ 残存
住	158-12	壺A ₁	9.4	-	-	ヨコナア	"	IC ₁	小石粒、雲母、赤粒	"	暗茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	$\frac{1}{4}$ 残存
	158-14	壺	-	-	7.4	ナア	ナア	V ₁	小石粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	底部残存

遺構	図版No	器形	法			手法上の特徴			胎土	焼成	色			備考
			口径	器高	器底	外	内	文			内面	外面	断面	
23 住	158-20	鉢	-	-	5.4	ナテ縦	ナテ	V ₄	小石粒	普通	茶褐色	茶褐色	灰褐色	1/4残存 底部残存
	159-1	甕	-	-	9.8	ヨコナテ	"	V ₁	小石粒、赤粒	"	明茶褐色	灰褐色	黄色	"
	159-2	甕	-	-	5.2	ナテ、ナテ横	ヨコナテ	"	小石粒、雲母	"	灰褐色	明茶褐色	茶褐色	1/4残存
	159-3	甕	-	-	6.6	ナテ	ナテ	"	小石粒	"	暗茶褐色	黒褐色	茶褐色	1/4残存
	159-4	鉢Cb	-	-	4.8	"	ナテ横	V ₄	"	"	黒褐色	茶褐色	茶褐色	口縁部1/2欠
24 住	159-12	甕A ₁	23.1	-	-	ヨコナテ、ナテ縦	"	IC ₁ 、VF ₃	小石粒、雲母	"	黒褐色	暗褐色	暗褐色	1/2残存
	159-15	甕	-	-	6.8	ナテ横	剥落	V ₃	小石粒、赤粒	"	黒褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存
	159-16	壺	-	-	10.4	ヨコナテ	ヨコナテ	V ₁	小石粒	"	茶褐色	灰褐色	茶褐色	1/2残存
	159-17	壺A ₁	13.4	-	-	"	剥落	IC ₁	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存
55 住	159-20	壺	-	-	10.2	不明	"	V ₂	小石粒、赤粒	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/5残存
	159-21	甕A ₁	27.8	22.9	-	ナテ	ヨコナテ、ハケ横	IC ₁ 、III C ₂ 、WF ₂	小石粒	"	黒褐色	暗茶褐色	暗茶褐色	1/2残存
	160-1	甕A ₁	21.6	18.8	-	ヨコナテ	ヨコナテ、ナテ横	IA、WF ₂	"	"	暗茶褐色	黒褐色	黒褐色	1/4残存
	160-3	甕	-	-	6.6	ハケ横	不明	V ₄	小石粒、雲母、赤粒	"	黒褐色	黒褐色	茶褐色	1/2残存
	160-4	甕	-	-	7.3	ヘラミガキ、ナテ	ナテ横	V ₁	小石粒、赤粒	"	茶褐色	茶褐色	"	1/4残存
	160-5	壺A ₁	-	-	-	ナテ	ヨコナテ	III B ₃ 、IV B ₁	小石粒、雲母、赤粒	不良	"	淡茶褐色	"	"
55 住	160-7	壺Bb	12.8	-	-	"	ヨコナテ後ヘラミガキ横	IB ₁	小石粒、雲母	"	褐色	褐色	褐色	1/2残存
	160-11	壺	-	-	7.6	ヨコナテ	ナテ	V ₁	小石粒	普通	灰褐色	黄褐色	黄褐色	1/2残存
	160-12	壺	-	-	6.6	ナテ縦	不明	V ₄	"	"	黄褐色	茶褐色	茶褐色	1/2残存
	160-13	壺	-	-	8.6	ヨコナテ	ナテ	V ₃	小石粒	普通	黄褐色	明茶褐色	淡黄灰色	底部残存
	160-14	甕A ₁	24.8	20.9	7.2	ナテ後ヘラミガキ	ナテ後ヘラミガキ縦	IB ₁ 、III C ₂ 、WF ₁ 、V ₄	小石粒、雲母	"	黒褐色	黒褐色	明茶褐色	ほぼ完形
	161-4	甕	-	-	8.0	ナテ縦、ヨコナテ	ナテ	V ₃	小石粒	"	褐色	明茶褐色	明茶褐色	1/4残存
161-5	甕	-	-	7.0	ヨコナテ	ヨコナテ	V ₁	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	"	
54 住	161-23	鉢A ₁	21.8	-	-	ナテ	ナテ横	IC ₁	"	"	黒褐色	黒褐色	"	1/2残存
	161-25	壺	-	-	-	ヘラミガキ	"	III A ₁	"	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/3残存
遺構 外	163-1	壺A ₁	14.0	-	-	ヨコナテ	ヨコナテ	IC、II B ₃	"	"	褐色	褐色	褐色	1/7残存、CB51
	163-2	鉢D	-	-	5.9	ヘラミガキ斜め	ヘラミガキ斜め	V ₄ 、丹彩	小石粒少	良好	暗赤色	暗赤色	淡茶褐色	1/4残存
	164-35	高坏	-	-	-	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	丹彩	"	"	淡黄灰色	淡黄灰色	接合部残存、BY45	
	164-36	手づくね	-	-	5.0	ナテ	ナテ	IA	小石粒、赤粒	"	黄灰色	黄灰色	底部残存、M16	
	164-37	手づくね	-	-	3.5	"	"	IA	小石粒、雲母	普通	褐色	褐色	ほぼ完形、"	
164-38	杓子型	-	-	-	"	"	"	小石粒	良好	茶褐色	茶褐色	茶褐色	一部残存、CD54	

第28表 TAN・KUR 恒川IV期遺構出土土器観察表

遺構	図版No	器形	法 量(cm)			手法上の特徴			胎 土	焼 成	色			備 考
			口径	胴径	底径	器高	外 面	内 面			文 様	外 面	内 面	
方	22-10	壺	-	-	8.2	-	不明	V ₁	小石粒	不良	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	1/4残存、弥生中期
周	22-11	壺	-	-	6.0	ナデ	ナデ	"	"	普通	茶褐色	茶褐色	黒褐色	底部残存、"
3	22-12	鉢B	11.6	-	-	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	ヘラミガキ	小石粒、赤粒	"	黒褐色	暗褐色	濃黄灰色	2/3残存、"
22-21	高坏	高坏	-	-	-	ヘラミガキ横・縦	ヘラミガキ	小石粒、赤粒	"	"	黄灰色	濃黄灰色	橙褐色	口縁部残存
22-22	壺	壺	-	-	6.2	不明	不明	小石粒少、赤粒	"	"	橙褐色	橙褐色	橙褐色	底部残存

第29表 AMD 恒川IV期遺構出土土器観察表

遺構	図版No	器形	法 量(cm)			手法上の特徴			胎 土	焼 成	色			備 考
			口径	胴径	底径	器高	外 面	内 面			文 様	外 面	内 面	
4	144-8	甕	34.7	37.6	9.5	ナデ横	ナデ横	波状文、斜走短線文	小石粒、雲母	普通	茶褐色	茶褐色	茶褐色	胴部1/4大
住	144-9	甕	-	-	8.2	ナデ	ナデ		小石粒多、雲母	"	黄灰色	黄灰色	黄灰色	1/2残存
	144-10	甕	-	-	10.2	剥落	剥落		小石粒、雲母、赤粒	"	茶褐色	茶褐色	茶褐色	1/4残存、弥生中期

第30表 ARY 恒川IV期遺構出土土器観察表

遺構	図版No	器形	法 量(cm)			手法上の特徴			胎 土	焼 成	色			備 考
			口径	胴径	底径	器高	外 面	内 面			文 様	外 面	内 面	
56	161-8	壺	-	-	7.6	ナデ	ナデ		小石粒多	普通	褐色	褐色	褐色	底部残存
住	161-9	壺	-	-	6.6	"	ナデ横		小石粒	"	淡黄褐色	淡茶褐色	淡褐色	1/4残存
墓石1	161-26	高坏	-	-	14.0	ハケ後ヘラミガキ縦	ヨコナデ		"	不良	淡赤褐色	黄褐色	淡赤褐色	"

第31表 NAR・KAK 石器観察表

遺構	図版No.	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
遺構	1-4	横刃型石器	9.2 (9.8)	3.2	1.0	35	KAK BC50 基部欠。刃部磨減。NAR ミ 1 NAR EB50 基部欠。刃部磨減。NAR CH54 刃部磨減。NAR CG45
遺構	5	打製石斧	7.0	7.0	2.5	(240)	
外	6	"	12.3	4.7	1.7	125	
外	7	"	(9.7)	5.7	1.9	(160)	
外	8	"	8.3	3.2	1.2	40	緑色片岩

第32表 TAN・KUR 石器観察表

遺構	図版No.	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
住	26-1	打製石斧	6.9	5.7	1.8	107	粗雑な調整。幅広。刃部磨減。 小形。 剥離面を残す。 先端部欠。 II
	2	"	8.9	3.5	1.0	42	
	3	磨製石斧	7.2	2.8	1.0	30	
	4	磨製石鏃	(2.7)	2.4	0.25	(2.0)	
	5	磨製石鏃半成品	3.4	2.0	0.3	2.9	
住	26-6	打製石斧	18.0	7.6	2.55	510	刃部磨減。 基部片か。 剥離面を広く残す。b面基部に自然面。 III 右側縁研磨。 III " 自然面あり。 小破片。
	7	"	14.4	7.1	2.3	320	
	8	打製石斧?	(5.3)	(6.0)	1.4	-	
	9	磨製石斧	9.0	3.0	1.6	65	
	10	磨製石鏃半成品	3.4	2.3	0.5	4.2	
	11	"	5.0	2.9	0.75	-	
住	26-12	打製石斧	(6.5)	5.9	2.65	(142)	基部のみ。右側縁は節理面。 b面は破損後に再調整。 刃部磨減。
	13	磨製石斧	9.4	4.6	1.15	95	
	27-1	打製石斧	17.7	8.5	2.7	517	
住	2	"	17.6	8.8	2.8	453	刃部著しく磨減。 基部は破損後に再調整。 左側縁は節理面。刃部磨減。
	3	"	14.3	8.0	3.3	389	
	4	"	17.3	8.0	2.4	410	
	4	"	17.3	8.0	2.4	410	

遺構	図版No	器種	法			石質	備考			
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)					
19住	27-5	打製石斧	B	9.7	6.5	1.9	150	硬砂岩	基部は破損後に再調整。	
	6	"	B	9.2	5.0	1.2	79	"	刃縁・側縁は鋭い。	
	7	"	B	12.6	7.2	2.4	293	"	左側縁に抉り。	
	8	"	B	12.9	5.5	1.9	196	緑色片岩	ab面に自然面。	
	9	"	B	11.1	4.4	1.8	116	硬砂岩		
	10	横刃型石槍丁	C	5.6	8.8	1.6	80	"		
	11	磨製石鏃	A ₂	3.5	1.7	0.2	(1.3)	粘板質片岩	左逆刺欠。	
	12	"	A	(2.2)	1.8	0.28	(1.4)	珪質片岩	先端欠。	
	13	磨製石鏃床成品	A	(2.4)	1.8	0.2	(1.4)	粘板質片岩	III i " 未穿孔。	
	14	"	A	(1.3)	2.3	0.3	(0.8)	粘板質片岩	IV " 穿孔未貫通。	
	15	磨製石鏃	A	(2.1)	1.1	0.2	(0.7)	珪質片岩	左半分欠。	
	16	磨製石鏃床成品	"	4.2	2.7	0.33	5.7	粘板質片岩	III ii ab面研磨。	
	17	"	"	(3.2)	2.1	0.5	(4.4)	珪質片岩	III i a面研磨, b面に自然面。	
	18	"	"	6.0	2.3	0.35	5.6	粘板質片岩	III j ab面研磨。	
	19	"	"	6.0	2.9	0.5	9.7	珪質片岩	III i a面研磨, 凹基。	
	20	"	"	5.2	3.8	0.5	8.9	"	II	
	21	"	"	4.6	2.8	0.45	5.9	"	II	
	22	"	"	4.6	1.9	0.45	4.4	"	II	
	23	"	"	3.5	2.3	0.6	4.7	"	II	
	24	"	"	2.7	1.6	0.25	1.6	粘板質片岩	II	
	25	"	"	3.6	2.4	0.5	4.3	珪質片岩	II	
	26	砥石	"	(5.8)	(4.1)	(3.7)	(108)	片麻岩		
	27	"	"	(3.5)	(3.3)	(2.7)	(24)	"		
	28	"	"	(5.9)	(5.8)	(3.1)	(105)	"	同一個体の破片か、他に大小10片あり。	
	28-1	台石	"	31.8	26.8	8.5	9700	硬砂岩	扁平な楕円形。a面に丹附着。建13の遺物か。	
	13住	28-2	磨製石斧床成品	(D)	13.7	7.9	3.05	537	輝綠凝灰岩	b面・左側縁をわずかに研磨。
		3	有肩扇形状石器	B	7.7	11.4	2.5	228	硬砂岩	刃部a面にロー状光沢物附着。
		4	磨製石斧	A ₁	14.0	5.3	4.1	537	超塩基性岩	基部・基部に敲打痕が残る。
88住	28-5	打製石斧	B	14.7	5.5	1.7	177	硬砂岩	粗雑な調整。	
	6	磨製石鏃床成品	"	(2.2)	(1.7)	0.3	(1.1)	珪質片岩	II 基部欠、鏃あり。	
33住	28-7	打製石斧	B	10.5	4.4	1.3	95	緑色片岩	刃部磨減。	
	8	磗?	"	7.9	9.0	1.9	164	珪質片岩	円形。周縁を調整。	

遺構	図版No	器種	法			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
33 住	28-9	剥片	5.6	8.1	1.5	硬砂岩	あるいは横刃型石器として使用か。
	10	"	6.2	7.2	1.75	"	"
	11	敲打器	F 19.5	5.8	4.9	輝綠凝灰岩	両端に剥離痕と敲打痕。敲打による糸掛け状の挟り部に横方向の磨痕。
59 住	29-1	打製石斧	A 20.8	9.0	3.9	硬砂岩	両側縁直し。
	2	"	(A) (11.0)	6.5	3.9	"	刃部欠。
	3	砥石	11.7	11.4	10.5	砂岩	風化。砥面1面。ドット部分は風化による破損部。
77 住	29-4	礫器	11.4	7.6	5.0	輝綠凝灰岩	b面に剥離調整。不定形。
	5	打製石斧	A (16.8)	11.2	5.2	硬砂岩	基部欠。粗雑な調整。a面に敲打痕。
5 住	29-6	打製石斧	(A) (9.7)	6.3	2.7	硬砂岩	刃部欠。
	7	有肩扇形状石器	B 10.0	(9.7)	2.2	"	刃部欠。b面磨減。
	8	挟入打製石槍丁	A 4.9	8.5	0.7	"	披熱。
	9	"	B 3.6	5.2	0.6	"	"
	30-1	敲打器	E 9.7	6.9	4.5	"	両端に敲打痕。
	2	"	E 7.7	5.3	4.0	花崗岩	一端に敲打痕。
	3	"	E 7.7	4.2	2.7	輝綠凝灰岩	両端に敲打痕。
	4	"	E 6.2	4.4	2.8	"	一端に敲打痕。
	5	"	E 6.5	3.7	2.5	"	一端にかたい敲打痕。
	-	"	E 5.5	2.9	2.4	"	" 30-5とほぼ同形。
6 7 8 9 - 10 11 12 13	6	"	E 7.6	3.1	1.5	"	両端に敲打痕と剥離痕。
	7	磨減痕のある礫	9.4	2.5	2.1	"	a面磨減。
	8	小礫	6.8	3.6	2.5	"	下部部に敲打痕か。
	9	"	3.5	5.1	1.35	硬砂岩	使用痕なし。
	-	環状石器	-	-	-	"	小破片。
	10	環状石器未成品	8.7	(5.4)	2.3	輝綠岩	半分欠。周縁に調整剥離。
	11	磨製石鏃未成品	5.6	2.6	0.43	珪質片岩	II
	12	砥石	21.0	11.6	9.0	砂岩	ab面は凹きみの砥面。左側面は凸きみの砥面。
	13	台石	29.4	29.3	9.5	硬砂岩	a面の凹凸のある曲面に丹付着。
	7 住	30-14	有肩扇形状石器	A 12.0	12.4	1.5	硬砂岩
15		"	B (11.7)	(13.5)	3.0	"	刃部欠。
16		"	B 9.4	8.4	1.8	"	"
31-1	1	有肩扇形状石器?	10.3	10.4	2.5	"	浅い挟りあり。刃部剥離。
	2	挟入磨製石槍丁	A 3.8	7.9	0.9	輝綠凝灰岩	a面に自然面を残す。両側縁に挟りもち、穿孔は未貫通。背縁・刃縁は磨減。

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考		
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)				
7 住	31-3	挟入打製石廬丁	B	5.1	6.6	1.4	59	硬砂岩	挟入部磨減。刃部にロー状光沢物付着。 挟りはなく長方形。 両端剥離。ab面・右側面に敲打痕。a面に磨面。 長短軸の縁部に敲打痕。 両端・ab面に敲打痕。 半分欠。周縁を剥離。 半分欠。原形不明。 先端部縁刃磨減。 II 基縁磨減。 II II 雑部周縁研磨。 7住床面上の黒石と5住の炉縁石が接合。 周縁一部に剥離。a面に敲打痕と磨減痕。 破片。砥面1面。 刃部欠。 " 左半分のみ。 基部欠。刃部磨減 小形。刃縁は鋭い。あるいは横刃型石廬丁B類か。 刃部に小剥離痕。 " 刃部左端欠。 基部破損後再使用か。刃部にロー状光沢物付着。 背部折斷。 背縁・挟入部磨減。 " 挟入部磨減。 背縁・挟入部磨減。 右挟入部磨減。
	4	"	B	4.0	8.8	0.85	38	"	
	5	横刃型石廬丁	B	5.1	6.0	1.0	32	"	
	6	"	C	4.9	8.3	1.4	61	"	
	7	敲打器	F	12.3	4.9	4.3	365	ホルンフェルス	
	8	"	G	11.3	8.1	4.5	588	硬砂岩	
	9	"	G	12.8	7.6	4.2	745	安山岩	
	10	環状石器未成品		(5.7)	9.8	1.9	(156)	硬砂岩	
	11	加工された礫		(6.0)	9.7	2.7	(244)	"	
	12	磨製石鏃	B	5.5	3.2	0.3	5.2	粘板岩	
	13	磨製石鏃未成品		6.7	3.2	0.64	19.8	珪質片岩	
	14	"		4.5	2.4	0.35	4.6	"	
	15	磨製石鏃		3.3	2.4	0.7	4.5	硬砂岩	
	16	台石?		26.5	25.6	7.9	7500	花崗岩	
	17	"		34.5	26.0	9.4	11300	輝綠凝灰岩	
	—			(9.3)	(6.2)	(5.5)	(405)	砂岩	
	8 住	32-1	打製石斧	(A)	(14.0)	6.6	2.6	(305)	
2		"	(A)	(11.0)	6.0	2.0	(195)	"	
3		"	(A)	(11.2)	(4.5)	1.8	(110)	"	
4		"	(A)	(9.4)	7.5	2.3	(210)	"	
5		"	B	6.1	4.1	1.2	35	"	
6		有肩扇状形石器	A	10.8	13.7	2.2	297	"	
7		"	B	11.8	15.3	3.0	595	"	
8		"	B	9.5	(9.5)	1.4	(185)	緑色片岩	
9		"		(5.5)	(10.2)	1.2	(70)	硬砂岩	
10		挟入打製石廬丁	B	4.3	8.4	1.1	55	"	
11		"	B	3.2	7.3	1.15	46	"	
12		"	B	4.1	8.5	0.9	35	"	
13		"	B	4.0	6.2	1.35	38	"	
14		"	A	5.1	7.7	1.25	50	"	
15		"	B	3.6	8.0	0.9	30	"	
16		横刃型石廬丁	C	5.0	5.8	0.8	38	"	

遺構	図版No	器種	法			量	石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				重さ(g)
住	8	環状石器未成品	(5.5)	8.2	1.65	(106)	硬砂岩	半分欠。	
	18	環状石器	2.25	7.9	7.2	160	珪質片岩	14住と接合。	
	19	磨滅痕のある剥片	8.2	2.7	0.85	23	緑色片岩	側縁とb面研磨。	
	20	磨製石鏃	(1.9)	(1.5)	0.3	(0.8)	粘板岩	左半分欠。	
	21	磨製石鏃未成品	7.3	3.3	0.6	15.5	珪質片岩	II	
	22	"	4.5	2.7	0.5	8.7	"	II	
	23	"	4.2	3.0	0.5	7.3	粘板岩	II	
	33-1	磨滅痕のある礫	9.5	3.2	1.35	65	珪質片岩	b面剥離。ab面に著しい磨面。左側縁に板状の金属器によるダメージ。	
	2	敲打器	11.5	5.6	2.8	257	硬砂岩	ab面磨滅。a面にひっかき状のキズあり。端部に敲打痕。	
	3	"	9.3	6.4	4.1	377	"	下部部と折断面端部に敲打痕。	
	4	ダメージのある礫	7.3	12.8	6.2	685	"	側断面縁部を打撃。	
5	砥石	16.1	14.1	8.2	-	砂岩	砥面1面。		
6	"	20.5	19.7	17.5	7900	"	縦方向に細長い砥面を10余面もつ。		
-	-	台石	-	-	-	-	-	遺構図に記録。円形を呈し、大形。	
12	33-7	礫器	7.1	7.8	2.15	146	硬砂岩	周縁を調整。	
住	32-18	環状石器	-	-	-	-	珪質片岩	8住と接合。	
住	17	33-8	打製石斧	(9.8)	9.7	2.05	(200)	硬砂岩	基部欠。
	9	有肩扇形状石器	9.3	11.3	2.4	280	"	刃部にロー状光沢物付着。	
	10	"	(7.0)	(8.4)	1.8	(86)	"	刃部片。	
	11	"	9.3	(9.0)	2.3	(280)	"	刃部欠。	
	40-7	打製石鏃	-	-	-	-	黒曜石		
住	16	34-1	打製石斧	12.4	8.2	2.2	250	硬砂岩	刃部磨滅。
	2	加工された礫	17.7	7.2	3.9	760	ホルンフェルス	右側縁に剥離痕あり。	
	3	両端を欠く礫	16.7	5.3	5.1	590	硬砂岩	細物石か。	
	4	磨製石斧	(4.1)	3.3	0.97	(24)	"	基部欠。縄文時代の所産であろう。	
住	23	34-5	打製石斧	11.5	5.2	2.0	155	硬砂岩	刃部は潰れる。
	6	横刃型石器	8.0	11.1	1.6	190	"	背部b面に調整。	
	7	打製石斧?	22.0	6.6	4.0	840	輝緑凝灰岩	b面のみ調整。ab面に2対の敲打痕。	
	8	台石	23.0	12.8	5.3	2000	"	a面に擦痕。	
	35-1	磨製石鏃未成品	(1.3)	(2.1)	(0.15)	(0.7)	珪質片岩	III iv 破片。	
	2	"	4.0	2.6	0.5	5.8	粘板岩	III i a面研磨。	
	3	"	5.9	2.8	0.6	14.2	珪質片岩	II	

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
23 住	35-4	磨製石鏃未成品	6.2	3.0	0.95	硬砂岩	II
	5	"	5.0	2.7	0.5	珪質片岩	II
	6	"	4.6	2.3	0.5	"	II
	7	"	4.7	2.5	0.7	"	II
	8	"	(3.5)	2.3	0.4	粘板岩	II
	9	"	3.8	2.9	0.4	"	II
	35-10	編物石	14.9	5.8	5.7	硬砂岩	
	11	"	14.5	6.5	5.1	"	
	12	"	14.6	6.0	5.2	"	
75 住	13	"	15.2	7.1	4.8	"	
	14	"	14.6	7.6	4.2	片麻岩	
	15	"	14.7	7.5	4.6	硬砂岩	a面に敲打痕。
	16	"	14.5	8.2	3.8	"	
	17	"	15.1	7.8	3.7	"	
	18	"	14.4	7.5	3.8	"	
	36-1	"	16.0	6.6	5.0	"	
	2	"	17.0	6.9	3.7	"	
	3	"	13.7	5.6	4.8	ホルンフェルス	
	4	"	13.7	5.5	5.3	片麻岩	
	5	"	15.2	6.7	2.8	硬砂岩	
	6	"	14.1	6.2	3.7	"	
	7	"	12.8	8.0	2.8	片麻岩	
	8	"	15.4	5.6	4.5	硬砂岩	両端欠。
	9	"	13.8	6.8	3.6	"	左側縁欠。
	10	"	12.1	6.6	3.5	"	
	11	"	12.0	6.5	3.5	"	
	12	"	12.3	6.0	3.1	"	
13	"	10.7	6.1	3.7	"		
14	"	12.5	5.1	3.4	チャート		
15	"	13.0	5.5	2.7	硬砂岩		
37-1	"	10.4	5.5	2.6	"		
2	"	11.1	5.2	2.5	"		

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
75 住	37-3	縄物石 打製石斧 " 砥石	11.0	4.4	3.4	硬砂	刃部磨減。 " 基部欠。 b面欠。砥面6面あり。ドット部分は風化による破損部。 刃部磨減。 破損後に再調整。 刃部磨減。両側縁に潰し。 " " 階段状剥離で調整。 背縁、左側縁研磨。刃部a面磨減。 刃部磨減。 " " b面に自然面。 刃部わずかに磨減。 背縁は前理面を調整。 刃部磨減。 刃部磨減。 刃部にロー状沢物付着。 刃部破損後も使用。 被熱。全体に磨減。 全体に磨減。 左半分欠。 刃縁磨減。 刃部右側欠。 背部折断。扶入部磨減。	
	4		10.0	3.9	1.35	緑色片岩		
	5		(9.7)	5.5	1.2	(80)		"
	6		11.5	11.0	10.3	1355		砂
	37-7		B	13.8	5.0	2.3		緑色片岩
	8		磨製石斧	15.3	4.5	3.2		輝緑凝灰岩
90 溝	37-9	打製石斧 " " 砥石 横刃型石廂丁	18.9	7.8	3.4	硬砂	580	
	10		17.7	6.3	3.7	480	"	
	38-1		"	12.8	6.4	1.6	200	"
	2		砥石	9.2	8.3	3.8	輝緑凝灰岩	345
	3		A	3.2	9.9	0.9	硬砂	45
	38-4		打製石斧	19.5	7.6	3.8	硬砂	468
14	5	"	14.7	7.8	2.2	312	"	
	6	"	13.9	6.4	2.05	243	"	
	7	"	9.8	4.0	1.15	80	"	
	8	"	11.6	4.2	2.17	128	"	
	9	有挾石器	12.1	6.6	2.05	200	"	
	10	横刃型石廂丁	A	3.3	8.6	0.75	30	"
溝	11	"	2.8	6.8	0.65	14	粘板	
	12	"	3.7	8.6	0.85	26	硬砂	
	38-13	打製石斧	13.0	4.0	1.4	108	緑色片岩	
	14	有肩扇形状石器	B	10.0	13.5	2.1	300	硬砂
	39-1	打製石斧	16.6	7.8	2.5	411	硬砂	
	2	"	15.8	6.7	2.3	290	"	
溝	3	有肩扇形状石器	A	10.9	10.9	1.5	178	"
	4	"	B	8.7	8.3	2.1	175	"
	5	有孔磨製石廂丁	A	4.3	(4.8)	0.7	(23)	緑色片岩
	6	扶入打製石廂丁	B	4.0	7.9	1.0	36	硬砂
	7	"	B	4.0	9.0	1.4	59	"
	8	"	B	4.4	7.5	1.3	55	"
9	"	A	4.5	7.5	0.85	(40)	"	
	10	B	4.0	7.5	1.2	45	"	

遺標	図版No.	器種	法量			石質	備考		
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
溝	39-11	挿入打製石庖丁	A	4.7	6.7	1.2	40	刃部磨減。	
	12	"	B	5.3	9.6	1.6	95	両側縁にごく浅い抉り。	
	13	横刃型石庖丁	A	3.4	9.7	0.6	30		
	14	敲打器	F	18.6	7.9	6.7	1437	両端に剥離痕。自然面に著しい敲打痕。	
	15	環状石器未成品		(5.4)	6.9	1.5	(70)	半分欠。	
	16	磨製石鏃	A ₂	(2.5)	2.2	0.2	(1.6)	先端部欠。	
	17	磨製石鏃未成品		5.2	2.3	0.7	10.2	III i b面に自然面。a面研磨。	
	18	"		5.2	2.0	0.65	8.2	II	
	19	"		5.1	2.8	0.55	10.2	II	
	20	"		6.8	2.9	0.9	20.3	II	
	21	"		8.5	3.5	0.9	25.8	II	
	方周	40-1	打製石斧		13.1	4.8	1.1	113	刃部磨減。尖刃。
		2	"		(11.7)	4.6	2.3	(162)	"
		3	磨製石斧		(9.9)	4.4	2.35	(175)	基部欠。ab面に自然面。
		4	石鏃		5.6	4.9	1.5	60	
		5	磨製石鏃未成品		(3.2)	2.8	0.55	(7.2)	II 先端部欠。
	遺構外	40-6	打製石鏃		(4.7)	1.8	0.55	(3.8)	先端部・基部欠。弥生時代の所産であろう。KUR-AO49
		7	"		1.9	1.4	0.42	0.6	17住
		8	"		2.18	1.45	0.46	0.8	KUR-CL47
		9	"		(2.24)	1.05	0.4	(0.6)	先端部・左逆刺欠。KUR-AW56
		10	"		1.85	1.7	0.84	1.0	建10
11		"		1.5	1.48	0.3	0.3	左逆刺欠。76住	
12		"		(1.65)	1.49	0.35	(0.6)	先端部欠。溝状1	
13		"		1.38	1.12	0.42	0.4	47住	
14		"		(2.46)	2.3	0.3	(1.3)	先端部欠。右側縁を挟る。2住	
15		"		1.9	1.42	0.79	1.5	30住	
16		"		(1.4)	1.3	0.3	(0.5)	先端部欠。68住	
17		"		(1.74)	1.7	0.8	(1.9)	"	
18		"		(1.84)	1.8	0.45	(1.3)	" 78住	
19		"		1.4	1.28	0.2	0.3	KUR-CI47	
20		"		1.45	1.2	0.4	0.4	63住	
21		打製石鏃		4.0	1.38	0.8	3.9	珪質頁岩 建10	

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
遺構外	40-22	スクレイパー 打製石斧	3.16	2.0	1.3	チャート	30住	
	41-1		20.2	8.4	4.1	硬砂	刃部磨減。両側縁潰し。建2 b面に自然面。KUR・AD52	
	2		18.1	7.8	2.7	"	" 建3	
	3		19.1	9.0	2.7	珪質片岩	刃部磨減。両側縁潰し。建1	
	4		16.0	7.7	2.5	硬砂	" 小17	
	5		18.0	7.7	3.1	"	" KUR・AY50	
	6		16.1	5.9	3.1	"	ミ4	
	7		15.2	7.4	2.3	"	粗雑な調整。KUR	
	8		13.7	7.2	2.9	"	" KUR・AY52	
	9		12.0	7.4	2.65	"	" KUR・AY52	
	42-1		16.8	8.3	4.3	"	刃部磨減。両側縁潰し。F18	
	2		15.4	8.5	3.0	"	51住	
	3		16.3	5.7	2.2	緑色片岩	刃部わずかに磨減。KUR・BY48	
	4		11.7	5.6	2.3	"	刃部磨減。TAN・BV51	
	5		13.2	5.8	2.0	"	" TAN・BX47	
	6		14.7	3.9	1.75	"	" 両側縁は敲打整形。KUR・CC50	
7	13.7	5.7	1.6	"	" 84住			
8	12.0	4.9	2.1	"	" KUR・AR51			
9	11.1	4.3	1.6	硬砂	刃部潰し。TAN・AN48			
10	11.5	3.2	1.7	緑色片岩	刃部磨減。52住			
11	11.7	7.0	1.6	硬砂	刃部は調整なし。TAN・A区			
12	7.2	3.5	1.1	緑色片岩	道1			
13	8.4	4.0	1.9	"	TAN・BP50			
14	9.2	4.2	1.1	"	全体に磨減。道1			
15	9.5	3.9	1.9	"	TAN・BS P 5			
16	10.0	3.7	1.15	"	粗雑な調整。63住			
43-1	有肩厚形状石器	A	12.2	18.7	2.5	硬砂	刃部にロー状突起物付着。2住	
2		"	A	9.3	11.5	1.6	147	" KUR・AN48
3		"	A	9.8	11.9	1.55	180	刃部破損。KUR・BO52
4		"	B	9.0	10.6	1.65	170	溝状1
5		"	B	10.0	10.7	1.5	170	被熱。KUR・BR46
6		"	D	10.7	9.8	2.2	230	KUR・BJ52

遺構	図版No	器種	法			石質	備考		
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
遺構外	43-7	有肩扇状形石器	D	9.9 (14.2)	9.9 (10.6)	1.5 (420)	155 (420)	硬砂岩	刃部にロー状光沢物付着。TAN・AX47 刃部破損。KUR・AP46
	8	"	D	8.7	12.0	2.2	220	"	
	9	"	B	(7.9)	(8.9)	1.7	(162)	"	
	10	"	B	(10.8)	(10.4)	2.0	(285)	"	刃部破損。KUR・BB51 " 被熱。KUR・AN42
	11	"	E ₁	12.8	3.1	3.1	553	"	b面は周縁に粗雑な剥離調整。TAN・BJ47
	12	"	?	2.8	8.3	0.5	20	珪質片岩	30住 貯蔵穴
	44-1	有孔磨製石槌丁	A	2.9	5.8	0.5	10	"	右半分欠。F16
	2	"	A	4.5	6.1	0.5	22	"	左半分欠。剥離面を残す。3住
	3	"	A	3.7	7.5	0.75	33	板岩	刃部ab面と挟入部研磨。30住
	4	挟入磨製石槌丁	B	4.2	6.9	1.45	65	粘砂岩	背縁・刃縁磨減。ミ4
	5	挟入打製石槌丁	B	4.2	6.7	0.9	37	硬砂岩	KUR・AM45
	6	"	B	4.6	7.2	1.4	60	"	KUR・AY60
	7	"	B	3.9	7.3	1.15	40	"	TAN・AY48
	8	"	B	4.6	8.9	1.05	55	"	KUR・AP47
	9	"	B	4.2	7.5	0.9	42	輝緑砂岩	背縁磨減。69住
	10	"	A	4.5	6.9	0.9	38	"	" 溝状1
	11	"	B	4.0	6.1	0.85	32	"	45住
	12	"	B	4.5	7.0	0.95	48	"	刃部磨減。KUR・AF50
	13	"	A	5.0	7.6	1.2	50	"	背縁磨減。TAN・BS53
	14	"	A	4.3	6.8	0.8	24	"	KUR・BV49
	15	"	B	4.4	6.2	1.05	32	"	TAN・BC53
	16	"	B	3.9	8.4	0.9	40	"	刃縁磨減。KUR・AY48
	17	"	B	3.8	8.2	1.35	55	"	40住
	18	"	B	3.9	7.5	1.0	38	"	被熱。68住
	19	"	B	2.7	6.6	0.65	20	"	ミ4
	20	横刃型石槌丁	B	3.1	6.1	0.6	20	"	背縁磨減。道1
21	"	A	8.9	3.4	1.1	36	"	刃部にロー状光沢物付着。TAN・AU53	
22	"	A	2.8	6.9	1.1	18	"	" TAN・BT48	
23	"	A	3.6	10.6	1.15	55	"	背縁損し。KUR・AQ50	
24	"	A	3.4	9.3	1.2	41	"	KUR・AN52	
25	"	A	3.2	9.4	0.7	30	"	2住	
26	"	A							

遺構	図版No.	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
遺構外	44-27	横刃型石楯丁	A 3.7	10.5	1.0	49	10住
	28	"	A 3.0	8.9	1.3	40	背縁潰し。端部に小さな抉り?あり。道1
	29	"	A 2.9	7.6	0.85	26	刃部の端部奇りに抉り?あり。2住
	30	"	A 3.3	7.8	0.75	25	背縁磨減。TAN・BE52
	31	"	A 3.6	8.2	0.95	33	KUR・AV46
	32	"	A 3.7	10.2	1.05	47	囲2
	33	"	A 4.7	10.9	1.0	72	刃部・背部の区別つかない。F16
	34	"	C 4.0	5.8	1.2	39	粗雑な調整。背縁は節理面。3住
	35	"	C 4.0	5.1	1.15	40	刃縁磨減。基部折割。68住
	45-1	大型粗製石匙	6.5	9.5	2.3	110	刃縁は鋭い。KUR・CL47
2	磨製石斧	7.6	4.9	0.85	60	F12	
3	"	9.3	(6.1)	1.3	(106)	刃部破損。KUR・AB51	
4	"	9.5	4.9	1.0	92	KUR・BU52	
5	"	7.9	4.9	2.2	150	ab面に自然面。基部破損後に再調整か。道1	
6	"	9.1	4.4	1.4	85	基部破損か。道1	
7	"	12.2	5.0	2.2	212	被熱。KUR・BW47	
8	"	7.0	3.0	1.3	40	刃部欠。KUR・AW49	
9	"	(15.9)	(5.6)	3.7	(570)	両端に鋭い刃部?を作出。F1	
10	"	23.6	11.5	5.8	1930	基部に剝離痕と潰れ。KUR・AJ50	
11	磨製石斧未成品	5.6	6.8	1.6	80	剝離調整段階。KUR・BQ46	
12	敲打器	(3.6)	5.9	1.5	(52)	周縁に剝離痕と潰れ。TAN・B150	
13	環状石器未成品	7.2	8.2	1.9	128	半分欠。ミ4	
46-1	礫器	3.8	2.5	1.2	17	a面磨減。ab面に自然面。KUR・AH49	
2	石鏟	4.5	3.7	1.2	30	TAN・BY51	
3	"	5.5	3.0	1.4	40	TAN・BP53	
4	"	6.3	4.2	1.3	54	29住	
5	"	12.7	9.5	4.9	775	78住	
6	敲打器	13.8	10.4	9.0	1835	両端に剝離痕・潰れ。KUR	
7	石杵	4.6	1.7	0.6	3.6	卵形の自然面の一端に円形凸面のガラザラの機能面をもつ。TAN・BN52	
8	磨製石鏟	3.3	0.8	0.5	2.0	板状剝片の両側縁研磨。基部は磨減か。KUR・AT51	
9	"	3.4	2.24	0.5	28	小形の棒状礫を研磨。KUR・AR50	
10	磨製石剣未成品?					中央に明瞭な鑿を持つ。側縁は面取り。KUR・BG50	

遺構	図版No	器種	法			量	石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				重さ(g)
46-11		磨製石鏃	A ₃	2.5 (2.15)	(2.0)	0.3	(1.1)	粘板岩	左逆刺欠。29住
12		"	A ₃	2.25	2.25	0.3	(1.8)	"	先端部欠。31住
13		"	A ₂	2.75	1.65	1.5	1.1	珪質片岩	穿孔時破損後に再調整か。51住
14		"	A ₂	3.3	2.15	0.2	(1.6)	"	凹基部とab面に穿孔痕。溝状1
15		"	A ₁	(2.6)	2.0	0.3	(2.0)	粘板岩	先端部欠。65住
16		"	A	(2.0)	1.6	1.9	(1.0)	"	" 40住
17		"	A ₂	(3.25)	(2.8)	0.25	(2.2)	"	先端部・右逆刺欠。64住
18		磨製石鏃未成品	A ₂	(2.55)	1.8	0.25	(1.6)	"	IV 先端部欠。穿孔未貫通。42E
19		"	A ₂	3.25	1.75	0.2	(1.7)	緑色片岩	IV 穿孔未貫通。31住
20		"	A ₂	4.7	2.4	0.35	4.4	粘板岩	IIIIV 未穿孔。建7
21		"	"	2.1	1.55	0.2	0.9	珪質片岩	III iii ab面研磨。右側縁は面取り。64住
22		"	"	2.5	1.9	0.3	2.3	"	III iii " 42住
23		"	"	6.7	2.0	0.3	6.7	粘板岩	III iii " 10住
24		"	"	5.95	(2.1)	0.45	(6.9)	珪質片岩	III ii " 10住
25		"	"	(4.55)	2.05	0.35	(4.1)	粘板岩	III b面研磨。両側縁は面取り。89住
26		"	"	(4.0)	2.3	0.4	(5.2)	"	III i → iii a面研磨。KUR-BK48
27		"	"	5.2	2.2	0.5	6.3	珪質片岩	III i b面研磨。道1
28		"	"	5.0	2.5	0.8	10.4	"	III i a面研磨。29住
29		"	"	4.3	2.7	0.54	3.3	"	III i " 3住
30		"	"	4.3	2.6	0.6	6.8	"	II 26住
31		"	"	4.8	(2.8)	0.4	(5.2)	粘板岩	II 62住
32		"	"	4.1	2.1	0.5	4.8	"	II 91住
33		"	"	4.5	2.5	0.4	4.7	珪質片岩	II 61住
34		"	"	5.2	2.2	0.3	4.6	粘板岩	II TAN-BB48
35		"	"	5.3	2.3	0.5	7.7	珪質片岩	II TAN-BP50
36		"	"	5.0	2.3	0.6	6.3	"	II 10住
37		"	"	5.0	2.8	0.5	9.3	"	II KUR-AV49
38		"	"	5.6	2.8	0.5	11.5	"	II 2住
39		"	"	5.2	(2.6)	0.5	(8.1)	粘板岩	II KUR-AU50
40		"	"	5.0	2.3	0.6	8.4	珪質片岩	II 道1
41		"	"	5.5	2.7	0.4	8.3	"	II 冊1
42		"	"	6.3	3.3	0.5	11.3	ホルンフェルス	II 31住

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
遺構	46-43	磨製石鏃未成品	5.2	3.8	0.9	珪質片岩	II 31住
遺構	44	"	7.8	3.3	0.5	粘板岩	II 45住
外	45	"	6.0	3.9	0.9	珪質片岩	II ミ 4

第33表 GOA 石器観察表

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
1住	67-1	抉入打製石庖丁	4.6	6.7	1.2	硬砂	抉りはなく或方形を呈する。
	2	"	3.4	(4.4)	0.7	"	左半分欠。
	3	敲打器	24.7	6.8	6.7	輝緑凝灰岩	両端部に敲打痕。刃縁石に転用。
3住	67-4	打製石斧	(10.6)	13.0	2.8	硬砂	基部欠。刃部磨減。
	5	"	(6.4)	5.5	1.6	綠色片岩	刃部のみ。"
	6	"	(8.3)	4.1	1.0	硬砂	基部欠。"
	7	抉入打製石庖丁	3.6	6.1	1.1	"	両側縁にごく浅い抉り。刃縁磨減。
	8	"	4.2	7.9	1.0	"	背縁研磨か。
	9	"	4.2	9.6	1.0	"	背縁研磨か。刃部著しく磨減。
	10	有柄石器	6.4	13.6	2.6	"	両側端を柄状ないしはつまみ状に作出する。b面のみ刃部調整。
	11	剥片	7.9	11.5	1.3	珪質片岩	磨製石鏃素材剥片か。
	12	"	8.7	7.6	1.7	硬砂	粗雑な調整か。右側縁磨減か。
	13	磨製石鏃未成品	4.4	3.4	0.6	珪質片岩	III i
	14	砥石	12.9	10.3	6.2	ホルンフェルス	砥面3面。a面に板状金属器によるダメージ。
4住	68-1	抉入打製石庖丁	4.4	9.1	1.3	硬砂	刃部著しく磨減。光沢あり。
	2	"	4.4	(6.9)	0.9	"	背縁かるく研磨。刃部B面わずかに磨減。
	3	"	6.0	6.0	4.5	"	背縁・刃部にかるい研磨。
	4	"	3.4	6.1	0.8	粘板岩	背縁・刃縁磨減。
	5	横型石庖丁	3.3	8.5	0.9	硬砂	
	6	磨製石鏃未成品	3.4	2.1	2.3	珪質片岩	III ↔ IV ab面・側縁研磨。b面に穿孔痕。
	7	"	5.5	3.5	0.4	粘板岩	III ii ab面研磨。
	8	"	4.7	4.3	0.3	珪質片岩	III i b面のみ研磨。
	9	"	5.1	2.3	0.4	"	II

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考		
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)				
4 住	68-10	磨製石鏃未成品	(3.0)	2.1	0.5	珪質片岩	II 基部欠。		
	68-11	打製石斧	(7.8)	(8.8)	(2.1)	硬砂	刃縁のみ。		
	12	挿入打製石廂丁	A	4.8	0.8	19	背縁研磨。小形の円形削片を利用。		
	13	"	B	7.4	1.2	40	刃縁わずかに磨減。		
	14	"	B	(8.3)	1.2	(4.8)	背部研磨。刃縁にロー状光沢物付着。		
	15	"	B	4.4	6.9	1.1	34	刃部破損。	
	16	加工された礫		10.6	5.1	110	左側縁の一端を加工。		
	17	"		21.2	6.5	(610)	棒状礫の一端を加工。		
	18	磨製石鏃未成品	(3.2)	(2.8)	0.7	(6.8)	III ii 基部欠。		
	8 住	68-19	挿入打製石廂丁	B	8.3	1.1	41	背縁にかるい研磨か。	
		20	"	B	6.7	0.8	30	刃部調整。	
		21	磨製石鏃未成品	(2.7)	(1.9)	0.5	(2.3)	II 基部欠。	
		—	台石	31.0	27.0	7.2	8200	使用痕なし。貼床面に埋め込まれる。	
		68-22	挿入打製石廂丁	B	4.4	6.9	1.2	43	背縁は研磨か。
		溝 1	23	"	B	3.4	7.1	1.0	34
	24		"	B	4.8	6.4	1.8	48	背縁磨減。
	25		"	A	3.5	6.2	0.8	21	両側縁に浅い抉り。
	69-1		"	A	3.8	5.3	0.7	19	
2	横刃型石廂丁		A	2.7	6.6	0.7	17		
3	"		A	3.2	9.3	1.1	34		
4	"		A	3.4	9.5	1.0	36		
5	打製石斧			15.7	4.7	2.5	250	緑色片岩	
6	"			12.9	6.7	2.3	205	硬砂	
7	"			11.1	4.4	2.0	104	"	
8	"			9.5	3.2	1.3	60	緑色片岩	
9	"			8.6	3.7	1.0	50	"	
10	有肩扁形石器		B	9.9	11.5	1.6	200	硬砂	
11	磨製石鏃未成品			6.0	3.2	0.7	13.2	珪質片岩	
12	"			6.5	3.0	0.4	10.4	"	
溝 2	13	磨製石斧		15.1	5.2	2.0	225	緑色片岩	
	14	砵石		14.2	5.4	3.9	350	灰岩	
	69-15	打製石斧		17.6	7.8	3.2	594	硬砂	

遺構	図版No	器種	法			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
溝2	69-16	有肩扇状形石器	14.3 (14.2)	10.4 (5.4)	2.4	硬砂	刃部欠。ab面に自然面残す。縄文時代の所産か。 挟入部は潰し顕著。 背縁は磨滅きみ。左の挟りは節理のため深い。 背部は潰し顕著。 背部は潰れきみ。 背縁・挟入部研磨。 挟りなし。
	17	磨製石斧	3.7	7.4	4.6 (360)	輝綠凝灰岩	
	70-1	挟入打製石槌丁	4.1	8.0	1.0	硬砂	
	2	"	4.4	7.6	0.9	"	
	3	"	4.2	7.5	0.3	"	
	4	"	4.1	7.1	1.3	"	
	5	"	3.9	7.5	0.7	"	
	6	"	3.1	8.7	1.2	"	
	7	横刃型石槌丁	3.4	7.5	1.0	"	
	8	"	6.4	6.2	1.1	"	
	9	"	(2.6)	0.2	4.5	"	
	10	磨製石鏃	(3.7)	2.0	0.1	粘板	
	11	磨製石鏃未成品	4.6	2.3	6.4	"	
	12	"	11.3	4.5	2.5	硬砂	
	13	敲打器	12.5	4.7	3.3	硬砂	
14	"	1.8	1.5	0.5	黒曜石		
15	打製石鏃	2.6	1.8	0.6	黒曜石		
遺構外	71-16	打製石鏃	3.1	1.4	2.0	黒曜石	先端部欠。 " AH54 両側辺に肩部をもつ。AF51 未加工。AE51 " " 刃部潰れきみ。G11 側縁潰し。刃部b面磨滅。AH52 AI45 刃縁磨滅。刃部は調整なし。AK48 刃部磨滅。G20 " G11 ab面に自然面。磨製石斧未成品か。AH45 刃部の左側縁磨滅。 刃部わずかに磨滅。G 粗雑な調整。刃部鋭い。AM21
	17	"	10.6	6.2	3.0	黒曜石	
	18	"	9.8	6.5	2.0	"	
	19	黒曜石原石	17.6	7.9	3.3	硬砂	
	20	"	20.1	8.2	3.1	"	
	71-1	打製石斧	19.2	8.0	3.0	"	
	2	"	19.1	8.2	2.7	"	
	3	"	18.4	8.8	2.7	"	
	4	"	19.1	8.6	2.9	"	
	5	"	12.4	7.2	1.9	緑色片岩	
6	"	13.0	4.2	1.6	"		
7	"	11.3	5.0	1.0	硬砂		
8	"	10.0	7.0	1.5	"		
9	"						
10	"						

遺構	図版No.	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
遺構外	72-1	打製石斧	22.8	7.8	3.7	硬砂	735
	2	"	18.5	7.3	3.2	"	453
	3	"	18.4	8.7	3.5	"	642
	4	"	17.4	7.2	2.9	"	418
	5	"	19.5	8.9	3.7	"	556
	6	"	17.4	9.1	2.6	"	482
	7	"	10.6	4.1	1.4	緑色片岩	108
	8	"	10.7	4.0	1.3	"	86
	9	"	10.8	4.6	1.8	硬砂	123
	10	"	11.3	3.7	1.4	緑色片岩	108
	11	"	9.8	4.2	1.3	"	74
	73-1	"	20.8	8.6	2.3	硬砂	460
	2	"	19.5	7.8	1.6	"	313
3	"	18.0	6.5	2.3	"	-	
4	"	19.1	4.4	1.9	緑色片岩	238	
5	"	18.2	7.8	2.8	硬砂	522	
6	"	14.9	6.3	2.8	"	288	
7	"	14.4	4.8	2.6	珪質片岩	213	
8	"	14.5	4.1	2.2	硬砂	160	
9	"	10.7	3.9	1.4	"	70	
10	"	10.7	4.0	1.6	"	95	
11	"	12.4	3.6	1.9	"	113	
12	"	12.7	4.1	1.8	"	144	
13	"	12.9	5.4	1.8	"	158	
74-1	有肩扇状石器	D	10.8	9.8	1.5	"	170
2	"	A	10.5	11.2	2.1	"	218
3	"	B	11.6	13.5	2.6	"	445
4	"	C	9.5	14.3	2.0	"	293
5	"	C	11.6	15.5	2.4	"	575
6	"	E ₁	10.6	11.3	1.65	"	230
7	"	E ₂	9.7	13.0	2.0	"	210
8	"	B	6.2	10.7	1.0	"	78

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考		
			長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)			重さ(g)	
									長さ(m)
遺構外	74-9	有肩扇形状石器	B	8.6	9.9	1.2	122	硬砂岩	ニ5
	10	"	B	7.2	11.1	1.6	153	"	ト22
	11	有袂石器	A	7.1	11.9	1.6	170	"	右半分欠。AG50
	12	"	A	6.7	(8.0)	1.3	(87)	"	風化。AD55
	13	有孔磨製石楯丁	B	2.9	8.1	0.6	23	ホルンフェルス	背縁・刃部磨減。AS51
	14	袂入打製石楯丁	B	4.5	7.0	1.5	60	硬砂岩	刃縁磨減。ロー状光沢物付着。
	15	"	B	4.6	8.4	1.4	60	"	
	16	"	B	4.2	7.6	1.2	45	"	
	75-1	"	B	3.9	8.0	1.0	40	"	刃部磨減。光沢あり。AS52
	2	"	B	4.8	7.8	1.2	45	"	" AI47
	3	"	B	4.1	7.1	1.0	37	"	背縁・刃縁磨減。ト11
	4	"	B	5.1	7.7	1.5	65	"	袂入部研磨。G7
	5	"	B	4.1	7.3	0.95	37	"	背縁磨減。ab面にはやや凹んだ横方向の磨減痕あり。
	6	"	A	4.3	8.0	1.0	36	粘板岩	刃部磨減。
	7	"	B	4.6	7.9	1.3	52	硬砂岩	刃部破損。AG53
	8	"	B	4.7	6.4	1.2	38	"	背縁潰れ。AK49
	9	"	A	4.8	7.6	1.0	42	"	背縁研磨。刃縁磨減。ト10
	10	"	B	5.3	8.4	1.5	76	"	背縁は折断面を研磨。刃縁磨減。AR47
	11	"	B	4.6	8.4	0.95	42	"	AW55
	12	"	B	4.4	8.3	0.9	42	"	刃縁磨減。AG55
	13	"	B	4.1	7.4	1.1	45	輝緑岩	" AJ44
	14	"	A	3.9	5.9	0.7	26	硬砂岩	AQ42
	15	"	B	3.9	6.4	1.1	34	"	
	16	"	B	3.8	6.2	1.2	30	"	B区
17	"	B	3.9	7.0	1.3	38	"	AC46	
18	横刃型石楯丁	B	3.4	6.2	1.0	30	"	袂入部なし。G10	
19	"	A	3.3	8.5	0.9	32	"	刃縁わずかに磨減。AK44	
20	"	A	4.3	12.2	1.3	70	"	AH50	
21	"	A	3.3	8.7	0.6	23	"	Bトレ	
22	"	A	4.9	8.5	0.7	27	"	A055-57	
23	袂入打製石楯丁	B	4.0	8.2	0.7	30	"	わずかに袂入りあり。A区	
24	横刃型石楯丁	A	3.2	8.5	1.2	37	"	AH48-49	

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
遺構	75-25	横刃型石砲丁	3.4	8.4	1.0	硬砂	AL42
	26	"	3.2	10.7	0.8	"	刃部と背部の区別がつかない。G11
外	27	"	3.4	9.2	1.2	"	被熱か。AB46
	28	"	3.6	9.3	1.1	"	"
	29	横刃型石器	4.6	8.1	1.3	"	背部は節理面。白く風化。縄文時代の所産か。AK46
	30	"	3.6	10.7	1.0	"	調整なし。AE53
	31	"	3.9	9.1	0.7	"	" AI48
	76-1	磨製石斧	6.4	1.8	0.9	珪質凝灰岩	G45・46
	2	"	(7.3)	3.2	1.0	輝綠凝灰岩	刃部破損。AN45
	3	"	(6.6)	3.5	1.0	"	刃部欠。G9
	4	"	(9.3)	3.5	1.3	"	刃部破損。AE55
	5	"	9.8	3.9	1.3	"	両側縁の刃部寄りがゆるやかに挟入。B区
	6	"	14.0	4.7	2.9	"	刃部のみ研磨。AK47
	7	"	12.0	3.7	1.4	"	"
	8	磨製石斧未成品	22.5	7.9	4.1	超塩基性岩	AF50
	9	敲打器	4.2	5.7	0.9	硬砂	周縁に敲打痕と剝離痕。AK45
	10	"	9.7	4.5	2.3	"	両端に敲打痕と剝離痕。3トレ
	11	"	15.0	4.9	3.6	"	一端に敲打痕と剝離痕。AI50
	12	"	11.0	3.7	1.5	"	両端に敲打痕。A区
	13	"	18.2	6.7	6.3	"	両端に敲打痕と剝離痕。敲打による糸掛け状の挟り・キズ状の研磨痕あり。被熱。A区
	14	石鏃	4.3	3.7	1.1	"	III住
	15	"	4.9	3.8	1.5	"	ミ3
	16	"	5.9	4.5	1.6	"	建1
	17	"	6.2	5.7	1.3	"	AG55
	77-1	凹石	8.5	7.9	5.6	"	ab面に敲打による凹。3トレ
	2	環状石器	5.3	(8.6)	1.3	"	破損後調整か。AE55
	3	磨製石鏃	3.5	2.4	0.3	綠色片岩	AI45
	4	"	(1.7)	(1.8)	(0.3)	"	基部欠。AI45・46
	5	"	(1.6)	2.0	0.3	ホルンフェルス	先端部欠。AH49
	6	"	(1.1)	1.9	0.3	珪質片岩	" AH50
	7	"	(2.2)	(1.5)	0.2	"	先端部・基部欠。a面に穿孔痕。AH51
	8	磨製石鏃未成品	(2.9)	(1.4)	0.2	"	III iv 基部欠。未穿孔。AK49

遺構	図版No	器種	法			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
遺構外	9	磨製石鏃未成品	(2.8)	1.5	0.2	珪質片岩	Ⅲiv 先端部欠。" AI45・AJ46
	10	"	4.6	2.5	0.3	"	Ⅲiv 左側縁は面取り。未穿孔。
	11	"	(3.0)	3.2	0.3	"	Ⅲiv " " 凹基調整。AI45・J46
	12	"	4.8	3.3	0.6	"	Ⅲi a面研磨。b面磨減さみ。
	13	"	4.8	3.4	0.5	粘板岩	Ⅲi " " AU49
	14	"	4.8	3.4	0.5	粘板岩	" " " AP53
	15	"	6.0	2.9	0.5	珪質片岩	Ⅱ AI45
	16	"	5.4	2.7	0.6	"	Ⅱ
	17	"	5.3	2.6	0.4	粘板岩	Ⅱ AK46
	18	"	6.2	2.7	0.6	粘板岩	Ⅱ 3トレ
	19	"	6.2	2.4	0.8	珪質片岩	Ⅱ
	20	"	6.6	2.7	0.7	"	Ⅱ AH45
	21	"	8.2	3.5	0.9	"	Ⅱ G48

第34表 G O B 石器観察表

遺構	図版No	器種	法			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
住	8	打製石斧	(4.9)	4.4	0.9	硬砂	基部欠。刃部磨減。
	2	棒刀型石器	9.2	8.8	1.2	"	周縁磨減。
	3	磨製石鏃	(3.5)	1.8	0.2	粘板	先端部わずかに欠。
	4	磨製石鏃未成品 (A ₁)	(6.8)	(1.9)	0.2	"	Ⅲiv 右半分欠。左側縁に研磨面あり。
	5	"	4.6	2.4	0.4	珪質片岩	Ⅲi a面研磨。
	6	"	4.5	3.3	0.9	"	Ⅲi " "
	7	"	7.2	3.5	0.78	粘板岩	Ⅱ
	8	"	8.4	3.6	0.8	珪質片岩	Ⅱ
	9	端部曲面磨石	12.6	9.5	3.8	輝綠凝灰岩	非常に滑らかな磨面あり。破損後に再調整。
	10	燧石	16.3	10.0	8.5	砂	砥面2面。風化。
	11	"	24.3	20.5	6.2	"	砥面3面。
	-	台石	21.0	16.3	5.1	花崗岩	楕円形を呈し。断面楕円形。
	-	"	-	-	4.7	安山岩	1/4弱の破片が2片ある。ab面わずかに磨減か。

遺構	図版No.	器種	法量			石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(g)			
25	127-12	磨製石鉄未成品	(3.7)	3.0	0.7	(15.0)	II 破片。	
住	127-13	打製石斧	(8.8)	7.8	3.85	(272)	胴部のみ。	
35	14	"	(7.4)	6.8	2.6	(138)	基部のみ。	
住	15	砥石	24.7	17.7	10.2	6000	a面と側面に砥面。側縁の砥面の両側に溝状の凹みあり。	
45	128-1	敲打器	14.7	10.9	8.9		一端にわずかに敲打痕と磨滅痕。	
住	2	磨製石鉄	(0.7)	(2.4)	0.3	(1.0)	破片。	
3	磨製石鉄未成品	(2.5)	(2.0)	0.25	(1.0)		II "	
4	敲打器	E	9.3	6.3	3.5	1.8	硬砂。一端に敲打痕。	
5	台石		39.5	27.5	6.5	9900	楕円形を呈し、板状。	
47	128-6	打製石斧	B	11.4	4.9	1.55	130	刃部磨滅。
住	7	磨製石鉄	A ₂	2.7	2.0	0.28	(2.3)	わずかに欠。
8	磨製石鉄未成品	6.6	3.4	0.59	15.0		III i a面研磨。	
9	"	4.9	2.6	0.3	10.0		I→III ii ab面研磨。	
10	"	(2.9)	2.2	0.29	(2.5)		II 基部欠。	
11	加工された礫	10.0	6.5	3.88	368		一端にb面側からの剥離痕。	
34	128-12	敲打器	G	15.3	10.0	4.55	960	a面わずかに磨滅。長短軸の縁辺に敲打痕あり。
住	13	磨製石鉄未成品	(2.8)	2.5	0.35	(3.5)	III iv	
14	"	4.4	1.8	0.25	3.5		III iii	
50	128-15	楕円型石楯丁	C	3.8	8.0	1.15	40	II
住	16	磨製石鉄未成品	4.7	2.2	0.5	6.8		半分欠。側縁に敲打痕。
17	敲打器	(6.8)	7.6	3.9	(315)		a面に磨滅。b面側縁に敲打痕。	
18	磨滅痕のある礫	(13.8)	5.3	2.65	(260)		背縁は節理面。	
17	129-1	楕円型石器	6.8	12.9	2.2	215		小形。風化。ドット部分は風化による破損部。
住	2	砥石	5.7	4.2	2.55	78		先端部・逆刺欠。穿孔未貫通。
3	磨製石鉄未成品	A	(2.1)	2.3	0.3	(2.2)		穿孔痕あり。
4	"	A ₂	2.9	2.3	0.28	2.3		
5	"	"	6.2	4.4	0.89	31.0		遺構図に記録。扁平で円形を呈する。
—	台石		—	—	—	—		背縁研磨。刃部側に主要剥離面(b面)の打撃点あり。
2	129-6	楕円型石楯丁	B	4.7	7.7	0.9	43	
住	—	台石	31.0	26.5	11.4	11200		円形を呈し、断面は楕円形。
4	129-7	楕円型石楯丁	B	4.5	7.5	1.0	35	
住	8	"	A	4.4	6.6	1.3	48	

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考		
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
4 住	129-9	挟入打製石庖丁	B	3.3	6.7	1.15	30	硬砂岩	背縁は節理面 自然面なし。 破損。原形不明。刃部磨減。 刃縁研磨。 II
	10	"	B	4.1	8.0	1.0	49	"	
	11	"	C	5.5	7.5	1.0	50	"	
	12	有肩扇形状石器?		8.6	(6.8)	1.6	(108)	"	
5 住	129-13	挟入打製石庖丁	B	4.6	6.3	0.85	39	硬砂岩	刃縁研磨。 II
	14	磨製石鏃未成品		4.9	3.4	0.65	15.0	粘板岩	
7 住	129-15	挟入打製石庖丁	C	4.2	(7.5)	0.9	(39)	硬砂岩	自然面なし。 II
	16	磨製石鏃未成品		7.4	3.4	0.55	20.0	粘板岩	
	17	敲打器	E	8.1	7.6	4.0	375	輝綠凝灰岩	
14 住	129-18	磨製石鏃未成品		3.3	(2.1)	0.4	(3.6)	粘板岩	両端にかるい敲打痕。 III a面と基縁研磨。 II
	19	"		(3.2)	2.8	0.38	(4.5)	珪質片岩	
	20	"		5.6	2.7	0.7	18.0	"	
	—	台石		20.5	15.0	5.4	2500	花崗岩	
15 住	129-21	挟入打製石庖丁	B	5.0	8.7	1.5	80	硬砂岩	槽凹形を呈し、断面槽凹形。 刃縁磨減。 刃縁磨減。b面のみ小刻磨底。 糸掛けあり。
	22	"	B	4.8	8.5	1.25	60	"	
	23	有肩扇形状石器	E ₂	9.3	10.3	2.5	208	"	
16 住	130-1	繩物石		16.2	9.1	5.5	1096	硬砂岩	糸掛けあり。 " " " " " " "
	2	"		17.4	10.7	3.6	1000	"	
	3	"		17.7	8.8	3.9	780	片麻岩	
	4	"		17.0	6.2	5.7	905	硬砂岩	
	5	"		17.7	9.1	6.6	1535	"	
	6	"		17.5	8.2	7.0	1285	"	
	7	"		19.5	9.0	5.2	1170	"	
	8	"		17.0	8.7	5.5	1150	"	
131-1	1	"		15.1	8.3	6.1	1115	"	"
	2	"		17.2	7.8	5.5	1045	"	
	3	"		15.3	9.6	5.9	1020	"	
	4	"		20.0	6.8	5.0	1020	"	
	5	"		18.0	6.9	5.6	1020	"	
	6	"		17.0	6.7	5.2	1015	"	
	7	"		16.6	7.4	5.7	1015	"	
	8	"		18.6	7.2	4.7	980	"	

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
16 住	132-1	編物石	12.9	7.8	6.6	硬砂	一端に剝離痕。 両端に敲打痕。 ab面に自然面。敲打整形。 凹凸のあるa面わずかに磨減痕と敲打痕あり。 刃部磨減。 逆刺欠。 III iv 未穿孔。 実物紛失。	
	2	"	17.2	8.4	4.0	900		
	3	"	16.8	8.6	3.7	770		
	4	"	15.9	7.7	4.5	705		
	5	"	15.5	6.5	4.4	680		
	6	敲打器	12.8	7.9	6.2	970		
	7	抉入打製石庖丁	4.6	6.8	0.9	40		
	8	環状石器	(8.6)	(6.1)	2.7	(180)		
	9	台石	40.0	35.0	11.8	21700		
27 住	132-10	打製石斧	8.3	5.0	1.5	90	刃部欠。両側縁損し。 逆刺欠。 III iv 未穿孔。 実物紛失。	
	11	磨製石鏃	(2.1)	2.0	0.28	(1.4)		
	12	磨製石鏃未成品	(3.2)	1.7	0.26	—		
	—	抉入打製石庖丁	—	—	—	—		
	10	打製石斧	A (15.3)	6.7	3.8	(550)		
	2	抉入打製石庖丁	B	4.5	8.3	1.1		55
	3	"	B	4.2	7.2	0.7		32
	4	"	B	4.3	8.1	1.15		52
	5	"	B	4.4	7.7	1.2		45
	6	有柄石器	B	8.3	17.7	2.1		338
10 住	133-1	打製石斧	A	17.7	6.7	3.55	(645)	刃部に口一状光沢物付着。 刃部破損、刃部、側縁のみ研磨。剝離面・敲打整形痕を残す。 II II a面に敲打痕。
	2	抉入打製石庖丁	B	4.4	2.6	0.5	11.0	
	3	"	B	4.3	2.1	0.6	10.0	
	4	磨製石鏃未成品	F	18.4	8.2	5.0	1045	
	5	磨製石鏃未成品	F	18.4	8.2	5.0	1045	
	6	有柄石器	A	17.2	6.6	2.6	395	
	7	磨製石鏃未成品	B	9.1	15.2	2.0	340	
	8	"	(3.7)	2.8	0.45	(10)		
	9	"	4.8	3.6	0.42	11		
	10	磨減痕のある環状石	9.1	7.2	4.7	1.1	50	
18 住	134-1	抉入打製石庖丁	B	4.4	7.6	1.15	54	遺構図に記録。円形を呈し、大形。 背縁・刃部b面磨減。 背縁損し。
	2	"	B	4.7	8.7	1.65	83	

遺構	図版No	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
18住	134-3	挟入打製石庖丁	3.4 (3.5)	4.5	0.5	15	硬砂岩	刃部b面磨減。	
24住	134-4	磨製石鏃未成品		1.7	0.45	(3.9)	珪質片岩	III	
	5	"	5.5	3.3	0.5	11.0	"	II	
溝	134-6	打製石斧	22.2	8.5	3.7	680	硬砂岩	刃部磨減。	
7	7	"	20.1	8.8	4.0	730	"	a面後部に敲打痕。	
	8	"	(15.4)	7.7	2.28	(335)	"	基部欠。刃部磨減。	
	9	"	(21.0)	8.3	3.3	(750)	"	刃部欠。	
	10	"	(19.0)	9.5	3.9	(630)	"	"	
	11	"	(18.0)	8.8	3.3	(525)	"	"	
135-1	1	打製石斧	12.7	6.2	1.5	148	硬砂岩	刃部磨減。	
2	2	"	11.7	4.4	2.0	140	綠色片岩		
3	3	有肩扇形状石器	9.5	12.6	1.3	158	硬砂岩		
4	4	磨製石鏃未成品	7.0	2.9	1.5	15.0	珪質片岩	II	
5	5	敲打器	14.8	7.1	4.9	980	硬砂岩	両側縁に敲打による糸掛け状の抉りあり。	
6	6	端部曲面磨石	12.4	14.2	8.2	2850	変輝綠岩	緩やかにカーブする広い磨面をもつ。部分的に風化。上端に敲打痕？	
溝	135-7	打製石斧	(13.4)	8.8	2.9	(480)	硬砂岩	胴部のみ。	
15	8	"	15.6	4.6	1.95	215	"	両端磨減。	
	9	"	15.0	5.2	2.15	190	"	刃部磨減。	
	10	"	(14.8)	5.2	1.6	(178)	"	基部欠。刃部磨減。	
136-1	1	"	(9)	7.5	2.25	(200)	"	基部欠。刃部磨減。	
2	2	"	(12.5)	7.8	1.95	(225)	"	"	
3	3	"	11.5	4.8	1.3	100	珪質片岩	刃部調整なし。	
4	4	"	12.5	4.6	1.85	148	硬砂岩	刃部磨減。	
5	5	有柄石器	5.6	12.3	1.35	103	"	刃部に口一状光沢物付着。	
6	6	挟入打製石庖丁	3.9	7.8	1.35	60	"	刃縁磨減。背縁直し。	
7	7	"	4.2	7.9	1.3	58	"	背縁・左面縁研磨。	
8	8	"	4.5	7.2	1.0	45	"		
9	9	"	4.0	7.8	1.0	40	"	b面のみ刃部調整。	
10	10	"	4.3	7.0	0.95	35	"	背縁・挟入部研磨。	
11	11	"	4.6	7.7	1.15	(50)	"	刃部破損。	
12	12	"	4.3	6.7	0.85	30	"	刃部に口一状光沢物付着。	
13	13	"	3.4	6.2	1.0	40	"		

遺構	図版No	器種	法			石質	備考		
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
溝	136-14	横刃型石盾丁	C	4.2	6.2	0.8	23	岩	長方形。左側縁に抉りあり。
	15	"	A	4.5	4.8	1.0	18	"	刃縁磨減。調整なし。
	16	"	B	5.1	9.4	0.8	43	"	" ロ一状光沢物付着。
	17	"	A	3.0	9.2	0.9	31	"	背縁研磨。
	18	横刃型石器		6.7	8.2	1.38	(83)	"	刃部磨減。
	19	打製石斧?		(8.9)	2.5	1.5	(55)	緑色片岩	両側縁磨減。刃部?欠。
	20	磨製石斧		(9.5)	5.6	3.2	(374)	輝緑岩	刃部欠。基部潰れ。
	21	"		(14.1)	5.9	3.65	(405)	輝緑凝灰岩	刃部欠。深い敲打痕による基部調整。
	137-1	砥石		10.4	7.3	1.2	185	片麻岩	
	2	"		7.6	2.7	2.0	70	"	
	3	磨製石鏃未成品		3.7	1.3	0.25	1.6	黒色片岩	III b面欠。
	4	"		(3.0)	2.7	0.25	(2.5)	"	III iii
	5	"		6.3	3.2	0.5	13.0	"	II
	6	"		7.0	4.2	0.65	28.0	ホルンフェルス	II ab面に自然面あり。
	7	"		5.7	3.1	0.4	7.8	珪質片岩	II
	8	"		5.1	2.7	0.45	9.2	粘板岩	II
	9	"		3.6	2.6	0.45	4.7	珪質片岩	II 凹基。
	137-10	磨製石鏃	A	(2.25)	(1.15)	0.18	(0.6)	珪質片岩	先端部・基部欠。
	遺構外	137-II	尖頭器		4.9	2.1	0.9	7.5	チャート
12		打製石鏃		2.6	1.8	0.6	2.6	黒曜石	基部欠。凹基か。AD51
13		"		(3.2)	1.3	0.6	(2.0)	玻璃質安山岩	基部欠。44住
14		"		1.9	1.5	0.4	0.9	黒曜石	
15		"		(1.6)	(1.2)	0.4	(0.8)	チャート	先端部・逆刺欠。BW16
16		"		(1.7)	1.4	0.4	(0.8)	黒曜石	縦長剥片に微細な刺離直あり。BB50
17		使用痕のある剥片		3.3	1.4	0.4	1.8	"	
18		石核		-	-	-	-	"	
138-1		打製石斧		24.5	9.4	3.2	930	硬砂	刃部磨減。打製石斧の中で最長。BN51
2		"		18.6	6.7	2.75	412	"	CA40
3		"		15.5	6.7	2.2	328	"	44住
4		"		11.9	4.9	1.95	143	"	刃部磨減。A148
5		"		13.0	5.1	2.2	190	"	両側縁敲打整形。62住
6		"		12.6	4.2	1.2	108	緑色片岩	基部b面に自然面。BL44

遺構	図版No	器種	法			石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
遺構外	138-7	打製石斧	12.7	8.7	2.35	硬砂	尖刃。ミ11	
	8	"	11.2	4.0	1.65	綠色片岩	刃部磨滅。尖刃。ミ1	
	9	"	11.0	4.0	2.2	硬砂	" AH48	
	10	"	10.5	4.1	1.3	綠色片岩	" AH50	
	11	"	10.7	4.6	1.35	硬砂	" 43住	
	12	"	19.6	5.6	2.8	輝綠	刃部磨滅さみ。磨製石斧未成品か。	
	139-1	"	(8.7)	5.2	1.6	"	刃部欠。刃縁の基端奇りに抉りあり。41住	
	2	"	7.2	4.4	1.1	"	被熱。両側縁に抉りあり。AF48	
	3	有肩扇形状石器	B	8.8	13.7	2.05	"	刃部a面にロー状光沢物付着。ミ1
	4	"	B	12.3	16.8	3.0	"	ミ16
	5	有挾石器	A	7.1	11.2	1.7	"	刃部わずかに磨滅。ミ1
	6	"	A	7.0	11.0	1.75	"	" AM50
	7	有肩扇形状石器?	A	(9.5)	(7.9)	1.8	"	刃部欠。ミ2
8	有挾石器	A	8.1	12.0	2.0	"	AE53	
9	有肩扇形状石器	D	10.9	9.3	1.95	"	a面に敲打痕。CB42	
10	有孔磨製石庖丁	B	3.3	10.1	0.5	粘板	刃部著しく磨滅。穿孔の上側内縁に紐スレ。30住	
11	挾入磨製石庖丁	A	4.5	7.4	0.8	粘板	ab面・背縁・挾入部研磨。AF54	
12	"	B	4.6	7.3	0.8	粘板	刃部研磨。b面・刃縁磨滅。AG51	
13	"	B	4.7	8.2	1.15	硬砂	刃部研磨。刃縁・背縁磨滅。	
140-1	挾入打製石庖丁	B	4.3	8.0	1.3	"	a面・刃部磨滅。刃縁にロー状光沢物付着。	
2	"	B	4.1	8.3	1.0	"	刃縁磨滅。ロー状光沢物付着。AH48	
3	"	B	4.4	6.8	1.4	"	背縁・挾入部潰し。刃部a面にロー状光沢物付着。AG12	
4	"	B	4.2	(7.3)	1.1	"	背縁・挾入部研磨。刃縁研磨。11住	
5	"	B	4.7	8.7	1.25	"	背縁研磨。AI49	
6	"	B	4.5	7.5	1.6	"	背縁潰し。ミ1	
7	"	A	4.6	8.5	1.4	"	刃部・背縁磨滅。3住	
8	"	B	4.5	8.4	1.5	"	背縁潰し。AH49	
9	"	B	4.3	6.2	1.15	"	背縁潰し。AF52	
10	"	B	4.1	7.7	1.0	"	背縁潰し。49住	
11	"	B	4.2	8.2	1.3	"	右挾入部潰し。	
12	"	B	3.4	8.3	0.9	"	刃部破損。ミ1	
13	"	B	3.5	7.0	1.05	"	右挾入部潰し。ミ12	

遺構	図版No.	器種	法			石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
遺構外	140-14	挟入打製石苞丁	B	3.4	5.7	0.7	16	背縁研磨か。右側縁は挟りなし。建2
	15	"	B	4.0	7.8	1.0	36	刃部破損。" AK48
	16	"	A	5.4	7.0	1.3	55	AH47
	17	"	A	4.2	7.4	1.0	35	ミ12
	18	"	B	3.8	5.3	0.85	20	背縁潰し。左挟入部研磨。AF50
	19	"	A	4.0	5.2	0.7	20	背縁・左挟入部研磨。BG50
	20	"	C	4.5	7.4	1.05	50	背縁研磨。3住
	21	"	B	3.8	6.2	1.2	25	背縁潰し。ミ8
	22	横刃型石苞丁	B	4.8	8.7	1.2	70	背縁・挟入部潰し。ミ16
	23	"	B	4.2	7.0	1.1	45	挟りをもたず長方形を呈する。建2
	24	"	A	4.0	(8.2)	1.0	(40)	抜熱。ミ5
	25	"	A	3.9	8.5	1.0	42	CF44
	26	"	A	4.2	8.7	0.75	38	AH48
	27	"	A	2.5	6.4	1.1	38	"
	28	"	A	4.7	8.8	0.55	11	背縁・刃縁磨減。ミ2
	29	"	A	3.7	(10.0)	0.75	(20)	右側端欠。背部にわずかに自然面あり。43住
	30	"	C	3.4	7.0	1.2	55	背縁潰し。ミ16
	31	横刃型石器		4.8	8.7	2.15	50	縦長剥片。背縁・刃部b面研磨。AH51
	141-1	"		7.0	11.9	1.8	148	69住
	2	"		5.2	11.8	0.83	60	刃縁は鋭い。単なる剥片か。AO50
	3	"		7.0	8.8	1.2	98	刃部調整。AJ46
	4	"		8.5	11.8	2.5	195	刃縁磨減。AF47
	5	礫器		17.2	19.0	4.9	-	刃部?は交互剥離。AB49
	6	磨製石斧	D	7.6	3.5	0.95	50	ab面に自然面。51住
	7	"		(7.7)	3.5	0.93	(33)	基部欠。刃部・両側縁のみ研磨。ミ1
	8	"		(5.2)	4.5	2.5	(100)	"。刃部a面のみ研磨。ミ1
	9	"		(11.3)	5.8	3.15	(390)	基部・刃部欠。敲打整形痕を残す。AJ47
	10	"	A ₁	(8.3)	6.1	3.65	(328)	刃部欠。全面研磨。基端に敲打痕。AF49
	11	"		22.9	6.6	3.5	773	棒状礫を剥離整形後。刃部のみ研磨。ミ5
	142-1	石製		10.6	3.3	2.7	145	刃部のみ研磨。基端に敲打痕。
	2	敲打器		11.1	5.0	2.7	268	両端に敲打痕。
3	"		9.0	3.0	2.14	102	" AI47	

遺標	図版No	器種	法			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
遺標外	142-4	石鏝	6.1	3.9	2.13	珪質凝灰岩	≧ 2
	5	磨製石剣未成品?	7.7	3.9	0.5	珪質片岩	側縁は面取り。BL47
	6	磨製石鏝	3.3	2.8	0.26	"	
	7	"	(3.3)	2.0	0.35	"	先端部と基部欠。≧ 6
	8	磨製石鏝未成品	(4.6)	2.2	0.22	"	(III iv) 被熱。基部欠。≧ 5
	9	"	(2.4)	1.8	0.19	粘板岩	III iv " BF47
	10	磨製石鏝	(2.3)	1.7	0.24	粘板岩	" " AE49
	11	"	(1.8)	1.5	0.2	"	先端部欠。
	12	"	(1.6)	2.5	0.27	"	" AI50
	13	"	(1.7)	2.7	0.34	"	III iii 左逆刺欠。側縁に研磨面をもつ。BR49
	14	磨製石鏝未成品	(3.5)	2.1	0.25	"	III iii 先端部欠。
	15	"	(4.6)	2.7	0.36	"	III iii " "
	16	"	2.4	1.7	0.29	"	III iii " AB, AC46
	17	"	6.6	3.6	0.59	"	III ii ab面研磨。AF54
	18	"	6.6	3.2	0.6	"	III ii " CP44
	19	"	(5.5)	3.5	0.65	ホルンフェルス	III ii " ≧ 8
	20	"	(3.2)	2.8	0.49	粘板岩	III ii " AJ51
	21	"	5.2	3.1	0.62	珪質片岩	III i a面研磨。≧ 1
	22	"	4.9	2.4	0.68	粘板岩	III ii ab面研磨 ≧ 8
	23	"	(4.0)	2.9	0.35	珪質片岩	III i a面研磨。AJ48
	24	"	4.3	3.2	0.49	"	III i " AM50
	25	"	3.9	2.4	0.43	粘板岩	II ≧ 11
	26	"	4.3	2.7	0.47	珪質片岩	II AH56
	27	"	4.2	3.5	0.3	粘板岩	II AB47
	28	"	4.7	2.7	0.49	珪質片岩	II AB54
	29	"	5.0	2.9	0.55	"	II ≧ 1
	30	"	5.7	2.4	0.4	"	II ≧ 1
	31	"	6.5	2.4	0.68	粘板岩	II
	32	"	6.4	2.8	0.63	珪質片岩	II
	33	"	6.3	2.8	0.54	"	II AM50
	34	"	5.9	3.0	0.76	"	II I住
	35	"	6.3	3.1	0.73	"	II AP48

遺構	図版No	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(g)	重さ(g)		
遺構外	142-36	磨製石鏃未成品	6.7	3.3	0.85	20.0	珪質片岩	II ≒ 1	
	37	"	5.2	3.8	0.85	14.0	"	II ≒ 8	
	38	"	5.1	3.6	0.8	15.0	"	II ≒ 1	
	39	"	4.8	3.4	0.52	13.0	"	II ≒ 1	
	40	"	5.3	3.0	0.95	16.0	"	II AJ52	
	41	"	(5.5)	4.0	0.74	20.0	"	II	
	42	"	6.3	3.6	0.82	29.0	"	II	
	43	"	6.1	4.2	0.75	26.0	"	I	
	44	石製品?	5.2	3.3	—	—	ホルンフェルス	器種不明。ab面・周縁研磨。建16	

第35表 AMD 石器観察表

遺構	図版No	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(g)	重さ(g)		
18	146-1	打製石斧	A (19.6)	8.0	5.1	(980)	硬砂	刃部欠。左側縁は著しい潰し。	
住	2	"	(A) (10.2)	7.5	2.3	(178)	"	基部欠。刃部磨減。	
	3	"	(A) (8.4)	7.3	15.0	(150)	"	"	
	4	"	(A) (10.6)	7.1	3.2	(288)	"	"	
	5	"	(A) (8.2)	7.0	1.5	(115)	"	刃部磨減。	
	6	"	B 7.0	4.0	1.0	45	緑色片岩	刃部磨減。b面に自然面。	
	7	磨製石斧	D 5.7	4.0	1.1	55	"	精製。	
	8	"	B 6.3	4.6	0.7	40	"	被熱後、刃部のみ再研磨。	
	9	"	A ₂ 14.0	5.3	2.3	305	輝綠凝灰岩	刃部は潰れる。側縁に敲打痕・基部は磨減。	
	10	"	A ₂ 13.8	5.9	3.2	470	"	刃部磨減。基部・側縁に敲打痕。基部はわずかにくびれる。	
	11	"	A ₁ (9.0)	7.5	4.6	(452)	超塩基性岩	刃部片。	
	12	磨製石鏃	A ₂ 2.0	1.5	0.2	0.7	珪質片岩	先端部欠。穿孔痕あり。	
	13	"	A ₂ (1.9)	(1.7)	0.25	(1.3)	"	III iv 左逆側欠。未穿孔。	
	14	磨製石鏃未成品	(5.2)	(2.5)	0.4	(5.7)	"	I → III i a面研磨。	
	15	"	(5.0)	2.1	0.3	(4.0)	粘板岩	内貯する側縁?をもつ。原形不明。	
	16	打製石器片	—	—	—	—	硬砂岩	刃縁磨減。	
4住	147-1	有肩扇状形石器	D 10.5	10.3	1.8	210	硬砂岩		

遺構	図版No	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
4住	147-2	有孔磨製石槍丁 凹石	3.9	9.9	0.6	39	粘板岩	刃縁中央磨減。 両面の長軸方向に複数の凹をもつ。	
	(13.8)		7.9	3.8	(568)				
遺構外	147-4	打製石鏃	(2.1)	(1.0)	(0.4)	(0.8)	黒曜石	先端部・左逆刺欠。BJ38	
	5	"	(1.5)	(1.3)	0.3	-	波瑠質安山岩	先端部欠。3住	
	6	"	2.3	(2.0)	1.3	(4.5)	黒曜石	部厚い。	
	147-7	"	1.4	(1.2)	0.2	(0.4)	"	BT47	
	8	ピエス・エスキュー	2.5	1.6	0.7	1.3	"	BP42	
	9	"	1.9	1.6	0.8	2.3	"		
	10	磨製石鏃	3.0	(1.3)	0.2	(0.9)	珪質片岩	2孔。先端非常に鋭い。BN41	
	11	"	1.8	(1.5)	0.2	(0.7)	"	小形。2住	
	12	"	(1.3)	1.7	0.3	(0.8)	"	先端部欠。8住	
	13	磨製石鏃粉末成品	2.1	1.8	0.2	0.9	硬砂岩	III iii ab面研磨。側縁面取り。BN41	
	14	"	(2.7)	2.4	0.3	(2.8)	珪質片岩	III iv " BS48	
	15	"	5.6	3.1	0.5	10.9	硬砂岩	III i a面研磨。BR46	
16	"	(5.8)	2.3	0.5	(7.6)	粘板岩	III i " 8住		
17	"	4.6	2.4	0.4	6.1	珪質片岩	II 8住		
18	"	4.0	2.9	0.5	8.8	"	II		
19	"	3.0	3.0	0.3	4.4	"	III 上縁研磨。BS48		
20	"	3.7	1.8	0.5	-	"	II 21住		
21	"	(4.0)	1.6	0.3	(2.9)	"	II 8住		
148-1	打製石斧	18.6	8.3	2.5	514	硬砂岩	刃部磨減。BO45		
2	"	19.4	8.8	3.9	672	"	両側縁潰し。BL41		
3	"	19.9	9.0	6.1	1174	輝緑凝灰岩	分銅型。ab面に自然面。両端は鋭い。BP42		
4	"	14.6	6.4	2.9	310	硬砂岩	刃部磨減。BS41		
5	"	14.4	6.7	3.4	338	"	" BL38		
6	"	13.2	6.8	2.5	260	"	" BU47		
7	"	12.7	7.0	2.5	250	"	" BI40		
8	"	12.3	5.1	1.5	136	緑色片岩	" BU48		
9	"	11.8	4.6	1.2	94	珪質片岩	" BU45		
10	"	11.6	4.2	1.8	106	緑色片岩	" 8住		
11	"	10.4	4.5	1.6	85	硬砂岩	" EN41		
12	"	9.6	3.8	0.8	45	緑色片岩	" 8住		

遺構	図版No.	器種	法量			石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
遺構外	149-1	大型粗製石匙	8.8	(12.5)	2.2	(215)	BK42 硬砂岩	BK42 刃部に剥離痕。BI33
	2	有肩扇状形石器?	7.1	(10.0)	1.8	(140)	"	背縁研磨。刃部磨減。BJ37
	3	挟入打製石庖丁	4.5	8.3	1.1	48	"	背縁磨減。BO46
	4	横刃型石庖丁	3.0	8.1	0.9	22	"	刃縁磨減。8住
	5	"	3.0	(6.3)	0.8	(19)	"	8住
	6	"	3.1	7.3	0.6	15	"	刃縁磨減。BI37
	7	横刃型石器	5.8	(7.9)	0.9	(48)	"	" 21住
	8	"	-	-	-	-	"	珪質片岩
	9	"	5.6	9.9	1.2	81	珪質片岩	1住
	10	大型粗製石匙	3.1	12.1	0.9	36	緑色片岩	BJ31
	11	磨製石斧	(3.4)	(2.5)	(0.6)	(6)	輝緑凝灰岩	8住
	12	"	(10.1)	2.7	1.5	(75)	"	刃部欠。棒状礫を研磨。1住
	13	"	9.8	4.0	1.1	65	緑色片岩	刃部のみ研磨。磨減する。8住
	14	"	(5.8)	5.1	1.7	(62)	輝緑凝灰岩	BI38
	15	"	14.0	5.1	2.7	394	"	刃部に器軸と斜方向の擦痕あり。基部ab面に自然面あり。8住
	16	打製石器	10.2	7.7	2.5	248	硬砂岩	自然礫の周縁を剥離。BI38
	17	石鏟	5.0	4.7	1.2	44	"	BR46
	18	"	6.5	5.0	1.4	73	"	BP42
	19	"	5.8	5.9	1.3	72	"	12住
	20	"	6.8	5.8	1.6	80	輝緑凝灰岩	8住
	21	凹石	10.4	9.3	3.6	435	ホルンフェルス	ab面に凹あり。BK35

第36表 A R Y 石器観察表

遺構	図版No.	器種	法量			石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
小堅穴1	165-1	打製石鏟	2.8	(1.4)	0.5	(1.0)	チャート	左逆刺欠。
	15	横刃型石器	5.6	11.4	1.2	110	硬砂岩	刃部調整。
	16	打製石斧?	(3.2)	3.5	0.6	(8.7)	緑色片岩	刃部片か。土擦れ状に著しく磨減。
	17	特殊磨石	8.7	17.4	4.8	992	硬砂岩	自然石の一長辺に細長いザラついた機能面。背部に敲打痕あり。
	165-2	打製石鏟	(1.2)	1.4	0.3	(0.5)	黒曜石	先端部。左逆刺欠。

遺構	図版No.	器種	法量			石質	備考		
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
小竪穴4	165-3	使用痕のある剥片	1.3	1.5	0.4	黒曜石	スクレイパー状の剥離痕。小剥離痕。		
	4	"	2.6	1.5	0.3	"			
小竪穴5	165-18	横刃型石器	2.8	(2.7)	0.6	硬砂岩	破片。背部調整。 a面のみ刃部調整。 刃部はトロトロに磨滅。 a面は平坦。わずかに磨滅。 尖端部が曲がる。ab面に大剥離面を残す。		
	19	"	3.3	6.7	0.6	輝緑凝灰岩			
	20	"	4.8	10.2	1.6	緑色片岩			
	166-1	石皿	(28.0)	31.0	9.6	花崗岩			
	165-5	打製石鏃	2.4	1.5	0.5	チャート			
小竪穴6	6	"	1.8	1.3	0.5	黒曜石	半分欠。 " 刃部は両面調整。 微細な剥離痕。 " 両端に階段状剥離痕。		
	7	"	(2.0)	1.3	0.5	"			
	8	"	(1.9)	(1.0)	0.5	"			
	9	スクレイパー	3.3	2.4	0.9	チャート			
	10	使用痕のある剥片	(1.9)	2.1	0.2	黒曜色			
	11	"	2.4	1.9	0.6	チャート			
	12	ピエス・エスキュー	3.1	1.5	0.9	黒曜石			
	166-13	打製石鏃	2.0	1.3	0.4	黒曜石		左端部欠。b面に大剥離面を残す。 尖端は鋭い。丁重な調整。DU50 部厚い。ab面に大剥離面を残す。 ノッチ状の小剥離痕。DT49 ab面に大剥離面を残す。DT49 微細な小剥離痕。DS49	
	14	"	2.3	(1.7)	0.6	(1.9)			チャート
	166-2	打製石鏃	2.1	1.6	0.4	0.9			チャート
	3	"	2.4	1.8	0.7	2.4			黒曜石
	4	使用痕のある剥片	1.6	2.5	0.6	2.0			"
5	打製石鏃	2.3	1.6	0.5	1.4	"			
6	使用痕のある剥片	2.7	2.2	1.0	3.9	"			
166-7	打製石鏃	2.7	(1.1)	0.4	(0.7)	黒曜石	鋭い。丁重な調整。左側縁からの剥離で右逆刺欠損。12住 " 建18 右逆刺欠。F24。 " DK52 不整形。11住 刃部欠。側縁・基縁は面取りしない。両刃。12住 刃部調整。刃縁はギザギザ。DH50 刃部b面のみ調整。DH50 45住 ab面に大剥離面を残す。基部調整は簡單。44住 両端から階段状剥離痕。上端部は鋭く、下端部は部厚い。CW49		
8	"	1.7	1.2	0.3	0.4	"			
9	"	1.7	(1.5)	0.3	(0.5)	"			
10	"	1.3	1.5	0.3	(0.4)	"			
11	"	1.6	1.4	0.4	0.8	玻璃質安山岩			
177-1	磨製石斧	7.5	5.2	1.7	106	輝緑凝灰岩			
2	横刃型石器	13.2	4.9	1.7	114	ホルンフェルス			
3	"	11.0	6.0	1.5	120	硬砂岩			
166-12	打製石鏃	1.7	1.5	0.3	0.6	黒曜石			
13	"	2.8	(1.5)	0.4	(1.5)	チャート			
14	ピエス・エスキュー	2.6	1.5	1.0	3.2	黒曜石			

遺構	図版No.	器種	法			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
ユニ ット 3	166-15	不定形石器	2.4	2.3	0.9	チャート	周縁に粗雑な調整。44住 粗雑な片面調整。CW49 磨減痕は認められない。 "
	172-4	礫器	9.4	7.4	(4.3)	安山岩	
	5	磨石	10.1	8.6	3.3	450	
	167-1	打製石鏃	1.8	1.5	0.3	黒曜石	
	2	"	1.7	1.3	0.3	"	
ユニ ット 4	3	"	1.8	1.5	0.3	"	Q53
	4	"	1.6	1.5	0.4	"	CR53
	5	"	1.6	1.5	0.7	黒曜石	部厚い。CT51
	6	"	(1.4)	(1.1)	0.3	"	基部欠。CQ52
	7	"	2.2	1.7	0.5	チャート	b面に大剥離面を残す。CS53
	8	不定形石器	2.3	2.1	0.7	玻璃質安山岩	CR54
	9	尖頭状石器?	2.7	2.1	1.4	黒曜石	塊状。CR54
	10	スクレイパー	2.1	1.9	0.6	"	下縁辺を両面調整。右側縁は小剥離痕。CS51
	11	使用痕のある剥片	1.8	1.5	0.3	"	小剥離痕。CO51
	12	"	2.5	1.5	0.4	"	" CR54
	ユニ ット 5	13	不定形石器	2.3	1.8	0.5	チャート
14		石核	2.0	3.4	1.2	珪質頁岩	CS53
171-6		礫器	11.1	7.0	3.4	珪質凝灰岩	部厚い。礫表皮剥片を片面調整。上面は節理面。CR51
7		"	12.5	11.0	4.5	硬砂	b面は節理面を広く残す。両面調整。CR51
8		"	7.1	6.5	2.1	80	礫表皮剥片を片面調整。右側面は節理面。CR53
9		横刃型石器	9.7	8.2	1.8	155	周縁を調整。CS51
10		特殊磨石	14.9	6.5	5.7	948	棒状深の一長辺に細長い磨面をもつ。CP51
167-15		打製石鏃	(2.4)	2.2	1.0	(3.9)	a面はコブ状に肥厚。CQ46
16		"	1.9	1.3	0.4	0.7	CP48
17		"	1.6	1.2	0.2	0.4	基部調整なし。CP46
ユニ ット 6	18	使用痕のある剥片	2.3	1.3	0.3	0.9	a面は自然面。b面に小剥離痕。CQ46
	19	不定形石器	3.5	2.7	1.2	9.1	49住
	171-11	横刃型石器	11.2	4.3	1.8	80	刃部は片面調整。刃縁はギザギザ。CQ45
ユニ ット 6	168-1	打製石鏃	1.9	2.0	0.7	1.9	部厚い。CE52
	2	"	(1.7)	2.4	0.4	(1.2)	先端部欠。CE51
	3	"	(1.5)	(0.7)	0.3	(0.2)	左逆刺のみ。a面に自然面残る。CE53
	4	"	2.8	1.3	0.8	2.3	菱形鏃。部厚い。CC51

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
大ニツト6	168-5	尖頭状石器	2.8	2.5	1.3	チャート	部厚い。CD52
	6	不定形石器	3.2	3.0	1.5	"	"
大ニツト	168-7	打製石鏃	3.3	2.5	0.5	チャート	先端部近くに肩をもつ。丁重な調整。CB52
	8	"	3.0 (1.8)	0.4	0.4 (1.4)	"	" 43住
	9	"	2.3	1.5	0.4	黒曜石	" 43住
	10	"	1.6	1.2	0.3	"	小形。丁重な調整。26住
	11	"	2.3	1.8	0.4	チャート	43住
	12	"	(1.7)	2.2	0.5 (1.3)	"	先端部欠。43住
	13	"	2.7	1.7	0.4	黒曜石	丁重な調整。CN50
	14	"	(1.7)	2.0	0.5 (1.2)	チャート	先端部欠。CA52
	15	"	1.7	1.3	0.3	黒曜石	43住
	16	"	2.8	1.5	0.4	"	丁重な調整。非常に鋭い。"
	17	"	1.9	1.3	0.3	"	DB50
18	"	2.2	1.5	0.5	"	b面に自然面を残す。CM50	
19	"	(1.9)	1.5	0.4 (0.8)	玻璃質安山岩	先端部欠。CP54	
20	"	2.1	(1.2)	0.3 (0.6)	黒曜石	右逆刺欠。CN49	
21	"	(2.1)	(1.5)	0.4 (0.9)	チャート	左逆刺欠。ミ6	
22	"	1.7	1.6	0.4	黒曜石	43住	
23	"	1.6	(1.2)	0.3	"	左逆刺欠。	
24	"	(1.2)	1.3	0.3 (0.4)	"	先端部欠。CG48	
25	"	1.2	1.3	0.3	玻璃質安山岩	小形。CA52	
169-1	1	"	(1.5)	(1.4)	0.4 (0.7)	黒曜石	半欠。CP49
	2	"	(1.2)	(1.3)	0.3 (0.4)	"	先端部・基部欠。CM53
	3	"	2.2	1.7	0.6	チャート	a面側が膨む。CB50
	4	"	(1.1)	1.2	0.3 (0.4)	黒曜石	先端部欠。43住
	5	"	1.7	1.4	0.6	"	部厚い。24住
	6	"	1.6	1.1	0.3	"	CU48
	7	尖頭状石器	1.8	1.7	0.8	"	不定形。部厚い。CP49
	8	"	2.7	2.2	0.8	チャート	先端部が曲がる。部厚い。
	9	"	2.7	1.8	0.7	"	基部調整なし。a面に自然面を残す。CH51
	10	"	3.1	2.6	0.8	"	ab面に大斜断面を残す。湾曲。43住
	11	不定形石器	3.0	2.9	1.2	"	部厚い。CI50

遺構	図版No	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	重さ(g)		
大ユニツト	169-12	不定形石器	3.2	2.9	1.6	—	チャート	部厚い。	
	13	"	3.2	2.3	1.3	8.3	"	" 43住	
	14	打製石錐	(2.5)	1.1	0.4	(0.7)	黒曜石	錐部先端欠。24住	
	15	"	2.1	1.5	0.5	1.1	"	小さな錐部を作出。25住	
	16	スクレイパー	2.2	1.9	0.5	2.3	"	孤刃。b面に大剥離面を残す。DC48	
	17	"	2.3	2.3	1.0	5.7	"	" 24住	
	18	"	2.1	1.5	0.4	1.0	"	" CL51	
	19	不定形石器	2.3	1.3	0.6	1.5	"	下辺は刃部調整とはならない。CY50	
	20	スクレイパー	1.9	1.4	0.5	1.3	"	≒18	
	21	"	1.9	1.3	0.3	0.4	"	43住	
	22	" ?	3.2	2.0	1.2	7.6	チャート	下縁は階段状剥離痕。a面右側縁に細長い剥離痕。CL48	
	23	石匙	2.5	4.2	0.6	5.2	黒曜石	石匙としての定形化していない。CC54	
	170-1	不定形石器	2.0	1.9	0.6	1.9	"	CO50	
	2	"	2.4	2.3	0.8	3.4	"	下縁に急角度90°の調整。CF48	
	3	使用痕のある剥片	3.1	2.2	0.7	3.2	"	細かな剥離痕と微細な剥離痕。43住	
	4	"	2.4	1.8	0.6	2.1	"	細かな剥離痕。CH48	
	5	"	2.5	1.7	0.7	—	"	微細な剥離痕。	
	6	"	2.5	2.0	2.0	2.6	"	細かな剥離痕。	
	7	不定形石器	2.1	1.5	0.7	2.4	"	a面のみ調整。43住	
	8	"	4.5	2.9	1.3	14.5	珪質頁岩	26住	
	9	剥片	2.4	2.4	0.8	2.5	チャート	43住	
	10	"	3.6	3.5	0.8	11.9	"	26住	
11	ピエス・エスキューユ	1.7	2.0	1.1	3.6	黒曜石	上部部に階段状剥離痕。下部部にダメージ。CJ54		
12	使用痕のある剥片	3.4	1.7	1.0	—	"	CC45		
13	不定形石器	3.5	1.8	0.9	7.3	"	a面は自然面。CN50		
14	ピエス・エスキューユ	3.1	3.2	1.3	10.7	珪質頁岩	上面は節理面。CG52		
15	石核	2.6	4.0	1.1	14.0	チャート	片面調整。CJ51		
172-1	礫器	9.7	12.9	6.7	1160	輝緑凝灰岩	片面調整。上面に平坦面を形成。23住		
2	"	6.4	6.6	3.8	140	安山岩	" 25住		
3	"	8.7	13.4	6.0	785	硬砂岩	" 集1		
4	"	8.8	13.3	3.8	504	"	" 部厚い剥片を利用か。26住		
5	"	7.2	8.7	3.1	198	"	"		

遺構	図版No	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
大ユニット	172-6	碟器	7.3	8.6	2.9	210	硬砂岩	両面調整。自然面を残さない。CY48	
	173-1	横刃型石器?	6.3	9.3	2.6	150	"	背部に粗雑な調整。CI52	
	2	"?	5.3	10.0	2.1	106	"	背部調整。あるいは打製石器の破損品か。CB53	
	3	"	4.7	7.8	1.7	50	ホルンフェルス	刃部は片面調整。CB47	
	4	碟器	9.5	7.0	2.9	208	硬砂岩	粗雑な調整。CB51	
	5	磨製石斧	6.2	5.2	1.5	74	輝緑凝灰岩	側縁・基縁は面取りしない。片刃。CI52	
	6	磨石	9.8	9.7	3.9	575	花崗岩	a面磨減。中央に凹をもつ。CN50	
	7	"	4.7	10.1	3.4	260	超塩基性岩	ab面磨減。25住	
	8	特殊磨石	5.3	11.0	5.2	486	硬砂岩	上下縁部に細長い磨面をもつ。23住	
9	砥石	6.2	1.9	1.3	22	輝緑凝灰岩	三角柱状を呈し、稜辺磨減。CG52		
住	174-1	打製石斧	A	18.1	8.0	3.8	524	硬砂岩	刃部磨減。刃縁石。
	2	"	(A)	(10.8)	6.6	1.5	(125)	"	基部欠。
	3	"	A	(8.4)	6.1	2.5	(174)	"	胴部のみ。抜熱。
	4	"	B	(10.9)	5.6	1.6	(108)	緑色片岩	刃部欠。
	5	磨製石斧	E ₂	6.3	2.1	0.9	22	"	抜熱。
	6	"	E ₁	12.3	1.3	2.5	70	"	スス付着。着装痕が残る。
	7	"	D	12.6	6.8	1.9	345	超塩基性岩	"
	8	"	C	11.6	3.9	0.9	567	緑色片岩	刃部破損。
	9	"	A ₂	13.2	3.8	2.9	(195)	輝緑凝灰岩	基部欠。
	10	"	A ₁	14.7	6.7	3.9	624	超塩基性岩	基端に敲打痕。スス付着。
	11	横刃型石器		9.5	11.8	1.8	214	硬砂岩	内湾刃。
	12	"		7.3	13.8	1.7	136	"	a面は節理面。刃部に刃こぼれ状小刺離痕。
175-1	1	有肩扇形状石器	F	(10.9)	(10.2)	2.1	(198)	"	刃部欠。
	2	"	B	(9.1)	(10.9)	1.9	(190)	"	"
	3	磨製石鏃未成品		6.2	2.3	0.6	12.0	珪質片岩	II
	4	"		4.3	2.4	4.0	粘板	岩	II
5	敲打器	F	(15.1)	5.6	4.7	530	"	一端に刺離痕。a面に磨減。キズ状の研磨痕あり。	
6	端部曲面磨石		12.5	12.3	8.0	1885	超塩基性岩	下面は非常に滑らかな磨面。上端部・a面に敲打痕。	
7	台石		34.6	31.5	6.7	10200	花崗岩	円板状をなす。使用痕なし。	
8	石臼		(31.8)	(16.2)	6.0	(5000)	閃緑岩	破片。a面は良好な磨面。	
181-30	打製石鏃		—	—	—	—	黒曜石		
175-9	磨製石斧	C	(10.3)	5.8	1.9	(222)	輝緑岩	基部欠。刃部のみ研磨。スス付着。	

遺標	図版No.	器種	法量			石質	備考		
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
10 住	176-1	横刃型石楯丁	C	4.1	9.2	1.5	78	背縁潰れ。刃部潰れさみの調整。 粗雑な調整。縄文時代早期の所産であらう。	
	2	横刃型石器		8.2	10.8	2.8	255		
11 住	176-3	打製石斧	(A)	(9.7)	7.5	2.5	(183)	刃部のみ。	
	4	横刃型石包丁	A	3.8	(9.5)	1.1	(43)	右半分欠。	
	5	"	A	3.3	(5.9)	0.9	(22)		
	6	"	A	3.2	(4.9)	1.1	(15)	"	
	7	磨製石鏃?		2.7	1.2	0.4	1.6	緑色片岩	
	166-16	砥石		32.8	16.7	12.5	7900	片麻岩	
	11	打製石鏃		-	-	-	-	玻璃質安山岩	
15 住	176-8	打製石斧	A	19.4	6.8	3.1	540	刃部磨減。	
	9	"	A	18.7	8.8	3.4	700	刃部のみ。	
	10	"	(A)	(6.5)	7.6	1.7	(101)		
	11	"	B	11.9	5.3	2.6	192	粗雑な調整。	
	12	"	(B)	(4.3)	6.0	1.8	(59)	基部のみ。	
	13	横刃型石楯丁	A	4.2	10.1	1.3	78	刃縁磨減。	
	14	"	A	3.5	(4.6)	0.9	(16)	背縁は節理面。刃縁は潰れさみ。 b面に着柄による光沢をもつ磨減痕あり。	
	15	"	C	4.3	7.1	0.9	36		
	16	横刃型石器		6.9	10.1	1.8	150	基部に舌状の突起を作出。	
	17	磨製石斧	E ₁	8.6	2.2	2.0	42	II 先端部・基部欠。	
	18	磨製石鏃		1.9	1.3	0.2	0.7	II	
	19	磨製石鏃未成品		(2.1)	2.4	0.4	(2.5)	II	
	20	"		4.5	2.0	0.4	3.5	II	
	23 住	177-1	打製石斧	A	16.7	8.3	3.5	463	刃部磨減。b面に自然面あり。
		2	"	A	18.0	5.4	2.7	430	"
		3	"	A	18.5	7.5	3.9	610	刃部は節理で破損。
4		"	(A)	(10.4)	7.3	3.0	(345)	刃部欠。	
5		"	(A)	(7.7)	7.6	1.2	(142)	基部のみ。左側縁はb面のみ調整。	
6		"	B	8.1	3.8	0.9	41	刃部欠。	
7		磨製石斧	A ₂	(14.3)	6.8	2.8	(414)		刃部小破片。
-		"	(D)	(2.1)	(1.8)	(0.5)	(1.9)		
8		横刃型石器		9.3	14.2	1.6	228		
9	磨製石鏃未成品?		5.0	6.4	0.7	30			

遺構	図版No	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(g)	重さ(g)		
遺構外	181-1	打製石鏃	2.4	2.0	0.3	1.1	ト	丁重な調整。尖端部近くに肩をもつ。ミ3	
	2	"	2.6	1.4	0.3	0.9	黒曜石	" 37住	
	3	"	(1.5)	1.6	0.4	(0.8)	"	先端部欠。AJ52	
	4	"	(2.1)	(1.6)	0.3	(0.6)	チャ	右逆刺欠。長脚鏃。DX44	
	5	"	2.6	1.9	0.4	1.2	"	丁重な調整。EO49	
	6	"	(1.9)	1.3	0.3	(0.5)	黒曜石	右逆刺欠。31住	
	7	"	(1.5)	1.9	0.4	(1.0)	チャ	先端部欠。ミ19	
	8	"	(2.2)	1.6	0.4	(0.9)	黒曜石	右逆刺欠。50住	
	9	"	(1.1)	1.7	0.3	-	"	先端部欠。	
	10	"	(1.7)	(0.8)	0.4	(0.4)	チャ	先端部・左逆刺欠。36住	
	11	"	(1.7)	(1.4)	0.3	(0.4)	黒曜石	先端部・右逆刺欠。26住	
	12	"	(2.4)	(1.4)	0.4	(0.7)	"	左逆刺欠。b面はコア状に肥厚する。31住	
	13	"	(1.7)	(0.8)	0.2	(0.2)	"	左逆刺のみ。31住	
	14	"	2.1	1.5	0.3	0.9	"	b面に大剝離面を残す。	
	15	"	1.8	1.4	0.3	0.4	"	"	
	16	"	1.2	1.3	0.3	0.4	"	b面に大剝離面を残す。31住	
	17	"	1.8	1.3	0.6	0.9	"	"	
	18	"	(1.2)	1.6	0.3	(0.5)	"	先端部欠。EI43	
	19	"	2.0	1.5	0.4	1.0	"	ab面に大剝離面を残す。AR61	
	20	"	1.6	1.3	0.4	0.6	"	a面に大剝離面を残す。19住	
	21	"	(1.7)	(1.3)	0.4	(0.6)	"	右逆刺欠。AG59	
	22	"	(2.3)	1.4	0.3	(0.7)	"	" EL50	
	23	"	(1.5)	(1.2)	0.3	(0.4)	"	先端部・右逆刺欠。	
	24	"	(2.2)	(1.7)	0.3	(1.0)	"	右側縁からの剝離で左逆刺欠。50住	
	25	"	(1.3)	1.5	0.6	(0.7)	"	先端部欠。粗雑な調整。31住	
	26	"	(2.0)	1.8	0.4	(1.2)	"	60住	
	27	"	(1.6)	(0.9)	0.3	(0.4)	"	右半分のみ。42住	
	28	"	2.3	1.7	0.7	2.3	"	DW62	
	29	"	1.7	1.5	0.6	1.4	"	13住	
	30	"	(2.0)	1.2	0.4	(0.8)	"	先端部欠。基部調整なし。9住	
	31	尖頭状石器	2.9	1.8	1.0	4.5	"	部厚い。36住	
	32	打製石鏃	2.8	1.6	0.5	1.8	チャ	BW50	

遺構	図版No	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	重さ(g)		
遺構外	182-1	打製石鏃	3.8	1.8	0.4	1.3	黒曜石	製作途中で右逆刺破損か。左右不对称。EN42 左逆刺欠。EE46 34住 先端部欠。" 先端部・基部欠。五角形鏃。E146 刃部両面調整。26住 31住 19住 粗い小剥離痕。DW47 刃部片面調整。D区 微細な剥離痕。28住 小剥離痕。 " 3住 両端部を調整。 ≦19 片面調整。 ノッチ状の調整。32住 左側縁に細長い剥離痕集中。36住 上面は自然面。DX52 刃部磨減。両側縁に潰し。a面稜部に敲打痕。ミ3 刃部調整なし。CD54 刃部磨減。CD54 " CL54 CD53 " 刃部磨減。CP36 b面に側縁調整。CL48 刃部磨減。AP60 " AR66 " EO49 " AL63 CS45 刃部磨減。CD54	
	2	"	2.1	(1.3)	0.4	(0.6)	"		
	3	"	2.9	1.5	0.6	1.7	"		
	4	"	3.2	1.5	0.54	1.9	玻璃質安山岩		
	5	"	(1.9)	1.5	0.5	(1.2)	黒曜石		
	6	スクレイパー	2.2	2.1	1.0	4.8	チャート		
	7	"	1.9	1.7	0.6	1.6	黒曜石		
	8	不定形石器	3.8	1.8	0.8	4.5	"		
	9	使用痕のある剥片	2.4	2.5	0.9	5.1	"		
	10	スクレイパー	4.0	2.9	0.7	6.7	"		
	11	使用痕のある剥片	3.8	2.8	0.8	6.8	"		
	12	"	3.1	1.7	0.8	4.6	チャート		
	13	不定形石器	3.0	1.9	0.7	3.0	"		
	14	"	2.6	1.5	0.7	2.4	黒曜石		
	15	"	4.1	2.9	1.2	14.4	"		
	16	"	2.0	1.1	0.3	-	"		
	17	"	2.6	1.5	0.7	2.4	"		
	18	"	2.5	2.5	1.1	2.8	"		
19	石核	3.3	4.4	1.2	1.36	チャート			
183-1	打製石斧	22.0	3.9	7.8	578	硬砂	刃部磨減。両側縁に潰し。a面稜部に敲打痕。ミ3 刃部調整なし。CD54 刃部磨減。CD54 " CL54 CD53 " 刃部磨減。CP36 b面に側縁調整。CL48 刃部磨減。AP60 " AR66 " EO49 " AL63 CS45 刃部磨減。CD54		
	2	"	18.2	9.0	3.5	658		"	
	3	"	17.6	2.7	8.2	495		"	
	4	"	14.6	5.0	2.7	237		"	
	5	"	17.4	2.3	6.4	300		"	
	6	"	19.5	3.4	6.5	518		珩質凝灰岩	
	7	"	20.4	6.1	3.6	582		硬砂	
	8	"	10.7	4.1	1.4	82		珩質片岩	
	9	"	11.6	4.3	1.4	90		緑色片岩	
	10	"	10.7	3.6	1.4	72		"	
	11	"	10.6	4.0	1.6	77		硬砂	
	12	"	9.9	4.1	1.7	84		緑色片岩	
	184-1	"	19.7	7.8	3.6	682		硬砂	

遺構	図版No.	器種	法量			石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			重量(g)
遺構外	184-2	打製石斧	17.4	9.4	3.1	452	刃部磨減。建3	
	3	"	17.0	7.9	3.2	475	ミ7	
	4	"	14.2	7.3	2.6	308	刃部磨減。CL50	
	5	"	13.0	8.3	2.3	238	26住	
	6	"	11.6	7.2	2.1	174	CL50	
	7	"	12.7	7.4	1.7	173	刃部磨減。AO60	
	8	"	12.1	6.0	3.1	272	DU50	
	9	"	13.7	8.2	3.7	470	部厚い。D区	
	185-1	1	"	15.4	6.8	2.6	318	CD52
		2	"	13.5	6.6	2.5	282	AN53
	3	"	13.4	7.7	2.9	400	CS46	
	4	"	13.1	5.2	1.6	138	刃部磨減。EK52	
	5	"	12.2	6.2	1.9	170	" DI52	
	6	"	13.8	5.3	1.9	152	緑色片岩	
	7	"	12.8	5.2	2.2	168	硬砂岩	
	8	"	17.8	6.0	2.8	310	刃部磨減。50住	
9	"	10.5	5.2	2.0	94	DA49		
10	"	10.2	5.2	1.8	142	CD50		
11	"	10.2	5.1	2.1	118	21住		
12	"	11.3	4.9	1.8	120	21住		
13	"	9.1	4.3	1.6	75	刃部磨減。CL50		
14	"	8.8	2.9	0.7	24	" AB48		
15	"	8.7	3.1	1.1	42	両側縁に挟りあり。CG50		
16	"	7.5	4.2	1.2	46	刃部磨減。C区		
186-1	1	有屑扇形状石器	13.3	14.9	2.3	370	" CK53	
	2	"	11.3	10.5	2.6	278	刃部に小剝離。DK49	
	3	"	13.1	10.4	2.5	304	ミ1	
	4	"	10.3	12.7	1.7	240	刃部a面のみロー状光沢物付着。25住	
	5	"	8.3	11.1	1.3	148	刃部にロー状光沢物付着。CE53	
	6	"	8.4	11.8	2.1	210	" " 25住	
	7	有挟石器	8.2	6.7	1.4	98	" " 21住	
	8	"	10.5	9.4	1.7	162	CR52	
						CG53		

遺構	図版No	器種	法			石質	備考		
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
遺構外	186-9	有肩扇状形石器	A	(5.4)	(10.7)	1.9	(100)	硬砂	基部・刃部右端欠。AM56
	10	有柄石器	A	(8.2)	(14.3)	3.2	(380)	"	刃部欠。CI47
	187-1	有孔磨製石庖丁	A	3.1	8.2	0.7	30	"	刃縁左側に面取り。25住
	2	"	A	3.3	(7.2)	0.8	(25)	珪質片	右端部欠。刃縁中央磨減。CB52
	3	挟入打製石庖丁	B	3.8	7.4	1.4	49	硬砂	背縁潰し。ミ8
	4	"	B	3.0	4.6	0.7	-	"	小形。
	5	横刃型石庖丁	A	3.3	7.8	1.1	37	"	CC47
	6	"	A	4.2	10.4	1.5	68	"	刃縁磨減。43住
	7	"	A	4.0	10.4	1.5	75	"	CH52
	8	"	A	3.6	(8.2)	1.0	(31)	"	刃部b面磨減。BW55
	9	"	A	3.5	8.7	1.1	44	"	" 46住
	10	"	A	3.1	6.6	0.8	18	"	背縁は著しく磨減、あるいは研磨か。6住
	11	"	A	3.2	8.2	0.8	21	"	刃部破損。26住
	12	"	A	3.4	8.8	1.0	32	"	刃部b面磨減。4住
	13	"	A	3.2	(6.3)	0.9	(21)	硬砂	右端部欠。43住
	14	"	A	2.8	(6.7)	0.7	(16)	"	" 被熱。30住
	15	"	A	3.5	(5.5)	0.7	(16)	"	左端部欠。34住
	16	"	A	3.3	6.9	0.8	19	"	A062
	17	"	C	3.4	6.7	0.9	2.3	"	AB53
	18	"	C	3.7	6.7	0.9	23	"	刃部に刃こぼれ。AI55
	19	"	C	3.9	6.0	0.7	21	"	" 35住
	20	"	A	3.7	9.4	1.1	46	"	刃部b面磨減。b面は節理面。26住
	21	"	A	3.5	9.7	1.2	33	"	ミ14
	22	"	A	3.4	9.6	1.1	37	"	CV47
	23	"	A	3.5	9.7	1.0	45	"	50住
	24	"	A	3.3	8.3	1.1	32	"	刃縁潰し。19住
	25	横刃型石器	A	5.3	9.3	1.3	64	"	背縁は節理面。17住
	26	"	"	5.4	9.6	1.8	95	"	CM48
	27	"	"	7.0	10.9	2.2	142	"	刃部に刃こぼれ。AJ47
	28	"	"	5.6	9.8	1.8	130	"	"
29	"	"	7.8	13.2	2.0	270	"	粗雑な調整。EF47	
30	"	"	7.3	13.3	1.4	165	"	CD54	

遺構	図版No	器種	法			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
遺構外	187-31	横刃型石器	5.7	8.3	74	硬砂岩	18住
	188-1	"	4.9	9.2	80	緑色片岩	AJ55
	2	"	4.8	9.2	85	硬砂岩	CH54
	3	"	6.7	8.9	75	珪質片岩	AI54
	4	"	8.2	14.3	200	硬砂岩	背部は大割の剥離。刃部調整。6住
	5	"	6.4	11.3	150	"	b面を剥離調整。縄文時代早期の所産であろう。51住
	6	礫器	16.3	15.3	5.1	"	片面調整。EA52
	7	"	14.7	12.3	5.7	"	交互剥離による両面調整。" EN44
	8	"	12.9	8.8	4.8	"	粗雑な調整。a面に凹をもつ。" C区
	9	石鏟	2.2	1.7	0.4	緑色片岩	小形。AR64
	10	"	3.6	2.3	1.2	ホルンフェルス	B区
	11	"	4.9	3.2	30	硬砂岩	DC44
	12	"	5.4	3.6	30	"	AK62
	13	"	6.2	4.2	1.3	"	DH45
	14	"	6.9	4.5	1.7	"	DX45
15	"	7.2	4.3	1.5	"	両側縁に決りをもつ。AP68	
189-1	磨製石斧	D	10.7	6.6	1.6	緑色片岩	3住
2	"	D	8.3	5.9	1.6	135	部分的に風化。41住
3	"	D	6.7	4.0	1.3	65	刃部磨減。A区
4	"	B	7.1	4.2	0.7	35	刃部のみ研磨。CD52
5	"	"	6.1	4.3	0.9	25	" EM42
6	"	"	(9.5)	4.3	3.5	(745)	6住
7	磨製石斧未成品	"	(10.6)	6.0	3.2	(370)	≧17
8	"	"	-	-	-	-	b面一部研磨。6住
9	敲打器	"	7.1	6.4	4.4	212	BY53
10	"	"	4.9	6.4	1.4	64	建5
11	環状石器	"	(6.0)	(4.4)	(1.0)	(25)	BX48
12	磨石	"	(10.8)	12.0	3.9	(698)	a面に敲打痕をもつ磨減痕。19住
13	"	"	11.3	10.2	3.3	578	a面に滑らかな磨面。D区
14	凹石	"	12.0	6.1	4.4	354	a面に2つの凹あり。
190-1	磨製石剣	"	11.0	3.1	0.6	22.0	部分的に丹が付着 AK52
2	"	"	9.1	2.6	0.5	17.0	尖端部・両側縁磨減。茎の関部に決り。AI58

遺構	図版No.	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
遺構外	190-3	磨製石剣	4.9 (4.2)	(2.5)	0.4	(7.6)	珪質片岩	尖端部基部欠。破損品を再加工。CI54	
	4	"	(2.6)	(2.6)	0.5	(11.2)	輝緑岩	" CC45	
	5	" ?	(3.9)	3.8	0.7	(17.7)	珪質片岩	基部片か。一孔を穿つ。b面に微方向の研磨痕。DX50	
	6	磨製石鏃	2.7	1.8	0.2	0.9	"	50住	
	7	"	(3.1)	(1.8)	0.2	(1.9)	板岩	尖端部・基部欠。AH61	
	8	"	(1.4)	(1.9)	0.2	(0.8)	"	基部のみ。2住	
	9	"	(1.3)	2.2	0.3	(1.0)	"	" 穿孔痕あり。4住	
	10	磨製石鏃未成品	(3.7)	3.2	0.4	(5.2)	珪質片岩	Ⅲiv 基部欠。SX49	
	11	"	6.2	2.4	0.4	9.3	緑色片岩	Ⅲii ab面研磨。6住	
	12	"	5.4	2.5	0.5	8.5	珪質片岩	" "	
	13	"	(5.4)	2.1	0.4	(6.0)	緑色片岩	" " DQ51	
	14	"	4.6	2.7	1.0	18.1	板岩	Ⅲi a面研磨。部厚い。17住	
	15	"	5.8	3.5	1.0	20.3	"	Ⅲi ≧ 4	
	16	"	5.2	3.1	0.6	12.8	珪質片岩	II AB54	
	17	"	(4.0)	2.5	0.3	(4.3)	板岩	II 25住	
	18	"	4.9	2.4	0.5	8.1	珪質片岩	II DR52	
	19	"	5.3	2.3	0.7	8.1	板岩	II A063	
	20	"	4.4	2.3	0.6	7.2	珪質片岩	II	
	21	"	3.5	2.0	0.5	4.2	"	II b面に自然面あり。DK50	
	22	"	3.6	2.1	0.4	4.2	"	II 6住	
	23	"	4.1	2.2	0.4	4.3	"	II 14住	
	24	"	4.7	2.6	0.6	8.7	"	II 6住	
	25	"	4.9	3.3	1.1	21.9	"	II ≧ 17	
	26	"	4.1	3.8	0.5	8.1	"	II	
	27	"	8.4	2.9	0.9	23.9	"	II AP62	
	28	"	8.7	2.3	0.5	19.0	緑色片岩	II EI50	
	29	"	6.9	2.0	0.8	11.7	輝緑岩	II 21住	
	30	"	5.8	1.9	0.6	8.4	粘板岩	II 16住	
	31	"	6.8	3.6	0.7	20.1	珪質片岩	II CQ53	
	32	" (B)	6.8	1.9	0.4	5.7	緑色片岩	II→Ⅲiii 尖端部側縁のみ研磨。柄部作出。DD48	
	33	磨製石鏃?	2.7	2.0	0.6	3.8	粘板岩	側縁部研磨。17住	
	34	" ?	3.3	1.2	0.3	1.7	珪質片岩	尖端部・側縁研磨。"	

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
遺構外	190-35	磨製石錐?	3.3	1.6	0.7	(3.1)	先端部のみ研磨。45庄
	36	磨製石錐半成品	3.0	1.9	0.5	-	III
	37	"	2.8	1.8	0.4	2.7	III CF47

第37表 A B 石器観察表

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
住	211-1	打製石斧	13.9	4.6	1.5	112	刃部磨減。右側縁研磨。
	2	"	12.1	3.8	1.45	85	"
	3	"	11.3	3.3	0.9	43	両側縁に抉りあり。磨減。
	4	"	9.9	4.0	1.35	72	刃部磨減。
	5	"	(8.5)	3.5	1.15	(55)	基部欠。刃部磨減。
	6	"	(5.8)	3.5	0.9	(25)	"
	7	横刃型石器	5.2	8.0	1.25	63	刃部に刃こぼれ。
	8	"	8.1	11.1	2.0	150	周縁・B面磨減。
	9	"	7.1	8.6	1.0	80	"
	10	"	9.1	10.8	1.05	130	"
住	11	磨製石斧	8.1	2.6	1.1	40	刃部・側縁研磨。
	12	磨製石斧再生途中品	14.6	5.3	3.0	372	研磨面を敲打によって再調整。
	13	磨製石斧未成品?	16.2	5.2	4.6	595	剝離調整段階で節理面による破損か。
	14	敲打器	(5.8)	3.4	2.5	(68)	a面にかるい敲打痕。
	15	石錐	6.9	3.8	1.15	50	左側縁も加工。
	16	磨石	8.8	7.4	(3.2)	(290)	b面欠。a面に凹あり。
	17	"	8.9	8.9	5.2	645	風化。
	18	石皿	35.8	25.2	8.2	9900	横型。
	225-1	石匙	4.4	2.65	0.65	7.2	剣片の一端に錐部作出。
	2	打製石錐	3.7	1.8	0.9	3.9	両側縁潰し。刃部著しく磨減。
住	212-1	打製石斧	13.1	4.2	1.7	140	基部破損。
	2	"	11.1	4.7	1.1	(72)	"
	3	"	11.4	3.1	0.8	35	刃部著しく磨減。両側縁潰し。

遺構	図版No	器種	法			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
3 住	212-4	打製石斧	(10.4)	4.5	1.9	緑色片岩	基部わずか欠。
	5	"	(10.6)	5.3	1.9	"	刃部磨減。細身。
	6	"	(7.5)	4.5	1.45	硬砂	刃部欠。
	7	"	(6.2)	3.2	1.15	緑色片岩	"
	8	"	(8.5)	3.6	1.2	"	"
	9	"	(8.7)	4.4	1.5	硬砂	基部欠。
	10	"	(7.8)	4.2	1.95	"	刃部欠。
	11	"	(7.1)	4.8	1.35	"	"
	12	"	(5.3)	3.4	0.9	緑色片岩	"
	13	"	(12.5)	4.3	1.2	"	尖刃。刃部磨減。石槓?
	14	横刃型石器	5.1	8.6	1.15	硬砂	刃部に小剝離痕。
	15	"	4.1	(5.6)	0.9	"	半分欠。
	16	"	7.1	9.1	1.95	"	"
	17	"	6.6	10.2	1.15	"	"
18	"	7.3	9.7	1.7	"	"	
19	"	5.5	7.8	1.3	"	刃部に小剝離痕。	
20	"	7.6	10.2	1.55	"	"	
21	"	6.2	9.0	1.4	"	左側辺は割断。	
213-1	1	"	7.6	10.3	2.3	"	粗雑な背部調整。
	2	"	8.1	12.7	2.4	"	背部調整。刃縁わずか磨減。
	3	"	7.9	9.8	1.4	"	刃縁磨減。
	4	"	4.4	10.1	0.9	"	a面が主要剝離面。
	5	"	4.8	10.9	1.2	緑色片岩	"
	6	"	9.1	15.4	2.2	硬砂	背部b面に調整あり。
	7	磨製石斧	(12.2)	5.1	3.4	輝綠凝灰岩	b面に自然面をもつ。
	8	敲打石器	11.5	6.1	4.6	硬砂	基部欠。敲打後全面研磨。
	9	敲打器	9.1	6.7	4.3	"	ほぼ全面敲打。磨製石斧未成品?
	10	"	4.6	3.9	0.95	"	敲打面8面。
	11	"	4.6	6.7	1.7	硬砂	周縁に敲打痕。
	12	"	5.8	6.6	2.6	"	周縁に剝離痕と敲打痕。
	13	"	4.5	5.0	1.45	"	"
	14	"	10.1	6.6	1.6	輝綠凝灰岩	周縁に敲打痕がわずかあり。

遺構	図版No	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(g)	重さ(g)		
3 住	213-15	礫器	9.7	123.0	4.5	733	輝緑凝灰岩	両刃・側縁打削。	
	16	剥片	6.5	7.2	2.4	113	"	横刃型石器？	
	225-3	打製石鏃	1.9	(1.35)	0.4	(0.8)	黒曜石	基部欠。	
	4	"	(2.3)	(1.5)	0.26	(0.6)	"	先端部・左逆刺欠。	
5 住	214-1	打製石斧	(14.4)	(5.3)	1.3	(115)	輝緑凝灰岩	基部右半分欠。	
	2	"	(12.2)	8.2	2.3	(267)	硬砂	基部欠。	
	3	"	(10.3)	(5.7)	2.6	(175)	"	刃部欠。	
	4	"	(7.0)	3.7	0.9	(40)	緑色片岩	"	
	5	"	(4.5)	(4.55)	1.5	(30)	"	刃部のみ。	
	6	横刃型石器	7.5	10.9	1.8	160	硬砂	刃部調整。	
	7	"	5.6	11.3	1.2	82	"	背部調整。被熱。	
	8	大型粗製石匙	3.7	11.1	0.65	32	輝緑岩	刃縁は鋭い。	
	9	磨製石斧未成品	8.5	2.4	1.25	32	玻璃質安山岩		
	10	磨製石斧	(6.5)	4.85	20	(110)	輝緑凝灰岩	刃部に再調整による？潰れあり。基部欠。	
	11	磨製石斧未成品	23.4	7.3	5.0	1200	"	剝離調整段階。	
	12	磨滅のある剥片	8.5	1.4	0.5	8.5	"	側縁に長軸と直交方向の磨滅あり。	
6 住	13	敲打器	6.0	4.9	2.2	95	硬砂	周縁に剝離痕と敲打痕。	
	14	石鏃	6.5	3.3	1.05	25	"	b面の自然面を削取し薄い。側縁に抉りあり。	
	15	石皿	31.3	26.0	9.8	12100	花崗岩	凹はごくわずかで平坦。	
	225-5	打製石鏃	(2.2)	1.15	0.4	(0.9)	黒曜石		
	215-1	打製石斧	11.9	4.4	1.3	92	緑色片岩	刃部磨滅。	
	2	"	11.4	4.1	1.7	110	輝緑凝灰岩	" a面に敲打痕。磨製石斧片の再利用？	
	3	"	11.2	3.4	1.4	75	硬砂	両端磨滅。	
	4	"	10.4	4.0	1.2	75	"	"	
	5	"	10.5	4.1	1.4	87	緑色片岩	刃部著しく磨滅。	
	6	"	10.2	3.5	0.9	43	"	刃部磨滅。	
7	"	(5.9)	(3.5)	1.2	(32)	"	胴部のみ。		
8	" ?	7.6	2.8	0.6	18	"	一端がわずかに磨滅。		
9	横刃型石器	5.6	10.0	1.3	92	硬砂	背部調整。		
10	"	4.0	6.6	0.85	22	"	背部は節理面で割断。		
11	"	5.5	6.9	1.2	35	"	刃縁磨滅。		
12	"	6.6	12.0	0.95	105	"	" 背部調整。背縁磨滅。		

遺構	図版No	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	重さ(g)		
6 住	215-13	横刃型石器	A ₁	6.9	11.6	1.35	125	硬砂岩	単なる剥片か。 刃部に粗雑な調整。 背部削断。部厚い。刃部。左半分欠か。 刃部調整あり。刃縁磨減。 b面に背部調整。 刃部はギザギザ。抜熱。 a面が主要剥離面。 背部は節理面で削断。粗雑な調整。 背縁は潰れきみ。 右端がわずかな磨減。 縦形剥片で両側縁は鋭い。b面磨減。横刃型石器の類か。 小剥片を加工。一端の縁刃磨減。 小剥片。 剥離調整段階。 敲打段階。 一端にかるい敲打痕。 二箇所凹状の敲打痕。
	14	"	A ₁	7.6	6.3	0.9	69	"	
	15	"	A ₁	5.4	10.4	1.05	62	"	
	16	"	A ₂	5.2	10.5	1.3	80	"	
	17	"	A ₃	7.0	10.5	1.85	175	"	
	18	"	A	6.8	6.6	1.25	62	"	
	19	"	C	7.8	15.1	1.75	190	"	
	20	"	D	5.7	10.4	1.25	74	"	
	21	"	D	4.5	9.6	0.95	47	"	
	22	"	D	4.0	10.8	0.85	47	緑色片岩	
	216-1	"	A	7.8	12.8	2.1	195	硬砂岩	
	2	大型粗製石匙		9.0	3.7	0.95	38	"	
	3	横刃型石器	A ₃	9.5	3.3	0.73	25	緑色片岩	
	4	縦長剥片		12.8	4.1	1.0	77	"	
	5	器種不明		4.35	1.75	0.6	5	硬砂岩	
	6	石鏟		(3.7)	(3.1)	(0.8)	(9)	"	
	7	磨製石斧未成品		(10.7)	8.8	3.4	(473)	輝緑凝灰岩	
	8	"		13.2	5.8	4.6	515	"	
	9	敲打器	C ₂	(4.6)	3.3	1.85	(41)	硬砂岩	
	10	凹石		11.2	12.6	10.5	1800	"	
	225-9	打製石鏟		1.8	1.55	0.3	0.9	黒曜石	
	8 住	217-1	打製石斧		12.3	3.8	1.55	111	
2		"		11.0	3.2	1.25	43	緑色片岩	刃部磨減。
3		"		10.9	4.0	1.3	80	"	刃部欠。
4		"		(10.6)	(4.2)	1.35	(75)	"	刃部磨減。
5		"		10.2	3.9	1.2	80	"	"
6		"		9.2	3.5	1.3	51	"	"
7		"		9.2	4.0	1.1	80	"	両端磨減。
8		"		9.7	4.7	1.39	110	"	刃部未調整。
9		"		9.7	4.1	1.4	65	"	基部欠。
10		"		8.7	3.5	1.0	51	粘板岩	a面・両端に自然面をもつ。磨製石斧未成品?
11		"		7.7	4.3	1.2	48	硬砂岩	粗雑な調整。

遺構	図版No.	器種	種	法			量	石質	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
8 住	217-12	打製石斧		(8.7)	5.9	1.65	(138)	綠色片岩	基部欠。刃部調整なし。
	13	"		(9.6)	6.7	2.8	(201)	" 岩	刃部欠。
	14	"		(10.8)	7.1	1.35	(138)	硬砂岩	"
	15	"		(10.9)	4.6	1.5	(74)	珪質片岩	刃部・基部欠。
	16	"		(5.8)	3.8	1.48	(41)	硬砂岩	基部のみ。
	17	"		(5.7)	4.1	1.7	(55)	" 岩	"
	18	"		(5.5)	3.8	0.7	(20)	綠色片岩	"
	19	"		(4.4)	4.9	1.1	(39)	硬砂岩	刃部のみ。
	20	横刃型石器	A ₁	5.5	9.9	1.2	78	" 岩	
	21	"	A ₁	6.3	8.1	1.25	83	" 岩	
	22	"	A ₄	4.8	(5.4)	1.58	(60)	" 岩	半分欠。背部・刃部調整。
	23	"	A ₄	4.8	(6.9)	1.63	(73)	" 岩	"
	218-1	"	A ₁	7.5	10.4	1.3	140	綠色片岩	
	2	"	A ₁	6.8	11.8	2.0	223	硬砂岩	
	3	"	A ₁	9.1	9.3	1.22	140	" 岩	
	4	"	A ₄	7.2	8.7	1.4	112	綠色片岩	周縁に粗雑な調整。
	5	"	A ₃	6.4	10.0	0.9	74	硬砂岩	背部調整。
	6	"	C	5.4	10.8	0.4	80	" 岩	" 刃縁磨滅。
	7	"	A ₃	8.0	8.0	0.75	73	綠色片岩	"
	8	敲打器	B	5.8	8.0	2.95	98	硬砂岩	周縁に敲打痕と剝離底。
9	"	B	6.9	5.9	2.25	105	輝綠礫灰岩	"	
10	"	B	8.5	6.4	1.45	160	" 岩	"	
11	"	C ₁	13.7	6.7	5.3	720	硬砂岩	一端に敲打痕。	
12	凹石		12.1	10.0	2.6	443	" 岩	a面に凹あり。	
13	器種不明		7.4	5.0	2.9	130	輝綠礫灰岩	粗雑な調整。一端に敲打痕顯著。	
14	石槌		7.2	5.7	1.6	95	硬砂岩		
15	"		6.3	4.6	1.58	70	" 岩		
16	"		5.1	3.9	1.8	50	" 岩		
17	"		4.2	2.2	0.92	15	" 岩		
18	"		4.3	2.1	0.75	12	" 岩		
19	"		3.3	3.3	0.92	20	" 岩		
20	"		2.6	2.3	0.6	9	" 岩		

遺構	図版No.	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
8 住	225-6	スクレイパー	1.75	1.2	0.3	黒曜石	
	7	使用底のある剥片	2.5	1.2	0.25	"	
	8	打製石鏃	3.2	1.55	0.85	"	
9 住	216-11	打製石斧	12.4	4.2	1.9	緑色片岩	両側縁は敲打整形。b面研磨。
	12	横刃型石器	7.8	10.6	1.5	硬砂岩	単なる剥片か。
	13	"	5.4	6.0	1.2	"	
	14	石鏃	6.3	3.9	1.4	"	
11 住	219-1	打製石斧	10.1	3.4	1.15	硬砂岩	刃部磨減。
	2	"	(12.2)	4.1	1.55	緑色片岩	刃部欠。粗雑な調整。
	3	"	11.7	3.6	1.85	硬砂岩	刃部磨減。
	4	"	(9.7)	4.4	1.7	"	基部欠。
	5	"	10.1	3.7	1.1	緑色片岩	
	6	"	(6.3)	5.3	2.15	硬砂岩	基部欠。
	7	横刃型石器	6.4	13.0	1.75	"	刃部調整。
	8	"	7.2	12.3	1.45	"	背部調整。刃部に小剥離痕。
	9	"	5.6	8.5	-	"	
	10	"	7.2	9.9	1.18	"	
	11	"	9.4	10.3	1.95	"	背部・刃部調整。
	12	"	5.5	6.8	0.6	緑色片岩	
	13	磨製石斧	(7.8)	5.5	2.85	輝綠凝灰岩	側縁敲打。
	14	敲打器	7.8	6.6	3.0	"	a面稜部に研磨痕?あり。
	15	"	11.1	4.5	3.35	"	両端・右側縁に剥離痕と敲打痕。
225-10	打製石鏃	(1-5)	1.65	0.25	黒曜石		
12 住	220-1	打製石斧	(13.7)	6.1	2.15	緑色片岩	基部欠。
	2	"	14.5	4.3	2.18	"	
	3	"	12.4	5.5	2.75	硬砂岩	刃部磨減。部厚い。
	4	"	12.8	3.6	0.75	緑色片岩	勝手。両側縁は鋭い。
	5	"	12.0	3.5	1.3	"	両側縁欠。
	6	"	10.4	4.9	2.7	硬砂岩	刃部欠。
	7	"	(10.3)	4.8	2.0	緑色片岩	"
	8	"	(5.7)	5.7	1.65	硬砂岩	基部欠。刃部磨減。
	9	"	9.4	4.8	1.38	珪質片岩	刃部磨減。

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
住	12	220-10					
		打製石斧	10.0	4.2	1.6	硬砂	両端磨減。
		"	10.1	3.6	0.85	綠色片岩	刃部・b面磨減。
		"	9.6	3.8	1.68	"	刃部わずか磨減。
		"	8.2	3.4	1.3	"	両端磨減。
		"	(8.7)	4.3	1.15	硬砂	基部欠。刃部磨減。
		"	(7.8)	5.0	1.23	綠色片岩	刃部欠。
		"	(6.9)	5.2	1.43	硬砂	基部欠。刃部磨減。
		横刃型石器	6.4	8.2	1.4	"	
		A ₁			83		
		"	6.6	10.0	1.9	"	
		A ₁			128		
		"	7.4	8.5	1.5	"	
		A ₁			110		
		"	5.9	10.3	1.4	綠色片岩	粗雑な調整。
		A ₁			72		背部に自然面をもつ。
		"	4.0	8.9	1.65	硬砂	刃部調整。刃部「く」の字形。
		A ₂			135		刃部磨減。背部・左側縁は割断。
		横刃型石器	8.3	9.4	1.6	硬砂	刃部に刃こぼれあり。
		A ₃			120		
	221-1	2	"	6.6	8.9	1.65	硬砂
	3	"	4.9	12.2	1.2	綠色片岩	欠損。敲打整形段階。
	4	"	4.5	6.0	1.4	硬砂	"
	5	"	5.3	10.8	1.55	珪質片岩	周縁を調整。
	6	大型粗製石匙	3.7	11.7	0.75	綠色片岩	磨形。
	7	磨製石斧未成品	(13.2)	9.3	3.6	輝綠凝灰岩	欠損。敲打整形段階。
	8	"	(13.8)	6.2	2.53	"	"
	9	"	17.6	7.5	2.6	"	剝離調整段階。
	磨製石斧	(8.7)	(3.3)	(1.7)	(70)	"	基部破片。敲打整形。自然面をわずかに残す。
	"	(8.5)	(5.3)	(1.8)	(110)	"	刃部破片。
10	敲打器	A	9.3	9.6	4.38	"	一辺に剝離痕と敲打痕。
11	"	A	9.2	11.0	3.8	"	周縁に敲打痕と剝離痕。a面に敲打痕。
12	"	A	7.2	8.2	2.29	"	"
13	"	B	5.4	6.2	1.65	硬砂	"
14	"	B	5.0	5.4	2.15	輝綠凝灰岩	"
15	"	B	4.7	6.1	1.3	"	"
16	"	B	4.3	5.0	1.73	"	"
222-1	1	A	(6.5)	(6.7)	(4.05)	"	"
	2	A	5.7	5.7	(3.0)	"	b面は節理による破損か。周縁に敲打痕。

遺構	図版No.	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
12 住	222-3	敲打器	B	7.3	7.5	2.55	200	岩	周縁に敲打痕と剝離痕。 一边に剝離痕。 周縁に部分的に敲打痕。 一边に剝離痕。 " " 両端とa面に敲打痕。 周縁に部分的に剝離痕と敲打痕。 剝離痕と敲打痕。 長短軸の4箇所を打撃。 右側縁は節理面。あるいは磨製石斧未成品か。 ab面に砥面。
	4	"	B	4.6	3.8	0.9	29	砂	
	5	"	B	6.4	8.0	2.8	191	輝綠凝灰岩	
	6	"	B	6.9	6.6	2.1	171	"	
	7	"	B	5.2	6.8	1.8	100	"	
	8	"	B	11.1	5.9	2.9	280	"	
	9	"	B	6.4	7.9	2.3	155	硬砂	
	-	"	A	(3.9)	(6.3)	2.3	(100)	輝綠凝灰岩	
	10	加工された礫		8.1	6.8	3.6	245	"	
	11	石錐?		6.9	6.0	1.9	118	硬砂	
	12	石錐		5.8	4.2	1.6	50	"	
	13	打製石斧?		13.0	5.3	2.9	273	輝綠凝灰岩	
	14	加工された剥片		10.6	7.1	3.0	235	"	
	15	礫石		14.4	9.3	4.5	720	片麻岩	
	225-11	打製石錐		2.3	1.7	0.25	0.6	黒曜石	
	12	使用痕のある剥片		5.5	1.7	0.95	5.4	"	
13 住	223-1	打製石斧		13.0	4.8	2.05	177	綠色片岩	両側縁潰し。a面左面が磨滅。 刃部磨滅。 " " " " " " 両端磨滅。 刃部磨滅。 刃部欠。 " " " " " " " " 両端磨滅。 刃部磨滅。 刃部欠。 " " " " 基部欠。
	2	"		11.5	4.3	1.55	115	"	
	3	"		11.2	4.3	1.5	107	"	
	4	"		11.2	3.9	1.9	110	"	
	5	"		11.0	4.0	1.4	80	硬砂	
	6	"		10.8	3.3	0.65	46	綠色片岩	
	7	"		10.7	4.2	1.1	80	"	
	8	"		10.5	4.0	1.1	63	"	
	9	"		10.0	4.4	1.6	85	"	
	10	"		10.3	4.4	1.4	80	"	
	11	"		8.3	3.4	1.15	38	珪質片岩	
	12	"		9.8	4.5	0.85	55	綠色片岩	
	13	"		(9.4)	4.2	1.6	(80)	硬砂	
	14	"		(10.0)	4.5	1.85	(120)	綠色片岩	
	15	"		(10.4)	4.5	1.8	(105)	"	
	16	"		(8.5)	4.1	1.85	(73)	硬砂	

遺構	図版No	器種	法			量		石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
住	13	223-17	打製石斧					硬砂岩	基部のみ。	
		18	"	(6.4)	4.9	2.1	(83)	"	刃部のみ。	
		19	"	(6.8)	5.6	1.9	(100)	"	胴部のみ。	
		-	"	(8.6)	7.0	2.3	(228)	"	基部のみ。	
		-	"	(5.5)	3.9	9.5	(16)	緑色片岩	胴部のみ。	
		-	"	(5.2)	(4.2)	(1.0)	(30)	"	刃部のみ。	
		-	"	(7.35)	(3.6)	0.8	(27)	"	刃部欠。	
		-	"	(5.4)	(3.9)	1.2	(27)	硬砂岩	刃部のみ。	
		20	横刃型石器	5.2	6.8	1.1	45	"	背部調整。	
		21	"	A ₁	6.1	7.0	1.2	60	"	
		22	"	A ₁	5.3	6.1	0.95	30	"	
		224-1	"	A ₁	5.9	8.2	1.2	60	"	
		2	"	A ₃	7.5	8.6	1.3	85	"	背部調整。
		3	"	D	4.9	6.3	1.7	53	"	刃部調整。
		4	"	A ₁	8.6	11.3	2.3	230	"	
		5	"	A ₁	9.3	10.0	2.0	215	"	
	6	"	A ₃	4.7	10.4	1.1	50	緑色片岩		
	7	大型粗製石匙	2.5	11.4	0.55	18	"		刃部に刃こぼれ。つまみ部の縁部が磨滅。	
	8	磨製石斧	(3.7)	2.4	0.95	(15)	輝緑凝灰岩	刃部欠。		
	-	"	(5.4)	-	-	(50)	"	基部のみ。		
	9	磨製石斧未成品	15.1	6.6	3.4	450	"	欠損。		
	10	敲打器	D	11.2	7.0	3.3	360	"	右側縁に敲打痕。	
	11	"	C ₂	8.9	4.3	2.45	155	硬砂岩	a面に敲打痕。	
	12	"	B	6.0	4.1	1.15	43	珪質片岩	周縁に剥離痕。	
	13	石鏟		6.4	5.3	2.0	108	硬砂岩	両側縁・a面に敲打痕。	
	14	磨石		11.0	7.8	5.7	630	花崗岩	a面の磨面中央に凹あり。	
	15	加工された剥片		18.1	10.9	3.1	715	安山岩	両側縁を加工。	
	16	石皿		29.8	27.3	11.5	11800	花崗岩	凹は浅い。	
	225-13	石鏟		2.3	1.0	0.55	1.5	黒曜石	基部先端欠。	
	14	使用痕のある剥片		3.2	2.5	0.7	5.5	チャート		
	15	"		2.8	29.0	0.4	2.5	"		
	16	"		1.8	3.2	0.55	3.4	"		
遺構外	226-1	打製石鏟		(1.9)	2.1	0.2	(0.9)	黒曜石	K12墳丘	

遺構	図版No.	器種	法			量		石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
							長さ(cm)		
遺構外	226-2	打製石鏃	(1.8)	1.8	0.2	(0.9)	黒曜石	K12	
	3	"	(1.4)	1.5	0.3	(0.6)	チャト	CM52	
	4	"	1.4	1.2	0.2	0.3	黒曜石	BY52	
	5	"	1.8	1.3	0.3	0.5	"	K12墳丘	
	6	"	2.0	1.3	0.4	0.8	"	CX44	
	7	"	1.4	1.7	0.3	0.5	チャト	K11	
	8	"	1.1	1.2	0.3	0.4	黒曜石	BS50	
	9	"	1.8	1.4	0.2	0.4	"	BS50	
	10	"	1.5	1.7	0.5	1.2	"	ミ1	
	11	"	2.0	(1.2)	0.3	(0.7)	"	K12	
	12	"	-	-	-	-	"	"	
	13	打製石鏃	(2.7)	1.6	0.8	(1.9)	"	ミ1	
	14	"	3.0	1.0	0.8	1.9	"	K12	
	15	使用底のある剥片	3.9	1.9	0.7	3.7	"	K12墳丘	
	16	"	5.1	2.7	0.7	7.0	"	K12	
	227-1	打製石斧	18.0	8.5	3.75	720	硬砂	岩	a面は大きく湾曲。部厚い。CY50-51,AA50-51
2	"	17.6	7.0	2.8	425	"	"	刃部磨減。BV50	
3	"	18.3	8.4	2.85	510	"	DA49		
4	"	17.2	8.6	3.0	543	"	"	刃部磨減。CX47	
5	"	14.9	7.1	2.2	298	"	"	BA53	
6	"	17.0	6.8	3.1	453	"	"	刃部わずかに磨減。CI47	
7	"	14.1	8.7	2.5	350	"	"	BF47	
8	"	8.6	6.7	2.95	318	"	"	BV47	
9	"	13.6	6.6	2.58	333	"	"	刃部磨減。	
228-1	"	19.2	5.2	1.3	230	緑色片	岩	細長い。BS50	
2	"	15.3	4.0	2.2	190	硬砂	岩	西側縁・b面研磨。	
3	"	14.0	4.7	1.6	170	緑色片	岩	刃部磨減。	
4	"	13.2	5.1	1.83	120	硬砂	岩	" CT45	
5	"	14.3	3.1	1.6	58	"	"	CM51	
6	"	11.8	4.7	1.8	123	"	"	CB52	
7	"	12.1	3.7	1.15	58	緑色片	岩	BS48	
8	"	12.3	4.4	1.13	78	"	"	CM52	

遺構	図版No.	器種	法			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
遺構外	228-9	打製石斧	12.8	4.4	1.0	緑色片岩	BT53
	10	"	10.7	4.1	2.1	硬砂	刃部磨減。ミ3
	11	"	10.5	4.3	1.23	緑色片岩	CM52
	12	"	9.8	4.1	1.25	硬砂	右側縁に挟り。b面に自然面をもつ。DB49
	13	"	9.6	5.6	1.4	"	K12墳丘
	14	"	10.6	5.4	1.4	"	BA52-53, BB52-53
	15	"	9.1	4.3	0.8	緑色片岩	CP31
	16	"	8.8	3.8	0.7	"	両端磨減。尖刃。BA45
	17	"	8.2	3.8	1.6	硬砂	刃部磨減。CB52
	18	"	7.0	3.1	1.2	緑色片岩	"
	19	"	6.7	3.9	1.45	"	BQ51
	20	"	5.8	1.5	0.6	"	徳小。CY42
	229-1	横刃型石器	5.4	9.3	1.8	硬砂	刃縁は潰れぎみ。BG51
	2	"	4.9	8.5	0.9	"	刃部に刃こぼれ。DA46
	3	"	6.4	10.3	1.95	"	" K12墳丘
	4	"	6.8	11.9	1.2	"	" K12墳丘
	5	"	7.2	11.7	1.15	"	" b面に背部調整。CM52
	6	"	8.0	9.2	1.33	"	" 刃縁磨減。K12墳丘
	7	"	6.4	10.4	1.5	"	"
	8	"	8.9	11.2	1.3	緑色片岩	両側縁磨減。CS41
9	"	8.9	11.7	1.9	珪質片岩	背部調整。DA43	
10	"	8.5	9.7	2.1	硬砂	刃部に刃こぼれ。K12墳丘	
11	"	6.7	9.4	1.4	"	" K12墳丘	
12	"	5.0	8.0	1.1	緑色片岩	背部調整はa面のみ。K12周溝	
13	"	6.2	11.9	1.05	硬砂	刃部に刃こぼれ。背部は節理面で割断。ミ3	
14	"	8.2	12.9	3.2	輝綠凝灰岩	部厚い。刃部は潰れぎみ。背部割断。集18	
15	"	8.1	9.8	1.5	緑色片岩	背部調整。CU42	
16	"	6.9	11.2	1.4	"	K12周溝	
17	"	9.5	11.8	3.5	515	階段状剝離で刃部を形成。背縁磨減。K12	
18	大型粗製石匙	10.7	7.5	1.8	硬砂	スコップ形。つまみ部の紐掛りはよくない。K12周溝	
230-1	横刃型石器	6.0	8.7	1.55	"	b面に背部調整。CE46	
2	"	4.8	9.7	1.48	緑色片岩	背部調整はa面のみ。K12墳丘	

遺構	図版No	器種	法量			石質	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
遺構外	230-3	挟入打製石胞丁	3.2	6.3	0.6	硬砂岩	BB53	
	4	"	3.9	7.8	1.0	"	CT42	
	5	磨製石斧	3.0	0.9	0.3	緑色片岩	超小形。非美用品か。BY48	
	6	"	4.6	1.1	0.6	輝緑凝灰岩	刃部に刃こぼれ。基端も刃状をなす。被熱。CY47	
	7	"	(4.7)	32.0	1.0	"	基部欠。刃部磨減。CE48	
	8	"	(4.5)	3.7	1.4	"	" CE51	
	9	"	(7.2)	3.8	1.2	"	" K12墳丘	
	10	"	7.1	3.5	1.45	"	" 刃部と右側縁に剝離痕。DB46	
	11	磨製石斧未成品	7.0	2.1	1.0	"	刃部未作出。DA47	
	12	磨製石斧	9.8	4.4	1.7	"	CK47	
	13	局部磨製石斧	10.0	4.2	1.7	"	刃部は磨減後に再研磨。CF52	
	14	"	6.4	3.2	1.5	"	刃部のみ研磨。DA50	
	15	磨製石斧	(6.1)	5.1	3.45	泥岩	基部欠。刃部斜方向に磨減。AB41	
	16	"	(7.1)	5.7	2.0	緑岩	" DA48	
	17	"	(7.1)	5.8	2.1	輝緑凝灰岩	" ab面に自然面を残す。CM51	
	18	"	(7.0)	6.2	1.95	硬砂岩	" " K12墳丘	
	19	"	(10.2)	5.4	3.2	輝緑凝灰岩	" " CA53	
	20	"	(11.6)	5.8	3.5	"	刃部欠。D・LK50	
	21	"	(12.7)	5.2	3.8	"	" 集	
	22	"	(13.1)	5.8	3.65	超塩基性岩	" 基部はソケット装着のため敲打による再調整。ミ3	
	23	打製石斧	9.6	3.6	1.5	輝緑凝灰岩	磨製石斧片を転用。K12墳丘	
	231-1	1	磨製石斧	(13.0)	6.7	3.9	"	刃部欠。D・LK50
		2	磨製石斧未成品	(12.8)	6.2	4.5	超塩基性岩	敲打段階。破損。D区
3		"	(13.9)	7.3	5.4	輝緑凝灰岩	" " ミ3	
4		"	16.0	6.3	3.3	"	剝離整形段階。K12墳丘	
5		"	(14.2)	8.3	5.1	超塩基性岩	敲打段階。破損。7住	
6		"	(9.3)	7.0	3.4	輝緑凝灰岩	" " K12墳丘	
7		"	13.5	8.6	4.1	"	割断具か。	
8		"	22.3	13.0	5.6	"	大割の剝離調整。K12墳丘	
232-1	1	敲打器	A	10.1	7.3	"	敲打痕は面を形成。およそ7面。AX47	
	2	"	A	6.4	5.95	"	およそ5面。DE48	
	3	"	A	7.1	4.0	"	およそ10面。AY44	

遺構	図版No	器種	法			量	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
遺構外	232-4	敲打器	A	8.0	7.3	3.9	400	敲打痕は面を形成。およそ15面。CB53
	5	"	A	7.9	6.8	5.3	505	" およそ6面。CX48
	6	"	A	8.9	8.2	4.1	460	" およそ3面。CW45
	7	"	B	7.0	7.5	1.9	163	周縁に剥離痕と敲打痕。K12周溝
	8	"	B	6.0	6.8	2.0	165	周縁に敲打痕。BX51
	9	"	B	5.0	4.6	1.7	73	" BY48
	10	"	B	4.7	4.0	2.0	60	一边に剥離痕と敲打痕。BY48
	11	"	B	5.3	6.6	2.3	120	" ≒ 3
	12	"	B	5.7	5.6	2.4	112	" 7住
	13	"	B	5.2	6.8	1.63	98	周縁に剥離痕と敲打痕。CL51
	14	"	B	3.3	5.8	1.1	38	" BG47
	15	"	C ₁	(5.4)	2.3	1.35	(35)	ab面磨減。a面と一端に敲打痕。AX53
	16	"	C ₁	13.7	6.8	5.95	768	下端に敲打面を形成。上端に剥離痕。CM52
	233-1	石錘		7.8	5.3	1.76	123	BW48
	2	"		8.5	4.5	1.65	108	CF52
	3	"		8.3	4.5	1.3	88	A区集
	4	"		7.8	5.1	1.5	78	CB51
	5	"		6.7	4.7	1.55	74	右側縁も加工。
	6	"		6.1	4.6	1.9	76	CW43
7	"		6.2	4.6	1.5	66	≒ 1	
8	"		6.4	5.0	1.4	63	右側縁も加工。	
9	"		5.8	4.8	1.5	60	粘板	
10	"		6.6	3.7	1.3	54	硬砂	
11	"		5.7	3.9	1.6	54	≒ 1	
12	"		6.1	4.4	1.17	50	集	
13	"		5.3	4.0	1.5	47	緑色片岩	
14	"		5.2	3.8	1.47	43	硬砂	
15	"		5.4	3.8	1.4	42	" ≒ 3	
16	"		5.8	3.5	1.25	40	" BS47	
17	"		5.5	3.0	1.6	40	" CM50	
18	"		6.0	3.4	1.23	37	両側縁に抉りあり。	
19	"		4.5	4.5	1.45	37	緑色片岩	

遺構	図版No	器種	法			石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
遺構外	233-20	石鉢	4.9	3.1	1.35	硬砂岩	ミ2
	21	"	4.4	3.4	1.3	"	CG47
	22	"	4.6	3.4	1.15	"	K12周溝
	23	"	3.7	2.5	0.8	緑色片岩	両側縁も加工。AY52
	24	"	3.3	2.4	0.8	硬砂岩	CE46
	25	"	3.0	2.5	0.86	"	CO48
	26	"	2.9	2.4	0.73	"	K12周溝
27	"	2.3	2.6	0.6	"	≡ 3	

第38表 石製紡錘車観察表

図No	出土地点	法			石質	備考
		径(㎝)	厚さ(㎝)	軸孔内径(㎝)		
235-6	TAN・KUR 8住	5.0	0.9	0.47	砂岩	
7	" 5住	5.4	0.7	0.8	"	30 (18)
8	GOA 9住	5.7	0.96	0.75	"	36
9	" AS51	5.6	1.46	0.93	"	55
10	" 溝2	5.9	0.9	0.9	"	(25)
11	" AD52	(5.7)	1.0	-	"	(23)
12	GOB	5.3	1.15	0.85	"	半欠。推定径6.0cm、軸孔内径0.6cm。軸孔近くに穿孔文様あり。
13	"	5.9	1.0	0.7	"	半欠。
14	" AK48	5.8	1.1	0.75	"	半欠。被熱。

第 39 表 古墳時代前期玉類観察表

遺構	図版No.	器種	法量		備考
			径(cm)	厚さ(cm)	
TAN・KUR 23 住	236-1	管	4.0	19.2	中央部側面わずか欠。両面穿孔。
	2	"	3.8	19.6	両面穿孔。
	3	ガラス玉	5.0	4.2	コハルトブルー
	4	白玉	4.4	2.9	
	5	"	4.2	1.4	側面に裂痕あり。
	6	"	4.0	2.0	
	7	"	4.1	2.5	上面縁部に裂痕あり。
	8	"	4.3	2.3	"
	9	"	2.7	1.8	
	10	"	4.0	3.3	側面に裂痕あり。
	11	"	3.6	2.3	
	12	"	4.9	1.8	
	13	"	3.6	1.7	半欠。上面縁部に裂痕あり。
	14	"	3.6	1.7	半欠。
	15	"	3.05	2.0	
	16	"	3.5	2.0	上面縁部に裂痕あり。
	17	"	4.05	1.7	側面に裂痕あり。
	18	"	4.0	1.6	"
	19	"	3.6	1.4	
	20	"	4.8	2.9	
	21	"	4.8	2.2	
	22	"	3.8	1.8	
	23	"	4.2	2.2	
	24	"	4.4	2.1	
	25	"	4.0	3.3	
	26	"	4.6	2.4	
	27	"	4.0	2.7	
	28	"	4.0	2.4	上面縁部に裂痕あり。
	29	"	4.1	2.6	

遺構	図版No.	器種	法量		備考
			径(cm)	厚さ(cm)	
TAN・KUR 23 住	236-30	白玉	4.0	2.4	軟質。
	31	"	3.8	2.4	
	32	"	4.0	1.95	上面縁部に裂痕あり。
	33	"	3.9	2.4	"
	34	"	3.7	2.25	
	35	"	4.4	2.1	
	36	"	3.9	2.4	半透明。
	37	"	4.1	2.0	
	38	"	3.9	2.4	
	39	"	3.8	2.8	
	40	"	4.0	2.4	半透明。
	41	"	3.9	3.0	
	42	"	4.4	2.4	
	43	"	4.4	2.6	
	44	"	4.0	2.0	
	45	"	3.6	2.2	
	46	"	3.9	1.2	下面縁部に裂痕あり。
	47	"	4.0	2.4	
	48	"	3.35	2.0	
	49	"	4.1	2.6	
	50	"	4.0	2.4	
	51	"	4.0	2.2	
	52	"	3.2	2.2	
	53	"	4.2	3.4	
	54	"	3.4	2.2	
	55	"	3.6	3.0	
	56	"	3.7	1.8	
	57	"	4.2	2.7	
	58	"	4.3	3.0	

遺構	図版No	器種	法量		備考
			径(cm)	厚さ(cm)	
TAN・KUR 23住	236-59	白玉	4.3	2.9	
	60	"	3.9	2.4	
	61	"	3.95	2.15	
	62	"	4.1	2.05	
	63	A ₂	4.05	2.0	
	64	A ₂	4.4	2.2	
	65	A ₁	4.0	2.8	
	66	B ₁	4.4	2.7	
	67	"	6.6	3.2	軟質。
	68	"	5.0	4.0	
	69	"	5.4	3.2	軟質。
	70	"	5.2	2.5	軟質。上面縁部に裂痕あり。
	71	"	4.8	2.8	
	72	"	4.2	3.2	上面縁部・側面に裂痕あり。
	73	"	4.3	1.9	
	74	"	4.1	2.0	
	75	"	3.8	2.4	半透明。
	76	"	3.6	2.8	
	77	"	3.8	2.7	半透明。側面に打裂面あり。
	78	"	3.9	2.2	"
79	"	3.9	2.8	"	
80	"	4.4	2.0		
81	"	4.4	2.4		
82	"	4.1	2.8	側面に打裂面あり。	
83	"	4.3	3.9		
84	"	4.1	2.6	側面に穿孔底あり。	
85	"	4.2	2.6		
86	"	4.6	2.8		
87	"	4.2	2.8		
88	"	4.0	1.8	半透明。	
89	"	4.2	3.2		
90	"	3.4	2.5		

遺構	図版No	器種	法量		備考
			径(cm)	厚さ(cm)	
TAN・KUR 23住	236-91	白玉	3.5	2.4	
	92	"	3.2	2.2	
	93	"	2.3	2.2	
	94	"	3.2	2.4	
	95	"	3.8	2.1	半透明。側面に打裂面あり。
	96	"	3.8	2.4	" 側面に裂痕あり。
	97	"	4.1	2.1	"
	98	"	3.8	2.0	
	99	"	4.2	2.6	
	100	"	3.6	2.2	半透明。上面縁部に裂痕あり。
	101	"	4.3	2.15	
	102	"	3.6	2.8	側面欠。
	103	"	3.7	2.1	半透明。
	104	"	3.8	2.0	"
	105	"	3.6	1.9	"
	106	"	4.1	2.2	
	107	"	3.85	2.3	半透明。
	108	"	3.6	2.0	
	109	"	3.8	2.1	半透明。
	110	"	3.6	2.2	" 側面に穿孔底か。
111	"	4.3	2.3	上面縁部に裂痕あり。	
112	"	4.0	2.0		
113	"	3.7	2.0	半透明。	
114	"	4.2	2.4		
115	"	3.8	1.4		
116	"	4.2	1.8		
117	"	4.05	1.45		
118	"	3.85	2.0	半透明。	
119	"	3.85	2.3	"	
120	"	3.8	2.2	" 上面縁部に裂痕あり。	
121	"	3.4	1.9		
122	"	4.2	2.2		

遺構	図版No	器種	法量		備考
			径(cm)	厚さ(cm)	
TAN・KUR 23住	236-123	白玉 B ₂ '	3.25	2.4	
	124	" B ₁	3.8	1.4	半透明。
	125	" B ₁	4.1	1.9	
	126	" B ₁	4.3	1.9	
	127	" B ₂ '	3.6	2.4	半透明。
	128	" B ₂ '	3.9	1.8	
	129	" B ₁	3.7	1.8	半透明。
	130	" B ₁	4.0	1.45	
	131	" B ₂	4.2	1.45	
	132	" B ₁	4.1	1.45	上面縁部に裂痕あり。
	133	" B ₁	4.1	1.7	
	134	" B ₁	3.95	1.8	半透明。
	135	" B ₂	3.9	1.7	
	136	" B ₁	4.0	1.9	半透明。
	137	" B ₂	4.2	1.9	
	138	" B ₁	4.45	1.8	
	139	" B ₁	4.4	2.0	半透明。上面縁部に裂痕あり。
	140	" B ₁	3.6	1.8	"
141	" B ₁	3.6	1.6	"	
142	" B ₂	4.0	1.4		
143	" B ₁	3.6	0.8		
144	" B ₂	4.0	1.8		
145	" B ₁	3.8	1.0		
146	" B ₂	3.4	2.2		
147	" B ₁	3.2	0.8		
148	土玉 A	6.3	5.4	黒色。表面にツヤあり。	
TAN・KUR 75住	237-1	管玉	0.5	19.8	
	2	ガラス玉	3.2	2.0	スカイブルー
	3	白玉 A ₂	5.8	4.6	
	4	" A ₂	4.4	3.0	
	5	" A ₁	4.6	2.8	
	6	" A ₁	4.4	2.5	

遺構	図版No	器種	法量		備考	
			径(cm)	厚さ(cm)		
TAN・KUR 75住	237-7	白玉 A ₁	4.4	2.5		
	8	" A ₁	4.4	2.5		
	9	" A ₁	4.4	2.5		
	10	" A ₁	4.0	2.2		
	11	" A ₁	4.4	2.4		
	12	" B ₂	4.6	3.0		
	13	" B ₁	5.6	3.4		
	14	" B ₁	5.3	3.8	軟質。	
	15	" B ₂	5.0	4.8	"	
	16	" B ₂	4.8	4.0		
	17	" B ₁ '	5.5	3.2		
	18	" B ₂	5.0	3.4	軟質。	
	19	" B ₁	4.6	2.8	"	
	20	" A ₁	4.6	2.4		
	21	" A ₂	4.0	2.4		
	22	" B ₁	4.8	2.0		
	23	" B ₁	5.2	2.2		
	24	" A ₁	4.2	1.8	上面に裂痕あり。	
	25	" A ₂ '	4.0	1.5	半透明。"	
	26	土玉 A	8.2	7.0	黒色。表面にツヤあり。	
	27	" A	9.0	7.6	灰色。薄橙。表面荒れ。	
	28	" A	8.0	7.0	黒色	
	29	" A	6.6	6.0	"	
	30	" A	5.0	4.4	"	
	31	" B	7.6	4.6	薄赤茶。扁平で粗雑。	
	32	" B	8.0	3.2	"	
	TAN・KUR 90住	237-33	白玉 A ₂	5.0	3.2	
		34	" B ₁	6.2	3.2	軟質。
		35	" B ₂ '	4.5	1.9	
		36	土玉 B	6.0	3.7	黒色。表面にツヤあり。
		37	" B	5.2	3.8	"
		237-38	白玉 A ₁	4.0	2.8	

遺構	図版No	玉類種別	法量		備考
			径(cm)	厚さ(cm)	
TAN・KUR 16住	237-39	白玉	3.8	3.4	
"	40	"	3.2	2.3	
"	41	"	4.0	2.3	
TAN・KUR 312	42	"	3.8	1.6	
TAN・KUR F8	43	"	4.4	2.1	
"	44	"	5.3	3.7	
"	45	"	5.8	2.7	軟質。
"	46	"	4.8	1.4	
"	47	"	5.2	1.8	
"	48	"	5.3	1.5	扁平なリング状を呈する。

遺構	図版No	玉類種別	法量		備考
			径(cm)	厚さ(cm)	
GOB	237-49	モノウ製未成品	-	-	長さ1.6cm、幅2.0cm、幅0.84cmの三角柱状を呈する。両面穿孔未貫通。上縁部破損。側面に研磨面13。P、内出土。
"	50	管玉未成品	7.9	19.6	
"	51	"	8.2	17.8	両面穿孔未貫通。側面に研磨面9。P、内出土。
"	52	"	9.0	20.0	両面穿孔未貫通。側面に研磨面10。P、内出土。
"	53	"	8.0	16.7	両面穿孔未貫通。上縁部破損。側面に研磨面10。
GOB	237-54	管玉未成品	9.2	18.6	穿孔なし。側面に研磨面13。
GOB	237-55	ガラス玉	7.2	5.7	コバルトブルー。

第40表 金属器観察表

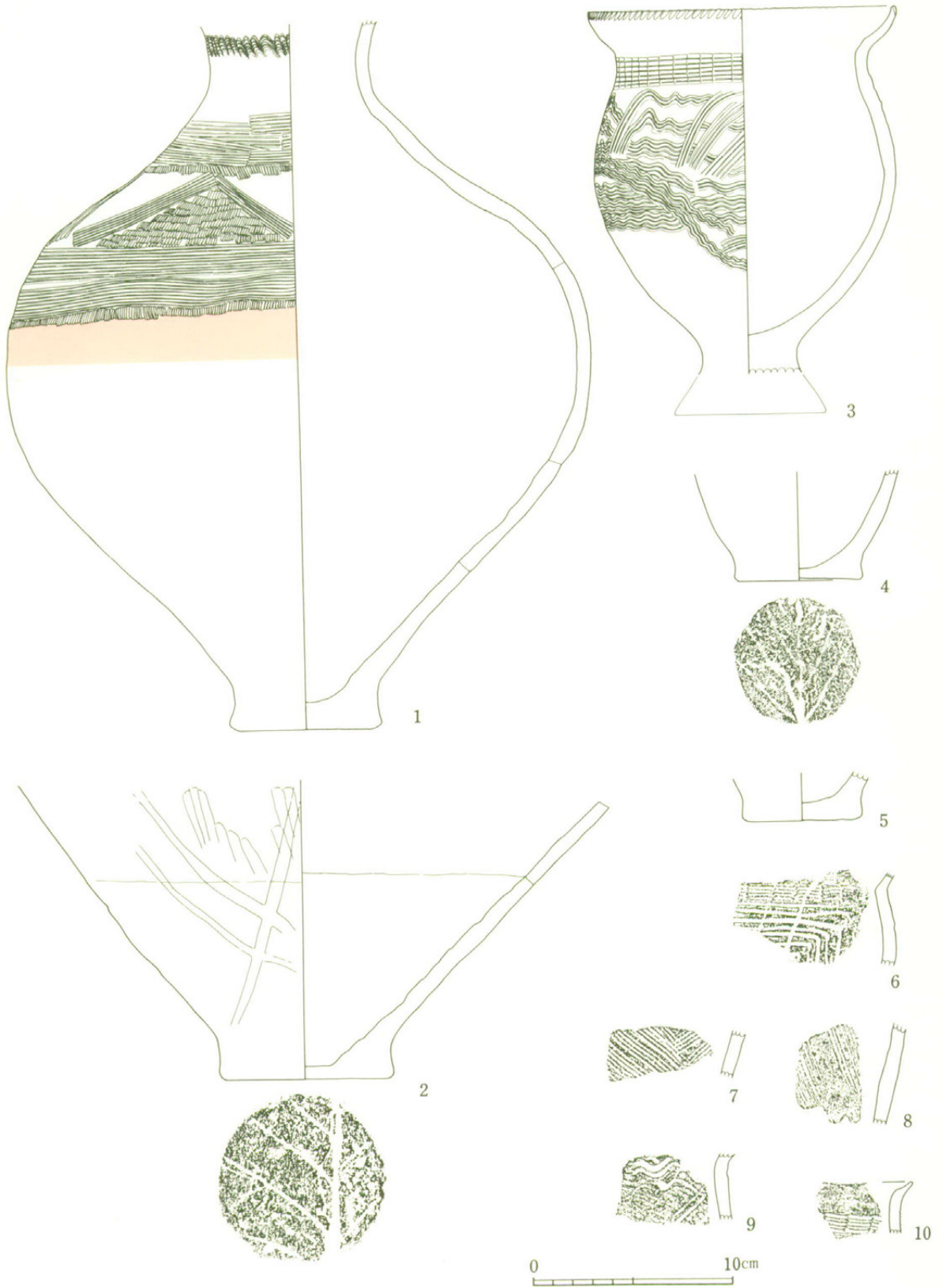
遺構	図版No	器種	法量		備考	時期
			長さ	幅厚さ		
TAN・KUR 23住	236-1	刀子	(12.3)	2.1	0.4	恒川X期
"	2	かざり金	2.5	2.5	0.1	恒川X期
"	3	銅釘	1.0	0.1	0.1	恒川X期
TAN・KUR 312	4	鉄鏃	(2.3)	(0.4)	(0.3)	
TAN・KUR F8	5	鉄鏃	(9.5)	(1.0)	(0.4)	
"	6	刀子?	(3.0)	(0.9)	(0.4)	
TAN・KUR 75住	7	刀子?	(16.1)	1.8	0.3	恒川X期
GOB	8	刀子?	(3.5)	(1.2)	(0.3)	恒川X期
"	9	刀子?	(4.0)	(1.5)	(0.2)	恒川X期
GOB 315	10	刀子?	(4.8)	(2.5)	(0.3)	恒川X期
"	11	つり針?	2.0	0.25	0.25	恒川X期
"	12	刀子	8.8	1.3	0.4	恒川X期
"	13	銅鏃	(5.4)	1.6	0.6	恒川X期
"	14	鉄鏃	(4.1)	1.5	0.5	恒川X期
"	15	鉄鏃	(4.0)	0.8	0.5	恒川X期
ARY 方間1	16	刀子	(15.8)	2.0	0.4	恒川X期
"	17	刀子?	(5.6)	(1.6)	(0.4)	恒川X期

()は現存値

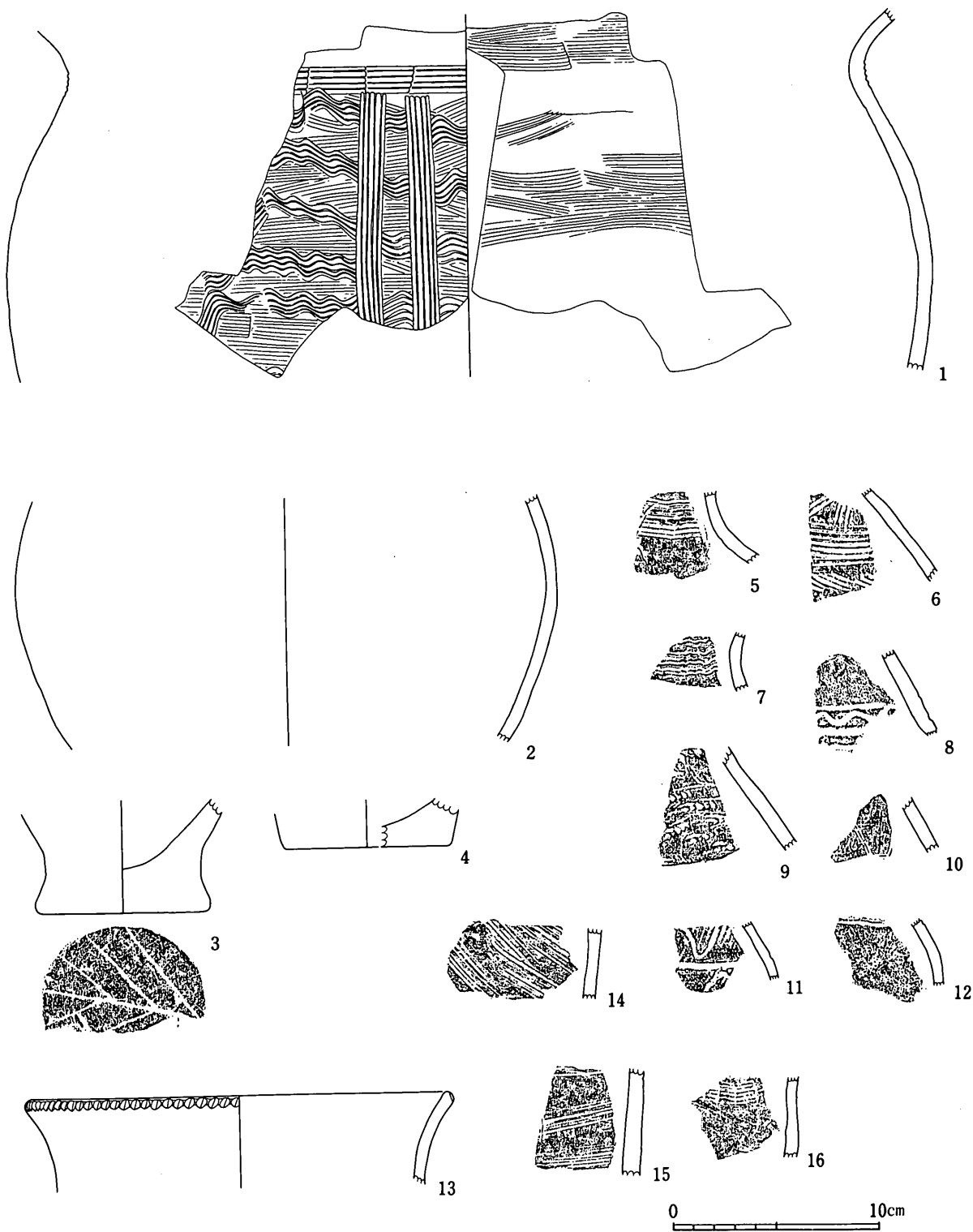
版 圖



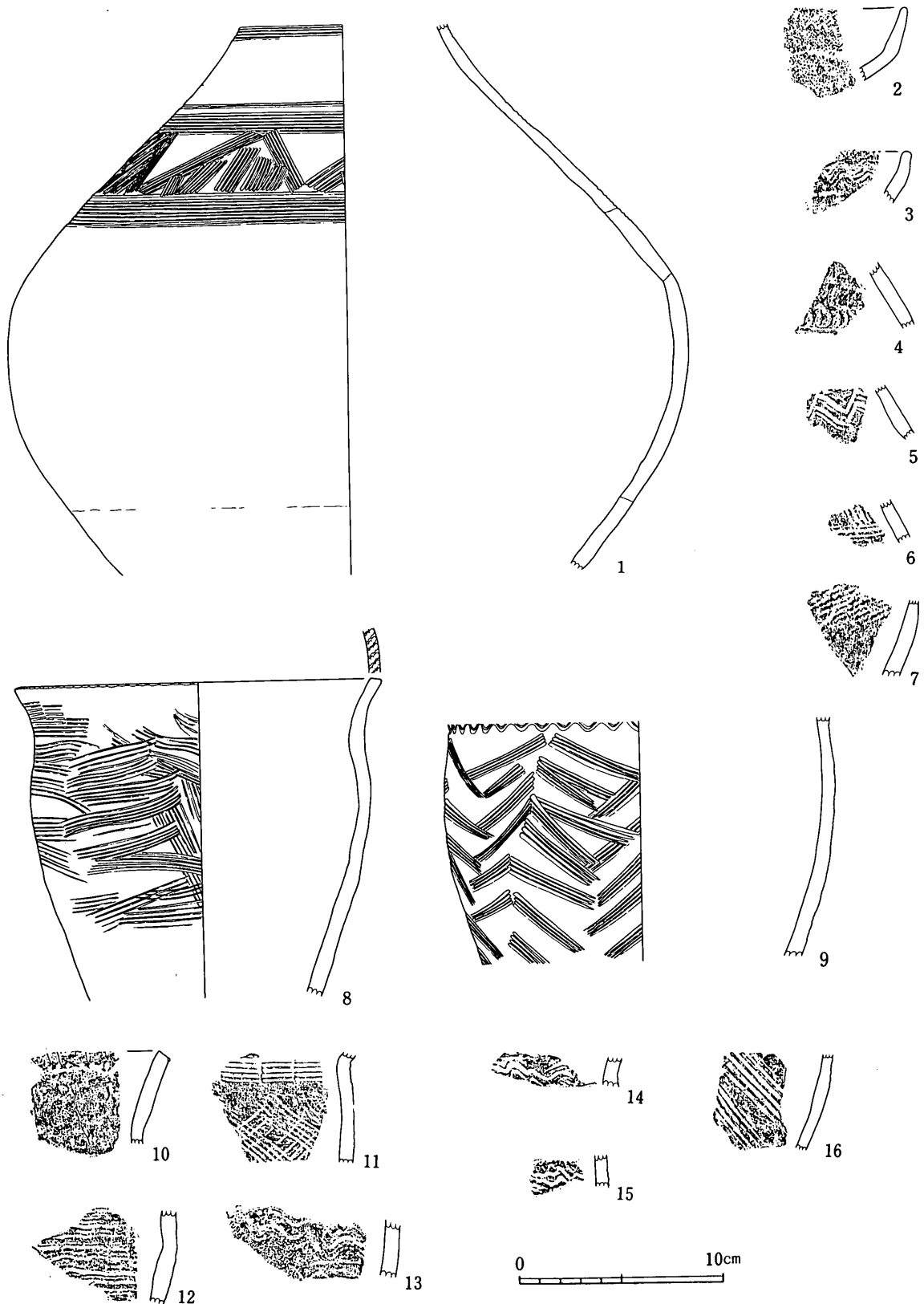
第1图 TAN·KUR I号住居址出土土器(1/3)



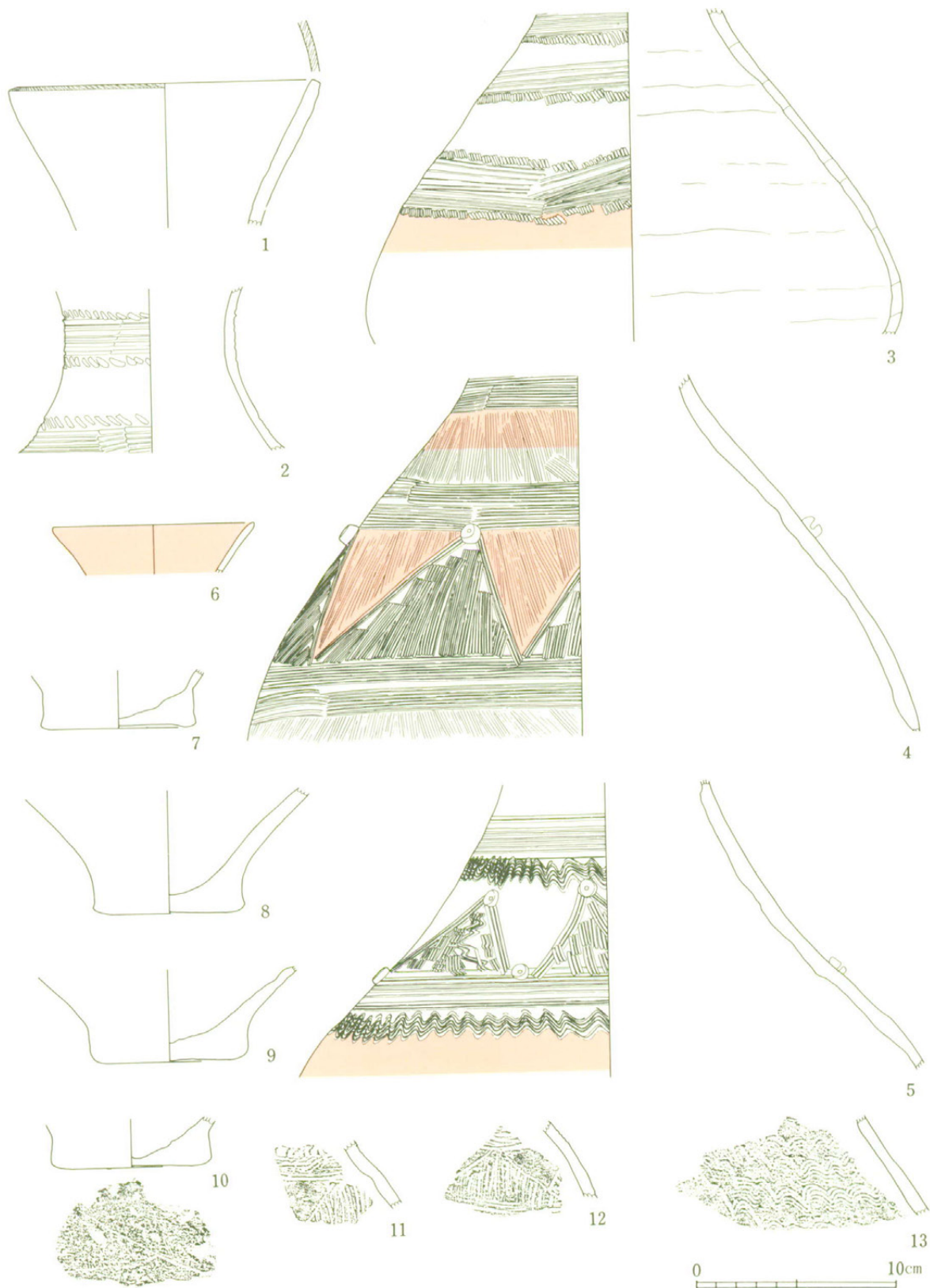
第2图 TAN·KUR 1号住居址出土土器(1/3)



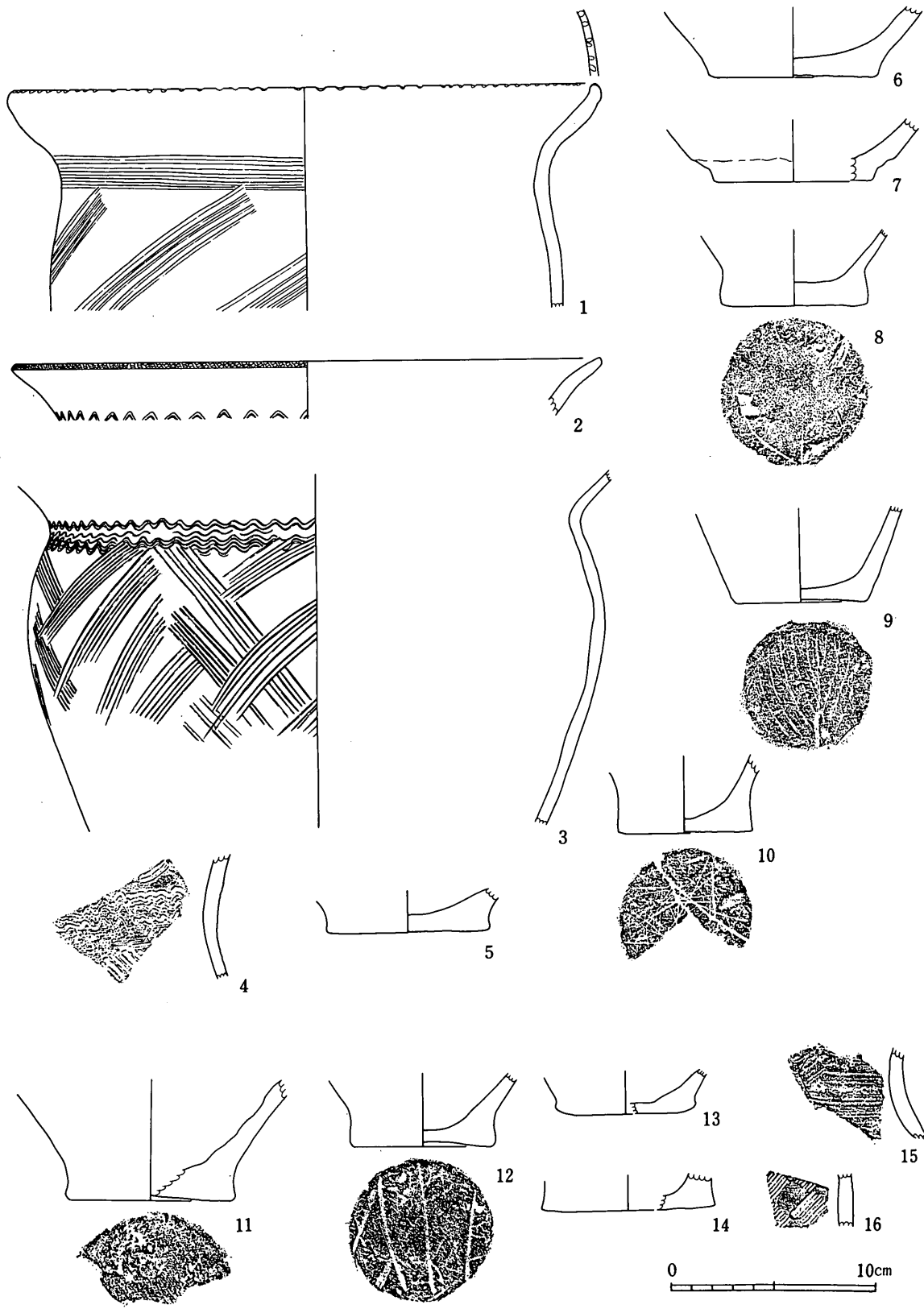
第3图 TAN·KUR 1号住居址(1)、9号住居址(2~16)出土土器(1/3)



第4图 TAN·KUR 13号住居址出土土器(1/3)



第5图 TAN·KUR 19号住居址出土土器(1/3)



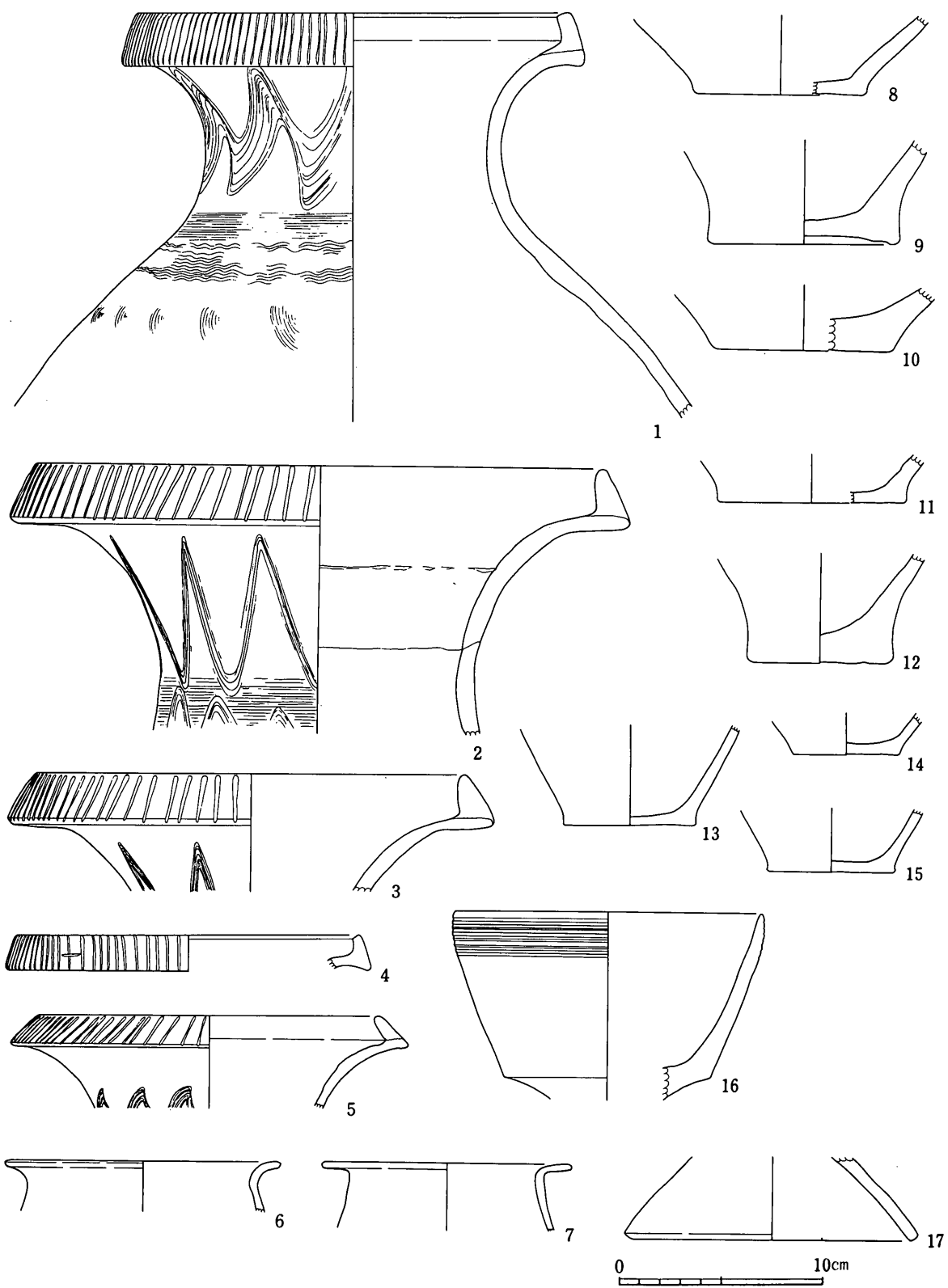
第6图 TAN·KUR 19号住居址(1~10)、20号住居址(11~16)出土土器(1/3)



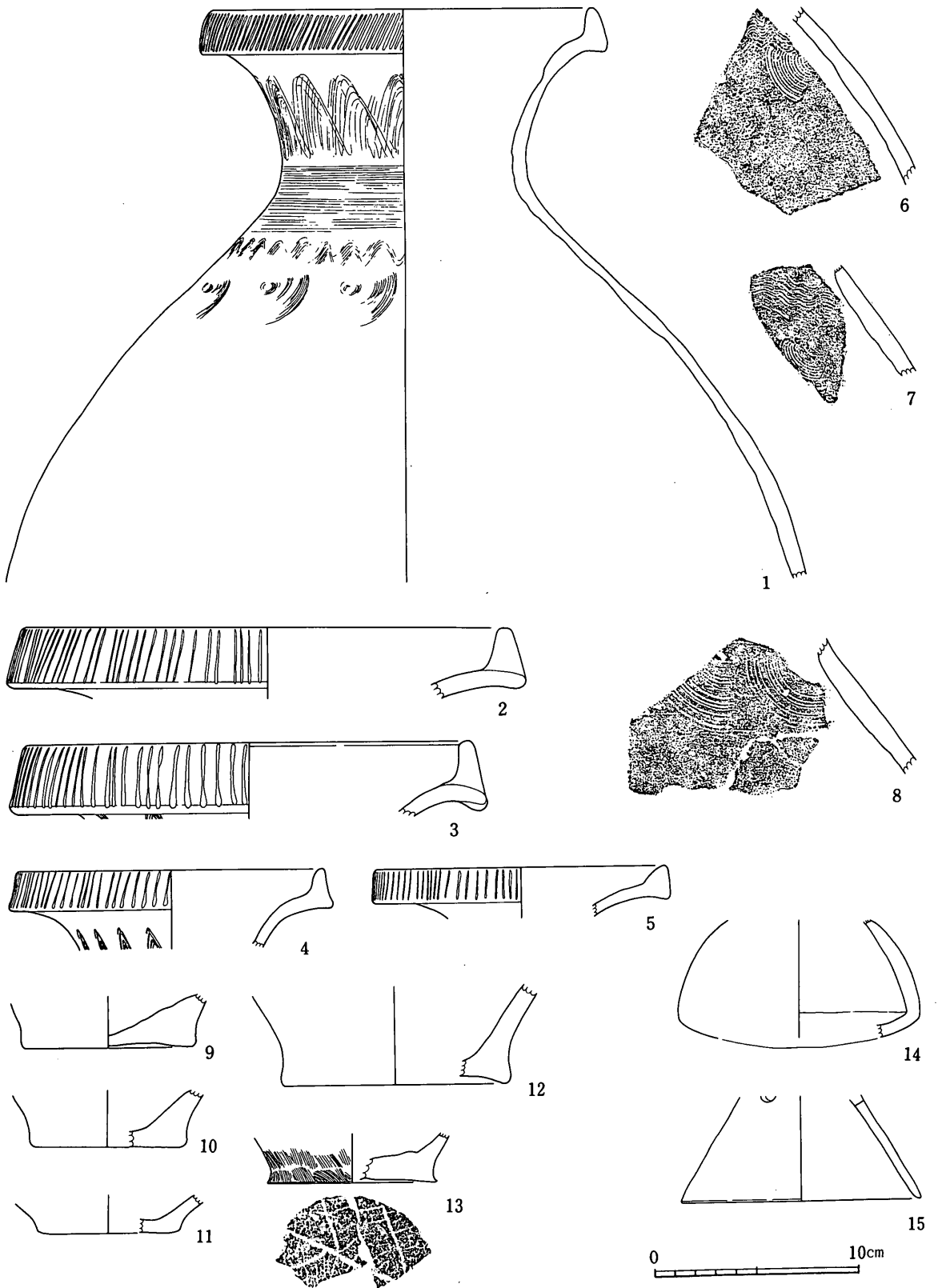
第7图 TAN·KUR 33号住居址(1~3)、59号住居址(4~7)、77号住居址(8~12)出土土器(1/3)



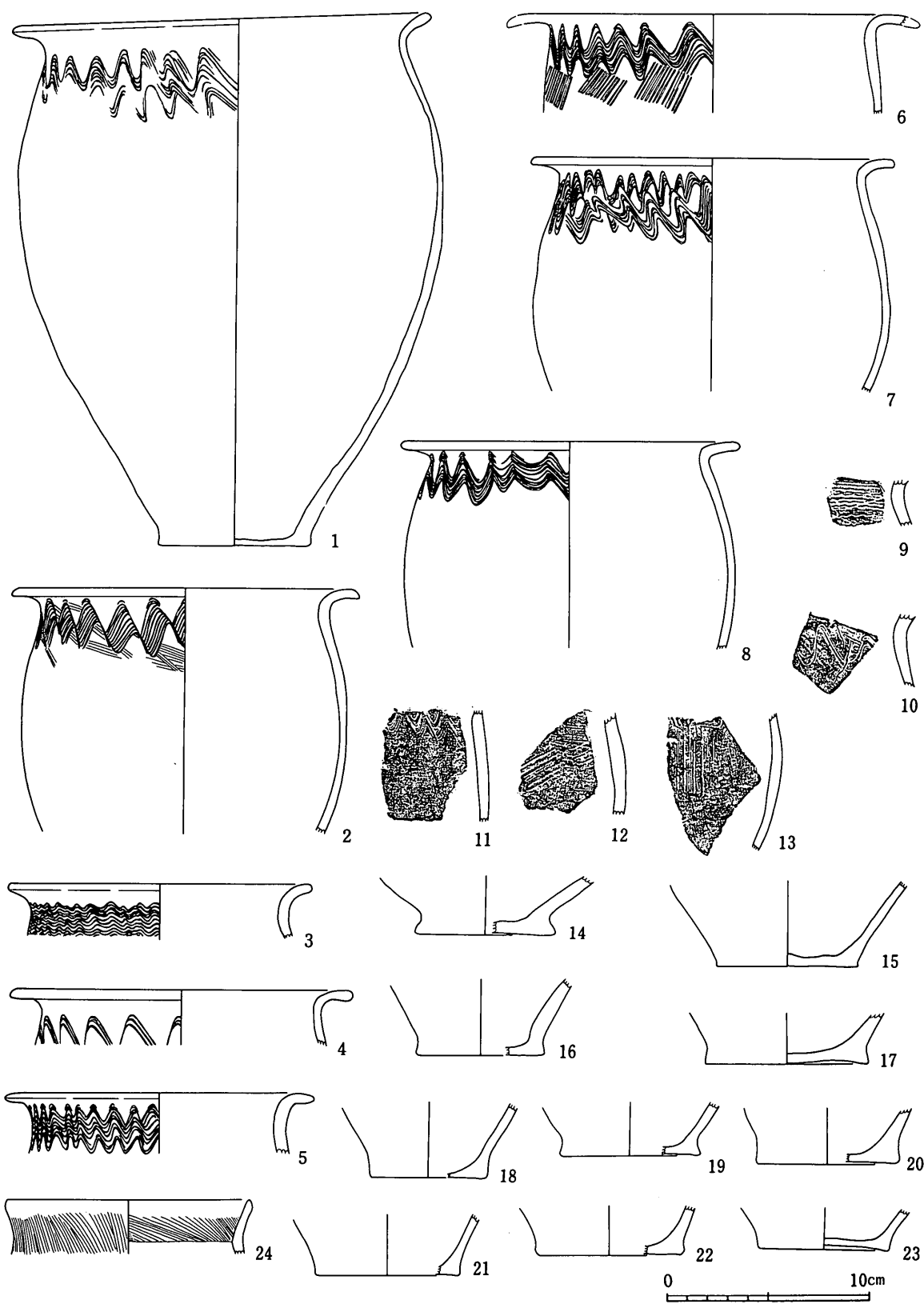
第8图 TAN·KUR 96号住居址(1~4)、5号住居址(5~17)出土土器(1/3)



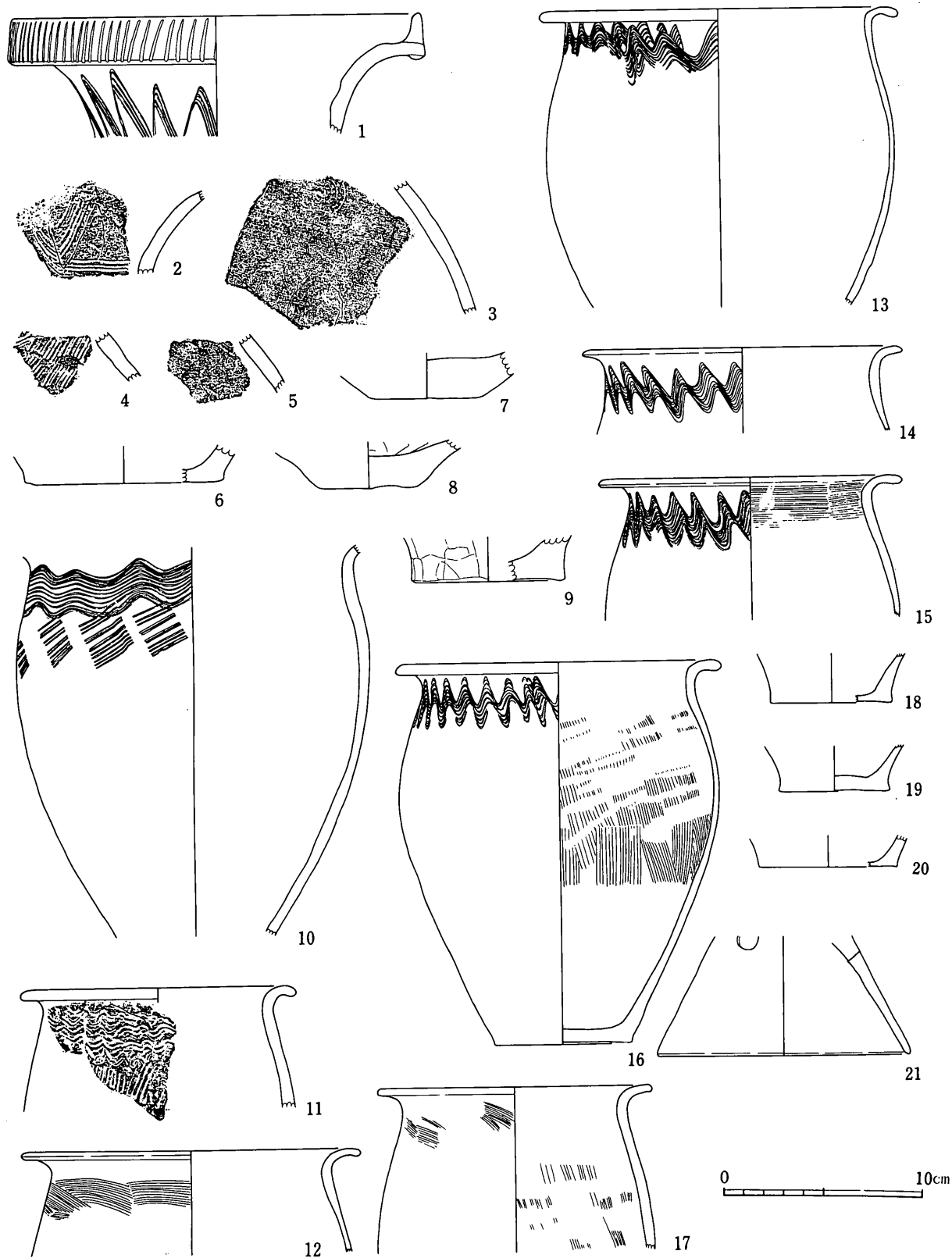
第9图 TAN·KUR 7号住居址出土土器(1/3)



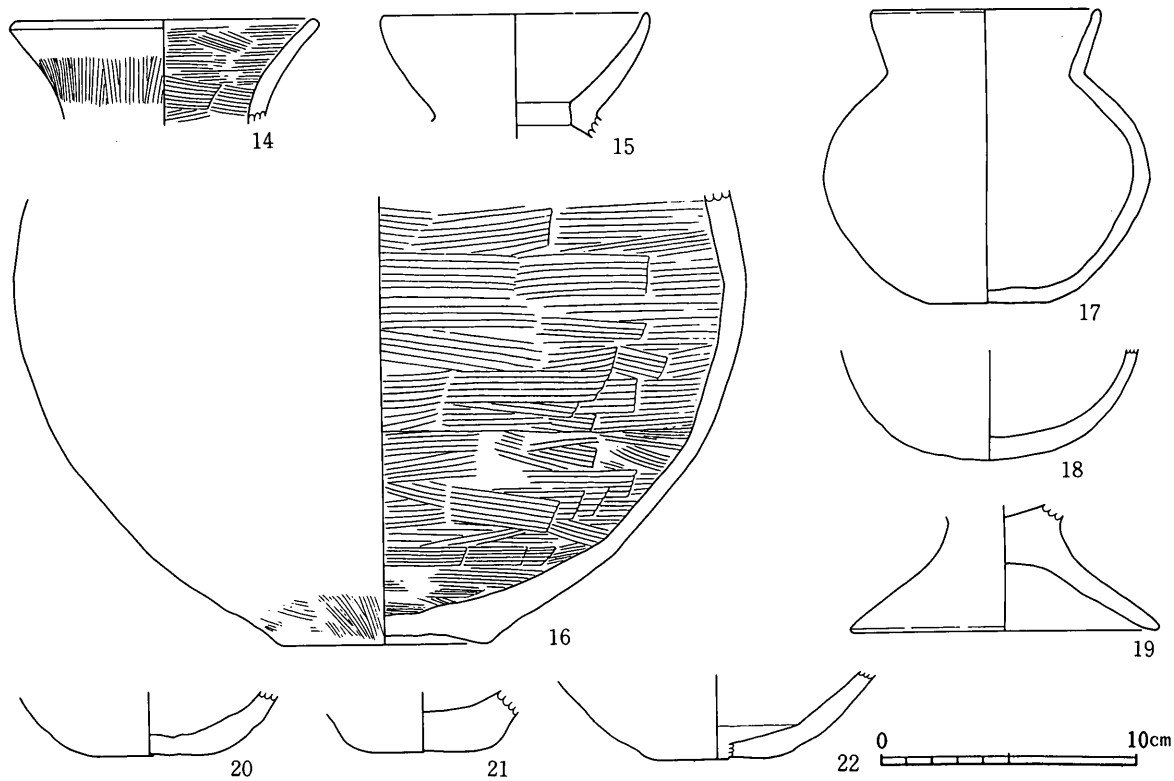
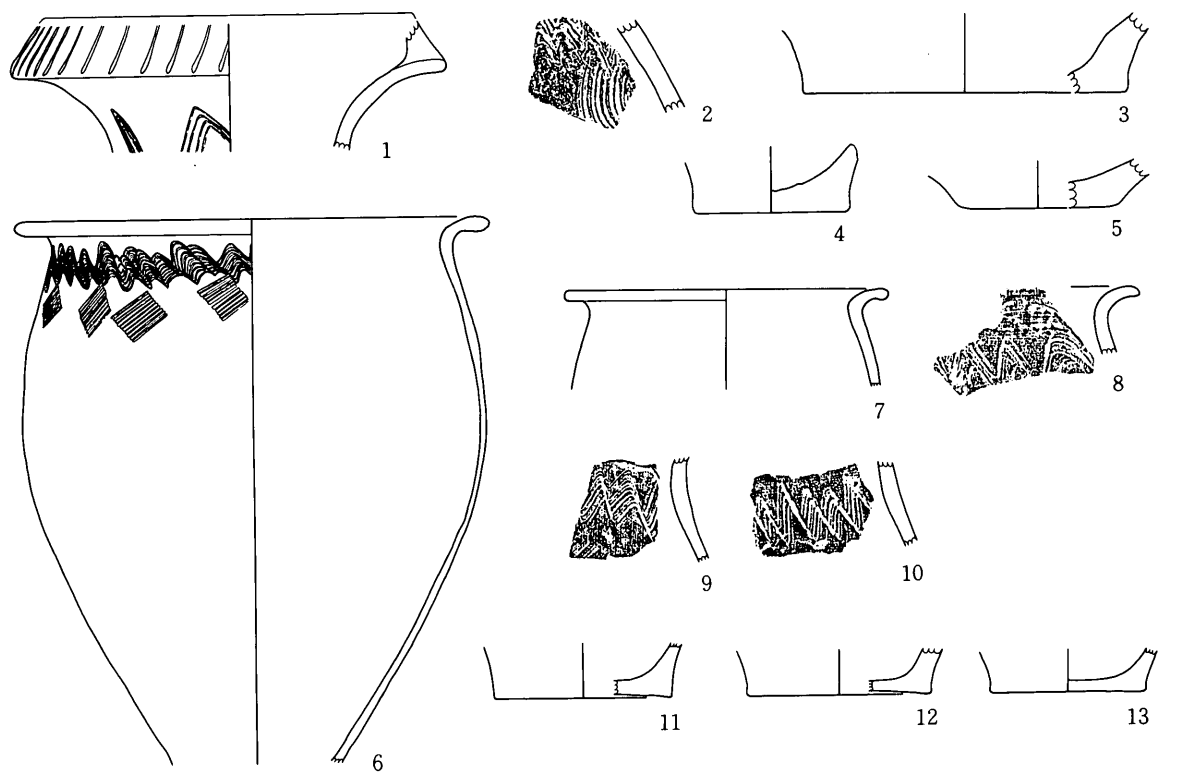
第10图 TAN·KUR 8号住居址出土土器(1/3)



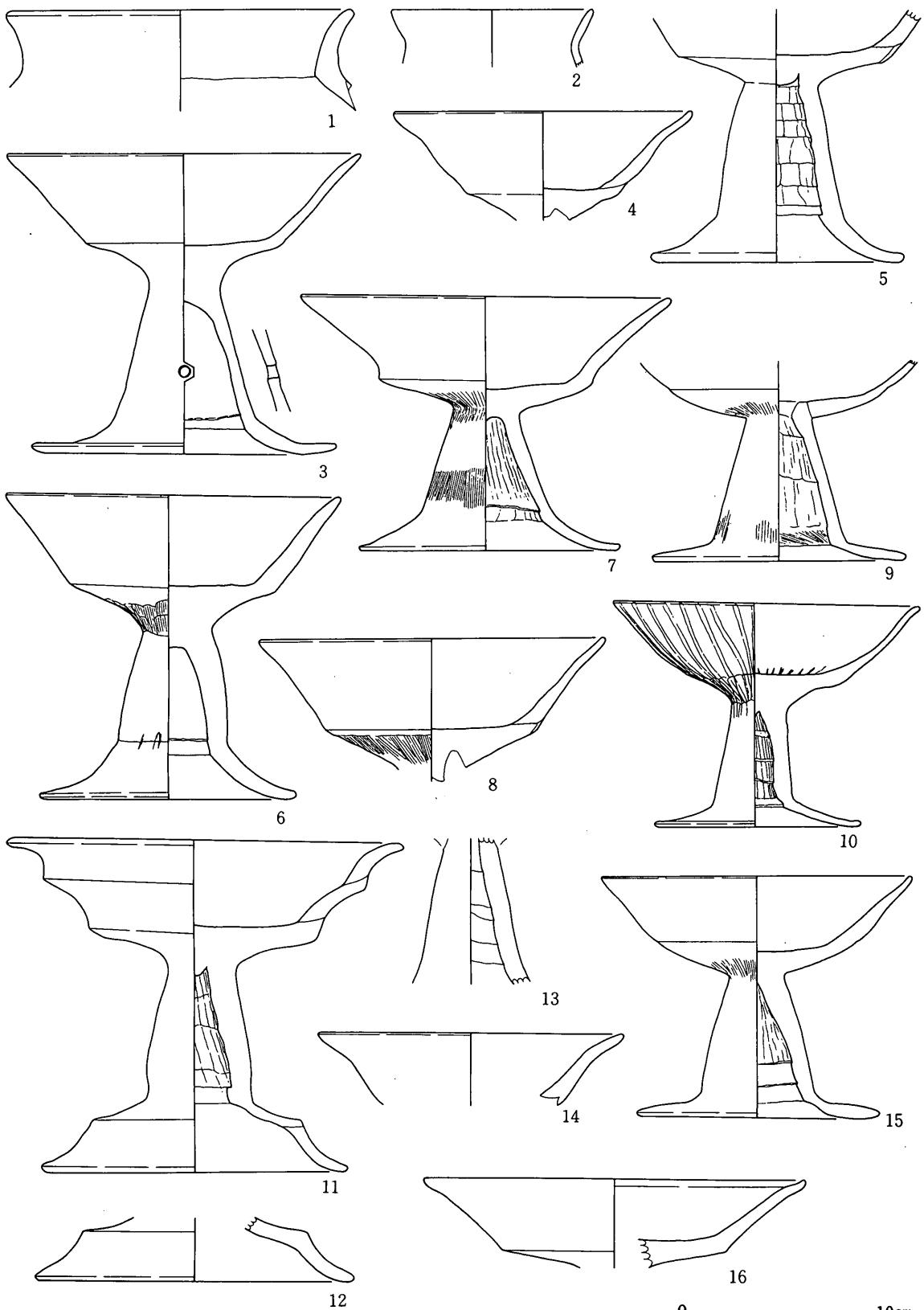
第11图 TAN·KUR 8号住居址出土土器(1/3)



第12图 TAN·KUR 12号住居址出土土器(1/3)

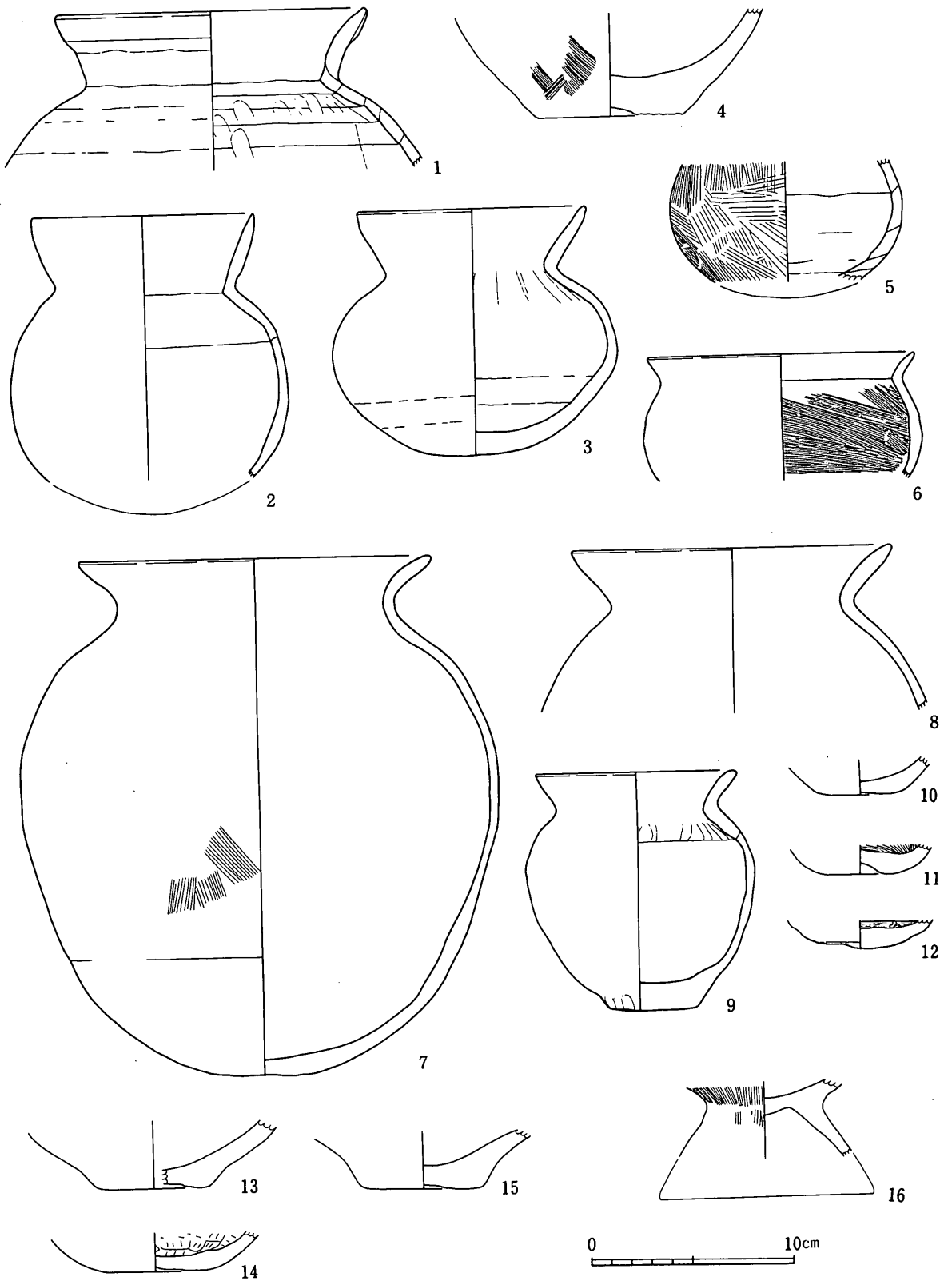


第13图 TAN·KUR 17号住居址(1~13)、16号住居址(14~22)出土土器(1/3)

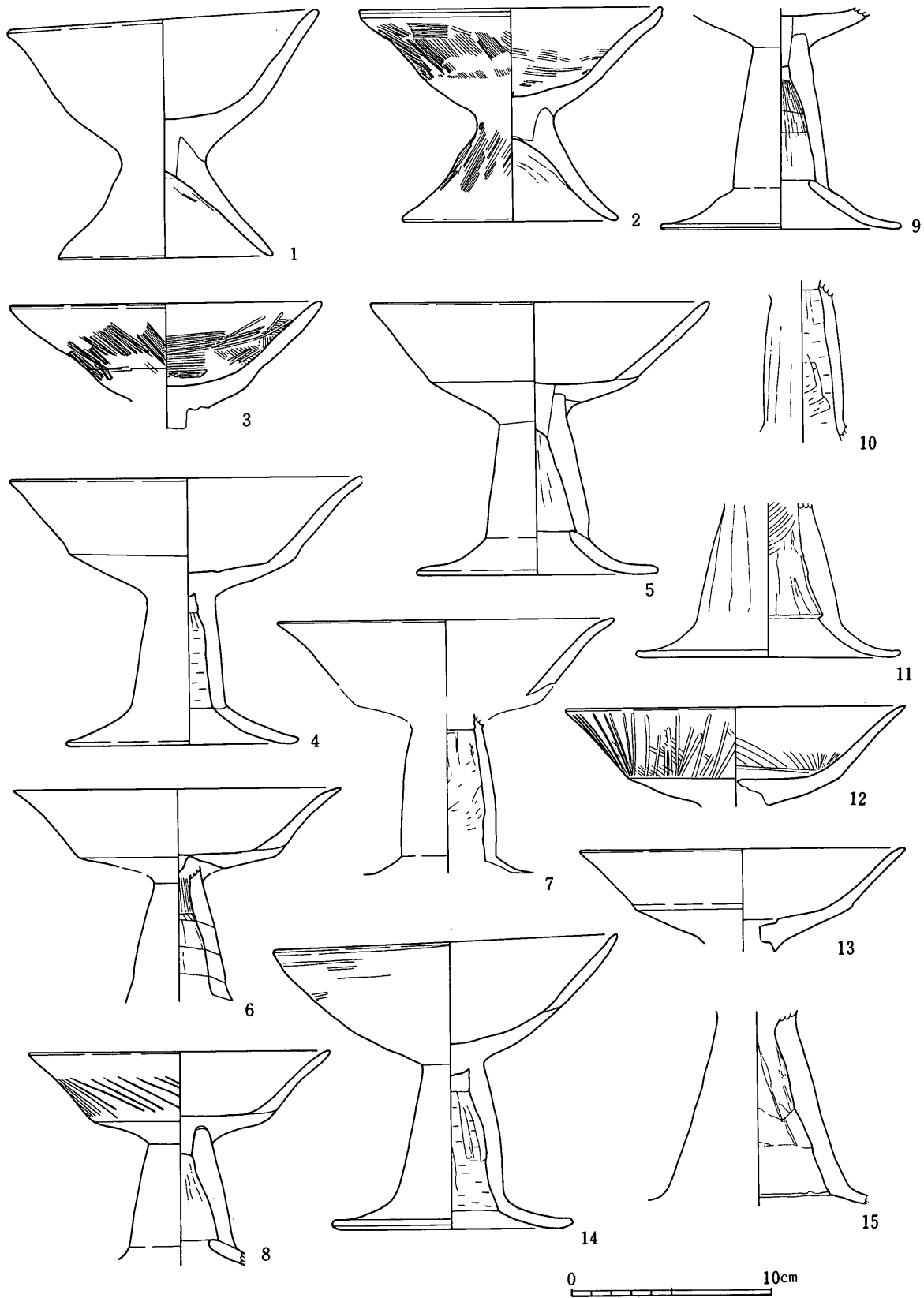


第14图 TAN·KUR 16号住居址出土土器(1/3)

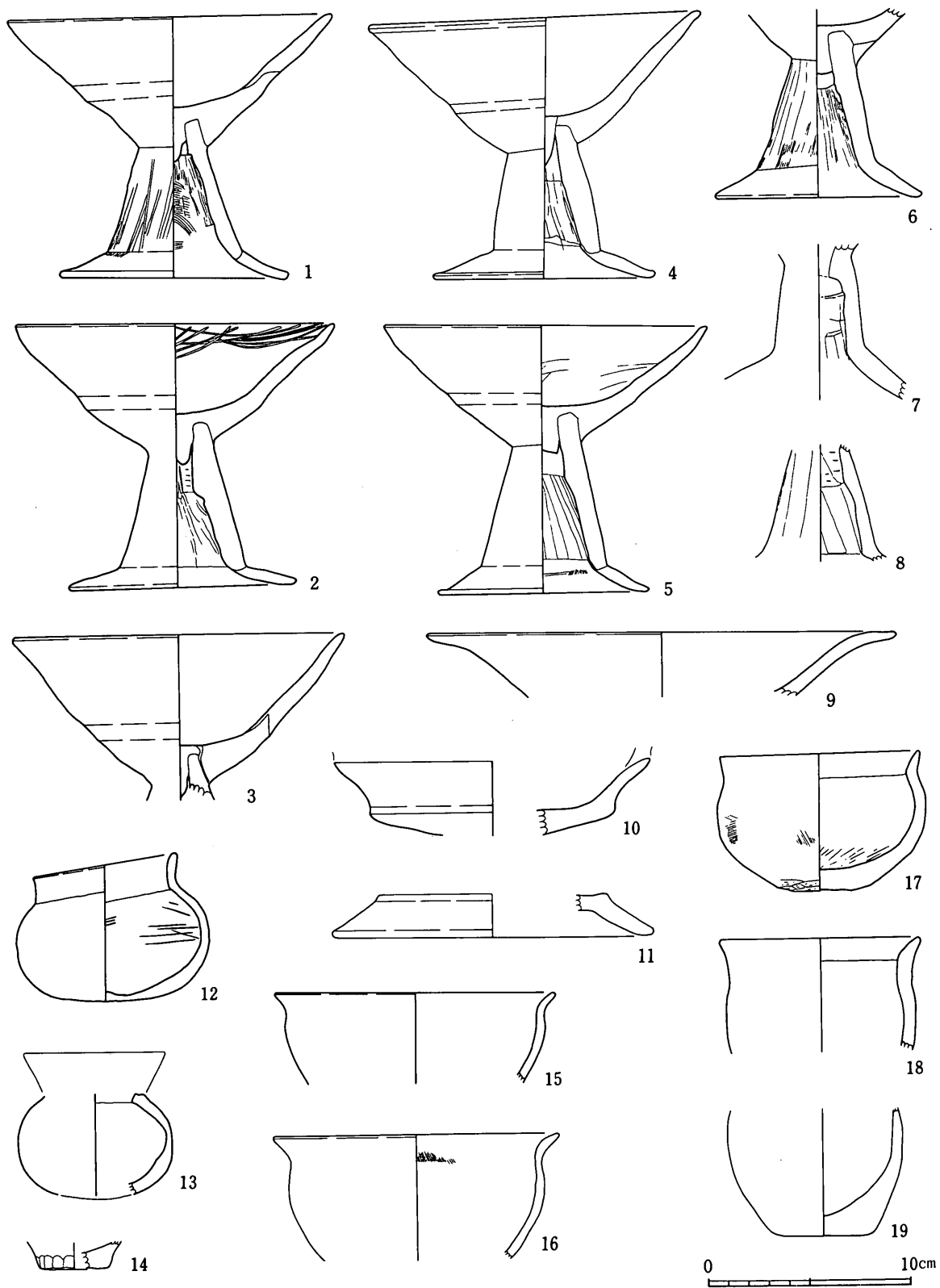
0 10cm



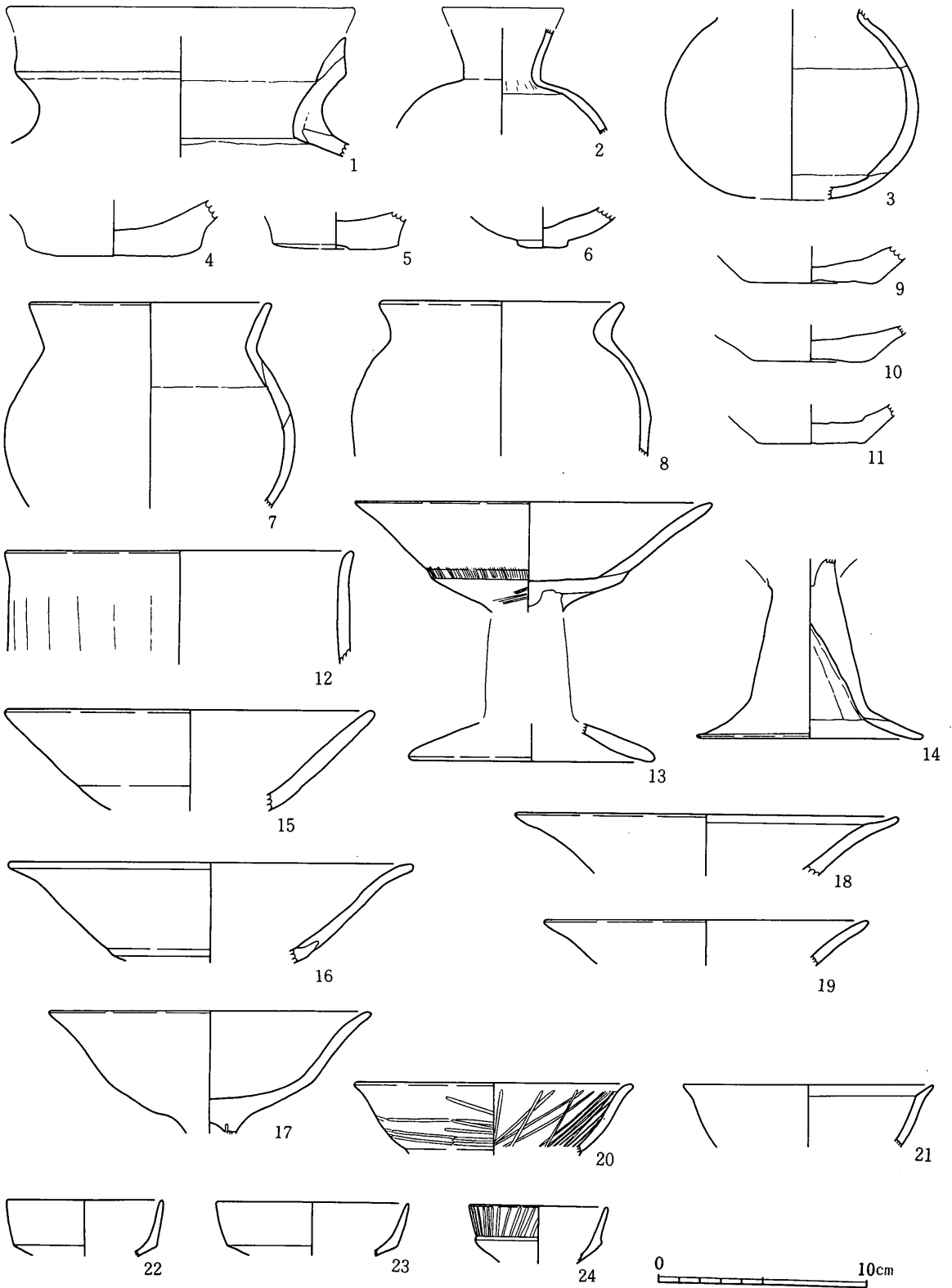
第15图 TAN·KUR 23号住居址出土土器(1/3)



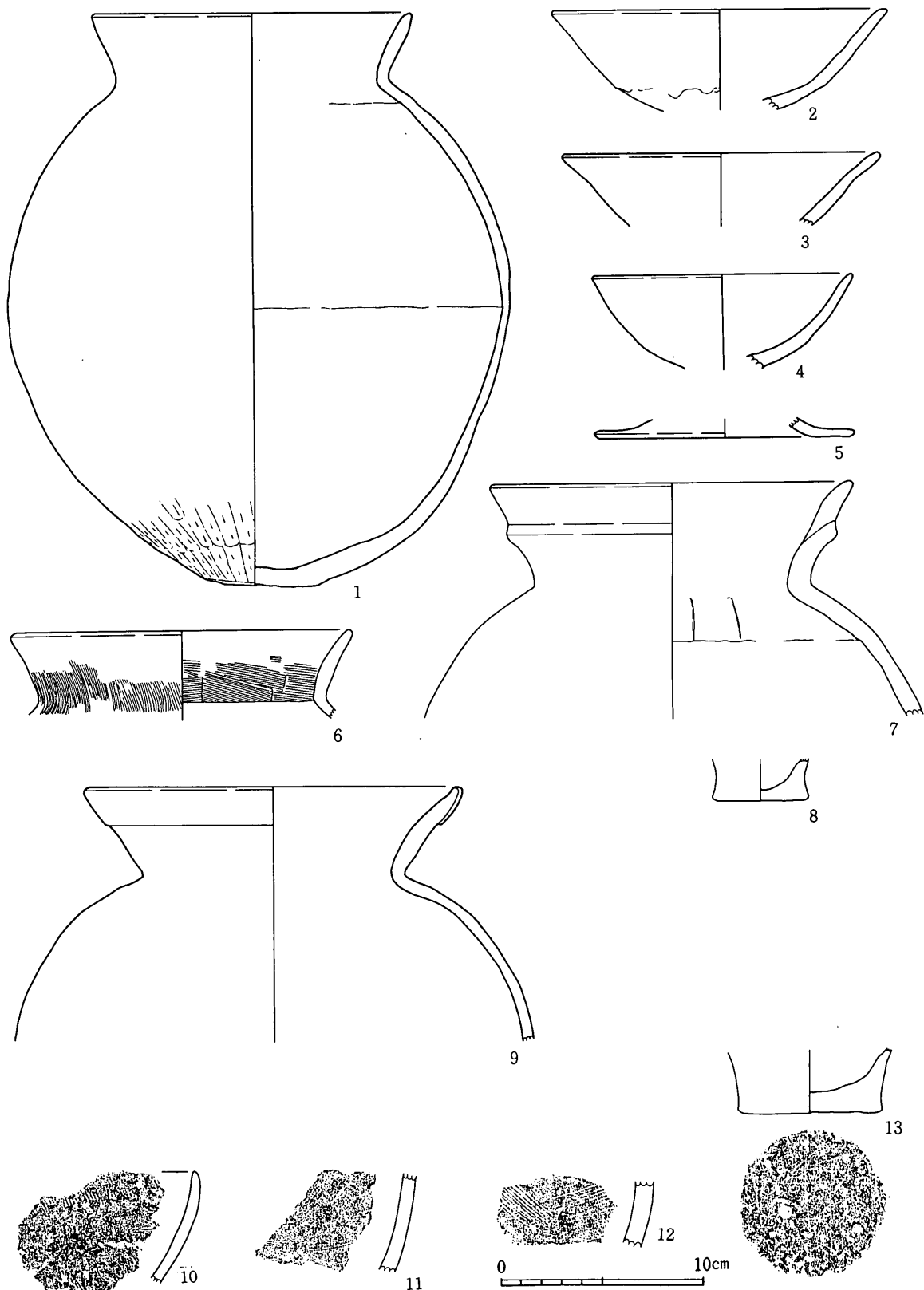
第16図 TAN・KUR 23号住居址出土土器(1/3)



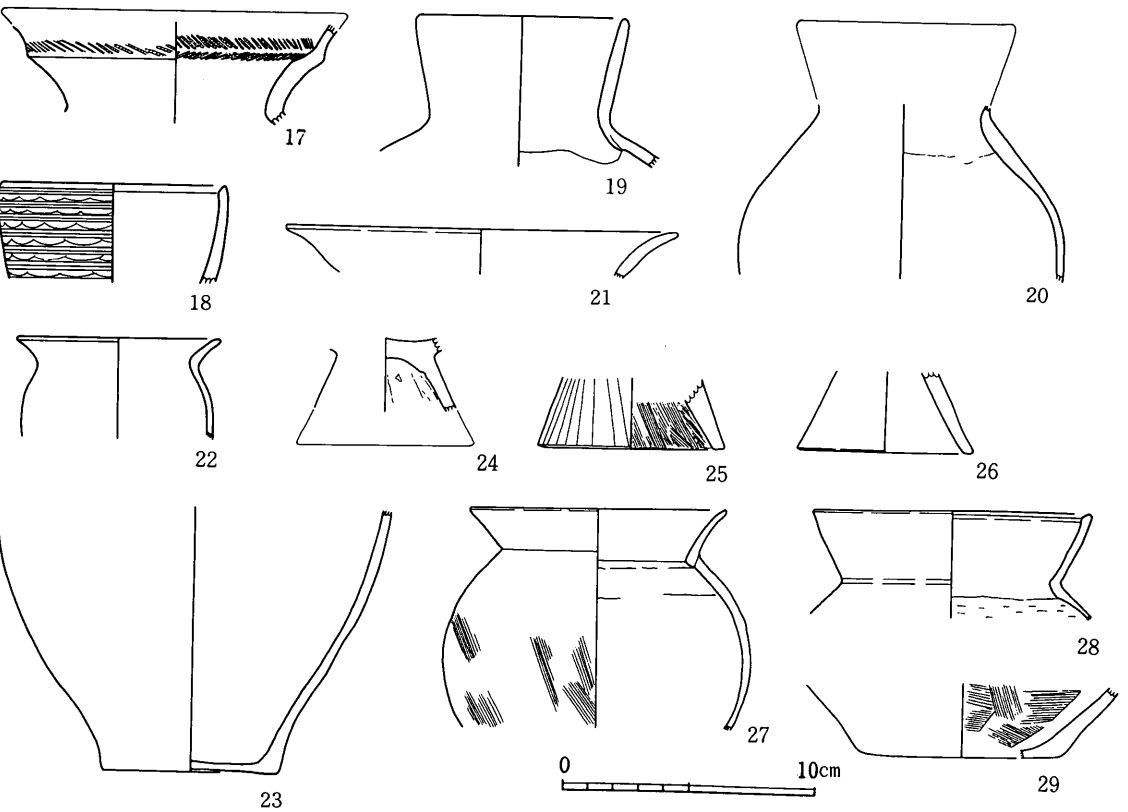
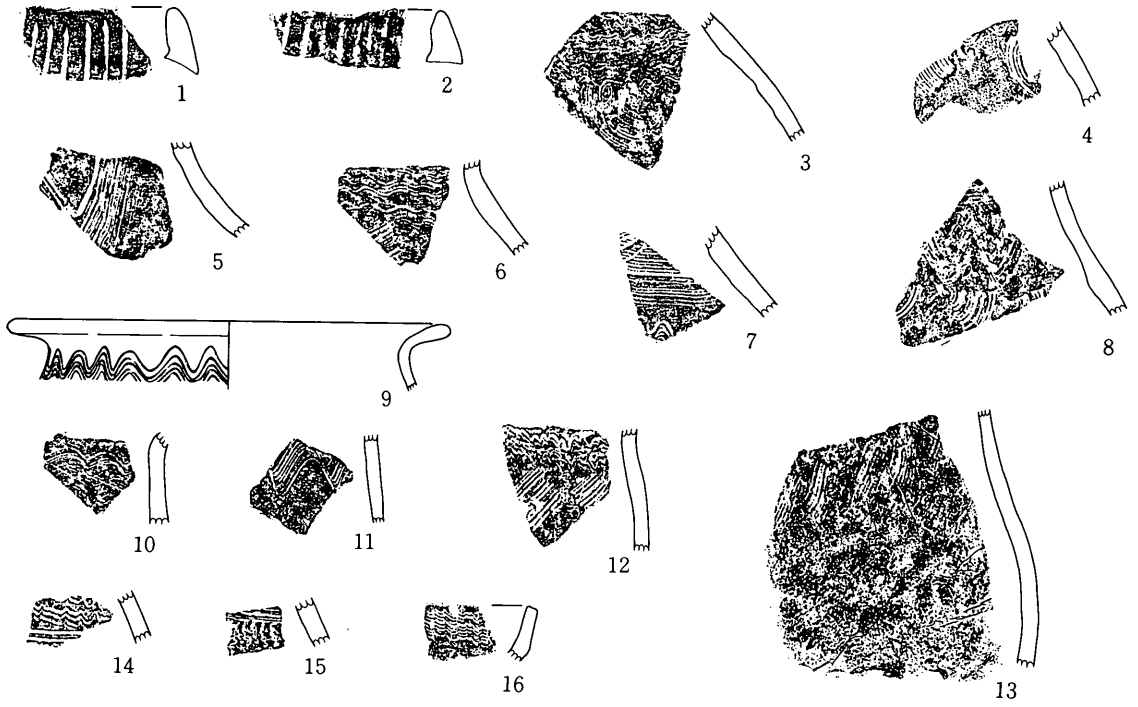
第17图 TAN·KUR 23号住居址出土土器(1/3)



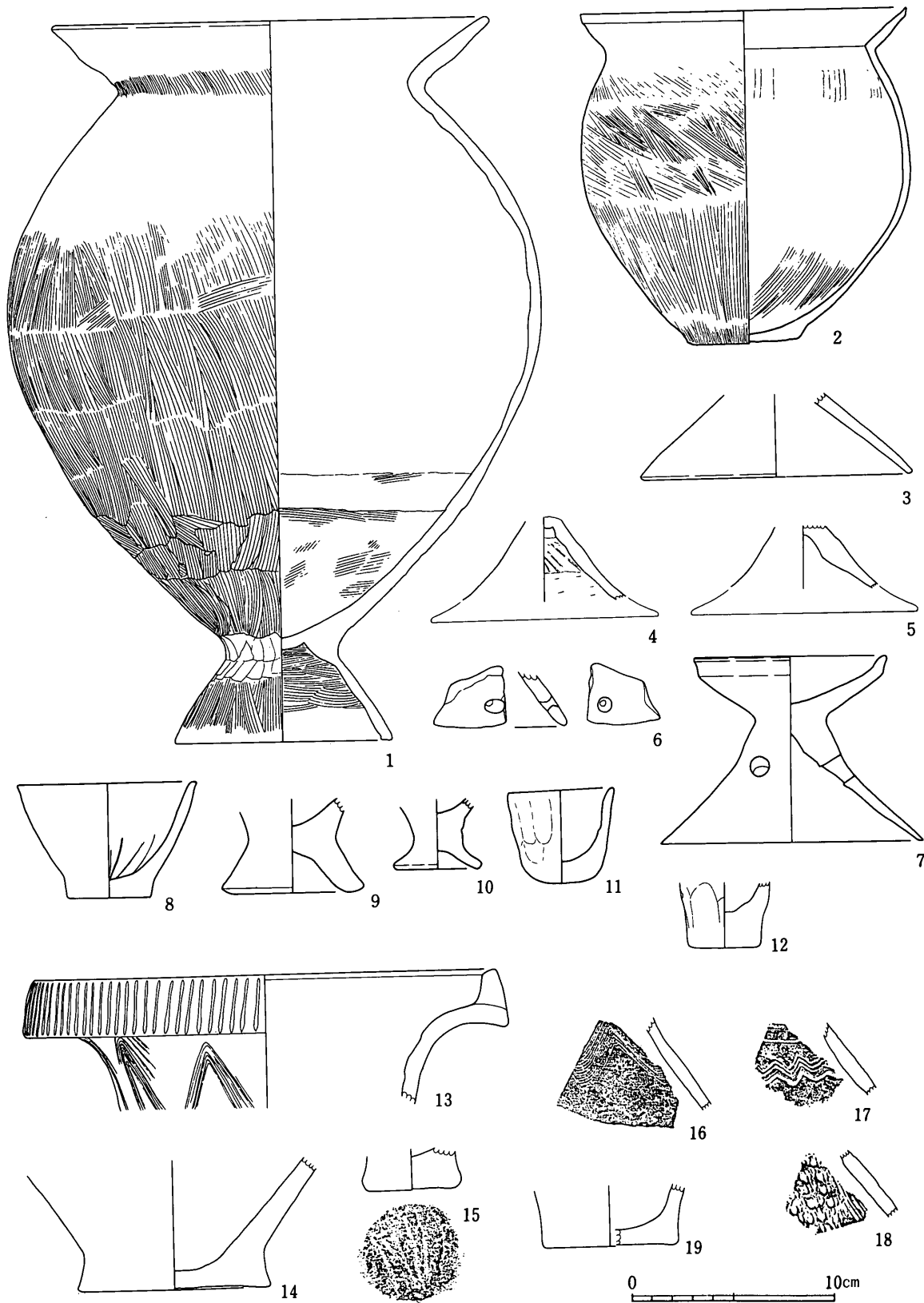
第18图 TAN·KUR 75号住居址出土土器(1/3)



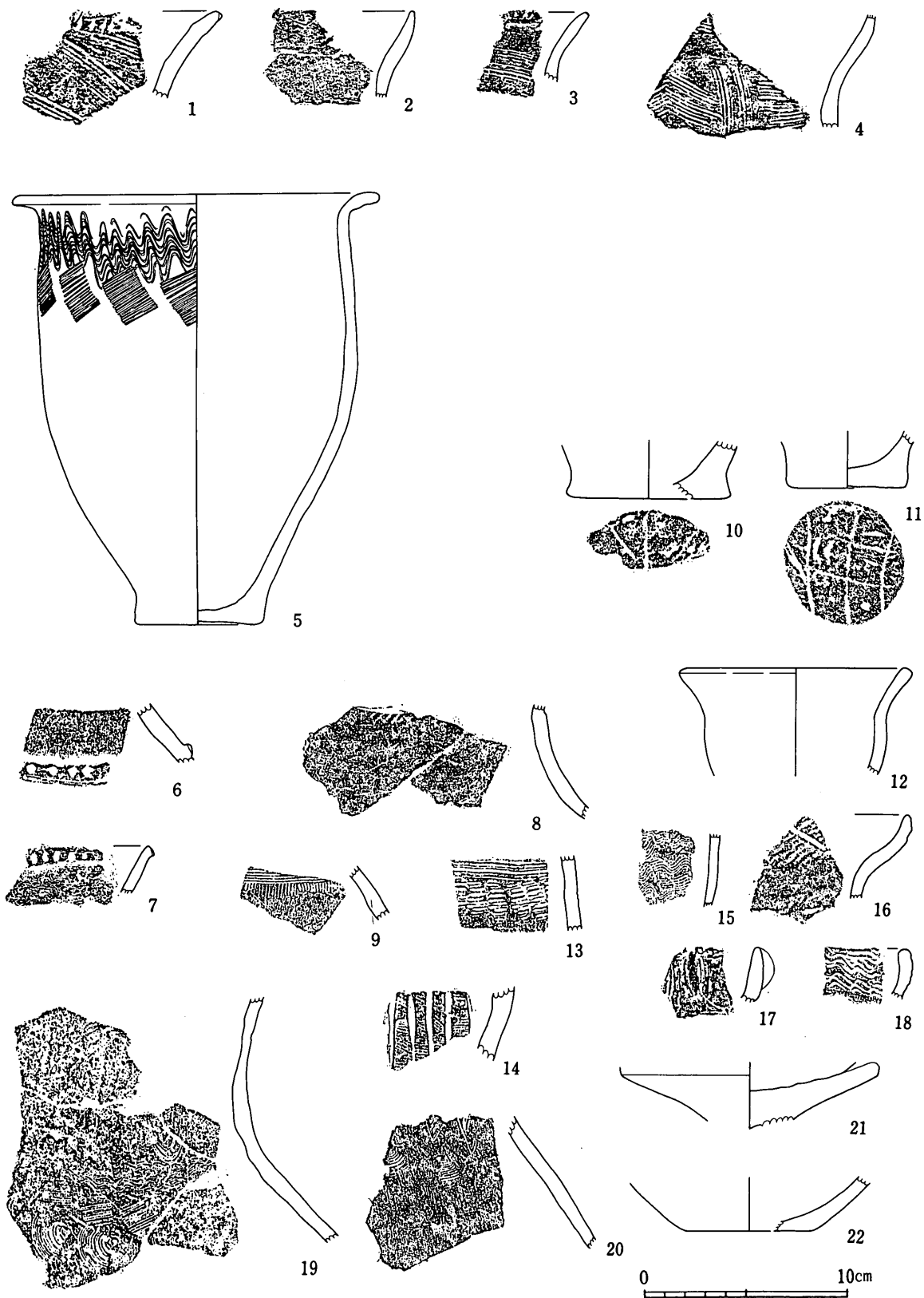
第19图 TAN·KUR 90号住居址(1~8)、101号住居址(9)、溝址15(10~13)出土土器(1/3)



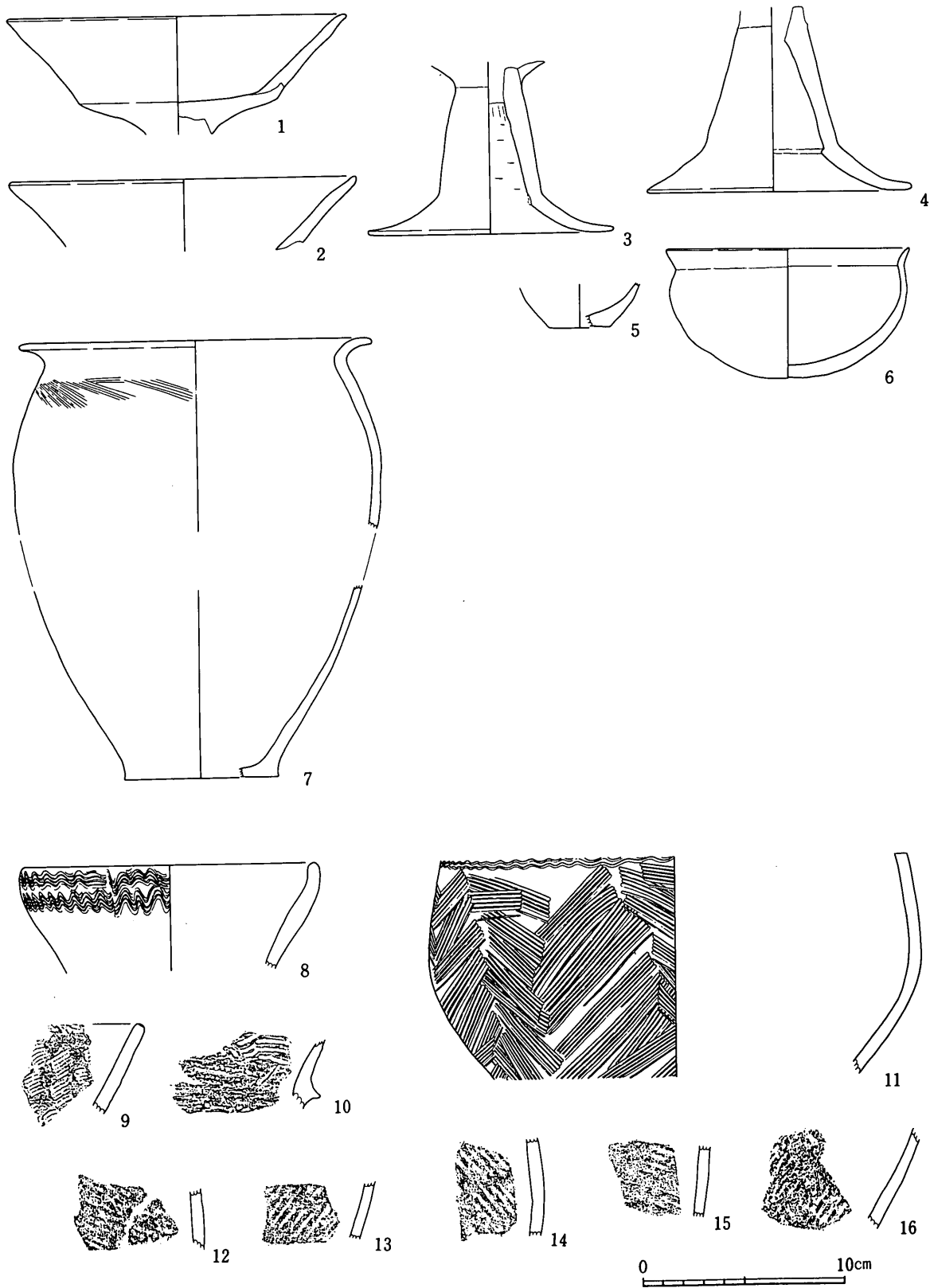
第20図 TAN・KUR 溝状遺構 I (1~16)、溝址12(17~29)出土土器(1/3)



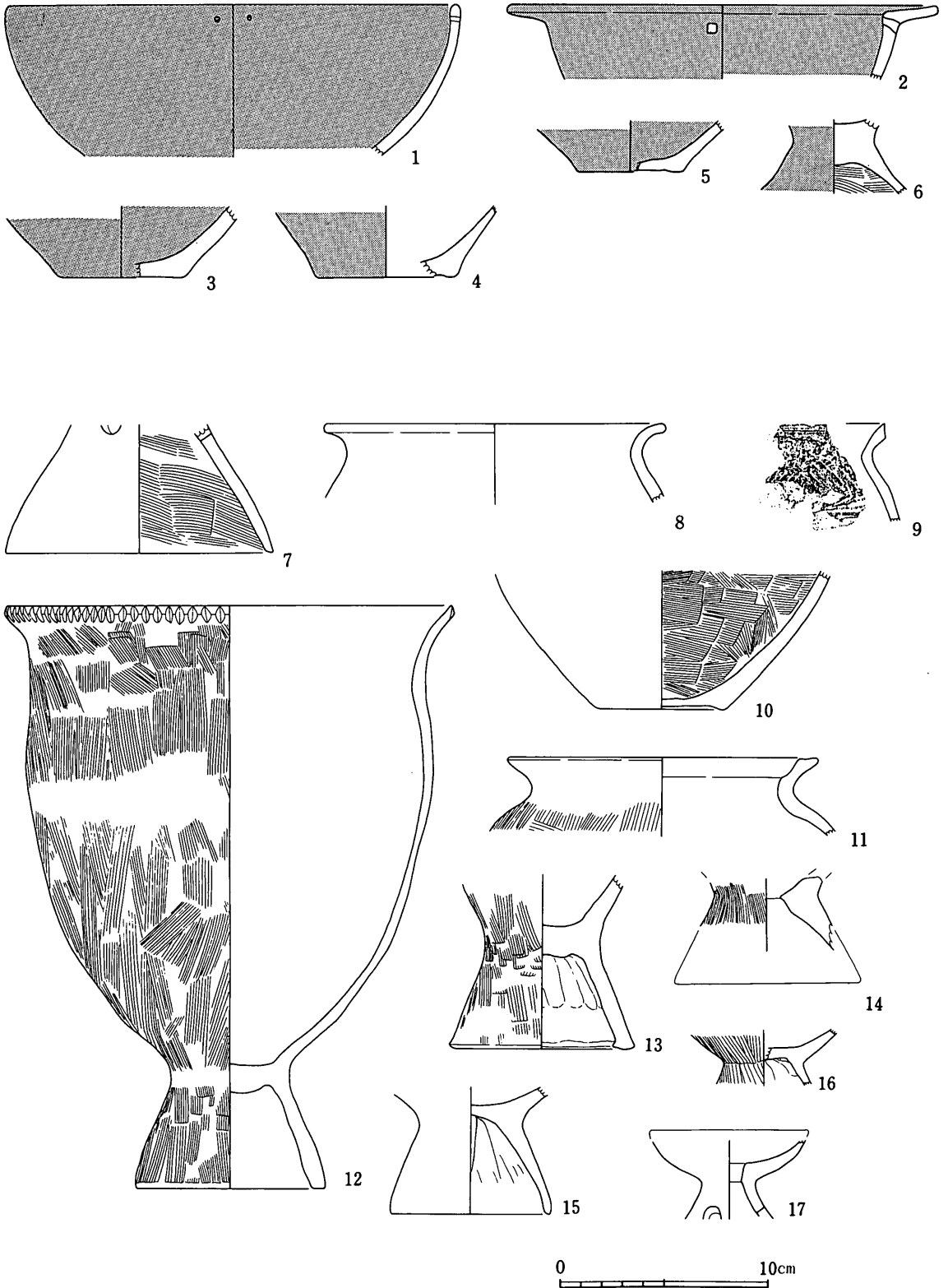
第21图 TAN·KUR 沟址12(1~12)、沟址14(13~19)出土土器(1/2)



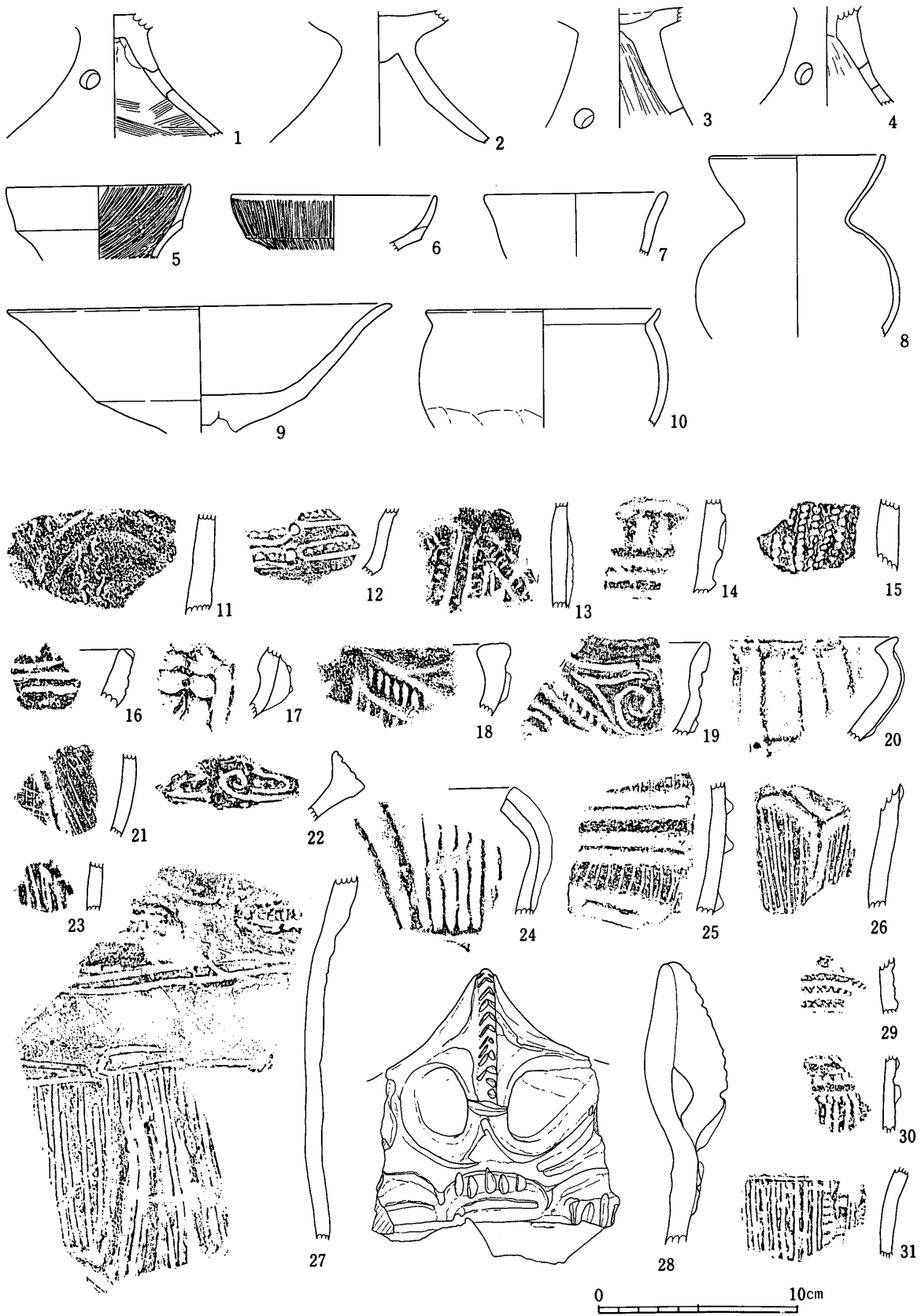
第22图 TAN·KUR 沟址14(1~4)、沟址18(5)、方形周沟墓3(6~22)出土土器(1/3)



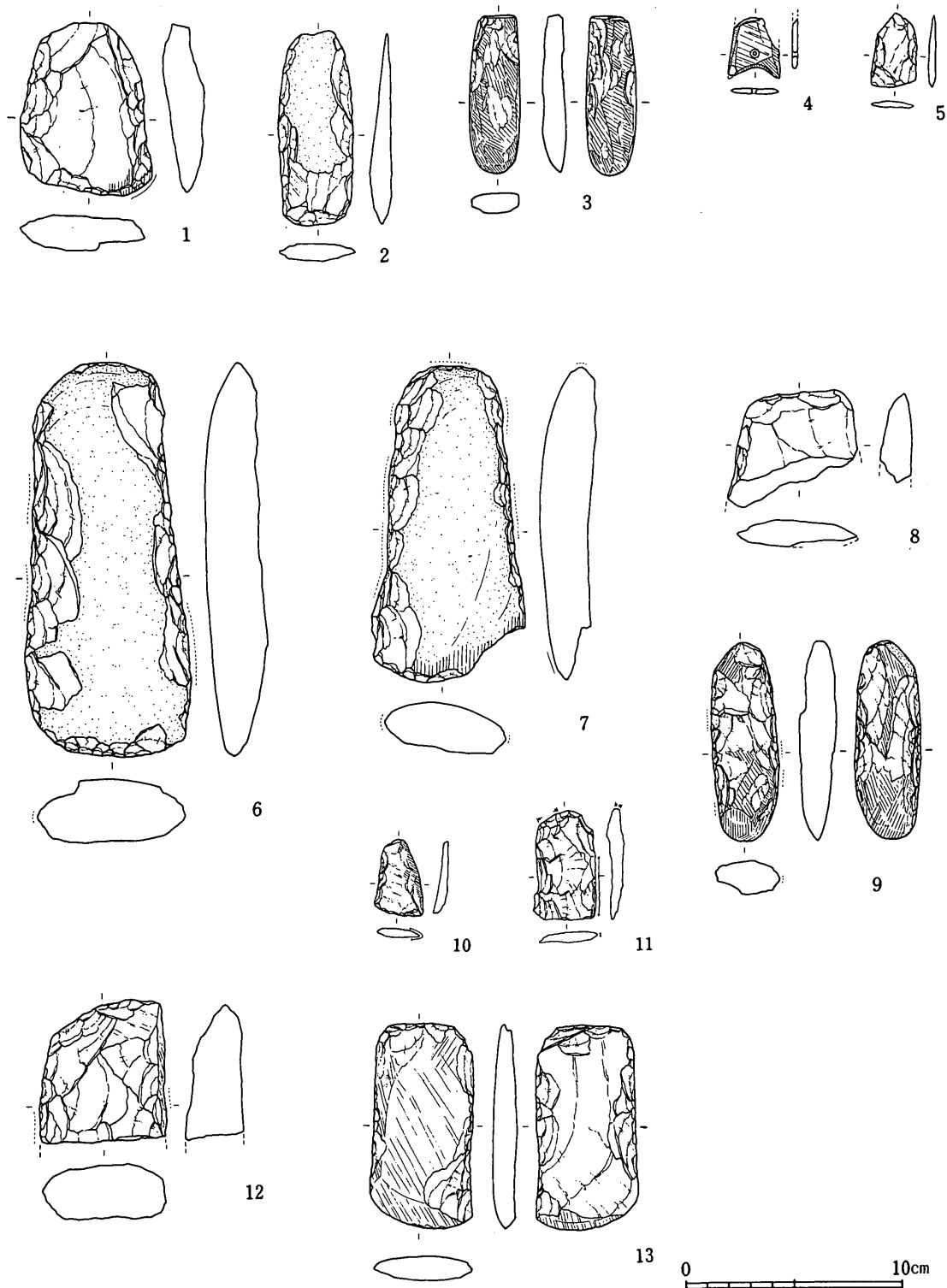
第23图 TAN·KUR 土坑8(1~6)、土坑19(7)、遺構外(8~16)出土土器(1/2)



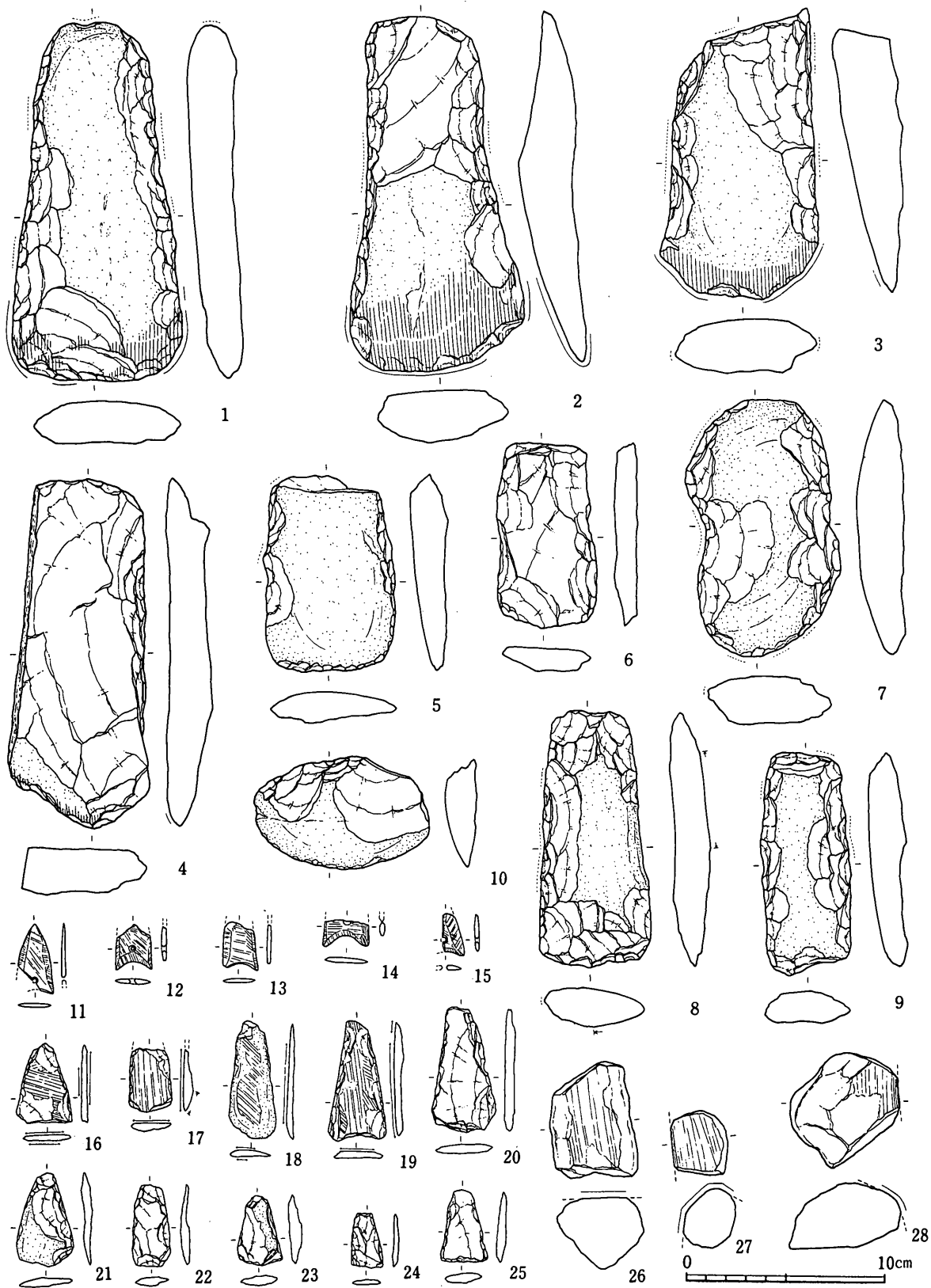
第24図 TAN·KUR 遺構外出土土器(1/3)



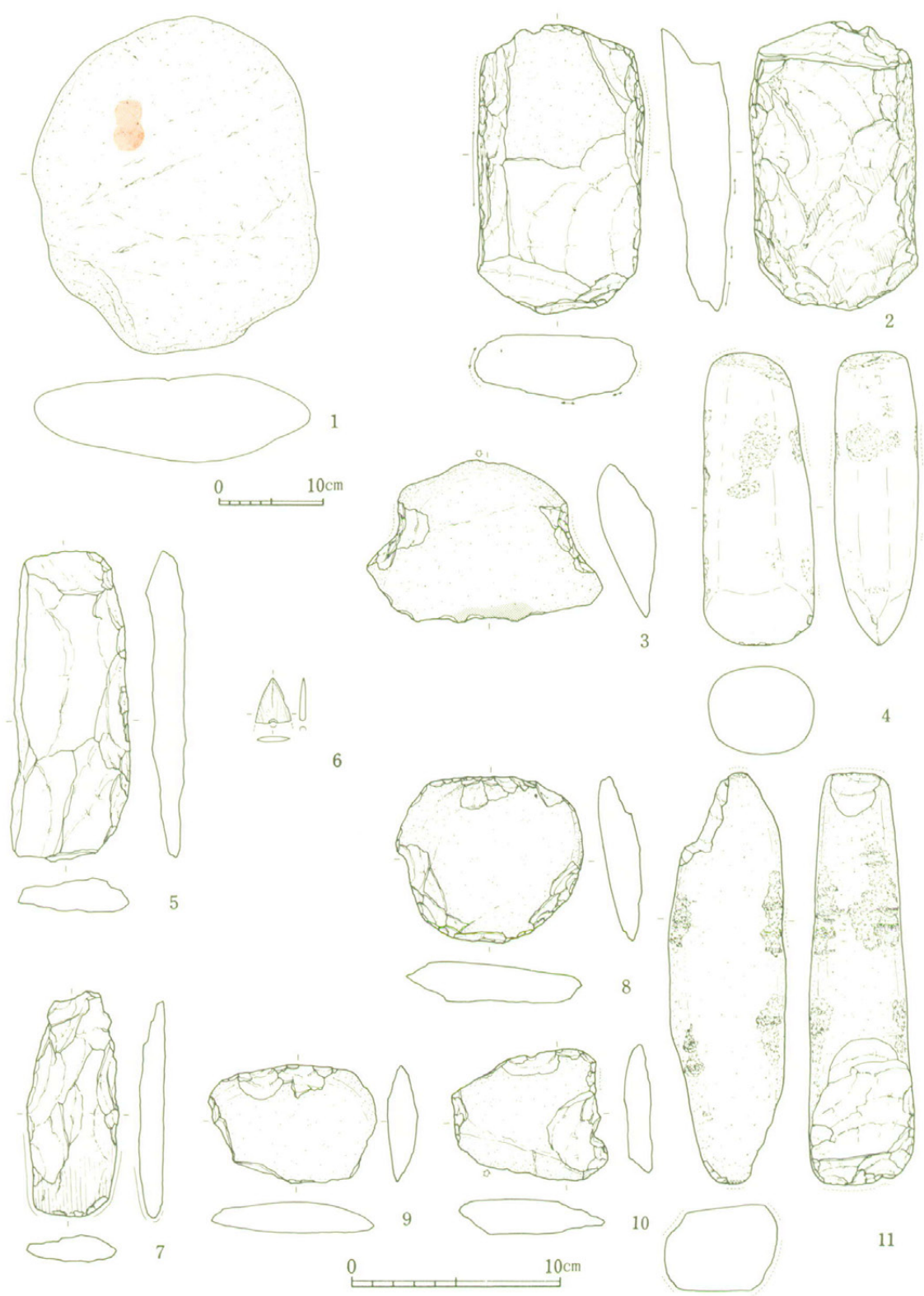
第25图 TAN·KUR 遺構外出土器(1/3)



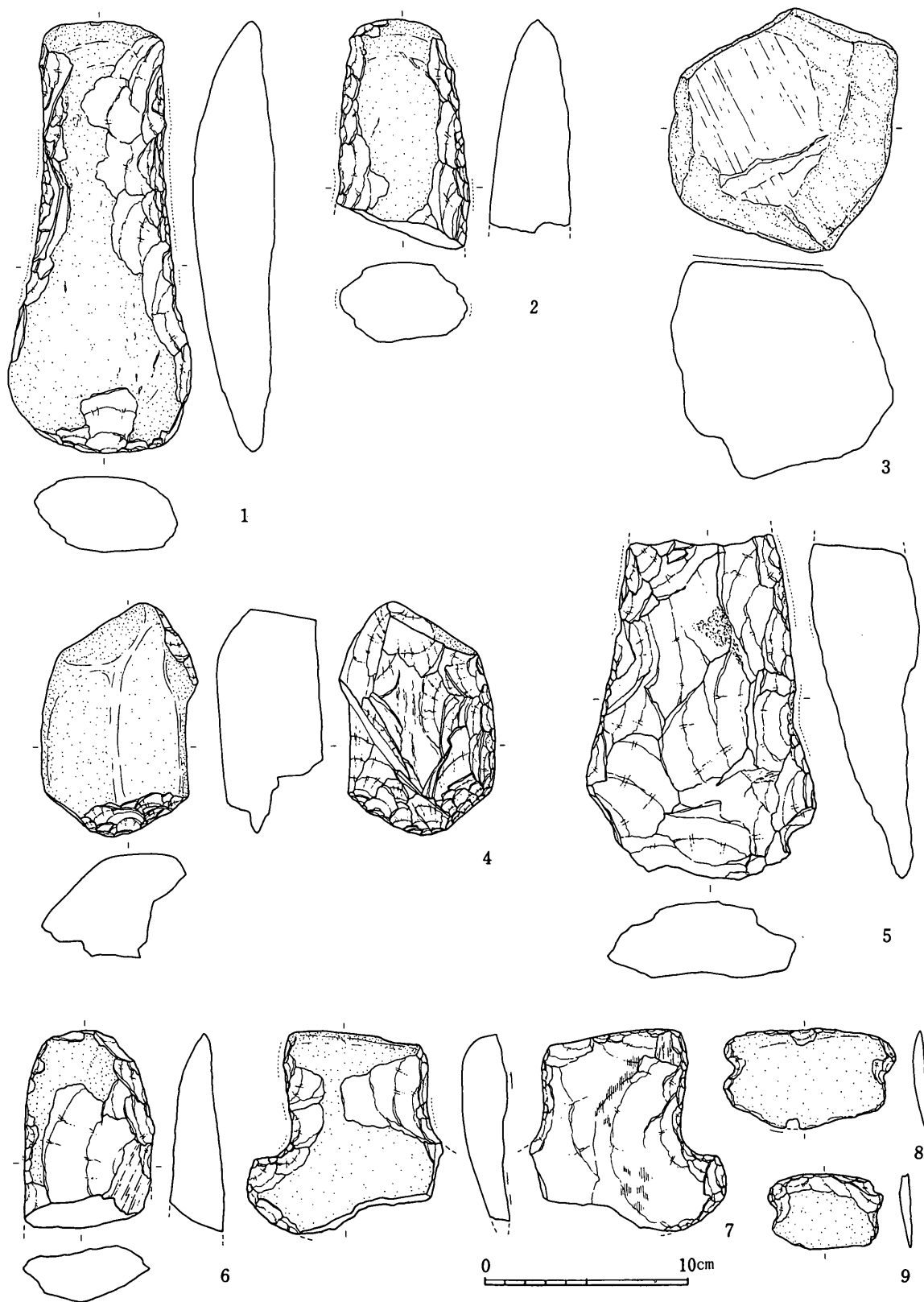
第26图 TAN·KUR 1号住居址(1~5)、9号住居址(6~11)、
20号住居址(12·13)出土石器(1/3)



第27图 TAN·KUR 19号住居址出土石器(1/2)



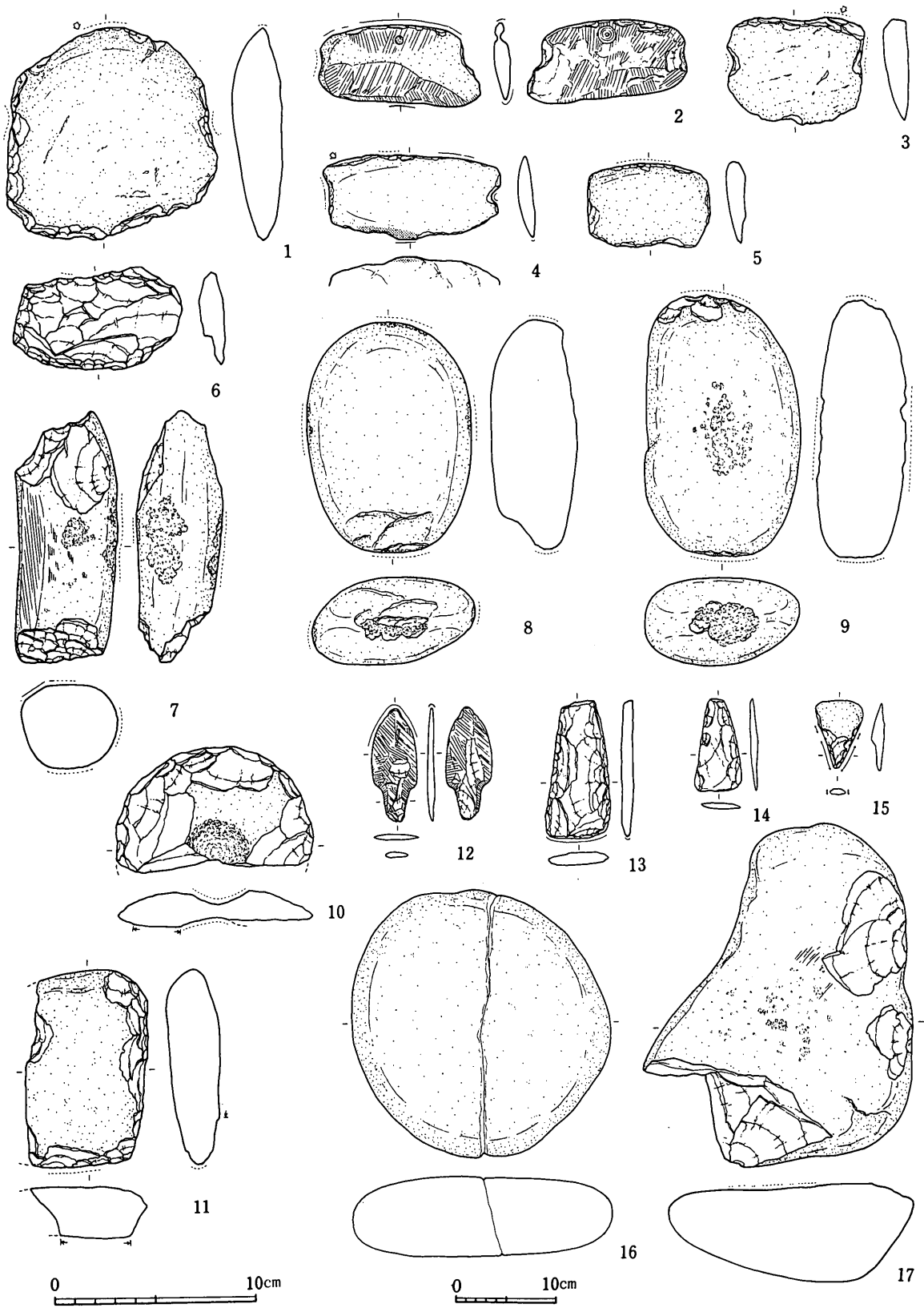
第28図 TAN・KUR 19号住居址(1)、13号住居址(2~4)、33号住居址(7~11)、88号住居址(5・6)出土石器(1/3、1のみ1/2)



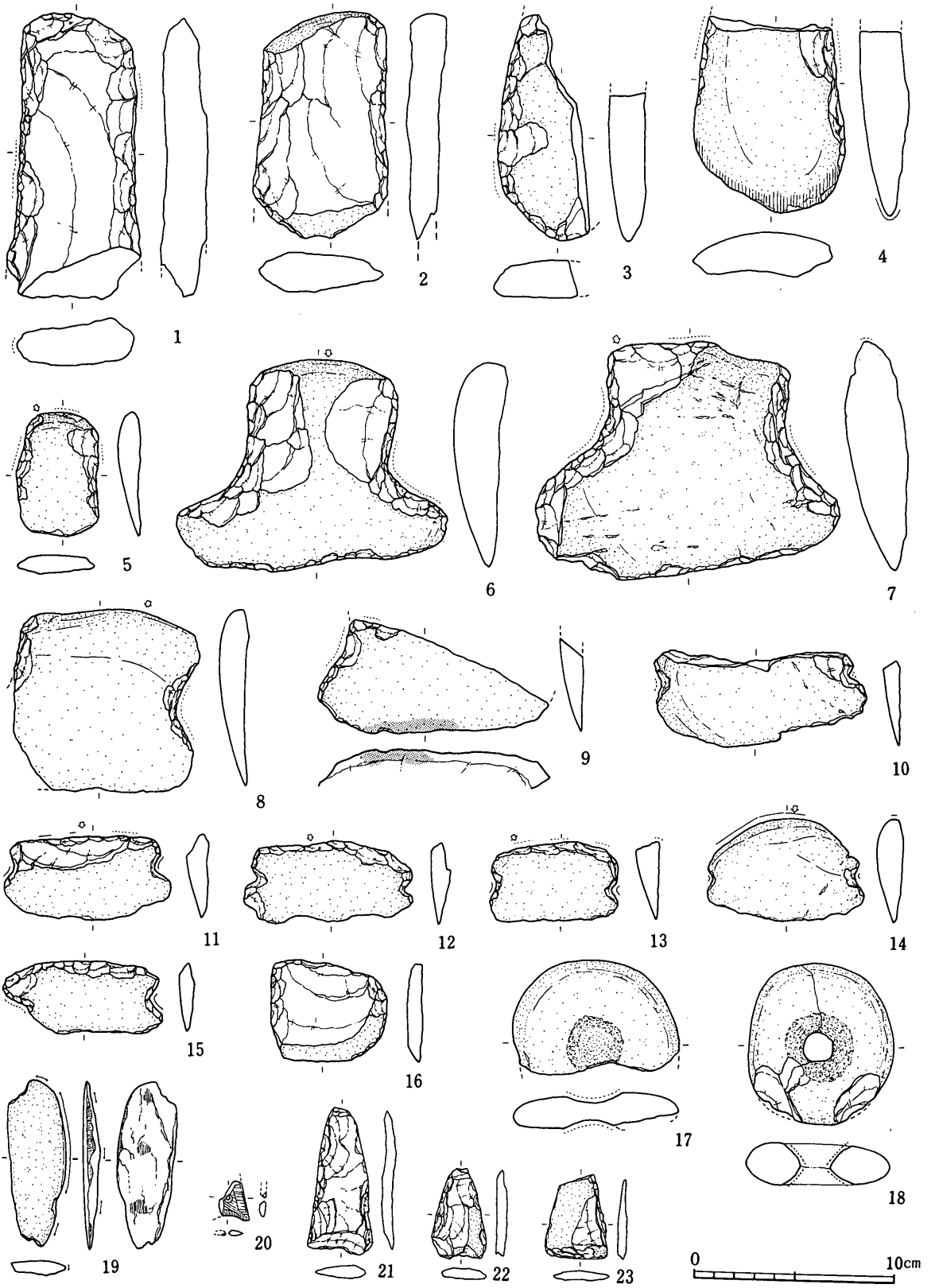
第29图 TAN·KUR 59号住居址(1~3)、77号住居址(4·5)、5号住居址(6~9)出土石器(1/3)



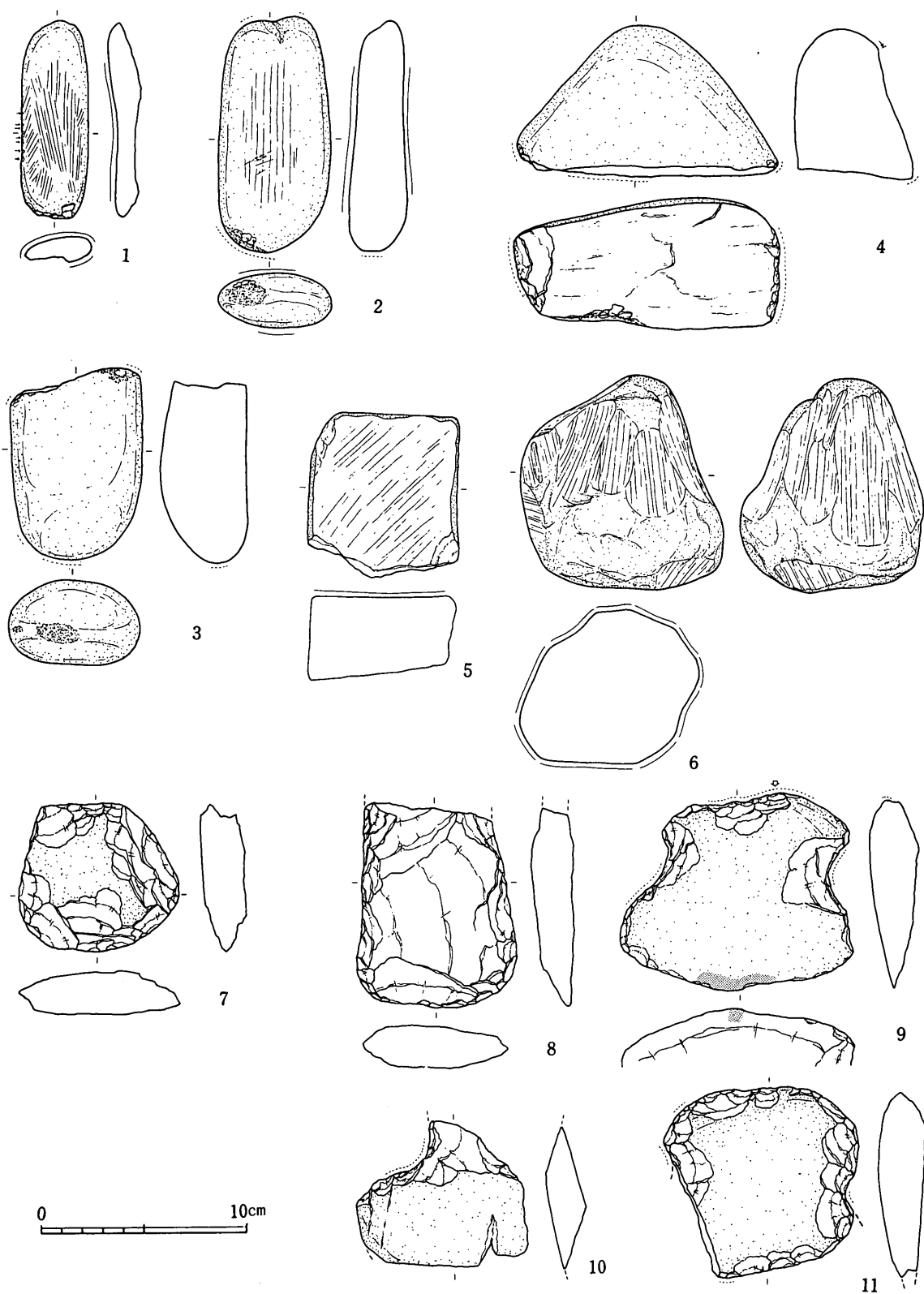
第30図 TAN・KUR 5号住居址(1~13)、7号住居址(14~16)出土石器(1・3、12・13のみ $\frac{1}{2}$)



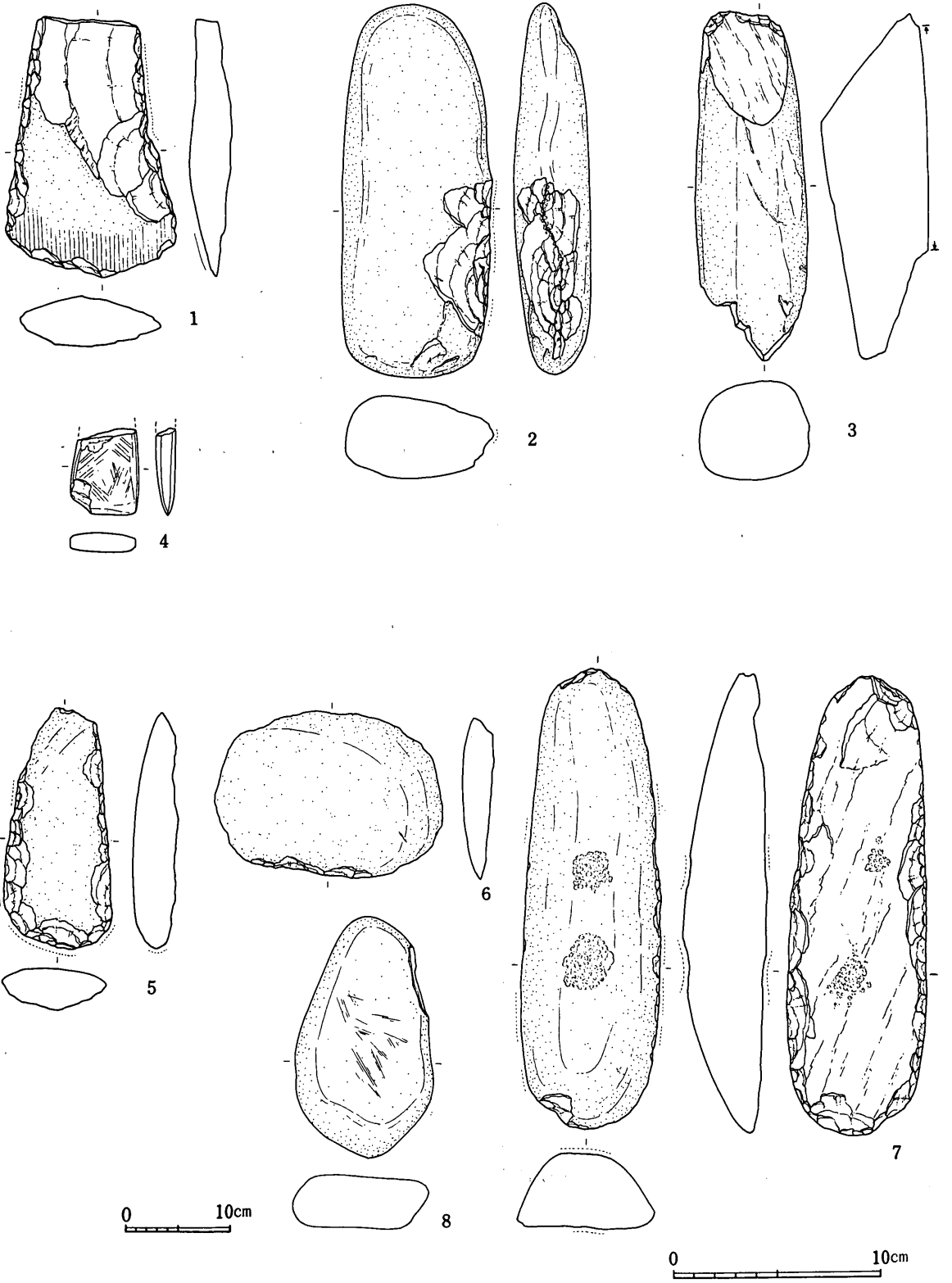
第31図 TAN・KUR 7号住居址出土石器(1、16・17のみを)



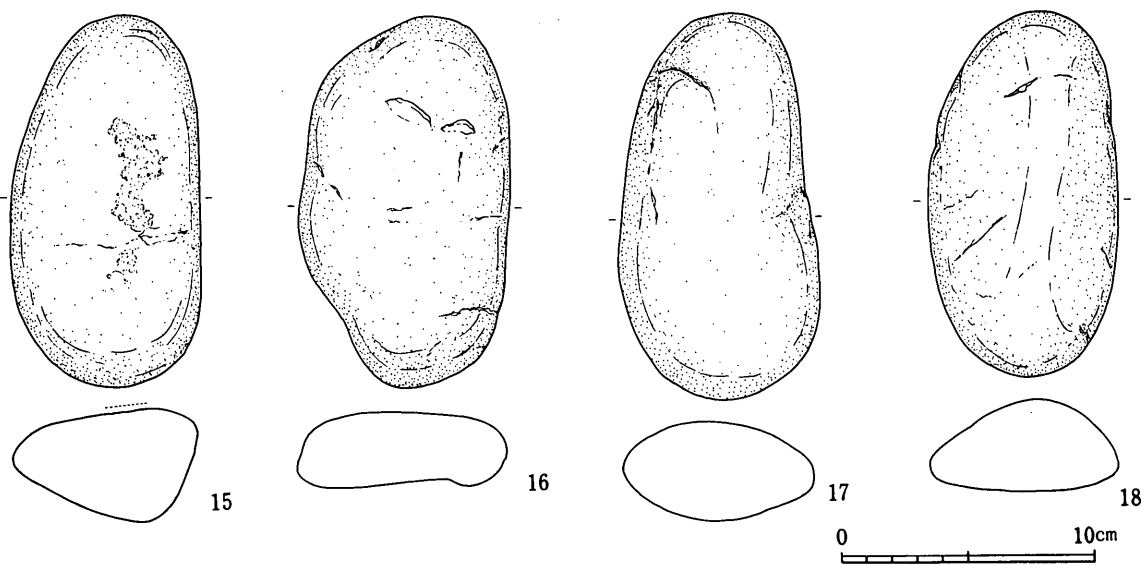
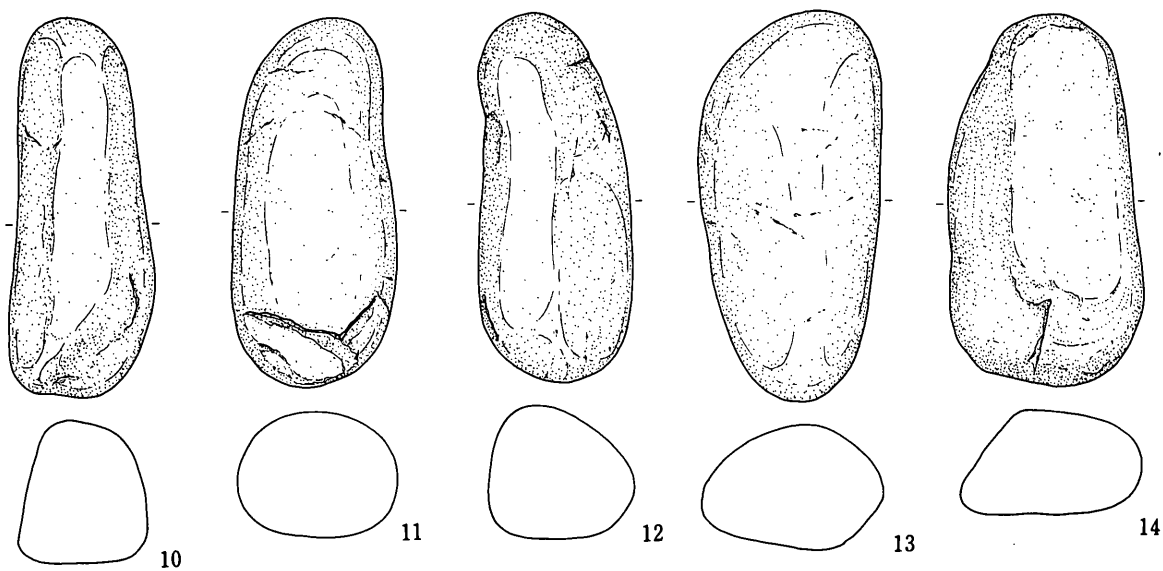
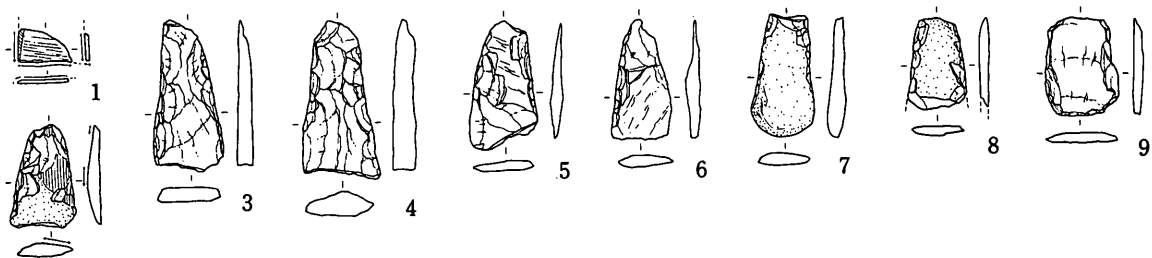
第32图 TAN·KUR 8号住居址出土石器(寸)



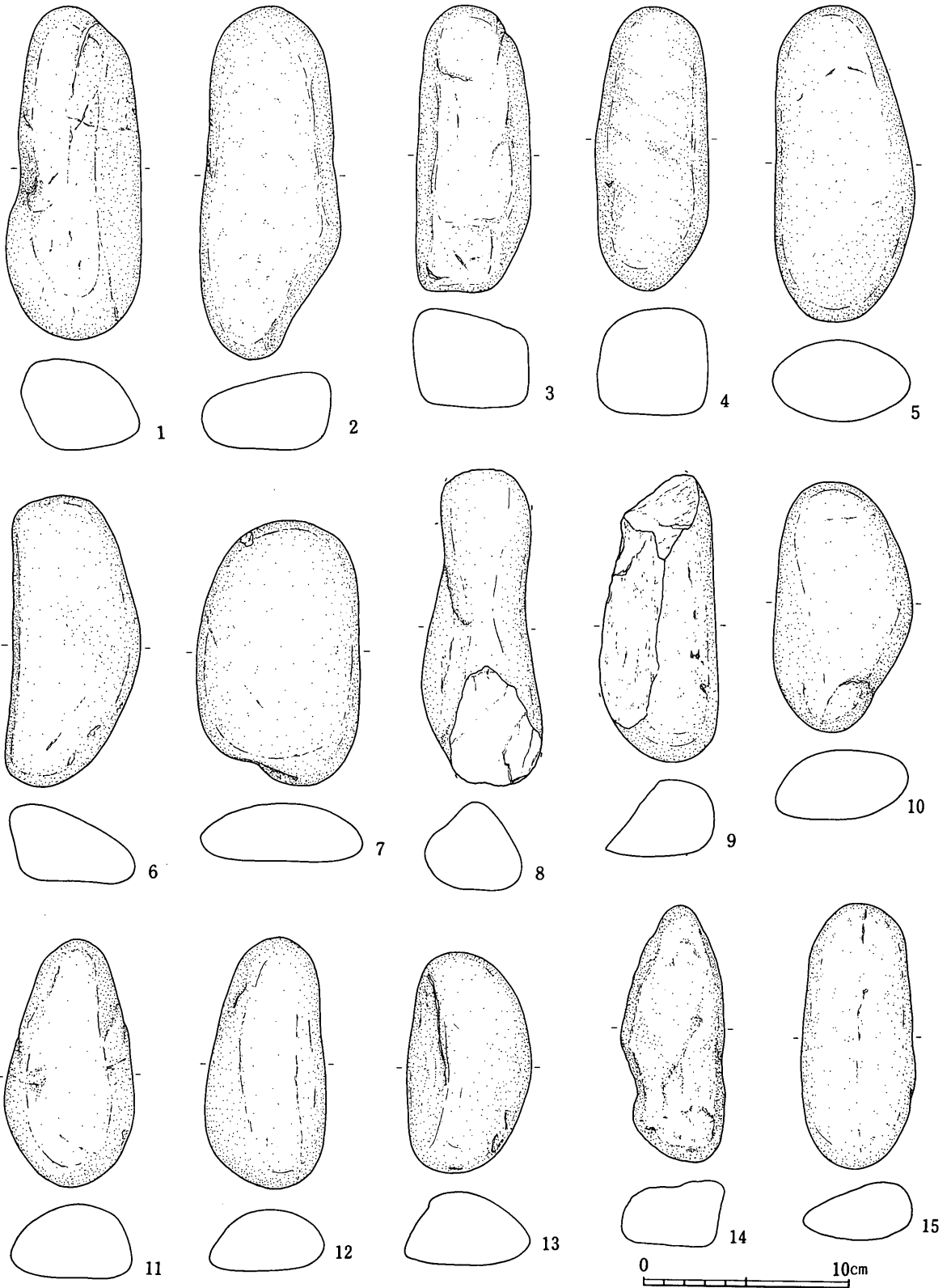
第33図 TAN・KUR 8号住居址(1~6)、12号住居址(7)、
17号住居址(8~11)出土石器(寸、5・6のみ寸)



第34図 TAN・KUR 16号住居址(1~4)、23号住居址(5~8)出土石器(5、8のみ)



第35图 TAN·KUR 23号住居址(1~9)、75号住居址(10~18)出土石器(1/3)



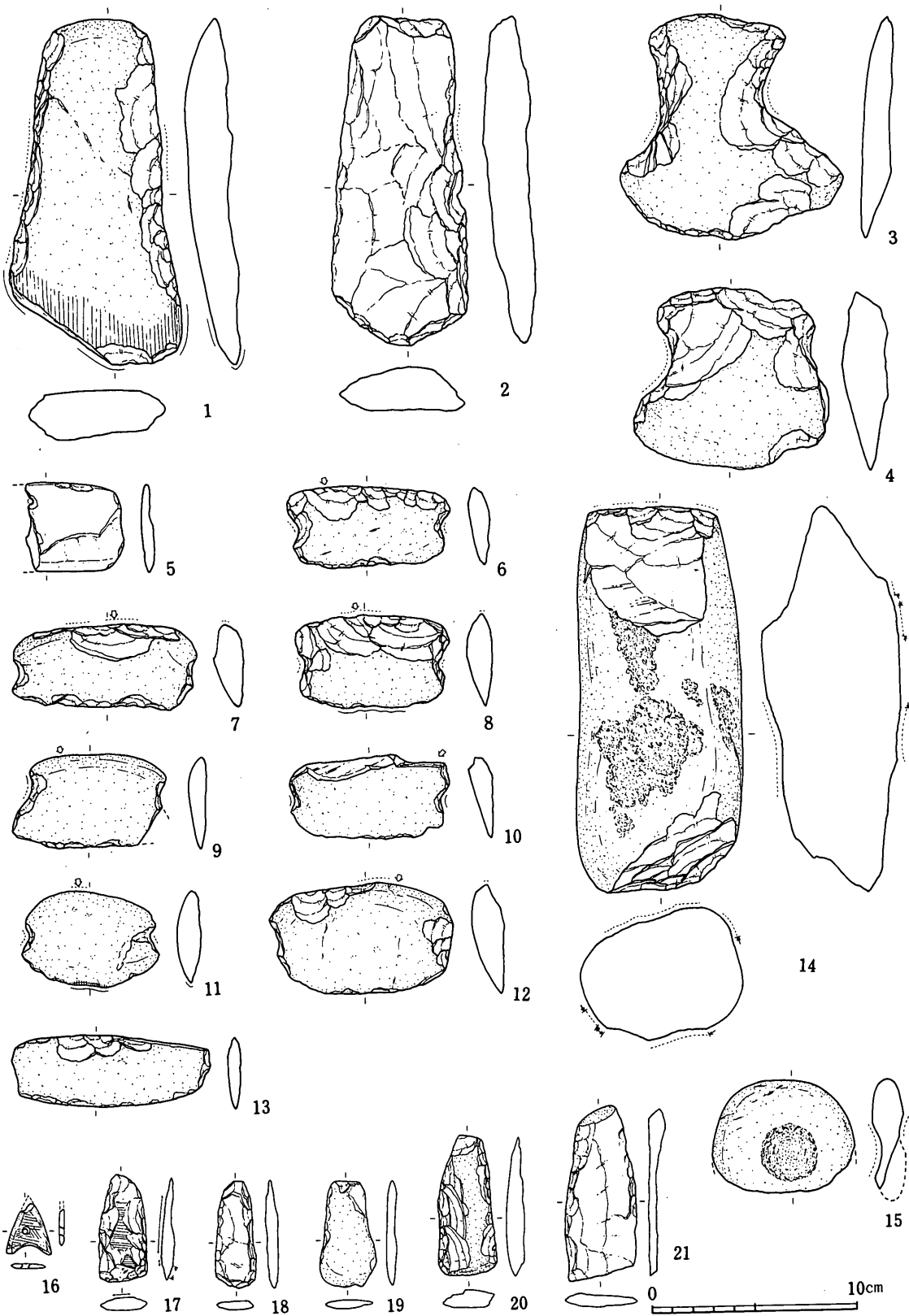
第36図 TAN・KUR 75号住居址出土石器(1/3)



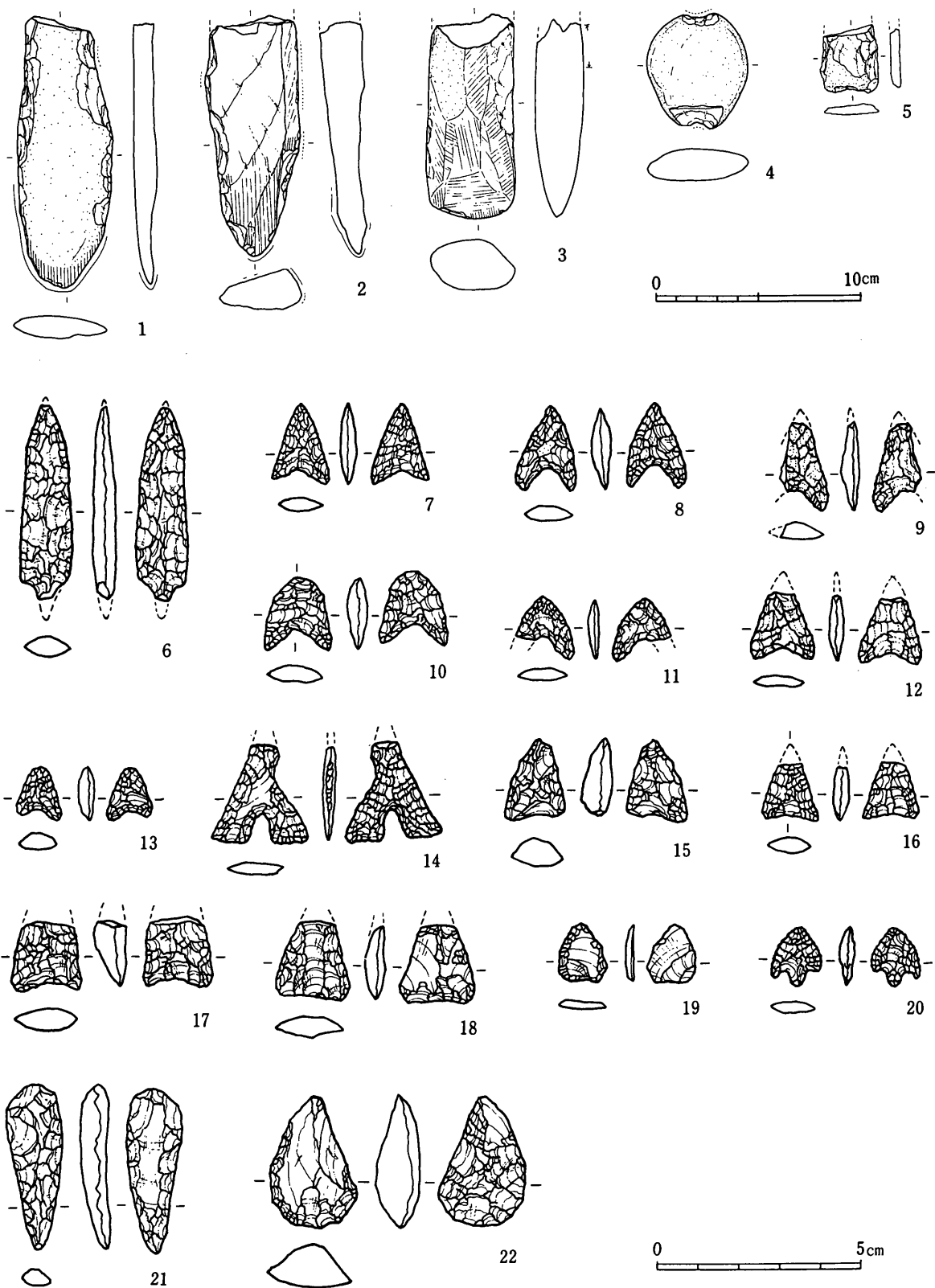
第37图 TAN·KUR 75号住居址(1~6)、90号住居址(7·8)、溝址15(9·10)出土石器(1/2)



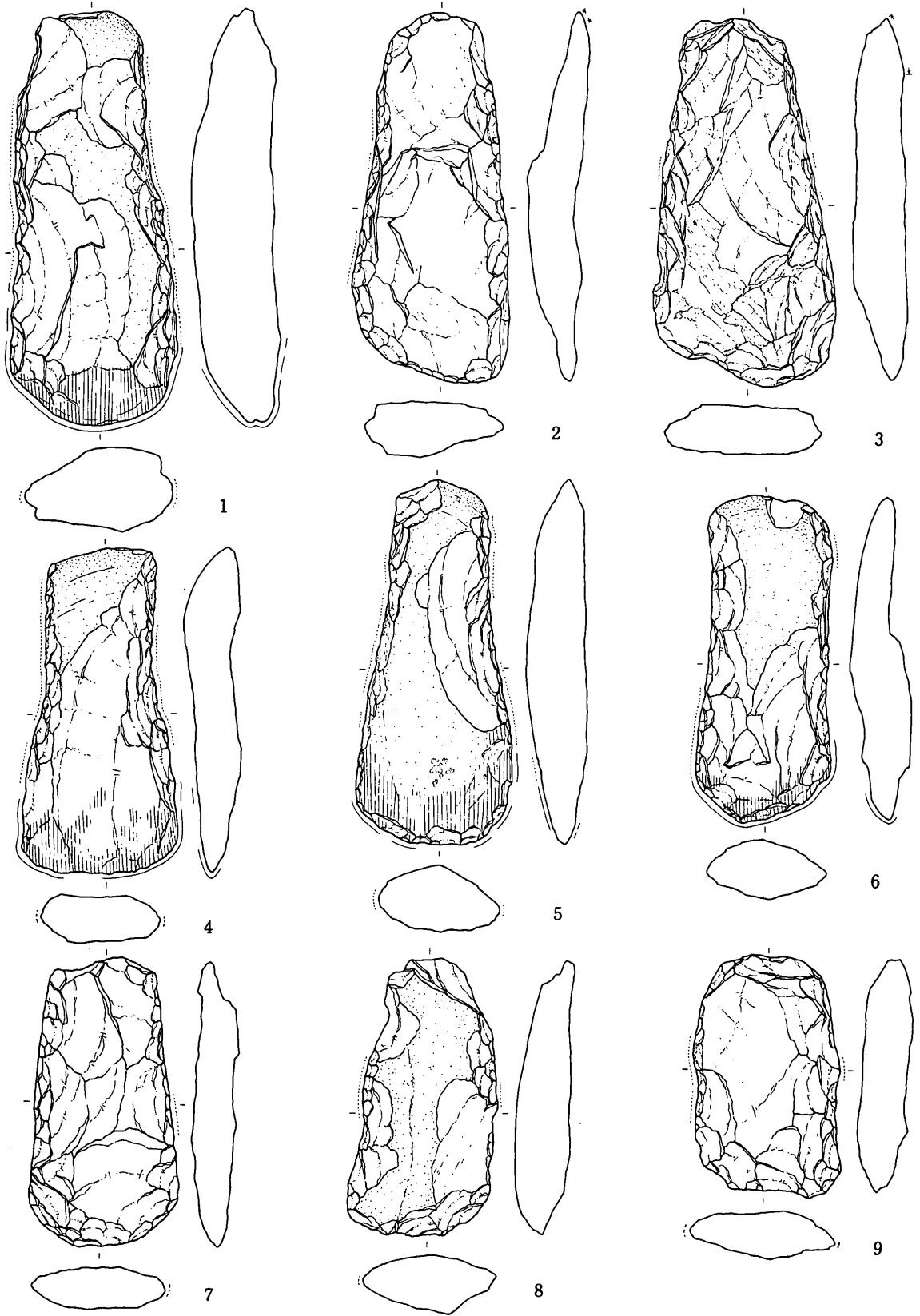
第38图 TAN·KUR 沟址15(1~3)、沟址14(4~12)、沟址18(13·14)出土石器(1/3)



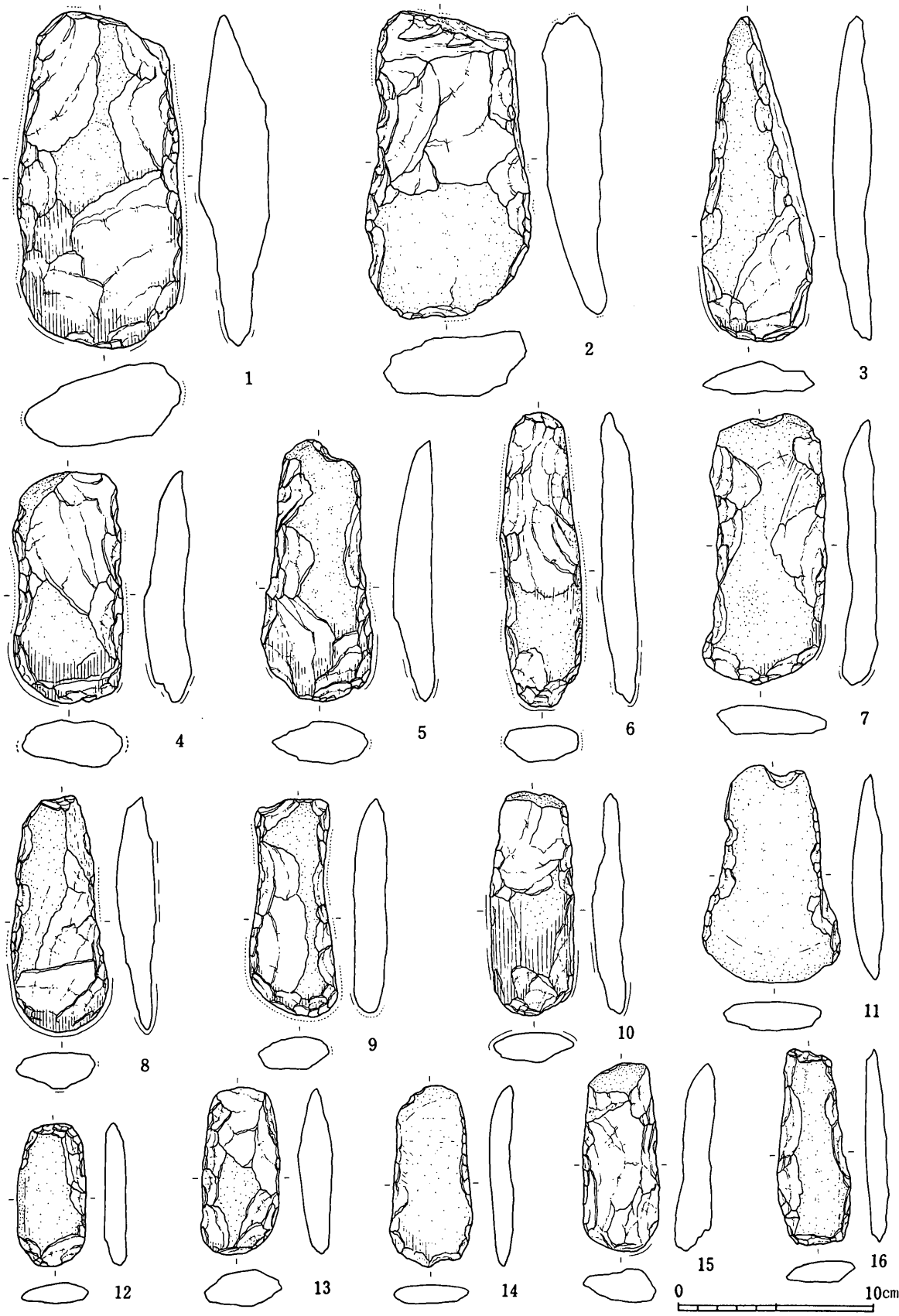
第39图 TAN·KUR 溝址12出土石器(半)



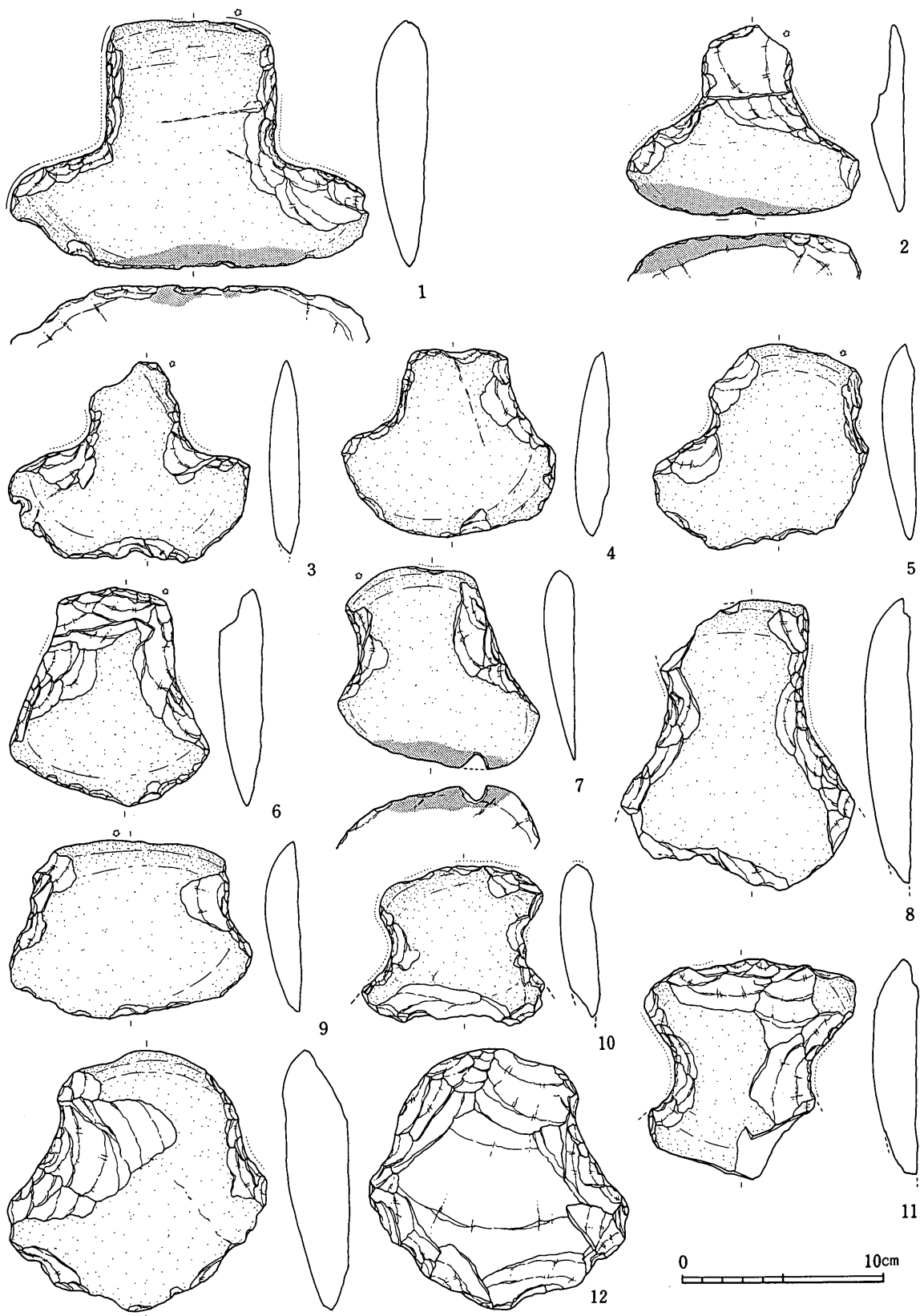
第40图 TAN·KUR 方形周溝墓3(1~5)、遺構外(6~22)出土石器(1~5 $\frac{1}{2}$ 、6~22 $\frac{2}{3}$)



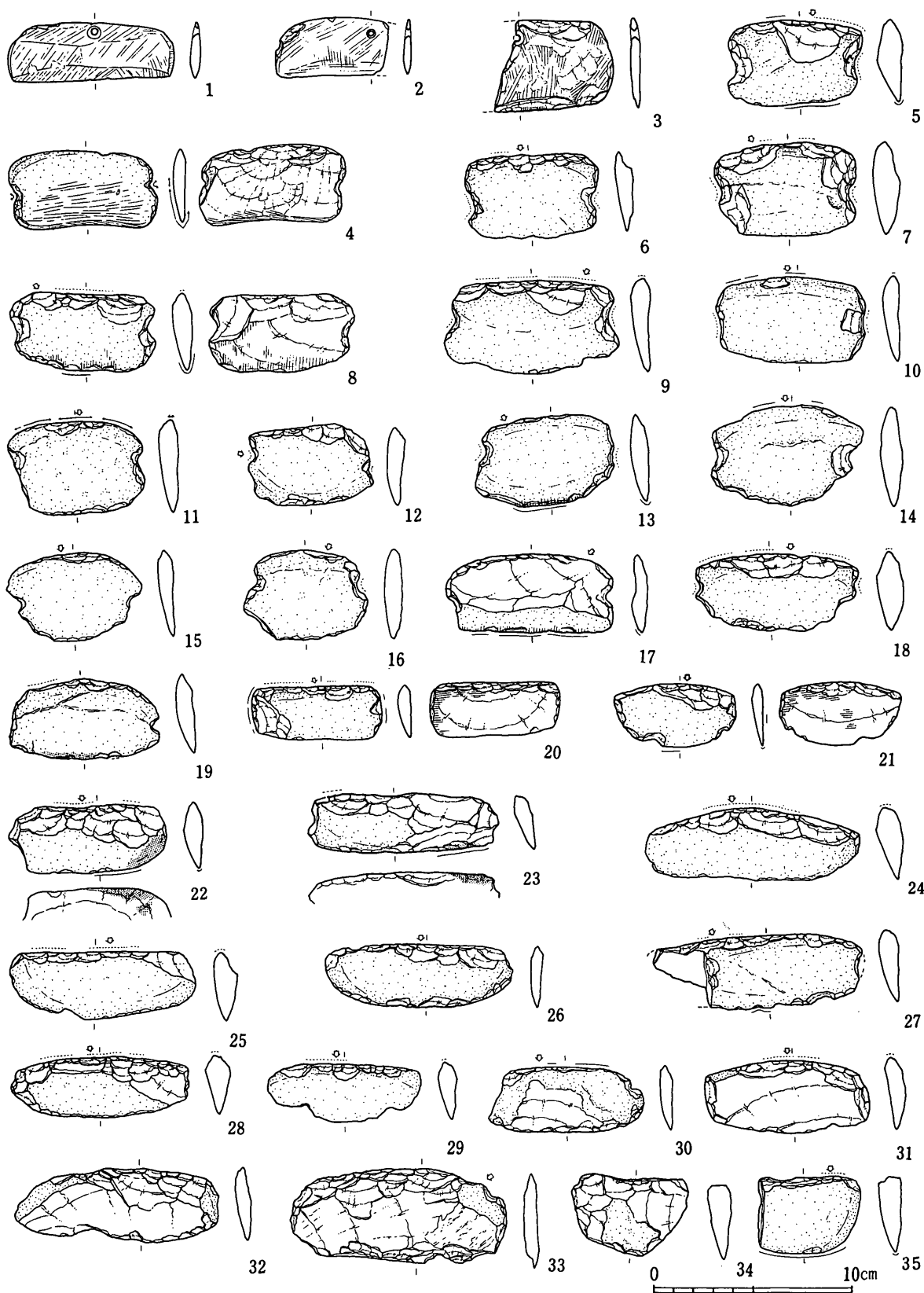
第41图 TAN·KUR 遺構外出土石器(1/3)



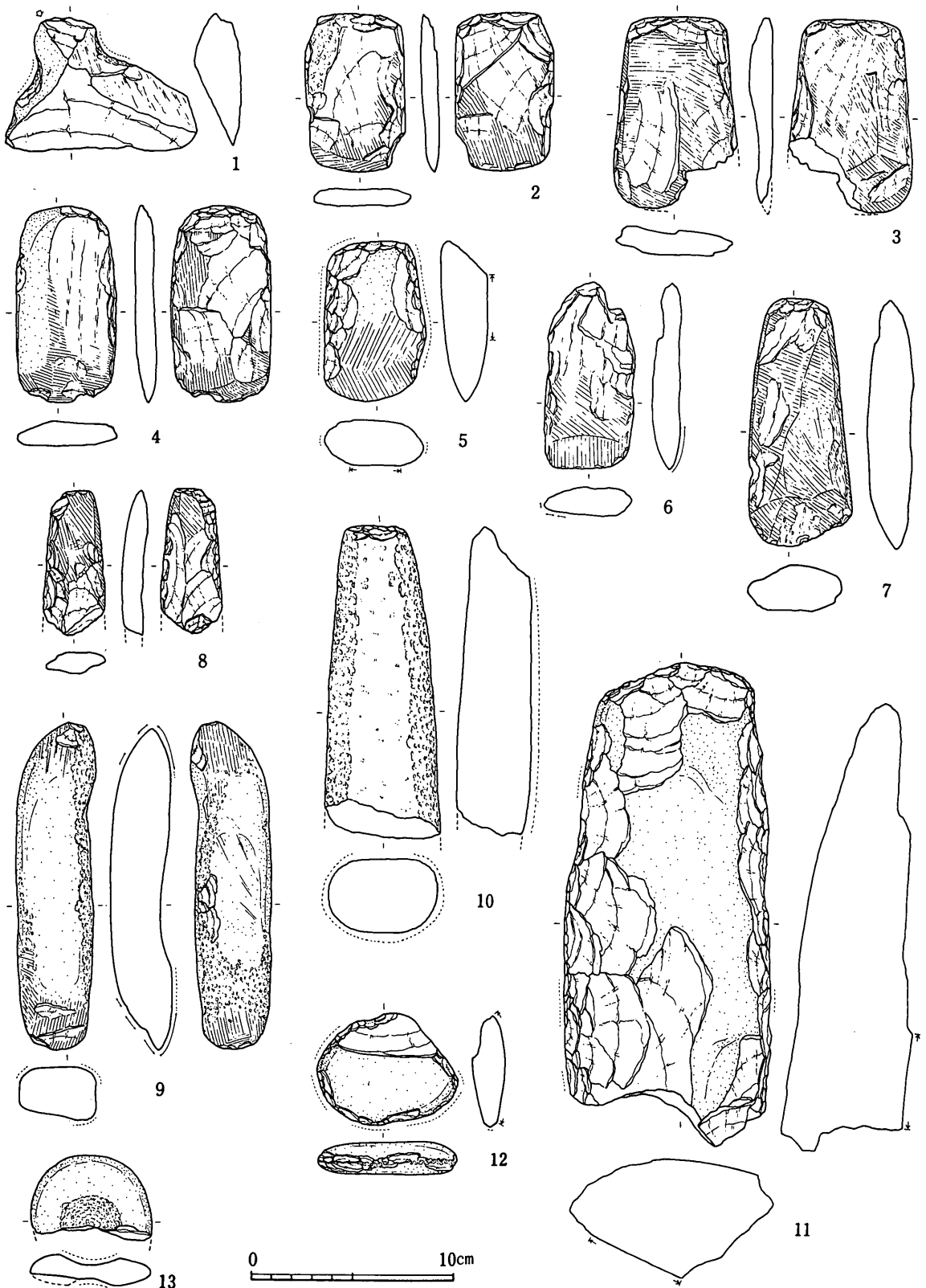
第42図 TAN·KUR 遺構外出土石器(1/3)



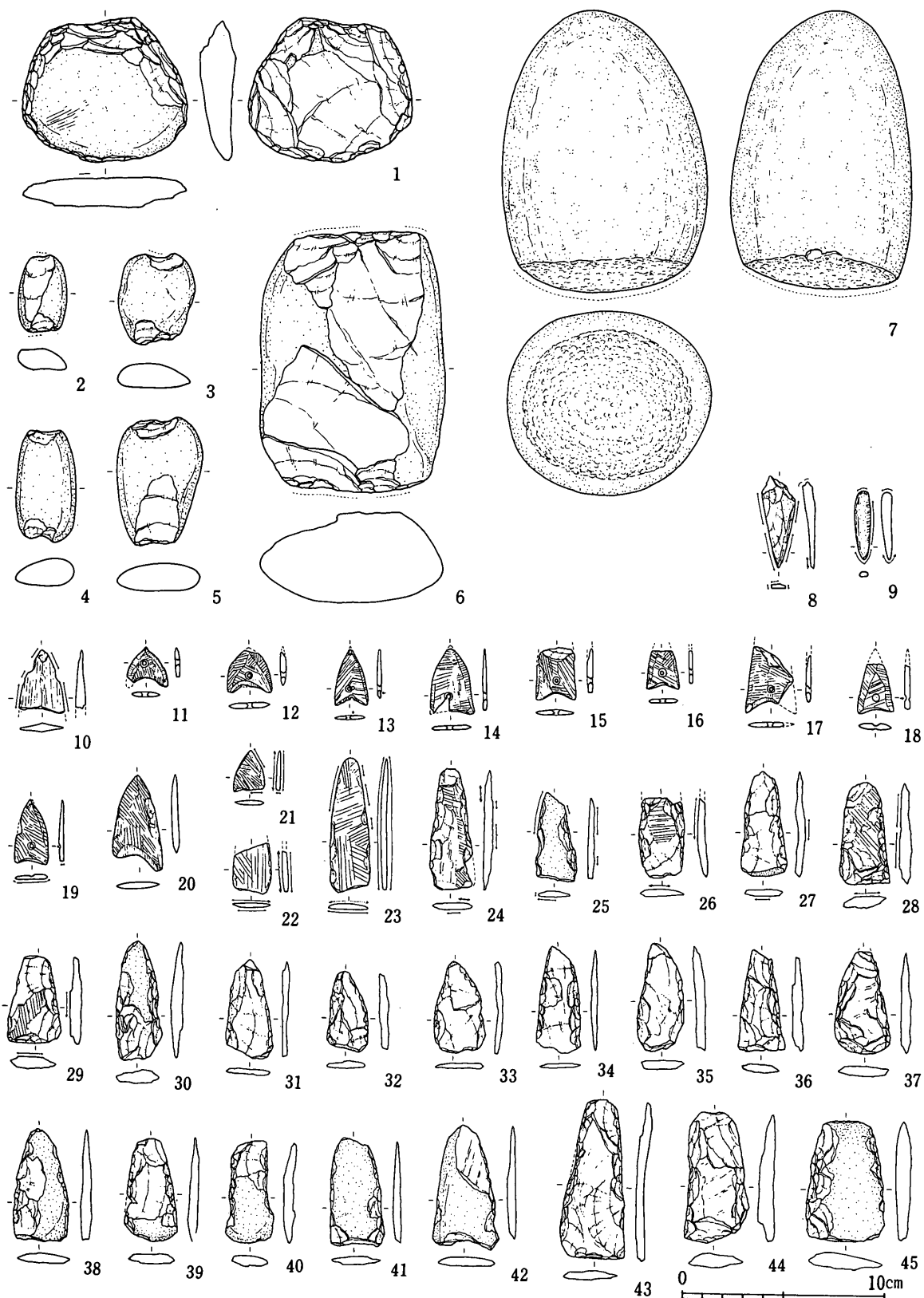
第43図 TAN・KUR 遺構外出土石器(1/3)



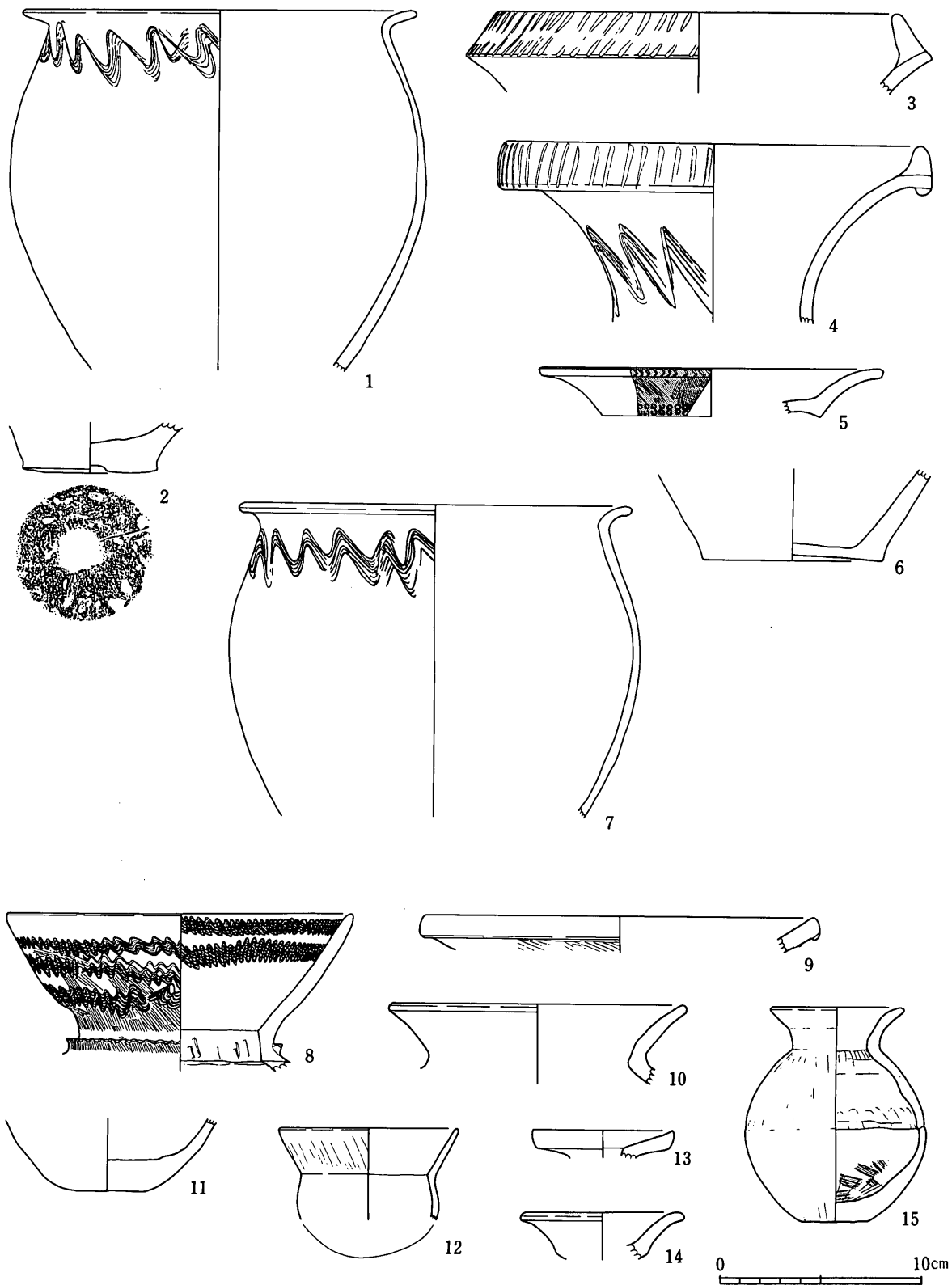
第44図 TAN·KUR 遺構外出土石器(半)



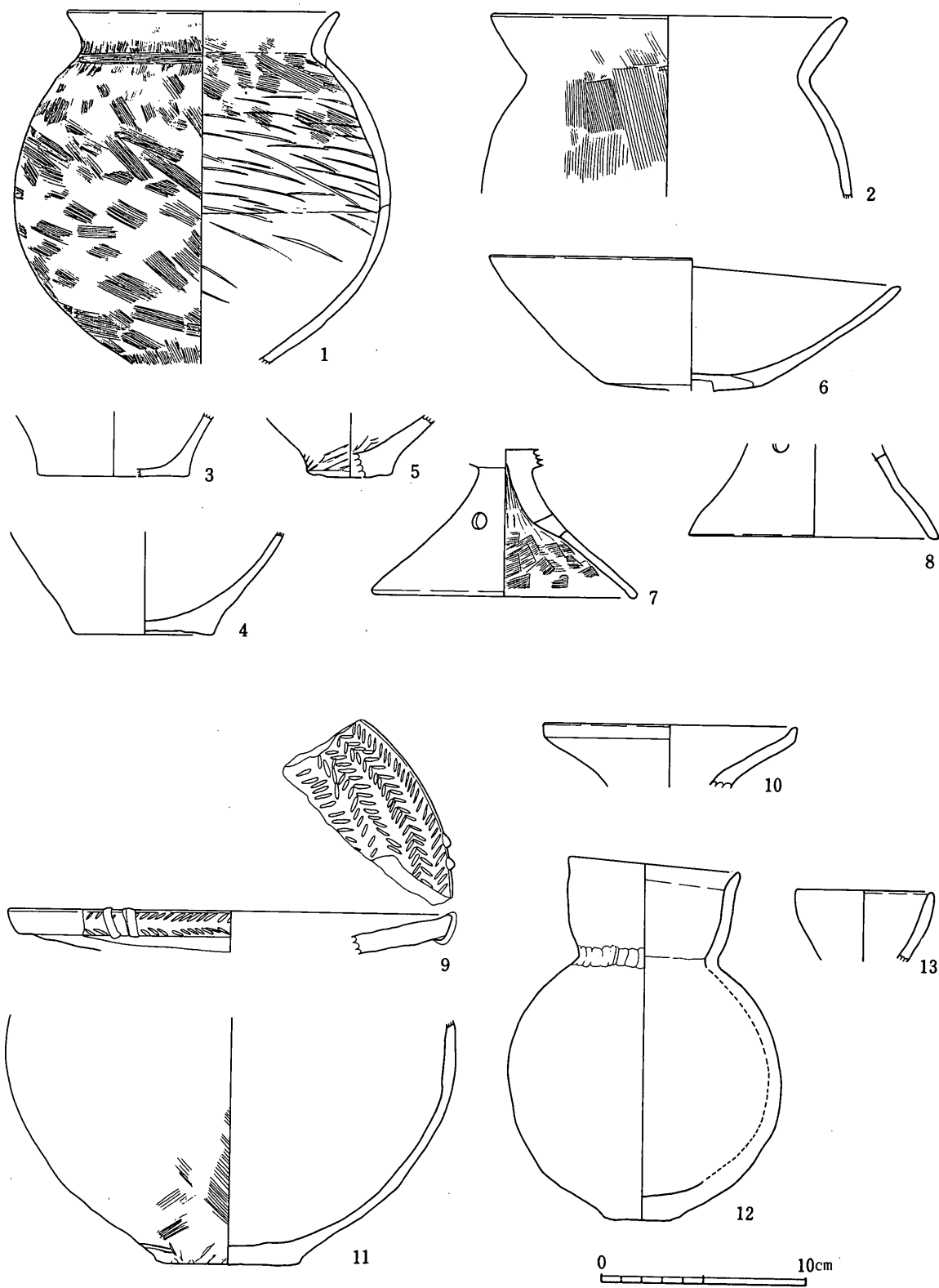
第45图 TAN·KUR 遺構外出土石器(1/3)



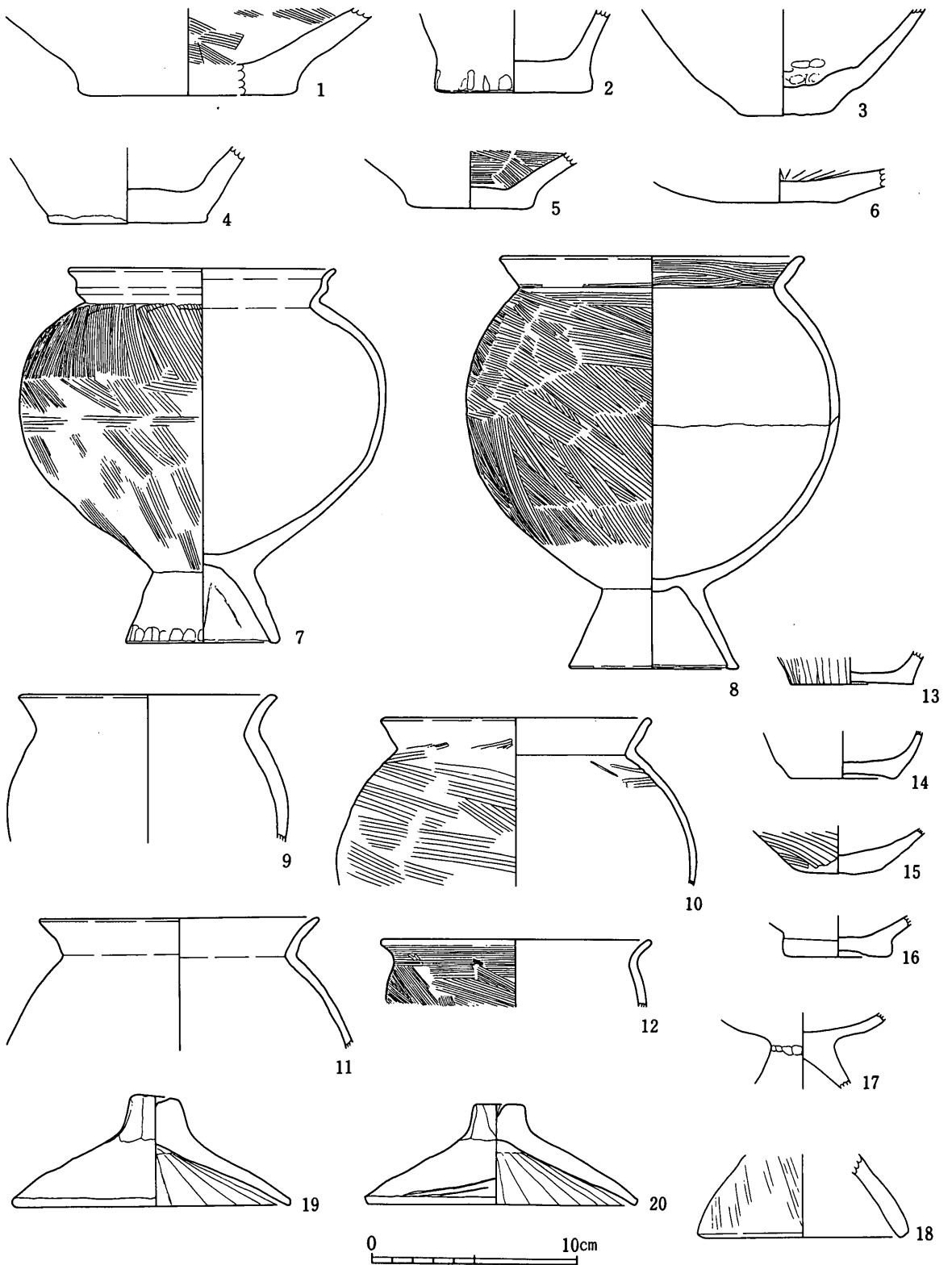
第46图 TAN·KUR 遺構外出土石器(1/3)



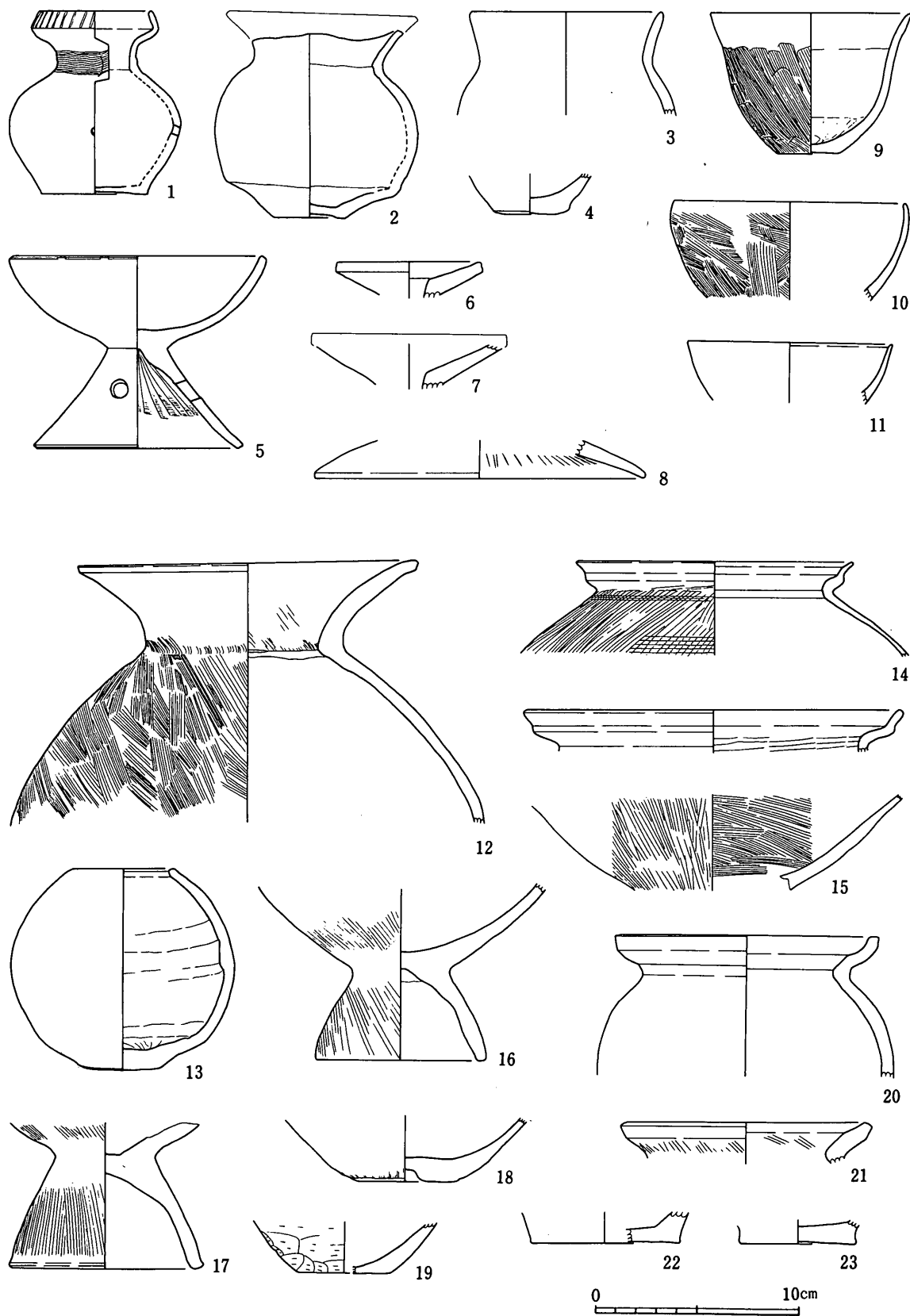
第47图 GOA 1号住居址(1·2)、2号住居址(3~7)、3号住居址(8~15)出土土器(1/2)



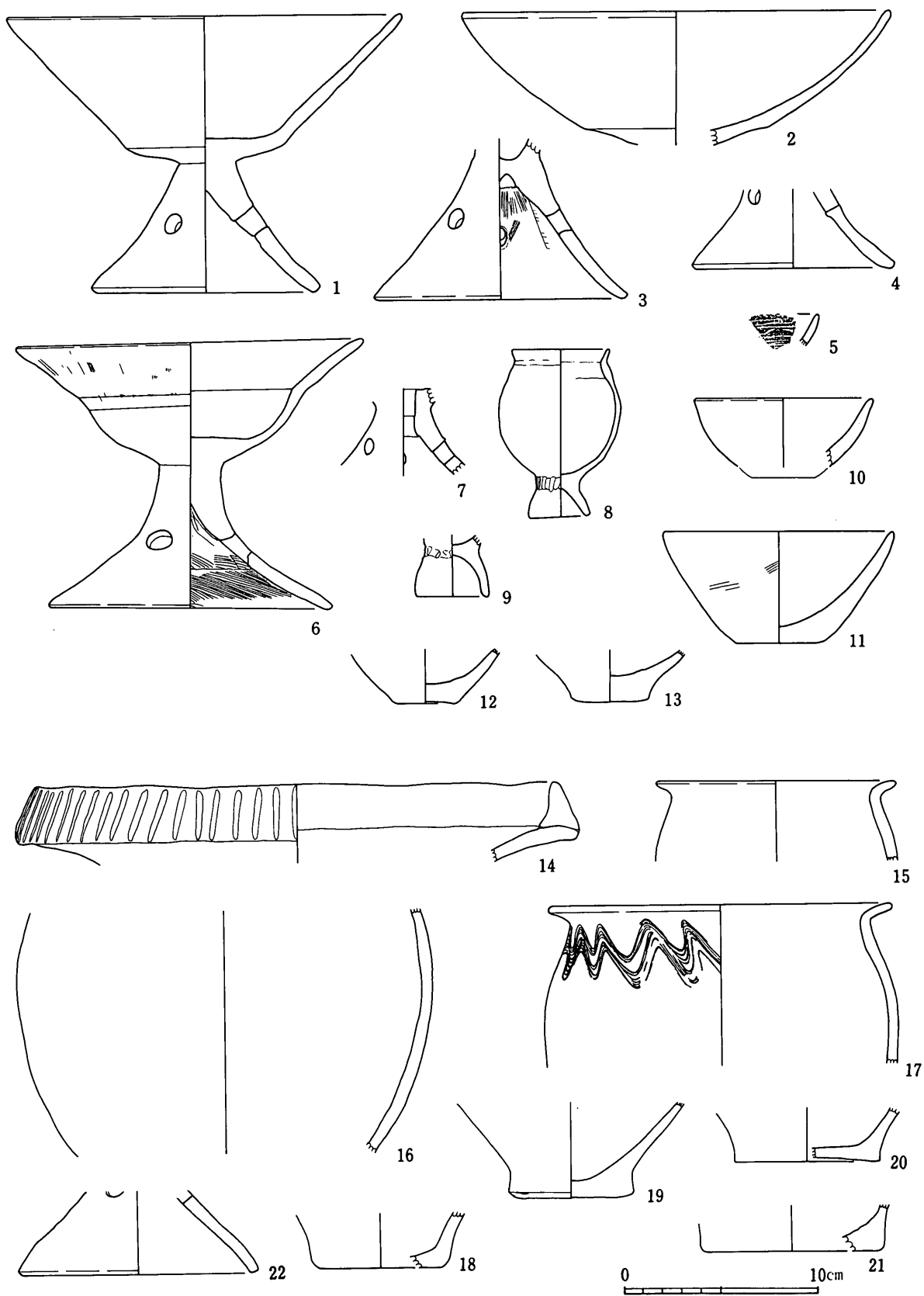
第48图 GOA 3号住居址(1~8)、4号住居址(9~13)出土土器(1/3)



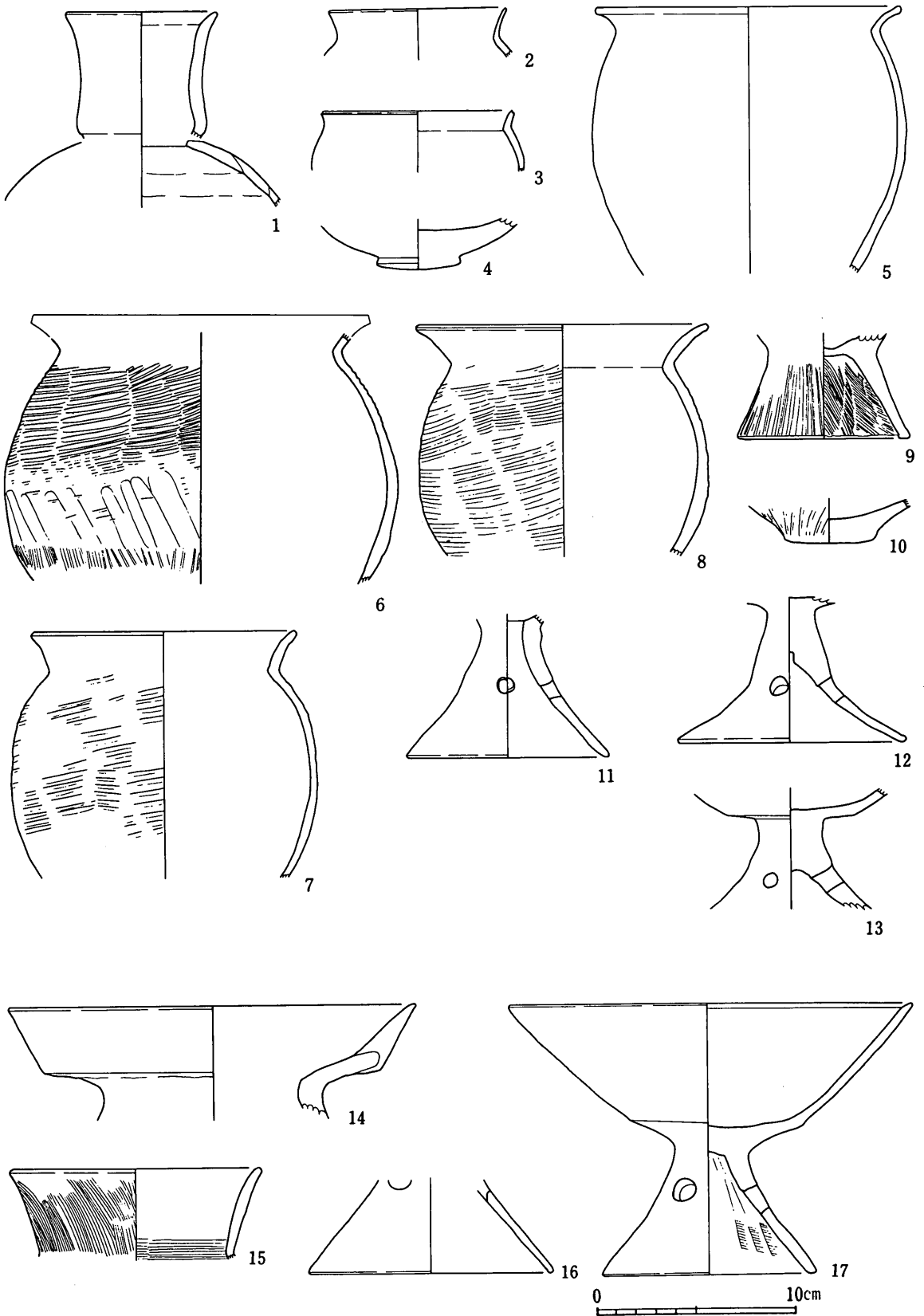
第49图 GOA 4号住居址出土土器(1/3)



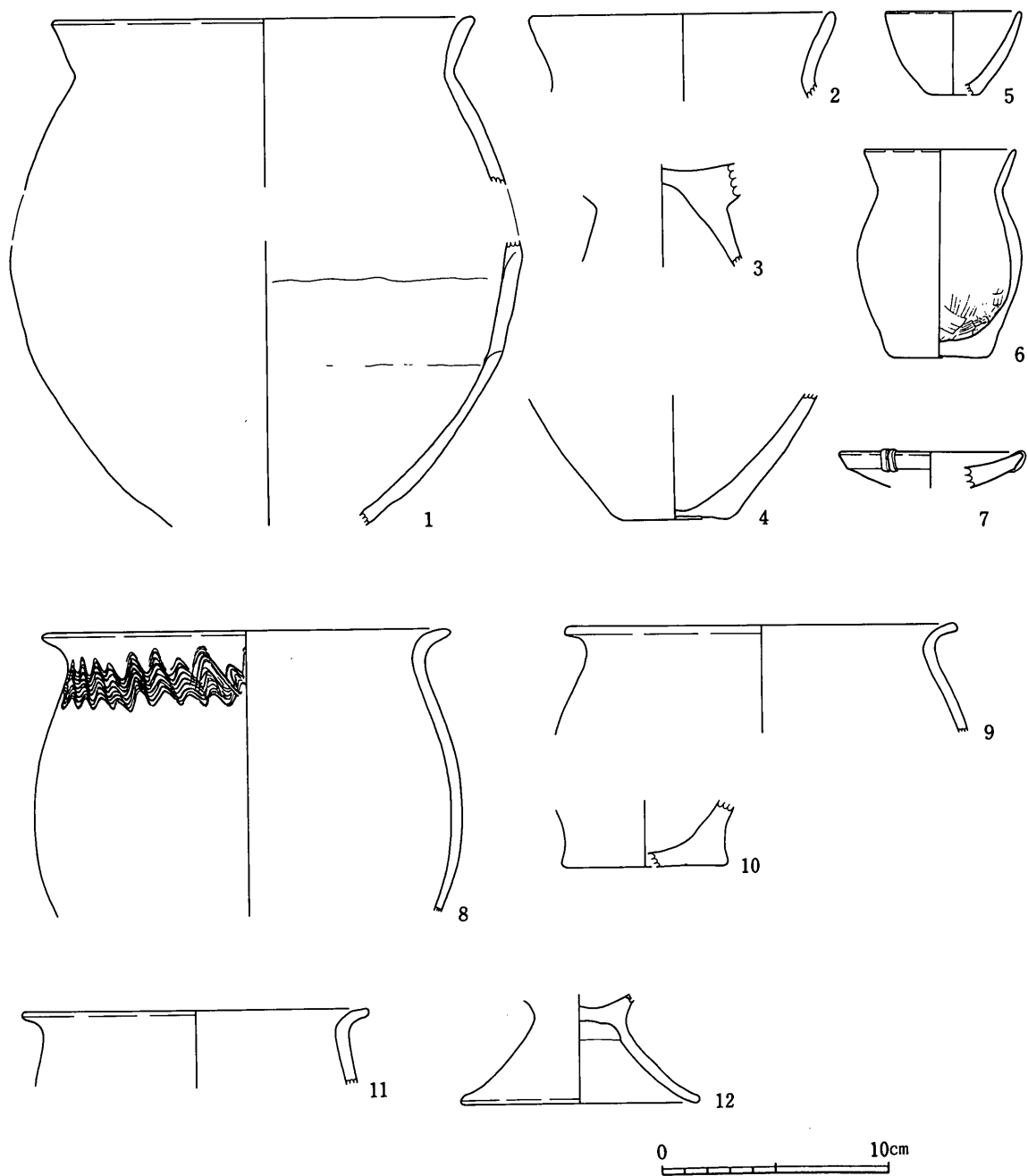
第50图 GOA 4号住居址(1~11)、5号住居址(12~23)出土土器(1/3)



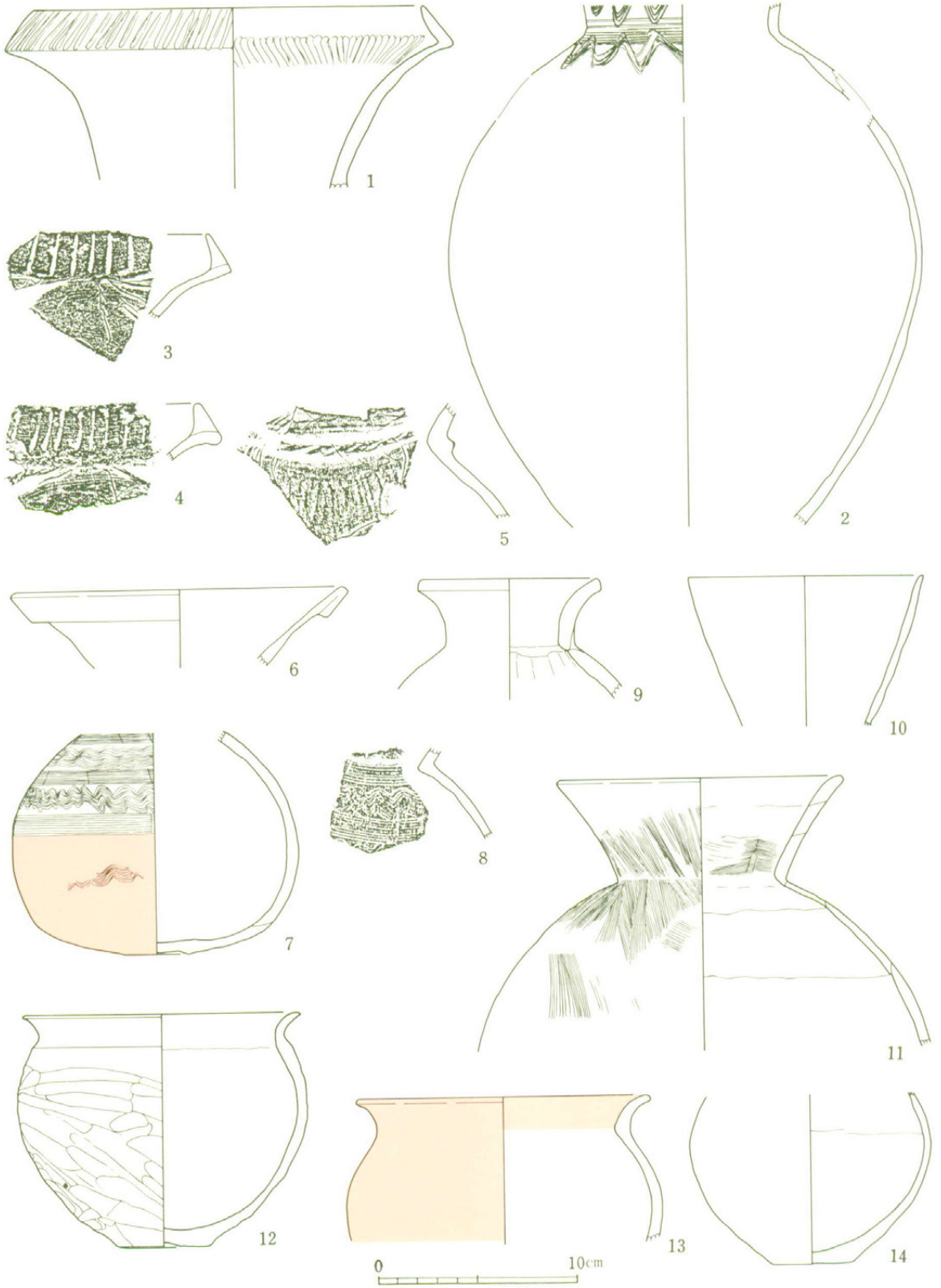
第51图 GOA 5号住居址(1~13)、6号住居址(14~22)出土土器(寸)



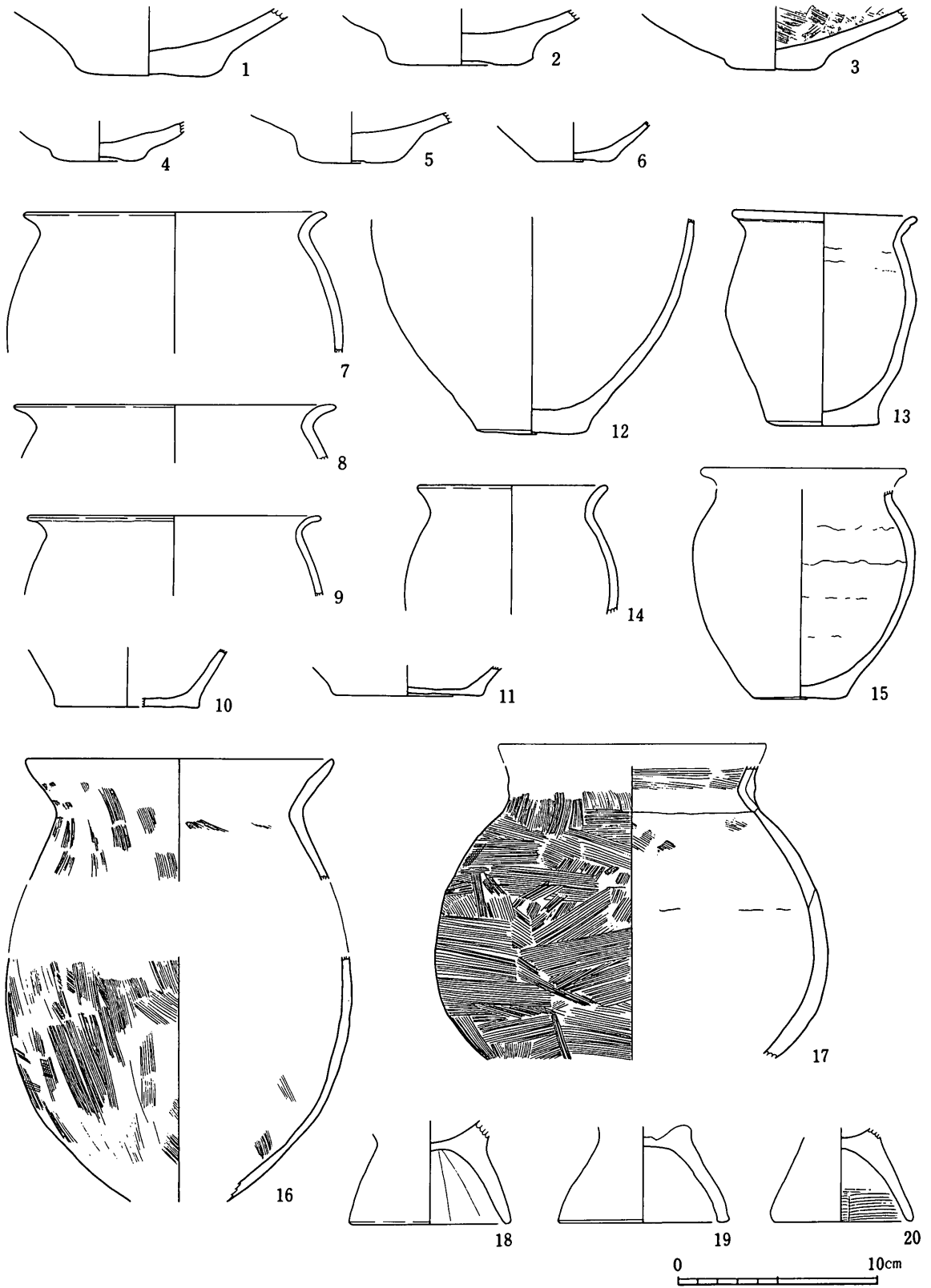
第52图 GOA 7号住居址(1~13)、8号住居址(14~17)出土土器(1/2)



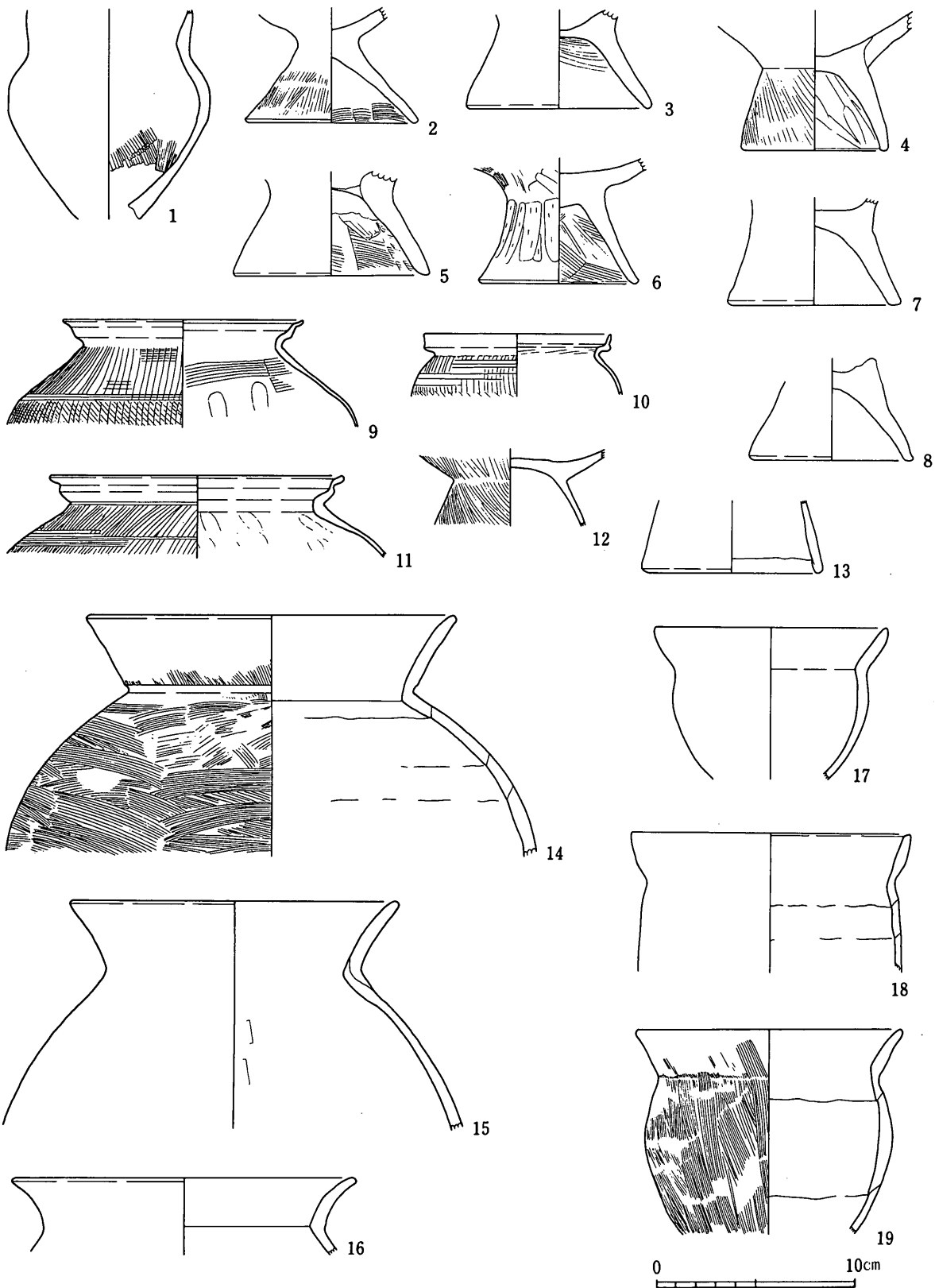
第53图 GOA 8号住居址(1~7)、9号住居址(8~9)、10号住居址(11·12)出土土器(寸)



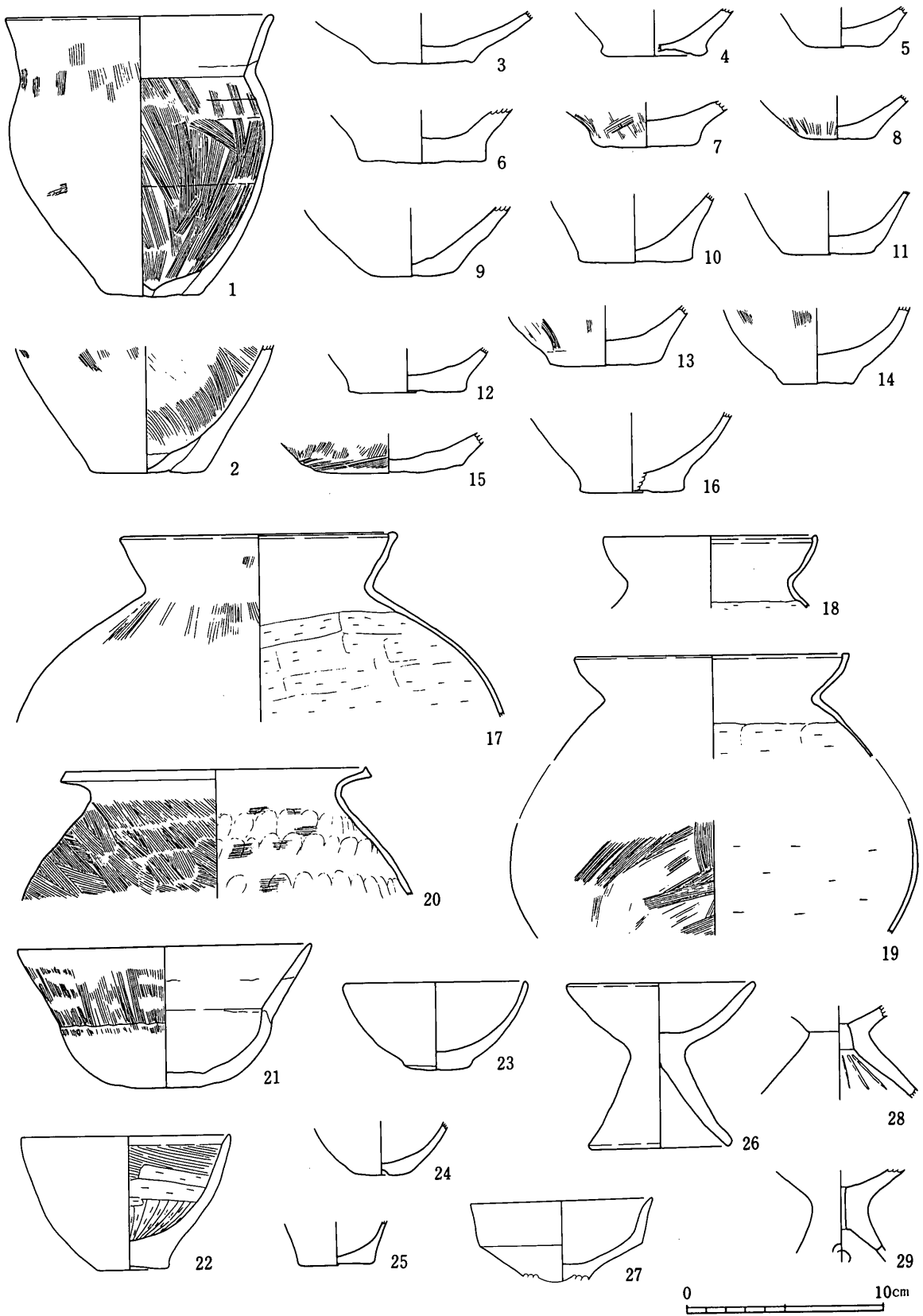
第54图 GOA 沟址 I 出土土器(1/3)



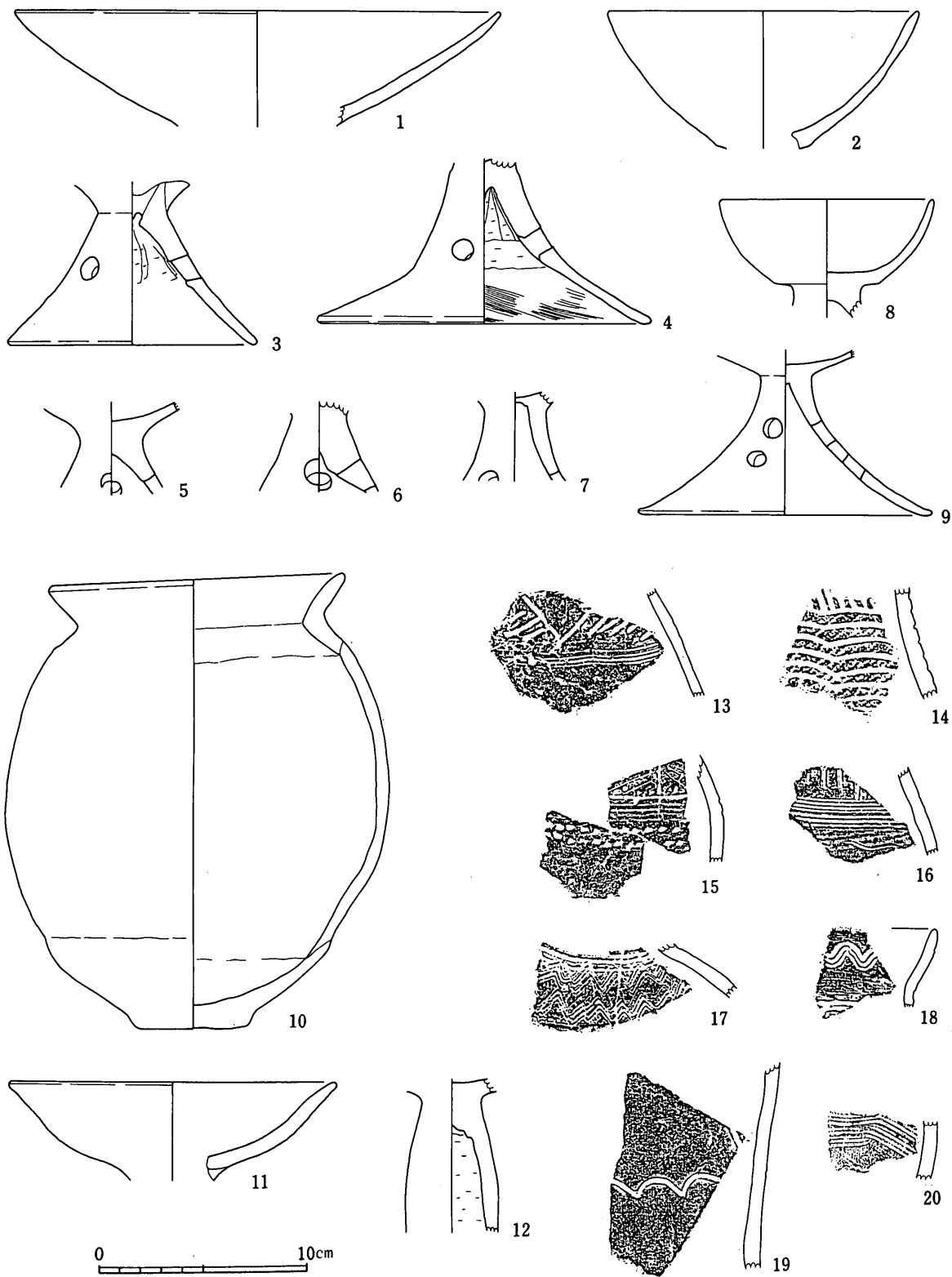
第55图 GOA 沟址 I 出土土器(1/3)



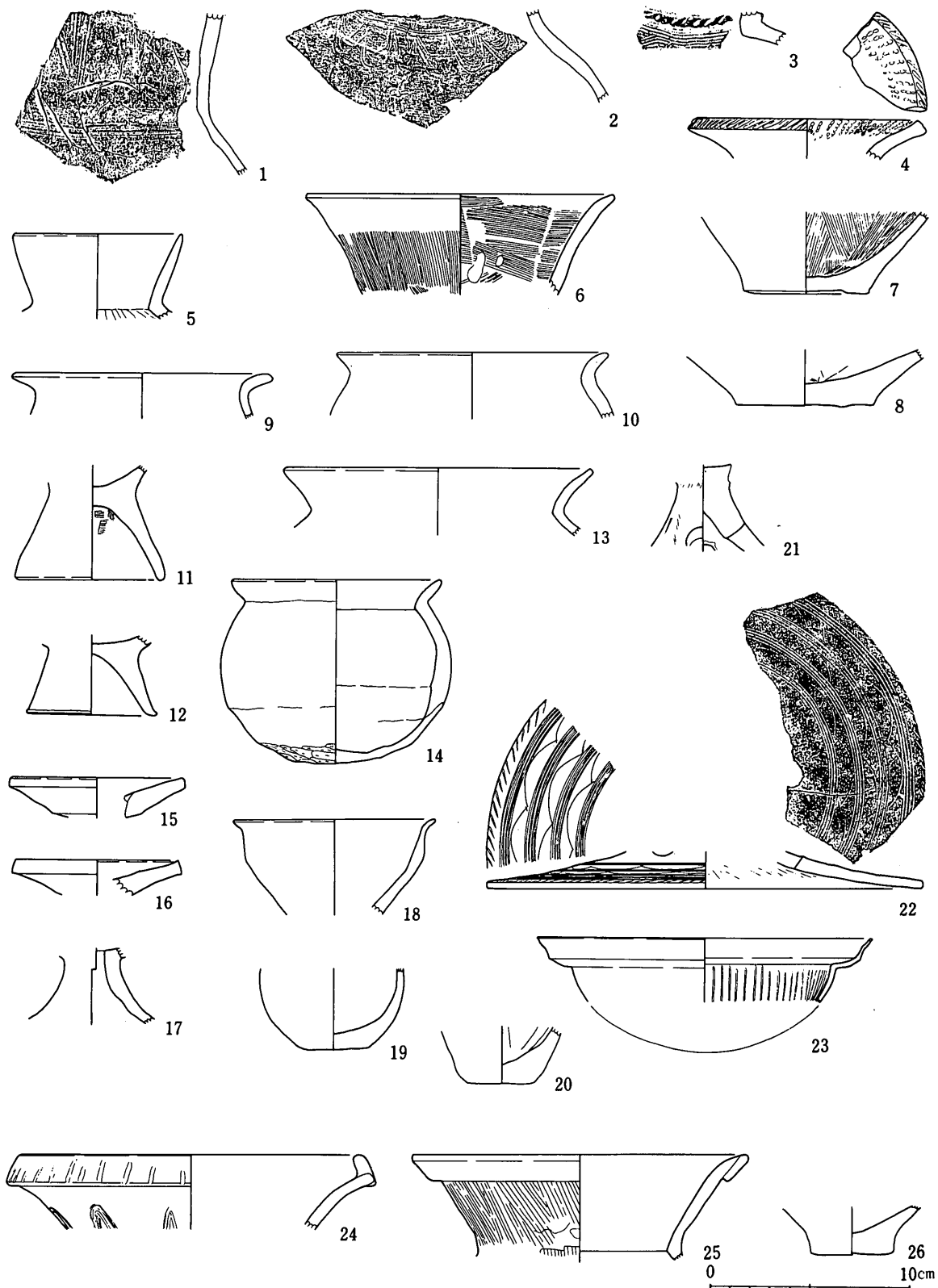
第56图 GOA 沟址 I 出土土器(1/3)



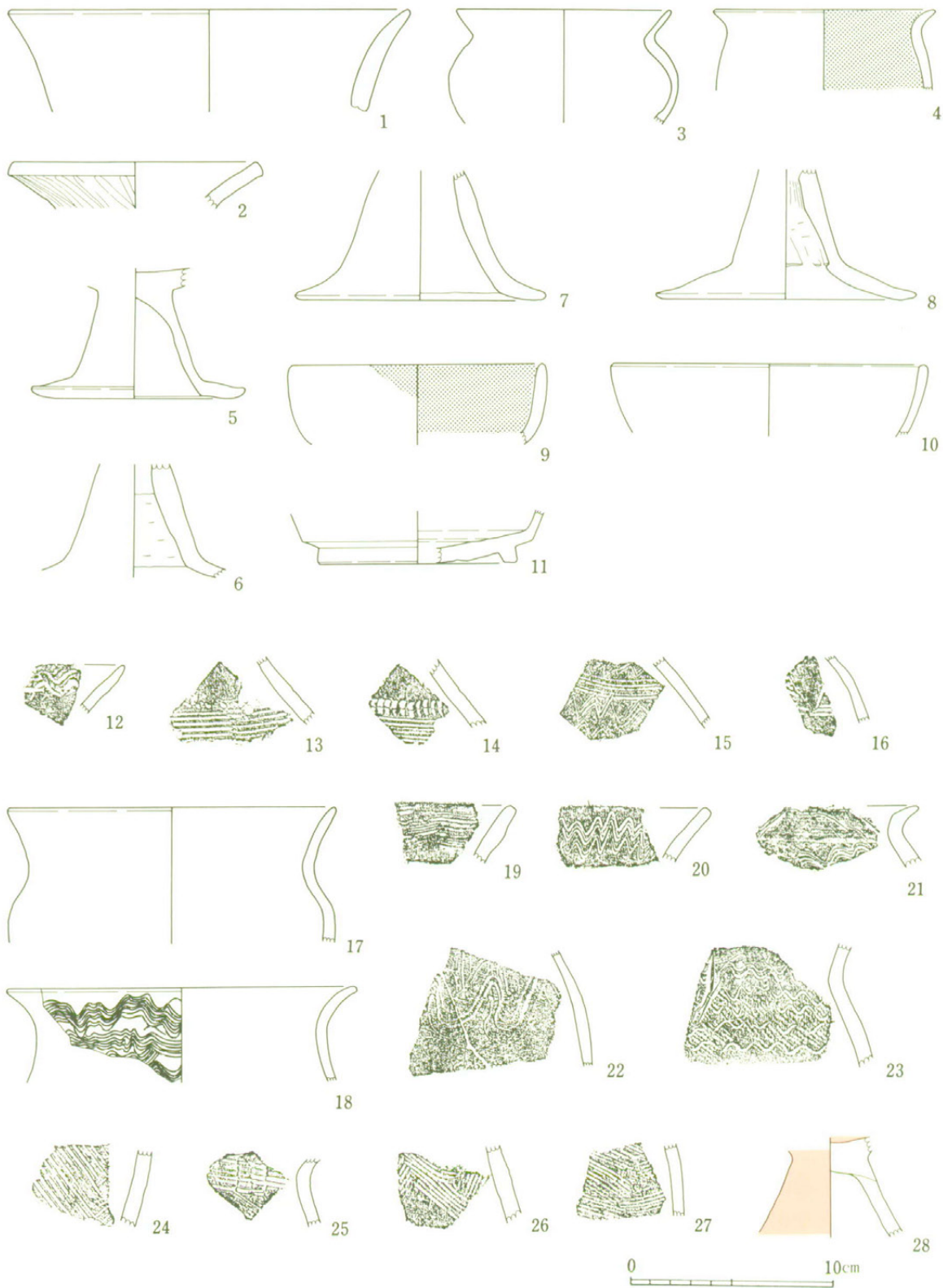
第57图 GOA 沟址 I 出土土器(1/3)



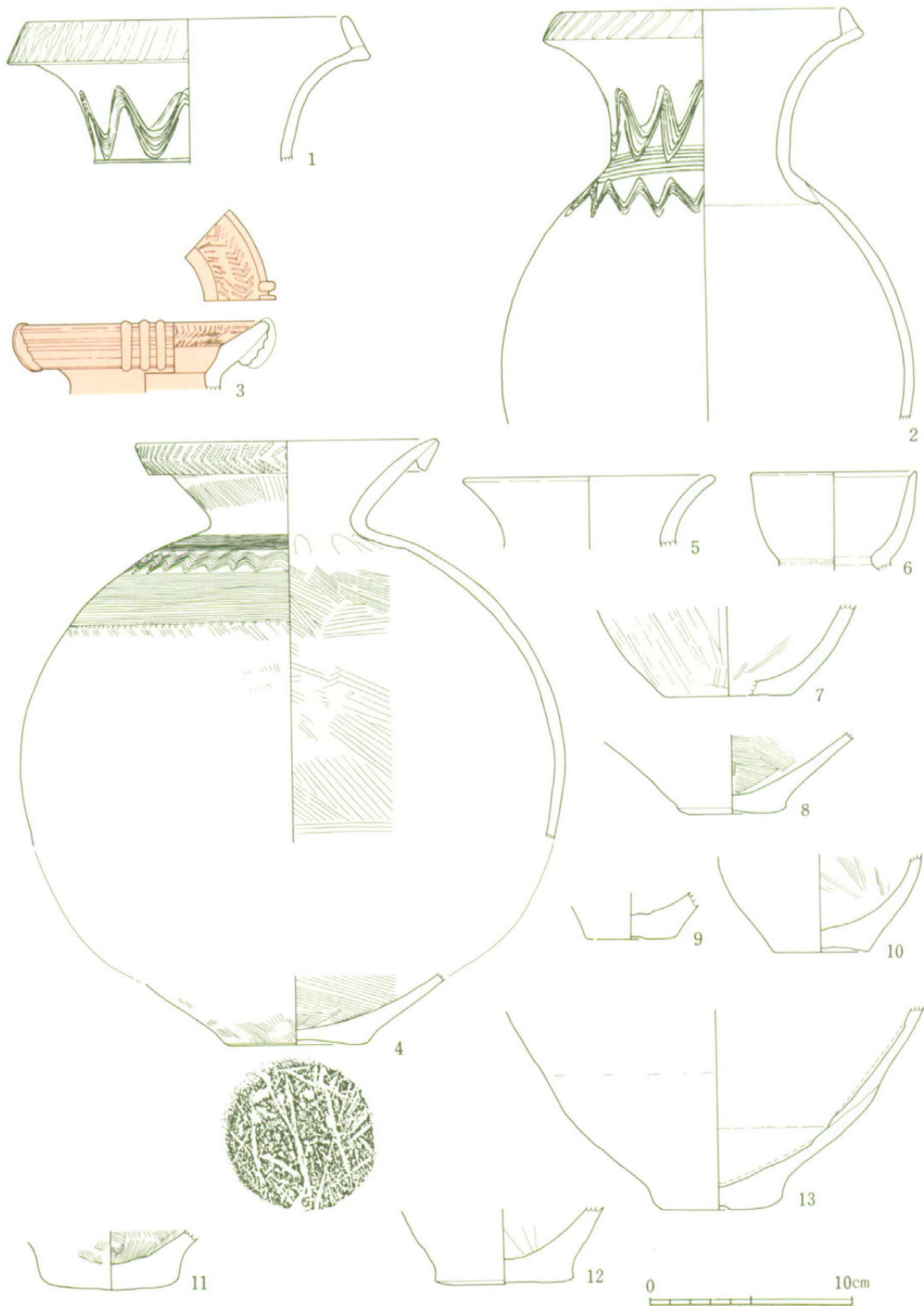
第58図 GOA 溝址 I 下層(1~9)、上層(10~12)出土土器及び弥生土器(13~20)(寸)



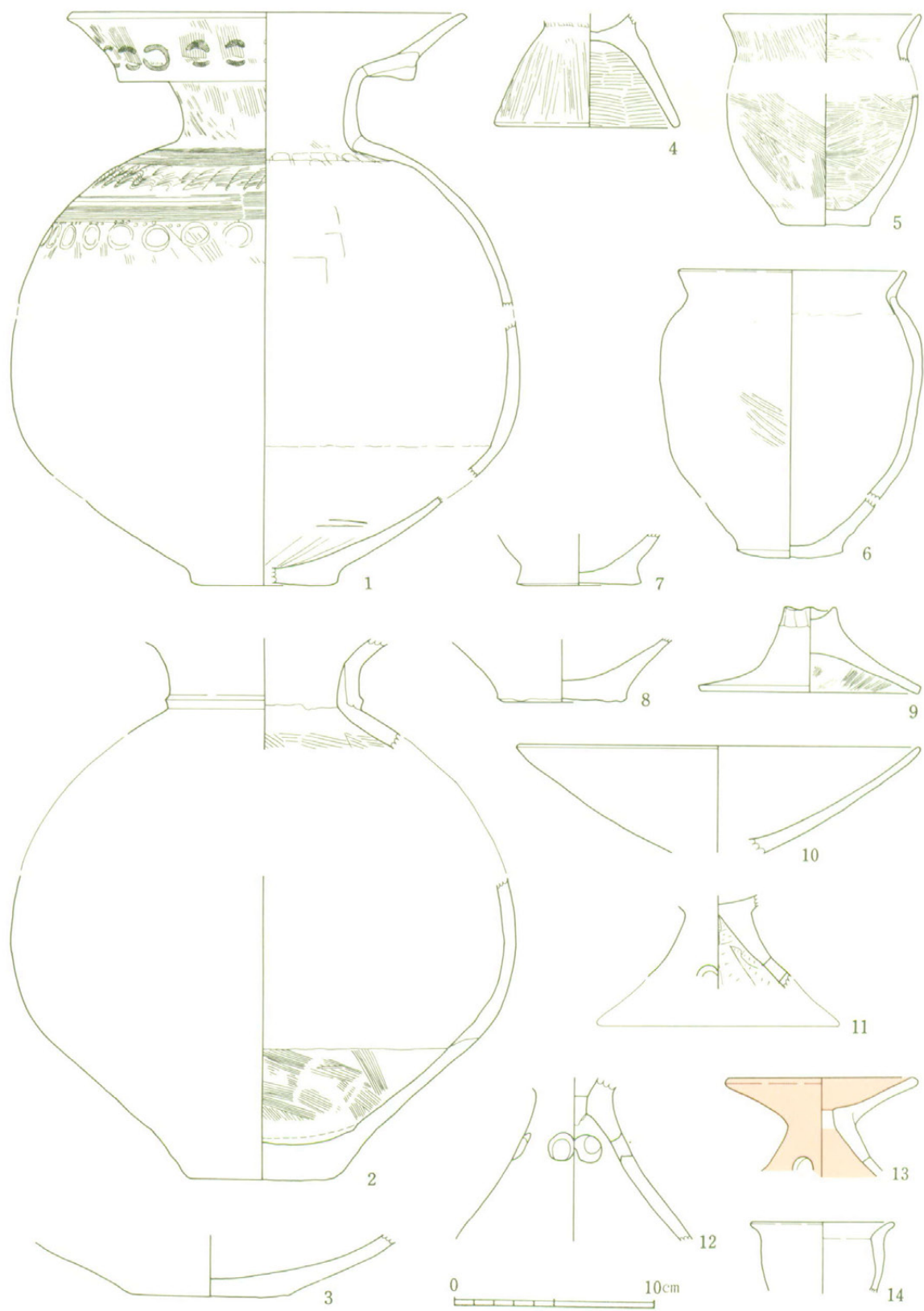
第59图 GOA 溝址2 下層(1~23)、上層(24~26)出土土器(1/3)



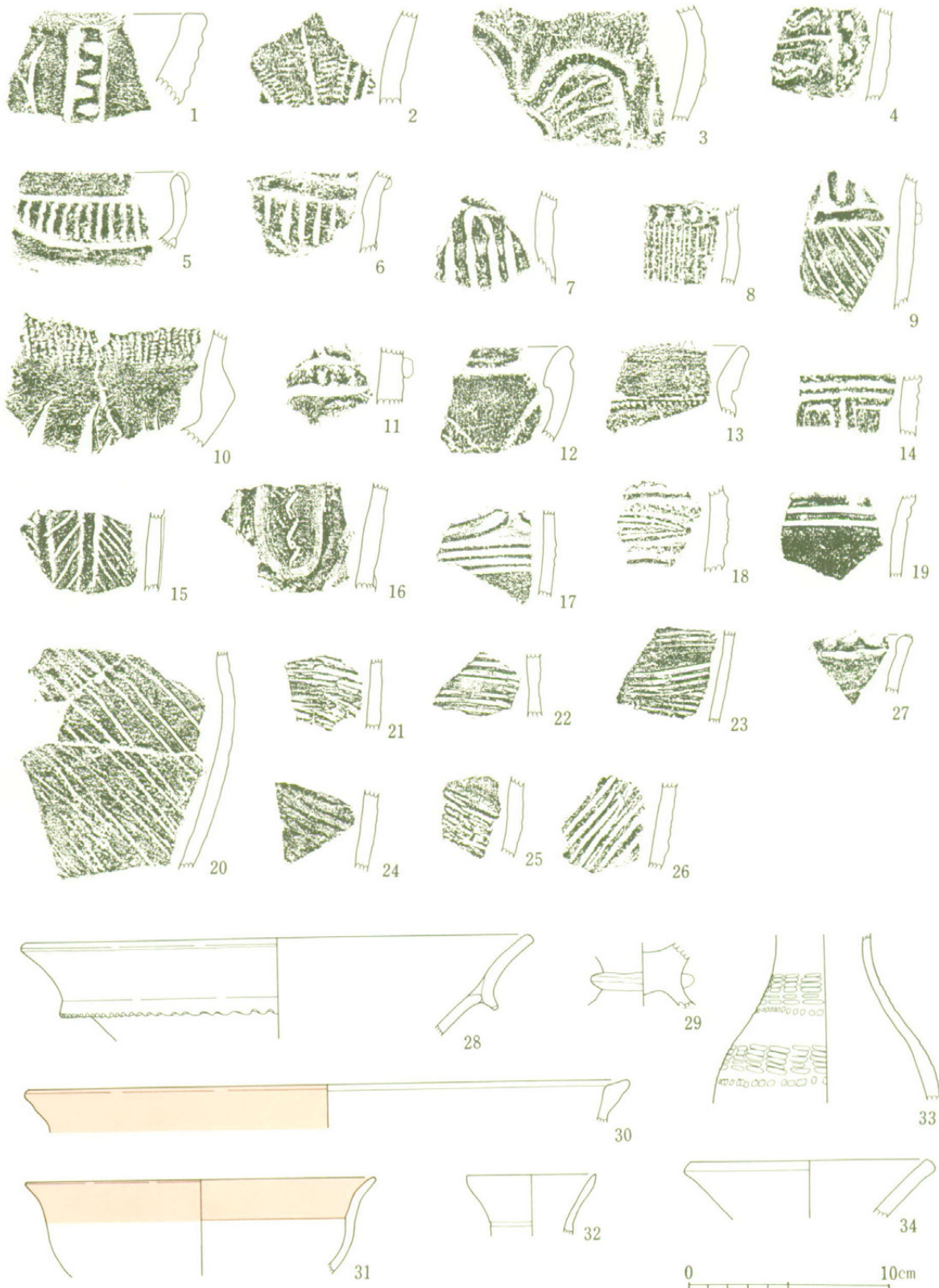
第60図 GOA 溝址2 上層(1~11)出土土器及び弥生土器(12~28)($\frac{1}{3}$)



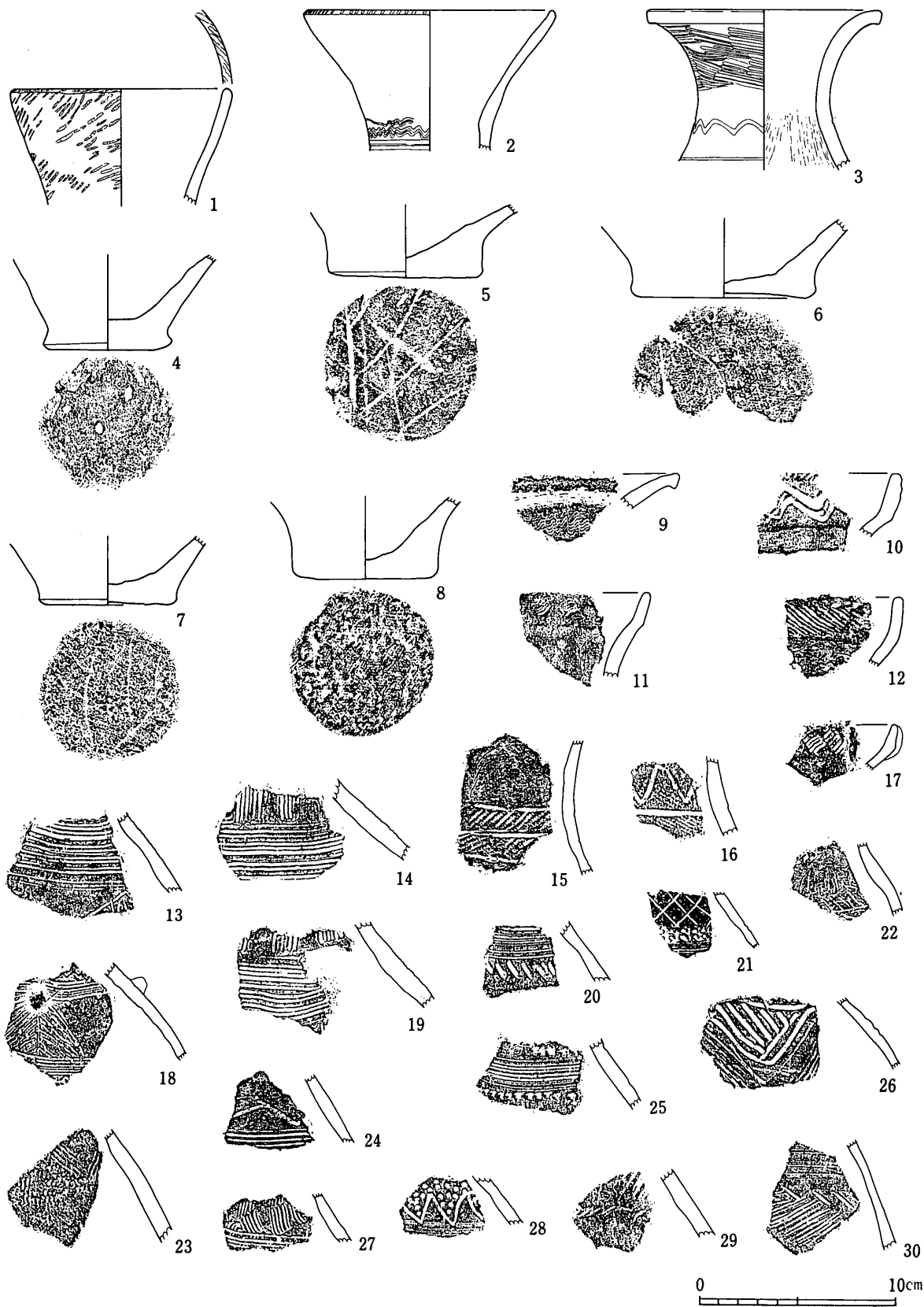
第61图 GOA A区包含層出土土器(1/3)



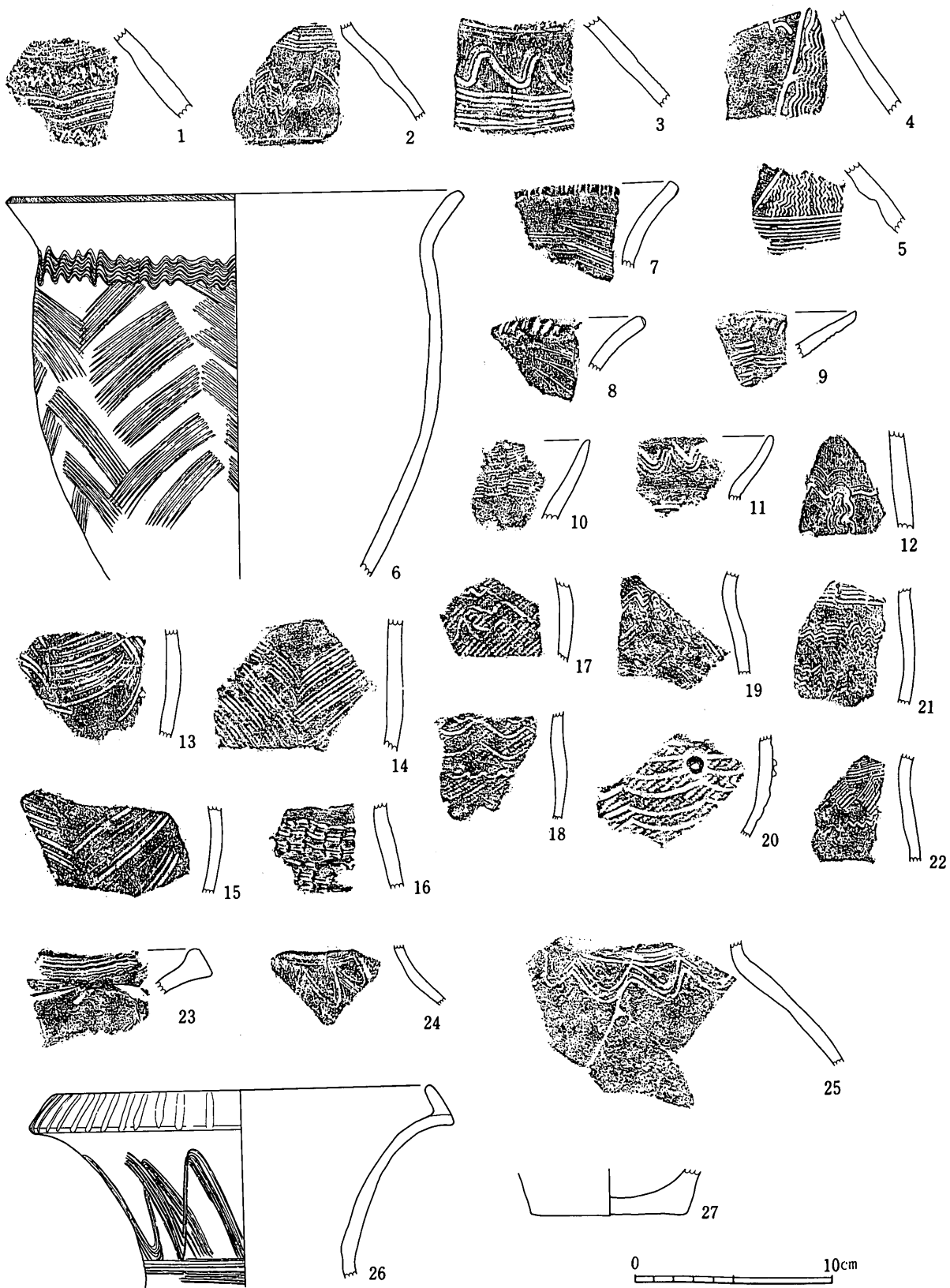
第62图 GOA A区包含層出土土器(1/3)



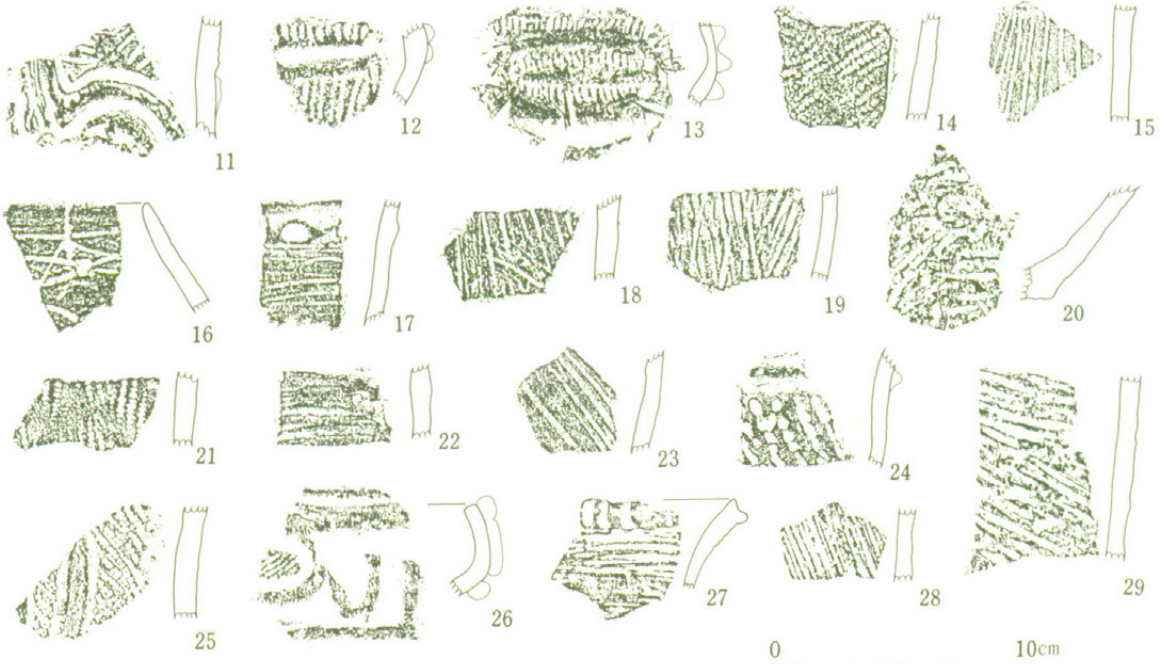
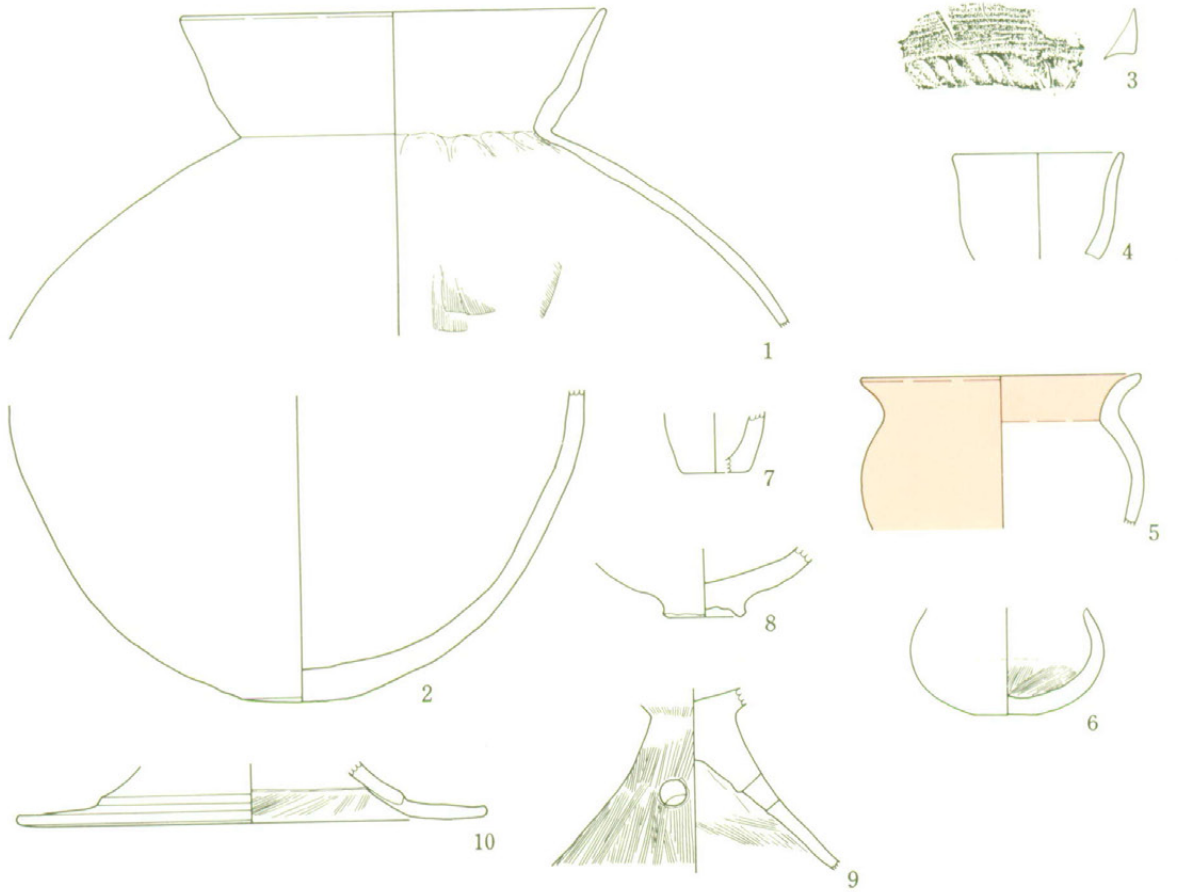
第63图 GOA 湿地帯出土土器(1/3)



第64图 GOA 湿地帯出土土器(1/3)

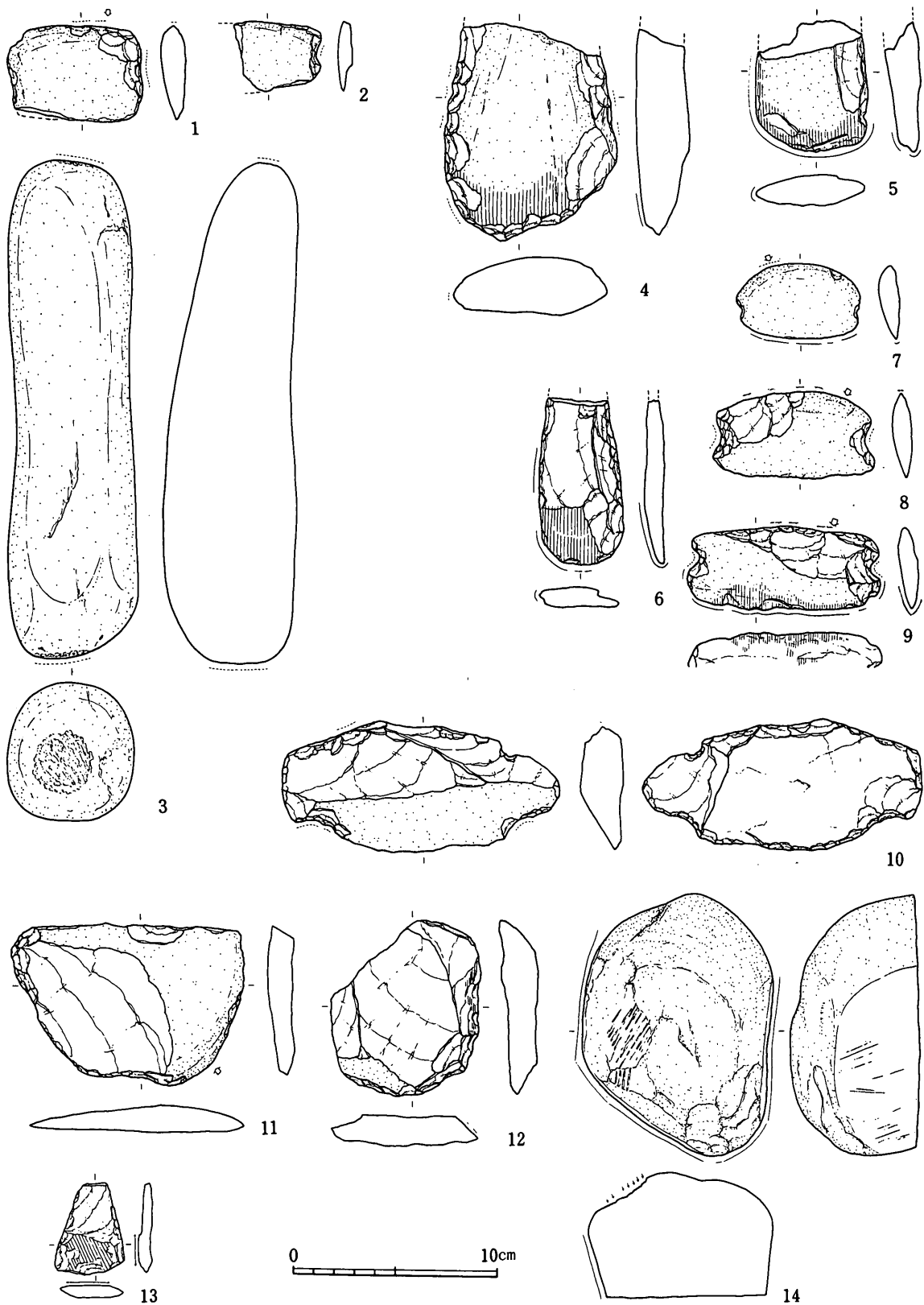


第65图 GOA 湿地帯出土土器(1/2)

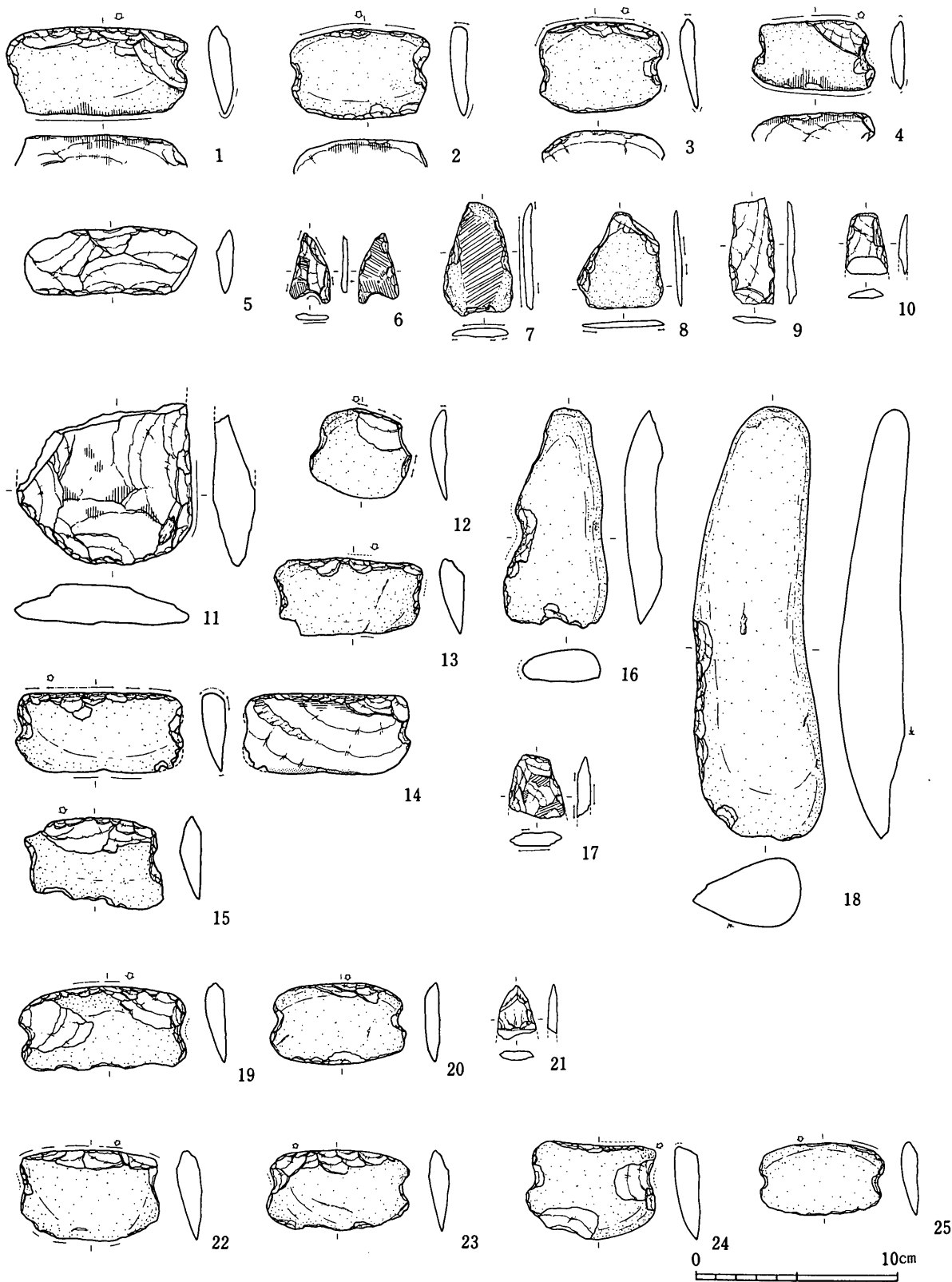


0 10cm

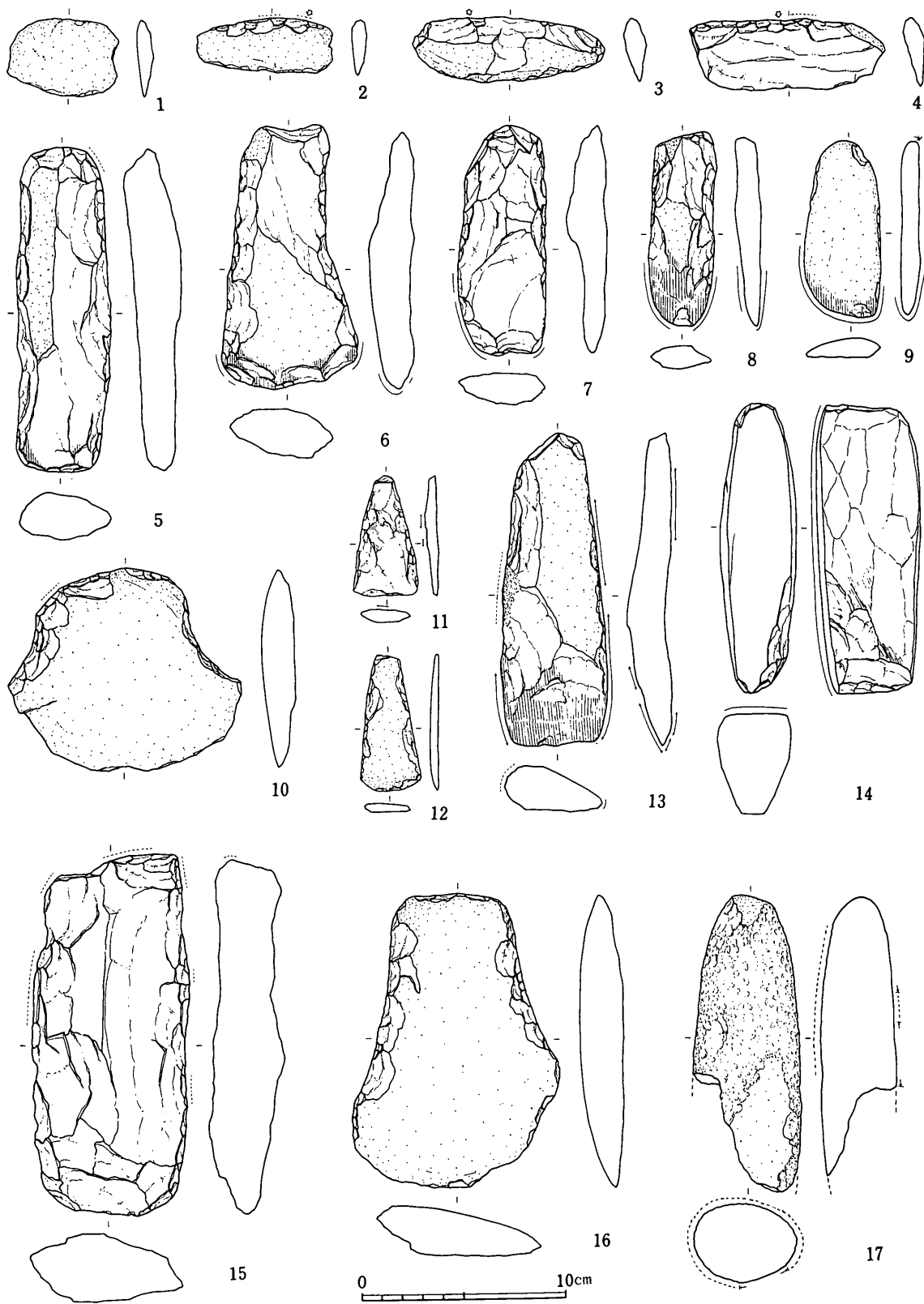
第66図 GOA 遺構外出土土器(1/3)



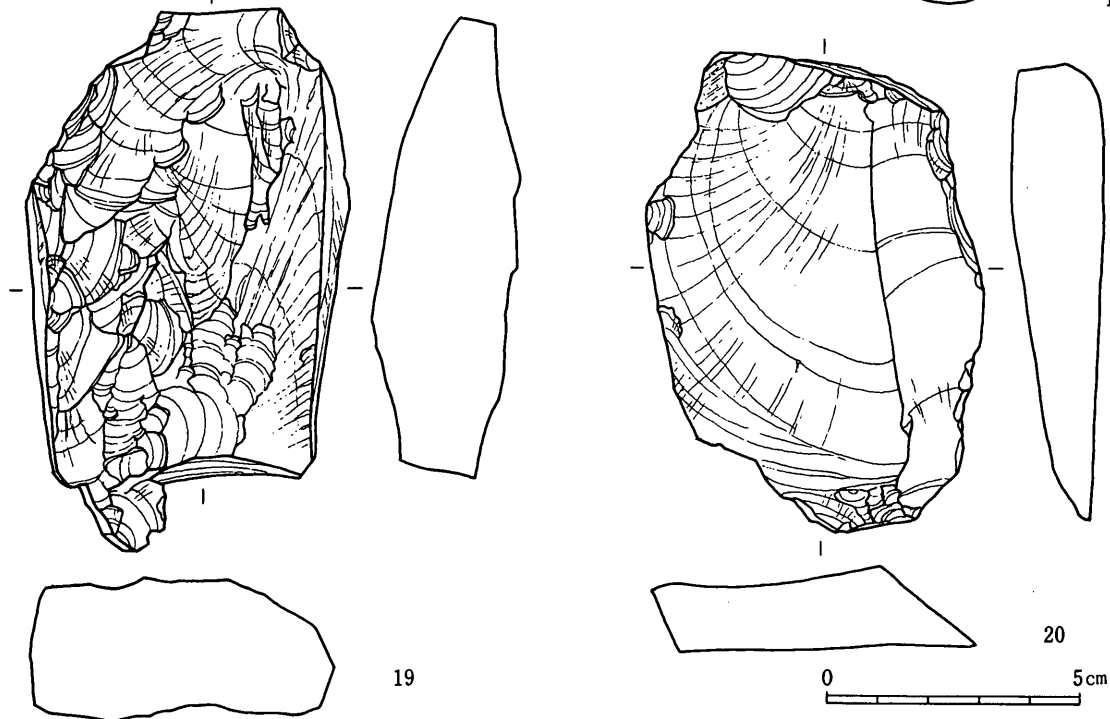
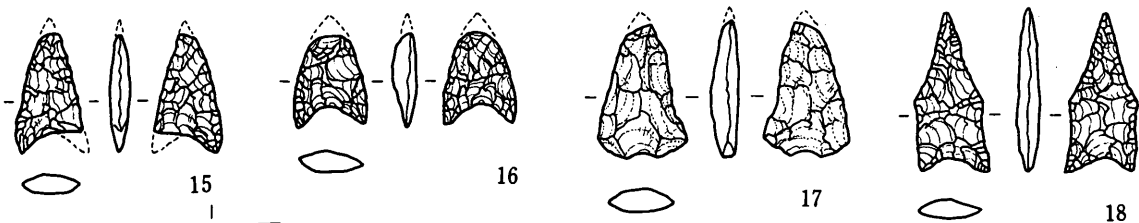
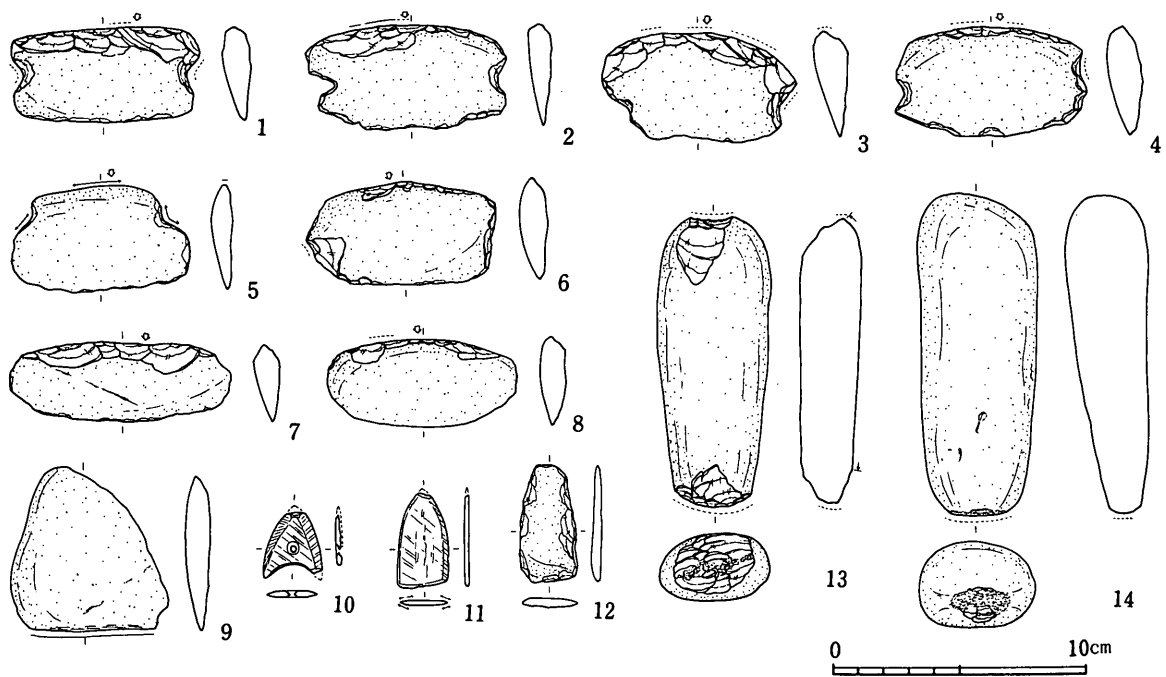
第67图 GOA 1号住居址(1~3)、3号住居址(4~14)出土石器(1/3)



第68图 GOA 4号住居址(1~10)、5号住居址(11~18)、8号住居址(19~21)、
 沟址I(22~25)出土石器(1/3)



第69图 GOA 沟址1(1~14)、沟址2(15~17)出土石器(寸)



第70图 GOA 溝址 2 (1~14)、遺構外(15~20)出土石器(1~14号、15~20号)



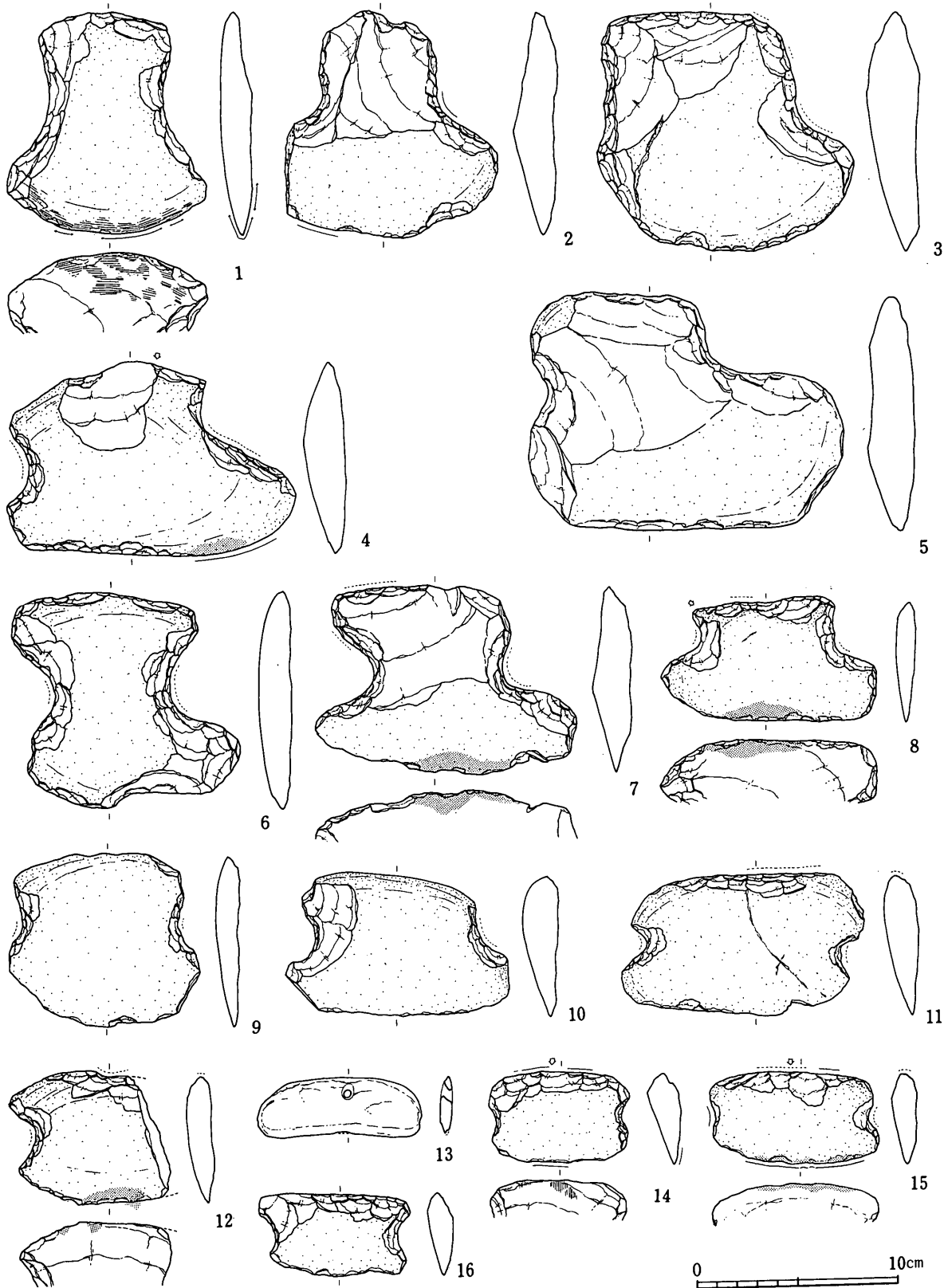
第71图 GOA 遺構外出土石器(1/2)



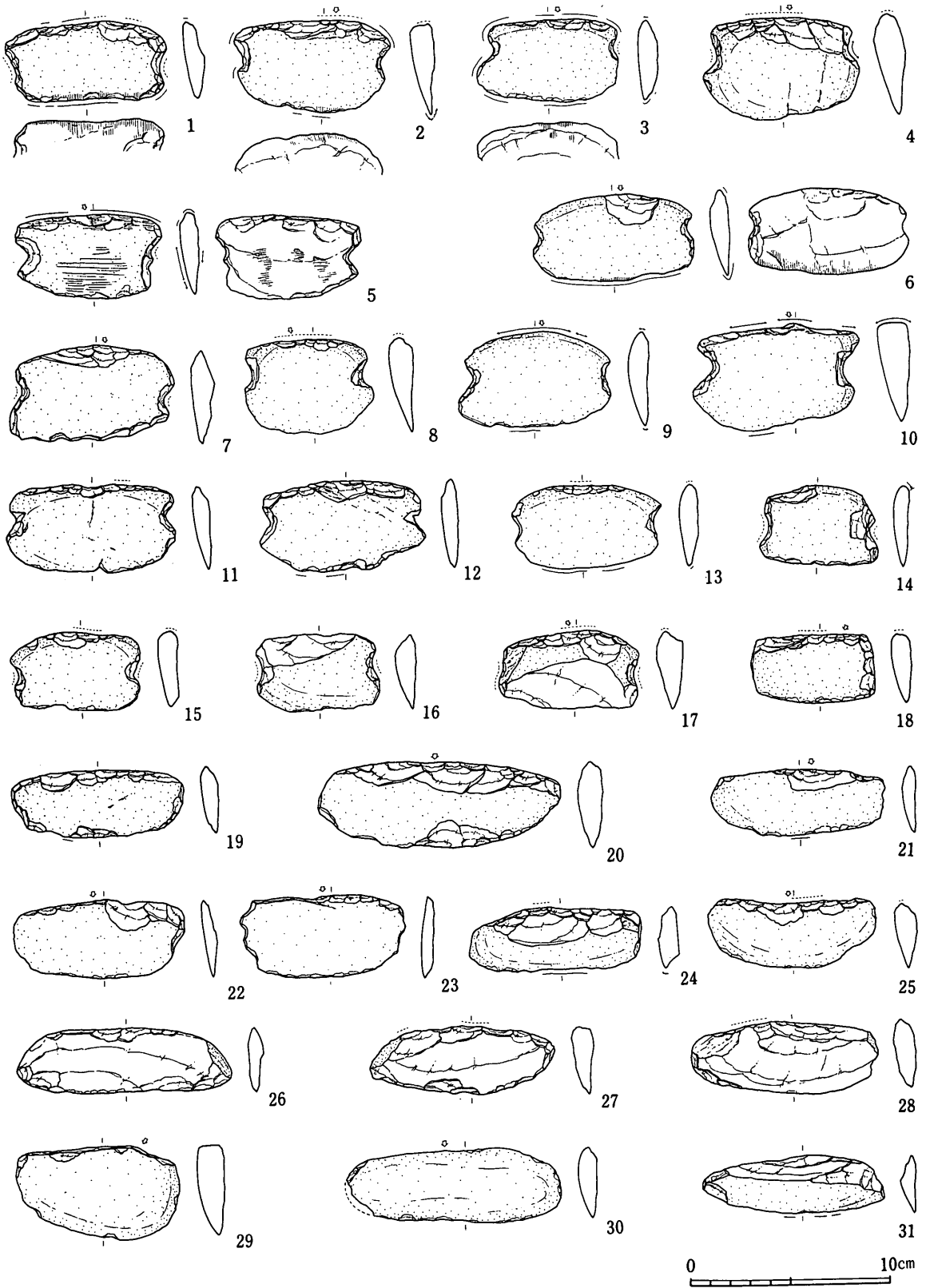
第72図 GOA 遺構外出土石器(1/3)



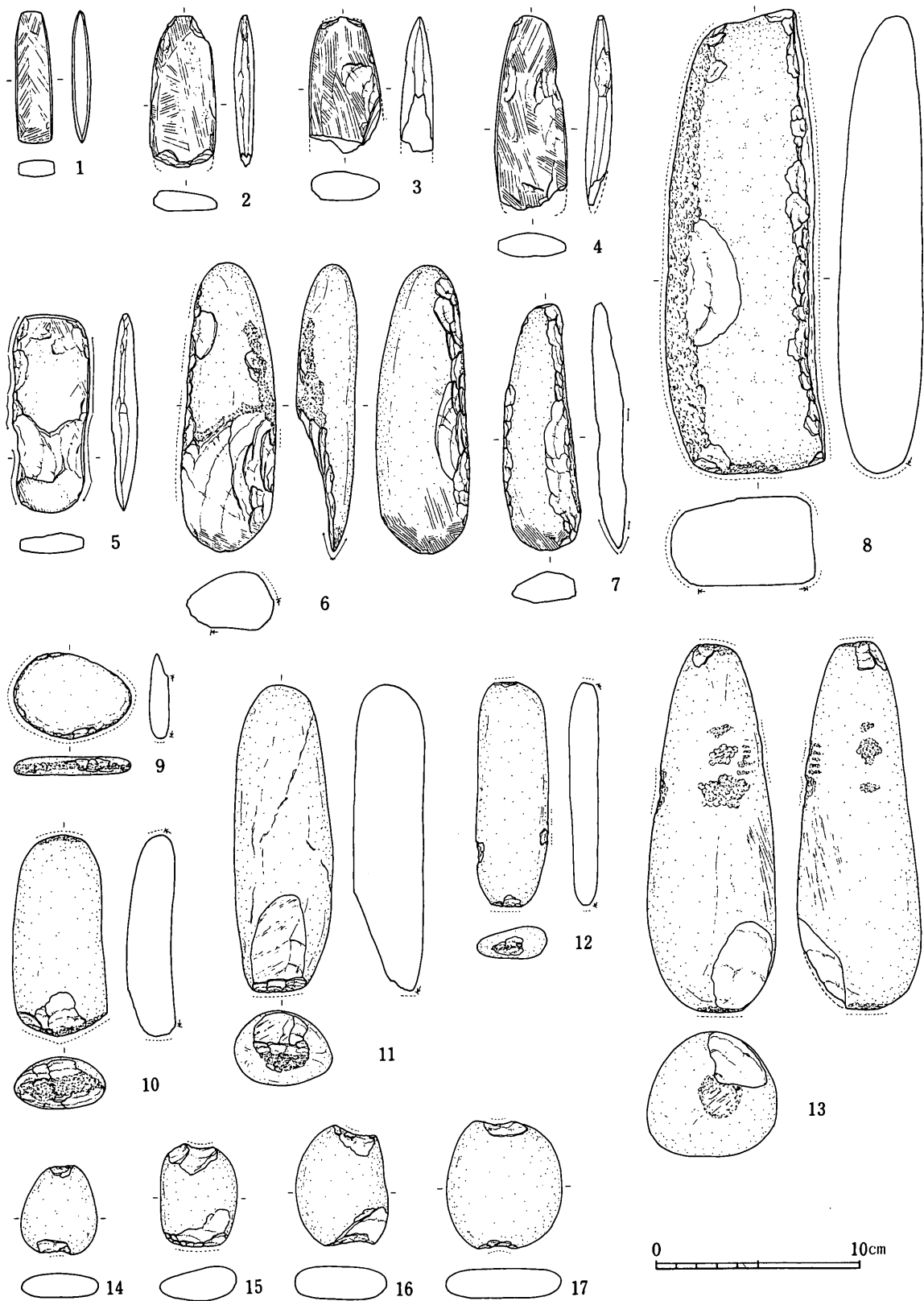
第73図 GOA 遺構外出土石器(1/3)



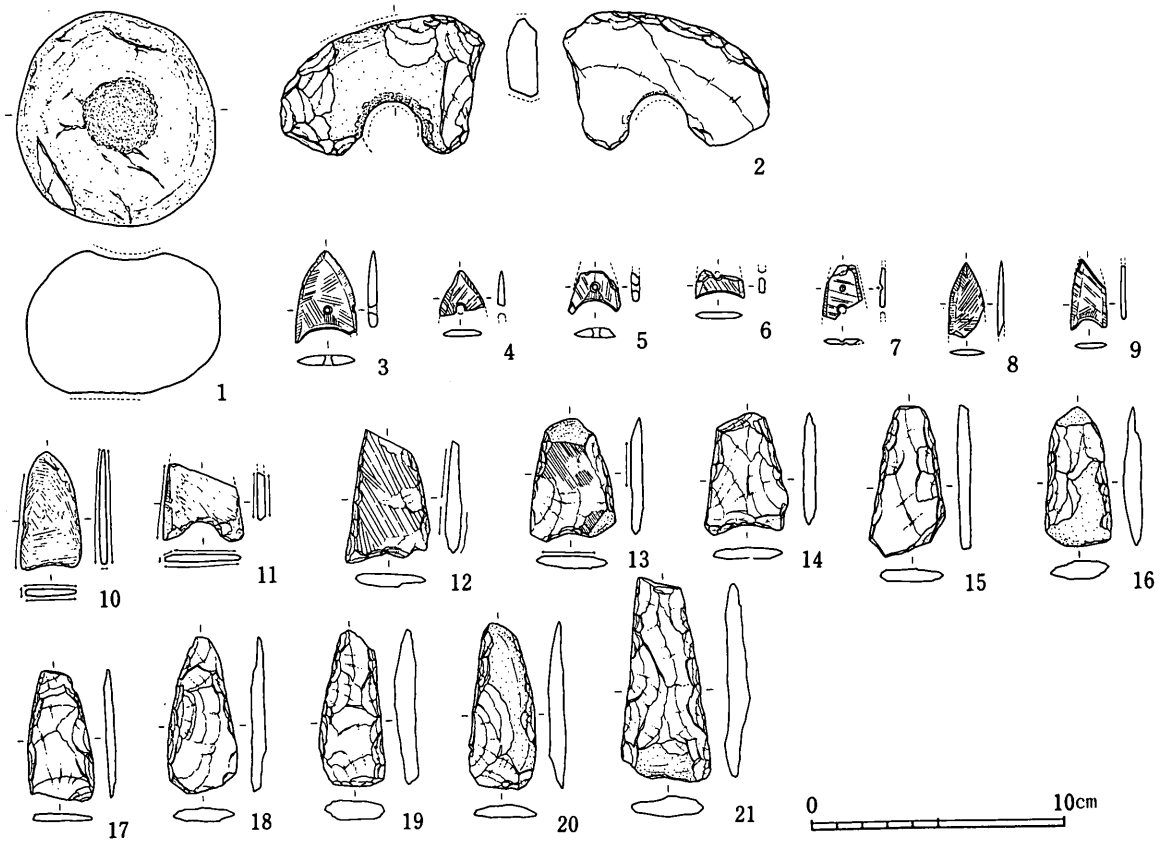
第74図 GOA 遺構外出土石器(1/3)



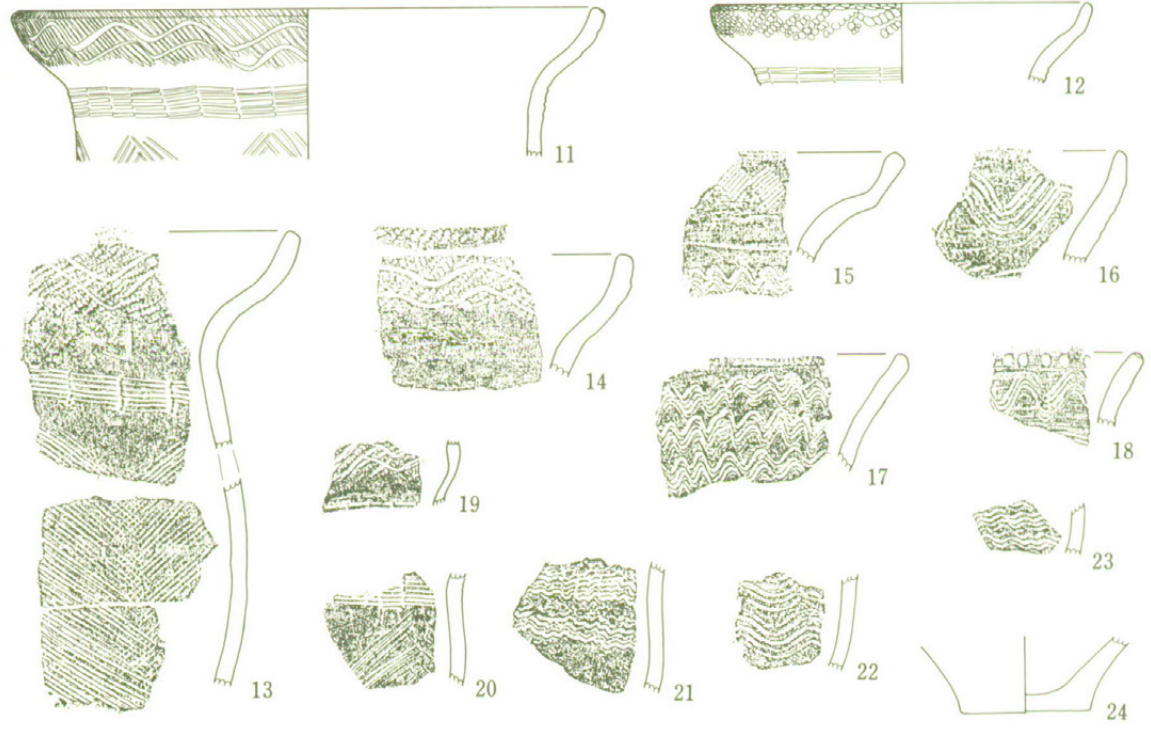
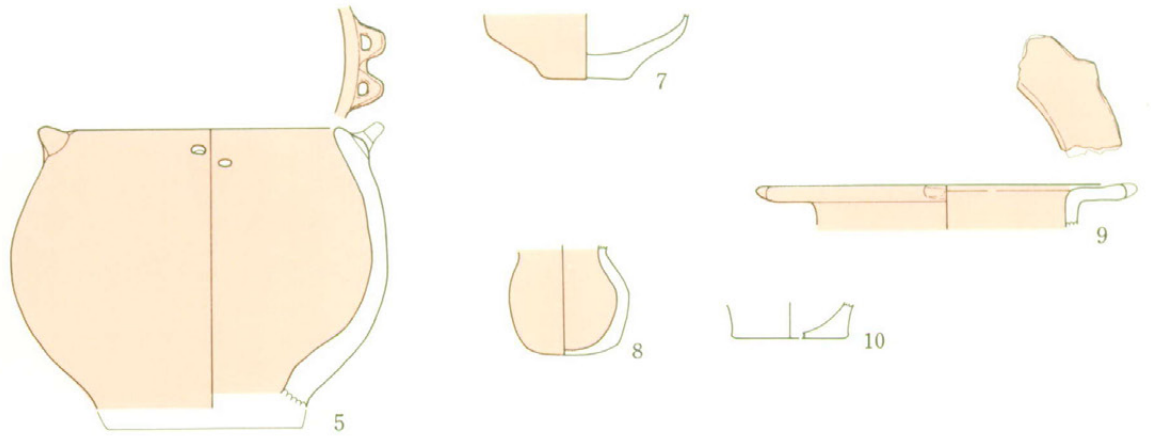
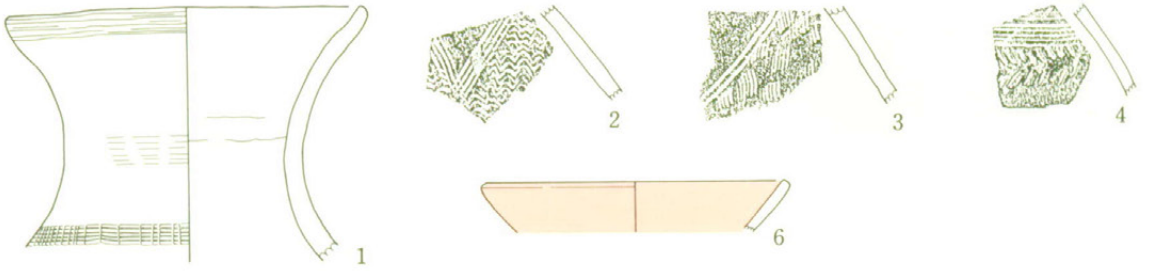
第75图 GOA 遺構外出土石器(1/3)



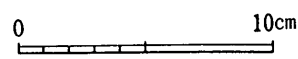
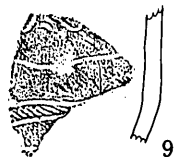
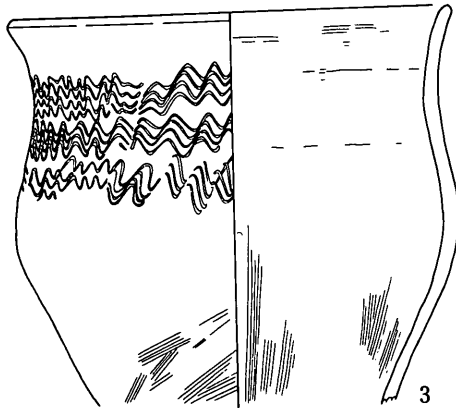
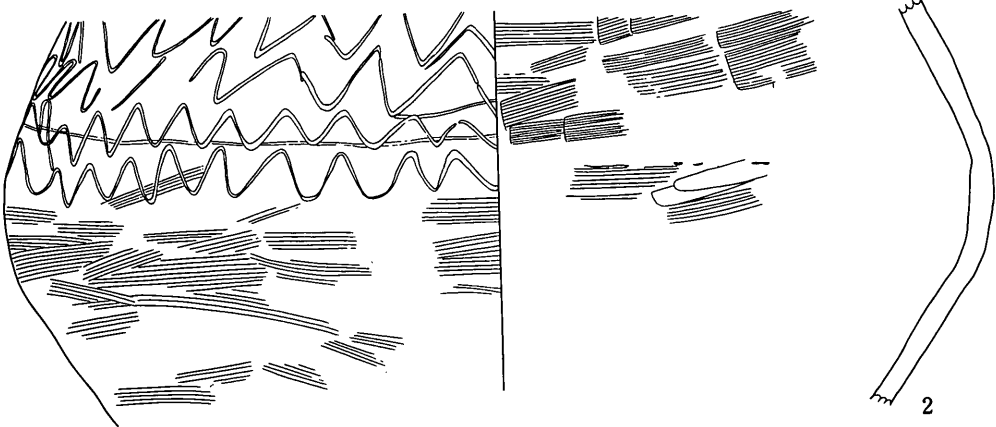
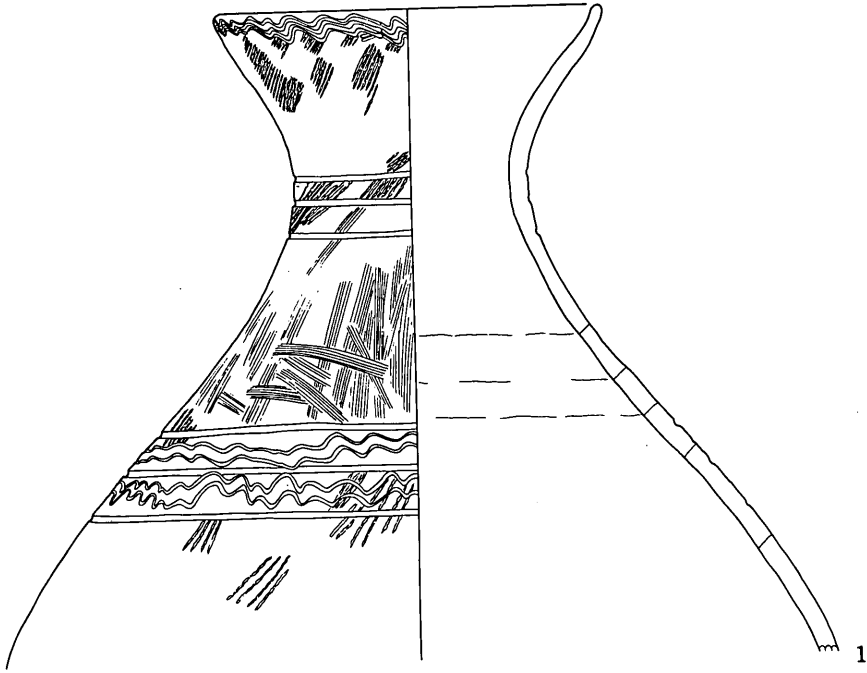
第76图 GOA 遺構外出土石器(1/2)



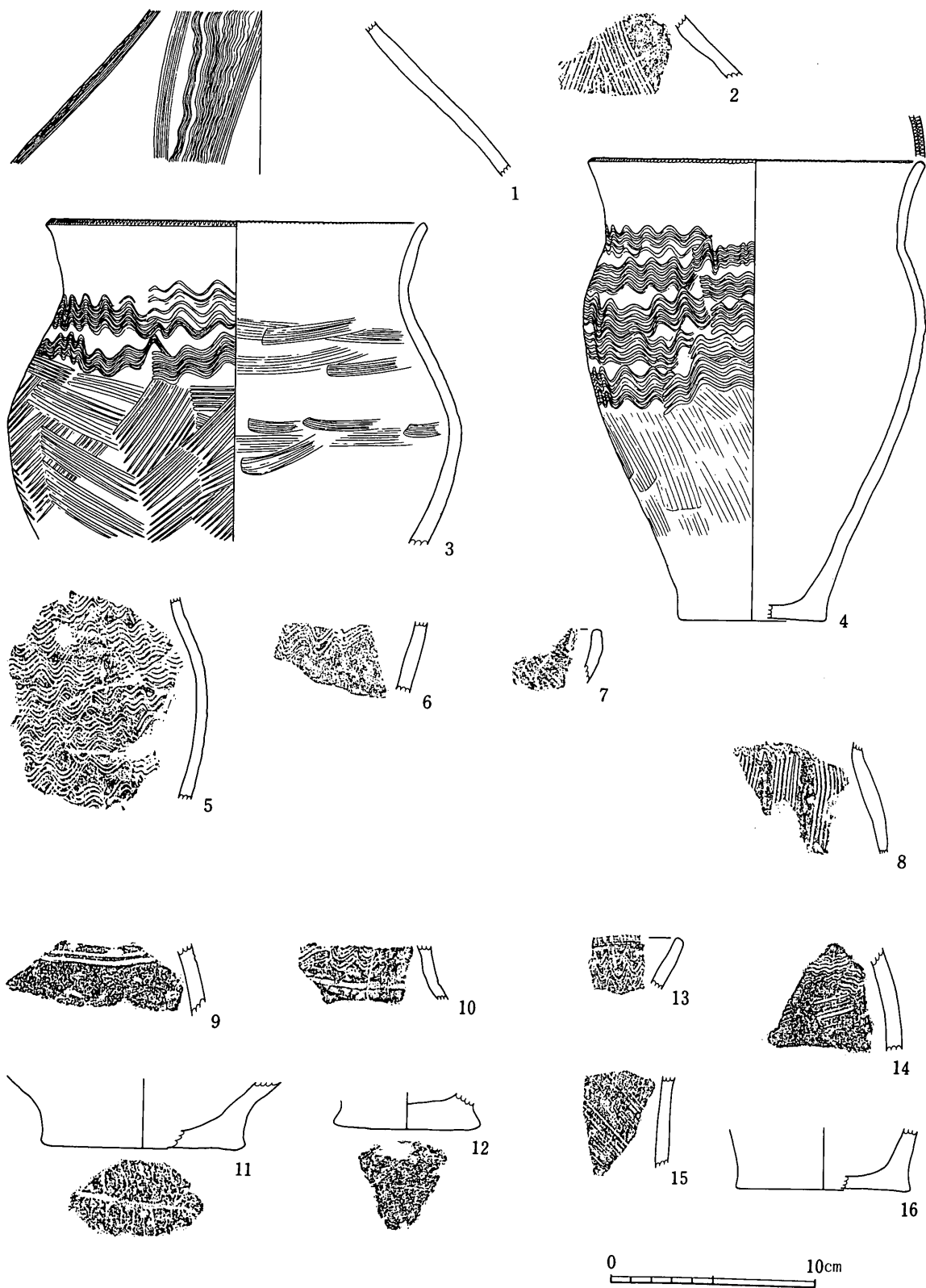
第77図 GOA 遺構外出土石器(1/3)



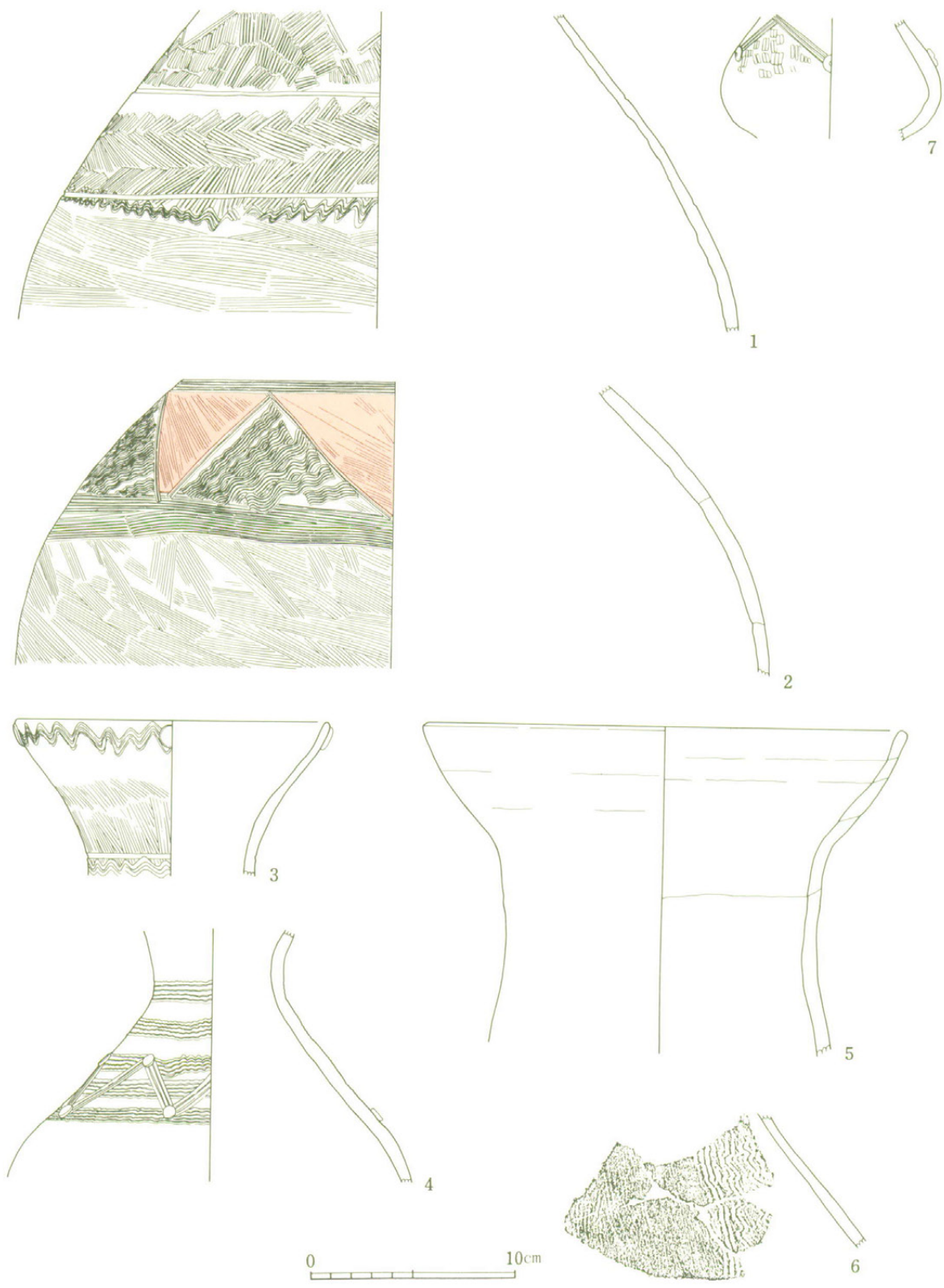
第78图 GOB 8号住居址出土土器(1/3)



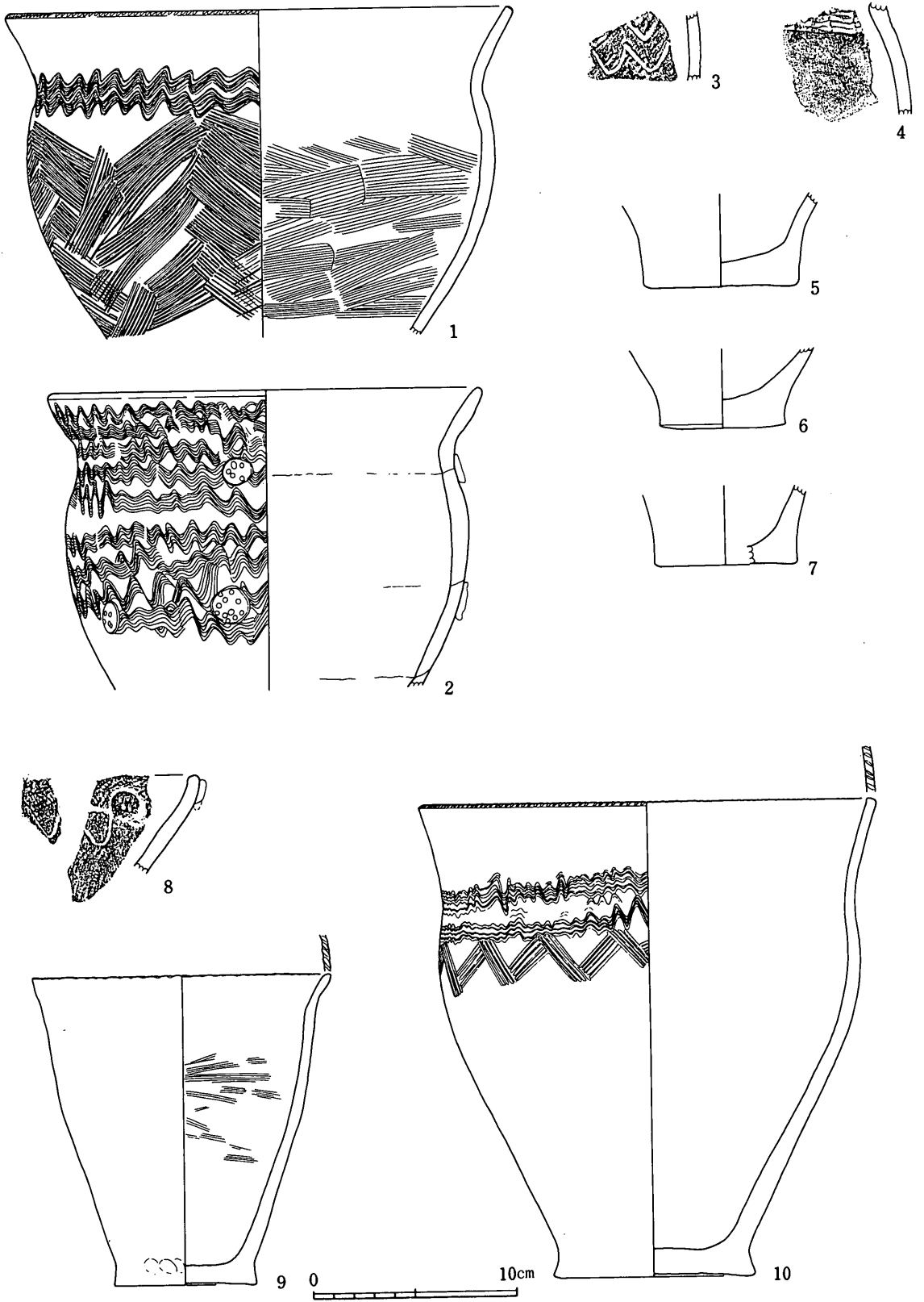
第79图 GOB 9号住居址(1)、17号住居址(2~9)出土土器(1/3)



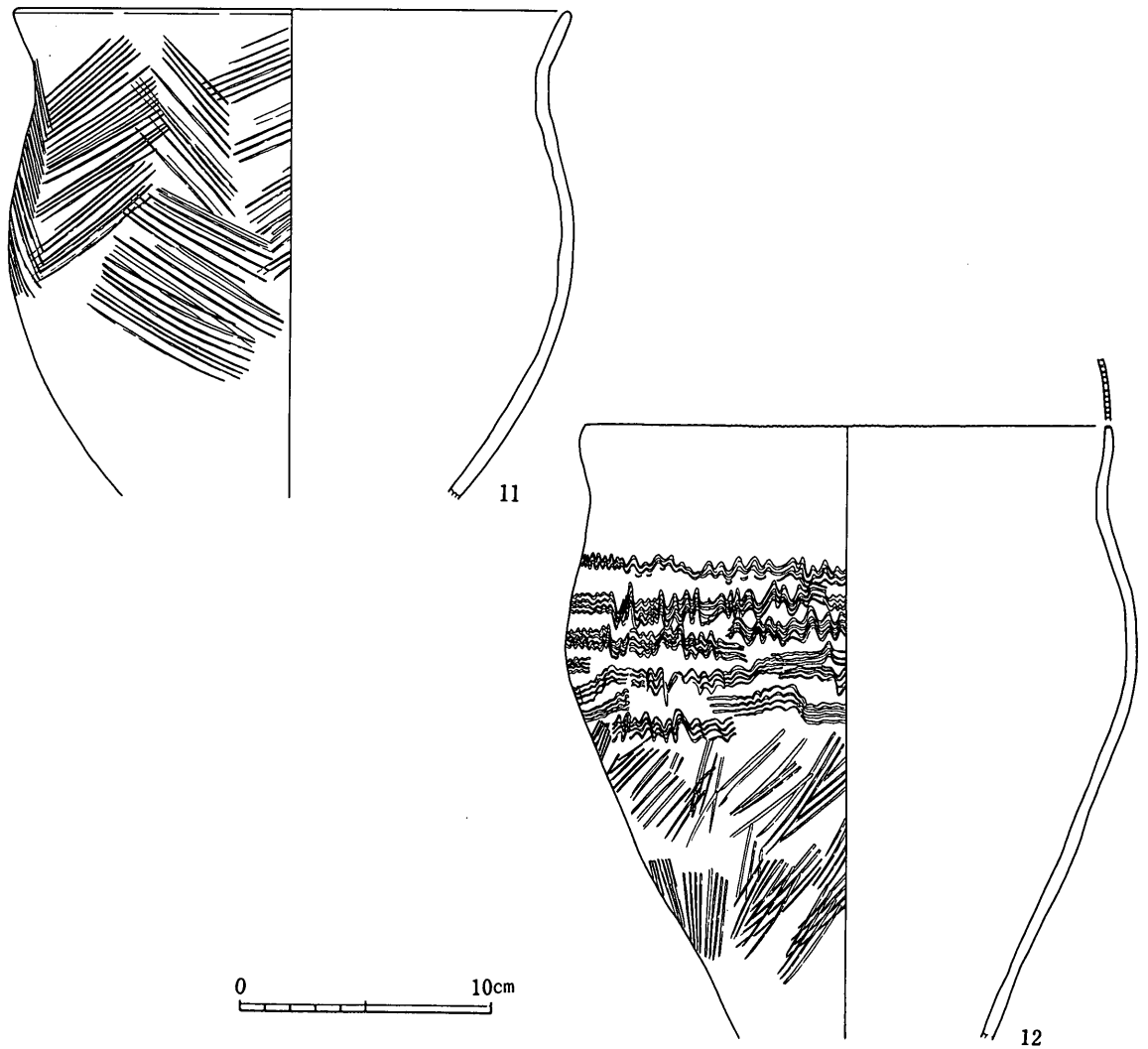
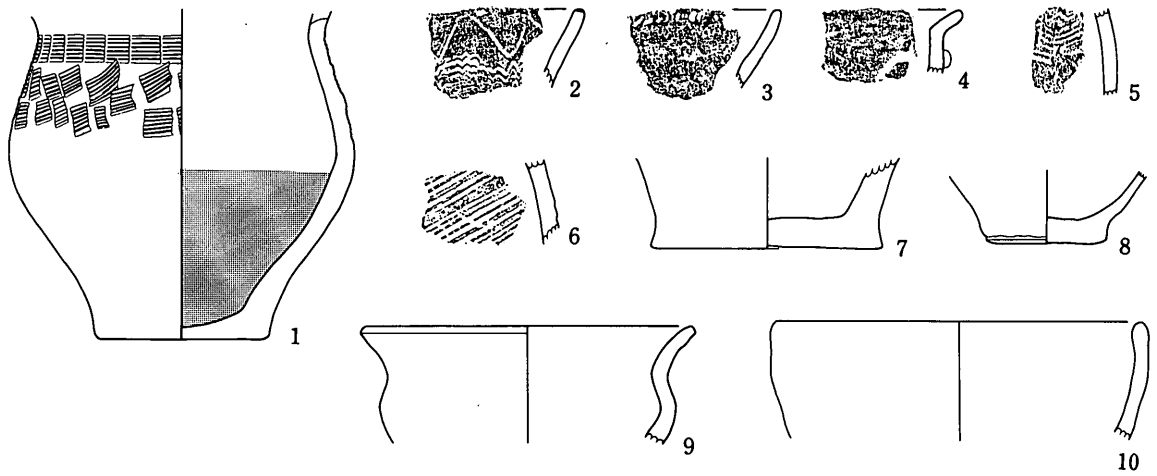
第80图 GOB 25号住居址(1~7)、28号住居址(8)、34号住居址(9~16)出土土器(1/3)



第81图 GOB 35号住居址出土土器(1/3)



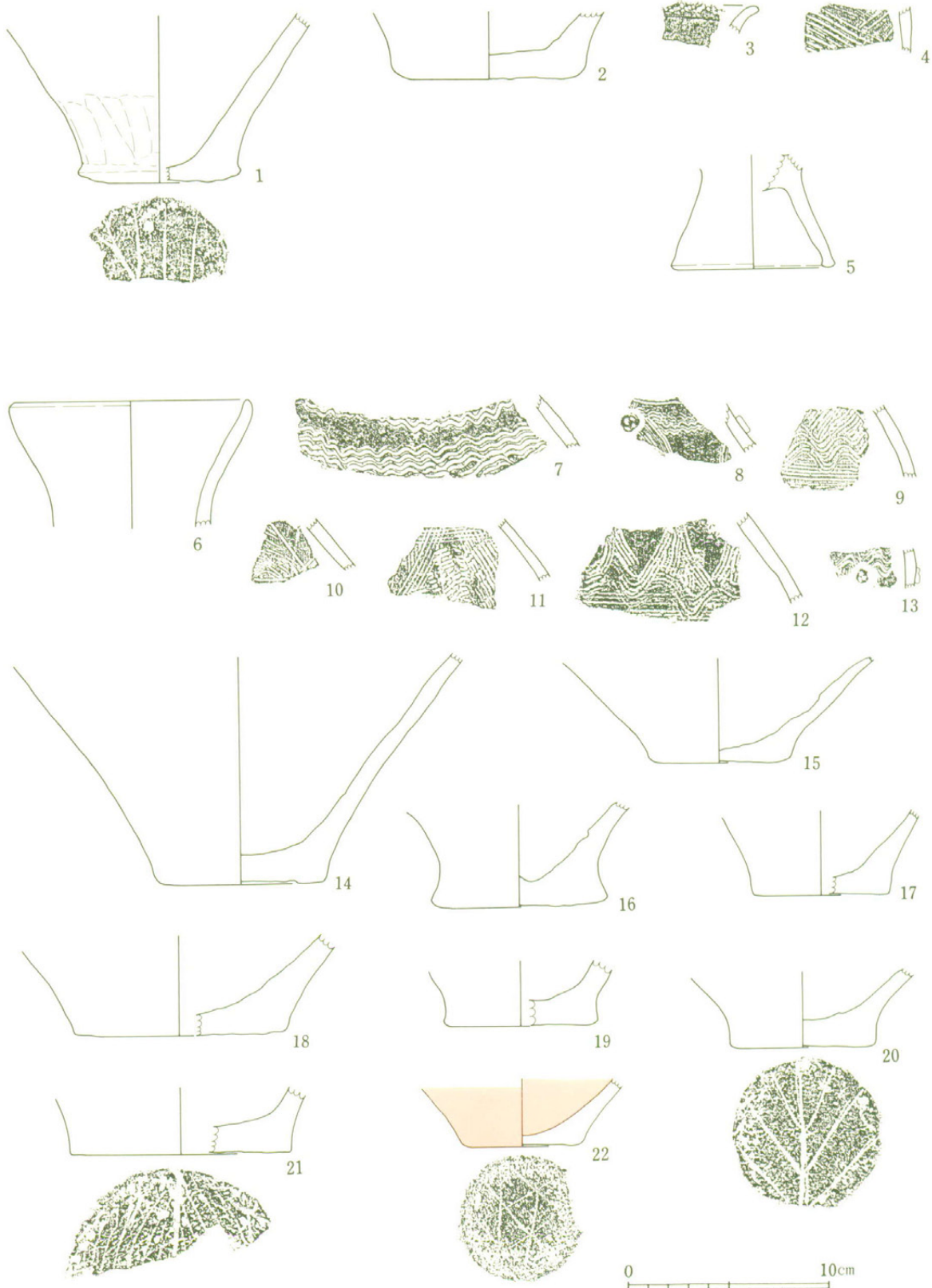
第82图 GOB 35号住居址(1~7)、45号住居址(8~10)出土土器(1/3)



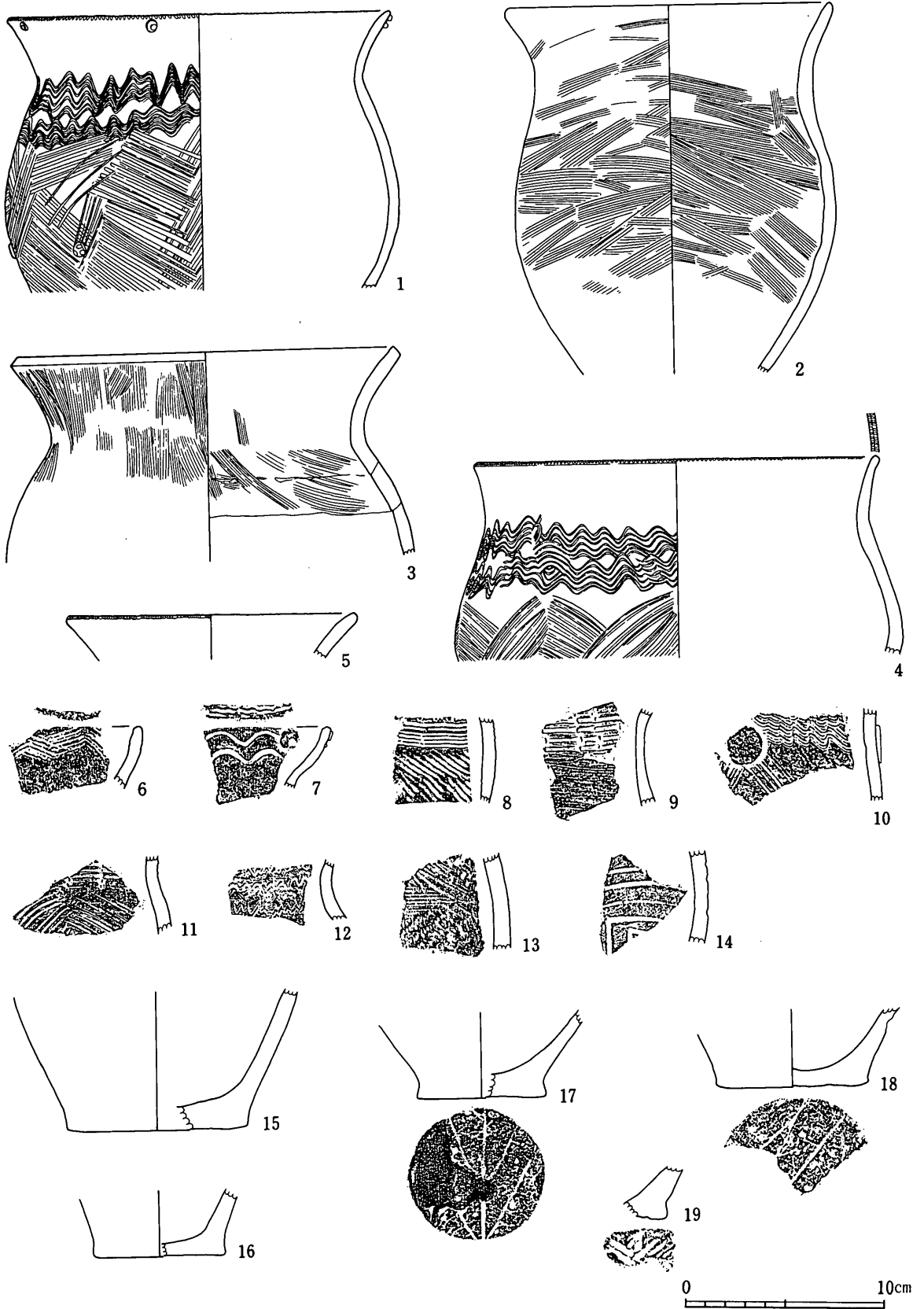
第83图 GOB 45号住居址(1~10)、46号住居址(11·12)出土土器(1/3)



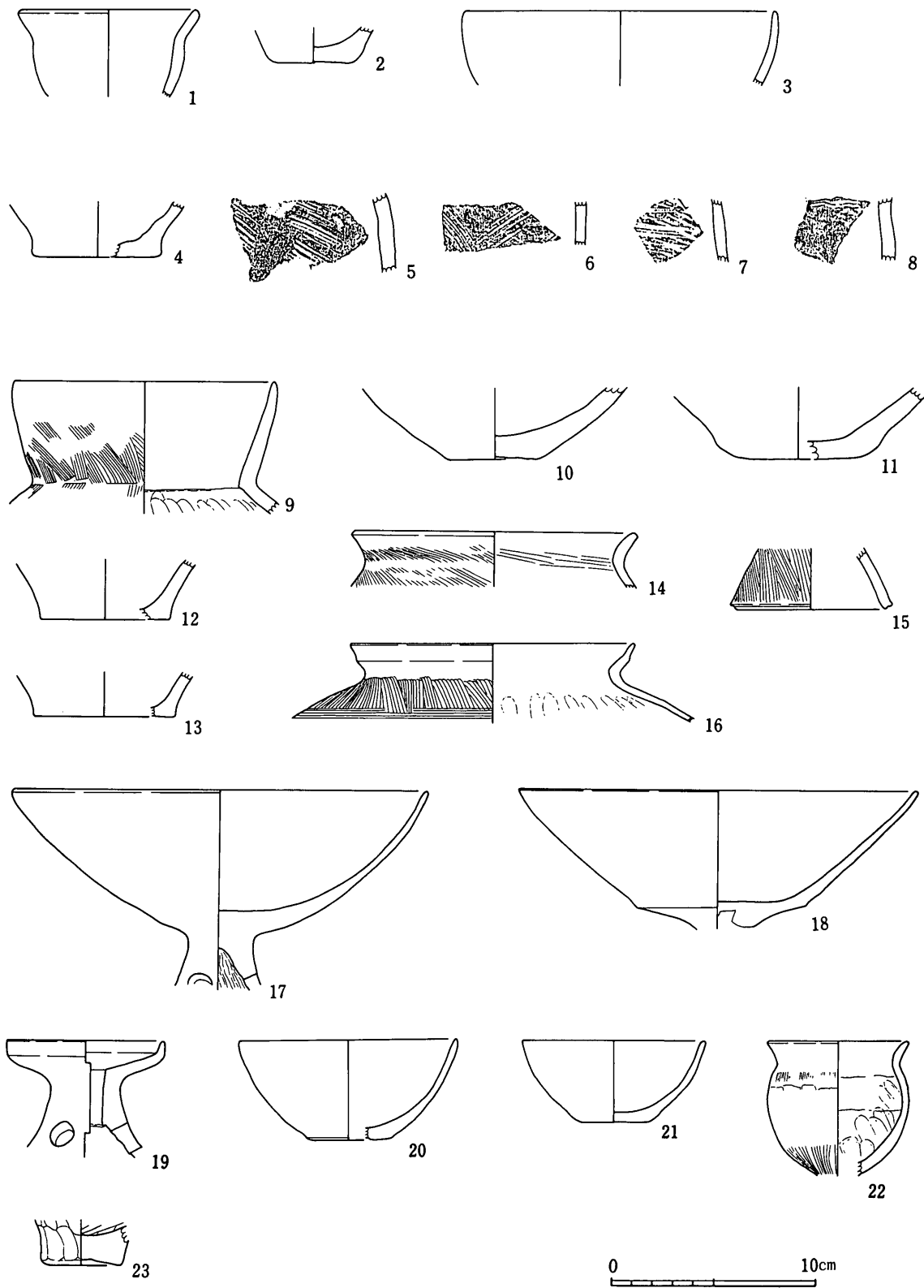
第84图 GOB 47号住居址出土土器(1/3)



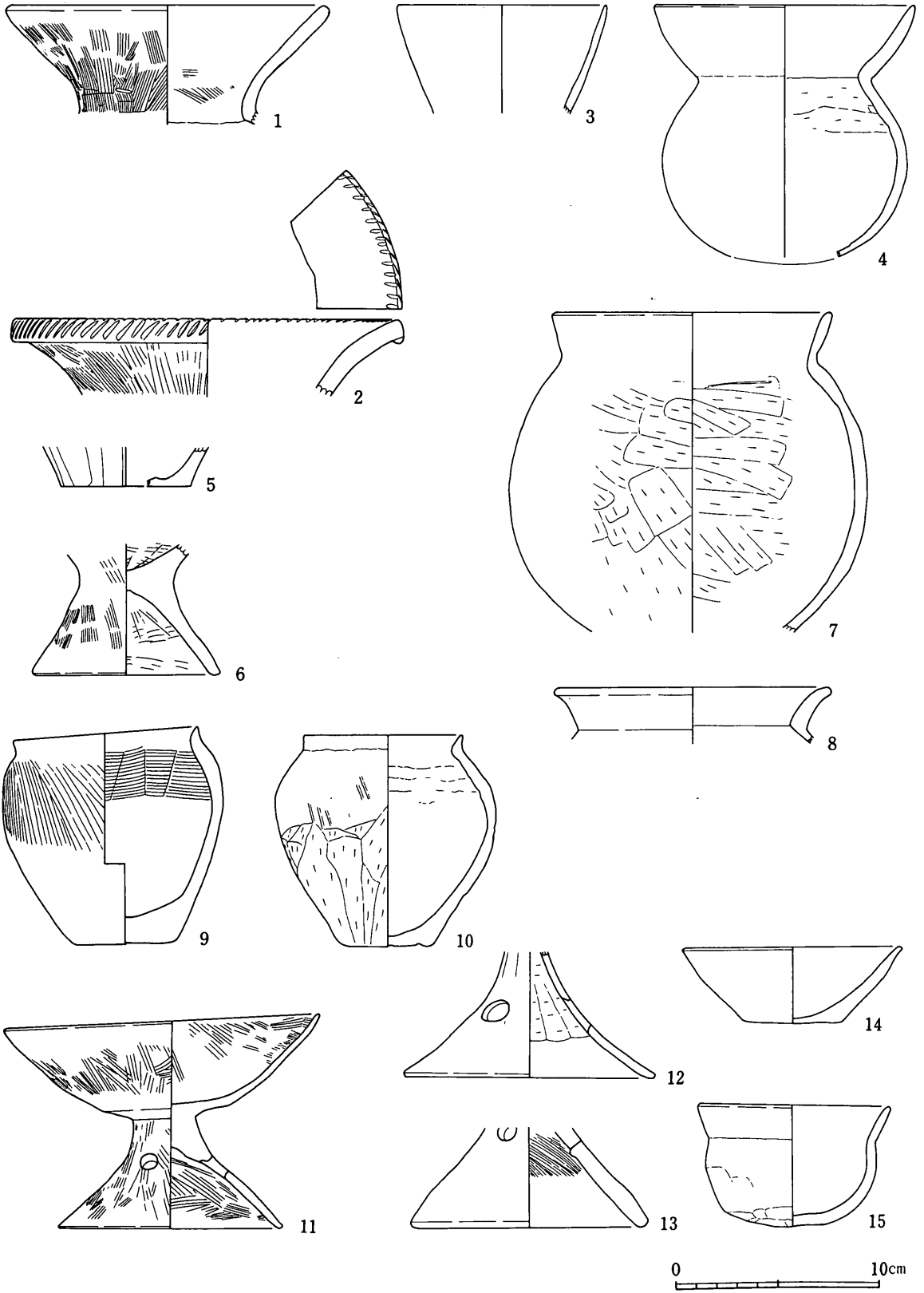
第85图 GOB 50号住居址(1~5)、沟址7(6~22)出土土器(1/3)



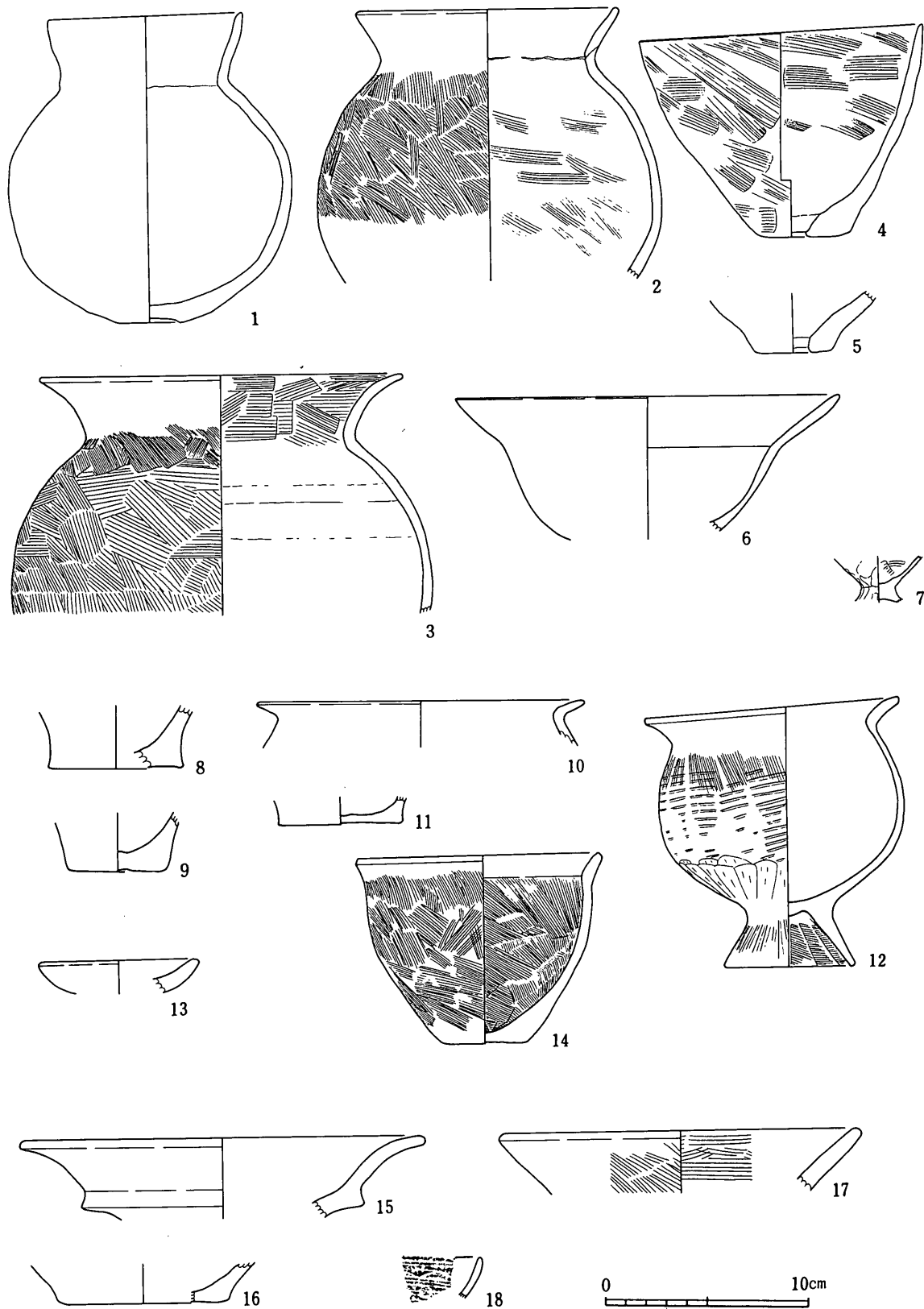
第86图 GOB 沟址7出土土器(1/2)



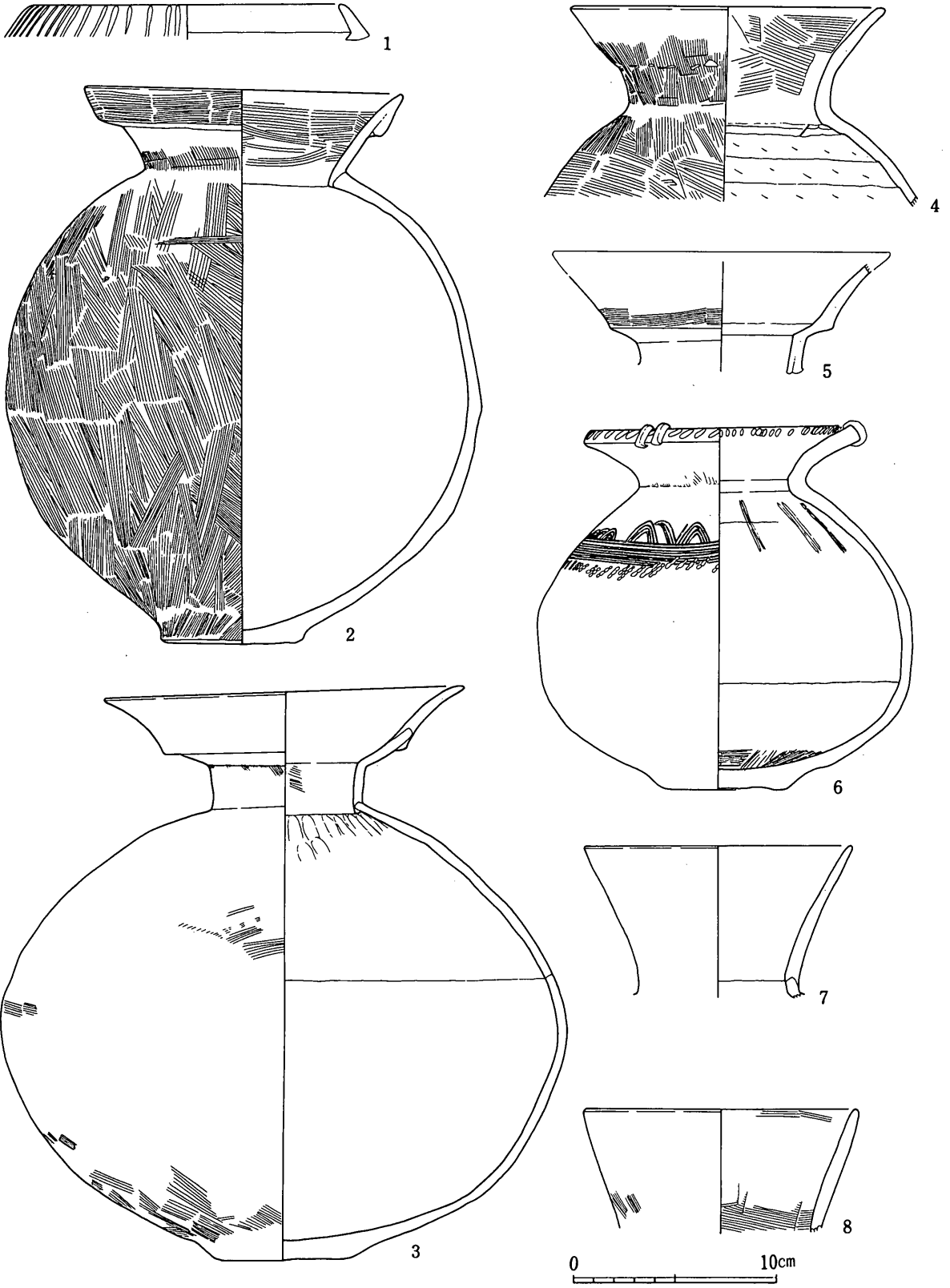
第87图 GOB 沟址7(1~3)、方形周沟墓1(4~8)、2号住居址(9~23)出土土器(1/2)



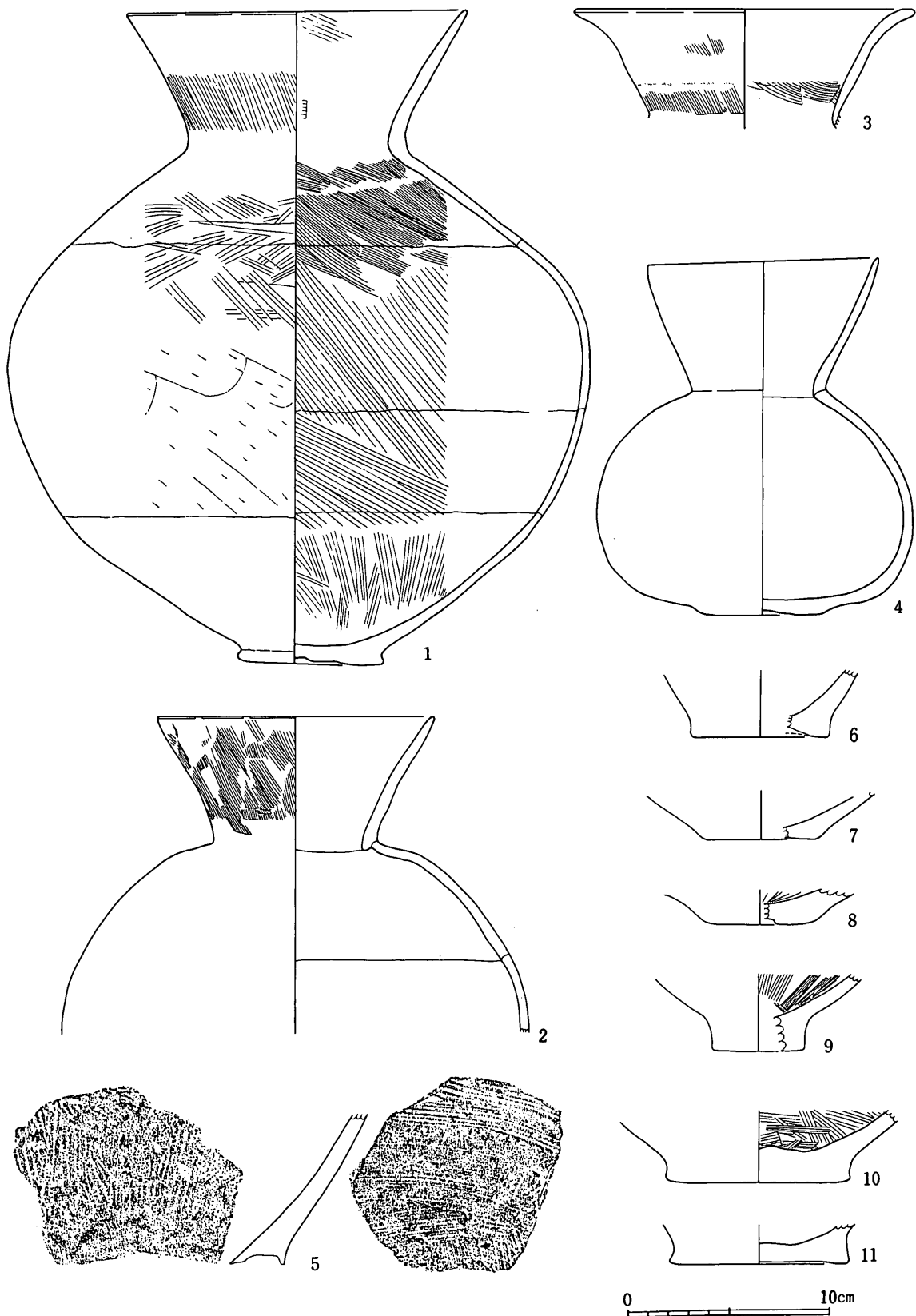
第88图 GOB 4号住居址出土土器(1/3)



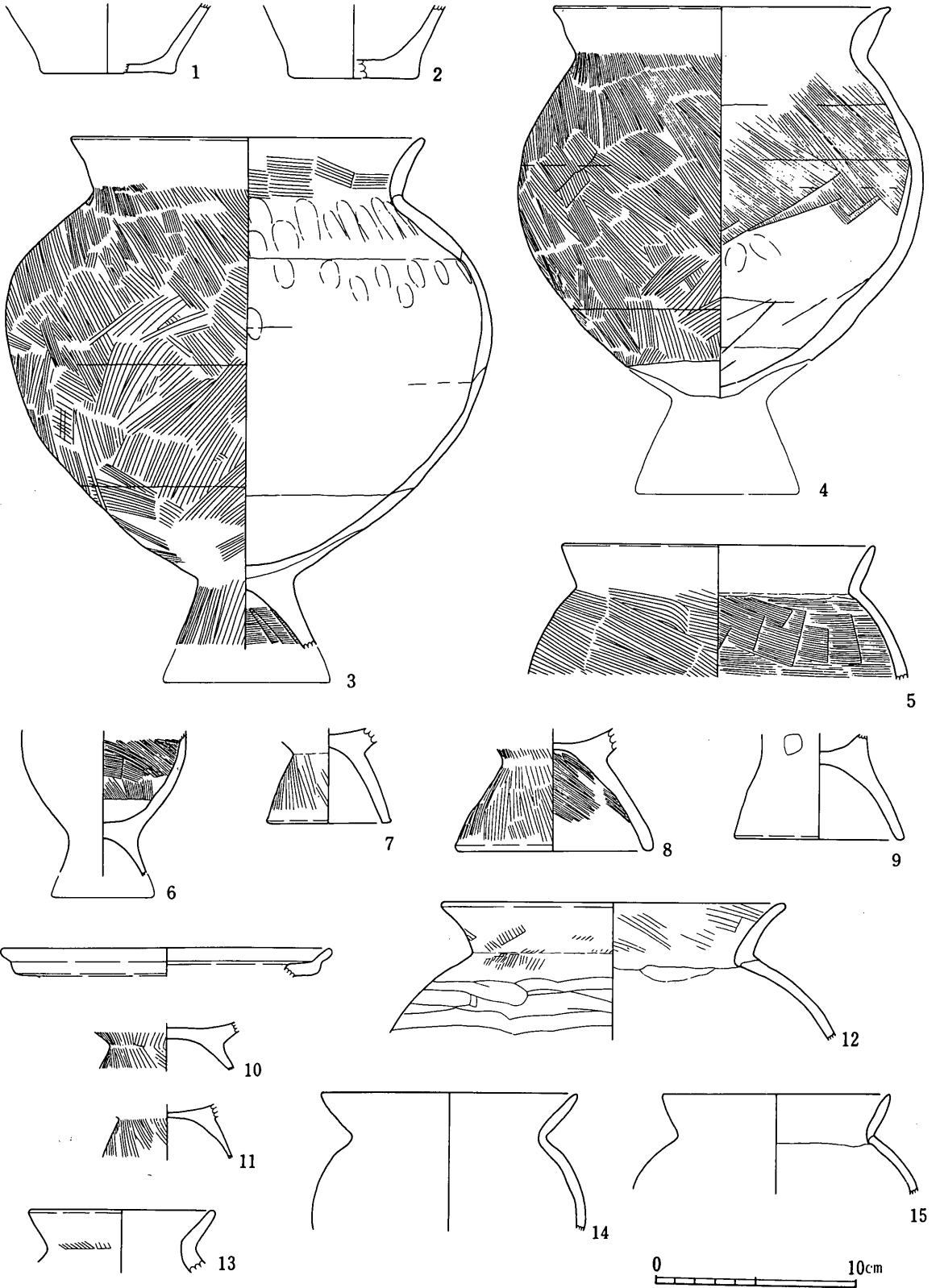
第89图 GOB 5号住居址(1~7)、7号住居址(8~14)、21号住居址(15~18)出土土器(1/3)



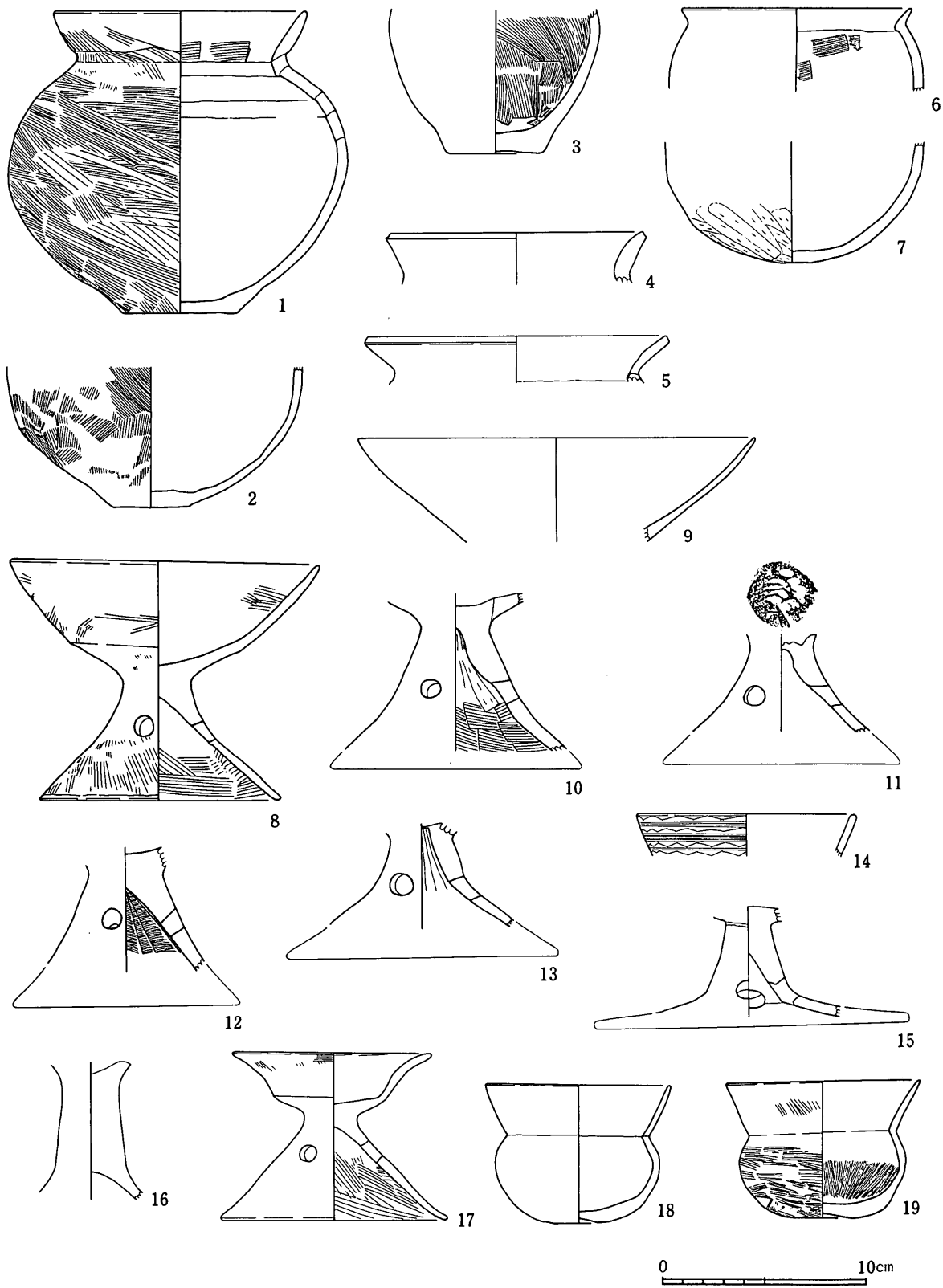
第90图 GOB 10号住居址出土土器(1/3)



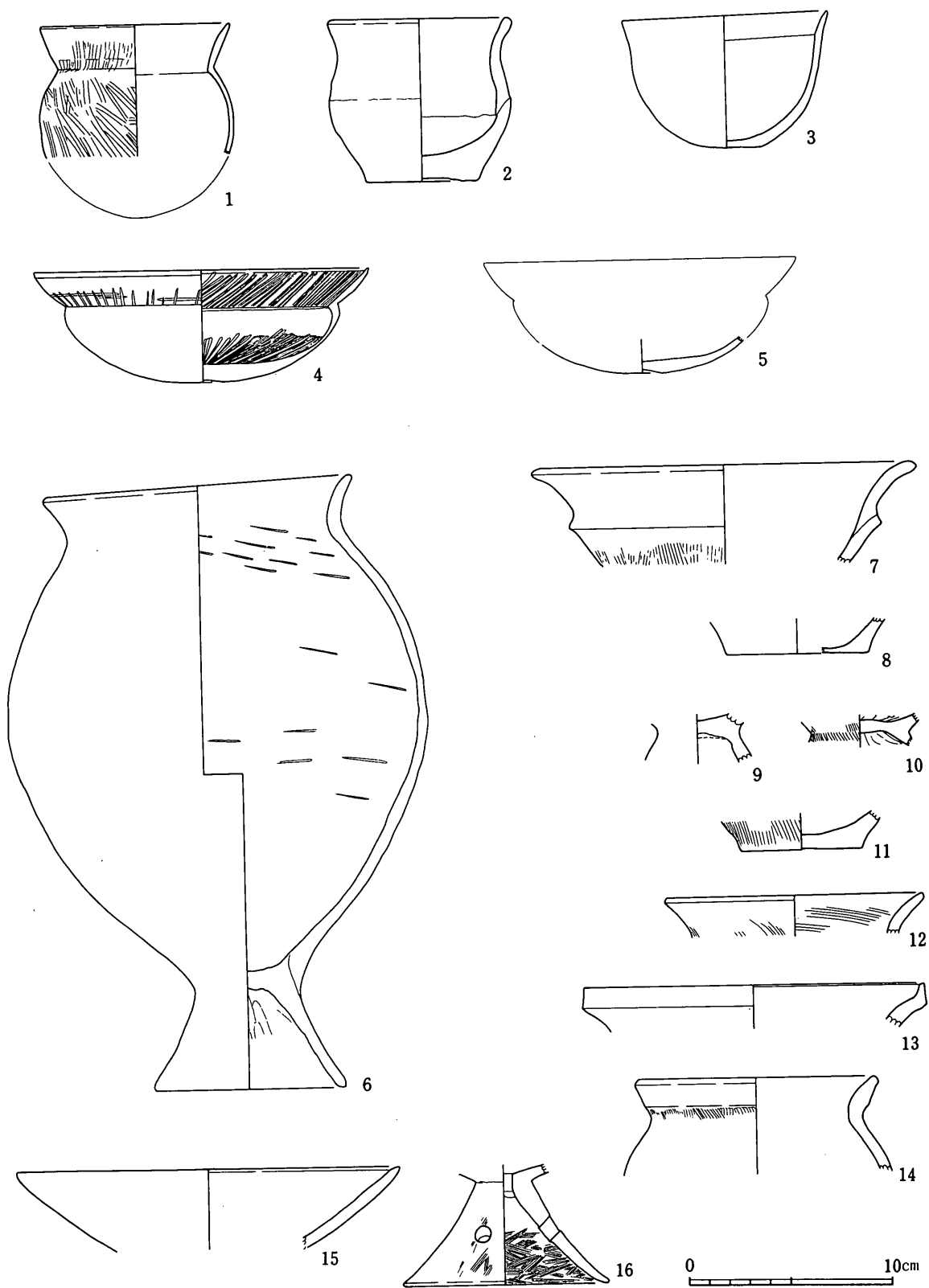
第91图 GOB 10号住居址出土土器(1/3)



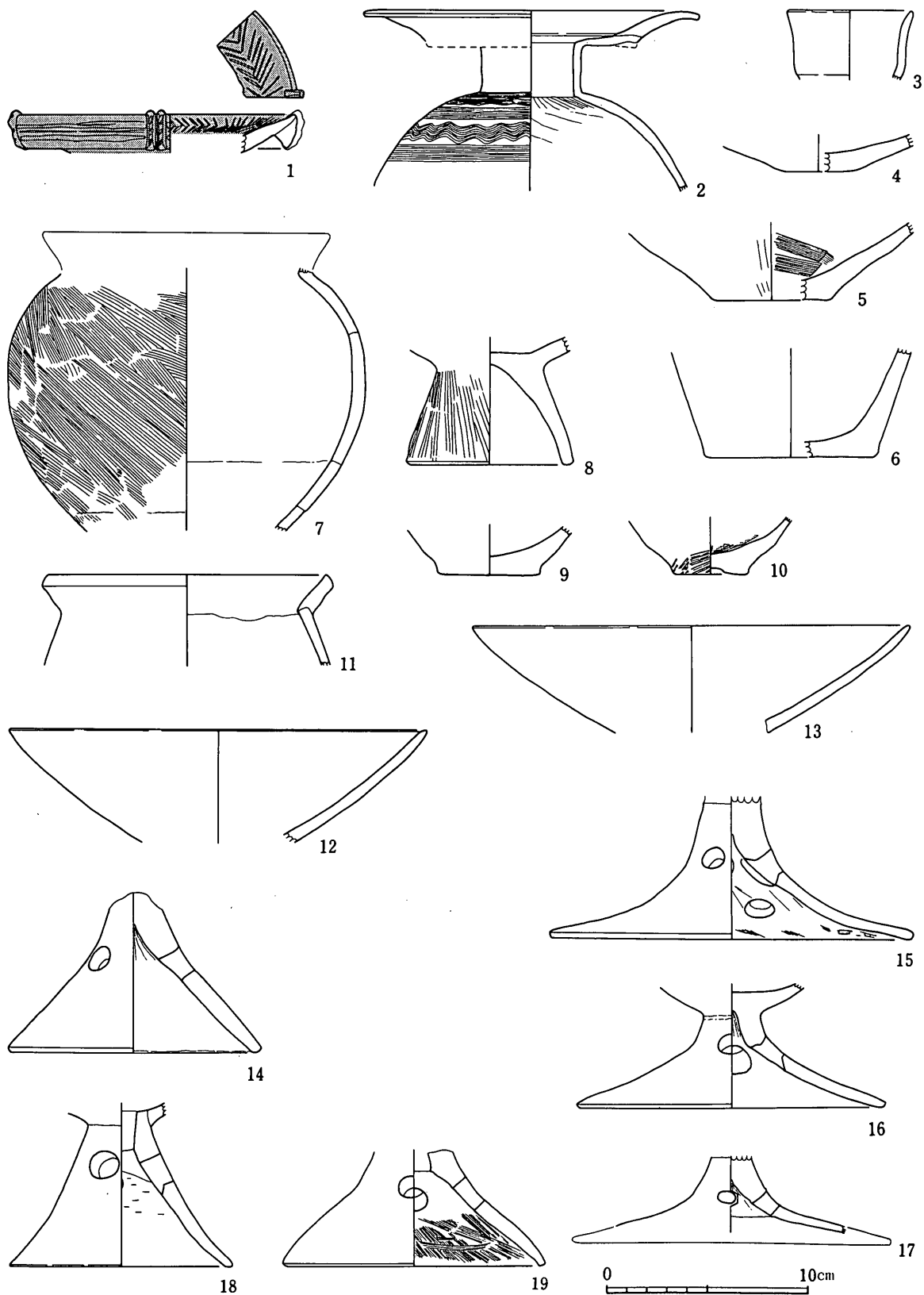
第92图 GOB 10号住居址出土土器(1/3)



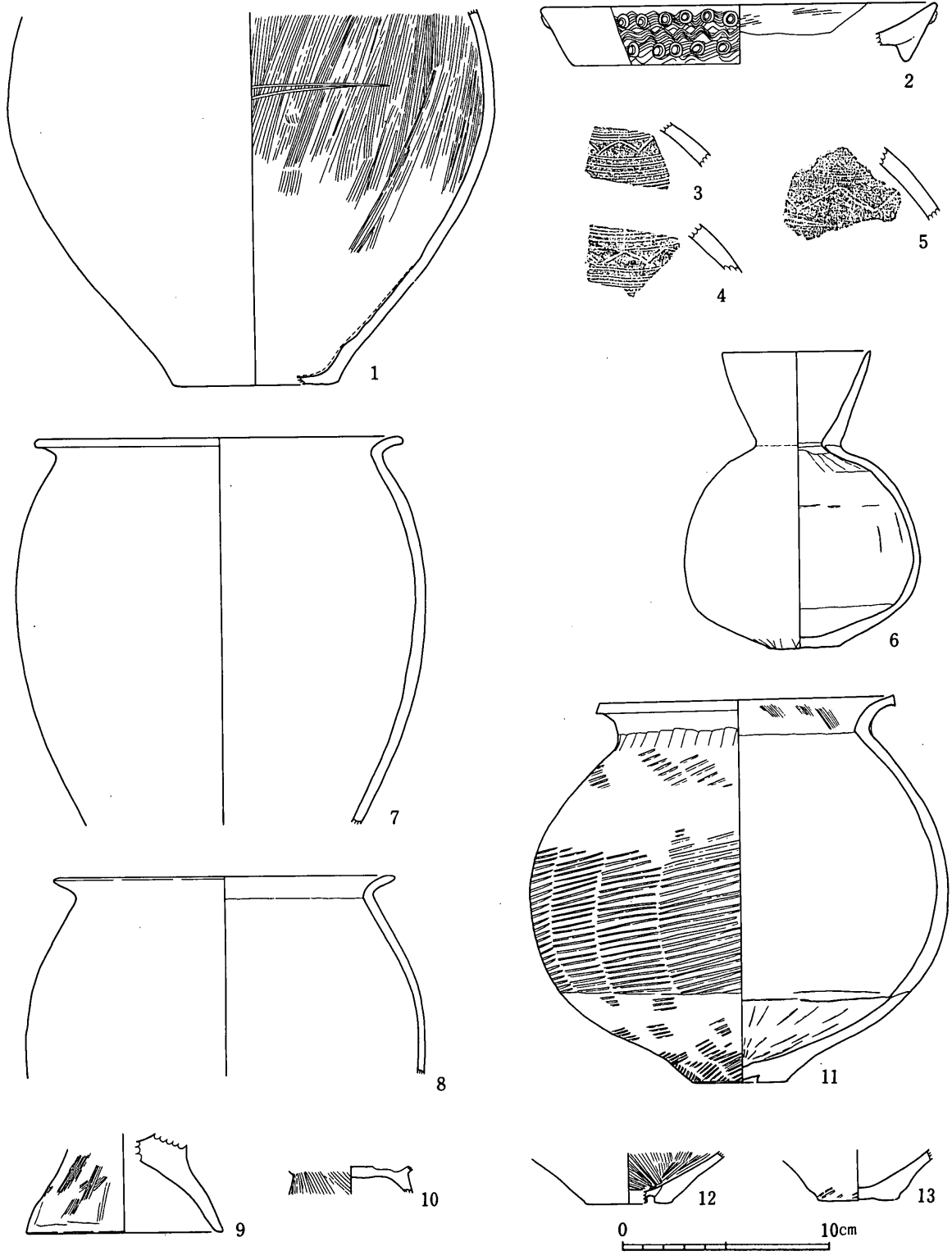
第93图 GOB 10号住居址出土土器(1/3)



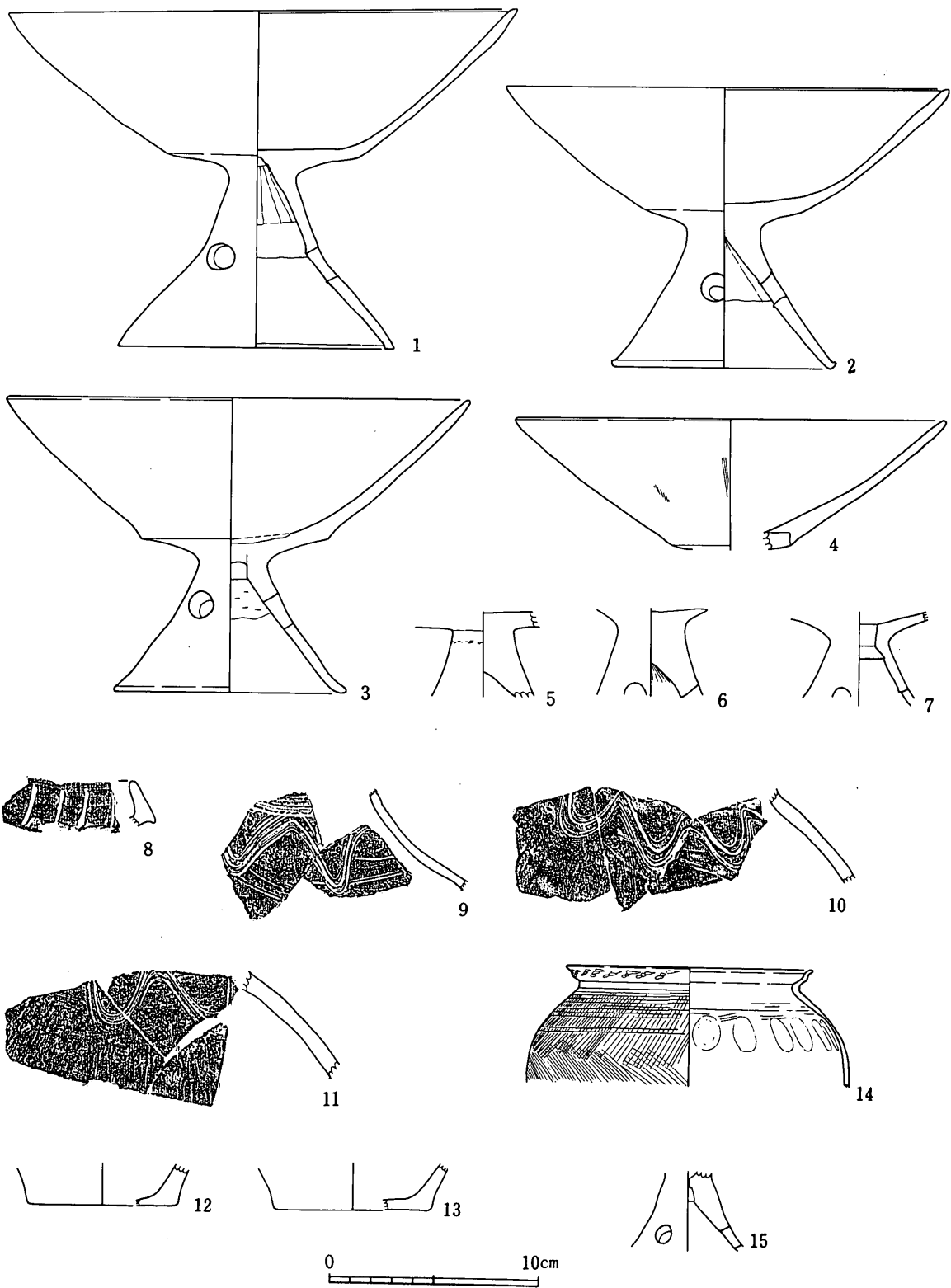
第94图 GOB 10号住居址(1~5)、12号住居址(6)、14号住居址(7~16)出土土器(1/3)



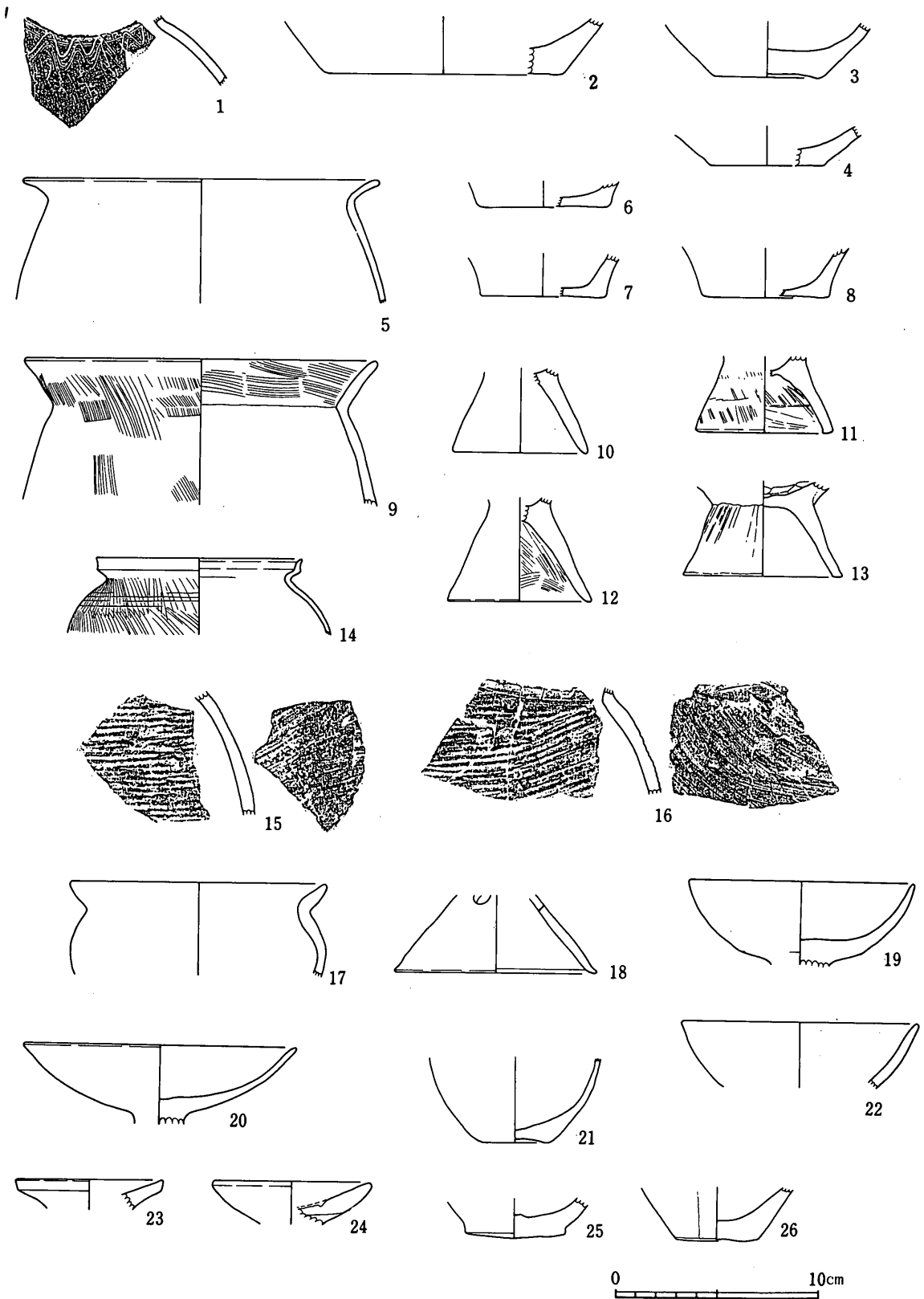
第95图 GOB 15号住居址出土土器(1/2)



第96图 GOB 16号住居址出土土器(1/3)

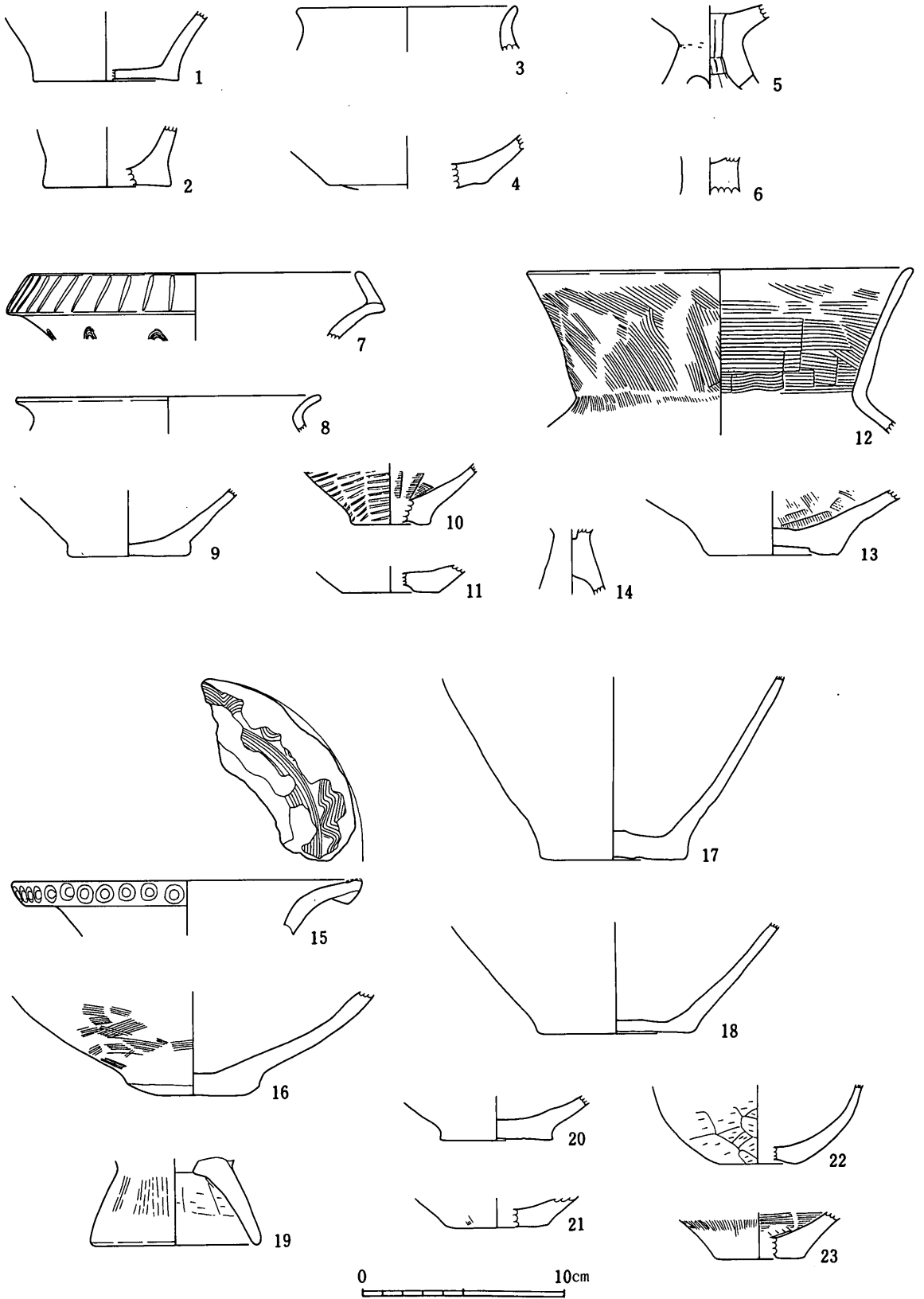


第97图 GOB 16号住居址(1~7)、18号住居址(8~15)出土土器(寸)

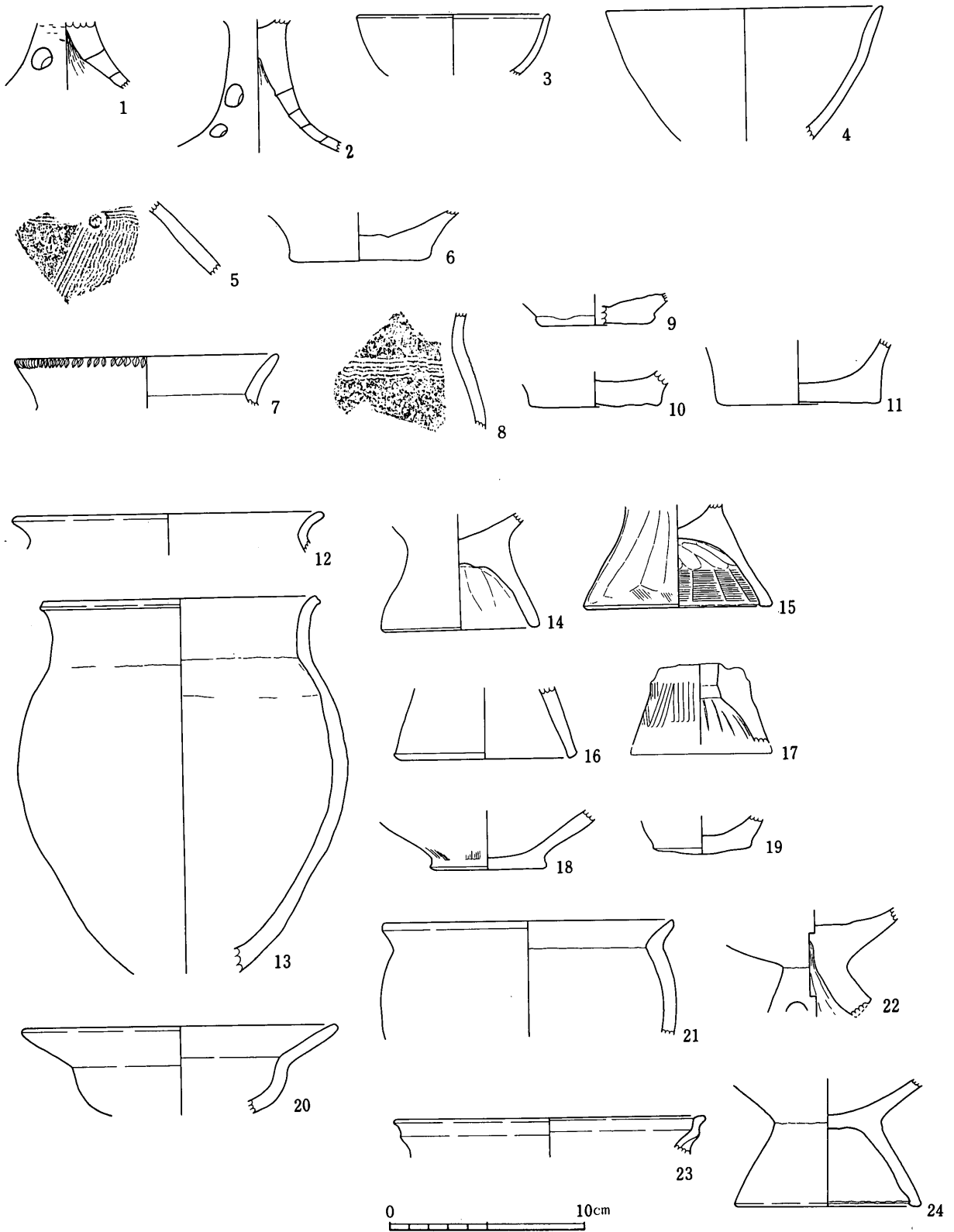


0 10cm

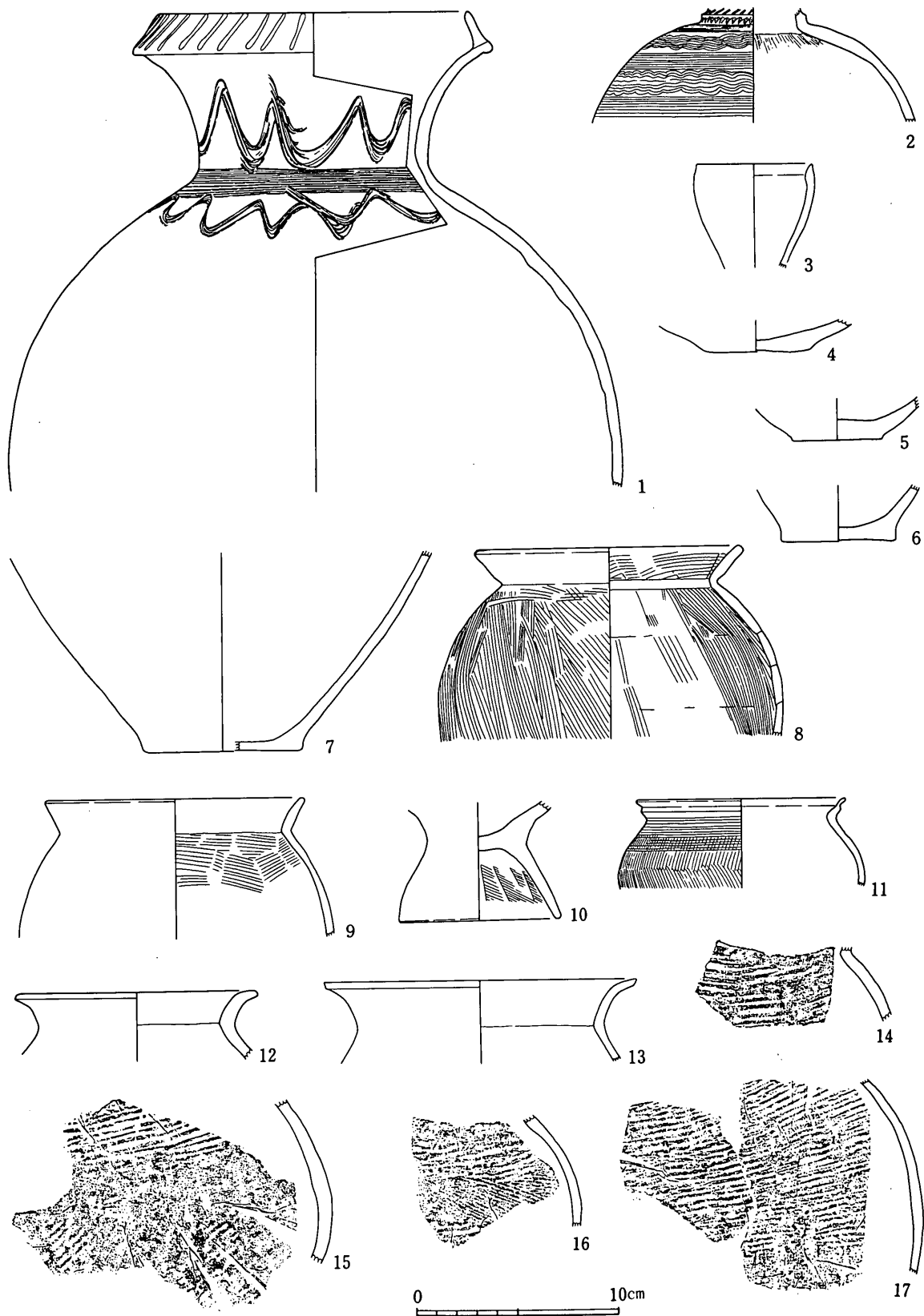
第98图 GOB 19号住居址出土土器(1/3)



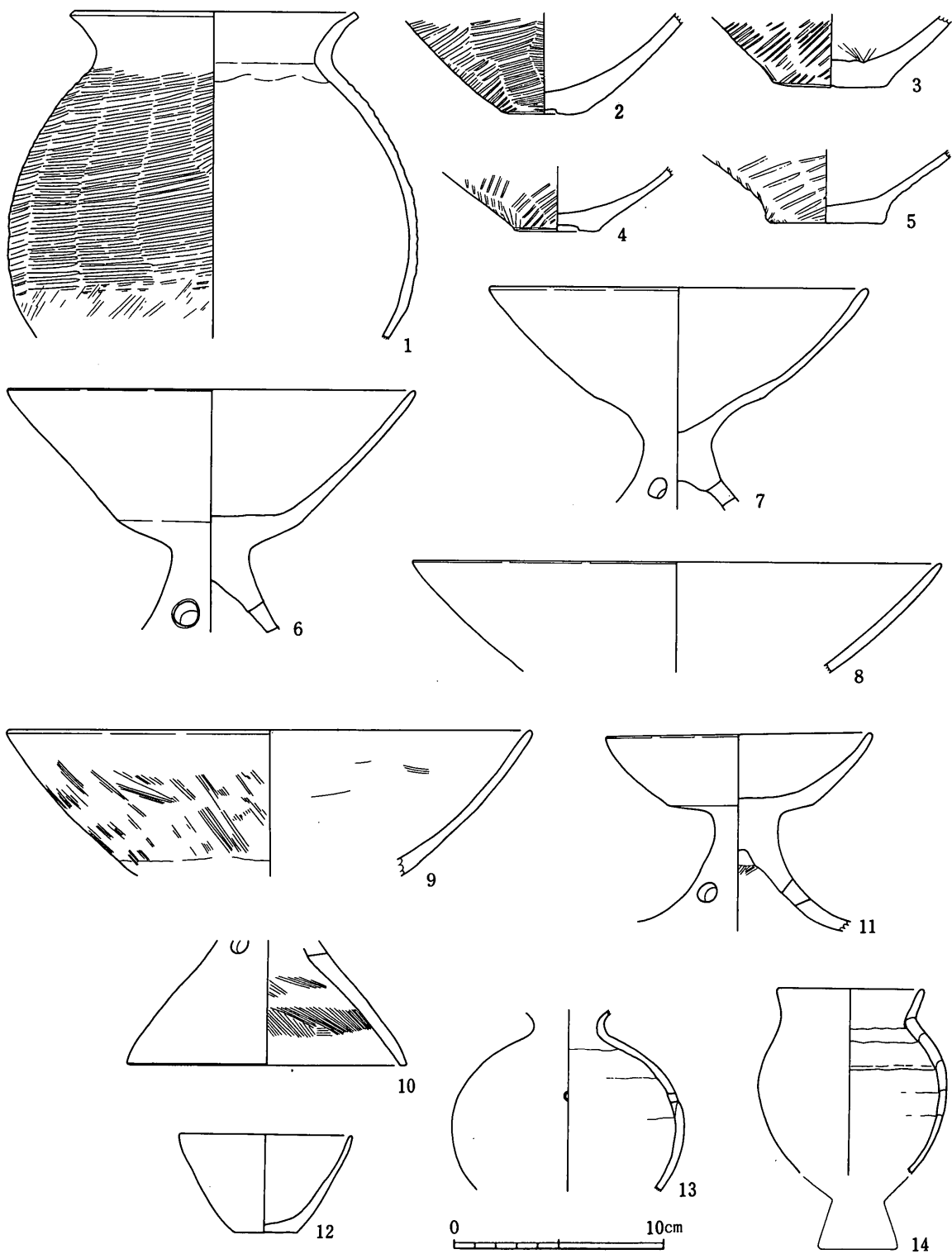
第99图 GOB 20号住居址(1~6)、24号住居址(7~14)、27号住居址(15~23)出土土器(寸)



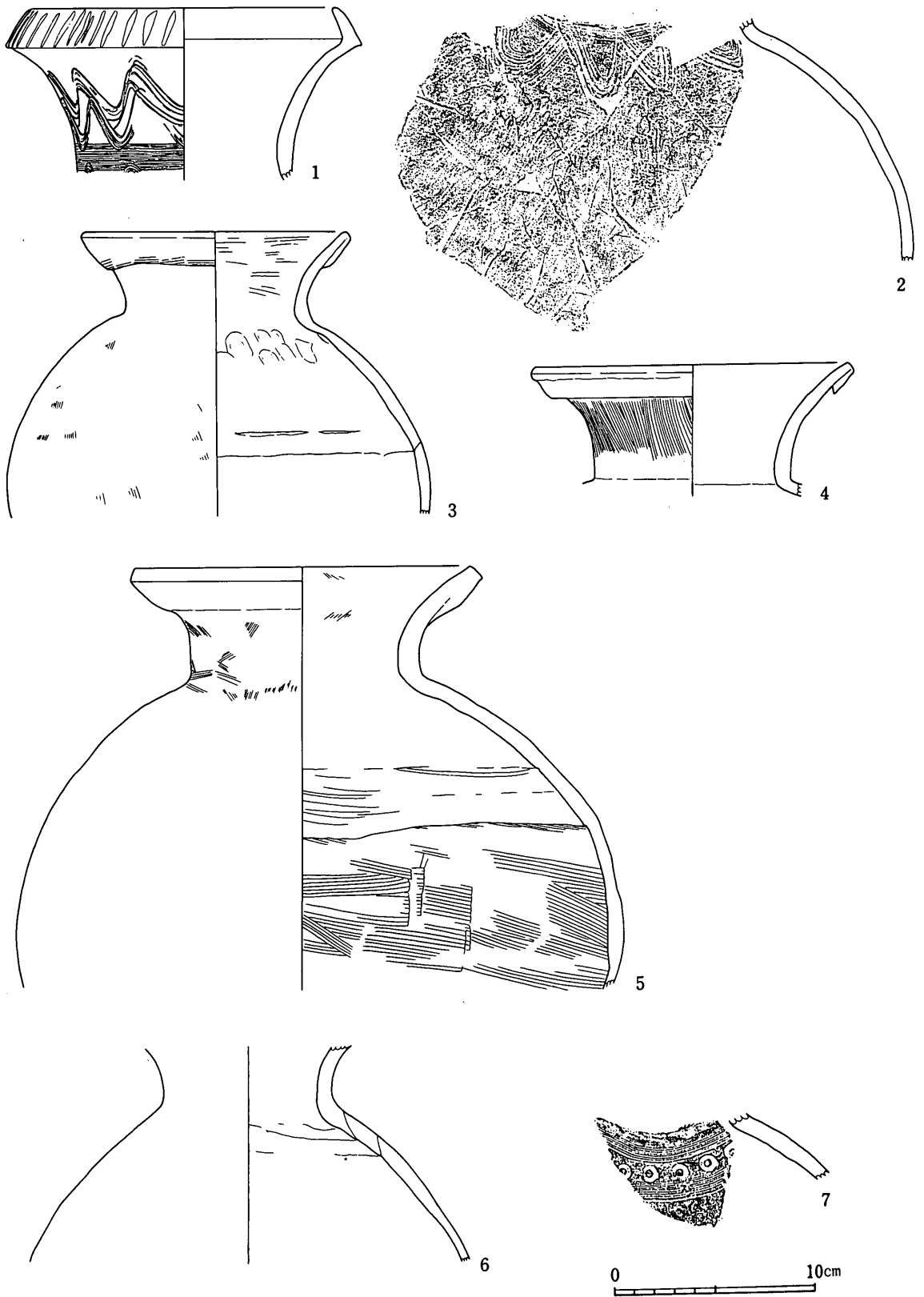
第100图 GOB 27号住居址(1~11)、29号住居址(12~22)、沟址12(23·24)出土土器(1/3)



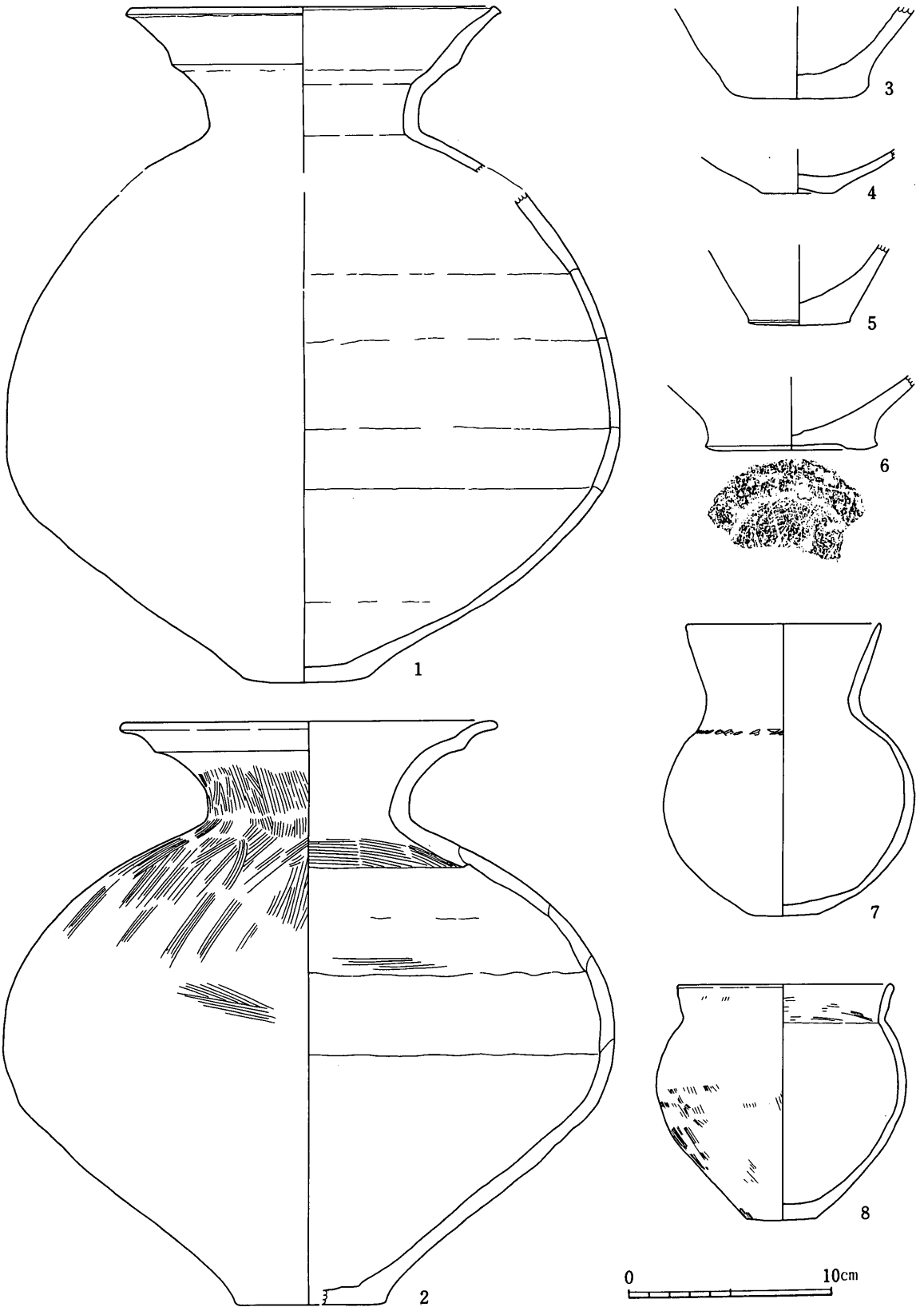
第101图 GOB 溝址15 5層出土土器(1/3)



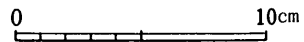
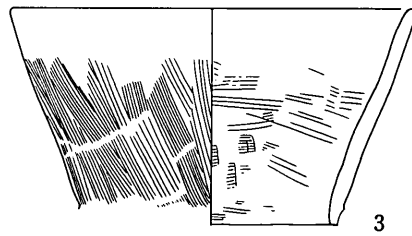
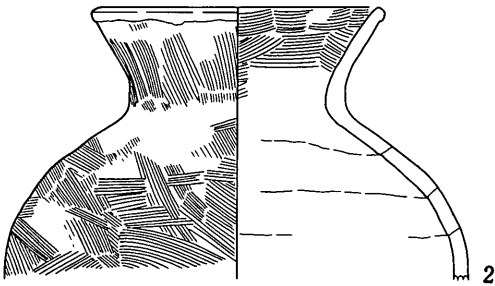
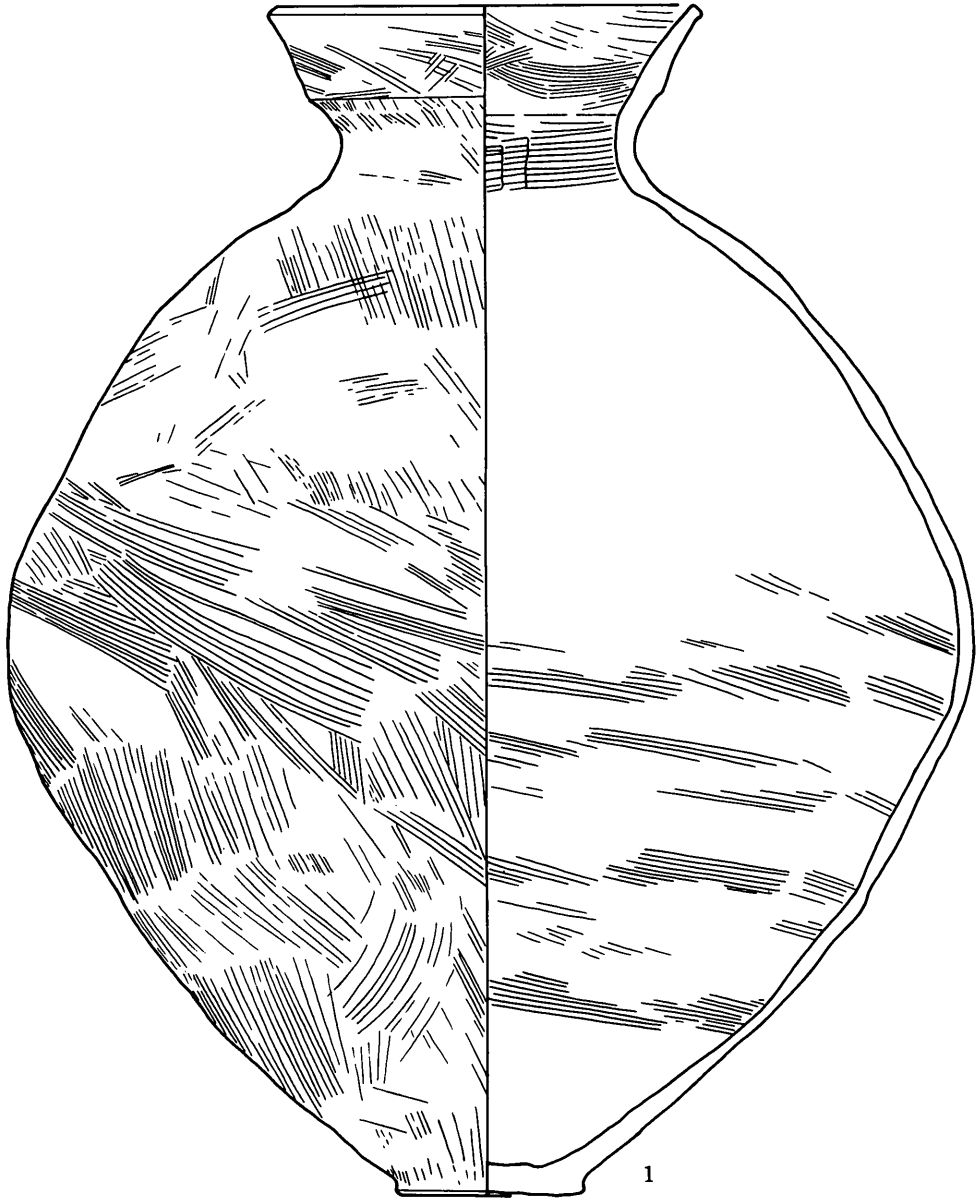
第102図 GOB 溝址15 5層出土土器(壺)



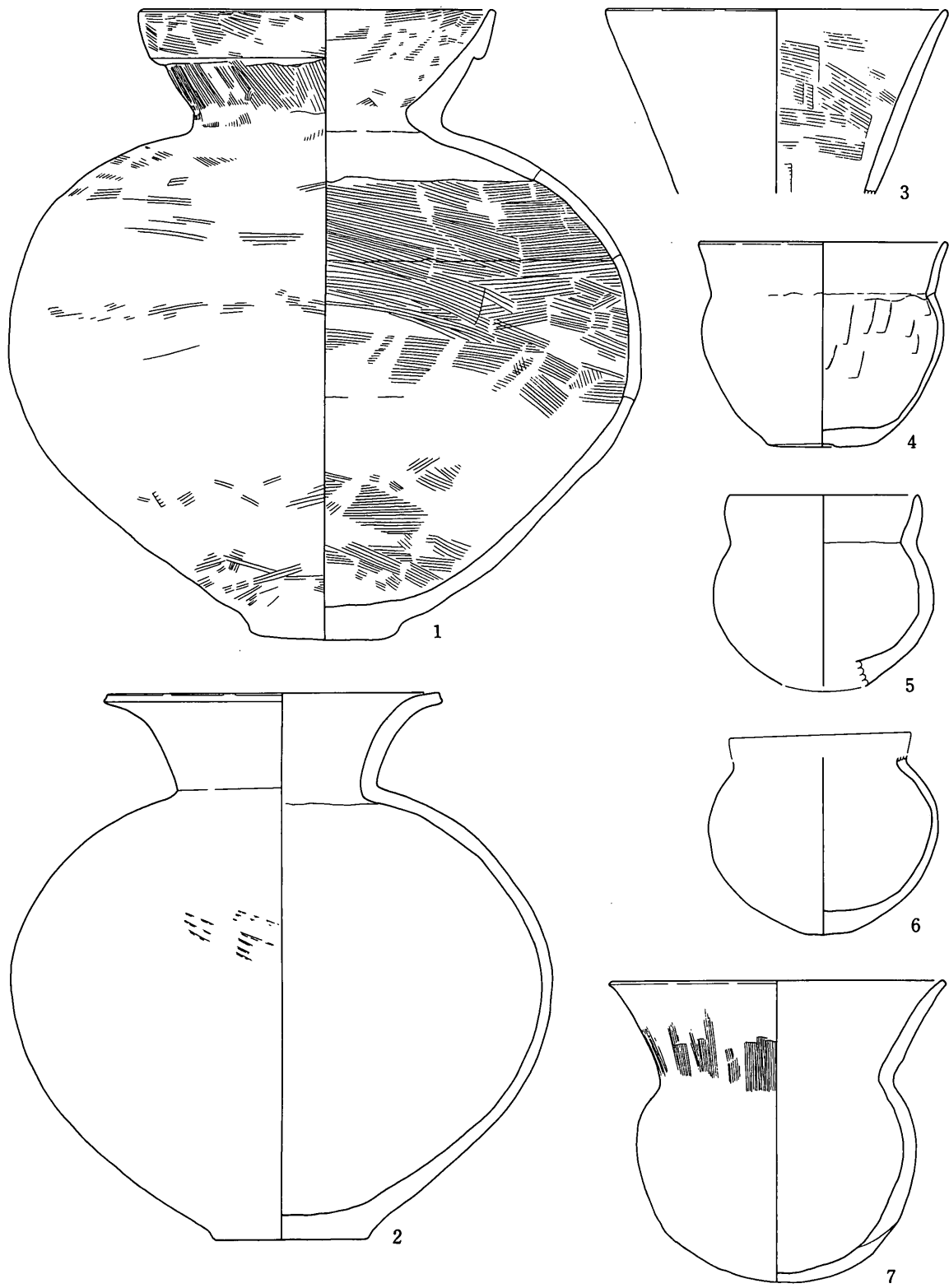
第103图 G.O.B 溝址15 4層出土土器(1/3)



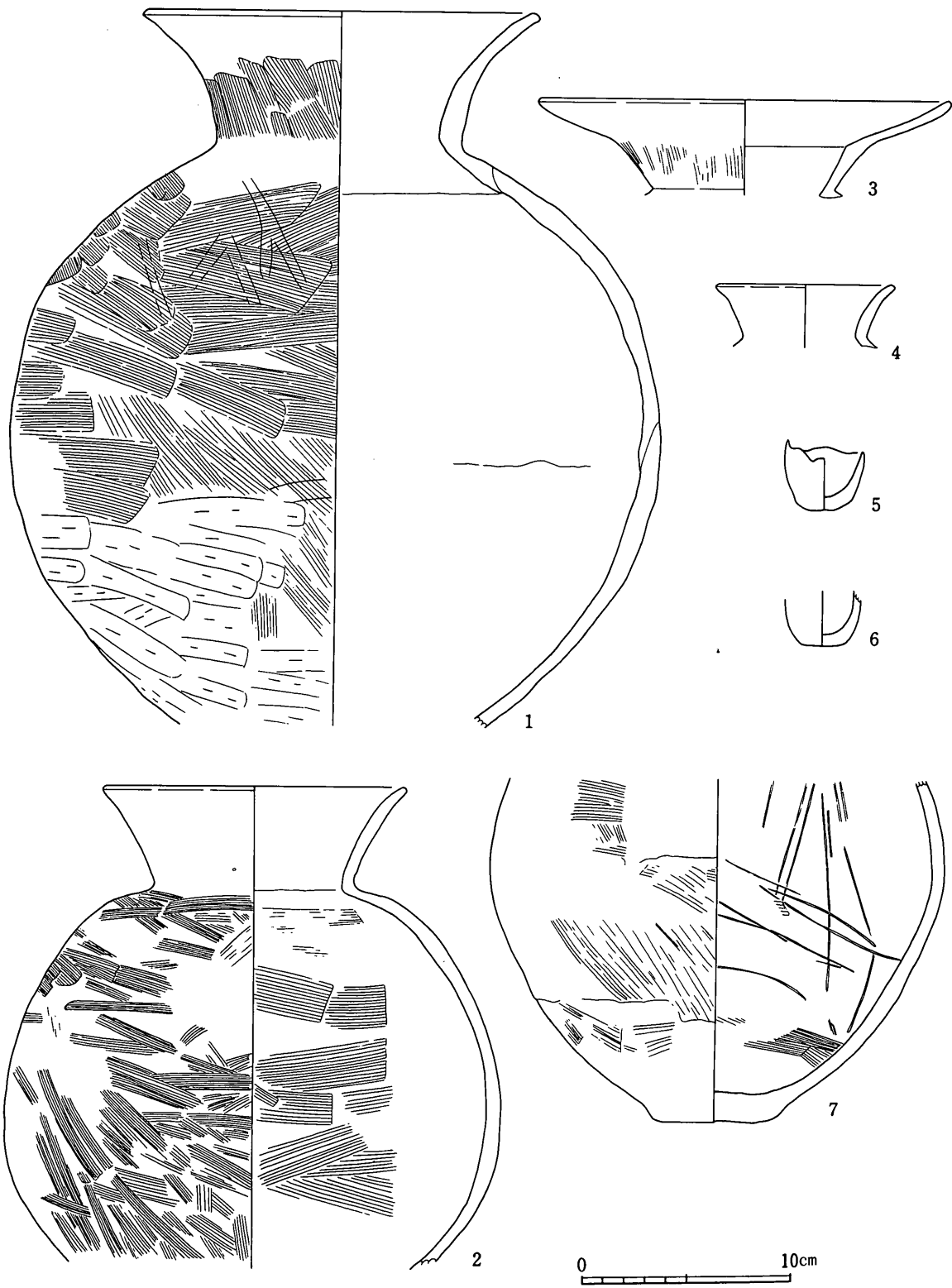
第104図 GOB 溝址15 4層出土土器(1/3)



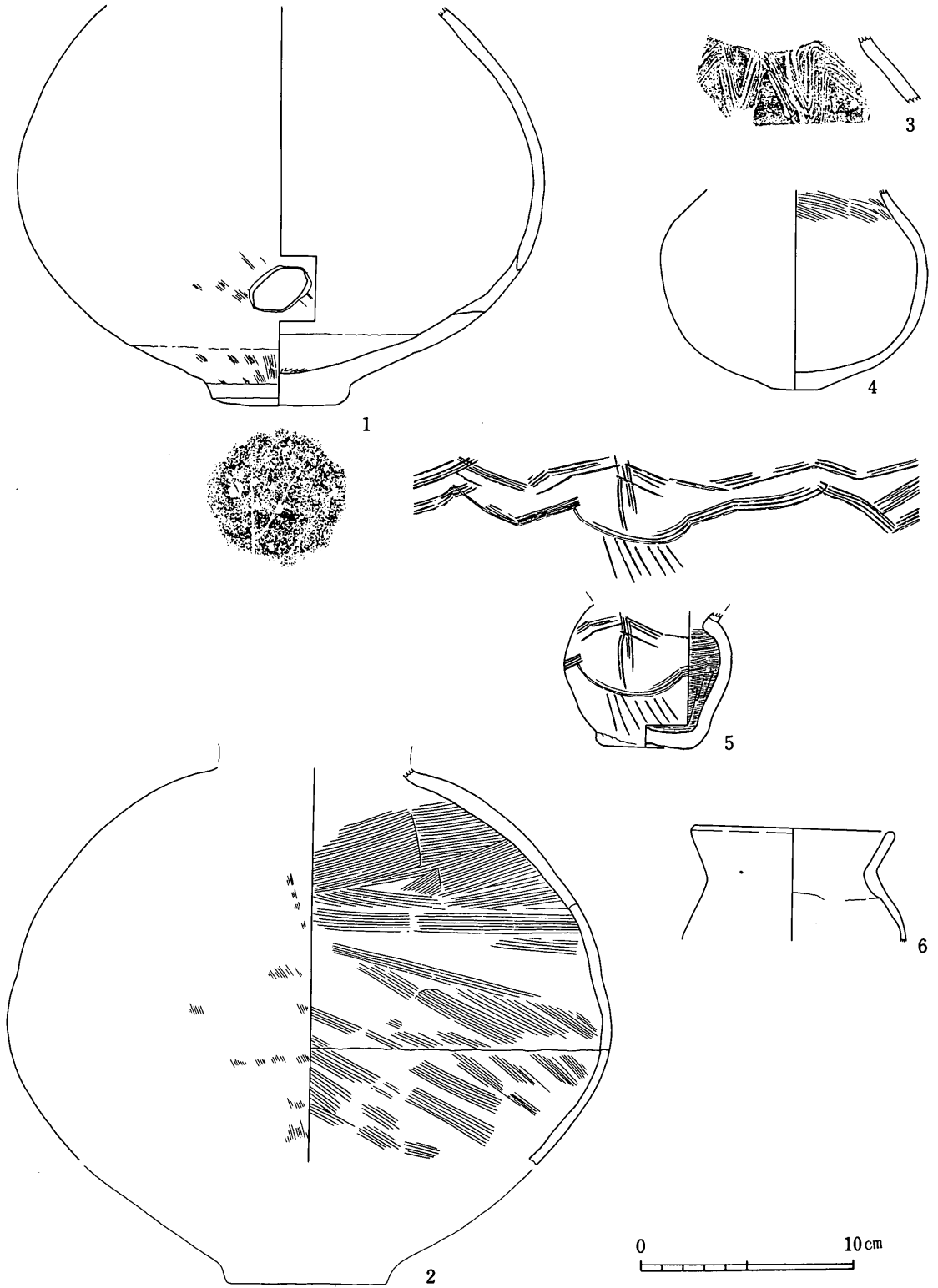
第105図 GOB 溝址15 4層出土土器(1/3)



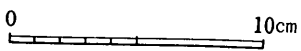
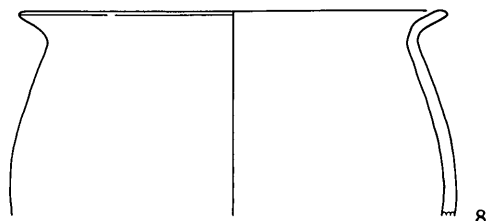
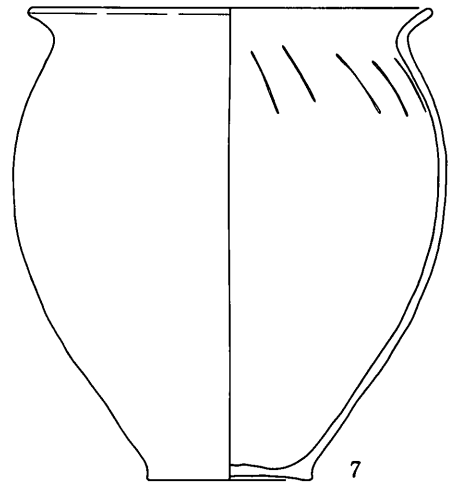
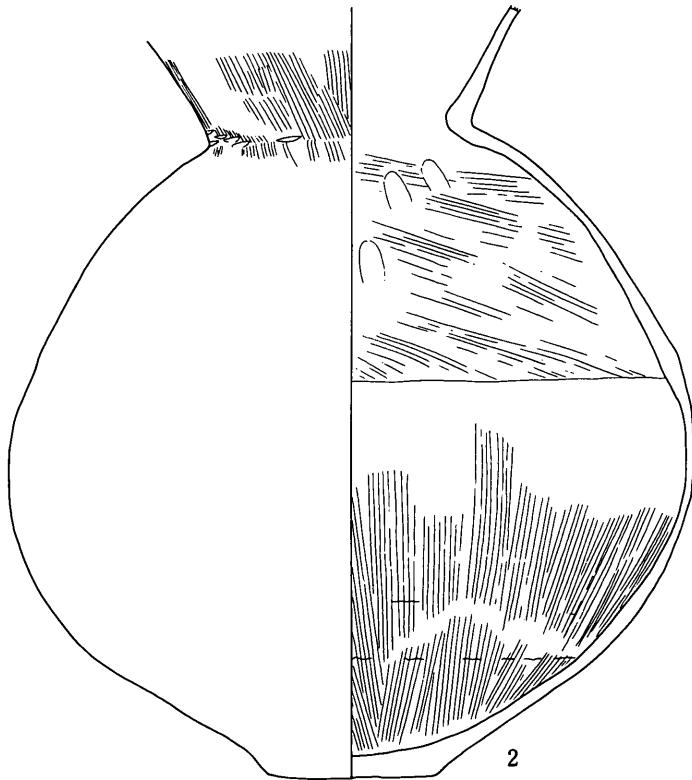
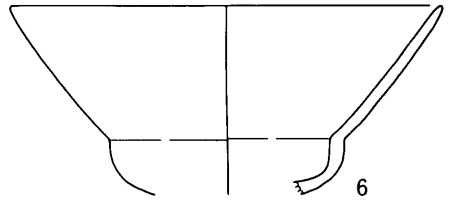
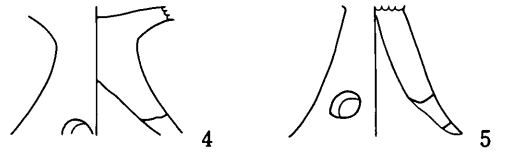
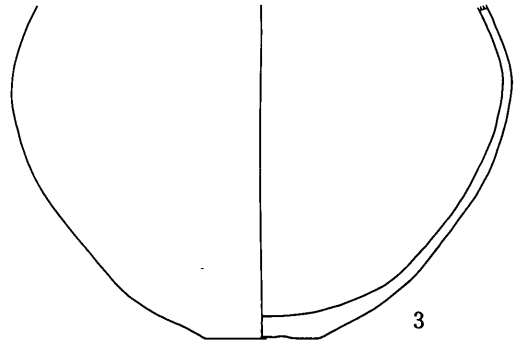
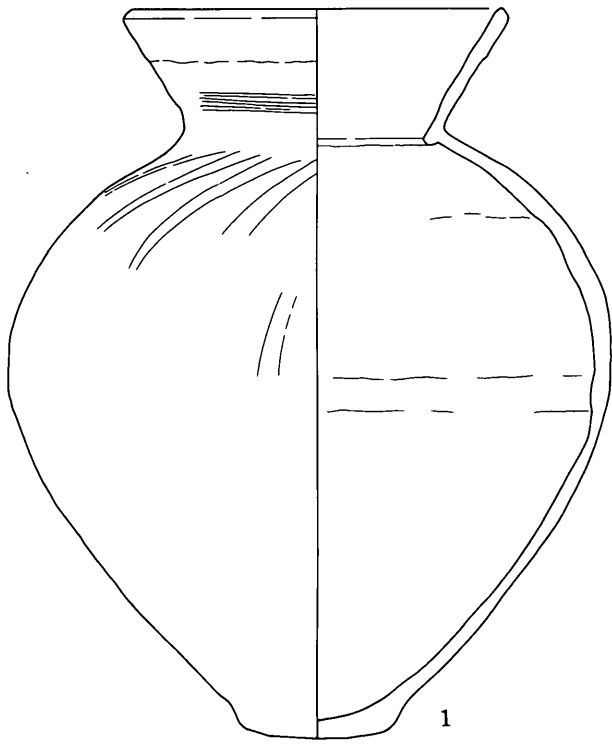
第106図 G.O.B. 溝址15 4層出土土器(寸)



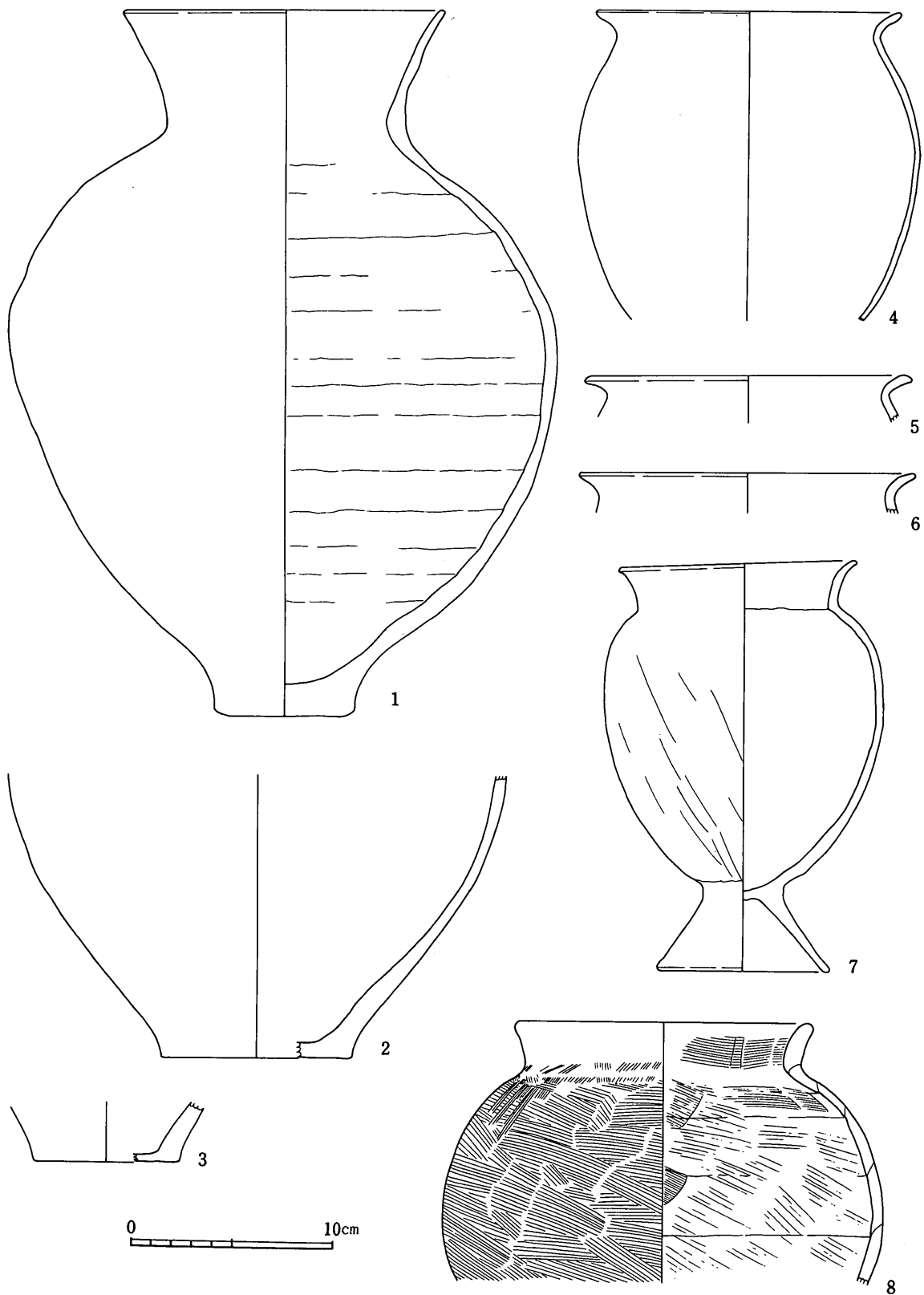
第107图 GOB 溝址15 4層出土土器(1/3)



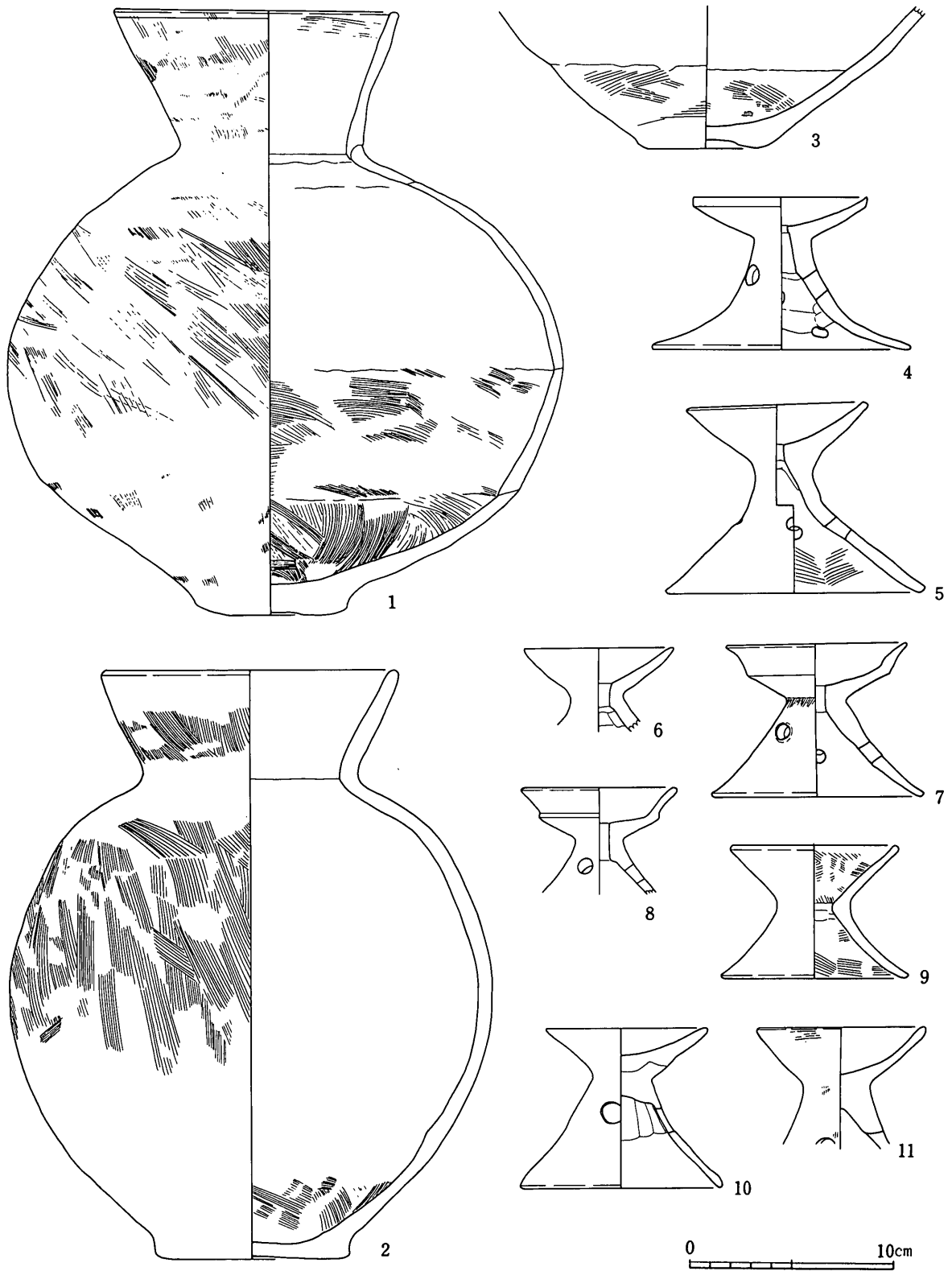
第108図 GOB 溝址15 4層出土土器(1/3)



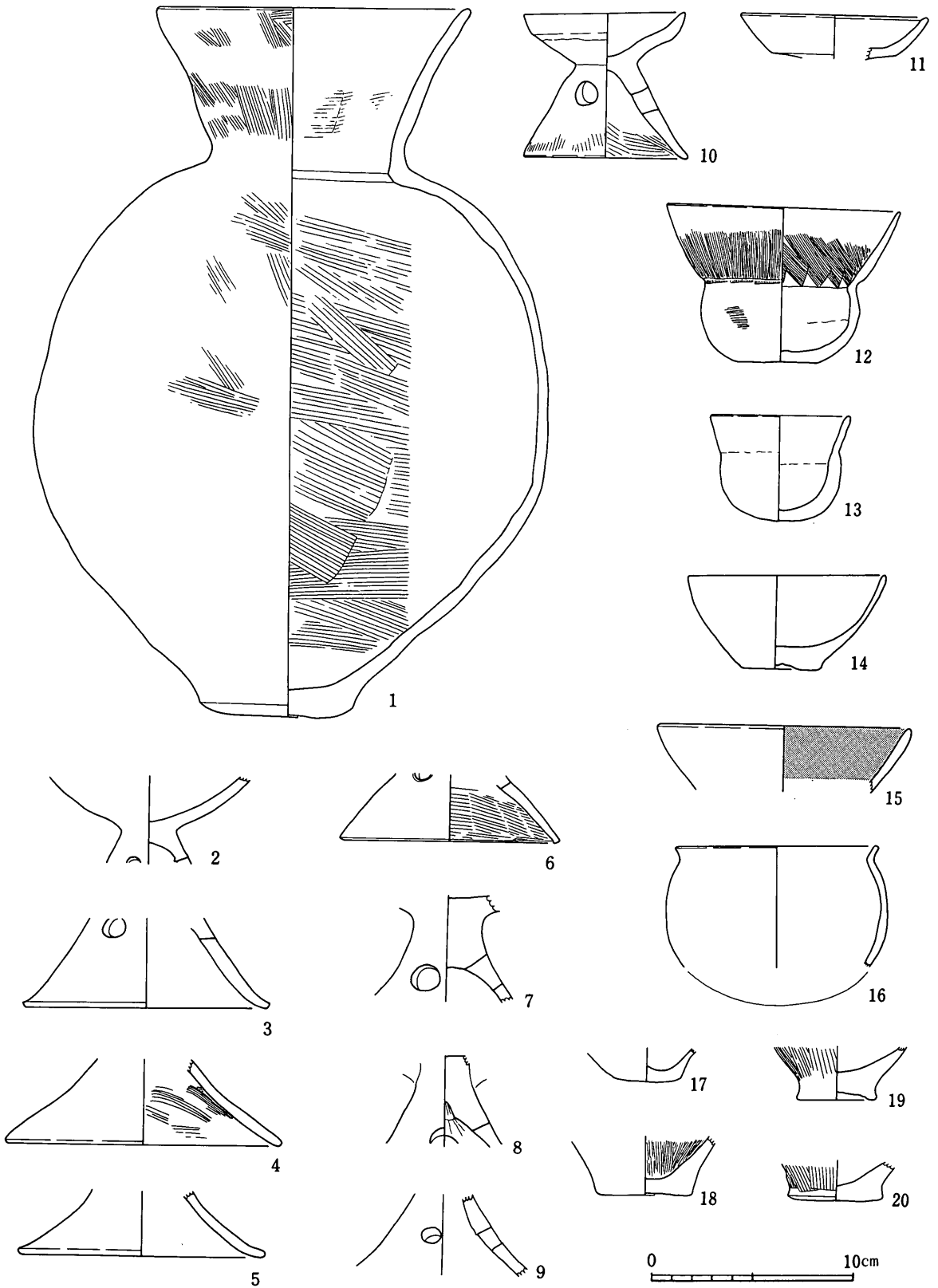
第109図 GOB 溝址15 4層出土土器(1/3)



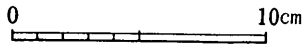
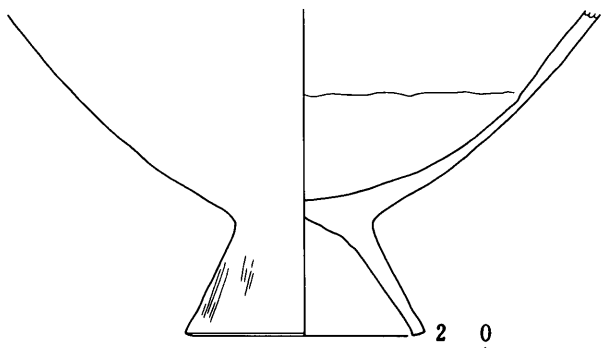
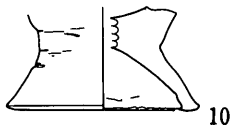
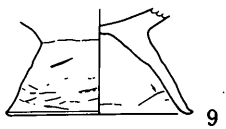
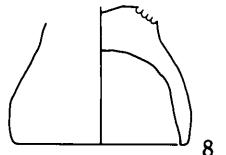
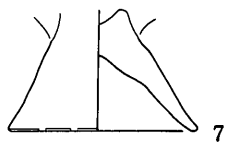
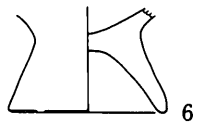
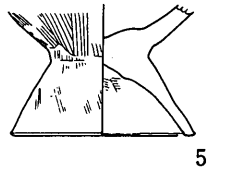
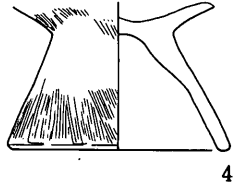
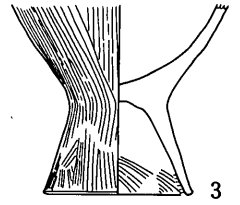
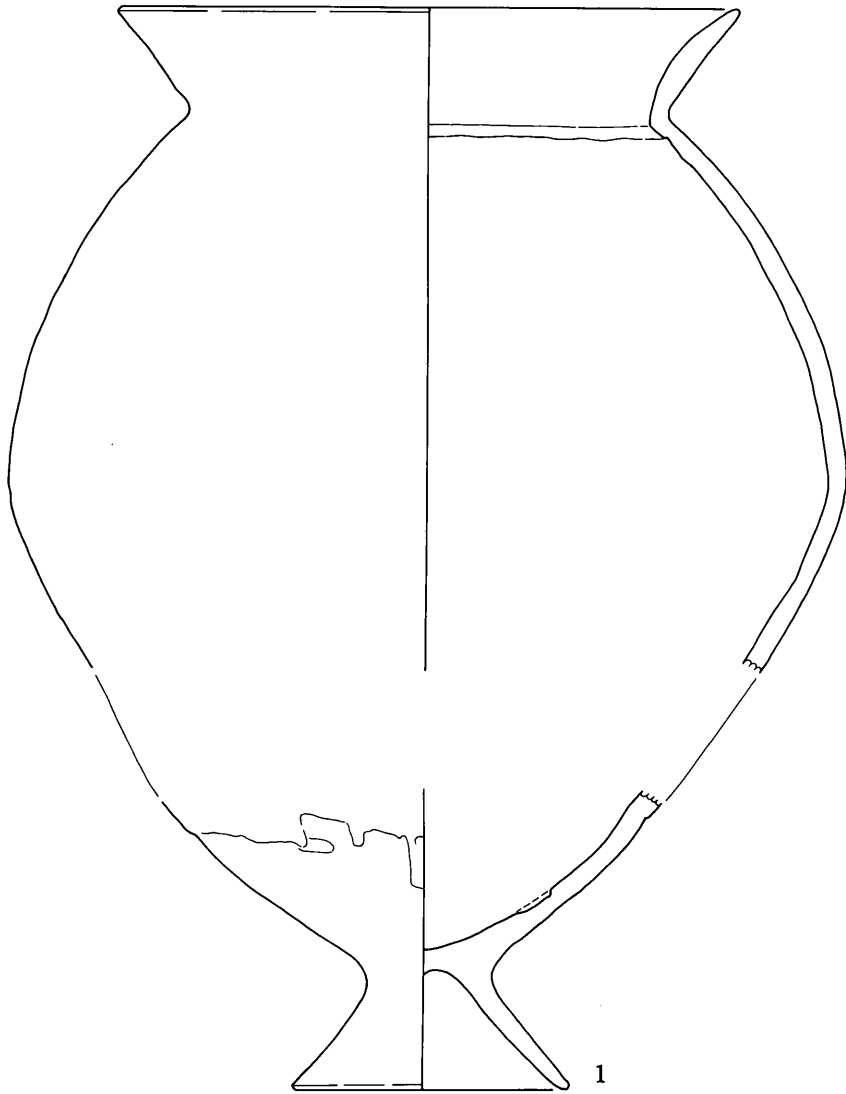
第110図 GOB 溝址15 4層出土土器(1/3)



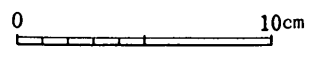
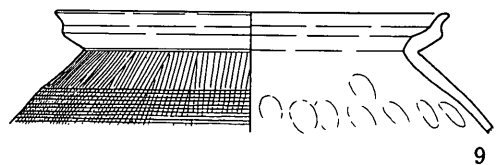
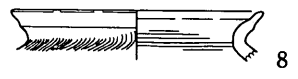
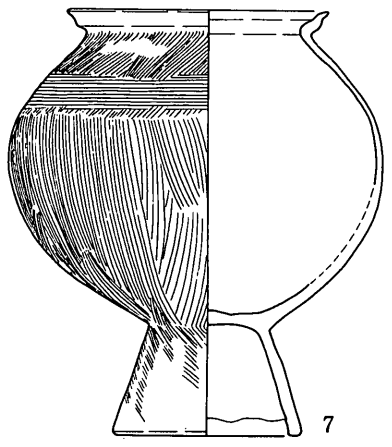
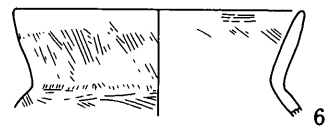
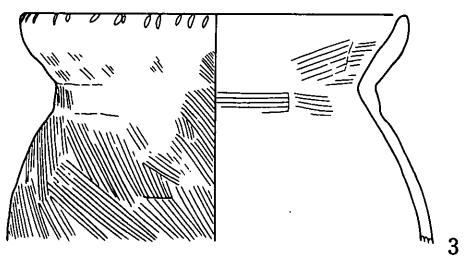
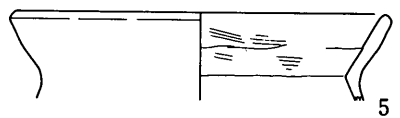
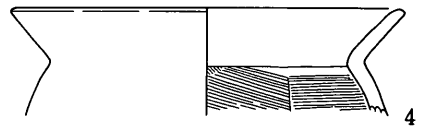
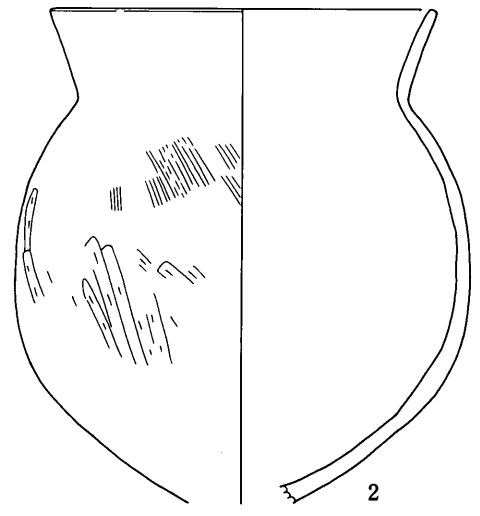
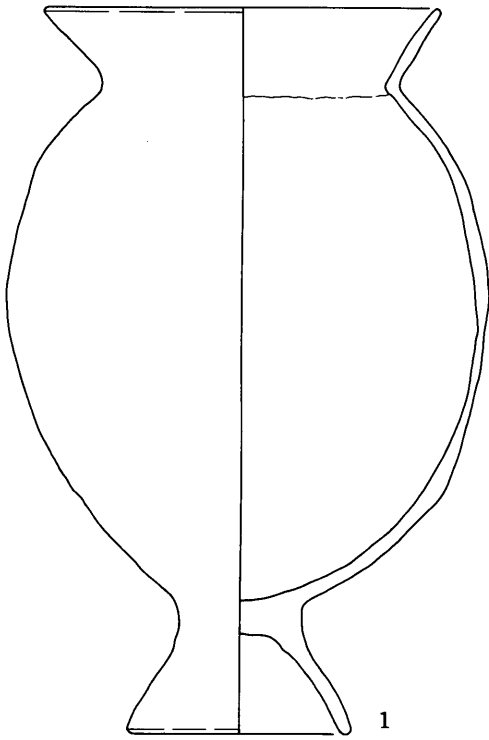
第111图 GOB 溝址15 4層出土土器(1/3)



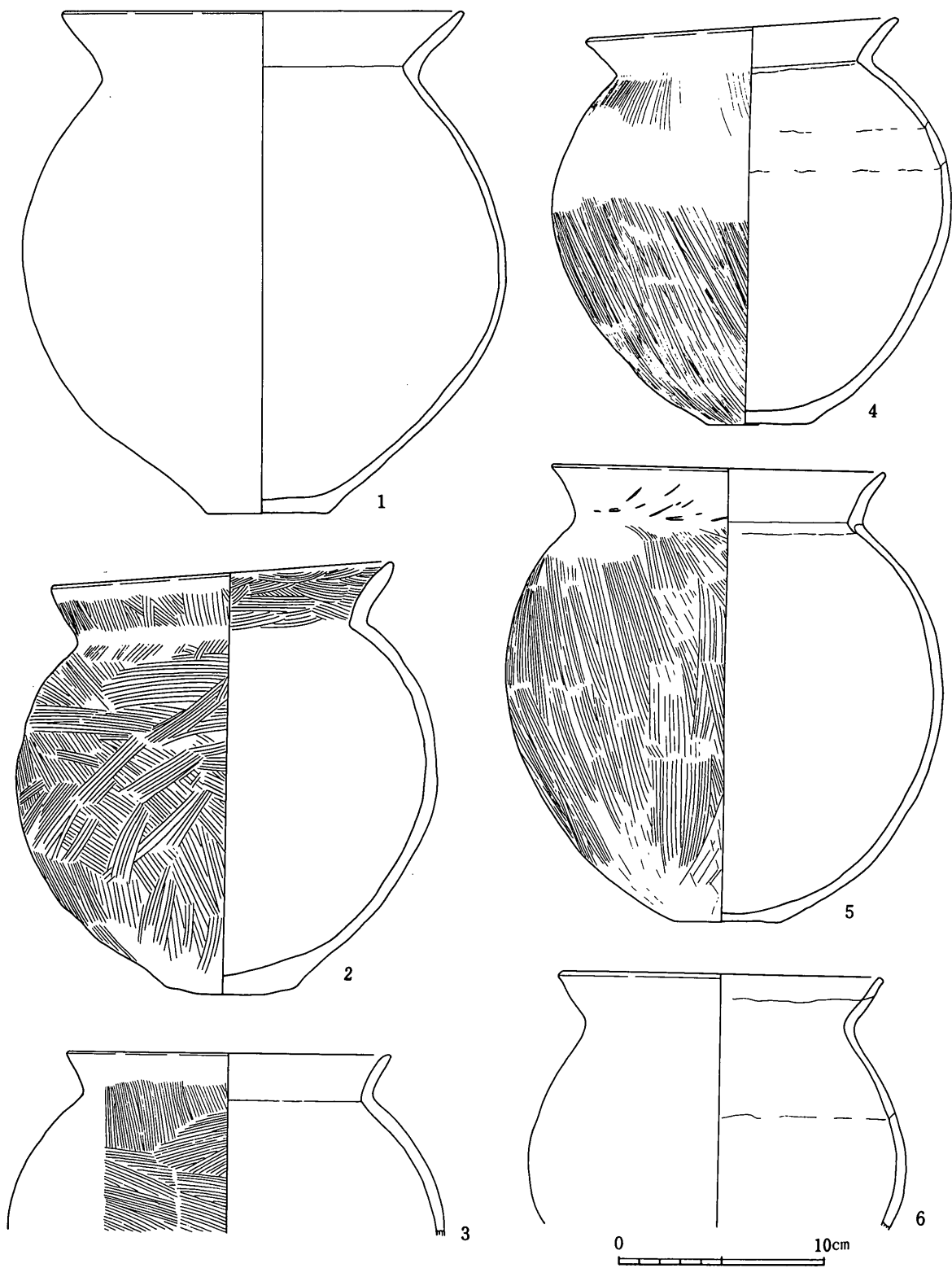
第112図 GOB 溝址15 4層出土土器(1/3)



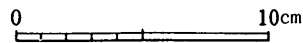
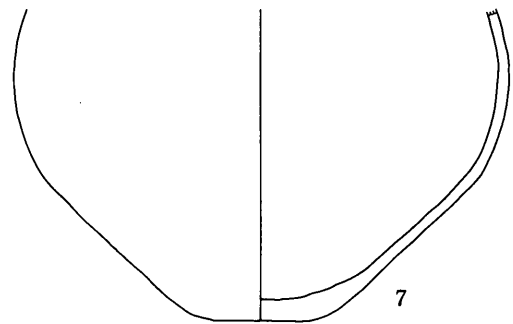
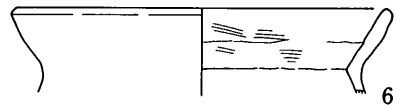
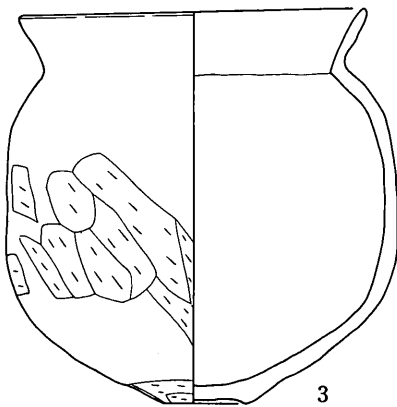
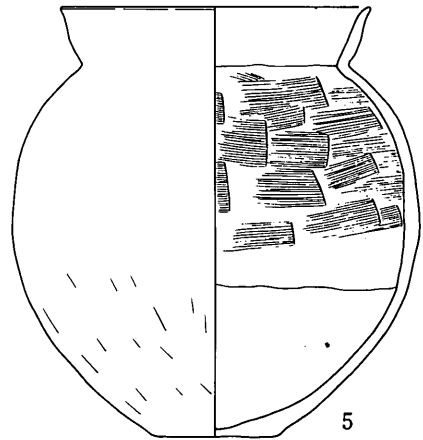
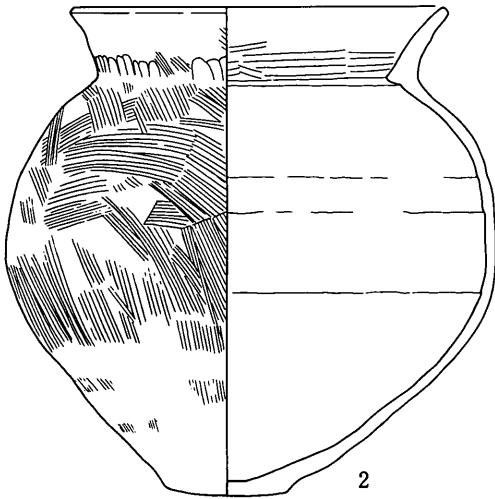
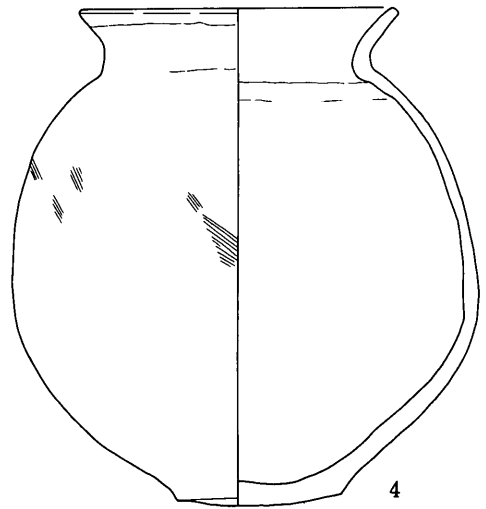
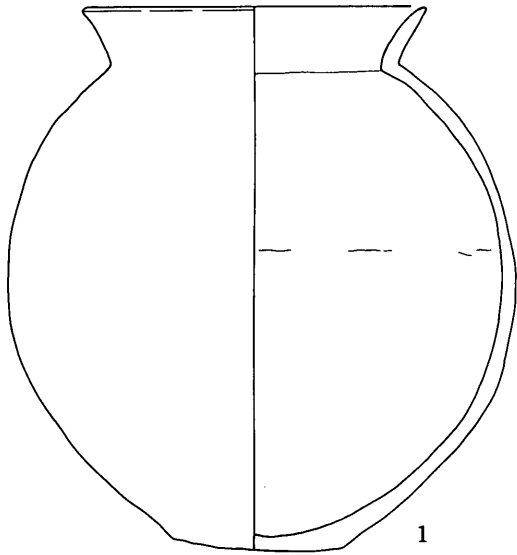
第113图 GOB 沟址15 4层出土土器(1/2)



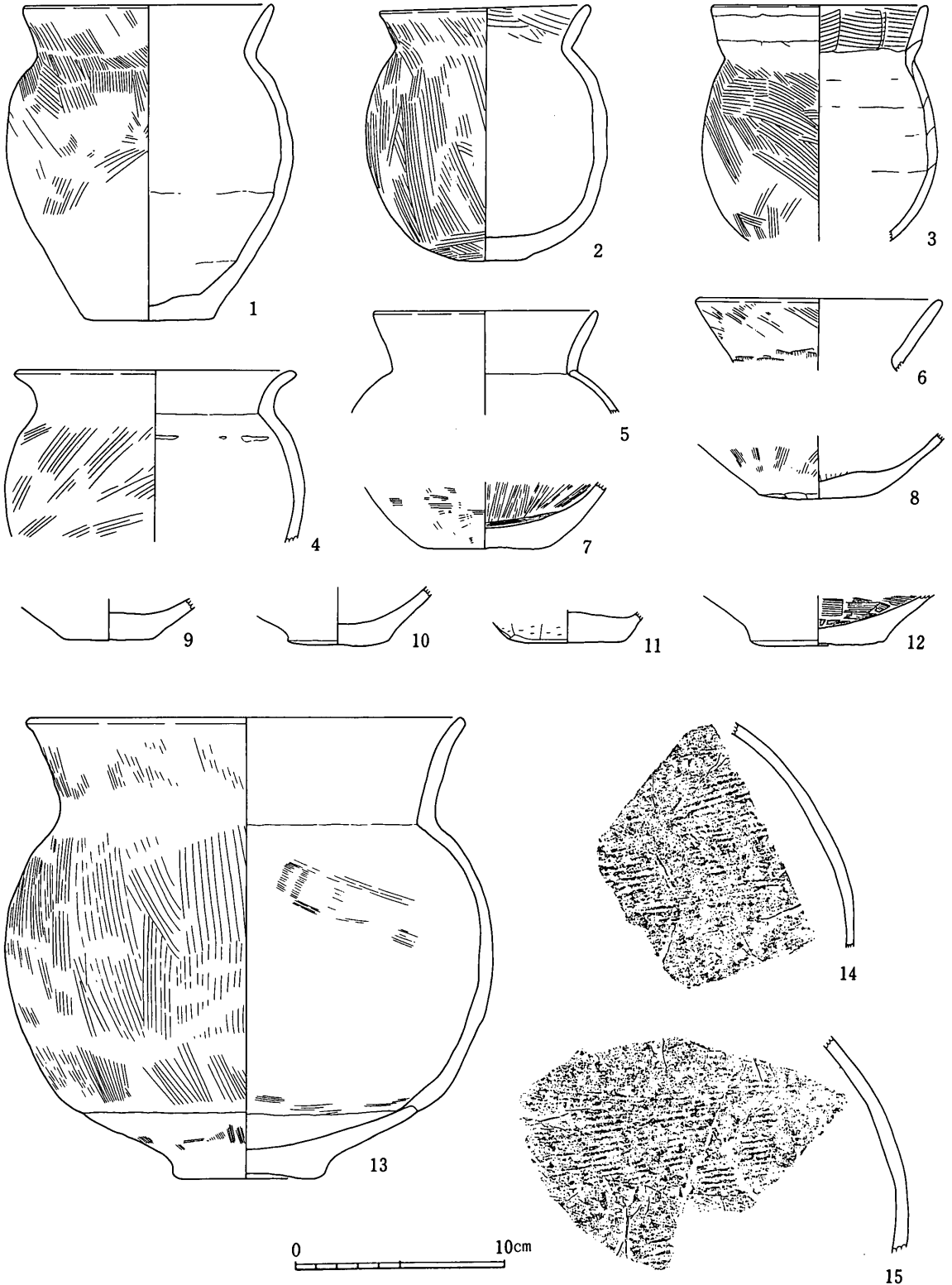
第114図 GOB 溝址15 4層出土土器(1/3)



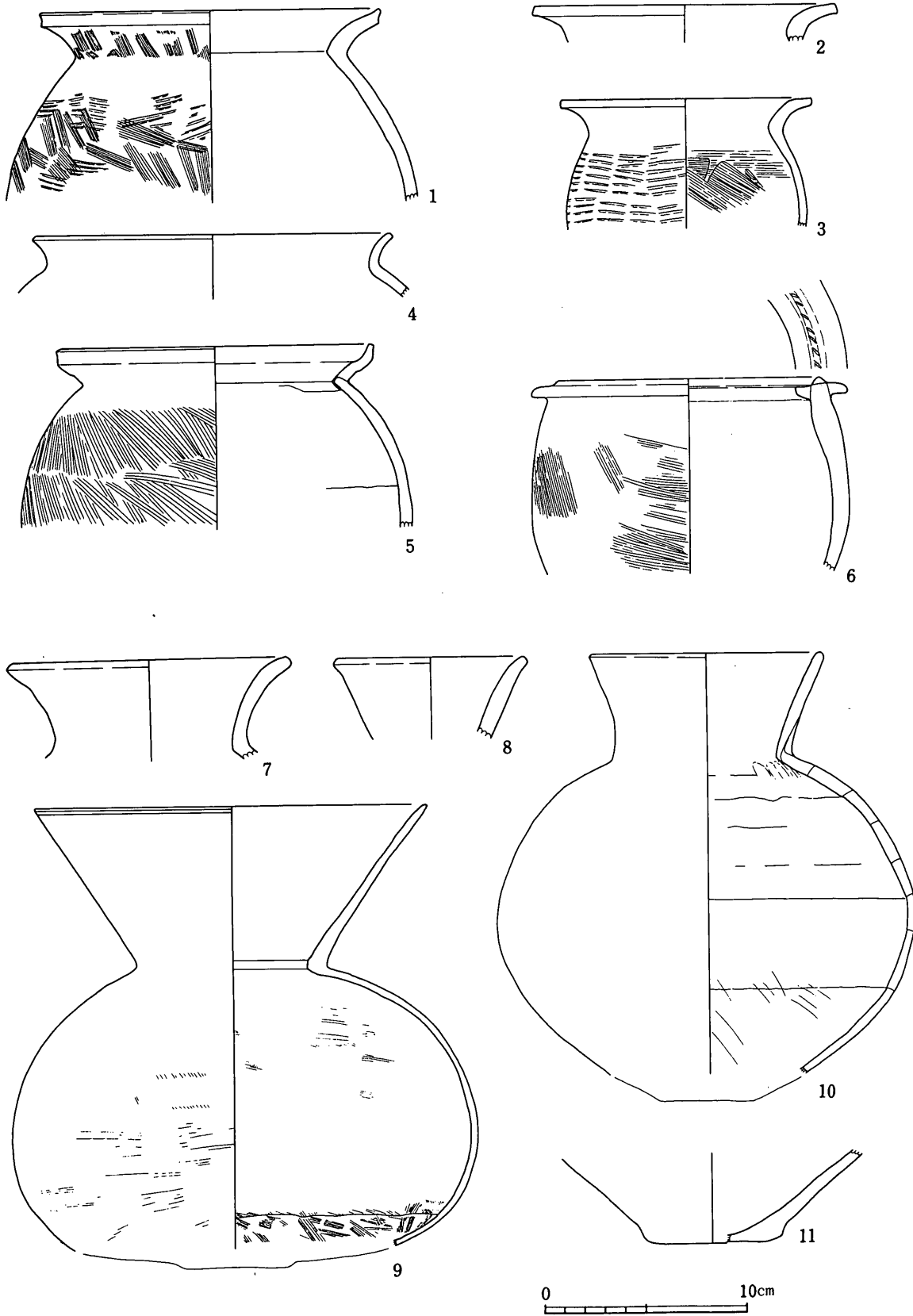
第115図 GOB 溝址15 4層出土土器(1/3)



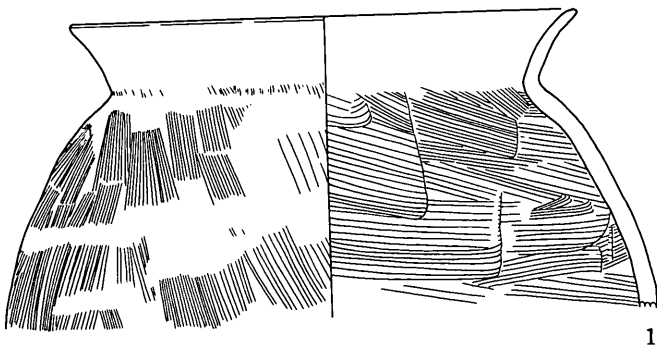
第116図 GOB 溝址15 4層出土土器(1/2)



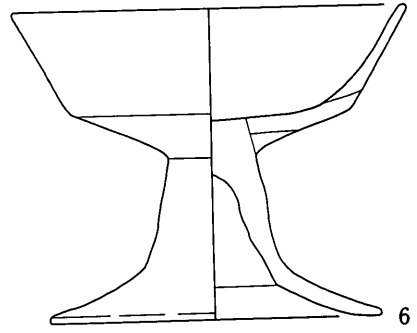
第117図 GOB 溝址15 4層出土土器(3)



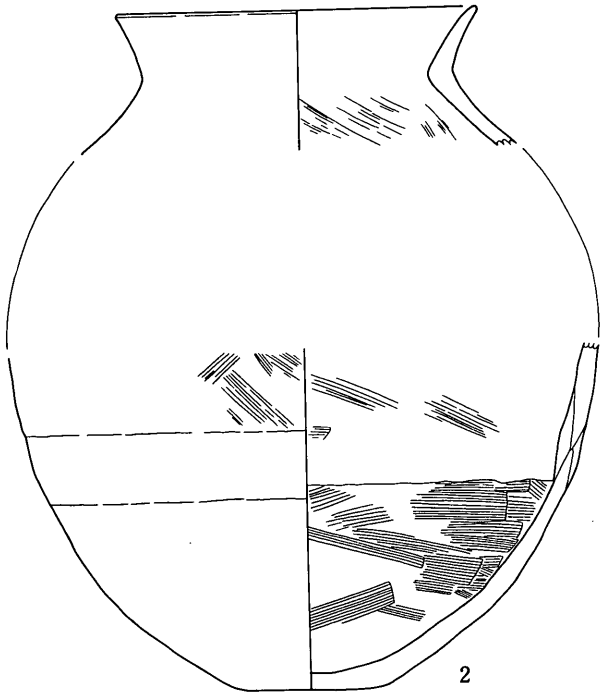
第118図 GOB 溝址15 4層(1~6)、3層(7~11)出土土器(寸)



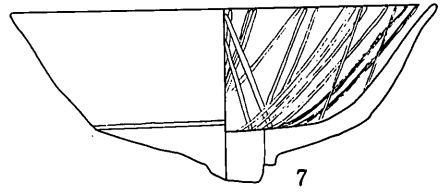
1



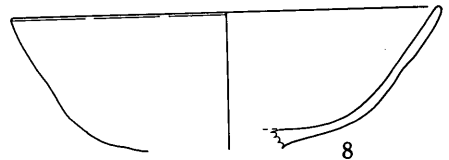
6



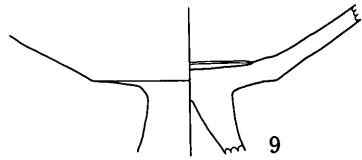
2



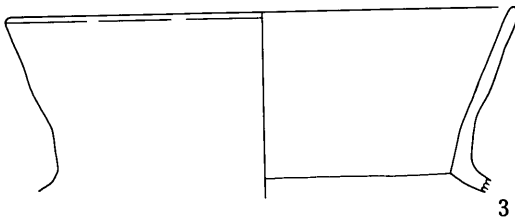
7



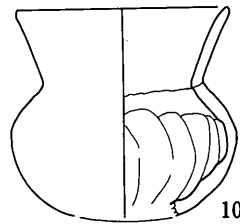
8



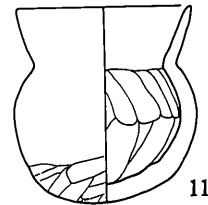
9



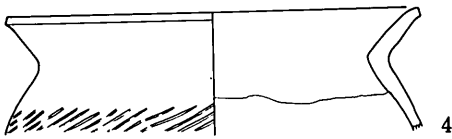
3



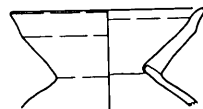
10



11



4



12



13



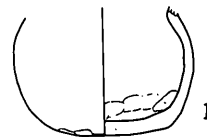
5



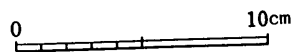
16



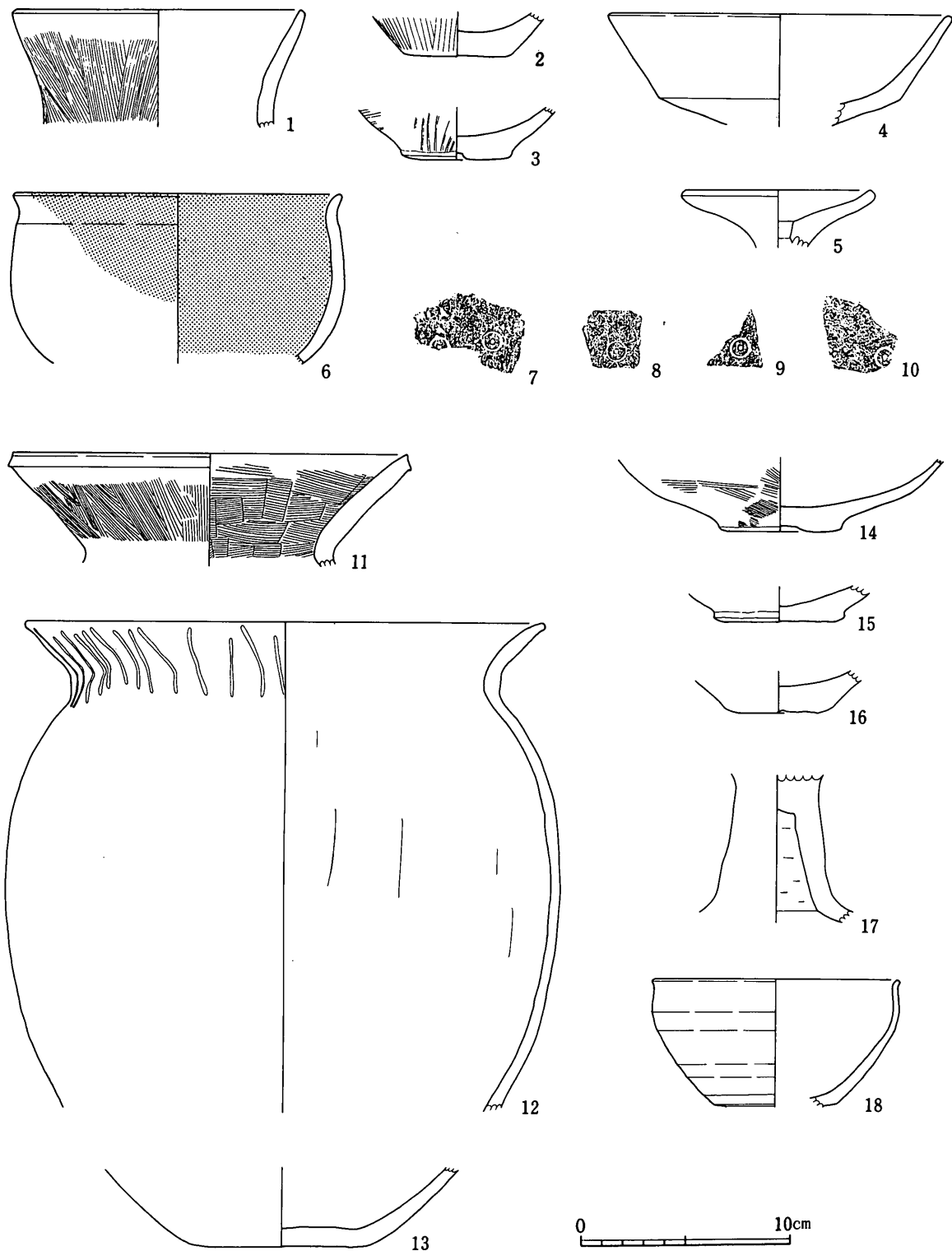
14



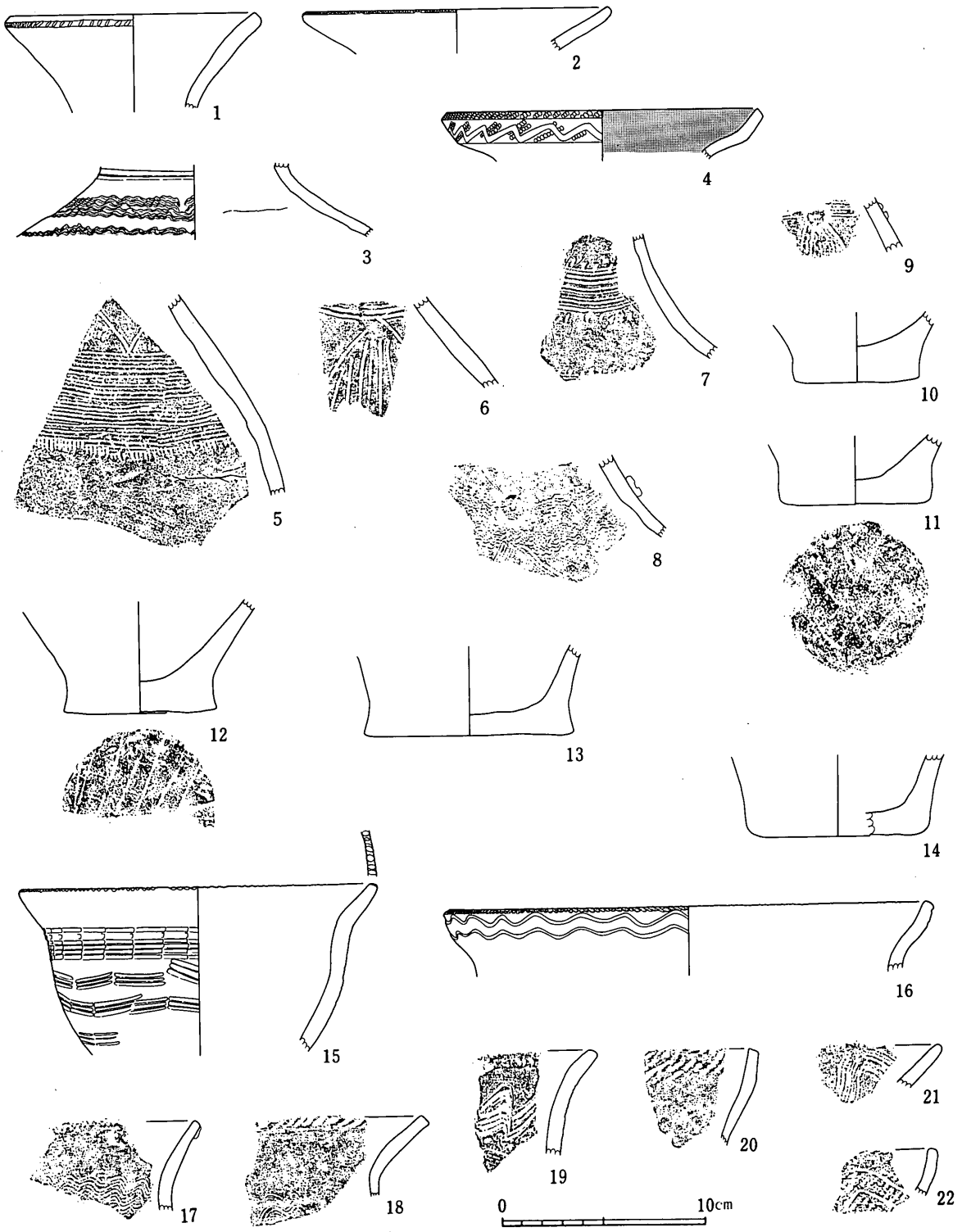
15



第119図 GOB 溝址15 3層出土土器(1/3)



第120図 GOB 溝址15 2層(1~10)、1層(11~18)出土土器(1/3)



第121图 GOB 沟址15 出土土器(1/3)